
Crystal Brush

篠原零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r y s t a l B r u s h

【Nコード】

N 9 6 5 8 F

【作者名】

篠原零

【あらすじ】

天才少年画家・クリスは、尊敬する画家の絵を求め、名門私立三宿学園高等部へ編入する。そこでは、孤独な少年ノアとの出会いや生徒会の陰謀、水晶と呼ばれる存在、そして個性豊かな良家の御曹司たちが巻き起こす様々な事件が待ち受けていた。それらに翻弄されながら、海岸を臨む壮麗な学園を舞台にクリスは次第に成長していく。

序章 知らせは誰が元へ

生徒会長、千住慎ちずみしんは生徒会室にいた。

奥行きのあるその広い部屋に入ればすぐに、彼が肘を押し当て深い思索に耽る櫛の大机は見える。通常、彼は眉間に皺を寄せ、我儘ないらつきを以って書類に接する。だが、この時ばかりは違った。彼は、たった今手にした紙に興味を抱いていた。それは、転出入の著しく低いこの学園では滅多にお目にかかれない代物で、所謂「転入届」というやつだった。9月12日火曜日転入予定。名前は石崎・エーリアル・クリス。慎はようやく眉をひそめたが、そうさせたのも、いつも通りの傲慢ではなく、思い出したことが思い出せない不快感に因るものであった。刻々と眉間の皺が鮮明になりゆくうちに、彼の頭にぱつと一つの言葉が思い浮かんだ。天才少年画家、それこそ此の少年を形容する全てであった。少なくとも、現段階の千住慎の頭の中では。

一羽の白鳩が、生徒会室の窓を過ぎった。

生徒会書記、榊原颯かきはらは廊下にいた。

その歩みの速度は見る間に速くなり、弾んだ息と肺の躍動に焦燥が滲にじみ出ていた。抱える大量のファイルは、彼の胸ばかりか、彼の享樂にさえ暗い陰を落としていたのだ。早く仕事を終わらせなければ。昨日は丸一日様子を見に行けなかった。今日こそ行かなければ。部長としての自分の地位も危ういし、それに何より。颯はごくりと唾を飲み、乾いた喉を湿らせた。彼のダンスへの情熱と愛が、単なる歩行運動に不服を唱えていた。

一羽の白鳩が、廊下の窓を過ぎった。

生徒会議長、小杉荔枝こすぎれいしは音楽室にいた。

顎の下の痣を宛がわれ、彼の指で優しく愛撫されれば、琥珀色の

楽器は澄んだ氷のような音で部屋の空気を切り裂いていく。彼のバイオリンは、持ち主の意向に従順だった。いつでも彼の思惑通りに啼き、歌った。荔枝とバイオリンとの間にある糸は最早、所有者と所有物のそれではなく、自身とその分身のそれであった。結びつく快樂の中、彼は恍惚として目を閉じた。

一羽の白鳩が、音楽室の窓を過ぎった。

生徒会会計、川崎陽は楽器庫にいた。

彼が所属する軽音楽部は、既に他の場所で活動を始めているのだが、どうせ個人で練習するのなら一緒にいなくてもよかるう、一人で好きな曲でも演奏してみたい気分だし、とも思つて、結局倉庫に籠こもったままでいたのだ。こんなことがほぼ毎日だから、部活の出席率は練習時間とは反比例して恐ろしく低い。部活だけならば良いが、生徒会でも同様だった。それでも彼が憎まれることはなかった。彼はただ、目の前のことにひたすら夢中なだけだ。

一羽の白鳩が、楽器庫の窓を過ぎった。

天井一面から滴り落ちる水晶のシャンデリア、円形に縫われた冷たい石灰岩の床、二つを接合する水晶の円柱、そしてアーチ型の窓から望む青いばかりの空。一体誰がここを教育施設の一つだと考えようか。誰も考えまい。事実、ここは教育になど使用された試しがないのだから。

そこは、学園の敷地の中央にそびえる白い塔の最上階だった。四人の生徒会役員は、風に頬を擦られるのもそのままに、無言のうちに柱を見つめていた。否、彼らが真に見ているのは柱ではない。柱に括られた一人の少年だ。少年は頂垂れ、吹き付ける風にさえ髪の毛一本そよがせず、片方の膝を立てて床に座り込み、彫刻のように動かないでいた。もしその肌に煌きがなければ、もしその爪が不自然なほど深く切り込まれていなければ、もしその灰色の瞳が光を取

り戻さなければ、彼は死者と間違われたかもしれない。絶対的な静謐ひびの中で眠っていた彼は、夢の浅瀬での戯れにも何ら未練を残すことなく、静かに目を覚ました。少年は周りを見回しもしなかった。鎖が潰つぶえ、そして、ふと彼がアーチ型の窓に手を伸ばせば、四人をいざなつた白い鳩が、深淵なる空色の中からひらりと現れて、その手に珊瑚色の足を落とした。薄い唇が眩く。

「光が満ちれば鳩が知らせてくれるのか。僕の名前をとつた洒落なのかもね」

生徒会役員たちは、言葉に含まれた皮肉の意を酌んでそれぞれ口元を緩ませた。少年もふわりと笑った。まるで、白鳩の羽のように。

登場人物（随時更新）

三宿学園高等部

二年生

石崎・エーリアル・クリス

主人公。イギリス人と日本人のハーフで天才少年画家。明るく真っ直ぐな性格の少年。

尊敬する画家・志水晶の絵を求めて来日する。

天然パーマがかかった金髪に青い瞳。

有瀬ノア

クリスのクラスメートにてルームメート。学園長の息子。周囲からは敬遠されているが、

心優しく穏やかで、料理上手。成績は悲惨。

ワインレッドの髪に灰色の瞳。細身で小柄。

酒本菜月

クリスのクラスメート。剣道部部長の口数少ない少年で、甘い物が好物。

兄のように慕って育った颯に密かな恋心を寄せている。

黒髪にミントブルーの瞳。背は低いが動きは俊敏。

関本来夏

クリスのクラスメート。日本人とイギリス人のハーフで、クリスの旧友でもある。

学園には特待生として入学し、才色兼備の頼れる優等生。

ブラウンの髪にグリーンの瞳。背が高く、すらりとした体格。

落合桃真 おちあひとうしま

クリスのクラスメート。勝気でややい加減な性格で、美少年荒らしが趣味。

不良っぽい容姿のため教師から目をつけられているが、快活な少年である。

赤い短髪に同色の瞳。眼鏡をかけている。高身長。

篠木水無月 しのぎみなつき

クリスのクラスメート。物静かで読書好きな少年で、聖書を愛読している。

双子の弟がいるが、その関係はぎくしゃくしており、人知れず悩んでいる。

濃い青の髪に水色の瞳。弟とはあまり似ていない。

篠木白蘭 しのぎびやくらん

水無月の双子の弟。2年F組。冷酷で粗暴な性格の不良。兄には歪んだ愛を向ける。

男娼紛いの行為もしており、代価には金ではなく白いランの花を要求する。その訳は…

水色の癖のある髪に濃い青の瞳。水無月より背が高い。

生徒会役員

千住慎 ちずみしん

3年生。生徒会長。ハリウッド俳優の父を持ち、自信家で我儘で傲慢。

まさに学園の帝王というべき存在だが、何故か周囲に振り回されている。

紺色の髪に青い瞳。口元にほくろがある。

なかきはらほなむね
榊原颯

3年生。生徒会書記。真面目で成績優秀な少年で、主に慎のお守り役を務めるが、ダンス部部长という一面も持つ。クリスを世話するなど、面倒見も良い。

黒い尼そぎにした髪にラベンダー色の瞳。四角い眼鏡をかけている。

こすぎれいし
小杉荔枝

3年生。生徒会議長。気位が高い優雅な少年で、慎とは馬が合わない様子。

生徒会仲間の陽とは大抵一緒に行動している。バイオリンが得意。腰まで伸ばした黒い髪に紅の瞳。

かわさきあきひ
川崎陽

3年生。生徒会会計。飄々とした掴みどころのない性格の、謎の多い少年。

軽音楽部でドラムを演奏しており、学園祭の花形でもある。

紫のメッシュを入れた黒い髪。藍色の瞳は普段は前髪で覆っている。

くせいよし
雲居芳乃

2年F組。生徒会副会長。アメリカ留学から帰ってきたばかり。

表では明るく健気に振舞うが、白蘭のお得意様でもあり、彼を崇拜しきっている。

黄土色の天然パーマのかかった髪と山吹色の瞳。

一年生

あきもとまこと
秋元真央

サッカー部のマネージャー。フランス人の祖父を持つ。明るく活発な性格。
声楽分野の特待生で入学したが、実は喉に持病を抱えている。
栗色の髪にエメラルド・グリーンの瞳。

わきみずあかね
涌水明音

サッカー部。元気潑刺とした少年だが、妄信的に慎を崇め奉っており、最早慎のストーカーと化している。それには深いわけがあるらしいが……
ヘアピンでとめたシナモン色の髪にブルーの瞳。泣きぼくろがある。

教師

かさましんごろう
風間信吾郎

三宿学園高等部部長（クラブ活動の部長と混同する為校長と明記）。
おおらかで寛容な教師だが、逃亡癖があり、しょっちゅういなくなる。

かわいじゅんいち
河合淳一

三宿学園高等部副部長（上に同じ理由にて副校長と明記）。
校長捜しに日々あけくれる、厳格でがっしりとした体格の先生。

のしやせの
野瀬曜子

クリスたちの担任。担当教科は体育科。
厳しさと優しさを両方持ち合わせる、生徒たちの母たる存在。

はななきほしひこ
花木星彦

美術教師。しかし、彼の美術センスを認める者はノアしかない。
強面だが涙もろい。クリスを歓迎する。

鳥居みちる

英語教師。姉御肌で美人だが、なぜか女性的な人気がまるでない。結婚できないというコンプレックスを持つ。

里見沙織

養護教諭。若いが、真面目ではきはきした物言いの女性。

夫は同じ三宿学園で講師をしている。

森剛

体育教師。校長搜索隊幹部を務める剛健な先生。

愛娘の真奈美を溺愛している。落合の天敵。

橋爪康太

数学教師。校長搜索隊幹部の一人。

内気な貧弱そうな先生で、もうすぐ定年になることを気に病んでいる。

桜木ほの佳

邦楽教師。おっとりとした性格の中年の女性。

その和やかな雰囲気ですべてたちにも慕われている。

谷口良隆

英語教師。通称・ジャクソン先生。

けばけばしい女装をしており、極端な女口調で話す明るい先生。

有瀬裕

三宿学園理事長。ノアの養父。

淡々とした、常識や物に執着しない性格で周囲を唾然とさせる。

千住薫 ちずみかおる

化学講師。慎の兄。

三宿学園高等部の卒業生で、親切な包容力に富む青年である。

その他

志水晶 しみずあきら

クリスが尊敬してやまぬ孤高の天才画家。

三宿学園の卒業生。妻と子の後を追ひ、若くして自害した。

アニエス・ゾラ

真央の従姉。フランス人ピアニスト。

愛情深く、真央に対してはやや過保護。婚約者を交通事故で亡くした。

屋城一穂 やじろいちほ

旧図書館の司書。理事長の姪。

美しい女性だが、鶏を飼っているなど少々変わったところがある。

氷室弘毅 ひむろひろき

荔枝と陽の伯父。氷室財閥の総統。

氷室彼方 ひむろかなた

弘毅の息子。氷室財閥の跡取りで冷徹な美青年。

動物

シャネル

荔枝と陽のペット。気高い雄の白猫。

オーガスタ
一穂のペット。雌鶏。

第一話 水晶の導く場所・前編

寝起きのぼやけた視界の中で、クリスは、輝くサファイアの草原を見た。目を擦った後で気付いた。海だ。久しぶりに臨む海だった。結局故郷の海とは別れを惜しむことができなかった。遠いイギリスへの思いが、誰もいないバスの中で募っていく。

石崎・エーリアル・クリスの名を聞けば、例え天才少年画家とまでは浮かばなくとも、二カ国以上の人間の関わりを見出すことができるだろう。彼の母はイギリス人で、彼の父は日本人だった。二人の出会いは、祖父からおとぎ話代わりに聞かされたから、祖父の口調も真似てそっくり繰り返すことができる。老人特有の誇張と美化をきれいさっぱり取り除き、簡略に紹介すれば、英語を教えに来日した母に父が一目惚れし、必死のアプローチの内に見事愛を勝ち得たという、三流小説のネタにでもなりそうならすじなのだが。

兎も角、そのようにしてクリスの両親は出会い、一人の健康な男児を授かり、そして我が子が七になるのを見届けずに死んだ。火事だった。日曜日の混み合うデパートに、二人はクリスを友人に預けて出かけた。クリスの誕生日プレゼントを探すためだったと聞く笑い声、店員たちの明るい挨拶、子供の駄々を捏ねて泣く声、親のそれに答えて怒鳴る声、そういったものが一瞬にして悲鳴に変わった。先ほどまで煌びやかに人々の目を魅了していたものは煙の向こうに消え、人々は身を竦め、火の舌が体を舐め尽すのを待つ他なかった。そういった光景を、クリスは何の抵抗もなく想像することができた。人々の中に、両親が抱きしめあつて死を待つ姿を置くことも、クリスには大した苦痛ではなかった。父と母の記憶は遠すぎた。その後、クリスはイギリスの祖父に引き取られた。父の両親は既に他界しており、クリスはその親戚とも面識がなかったからだ。もしかしたら、外国人との結婚に周囲はあまり積極的ではなかった

のかもしれない。しかし、間もなく祖父も死に、クリスの後見は母と二つ違いの弟、ロナルド叔父に託された。叔父には妻はいたが、子もいなかった。故に、叔父は有り余っていた金をふんだんに甥のために使い、叔母は有り余っていた愛をふんだんに甥のために使った。甥に絵の才能があったと気付いたときも、二人の反応は素早かった。すぐさま専門の講師をつけ、高価な用具を揃え、暇さえあれば国内外問わず、有名な美術館を回って歩かせた。結果、クリスは十二歳で画家としてのデビューを遂げ、世界に衝撃と感動を与え、十四歳に達する頃には全世界に名を轟かせていた。

プロの画家としての生活に一石を投じたのは、とある日本人画家の作品であった。投げられた一石も、子供が投げた砂利の塊ではない。宇宙から振り落ちてきた、燃え盛る隕石だ。地元の小さな図書館の片隅で、クリスは卒倒しそうになったほどだ。やっと見つけた。歓喜と陶酔に麻痺する心の中でも、クリスははつきりとそう思った。

クリスはその画家の絵を探して探しまくりに、数少ない彼の傑作を日夜研究した。そして三ヶ月前、クリスをここまで導いた一つの噂を聞いたとき、クリスはその真偽も疑わず迷わずそれに飛びついた。叔父は、日本の学校に転校したいという、クリスの突然の願いを快諾しかねたが、叔母も説得してくれたおかげで何とか頷いた。そうして、クリスは来日した。

しかし、ここで遠いイギリスに思いを馳せている通り、クリスは早くも帰国したくてたまらなかった。イギリスで過ごした数年の間に、クリスの心は日本と全く隔離されてしまった。希望が何とか、引き返そうとする足を前に進めてはいたけれど。不安は刻々と膨らむばかりだった。

その時、突然のアナウンスが流れ、クリスは飛び上がった。

「次は、三宿学園前、三宿学園前です。お降りの方はお手元のブザーにてお知らせください」

クリスはつんのめるようにブザーを押した。運転手がミラー越しにだるそうに一瞥を向けてきた。構わない。この離れすぎた土地でかく恥など、何の意味があるう。小さくなった海を眺めながら、クリスはバスが停まるのを待った。

朝七時半。私立三宿学園高等学校舎内にて。

榊原颯は、教師からの呼び出しに応じ、一階まで階段を下つていくところであった。踊り場の東向きの窓から朝日が照りこめば、まだ照明のない校内でも、はっきりと彼の姿を確かめることができた。漆黒の髪は肩に触れないところで端を揃えて丁寧に切られ、眼鏡の奥ではラベンダー色の瞳が慎ましく足元を向いている。指定のワイシャツとネクタイは着用しておらず、代わりに濃紺のポロシャツで済ませていたが、もちろんこれも学園の規則内だ。颯が規則違反をするなど有り得ない。今回、彼が一階に向かっている理由も「呼び出し」と表記したが、これも所謂説教のための呼び出しではなく、特別な用を頼まれてのそれだった。その用というのは知らないがふと顔を上げた颯は、昇降口に一人の少年の佇むのが目に停まった。ああ、あの子か。慎が言っていた転校生。あの子が来たのか。颯は内心一人合点した。名前はなんだったかと記憶を辿っていると少年もこちらを気付いた。彼は、一瞬ほっとしたような表情を浮かべたが、慌てて仕切りなおし、唇を引きつらせた。その様子が思わずおかしくて、颯の笑いを誘う。

「えっ？あ、あの……」

「悪い、つい面白かったから」

「お、おもしろ……？」

笑って細めて目の奥で、颯は転入生を観察した。写真で見た通りだ。ウェーブがかかった金色の髪に、澄んだ青い瞳。西洋人の血を引いていると聞いていたので、背は高いかと勝手に想像していたが、意外とそうでもないし、体軀も決してよい方ではない。仕立てたば

かりのワイシャツの袖からは、細い腕がむき出しになっている。それでもやはり肌は白いし、目の周りなど陰が立つほど彫が深く、鼻も目と目の間からすっと通っている。歩み寄ると、少年は、びくつと肩を跳ねさせたが、肩に手を回しても特に反応はなかった。あちらで生活していたから、スキんシップには慣れているようだ。馴れ馴れしすぎるかと案じていた颯も、にこつと笑った。

「石崎クリス君かな？」

「えっ」

「名前」

「あつ、はい……」

クリスはそうしないと意味が通じないとも思っているように何度も頷く。

「僕は生徒会役員だから。職員室まで案内するよ。僕も用があるしさつ、行こうか」

颯はクリスの肩を後ろから押して進むよう促すと、自身はその前に立って先導を始めた。颯は、背をぴんと伸ばし、大股ですたすと歩くので、クリスは付いていくのに必死だった。トランクも引き摺っていたからだ。それでも何とか周りを見回す余裕だけはあった。床は、つい最近ワックスがけしたように白く、埃一つ落ちていない。壁も同様だ。傷、しみ、落書き一つなく、掲示物はきちんと四隅を画鋲で止められている。何もかもが、清潔で、秩序通りであった。クリスは、段々トランクが床に醜い痕を付けていないか不安になってきて、思わず振り返った。途端にトランクを踵かかとにぶつけた。

「大丈夫？」

「は、はい……」

見られた恥ずかしさと痛みで、クリスは顔を赤くしながら答えた。颯が小さく笑う声が耳に入ってきた。

「ほんと、面白いね、君って」

「嬉しくないです……」

「そう？じゃあ、悪かった」

「いや、あの……」

「褒め言葉のつもりだったんだけど。やっぱり、絵のこととか褒められる方が嬉しい?」

「別にそうでもないです」

「そう?」

二人は暫くの間黙して歩いた。景色が白いばかりであまりにも代わり映えしないので、まるで二人が歩いているのではなく、周囲の壁や床が勝手に後ろへ流れていくようだ。窓から入り込む太陽は、晩夏の熱を以って二人の肌を刺す。

「暑いね」

「はい」

再び黙す。

職員室との緑のプレートが掲げられた部屋の前で、颯は立ち止まった。扉に嵌められた凹凸のあるガラス窓の向こうでは、黒い人影が何度も行き来していた。教師というのは、朝早くから忙しない生き物なのだ。クリスは、颯が中に誘導してくれるのを待ったが、颯がスライド式ドアの取っ手に手をかける前に、ものすごい勢いで戸が開いた。クリスは仰天して飛び上がった。白髪交じりの髪をポマードで固め、屈強な身を固そうな浅黒い肌で覆った、四十代がらみの強面の男が、サングラスの向こうで白目を剥いていた。鼻腔の広い低い鼻や、興奮で波打つ四角い額には、青く太い血管が浮き出ている。まさかこの種の方に学校という施設の中で会うとは。クリスは啞然とする余り断末魔の声も出なかった。

「おはようございます、花木先生」

颯は礼儀正しく頭を下げた。クリスは聞き流し、それから自分の耳を疑った。えっ、先生?

「ま、だ、かつ?」

男は響きの悪いバスで一語一語区切って言った。その形相たるや、肉を噛み砕く鬼の如くだ。

「今ここに」

颯はクリスの肩を抱えて前に押し出した。「えっ？えっ？」とクリスが訳も分からずきよるきよるしていると、突然、肩を掴む手が、颯の細い手から、一応先生らしい男の黒い手に代わり、クリスは恐怖のあまりさつと青くなつた。

「石崎・エービーシー・クリス、だなっ？」

花木……先生は、クリスの肩を、もし今地震が起きたとしても分からぬほど激しく揺さぶって尋ねた。

「エーリアルです」

訂正したのは、颯の方だった。

「どっちでもいい。とにかく、本人だな？」

「はい」

「本人だなっ？」

「は、はい……」

本人に確認が取れたため、花木という男、否、花木先生は肩を揺する手を止めた。クリスは泡を吹きかけていたが、もしそうでなければ、なぜこんな男が花木という愛らしい名前なのか、悩んでいたところだ。名は体を表すとは、どうやら迷信だったらしい。

「石崎……よくきた」

「はい？」

逝きかけた意識を取り戻したクリスが見てみると、花木先生は、感涙に咽びながら、クリスの手をとって大きくぶんぶん振り回していた。クリスの目に、黒いワイシャツの上のネームカードが見えた。3年学年主任、花木星彦・美術科。自分を歓迎する理由には納得した反面、この人の担当が何故美術なのかは疑問であった。それ以前に、この人はどのような奇跡を起こして教員になったのだろうか。

花木先生がいつまでも調子を変えないので、颯が頃合を見計らってクリスを救い出してくれた。

「じゃあ、先生、石崎君は野瀬先生に用がありますので」

クリスはほつと溜息を吐いた。花木先生は「そうか」と頷いて二

人のために道を開けつつ、まだ名残惜しそうだった。しかし、颯の理性は、見るべきでないものはきちんと補正し、やるべきことを主人に遂行させる力を持っていた。まだ少しどきまぎしているクリスを後ろに従え、颯は澄んだ当たりの良い声を上げた。

「失礼します。野瀬先生」

職員室は広がった。この部屋だけは既に蛍光灯が灯されており、多くの先生が、飲み物を啜りながらテストの採点をしたり、立ち上がって書類を配布したり、プリントを印刷したりしている。颯の呼び声に反応したのは、クリスたちから最も離れたところに座っていた、ジャージ姿の中年の女性だ。しっかりした体格の、背の高い野瀬先生は、コーヒーカップを置いてこちらへ近づいてきた。

「おはようございます」

「おはよう、榊原。石崎君を連れてきてくれたの？」

野瀬先生は訊いた。生徒をしゃきつと目覚めさせるような、教師に相応しいはきはきした口調だ。

「はい。昇降口で見つけたので」

「そう、ご苦労様。じゃあ後はこちらに任せて。石崎君、来て」

「はい」

クリスは礼を言おうと颯の方を振り見ようとしたが、それより先に、颯がクリスの肩に手をかけて屈み込んだ。尼そぎのように梳いた髪の端が、クリスの頬をくすぐる。ぎりぎりクリスの視野に入る場所で、颯は物柔らかかな笑みを浮かべた。その刹那、彼の微笑が消えたかと思うと、今度は耳の傍で囁かれる。

「頑張つて。僕、君のこと気に入った」

「私があと十年若ければねー」

それが、颯が去った後の野瀬先生の感想だった。職員室に笑いの波が起きた。

野瀬先生に説明を受けたクリスは、自分が2年A組に転入して、

担任は野瀬曜子先生であることを知った。寮の部屋も、丁度定員より一名かけているところがあるので、その仲間に加われれば良いらしい。クリスが引き摺ってきたトランクは、職員室で預けられることになった。クリスは、今日必要な科目分の教科書を鞆に詰め、それから校長先生　禿げ上がった髪の毛、眼鏡をかけた、朗らかな男性だった　と少し面会した後、野瀬先生と共に教室へ向かった。地下を含め、全五階の建物の中で、二年生の教室は三階にあった。同じ階に三年生の教室もある。最上階は生徒会役員が占拠しているらしい。クリスは呆れた。そういえば、さっきの人も生徒会役員だったつけ。

八時二十五分にチャイムが鳴り、廊下で騒いでいた生徒たちも吸い取られたように教室へともどつていった。野瀬先生は、クリスに廊下で待っているよう指示を出すと、一人教室に入り、うるさい生徒を数人叱り付けて出席をとった。それから、重々しい咳ばらいを一つし、けれども調子は明るくこう言った。

「今日からこのクラスの生徒が一人増えることになりました」
ざわついていたクラスがしいんとなった。クリスは心臓の高鳴りが、生徒たちに聞こえるのではないかと冷や冷やした。逃げ出したい衝動に駆られた。だが、決心をつけかねている間に、中から野瀬先生の声がかかった。

「石崎君、入ってきて」

クリスは、群集に顔を向けないようにして、教卓の側に急ぎ足で歩み寄った。耳のシャッターを閉め忘れたと気付いたその時、一人の生徒が「あっ」と叫んだので、皆一斉にそちらを向いた。クリスもつられて顔を上げた。白いワイシャツの群れの中、一人すくつと立っている顔は、懐かしいイギリスの匂いを呼び覚ます。

「石崎！」

「関本！」

二つの名が重なって教室に響いた。

関本来夏せいかもらいいか、それが旧友の名前だった。旧友と呼べるほど親しい仲

であつたかと云えば、素直にうんとは頷けなかつたが。古い知り合
い、といった方が格段に正しいだろう。彼、来夏とは一時期　と
いつても数ヶ月ほど　同じイギリスの学校に通つていたことがあ
つた。彼も、クリスと同様イギリス人と日本人のハーフだったから、
周囲は二人を仲が良いものと思ひ込んでいたようだが、実際は時々
会話するぐらいの関係であつた。それでも、二年ぶりの対面ですぐ
にお互いを思ひ出すことができたのは、やはりお互いそれなりに印
象に残つていたからだろう。若しくは、懐古の思ひが、とりとめ
のない記憶を磨き上げるのか。

「知り合ひ？」

野瀬先生は問うのが一応の義務だと考えたらしい。生徒たちを黙
らそうと、張つた手の平で教卓を数度叩きながら尋ねた。

「あつ、はい。イギリスの学校で一緒でした」

「そう。よかつたわね。他にも知っている人もいるかもしれませ
ん。石崎・エーリアル・クリス君です」

クラスが再びざわついた。天才少年画家の名はやはり知れ渡つて
いた訳だ。先生はこの反応を予期していたようだが、「よつ、エー
リアル」との野次が飛んだ時はそちらを一睨みした。クリスはただ
赤くなつて俯いた。

「まあ、仲良くするように。といつても、小学生じゃないから、こ
れくらい分かるでしょう。連絡は特になし。ああ、そう、落合、服
装をどうにかしろと森先生からの伝言がありました」

何人かの生徒が手を打つて笑つた。先生はまた教卓を叩いて黙ら
せた。

「じゃあ、一時間目の授業は家庭科ね。遅刻しないように。関本、
石崎君を被服室まで案内してあげなさい」

「了解」

先生がいなくなると、生徒たちは教室移動の準備を始めた。クリ
スは壁にかけられた時間割を見た。一時間目家庭科、二時間目現代
文、三時間目が数学　　そこまで理解したとき、肩を叩かれた。来

夏だった。その後ろには、二人の少年が立っていて、片方は先ほど「エーリアル」の名をはやしたてた生徒であった。

「久しぶり、石崎。元気だったか？」

「ああ、うん、久しぶり」

クリスは、余所余所しさが微塵も感じられない来夏の状態に少し驚いた。毎日顔を合わせていた二年前よりずっと親しみがある。

「噂は聞いてたけどさ。色々活躍してるらしいじゃん。すごいな」

「関本のこと聞いたよ。日本の名門校に特待生で入れることになったから、日本に行くって」

「まっ、その名門校がここのんだけどな。帰国した理由もほとんど父親の仕事の都合だし」

来夏は冗談めかして快活に笑う。

「とりあえず被服室に行こうぜ。遅刻したくねえし。あつ、そうだ。後ろの奴、落合と酒本」

「よろしくな、エーリアル君」

落合は愛想よく微笑み、顔の横で手を振って見せた。よほどエーリアルの名が気に入ったらしい。背の高い少年だ。酒本の方はクリスに大した興味もなさそうだ。目も合わさずに小さくお辞儀した。

四人は、一緒に一階の被服室へ向かい、一時間目終了後も共に行動した。落合はよく喋った。人が好きでたまらない性分らしい。先生に注意されていたことから分かるよう、制服は確かに乱れていたり、不良っぽいところも所々に覗いているが、愛嬌があった。落合は、自分が美術部部长であることを明かし、早速クリスを勧誘しはじめたが、クリスは断った。部活動には入らない方針一本で決めていたからだ。だが、落合の目を見る限り、諦めていなさそうだった。反対に、酒本は滅多に話さなかった。落合がからかったりすると、好意を以って迷惑そうに応じたけれど、自分から話しかけはしない。それでも、来夏が彼を「照れ屋」と称すると、頬がほんのりピンク色になった。

「イーリアル、昼飯どうする？」

四時間目の世界史が終わり、ノートの端っこの落書きに書き足しをしていると、落合がやってきて言った。

「そういえば考えてなかったなあ。えっと、落合たちはどうするの？」

「俺は弁当。ライと酒本は購買で買っらしい。イーリアルも買いに行ったら？そのあと教室と一緒に食おうぜ。金あるか？」

「あつ。そういや、トランクのポケットに入れっぱなしだった気がする……」

「おいおい、大丈夫なのか？」

「うん、職員室にあるから。取りに行ってくる」

クリスが席を立つか立たない内に、視界がすっと黒く染まった。

一体何の手法だろう。クリスは目を瞬いた。サファイアの輝きを遮った黒には、艶と皮革製品特有の匂いがあった。黒の革の財布

三年前に叔父に誕生日プレゼントに買ってもらったものだ。探し物が目の前に差し出された。口をぽかんと開けたまま、クリスが恐る恐る視線を昇らすと、見知らぬ少年の満面の笑顔が映し出された。

クリスのはつと息を呑んだ。図書館の隅で絵を見た時と同じ感覚がした。やつと見つけた。何故かそう思ったのだ。霧の立ち込めた迷路の中を彷徨さまよい続け、漸く出口を見つけたような、そんな感覚。しかし、そこからまた新たな迷路が始まる。それを知っていて、自分は出口に駆け寄る。出口にして入り口のその場所。そんな感動を以って、クリスは少年を見つめていた。首を傾け、葡萄酒色の髪を、翳りのある黒目勝ちな灰色の瞳の脇に垂らした少年を。まるで花でも捧げるかのように、クリスに財布を差し出す少年を。

「種も仕掛けもないんです」

少年は囁いた。雨風に曝されたことのない花瓶の中の百合のような、棘のない薔薇のような、清水のような、羽毛のような音楽であった。少年はクリスに財布を握らせた。クリスの拳を覆ったのは冷たい手であった。何も言えないクリスに感謝さえ求めず、少年は静

かに姿を眩ました。脇で落合がその名を呼んでいた。

「おい、有瀬あるせ！」

有瀬？

「おい、その財布、エーリアルのか？」

「そうだけど……」

「中身は？ちゃんと入ってるか？」

クリスは財布を開けた。千円札が七枚と、五百円玉が一枚、十円玉は面倒だから数えないことにしても、大体バスの中で確認した通りである。クリスは大きく頷いた。

「変な奴。何で有瀬がエーリアルの財布なんか持ってんだよ？」

「有瀬って、さっきの人？」

「ああ」

「このクラス？」

「そうだ」

「それで、何かまずいこともあるの？」

腑に落ちないような表情をしつかりクリスに見られ、言及までされた落合は、クリスを一瞬見つめて目を逸らし、決まり悪そうに頬をかいた。口は開いたが、しばらくは言葉も見つからないようだった。数十秒の時間を要してから、彼は慎重に言葉を選んで話し始めた。

「いや、別にどうってことないんだけどな。あいつ、理事長の息子でさ。まあ、それで、何ていうか……良い噂聞かないんだよな。悪い奴じゃないんだけど。おとなしいし。校則もきっちり守る良い子ちゃんだし」

「だったら、俺に財布の中身確認させる必要なかったじゃないか」
クリスは微かに憤慨さえ覚えて言った。落合はまあまあと両手を幾度か押し出して、彼の小さな怒りの種を鎮めた。

「それはまあ一応確認のためってことで。あんま気にすんな。有瀬と関わりと碌らくなことないって噂だから、ちょっと心配になったただけだ。面識はないんだろ？」

「多分ね」

クリスの返事はぶつきらぼうだった。

「まあいい。財布も見つかったことだし、さつさとおまえも飯買ってこいよ。俺も腹減ったし。あつ、購買は二階だからな」

人ごみを掻き分け、二階へ降りる階段へと向かいながら、クリスは大勢の人の頭の中、あの目立つワインレッドの髪を探した。だが、どこにも彼はいなかった。群れる生徒たちの笑い声は、そんなものは存在しないと否定しているようだった。太陽を仰ぐ人が、自らの足元に横たわる影のことなど忘れてしまふかのように。人々に影を忘れさせるのは何だろう。向上心か。魔法か。奇術か。

種も仕掛けもないんです。あの時確か、彼はそう言った。

第一話 水晶の導く場所・後編

「はい、じゃあ、石崎・エーリアル・クリス転入を祝って、乾杯！」

「乾杯！」

一体これはどういうことだろうか。クリスは夕食の条件として挙げたことを、再度思い出してみた。もちろん、口に出して述べた訳ではなく、落合が「飯だ！」と騒ぎ始めた時分に胸中密かに挙げた条件だ。静かであること。質素であること。平和であること。しかし、十六畳半の共同寝室を見渡せば、クリスの期待はあっさり裏切られたことがすぐに分かる。床は、食堂からうんとくすねてきた食べ物、パーティ用のカラフルな紙皿と紙コップ、炭酸飲料やジュース類の入ったペットボトルに埋め尽くされ、賑やかな小さな都会を創り上げていた。関本、落合、酒本は、二名は笑顔で、一名は無表情のまま、クリスに拍手を送っている。

「おめでとう、エーリアル！」

「いや、おめでとうとかその前にさ……何これ？」

「何って、歓迎会に決まってるだろ」

「あのさ、もしかして、俺たち同じ部屋？」

「おう、見ての通り」

「まじかよ……」

来夏に勧められるまま、クリスは、ペットボトルのコーラを避けてあけた場所に腰をおろした。うっかりポテトの上に座らないよう慎重に、だ。クリスが座った途端、三人の手によってクラッカーが打ち鳴らされ、色とりどりの紙ふぶきが料理の上に散った。

「遠慮するなよ、石崎」

当初は必要かと思われた忠告も、部屋中に広がる匂いによって、次第に重要性を欠けてきた。揚げたてのポテト、トマトとチーズのピザ、カルボナーラとペペロンチーノのスパゲッティ、言葉通り山

積みになったから揚げ、トマトとレタスとセロリのサラダ、ざつと確認できただけでもこれくらいだ。他にも皿を掻き分けていくうちに、クラブサンドイッチや夏野菜のカレー、フルーツの盛り合わせなども見つかった。

「そういえば、関本ってベジタリアンだったよね」

来夏がサンドイッチからベーコンを取り除くのを見て、クリスは思い出した。ベーコンの行き先は落合の皿の上だった。

「おっ、覚えてたのか。で、そういう石崎は野菜が嫌いだったよね？」

「駄目だろ、エアリアル。野菜は食わなきゃ」

「いやあ、なんか食感がほら……」

「んなこと言ってたって、トマトとレタスで同じ食感な訳ねえだろ」

「んー、じゃあなんだろう。気持ちの問題かな？」

その時、クリスは、ふと、隣に無言で座っていた酒本の、怪しげな行動に気付いた。ピザの上のトマトをクリスの皿に移しているのだ。わざわざ箸を逆さにして使う配慮はありがたいが、明らかに今の話を無視した行動である。だが、酒本はクリスに気付かれても構わぬ様子で、ピザから丁寧に赤色を排除している。クリスはポテトをウーロン茶で飲み込むと、こう切り出した。

「あの、酒本君？」

「酒本でいいよ」

もしかすると初めてになるかもしれない会話だった。

「ありがとう。で、えっと、何してるのかな？」

「トマト嫌い」

「はっ？」

「トマト嫌い。茄子も嫌い。うなぎも嫌い」

「えっ？」

「でも、残すのもつたいないし。食べてよ、石崎」

「あの、俺、野菜嫌いって言ったよね？」

酒本は聞こえなかった振りで見舞を押し通した。

嫌いなものの押し付け合いも来夏と落合の食欲によって治められ、後半になると、パーティはおおいに盛り上がりを見せた。主に落合が場をしきり、来夏がそれを手助けした。酒本は静かだったが、嫌な顔は決してせず、寧ろどこか楽しそうに場の流れを受け入れている。クリスマスも同様だった。予想もしなかったこの温かな待遇に、今まで固く緊張していたクリスの心も、大分ほぐれてきていた。嬉しかったのだ。ここに居る三人は、クリスを単なる新参者として歓迎してくれている。クリスの名声に媚びることなく、ただ、クリスを思いやり、そして自分の楽しみも尊重して、この歓迎会を開いてくれたのだ。イギリスではなかった付き合いだった。イギリスでは皆……違う。そういえば、人と打ち解けるのを自分の方から嫌っていたんだ。自分は崇高な思想の中にいると思ひ込み、周囲をいつも見下していた。平面の世界ばかりに夢中になっていた。そのせいで、今まで友達と騒ぐ楽しさを知らなかったのだ。もったいない。惜しまれるほど、クリスはこの晩、沢山笑い、沢山驚き、沢山慌て、沢山喋った。

瞬く間に時が過ぎ、来夏の冗談に皆で腹が痛くなるほど笑っているうちに、消灯時間がやってきた。時間に関してはやたら厳しいこの学校は、外から灯りが消えているかチェックされ、消えていないと厳しい罰則があるという。しかし、事務員の準備が悪かったために、ベッドは三つしかなかった。クリスはどこで寝よう。落合がにやにやしながら「一緒に寝るか」と誘いかけたが、そちらは丁重にきっぱりと断り、クリスは布団だけ借りてきて床で寝ることにした。ところが、クリスがシャワーから戻ってみると、用意したての寝床では酒本が丸くなっていた。

「おい、酒本」

もう既に熟睡モードに入りかけた酒本を、来夏がつついた。

「布団の方が好きなんだもん。石崎は僕のベッドで寝るといいよ」
酒本は自身のベッドを指差してそう言い残し、瞬きもせずに眠りに

落ちた。クリス、来夏、落合の三人は、顔を見合わせて肩を竦め、それぞれのベッドに横たわった。灯りが消され、しばらくは他愛もない話題がだらだらと口を継いでいたが、会話も次第に途切れがちになり、遂に誰もが黙り込んだ。クリスだけが起きていた。

やがて、枕元のデジタル時計が午後十一時を示した。もう大丈夫だろう。学園を覆う重々しい沈黙は、この部屋をもみつちりと埋め尽くしている。聞こえてくるのは、落合の怪しげな寝言と、来夏の微かな寝息、そして酒本が時折何かを蹴飛ばす音のみだった。クリスは膝で掛け布団を退け、ゆっくりと上半身を起こした。ベッドからそつと飛び降りた瞬間、酒本が空っぽのベッドの脚を蹴って何事かむにやむにやと呟いた。クリスは暫く様子を窺った後、背後に気を遣いながら、慎重に、素早く扉を開け、そして閉めた。扉に耳を充ててみたが、誰も起きた気配はない。よかった。成功だ。クリスはほんの少しの罪悪感に駆られながらも、しゃんと顔を上げて進み始めた。まずは寮から出なければならぬ。

廊下は暗かった。灯りといえば非常口への誘導灯のみで、クリスは部屋に来る途中頭に叩き込んだ地図を、何度か立ち止まって思い出す必要があった。次の角を左、それから非常用の階段を二階分下りる。それで出口にたどり着くはずだが……

「やった！」

見事にその通りだった。ガラスの巨大な回転扉は、誘導灯の緑色の光に反射して、きらきらと輝きながら、夕刻から相変わらずのリズムで回り続けていた。誰にも望まれぬ舞を、こんな夜にもたった一人で。彼女は前例のない夜中の観客に驚き、喜んでその透き通ったほっそりした手を差し出した。クリスは誘いを受け入れ、そして夜へと飛び出した。

月の美しい晩であった。風は凩ぎ、夏の遺産と秋の挨拶が混ざり合って、汗ばむような、それでいて心地よいような、不思議な温度を縫い上げていた。草むらの宿では、虫たちが発声練習に励んでいる。石畳の道は月光を浴びて、晴れた日の浜辺の白い砂のように煌

き、クリスの進むべき道を教えてくれた。クリスは素直にその案内に従った。悔いも不安も伴わず、ただ真っ直ぐに歩いた。彼の両眼のサファイアを、一筋の白い線が割いていた。

校舎に庇われながら誇り高く頭を掲げてそびえる白い塔を、クリスが意識しないはずがなかった。学園のシンボルとも云える存在だ。塔の外見は、ピサの斜塔によく似ているが、それよりは細身でやや高く、巨大な鐘を頂いている。初めて見たその瞬間に、クリスは悟った。自分の追い求めてきたもの、自分を学園へ導いたものは、塔の上にあると。一般生徒の立ち入りは禁止されていることを、昼の間に確認した。ならば、教員の目がない夜に行こう。クリスは決めた。それほどまでに確信していたのだ。

ところが、塔が近づくとつれ、置いてきたはずの不安が、再び壇上に駆け上ろうとしているのを感じた。クリスは寝巻きの胸元を手繰り寄せた。希望だけが不安を押さえつける役目を担った、唯一の要員だった。いいのだ。あの絵さえ見られれば。この学園に来た理由はあの絵のためだ。退学なんて、代償としては軽すぎるぐらいだろう。クリスはまだ気付かなかった。退学や名誉よりも、もっと大切に思い始めたものの存在に。それらと出会って、まだ一日も経っていないから。

闇夜に輪郭ばかり浮かんだ校舎を横切り、花も眠る中庭を通過し、噴水も今ばかりは憩っていることを確認して、クリスはとうとう秘宝の下までやってきた。足元から仰ぎ見る塔は威圧的であった。昼間は、日の眩しさに色が紛れてしまうことも手伝って、なんだか遙か遠くに霞がかって見えた。だが、夜の黒に塔の白は対照を成し、世の他のものたちから孤立してしまったようだ。そのことが、塔の神秘性を一層増していた。クリスはためらわなかった。塔の後ろに回りこみ、立ち入り禁止の看板を右手で退けると、閉ざされたアーチ型の扉の前へ進み出た。扉の縁をぐるりと薔薇の彫刻が巡り、中央にはクリスの知らない言語で警告らしきものが刻まれている。

L a s c i a t e o g n e s p e r a n z a , v o i c h
' i n t r a t e '

クリスは警告の窪みに両手を充てた。頂上で鐘が鳴る。鐘の振動で戸が震え、摩擦で手の平が熱くなった。クリスが目を閉じたその刹那に、扉は真ん中で割けてスライドし、左右の壁の中に吸い込まれた。

塔の中央は筒抜けになっており、丸い天井が、壁に沿って延々と続く螺旋階段に影を落としている。ガラスのない窓から月光が差し込み、足元を照らし出す。幅の狭い階段を通るのに、銀の灯は絶対に不可欠であった。少しでも足場を踏み外せば命はない。階段を上るクリスの顔は、決闘を前にした人のように真剣で、同時に何か深い思索に耽っているようでもあった。呼吸を荒げることさえも、足を痛めることさえも、クリスは忘れていた。求めるものは既に頭上にある。あと何メートルか。あと何メートルか。

終着点が見えてきた。階段は、丸天井に空いた小さな穴に続いている。興奮が胸を捕らえた。頭が、肩が、胸が、腹が、円蓋上の広場の空気に触れ、そして爪先が石灰岩の床にして天井を踏んだ。

何よりも先に目に入ったのは、水晶のシャンデリアでも、部屋の中心にそそり経つ巨大な円柱でもなく、佇む一人の少年だった。少年は、月光の助けも受けずに輝く水晶を見上げ、殉教者の如く静かに手を組んでいた。柱の影が少年の顔を覆い隠してしまい、着ている白いローブだけが確認できた。クリスは彼につられて天を仰ぎ、漸く頭上の奇跡に気付いて呆然とした。巨大な水晶の群れは、目前に迫るばかりで、今にもクリスのサファイアと重なりそうだ。クリスも少年も、全ての意識を頭上に奪われていた。二人は互いの存在も意識できないまま、暫く同じ行為に没頭していた。

クリスの意識を呼び戻したのは、鐘の鳴る音だった。十二時だ。塔が震える。何を思っか見回してみると、いつの間にか少年は窓枠に立っていた。皮膚を剥かんばかりの激しい風が、彼のワインレットの髪を乱し、ローブをはためかせている。ちらりと背後に巡ら

せた灰色の瞳は、恐怖のあまり大きく揺れていた。水底に沈めた煙水晶のように。有瀬ノアは体を前に傾け、空中に一步踏み出した。星空にその身を捧げんとして。空は彼を抱きとめようと待ち構えている。ノアの体が窓から消えた。クリスはもう動いていた。

「有瀬！」

風に痛めつけられて萎えながら、それでも救いを求めて伸ばした手を、白い手が取った。虚空に蝕まれかけた身は引き摺りあげられ、彼の救い者に衝突し、二人は床の上に倒れこんだ。激しい呼吸が唇を歪める。目にはまだ何も映りこまない。だが、クリスは、有瀬ノアの手をしっかりと握っていたし、腹の上にその重みを感じていた。

「なんで……っ！」

クリスはその息を継いだ。

「なんで、こんなこと……しよう……っ?!」

「石崎様……」

「どうして……」

やっと確かめたノアの表情からは、何の感情も見出すことができなかった。クリスはそれを見て言葉を失ったのだった。これが先ほどもで自分の命を投げ捨てようとした者の顔なのか。絶望がそうさせるのだろうか。どうも関係ない気がした。若しや、ノアは二重の人格を持っているのか。先刻身投げを試みたノアは、不思議そうにこちらを見下ろすノアとは違うノアなのだろうか。クリスが啞然と黙ったままでいると、ノアは無邪気に首を傾げた。思わずぞっとした。彼の手を握る力も失せていった。

「どうして……」

ノアはその言葉を聞かず、何かに視線を奪われて立ち上がり、目の向く方向へばたばたと走り出した。クリスははっと身を起こしたが、倒れた拍子に頭でも打ったのか、足が上手く地を捉えてくれない。よろめきながら立ち上がると、ノアが誰かの袖に幼子のように縋っているのが見えた。すらりとした長身の黒い髪の男性だ。面識はないが、名前は知っている。学園中の至る所に彼の写真があった。

生徒会長、千住慎だ。

「どういうことだ、これは？」

慎の口調はいらついていたが、面白がってもいた。

「何故ここに一般生徒がいる？」

「えっと、それは……」

クリスは俯いた。苦く酸っぱいものが舌の奥から込み上げてくる。クリスは夢から無理やり引き上げられたような気がした。引き上げられる前は、自分だけの世界だった。「絵」はここにあるべきだったし、確かに存在していた。自分が「絵」と出会うのは必然だった。

「絵」の存在は強く求められていた。だが、今この瞬間　千住慎が現われた瞬間　「絵」を必要としない世界が押し寄せてきた。

それは、クリス以外の全ての人々が共有している世界であり、クリスが名声を響かせる世界であり、クリスを褒め称える世界であり、また、彼が来夏たちと笑った世界でもあった。そこでは、「絵」はただの幻、妄想の産物だと片付けられ、「絵」を求めたクリスには、世の秩序が罰を下すのであった。失望が、綿に染みる水のように、クリスの心を重く湿らせていった。

慎はノアの頭を撫ぜ、その顎をとって頬に接吻を落とすと、ゆっくりとクリスの方へ接近してきた。こんな時間にも関わらず、しっかりと身を制服で固めた慎は、顔立ちも端正そのものであった。口元の黒子が不敵に吊上がり、青い目は少なくともは興味を以ってクリスを観察している。その奥で、ノアはにこにここと微笑んで二人の様子を見ていた。

「石崎・エーリアル・クリスだな？」

「……はい」

「ふん、今日転校してきたばかりってやつか。ノアが理事長の息子っていうのは知ってたか？」

「……一応」

「じゃあ、扱いは気をつける。怪我なんかさせたら、碌なことになるねえぞ」

「なっ……！」

抗いかけたクリスの口を、慎は人差し指一本で止めた。そして彼の金色の髪をくしゃくしゃにすると、くるりと振り返ってノアの元へ戻った。ノアは嬉しそうに慎に寄り添った。慎も彼の腰に手を回し、また一つ額に接吻を与える。一人さっぱり訳の分からないクリスは、慎が何か説教か説明を続けるのを待っていたが、彼はクリスを見ないまま、手だけ振ってこう言い捨てた。

「ガキは早く戻って寝るんだな。落ち着かない首は枕の上に預けとけ」

「おやすみなさい、石崎様」

水晶の部屋から完全に抜け出す間際、ノアは微笑みながら丁寧に頭を下げた。慎がその肩をとっていったのが、クリスの見た二人の最後だった。

疲労が膝を落とした。脳も心も酷使されすぎてくたくただった。答えもできない疑問ばかりが吐き出されていく。自分はどうするつもりだったのだろう。何が自分をここへ導いたのだろう。どうしてノアは身投げの真似などしたのだろう。何故、慎は自分を咎めなかったのだろう。そして、あれ程までにここにあると確信していた「絵」は、一体どこにあるのだろう。

頭上の水晶は眩しすぎて理解できなかった。

第二話 白のアトリエ・前編

「夜間の外出に塔への侵入ですか。なかなか元気がありませんねえ。ですが、元気があるすぎるのもどうかと思いますよ。時には危険を招くこともありますし」

朝一番に呼び出しを喰らった。落合に無理矢理押し込まれたトーストを機械的に齧るクリスに、野瀬先生のお迎えがきた。クリスは温ぬるいミルクティーでパンを流し込み、先生の誘導に従った。来夏たちは驚き、他の生徒たちも転校生の早速の呼び出しにざわついた。道中、野瀬先生はクリスに対し、一言も口を聞かなかった。クリスも何も言おうとしなかった。結果は目に見えている。退学だ。恐らく、三宿学園創立以来最短の在学期間だろう。それを更新できただけでも、名誉なことかもしれない。

二日目にして二回目の校長室は、やけに広く感じられた。クリスがやって来たとき、三宿学園高等部校長、風間信吾かざましんご郎先生は、中庭にやってきている小鳥を観察していた。頭は申し訳程度の髪を残してほとんど禿げ上がっており、「風が吹いても危ない」という表現が、校長の名にかけた洒落として生徒たちに親しまれている。比較的背の高い男性で、顔のパーツもいちいち大作りだった。眼鏡の蔓つるが、朝日に照らされて黒光りして見える。扉が閉められて、部屋に二人きりになっても、校長はしばらく何も言わなかった。それからくるりと振り返って微笑み、クリスに簡単な朝の挨拶をすると、席に着いてようやく冒頭の言葉を述べたのだった。

「そう思いませんか、石崎君？」

「はい……」

クリスは内心苛立っていた。校長の様子は、まるで死期の近づいた患者を扱う医者のようにだ。医者は何も知らせず患者に微笑むが、患者は自分の死が近いことを悟っている。退学を言い渡すなら早くしてくれ。

校長は、クリスの無言の懇願をサファイアブルーの中に見た。校長は分かりましたの意でこほんと咳をした。そして、ゆっくりと立ち上がり、窓辺に寄って空を見上げた。

「よろしい、石崎君、君の罰則を言い渡しましょう。石崎・エーリアル・クリスの罰則は……」

よろめきながら校長室から出てきたクリスに、三人の友人はいつきに詰め寄った。ふらつくクリスを落合が支える。クリスは感謝を込めて弱弱しく微笑んだが、落合は全く無視してすかさず尋ねた。

「で、どうなった、エーリアル？」

「んー、まあ、その、えーと……」

「えーと、何だよ？」

来夏が訊いたが、クリスは落合に寄りかかりながら曖昧に首を傾げた。

「はつきりしろよ、エーリアル。あの禿げなんだった？」

「禿げとは失礼ですねえ、落合君」

クリスに続き、風間校長が扉から顔をのぞかせた。落合は慌てて押し黙り、いかにも慎ましそうに装って俯いたが、ズボンからはみ出したワイシャツの所為で台無しだった。来夏は落合の背中を叩いて叱った。一方の酒本は、食堂から持ってきた大量のトーストをもぐもぐしながら、校長の前でもちつとも動じていない。こちらも来夏に小突かれたが、意に介さずだ。校長の服装を見て、クリスは啞然とした。さつき見たときは背広姿だったのに。いつの間にか赤いジャージに着替え、首元にタオルを巻いている。何という早着替えの業だ。

「一応こんな禿げでもですね、ある程度の寛容というのは持ち合わせているわけですよ、落合君。だからこそ、今回石崎君は退学にも停学にもならなかった訳です」

「本当ですか？」

真っ先に喜んだのは来夏であった。だが、校長は片手を挙げて、

まだ続きがあることを示した。

「まだ早いですよ、関本君。石崎君は校則に違反した訳ですから、やはり何らかのペナルティを与えなければなりません。そこで、僕は……しまった、説明している時間がないようですね。詳しくは本人から聞くように。では、僕は失礼しますよ」

校長は、年齢からは想像も出来ないほどの超高速で廊下の奥へと去って行った。クリスたちは、一瞬何が起こったのだからさっぱり分からず、ただ校長の消えた方向を見つめるばかりであった。しかし、間もなく聞こえてきた騒がしい物音を聞き取り、来夏、落合、酒本の三人は納得して頷いた。

「あー、なるほど。ランニングにしてはずいぶん速いと思った」

校長の行き先と反対側からやってきたのは、六人の男性の先生だった。誰もが背が高く屈強そうで、腕にオレンジ色の腕章を着けている。そのうちの何人かは、同じ色ののぼりを掲げていた。校長捜索隊、とクリスには読めた。先生方は、校長室の前で立ち止まり、せいぜい息を切らして膝に手をつけていたが、やがて先頭の川内副校長が言った。

「君たち、校長先生は、どこに、いらっしやるか、知ってるかい？」

「ついさっき逃げていきましたよ。あっちの方」

来夏が素直に答えると、副校長先生は拳で腿を叩いて叫んだ。

「校長先生、今日は会議があるって申し上げたじゃないですかーっ?!」

明らかに校長捜索隊の士気は下がったが、ここで諦めていては、校長は愚か、生徒の世話などとてもやっていけない。副校長が一声あげると、捜索隊はすぐに元気を取り戻し、口々に校長を呼びながらまた駆けていった。生徒指導部の森先生は、のぼりを振り回しながらも、通り過ぎざまに落合にこう言うのを忘れなかった。

「落合、服装を正せ！」

「やっべ」

落合は急いでシャツをズボンの中にしまったが、校長捜索隊の足

音が聞こえなくなると、再び元に戻した。

「で、どうなったの？」

酒本が四枚目のバターつきトーストを貪りながら言った。その一言で三人は我に返り、来夏と落合はクリスに迫った。クリスは頬をかきながら、考えつつ言葉を継いだ。

「えっとー、それが、寮が変わることになって……『白のアトリエ』ってところなんだけど……」

白のアトリエ 何を目的に建てられたかは分からない一般寮とは遠く離れたところにある小さな館を、生徒たちはそう呼んでいた。黒い屋根に白い壁の品のいい建物で、見た目は普通の一軒屋と変わらない。それより少し小振りなぐらいか。通常、普通の生徒がここに住むことはない。特別な理由などで隔離すべきと判断された生徒のみが、ここに住まうのだという。そして、ここに移住することがクリスの罰則となった訳だが、悪いようには感じられなかった。まず、アトリエという名前が、クリスにはとても魅力的な名前に思えたし、来夏たちと離れるのは残念だったが、交流を禁止された訳でもないからだ。

その日の放課後、クリスは荷物を持って白のアトリエへと向かった。来夏たちも一緒だった。一度どうしても見てみたいのだという。実際に行ってみると、期待通りに住みやすそうな明るい家であり、クリスは胸が弾んだ。一人の方が色々と集中しやすいかもしれない。来夏と落合も羨ましかった。

アトリエには、小さな黒い門までついていて、門から玄関までの階段には、様々な花の植木鉢が、上の段から色が鮮やかな順になって並べられている。クリスが門を押して中に入ろうとしたその時、館の中から人が出てきた。ノアだった。クリスは立ち止まった。何故、ノアがここにいる？昨夜の光景が蘇ってくる。水晶を見上げていたノア、塔の窓から飛び降りようとしていたノア、生徒会長に接

吻されていたノア　今の彼は果たしてどのノアか。どれにも当てはまらなかった。四人に柔らかく微笑む彼は、昨日手品をしてみせた、あのときの彼に一番よく似ていた。

「おう、有瀬、新入りをよろしく頼むぜ」

昨日の「関わりと碌なことがない」はどこへやら、落合が明るく手を振った。ノアの登場に驚いた様子はない。知っていたのだ。彼がここにいることを。クリスはノアを見つめる視線に戸惑いを込めた。しかし、それに気がつく様子もなく、ノアは淑やかに頭を下げ、四人に、否、若しかしたらクリスだけに、歓迎の意を示したのであった。

「悪いな、有瀬。俺たちまで上がらせてもらっちゃってさ」

「よく言うよ、元から乗り込むつもりだったくせにさ」

「いいえ、構いません。滅多に人の来ない場所ですから。どうぞこゆっくり」

アトリエの中は見た目よりずっと広く、快適そうに感じられた。建物は二階建てで、一階には、居間や台所、風呂や洗面所などがあり、二階には寝室が二つと小さな物置のようなスペースがあった。どこの壁紙も白で統一されており、日がよく入る方角に窓が置かれている。水場は乾いて綺麗に掃除され、物置に詰め込まれた古い家具も埃がすっかり払われているなど、ノアの整頓癖が窺うかがわれた。来夏は彼を褒め、「どこかの誰か」にも見習ってほしい旨を漏らしたが、来夏が視線を投げかけても、当人二人は平然としていた。クリスとノアが笑った。

最後に案内されたのは居間だった。広々としたこの部屋は、右と左とで用途が別れており、台所と直結している左の間は、主に食事の場所として使われ、天然木のダイニングテーブルと椅子が置かれていた。右の方は談話の間で、ふかふかのクリーム色のソファに、部屋の隅にはグランドピアノが一台、壁には海や草原の風景画が数枚飾られている。クリスと落合が絵の方に近づき、来夏がピアノに

感嘆している一方で、酒本は勧められてもない椅子に座り、テーブルにぐったりと伏した。

「おい、酒本」

「喉渴いた」

来夏の注意もどこ吹く風で、酒本は言った。

「今、お茶を淹れますから。どうぞ皆さんもお座りになってください」

「お腹もすいた」

「こらっ」

「では、お菓子もお出しします」

「やったー」

クリスたちは顔を見合わせて溜息を吐いた。ノアは、酒本の態度に気を悪くするでもなく、寧ろ彼の要求を満たさせるのを、喜んでいるようであった。そういえば、彼は誰に対しても敬語を使うし、クリスを石崎様と呼ぶ。なぜそこまで謙る必要があるのか。酒本の隣の椅子に腰をおろしたとき、クリスはふと思い当たった。もしかして、孤独がそうさせるのか。

「しかしさ、こんな家に一人で寂しくないか？まあ、これからはエーリアルが一緒だけだ」

落合も同じことを思ったのだろうか。砂糖入れから角砂糖を一つ取り出し、口の中に放り込んで尋ねた。

「いいえ。でも、石崎様が来てくださって、僕は嬉しいです」

後ろ向きのノアの表情は見えない。

「おいおい、羨ましいじゃねえか、エーリアル」

「何だよっ」

「そっぴやさあ、玄関の前に花があったよな？あれって、有瀬が育ててるのか？」

来夏が指摘すると、「はい」とノアは頷く。

「まめなんだな」

「でも、花は気まぐれですから。手を加えなくても、自分の咲きた

いときに咲きますよ。僕は時々手伝つてあげてるだけです」

ノアが銀の盆にティーセットと菓子を載せてきた。酒本は餌を前にした犬の如く、きらきらと目を輝かせている。来夏と落合は肩を竦めたが、漂う紅茶の香りには二人とも関心を示した。紅茶大国と云われるイギリスに住んでいたクリスも（クリスにその自覚はなかったが）、こんな香りの紅茶は初めてだ。酸っぱい柑橘類の香りだったが、既に加えられたミルクがまるやかさと甘みを醸し出し、シイクスピアの悲劇のように、胸に染み、ミレイのオフィーリアの如く陶醉させるものを描き出していた。舌を包んだのは、遠い美意識への懐古であった。

薔薇の模様の陶器の皿には、クッキーとチョコレートが盛られ、更に一人一切れずツレモンのタルトが出された。クリスはどうも甘いものが好かず、クッキーには手を伸ばせなかったが、タルトは頂いた。非常に美味であった。

午後五時の鐘を聞いて、来夏たちが帰ってしまうと、クリスは、ノアと顔を合わせているのが気まずくて、ずっと新しい自分の部屋に閉じこもっていた。クリスに宛がわれた寝室は、ノアより二畳ほど広かった。窓は南向き、風通しもよく、環境は悪くない。こもっている言い訳はいくらでもあった。宿題が大量に出されていたのだ。だが、ノアはわざわざそれを求めようとはせず、クリスが階上に留まっていたのと同様、ずっと階下で活動していた。ノアが食器を洗ったり、掃除をしたりしている音が、開けっ放しの居間の窓から漏れ出して、この部屋まで伝わってきた。手伝うべきだろうか、いや、今はどうしても一人でいたい。

去り行く来夏たちの背中を見送るのは辛かった。やはり此処に住まうということは罰であった。折角できた友人たちと、共に夜を楽しみことが出来ないなんて。昨日より前のクリスならば、この罰にも耐えられただろう。だが、クリスはもう友人と騒ぐ楽しさを知ってしまった。

振り切りたい気持ちもあったのだろうか。三十分ほど日本史のノートと睨めっこを続けていたクリスだが、何も詰まらない頭に寂しさ募るばかりなので、遂に諦め、ノートを閉じて代わりにスケッチブックを取り出した。ぱらぱらと捲って、今年の七月から書き溜めてきた絵を見直した。最後の絵は、忘れないようにと描いたイギリスの家の庭だった。自身の成長を確かめたあと、クリスはまっさらなページを出して絵筆を握った。さあ、何を描こうか。

クリスはすぐに思いつき、紙の上に筆を滑らせはじめた。ここで出会ったものに、クリスはまだきちんと挨拶をしていなかった。

「石崎様、夕食です」

部屋の戸をノックする音で、クリスは初めて我に返った。霞んだ眼で周囲を見渡し、壁の時計が七時過ぎを指していることに気付く。二時間近く描いていたようだ。扉を開けると、エプロン姿のノアが、なにやら食べ物の匂いを纏ったままで立っていた。幾分まだぼーっとしながらも、鮮やかな色の世界は食欲によって次第に退散していく、席についたときにはすっかり目が覚めていた。井には白米が並々と注がれ、その上に、金に輝く卵にとじられた玉ねぎと鶏肉が載っていた。驚くクリスを見て、ノアはにこっと笑った。

「親子丼です。お気に召しませんか？」

「いや、そうじゃないけど……」

「では、召し上がってください。冷めてしまいますから」

ノアはエプロンの紐を解くと、手を合わせて箸をとった。クリスもならった。わずかに手で丼を持ち上げてみると、卵の匂いが一層立ち、クリスの胃をちくちくと刺した。クリスはこれ以上感心だけしては行かなかった。卵の破片とご飯を口に運んだ。含んだ瞬間に卵が解けた。馴染みは薄い、舌を包むような優しい味だ。クリスは思わず口元をほころばせた。

「おいしい……これ、有瀬が作ったの？」

「ええ」

「すごいなあ。有瀬は料理上手なのか」

「必要に迫られて、です。一人で暮らしていると、どうしても」

「もしかして、さっきのクッキーとか、タルトとかも？」

「ええ」

「へえ。やつぱりすごいよ、有瀬」

すると、ノアは箸と丼を置き、少し顔を赤くして俯いた。クリスが「どうした？」と尋ねると、ノアは首を小さく横に振り、答えるのを渋りながら、やがて消え入りそうな声でこう言った。

「初めてですから……人に食べていただいたり、褒められたり……」
クリスの顔から笑みが消えた。自分の特技を人前に晒す機会もなかった。それほどまでに、ノアは孤独だったのだ。彼と比べてみると、自分は何と恵まれていたのだろう。絵の才能を叔父に見見され、その上、才能を世界の人々に評価される幸運を、自分は持つていた。そのことに感謝しなかったにも関わらず、幸運に見捨てられることもなく、自分は生きてきた。その間にも、ノアは一人でこの才能を保持していただのだ。一人であるが故に。ただ、学園長の息子に生まれたが故に。

クリスはもう半分の重さになった器を置いた。同情で滲んだその胸に、たった今浮かんだ台詞を、言わなければならぬと思った。言葉が強くなりすぎないように笑みを携え、口を開いた。

「そんなの勿体ないよ。もっと色んな人に食べてもらうべきだ。だって、この腕だったらプロにだってなれるじゃないか。有瀬には料理の才能があるよ」

「まさか」

ノア静かに首を振った。

「僕にはそんなものありませんよ」

「バカなこと言うなよ。そりゃ、会ったばかりの俺が言うのもどうかと思うけどさ。謙虚になる必要なんてないじゃないか」

「僕から謙虚を抜いたら何が残るんです？」

「有瀬……?」

一瞬、ノアの目元が見えなくなった。だからだろうか。彼の言葉が刺々しく聞こえたのは。

「……僕はこれで満足しています」

「これって?」

ノアは食べかけの料理に再び箸をつけた。その顔は微笑んでいた。「石崎様に食べていただけのだけで」

クリスは何をどう言えばいいのか分からなかった。やや感傷的になつて麻痺した脳は、食事を終えることだけが、自分の義務だと判断した。あまりにも出来すぎてしまったその料理を、咀嚼そしゃくし、飲み込み、この身体の一部とすることを。食器の触れ合う音だけが、二人の沈黙の中の唯一の要であった。

第二話 白のアトリエ・後編

朝一番に見たノアはやはり笑っており、その態度も昨日と全く変わらなかつた。彼は細かくクリスの世話を焼いた。クリスが七時まで眠っていたら起き、クリスが起きれば朝食の皿を差し出し、クリスが食べ終えれば後を片した。乱雑に脱ぎ捨てたはずの制服は、いつの間にかきちんとハンガーに掛けなおされ、昨日着たワイシャツは、もう洗濯されて干されていた。他にも、クリスが気付かないだけで、多くの仕事をこなしているに違いない。それにも関わらず、ノアは何一つ文句を言わず、疲労した様子を微塵も見せない。もちろん、クリスも手伝おうと試みてみた。無駄だった。ノアは断固として何一つやらせようとしなかつた。転入生への歓迎サービスとしては、少々度が過ぎている。何だかロボットと接しているような気分になった。ノアには感情がないのか。まさか。何をバカなことを昨夜、料理の腕を褒めた時には、確かに照れていたではないか。それでも、彼が感情を晒す機会はまだにも少なすぎたため、クリスは段々気味が悪くなってきた。一人こっそり出て行こうと向かった玄關で、ぴかぴかに磨かれた靴を発見したときに、その感情は益々強まった。

このような次第で、クリスは朝の洗ったような空気を肩で裂き、逃げるように登校してきた。まだ静かな教室では、来夏がぼつんと座って洋書を読んでいた。

「よっ、石崎」

来夏はこちらに気付いて手を振った。

「おはよう、関本。落合と酒本は？」

「剣道部の朝練だよ。今週の土日に練習試合があるらしい」

「へえ、酒本が剣道部ねえ……」

クリスは頭の中の酒本に竹刀を握らせてみたが、見るも無残な惨状が繰り広げられただけだった。朝から刺激が強すぎる。慌てて掻き

消した。

「そっぴや、有瀬は？」

「えっ、まだ来てないけど」

「一緒に来なかったのか？」

「えっ、あつ、うん……」

きよとんとして頬をかくクリス。だが、そうしながらも、来夏から目を逸らしている自分を知っていた。

来夏は緑色の眼の一突きで察すると、洋書を畳んで溜息を吐いた。やがて、クリスを見上げたその顔は、どこか咎める風でもあり、どこか困惑している風でもあった。良心を執拗に責め続ける棘にいい加減うんざりしていたせいも、クリスは幾分むきになって訊いた。

「何だよ？」

来夏は口を開きかけたが、すぐに閉じ、諦めたように首を振った。

「いや、何でもない。俺が構うことじゃなかった。おまえが有瀬と仲良くしようがしまいが、俺には関係ねえ」

「そりや、そうさ。俺と有瀬の……」

廊下をばたばたと駆ける音がして、クリスははっと口を噤んだ。

本能的に察した。教室の入り口を見るのが怖かった。「石崎様」と呼ぶ声がしても尚、クリスはそれに応えるのを躊躇ためらった。ノアは、まだ制服も完全に着ないまま、鞆も持たず、ただ小さな包みだけを抱えて立っていた。よほど急いできたのだろう。息を荒げ、肩を大きく上下させている。クリスの他に人がいるのに気付くと、彼は一瞬青ざめたが、それが来夏であると分かるとほっとしたようだった。一体何なんだ？いよいよ訳がわからなかった。

「よう、有瀬。どうした？」

来夏が陽気さを取り戻して尋ねる。

「いえ、あの、お弁当忘れていったので……」

「お弁当って、俺の？」

思わずクリスは口を挟んだ。

「はい」

「有瀬が作ったの？」

「はい」

「……もしかして、俺が弁当忘れたのに気付いて、そのまま飛び出してきた？」

「……あつ」

今更、登校した後に学校で渡せばいいことに気付いたのだろう、ノアは口を片手で覆った。クリスは呆れ、来夏は笑っていた。クリスは、やや重い足取りでノアの方へと向かい、彼の労働に失礼にならない程度に、そっけなくその弁当を受け取った。

「別に、無理しなくてよかつたんだよ。俺だつて一応お金あるしさ。何かあつたら購買で買えるし」

「ごめんなさい。僕、お節介でしたか？」

「いや、そうじゃなくて……」

続きが思い浮かばなかった。来夏が助け舟を出してくれなかったおかげで、クリスとノアは向き合つたまま、気まずい沈黙を共有することになった。出来る限りノアの心は傷つけないが、そのための嘘が上手くつかなかった。クリスは苛立ちさえ覚えた。不甲斐ない自分に対しても、わざわざ針の穴に飛び込んでくるノアに対しても。

踊り場の辺りが騒がしくなってきた。生徒たちの第一陣が到着したのだ。二人は黙って離れた。来夏は洋書に没頭しているふりをしていた。クリスも机に突つ伏し、十二分にも満足している睡眠欲の胃袋に情眼を詰め込むふりをした。弁当を机のフックにかけ、膝を何度も当ててみる。磨かれた靴を、机の脚に擦り付けてみる。腕で困った暗闇で開いた目は、心の中でまだ燻るものを見つめていた。

そりゃ、そうさ。俺と有瀬の問題だもん

八時二十五分の予鈴が鳴る頃には、落合と酒本も朝練を引き上げ、ノアもきちんと制服を着、鞆を持って登校してきた。落合と酒本は

相変わらずな調子だったし、来夏も普通に話しかけてきた。クリスはひとまずほっとした。問題はノアだ。ノアは、誰とも会話もせず、にいたが、別段寂しそうではなかった。授業中、机の下でこっそり折り紙を折っていたり、教科書に落書きのようなことをしてくすくす笑っていたり、なんだか一人でも楽しそうだ。反面、クリスとは目も合わさない。やはり、今朝のことを気にしているのだろうか。少しは弁解しなければ。知らない数式が頭上で飛びかう中、クリスは下手なスピーチを必死で練り上げようとした。だが、結局失敗した上に、先生に当てられて恥をかいただけだった。

二時間目と三時間目の間の十分の休憩の際、クリスは落合に手招きされた。

「何だよ、落合？」

鞆の中ををがさごと漁る落合を、クリスは胡散臭そうな目で見ながら言った。

「エーリアル、やっぱ羨ましいぜ」

「はあ？」

「可愛い後輩からのプレゼント。お前を尊敬して止まない美術部一年中野君の手作り弁当。ちゃんと感想聞かせるよな。野菜抜きで作ってくれたんだぜ」

なるほど、蓋を開けられてクリスの前に出された弁当には、確かに野菜の緑がない。色合いにはかなり気を遣ったらしいが、カラフルな分、一層抜けた色が偲ばれる。もちろん、野菜嫌いなクリスが言える立場ではないが。その時、クリスはあることに気がついた。

「ねえ、その……中野君？」

「そっ、中野悠太君」

「何で俺が野菜嫌いなこと知ってるの？」

「俺が教えたから」

「えっ？」

「嫌いなものとか教えてほしいっていうから、デート一回と引き換えに教えたって訳」

「なんで俺の個人情報勝手にやりとりしてんだよ？」

「個人情報なんて大層なもんじゃねえだろ。いいから受け取れって」「いや、あのさ……」

クリスはそつと後ろをうかがった。ノアの机のすみでは、小さな鶴が積みあがって小山を拵じゆえている。ノアは折り紙を四等分にする仕事で忙しく、こちらを見てもない。しかし　クリスは首を正面に戻して横に振った。

「ごめん、俺、弁当作ってもらったから。今日はいいや」

取らぬ狸の皮算用、デートの成り行きを妄想し、きらきらと輝いていた落合の顔が曇った。

「おいおい、じゃあ、これどうしろって言うんだよ」

そう言っ指差す弁当の中は、変わらず緑がない。

「落合が食べてあげて。また今度作ってくれたら、俺も食べる」

「そりゃ、捨てるわけにはいけねえから俺が食うけどよ……せめて、一口！な？せつかく作ってくれたんだし」

「うん。そうだね……そうする」

クリスは無表情で頷いた。少し遠くで、がたんと椅子の動く音がある。ノアに違いない。彼が席を立って、どこかへ行こうとしている。作りかけの鶴を置いたまま。

クリスは添えられていた箸を手にとり、真つ先に目についた卵焼きを挟んだ。弁当箱の隅で見事な黄色を咲かせていたものだ。綺麗に四角を模っていたそれは、箸の魔の手にたちまち砂時計のような形に歪んだ。今にも崩れそうな卵焼きを、急いで口に含む。不味くはない。しかし、美味くもない。まるで味気がなかったから。落合に顔を覗き込まれて、クリスは曖昧に微笑んだ。

「どうだ？」

「まあ、悪くはないと思うよ」

ノアがどこかへ行ったと思ったのは、単なる勘違いだったのだろ
うか。自席に向かいながら見てみても、彼は相変わらず鶴を折り続
けていた。小山は少し盛り上がって見えた。

「石崎君」

昼休みのことだった。数学教師に額を地にこすりつけんばかりの勢いで頼まれ、クラス全員分のノートを職員室に運びにいった帰り、後ろから、聞き覚えのある声が投げかけられた。振り返ってみれば、大量の書類を胸に抱えた颯が、こちらへ向かってくるところだった。クリスは学校に到着したばかりのことを思い出して声を上げる。

「あつ！え、えつと……」

「榊原颯だよ」

颯はすぐにクリスの戸惑いを察して言った。

「榊原先輩？」

「そう。でも、どうせなら、颯先輩の方がいいかな」

「颯先輩……」

「そう、よくできました」

颯は穏やかにクリスに微笑みかけ、空いたほうの手でその金髪を撫でた。以前にも、この学園で頭を撫でられたことがある。あれは誰で、そしていつのことだったか。記憶がぼやけている。おかしいな。学園に来てからまだ二日三日しかしないのに。意識を集中させて思い出していると、颯の顔が突如後ろから現れた。黒髪の端が頬に触れる。クリスの肩がびくっとはねた。

「は、颯先輩？」

「何のこと考えてるの？」

「へっ？」

「僕以外のこと考えてたでしょ？」

「いや、あの……」

左肩に回された手の力は優しいが強い。眼鏡の脇から漏れた、ラベンダー色の光も同様だ。

「聞いたよ、石崎君。夜勝手に寮を抜け出した拳句、塔に勝手に侵入したんだって？慎が言ってた」

「慎って、あつ……」

そうだ、慎。千住慎だ。生徒会長　今、目の前でも、壁に貼られた校内新聞の写真の中で、彼は不敵に笑っている。全く同じ形の微笑を携え、あの晩、彼はノアの腰を抱き、額に接吻を落としていた。ノアはそれに縋っていた。クリスに身投げを妨げられるという事件の直後にも関わらず、あんなにも微笑んで……

「しかし、よくも退学処分されなかったものだね。罰則は『白のアトリエ』への移動だって？どんな意味を含めて罰則なのかはよく分からないけど……」

颯は、クリスの横顔を視界の際で捉えたが、彼が最早目の前にあるものさえも掴めていないのが分かった。意味ないか。無知な相手を詮索しても、と、颯は内心溜息を吐く。

「有瀬ノアと同棲してるんだって？」

ノアの名には、クリスも意識を引き戻された。

「あつ、はい。先輩、有瀬を知ってるんですか？」

「だって有名人だもの。まあ、転校してきたばかりの君が知るはずないけど」

「学園長の息子ってことは聞きました。でも、よく分からなくて。実際、付き合ってみても、いまいち掴みどころがないし……」

「何言ってるんだよ。出会って二日目で打ち解ける奴なんかいるものか。僕とクリスは例外だけだね。まあ、少しずつお互いのが理解できるようになるよ」

「はあ……」

最後の一言への疑問は敢えて口に出さず、クリスはなんとなく納得したふりをした。まさか、颯も本気で助言した訳ではない。少しずつ理解できるようになる、それはいかにも快活で幅の利く励ましではないか。その虚ろさに気付いたのか、颯はこつも付け足した。

「大丈夫だよ。人間関係なんて付き合っているうちにどうともなるって。どうしても上手くいかなければ、校長先生に相談すればいいし。あの先生なら融通がきくだろうからね。僕だって相談に乗るよ。」

僕はいつでも君の味方だから」

それから、颯は素早く腕時計に目を遣った。その動作で、自分にもう時間がないことを相手に示すために。一方のクリスは、五秒ほどぼんやりしてから、先輩の言葉の意味を理解し、「ありがとうございます」と頭を下げ、更に二秒ほど要してから、颯の動作の意味を悟った。颯がじゃあねと手を振ったので、クリスも振り返した。クリスは教室へと歩みながら、真っ白い天井を見上げた。そうだが、問題が起きたときに回避する方法はいくらでもあるのだ。少し思い悩みすぎたかもという反省が、ゆっくりと胸に染み渡り、心の鉛を溶かしていった。その動きの中に、一つだけ引つかかるものがあった。何だろう　僕とクリスは例外だけだね　ああ、そうだ。颯先輩が俺を名前で呼んだんだ。

来夏たちは、それぞれ委員会やら呼び出しやら部長会やらでいなかった。クリスは一人で席につき、ノアの作ってくれた弁当を開いた。中身は彩りと脂身に欠けていた。おまけに野菜ばかりである。栄養の方を重視したのだろう。それもノアの優しさであり、献身である。クリスは迷いつつも意を決し、胡麻で和えた緑の葉を口に入れた。噛んでも呑んでも何も変わりはない。野菜は野菜だ。いくら美味だからといって、嫌いなものはそうそう好きにはなれない。この場合も同じだった。だが、クリスの箸は、弁当の中身がなくなるまで決して止まることがなかった。クリスは全てを食べ尽くした。悪くはない　あの言葉を、もう一度、然し別の意味で呟いた。

「美味しい」

ノアのスプーンを握った手がぶれた。彼の灰色の目がじっとこちらに注がれる。

「今日の弁当も美味しかったよ。ありがとう、有瀬」

「い、いいえ……」

どうしたのだろう。昨日寝めた時より、ノアは照れ、動揺している

ように見えた。やはり、ノアはロボットなんかじゃない。決して自分に従属している訳でもないし、誰の命をきいて自分の世話を焼くでもない。あくまでも、自分の意思で。行動がやや極端なのは、彼があまりにも孤独すぎたからだ。

「有瀬、あのさ、今朝はああ言っただけど、明日もお弁当作ってもらえるかな？」

「えっ、僕が？」

「あっ、やっぱり駄目？」

「いいえ、まさかっ。喜んでいただけんなら、僕だって嬉しいですから」

夕食のカレーライスは、香りも絶妙ながら、味も甘すぎもせず辛すぎもしない。舌を鋭く刺激しはするが、遅れて訪れた甘露がすぐにそれを癒す。クリスは、空の皿にスプーンを添え、グラスに注がれた水を飲んだ。熱くなった口内を、溶けて小さくなった氷を転がして冷やす。

「ごちそうさま」

クリスは食器を台所まで食運ぼうとしたが、案の定止められた。

「あっ、石崎様、いいです、僕がやりますから……！」

クリスは一呼吸置いてから、準備しておいた台詞を言った。振り返り、笑みを携えて。

「俺にも食器洗いぐらいやらせてよ。有瀬だけ独占するのはずるいだろう。もちろん、有瀬がずるいって意味だよ」

「えっ、あっ、僕……！」

何か必死に弁解しているのを遠く耳に聞きながら、クリスは鼻歌を歌いつつ、洗剤を垂らしたスポンジで汚れた皿を擦った。皿は忽ち白くなり、しばらく続けているうちに、その形をした泡が出来上がった。これは本当に面白いかもしれない。続いて、スプーン、それから空っぽになった弁当箱と箸のセットを洗った。この二つだけは、ノアが食器をこちらに持ってくる頃を見計らって。ノアは俯くのを、クリスは目で見ずとも感じ、ちよっとした作戦の成功に密か

に胸を躍らせた。

「そうだ、有瀬、もう一つ頼みたいことがあるんだけど……」

墨汁を流したような、否、ここはこの物語の主人公に敬意を示して、黒い絵の具を溶いた水と云おうか。比喻としては出来が悪いように感じるけれども。暗黒のカーテンの奥に星屑一つ見せ付けない夜空に、黄金の月の浮かぶ頃、クリスがずると布団を引き摺ってくるのを、ノアはベッドの上で横座りになりながら、呆気にとられて眺めていた。布団は、一日目の夜に、クリスが酒本に横取りされたものと同じだ。わざわざ来夏に届けてもらったのだ。さっぱり訳のわからない様子で、ノアはおずおずと尋ねた。

「石崎様、これは？」

「ああ、だってこの部屋狭いから、ベッド二つだと入りきらないだろ？だから布団にしたんだ。まあ、俺はお邪魔する訳だから、有瀬が床でそのまま寝るって言われたらそうするけど」

「そんな。いつそ石崎様こそベッドを……」

「絶対に嫌だ」

遠慮されるのではなくきっぱりと断られる。これにノアは弱かった。あの晩と同じ、白いローブを羽織ったノアは、この時にも結局言い返す言葉の見つからないまま、仕方なくベッドに横たわった。クリスが灯りを消した。消灯時間二分前だった。クリスは暗闇の中で布団をさぐって潜り込むと、枕に頭をそつと落とした。ベッドの上のノアは見えないが、ベッドが軋む音で、彼が身じろぎするのが分かった。「有瀬」と声をかけてみる。

「やっぱり、落ち着かない？」

「いいえ、でも何だか不思議な感じがして……」

「あはは、俺もだよ」

クリスは、自分の明るい笑い声の内に、ノアの微笑む音を聞いた。

窓から差し込んだ月光は、床から壁に向けて徐々に幅を広くしながら、金色の軌跡を描き出している。枕の端もその弧線上にある。

クリスは、いつか叔父から教わった、静夜思という漢詩を思い出した。いつ学んだのかは知らないが、漢詩好きだった叔父は、何を話すときでもしょっちゅう漢詩を持ち出し、クリスにもすっかりと習わせたのだ。一番の被害者はエマ叔母で、夫と甥が何を話しているのかさっぱり分からず、ただ紅茶を啜りながら、二人の話す姿を交互に見つめていることしかできなかつた。叔父と叔母は元気だろうか。静夜思も、確か月の光に故郷を偲ぶ詩であつた気がする。

「有瀬、起きてる？」

「はい、石崎様」

返事はすぐに来た。

「ずっと思ってたんだけどさ、石崎様って呼ぶのやめようよ。名前で呼んでよ」

「でも、癖なので……今更直りそうにありませんし」

「だけど、おかしいだろ？友達なのに様付けするのは」

この一言がどんな感慨を催したのか、クリスは知らない。想像さえもしていない。沈黙が訪れる。ベッドとは反対向きに寝返り、左腕を折り曲げて頭の下に敷く。

「……せめてクリス様で」

枕に向かって囁いたのだろうか。消え入りそうな小さな声であつた。「クリス様かあ。肝心な部分が抜けてないけど、まあ今はよしとするか」

クリスは何気なく背後を探った。望めもしない暗闇の中で、ノアの寝台から落ちた手に触れる。この手を握って彼を救った。窓辺に立ち、此方を振り見た灰色の目の色は、他の記憶がぼんやりと霞んでいる中で、ただ一つ、煌々と光を放っていた。死を前に戦く双眸が、なぜそれほどまでに強く閃いたのかは分からない。あれは救いを求めていたのだと思う。闇の中に足を投じながら、尚も頭上に伸ばした手もまた、きつと。クリスは凍てついた命に指を絡めた。

「クリス様」

許されたばかりの呼称でノアは初めて呼んだ。

「クリス様は、何故この学園に来たのですか？」

ふっと力を緩めた手は逃げることを許されなかった。クリスとノアは、温度を共有しあい、重ねた手の平の中で同じ温もりを育てていた。ノアにもう一度名を呼ばれた。問いを繰り返された。彼の細い指に抱きすくめられた。鈴虫たちの追い込みも激しくなっている。命を繋ぐために彼らは歌うのだ。クリスは何を繋ぐために言葉を発したのだろう。

「絵を探しにきたんだ」

「絵を？」

「そう。この学園の卒業生に、志水晶しみずあきらっていう画家がいたんだ。天才画家だった。でも、世間はまだ、志水の作品を評価する準備が出来ていなかったんだ。結局、志水は自分の作品が世に出回る前に自殺した。理由は色々云われてるけど、やっぱり奥さんと子供を亡くしたっていうのが一番の理由だったと思う。それから、やっと志水の作品が評価されるようになって、俺はたまたま志水の絵をイギリスの図書館で見つけた。何でそんなところにあつたのかは知らないけど。それから、志水の絵を調べまくって、研究しまくったよ。いつかこんな絵を描きたいと思った。そんな時に……」

「俺が重い。」

「志水晶が学生時代に描いた絵が、この学園に残されてるって聞いたんだ。あまり信用できない噂だった。実際、色々調べてみても、そんな話はどこにもなかったし。でも……」

「舌が上手く回らない。」

「……その絵が彼の最高傑作だって。その絵で、志水は絵っていうものを完成させたんだって。そんな話だったから、俺は……」

「夢が耳元で誘う。もうその艶かしい額を、クリスの頬に擦り付けている。」

「俺は、わずかな可能性に縋って……来てしまって、それで……」

クリスはまた塔の上にいた。あの晩と全く同じ光景が繰り広げられていた。煌く水晶、窓辺に立つノア、そして彼の振り返ったときの瞳の色。クリスはノアの名を呼んだ。何も聞こえない。そもそもここには音がなかった。クリスは駆けようと思ったが、足はその場に根を張って、指先も微々とさえ動かない。悔しさが胸を衝き、固まった眼球の下から涙が漏れ出した。息を吸うたびに肺がもがく。

「早くしないと有瀬が……！」

しかし、ノアは飛び降りようとはしなかった。彼がその場に立ち尽くしたまま、朝日が昇り、日光は彼の着ていたローブを制服に変えた。クリスは見守る中、ノアは窓枠を降り、くるりと此方を省みた。彼が微笑みながら差し出した花は、ホウセンカだった。花言葉は

第三話 菜の花の揺れる頃・前編（前書き）

第三話主要登場人物（詳しくは登場人物を）

・酒本菜月

クリスのクラスメート。剣道部主将。

普段は淡々としているが、食べ物には強い興味を示す。
来夏、落合と仲が良い。

・榊原颯

生徒会書記の三年生。ダンス部の部長。

成績優秀で真面目な模範的生徒。

生徒会唯一の常識人で、会長のお守り役も務めている。

第三話 菜の花の揺れる頃・前編

生徒たちの声と、高く昇った太陽が、白い壁や床に光の波模様を映し出している。いつもより騒がしいある日の昼休みであった。榊原颯は、大量のファイルを抱え、半透明なファイルの表紙越しに読める文字を目で追いながら、二階の廊下を歩んでいた。先ほどから、颯の隣を、パイプ椅子やら、長机やら、放送器具やらを持つた生徒たちが、何度も通り過ぎていく。本日の五時間目には生徒総会が開かれるのだ。各委員会の生徒たちはその所為で慌しい。

ふと目を上げた颯は、廊下の向こうから二人の少年がやってくるのに気がついた。一人は長い黒髪を腰まで靡かせ、一人は前髪で両目を覆っている。楽しげに語り、こちらに近づきつつある二人は、小杉荔枝と川崎陽、同じ役員会のメンバーであった。三人は職員用のランチルームの前で出会い、微笑を交わした。

「ごきげんよう、颯。準備は出来たか？」

「僕はね。でも、慎の方がまだみたい。文化祭の予算案が見つからないんだって」

「見つかる訳ねえだろ。出してもないのに」

陽の言葉に笑ったのは、荔枝のみであった。

「えっ、それほんと？」

「んな悪趣味な嘘つくかよ」

事態の深刻さに気付いているのか、気付いていないのか、陽は飄々々《ひょうひょう》としている。颯はしばらく呆気にとられていたが、校長搜索隊の「校長はいずこー！」という叫びに意識を戻され、今更どうしようもないと溜息を吐いた。

「慎、絶対キレルよ。僕知らないから」

「安心しろ。あの馬鹿には陽に指一本触れさせやしない」

「全く頼もしいぜ」

「僕は全然安心できないけどね……」

尚嫌な予感に表情を渋らせたままの颯の前に、突然一枚の紙が差し出された。いよいよ死刑の宣告かとも思われたが、金色で縁取られたその紙は、陽の職務怠慢とは全くの関係ないものであった。それは表彰状であった。その栄誉を称えられている生徒の名は 颯は眼鏡を掛けなおして見つめた。

「王子様がまた褒められてるぜ。どうする、お姫様？」

陽はお節介な笑みを隠そうともしない。

「どうするもなにもないさ。ナツなら当然だよ。都大会優勝なんてさ」

「生徒総会の後に表彰することになってる。名前を読み上げる役を代わってやらないこともないが？」

こういう時には、荔枝も人が悪いと思う。からかうように口元を緩ませ、試すような目でじつと見つめてくるのだから。この悪戯好きな二人を懲らしめるため、颯は笑いながら肩を竦めてみせた。

「ありがとう、荔枝。でも、結構だよ。甘やかしてられないもの… ナツはもつと強くならなきゃ」

颯は腕時計に目を落とし、足早にその場を去って行った。あつという間に小さくなってしまった背中を見送りながら、陽は相棒の肩に肘をかけて凭れ掛かって言った。

「厳しいな」

「そうだな。私も少し見習った方がよさそうだ」

「へえ、荔枝にもそんな相手がいたなんて」

「そういう陽はどうなんだ？」

「オレ？んー、まあ、超怖いお姫様が一人つてところ。惚れたが最期って奴だ。逃がしてくれそうにねえしな」

「そう、頑張つて」

荔枝は満足げな表情で、肩の上の手にそつと触れた。

「なあなあ、生徒会の中で一番可愛いのって誰だと思っ？」

「黙れ、落合」

「黙らない」

生徒総会というものは、一般生徒たちにとってはただの時間の浪費に過ぎないが、生徒会または委員会の仕事を務める生徒たちとしては、恐ろしい時間と体力の浪費になる。やれ資料作りやら、やれ話し合いやら……しかも、その努力の成果にも、ほとんどの生徒は一向に無関心なのだ。

様々なところで変わっているこの三宿学園も、この行事に対する生徒たちの意欲については、他の学校と変わらない。前述の会話が何よりもそれを証明している。委員会の活動から飛び出し、放送の倫理について語ろうとする放送委員長には目もくれず、落合は妙な輝きを帯びた目で、壇上の生徒会役員たちを見渡した。

「どうしたんだよ？これまで散々年下派とかほざいてた癖に」

「いや、最近年上の良さに気付いて……」

「振られたんでしょ、中野君に」

「てめえ、何で知ってる、酒本？！」

「……まあ、大体想像はつくわな」

耳を塞いで何食わぬ顔する酒本の意を察して、来夏は呆れて呟いた。落合は「それもあるけど」と認めながら、三列ほど前に並んで座っている少年たちを指差した。

「あれだ、あれ！」

来夏と酒本がいくつかの背中を抜けてみると、そこには睦まじそうに語らうクリスとノアの姿があった。クリスが何かを喋る毎にノアが口元を抑えて笑い、ノアが何かばやく毎、クリスは微笑を浮かべるのであった。特に珍しいことではない。光景としては新しいけれど、クリスが転校してきてから早一週間、彼は、普段の行動は来夏たちと共にするが、下校時にはもうノアと合流して一緒に帰路を歩んでいた。二人の仲が、ある日を境に　　どの日かははっきりと記憶していないけれど　　急激に近づいたのに、来夏たちは気付いた。一番腑に落ちないのは来夏であった。あのよく記憶されていた

ない朝に、クリスに無言の忠告を与えたのは、彼である。クリスは彼に返答しなかった。何がクリスを変えたのだろう。来夏は知る由もない。

「エーリアルの奴、この俺を差し置いて彼女ゲットだぜ？信じられるか？」

「信じられる」

「おい！」

「俺も酒本に同意」

「てめえら、親友の癖に……！」

「っていつか、別に有瀬は石崎の彼女じゃないだろ。まず彼女ってどうなんだ」

「いいの！俺からしたらあの関係は恋人同士なの！」

「駄目だ、こいつ。頭沸いてやがる……」

「で、だから生徒会に乗り換えたって訳？」

酒本は落合の顔を見ていなかった。彼の、青と緑が絶妙に絡みあい、グラデーションを描き出したその瞳は、前方の生徒会役員に注がれていた。来夏と落合はまるで気が付いていない。

「そうそ、よく分かってる、さっすが剣道部部长。って訳で、誰が一番良いと思う？」

来夏と落合の目は、まず中央に向かった。

「生徒会長……」

「いや、いくらなんでもちよつと手厳しいな。パス。次」

膝を組み、大臣の説教を聞き流す帝王よろしく、退屈そうに放送委員長の弁論を聞いている慎からは、早々と目が退けられた。

「議長か」

「無理だろう。隣の、ほら、肩によっかかって寝てる会計がいるし」

「略奪愛もそそられるんだけどなあ……命が惜しいし、パス。次」

「会計」

「侵略不可。はい、次」

「書記」

酒本の肩がびくと撥ねた。

「いける……いけるよな、あれ？」

「さあ」

「……ダメ」

酒本の小さな一言に、落合と来夏は少し意外そうにしてみせる。

酒本は肘を腿につき、頬と口を両手で覆って、赤くなった顔が見えないようにした。

ナツ、そう自分を呼ぶのは颯しかない。両親は菜月と呼ぶし、親友は酒本と呼ぶ。例え殺すと脅されても、酒本さかもと菜月なつきは榊原颯以外の誰にも「ナツ」と呼ばせないだろう。その呼称には特別な意味があった。即ち、颯が菜月のものであるという意味が、「どうして泣いてるの？」

遠い夕暮れのことだった。神社の石段に座り込み、眼下に広がる菜の花畑を眺めていると、突然後ろから声をかけられた。まだ、馴染みの薄い、けれども優しく親しみに満ち溢れた声だ。誰がいるのかはすぐに分かったが、菜月は驚いて振り返った。尼そぎの髪を狩衣の袖の上に垂らした、幼い颯の姿があった。

「どうして泣いてるの？」

颯は再度尋ねた。

「泣いてなんかいないよ。どうしてそう思ったの？」

「君が泣く声が聞こえたから」

「それじゃあ、ぼくじゃないよ。誰か別の人が泣いてるんだ」

「違う。だって今も聞こえるもの。君の中から」

颯の腕がすつとこちらに向かって伸びてきて、菜月は思わず目を瞑った。乾いた頬を、冷たく大きなものが包んだ。砂利を膝が退ける音がする。柔らかいものが、揺れて鼻先に触れた。

「辛いんだね」

耳元で囁かれた。

「独りているのはとても悲しいね」

声も出せずに目を開けた瞬間、ぼろぼろと涙が零れだす。耐えられなかった。幼い少年の胸に、孤独は重過ぎ、非情すぎた。菜月は目の前の知らない胸に飛び込み、何度もしゃくりあげた。その度に小魚のように撥ねる体を、颯は腕を巻いて受け止める。

「なくしちゃった……！」

嗚咽と共に吐き出された、ばらばらになった心の欠片。

「全部なくしちゃった……父さんも母さんも、家も、友達も、皆々！父さんと母さんは僕を預けて外国へ行つて、家は誰か知らない人のものになつて、友達はどうもぼくのことを忘れて……いやだよ、こんな奴！独りは嫌だ！何もこの手はないのは嫌だ！どうして皆どこかへ行つてしまふの？どうして大切なものはすぐに遠くなつちゃうの？なんで？なんで、ぼくだけ、こんな目に……っ?!」「独りじゃないよ」

颯は言つた。茜色の空には、雲が染物に付着した埃のように点在し、彼方の地平では、太陽と地が手を結び合つて溶け合つている。はるか頭上の韓紅の頂で、カラスたちが啼いている。

「これからは僕と一緒に暮らすんだ。何があつても僕が傍にいる。その手に何も無いときは、僕がその中におさまるよ。僕はこれから君のものだ」

嗚咽が止まつた。抱きしめた頭は熱い。涙の熱を吸収したのだから。颯は動かなくなつた菜月の背を優しくさすつた。

「でもね、菜月君、手の中のものを無くしたくなければ、強くならなければいけないんだよ。強くなつて、自分のものを守れるようになるなきゃ。そうすれば、僕はずっと君のものである。僕の心はずっと菜月君のものだよ……強くなるって、約束できるかい？」

菜月の濡れた瞳は驚きと喜びとで見開かれ、その手は颯の狩衣をきつく握つていた。まるで、たつた今得たものを失うまいとするように。菜月はすぐに大きく頷いた。颯は微笑む。

「いい子だね。じゃあ、家に帰ろうか、ナツ」

うん、と元気よく叫んで颯の手を取つた。そして、二人同時に駆

け出した。帰るべき場所となった所へ。数年が経った今も、あの時の興奮は忘れてはいない。颯を失いたくないという気持ちは年を重ねる毎に一層強くなった。颯を失わないために、剣道を始めた。只、夢中で竹刀を振るった。颯の微笑みと、褒め言葉が只管ひたすらに欲しくて。しかし、今は……

「酒本菜月君」

過去の幻影が消えた。菜月ははっとした。落合が前に出るよう盛んに喚きたてている。壇上の風間校長と、その手に握られた表彰状を見て、都大会優勝の表彰だと悟った。行きたくなかった。人前に立ちたい気分でない。それでも立ち上がった背中を、落合が強く押す。

「おめでとーございます、酒本君」

菜月は校長と目も合わせずに、今年何枚目かの表彰状を受け取った。割れるような拍手が体育館いっぱいに響き、蛍光灯が震えている。ふと落としたその目に、笑っている落合と来夏が見えた。剣道部の仲間たちが騒いでいる。クリスとノアも嬉しそうだ。それから、生徒会長の偉そうな手の叩き方、荔枝の上品な拍手と、この大音響にも反応しない陽。勇気を持ってその隣を見た。

颯は拍手をしていなかった。顔を上げてすらもいなかった。相変わらず手を動かし、事務的にノートに記録をとり続けている。颯はこの手から離れてしまった。

その日以来、菜月は何度も颯の姿を見た。どれも遠くから、こっそりと、まるで一度も話したことのない人の様子を窺うように。

颯は元気で楽しそうだった。沢山の生徒に慕われ、教師たちにも信頼され、生徒会長の慎にも右腕を任されていた。剣道部の帰りにふと生徒会室を見上げると、時々颯が窓から遠くを見つめていることがあった。何かを考えているのだろう。昔だったら、後ろから

抱き着いて、自分から注意を逸らしたことを責めることができたのに。今はその視界に入ることすら、難しく、凶々しいように感じるのだ。

「嘘つき」

そう呟く外に何もできなかった。なるほど、その言葉は真実だ。颯は何があっても傍にいたと言ったのだから。しかし、幼い頃の約束が、今更何の意味を持つ。学園に入学して、二人の距離はぐんと離れてしまった。二人はここで大人になってしまったのだ。大人は学ばなければならない。誰に教えられなくとも、人の心の無常なことや、年月による風化作用を。

そういえば、自分を置いていった父と母も、よくこんな言葉を使った。「菜月は大人だから」。無責任な言葉だ。わずか六歳の少年が、どんな理由ならば、両親のいないことに耐えられるというのか。ちよつと考えればすぐに分かることだ。わざとそういったことを省いたのだろうか。何の悔いも躊躇いもなく、育児より仕事に専念できるように。きっとそうなのであろう。相手が大人なら簡単だもの。大人には自分の欲しいものを好きだけ求められる。例えば、分別とか、良識とか、思慮とか、常識とか。それが自分に欠けていたとしても。

颯もそれらを自分に求めているのだろう。束縛がどんなに愚かなことか、言わずとも、それらを以って悟ってもらいたいのだろう。それでも、菜月の子供は心の中で泣きながら訴え続けている。「いやだよ、こんなの！」と。「何もこの手にはないのは嫌だ！」と。嗚呼、もうこの泣き声が、颯に聞こえることはないのか。颯が友人たちと語らう傍で、柱に隠れて泣いてみても、颯は笑っていた。

大人になれば、一度手に入れたものをまた手放さなければならぬ。自分は幼い頃から何度も「大人」であることを求められ続け、様々なものを失った。そして、今、再び成長を促されて、世界で一番愛したものを失おうとしている。

大人なんて嫌だ

「ごらー、落合、いい加減に前を向きなさい」

「いつまでそんな心の狭いこといつてるんですか、先生。だから、婚期を逃すんですよ」

「あつ、そつだ。落合、ジャクソン先生があんたのこと受け持ちたいって……」

「ごめんなさい、みちるちゃん、許してください」

落合と英語教師のやりとりも、壁一つ隔てた部屋から聞いているようだ。菜月は不機嫌に頬杖をつき、教科書を机の隅に押しやった。頭ががんと痛み、体内は暑いが肌寒く、手の平は真っ青で、緑の細かな血管が浮き出て見える。今朝からずっとこの調子だった。

二時間は持つてみたがもう限界だ。菜月は立ち上がった。落合を黙らせ、やっと教科書に目を戻したばかりの鳥居みちる先生は、またもや本から顔を逸らす羽目になった。

「酒本、どうした？」

「ちよつと気持ち悪いんで、保健室行つてきます……」

「あー、確かに顔色悪いね。うん、行つてらっしゃい。あんまり無理すんじゃないわよ。剣道頑張りすぎじゃない？」

菜月は返事を曖昧に誤魔化した。剣道なんて手につかないのが本当のところだった。鉛のような足を引き摺って教室を出る。閉じた扉越しに落合と鳥居先生の会話が聞こえる。

「落合、酒本最近どうよ？」

「そついや、あんま元気ないかも……ぼーつとしてるのはいつものことだけど、食事もろくにとんねえし」

何だ、ばれてたんだ。菜月は内心小さく舌を出した。

動くのはあまり体によくはないようだ。階段から足を一段落とす度、視界が乱れ、膝から力が抜けた。教室で寝ている方がよかつたかもしれない。やつと二階まで階段を下つた後で、菜月は急に喉の渴きを覚えた。水道はすぐにあるが、この時期はまだ水が温いので、飲み水としては相応しくない。給水機まで行こう。冷たい水が、むか

つくこの胃によいのかは分からないけど。嫌な汗を額に滲ませ、壁に手を這わせてふらふらと進んでいると、空き教室から笑い声がした。すぐに分かった。颯の声だ。もう一つの声は誰だろう。好奇心が体の不調に打ち勝った。菜月は教室をそつと覗いてみた。他に誰もいない教室で、机の上に腰掛け、颯と笑いあっているのはクリスだ。いつの間にあの二人は仲良くなったのか。それだけでも、菜月には十分な衝撃だった。

「悪いね。図書館で調べものの途中だったのに、急に連れ出したりして。それで、結局ダンスの背景の方は頼んでいいのかな？」

「はい。でも、本当に俺なんかでいいんですか？」

「何言ってるのさ。美術部に断られたときにはどうしようかと思っただけど、今回は幸運だったな。天才画家に背景を描いてもらえるなんて、こんなチャンスは二度と巡ってこないかもしれない」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

次回のダンス大会の背景を頼んでいるのだろう。そういえば、颯率いるダンス部も、関東大会への出場が決まったと聞いた。絵では一生敵うはずがない。菜月はワイシャツの襟元をきつく握り締めた。

「ところで、有瀬とはどう？生徒総会ときには、仲よさそうで安心したよ。僕の話をお聴かないの？どうかと思っただけどね」

「あつ、そういえば……すみません」

「まさか、冗談だって。僕は君の味方だよ？それしきのこと怒らないさ」

僕は君の味方　僕は君のもの。

眩暈がする。もうだめだ。耐えられない。大切なものを失うばかりか、誰かに奪われるのを見なくてはならないなんて。世界から自分が隔絶させてしまったような感覚がする。菜月の五感、この世とは別の世界のものを認識していた。暗く冷たい影の世界の声、暗闇、空気……

菜月は駆け出した。

第三話 菜の花の揺れる頃・後編

立ち止まったのは、急激に吐き気を催したからだだった。落とした膝を抱きとめた草の感覚で、自分が中庭にいるのだとその時初めて気付いた。手をつき、膝をつき、草むらに顔を突き出した瞬間、喉元までこみあげてきたものは、ゆっくりと下っていった。胸がひりひりと痛む。胃が振れそうだ。涙でぼやけた視界を拭い、林檎の木に背中を預ける。霞んだ意識の中で浮かぶの、悲しみ、怒り、嫉妬、自嘲、諦め。またこういったものの中で幾つかが混じりあったものが、絶えず菜月の心を苛め続けた。菜月は途方に暮れていた。どうすればいいのか、これからどうしたいのか、全く分からなかった。ただ、颯を求め、恋い慕う気持ち、これ以上になんぐらい強まっているのだけは知っていた。傍にいてほしい、また自分に向かつて笑ってほしい、手を繋いでほしい、慰めてほしい。一度の正直な言葉で失望するのなら、いつそ百度の嘘の言葉で騙しつくしてほしい。「僕はずっと傍にいるから」、「ずっとナツの味方だから」例え、この世界全てに嘲笑われたとしても。

「酒本様？」

突然、振ってきた声に、菜月はびっくりと身を震わせた。振り返って仰げば、何かを包んだ白いハンカチを持った有瀬ノアが、幹から小鳥のような顔をのぞかせていた。

今、菜月は人生で最も一人でいたい時間であったはずだ。だが、不思議と不快感はしなかった。子供ように無垢な灰色の目でじつとこちらを見つめてくるノアに、何故だか親しみさえ感じた。ノアは瞬きしても、同じ目のままだった。

「どうかされました？」

「別に何でもない。授業さぼってきただけ。だるかったから」

「不良ですね」

ノアは口元に手を充ててくすくすと笑う。

「そつちだつて人のこと言えないよ」

「先生がお休みだつたんです。校長先生が代理をされることになつてたんですけど、教室に入るなり『今日は自習にしましょう』って仰つたまま、どこかへ消えてしまつて。こんな良い天気なのに、室内にいるのも何ですから、外に出ようと思つて」

三宿学園高等部では、英語や数学などの教科は、少人数制をとつて教えている。英語は全部で三クラスあり、出来ない生徒は基礎クラス、並に出来る生徒は標準クラス、帰国子女や英語を母国語とする生徒は発展クラス、と分けられていた。菜月と落合はもちろん標準クラスであり、ノアは基礎クラス、クリス、来夏は発展クラスである。先ほどクリスがぶらついていたのを見る限り、今日は、基礎クラス以外は自習だつたようだ。颯と話していたクリスの横顔が頭を過ぎり、菜月は微かに顔を顰めた。

「あの、よろしかつたらお茶にしませんか？僕、水筒に紅茶を淹れてきたんです。それに、クッキーとチョコレートもありますし。いかがですか？」

クリスの幻影はすぐに消えうせた。

「もちろん！」

菜月はやつと笑顔を浮かべた。

二人は、林檎の木の下からもつと中庭の中央へと移動し、噴水の近くの石造りのベンチに腰掛けた。ノアは、小さなバッグの中から、水筒や紙コップや菓子を詰めた缶などを取り出した。魔法瓶から注がれたハーブティーは、ミントのような清涼しい香りがした。それから、菜月は菓子をつまんだ。ココアのはる苦いアイスボックスクッキー、蕩けるようなラングドシャ、バターサンドクッキーにダックワーズ、ハート型のトリュフまで、遠慮なく何でも食べた。ノアは紅茶ばかり口にして、菓子は菜月の口に含まれるがままにしていた。缶を振つても何の音もなくなつた頃、菜月はふと気になつて聞いた。

「ところで、さつきはあんな草むらで何してたの？」

「ああ、拾ってたんです……蝉の抜け殻を」

ノアは白いハンカチの結び目を解き、琥珀色の美しい残骸を一つ取り出して見せた。菜月は興味津々で覗き込む。

「今時珍しいね」

「そんなことはありませんよ。探せば沢山見つかります。この学園にはいっぱいあるんですよ。だから、僕は毎年拾って一つずつ土に埋めておくんです」

「お墓じゃないんだから」

「いいえ、お墓ですよ。抜け殻の中にも確かに生命が宿っていたんですから。死骸と何ら変わりはありません」

言いながら、微笑みながら、ノアは指で抜け殻を転がしている。蝉が成虫になるために脱ぎ捨てた衣。今、その中は虚ろであるが、嘗ては確かに薄い透明な羽と、白く柔らかな身を守っていたもの。ノアごと見つめているうちに、菜月は段々気分が悪くなってきた。だが、同時にすっかり魅入ってもいた。誰かの捨てた過去を弄ぶノア 否、ノアじゃない。隣に座っているのはもつと背が高くて、髪は黒くて、尼そぎで……

「見てご覧、ナツ。これは大人になるために蝉が捨てた代償だよ。蝉はすすんでこれを脱ぎ捨てたよ。どうして君には出来ないの？」
ハンカチの端がぱさりと落ちた。白いハンカチの中、積み上げられていたのは、抜け殻の山、大人たちが喜んで捨てた大人になるための代償だった。息さえも、思考さえもしない。彼らは静かに横たわり、今は土の床に眠ることだけを望んでいる。

胸の中で、頭の中で、何か撃ち抜かれ、暗黒の鮮血が目の前を覆い尽くした。

「……貧血か何かですね。最近食事をちゃんと摂っていませんよ。ようですよ。目が覚めたら、何か栄養のあるものを食べさせましょ

う

「そうですか。しかし、有瀬が見つけてくれて助かったわ。校長先生の逃亡も、時々が良いことをするみたいね」

「私は何とも言えません。校長捜索隊の方が、毎日誰かしらお見えになるんですよ」

「あら、そうだったわ。全くご苦労様」

女性同士が笑いあう声がある。片方は若く、片方はもう少し年上だ。まだ目を開かないうちから、菜月はその片方の正体を当てることができた。薄目で見れば、やはり野瀬先生だ。野瀬先生の前に座り、コーヒーを啜っている若い白衣の女性は、養護教諭の里見沙織先生である。どうやら保健室のベッドに寝かされているようだ。里見先生が先に菜月が目を覚ましたことに気付いた。

「酒本君、大丈夫？」

菜月は小さく頷いた。

「どこか痛いところとか、気分悪いとか、そういうのはない？」

様々な質問をしたり、体を検めたりした結果、里見先生は、菜月に特に悪いところはないと判断した。先生が野瀬先生にそれを告げると、唇をぴんと張って腕を組んで待っていた野瀬先生も、やっと口元を緩めた。

「酒本、無理はしないようにね。食事もきちんとはらなきゃ。色々心配事はあるかもしれないけど、体の調子がよくないと心も益々不安定になるよ。何かあったら私たちがいるし、あなたには友達もいるんだから、ちゃんと相談しなさい。鳥居先生もとっても心配してたから、明日にでも元気な顔見せなさいね」

「はい……」

菜月は虚ろな声で返事をした。

「じゃあ、里見先生、後お願いしますね。私、授業がまだ残ってるから」

「ええ、お任せください」

野瀬先生は里見先生に一礼すると、保健室を出ていった。里見先

生は、野瀬先生を出口まで見送った後、グラスにスポーツ飲料の粉末を溶かして持ってきた。菜月は言われた通りにそれを飲み干し、里見先生の話に耳を傾けた。

「酒本君は階段の踊り場に倒れてたの。有瀬君が見つけて知らせてくれたんだけどね。階段から落ちたのかと思っただわ。野瀬先生なんて真っ青になってたわよ……あつ、これ、秘密ね。先生つて意外と照れ屋だから」

里見先生は微笑した。先生の話は何だか可笑しい^{おか}。でも、一体何が可笑しいのだろう。頭に上手く血が巡っていないようだ。

「まあ、貧血だと分かってほっとしたけど。今日は野瀬先生も仰つてた通り、早く帰って休むことね。寮の方にお粥かうどんか出すように言っておくから、しっかり食べること。そして、八時には寝る。今月は貧血の生徒が六人も出たのよねー。和泉先生が『食生活見直しキャンペーン』を再開する日も近いかもなあ……あつ、そうだ。見舞い客が一人いたわよ。生徒会書記の榊原君」

菜月ははっと顔を上げた。里見先生はグラスをすすぐのに集中して、ちらともこちらを見ていない。

颯が、一体どうして……？僕なんてどうでもいいんじゃないかったのか。僕を疎んでいるんじゃないか。一体何のつもりなんだ？迷宮の紫色はますます深まるばかりで、頭痛によつて薄まるその色は、いつしかこちらを咎めるように見つめる颯の瞳の色と変わっていった。枕に倒れて菜月ははっとした。里見先生がベッド脇に駆けつけていた。

「酒本君、本当に大丈夫？」

「うーん、あの、ちょっと頭がぼーっとして……」

菜月は、許可なく額に充てられた手も気にせず、素直に答えた。「もう少し休んでなさい。疲れが溜まっているのよ、きつと。私はちょっとここを空けるけど構わない？」

「はい」

「電気は消しとくから。あつ、ついでに鞆も取ってくるわね。教室

にある？」

「はい」

「分かった。じゃあ、おやすみ」

間もなく、ベッドを囲むカーテンが閉じられ、白くもった蛍光灯は消えた。窓から差し込む光で部屋の中は明るいが、菜月は少しほっとした。蛍光灯の白ほど無遠慮な輝きはない。しかし、意識はすぐに元の混沌へと戻り、渦巻く謎に翻弄される。目を瞑って思い出そうとする、教室を出た後のこと。自分は中庭へ出て誰かと出会った。記憶の中のその姿は、ぼんやりと靄がかって、誰と確認することはできない。しかし、それでもやはり存在した彼は、大人たちが苦悶のうちに喜んで脱ぎ捨てた「子供」の骸を、菜月に示し、颯に代わって菜月を非難した。うずたかく積み上げられた琥珀色の死肉が、優しい無関心な颯の眼差しが、頭の中にフラッシュバックする

菜月は頭を垂れた。両の腕に、器いっぱいに満ち溢れた苦悩を抱いて。颯は自分の愚かな束縛から逃げたがっているのだ。自分が過去に固執し続ける限り、颯は狭い抜け殻の中から飛び立つことができないのである。否、もしかすると、彼はもう逃げ出したのかもしれない。自分は、只、手に残った彼の手の感触を彼と見なしているだけのもかもしれない。嗚呼、間違いない。きつとそうなのだ。過去の蔦に絡みつかれ、もろどの手も足も動かせない。今更もがいても、一層肌に痣を刺すばかりだ。誰か救ってくれないのか。見上げるだけの首は痛いのに。誰か、この声に、蔦に覆われても空に伸ばしたこの腕に、気付いてくれるものはいないのだろうか。

「酒本！」

突如、強く手を握られて、菜月は目を開けた。指の隙間から、金色の髪と憎らしいほどに澄んだ青い瞳、焦りと困惑で歪んだ白い顔が覗けた。こんなにも稀なものを持っている者は、菜月の知り合いの中には一人しかいない。石崎・エーリアル・クリス　自分を苦しめる蔦の一本。菜月は、漸く指を落としてクリスの顔を直視する

のにも、いくらかの悪意を込めずにはいらなかった。だが、その影はクリスの胸に映らない。

「大丈夫？ごめん、俺もたった今有瀬に話を聞いたばかりで……気持ち悪い？えっと、どこかに桶とかないのかなあ」

クリスはベッドの下を覗き込み、そこに押し込まれた物品の多さに暫し啞然とした後に、漁り始めた。愚弄しているのだろうか。自らは一番の毒となっていて何が故分からないのだろう。菜月は見えぬように唇を噛み締める。

「別に平気」

飛び出た言葉は自分でも驚くほど冷淡だった。

「ほんとかよ？他に悪いところは？」

「別がない。あつたとしても石崎に何が出来るの？」

「えっ、そりゃ色々できるさ。物によってだけど。叔父さんが風邪のときに看病したことだつてあるし……」

「そんなの聞いてないし、僕は風邪じゃない。もうほつといてよ。調子は大分良くなったから、僕は部活に行く。里見先生に言っておいて」

「えっ、あつ、ちよつと、酒本……！」

菜月はベッドを素早く降りると、手首を掴んだクリスの手を振り払い、振り返りもせず保健室を出て行った。追おうとしたクリスを、純白のカーテンが波のように押し寄せて邪魔をした。扉の閉まる、バン！というものすごい音がする。クリスは急いでカーテンを掻き分けて出てみたが、靴音の段々遠ざかるのを、ただ耳で認めるばかりであった。

「酒本……」

不安が胸を過ぎる。どうしたのだろう。あんなに感情を剥き出しにするのは、菜月らしくない。やはりまだ具合が悪いのだろうか。ならば、部活なんて行かせずに早く休ませなければ。動き出そうとしたクリスを、背後から放たれた一つの声が止める。

「無駄だよ」

クリスは背をくりりと返した。先ほどまで菜月が寝ていたベッドの上に、一人の少年が腰掛けて肩膝を抱えている。カーテンは風に煽られ、彼の姿を見せたり隠したりして遊んでいる。玉鬘に螢を投げ掛け、螢兵部卿宮を惑わせた、源氏の君のように。其は光のない故に隠す。

「無駄だよ。今、君が彼に何を言おうと、彼はそれを拒絶する。君は待つことしかできない」

「そんなこと言っただって、ほっとけないよ！酒本は具合が悪いのに無理してるんだ。誰かが止めてあげないと……！」

「それは君の役目じゃない」

クリスの言葉は静かに遮られた。窓の外を鳩の大群が横切り、はためくカーテンに影を投げ掛けている。

「君は既に役目を果たし終えた。もう何もしなくていい……ねえ、クリス様、菜の花は今もそよいでいると思いますか？」

ふと風が凪いだ。目を丸くするクリスに向けて、ベッドの傍らに立ったノアは、微笑みながら、一茎の菜の花を差し伸べていた。

「慎、まだ怒ってるの？」

窓枠に腰掛けて足を組み、腿に肘をつきながら、颯はかりかりした背中に声をかけた。怒りの生徒会長は、一瞬びたりと動きを止めた後、恐ろしい表情で振り返る。眉間に青筋が立ち、唇から普段の余裕の微笑は消え、青い瞳に向けて赤く細い線が走っている。歪んだ口が言った。

「ああっ？」

「やっぱり怒ってるんだ。怖い、怖い」

言いつつ颯は楽しんでいるような表情だ。

「てめえ、先週出来てるはずの文化祭の予算書が影も見当たらないのに浮かれてられるとも思うのか？」

「ハハ、ごめんごめん。配慮が足りなかったよ」

「……川崎の野郎は？」

「さあ。部活じゃないかな？もしくは荔枝とデート」

「あいつら人をコケにしゃがって……！」

「微笑ましくていいじゃない」

「どこが?!」

慎は、今まで筆を進めていた原稿用紙を二人に見立てたつもりか、右手でくしゃくしゃに丸めてゴミ箱に放り込んだ。見事に紙くずを籠の中に収めた慎を、颯は拍手と口笛で称える。

「さっすが」

再び慎が作業に戻ったのを確認して、彼は窓の外を見下ろした。基本は緑の絨毯だ。その上に、花の赤、黄、紫、校舎と塔の白、湧き上がる噴水の青が配置され、午後の日が陰影と煌きと濃淡とを浮き出している。この風景だけは、何度見ても見飽きることはない。さながら一つの絵画である。数年前に美術館で見た絵を思い出した。高い塔の窓から見下ろした景色を描いたものだった。画面の右下に後ろ姿の少年がいて、颯は絵の前に立ち尽くしながら、この少年の感激に思いを巡らせていた。出来るものなら少年と代わりたいたいと思っただ。今、こうして学園を見下ろす心地は、恐らくあの少年のそれと似ているのではないかと思う。ところで、絵の作者は誰だったか。考えて颯は微かに眉根を寄せた。

「何考えてやがる？」

二枚目の原稿用紙を破きながら、慎が尋ねた。

「いや、別に大したことは」

「あのガキのことか？」

「あのガキって？」

颯は慎の背を見つめて訊き返した。太陽が二人の左手の一点を輝かせている。薬指に嵌められたクリスタルの指輪、生徒会の証であった。慎は、大儀そうにこめかみの辺りに指輪を充て、原稿用紙に筆を滑らせた後に、やっと答えた。

「あいつだ。あの、画家のガキだ。石崎・エーリアル・何たらとか

いう……」

「クリス君？」

颯は微かに笑った。

「まあ、当たり前といえば当たり前かな」

「随分気に入ってるみたいじゃねえか」

「それほどでもないよ。可愛いから世話してるだけさ」

「本命がいるのか？」

「それは秘密」

「フン、白々しいことしやがって」

慎から顔を背けるようにして席に着き、颯は椅子を引いて机の抽斗^{だし}からノートを取り出した。先日 of 生徒総会のこと、また書き足していないことが幾つかあった。総会のことを書いたページには目印のクリップを挟んでいたが、ほんの冒険心でばらばらとページを捲ってみると、在るページに菜の花の押し花を見つけた。花卉の端は茶色に侵され、葉には皺が寄り、両者は窮屈そうにセロハンテープのカバーを被されていた。思わず溜息が漏れる。全く人間とは何と残酷なものだろうと。

颯はページ毎押し花を切り取った。普段ノートその他紙類の扱いには十分気をつけている颯であるから、ページを破りとするその音に、慎は怪訝な表情を浮かべて筆を止めた。颯は切り取ったページを持つたまま、屑籠ではなく窓辺によると、風に紙切れ一枚を預けて飛ばした。

「おい」

慎が言う。

「何？」

颯は小さくなりゆく白い長方形から目を離さないまま訊いた。遠いあの日を思い出す。菜の花の揺れていた、あの日の夕暮れ。小さな愛しい生き物の泣き声を聞いて家を飛び出した。斜陽に赤く染められ、やがて濡らされた彼の頬、抱きしめた小さな体の温もり。もう日は傾きかけている。

「何のつもりだ？」

狩衣の裾に取り付いた柔らかかな手、自分を見れば忽ち笑った小振りな口元、次々に瞼の裏に浮かんでは消えていく。彼は今頃苦しんでいるだろう。そうなるようにしたのだから。

一人で小さな殻の中から飛び出てしまった。自由に飛びかう自分の姿を、彼がいかなる苦痛を以って見つめていたか、自分は知っている。知っていて見せ付けた。そこにあるのは彼への思いやりでも何でも無い。彼が殻から出てくることなど、彼と共に舞うことなど、少しも望んではない。ただ、彼の目を自分に縛りつけおきたい

ほぼ無意識の中ではあったが、菜月が颯を追い続けるのと同様に、颯もやはり菜月に固執していた。王子様はお姫様がいなければ成り立たないし、お姫様は王子様がいなければ成り立たないのだから。

颯は顔を突き出した。風にさらわれていった押し花の、既に飛び散ってしまった香を嗅ごうとして。

「そろそろ菜の花が揺れるころかなと思ってさ」

昇降口を出た菜月は、いつもの習慣で思わず校舎を見上げた。生徒会室の灯りはまだついていて、人影はない。最終下校時刻を知らせる鐘が鳴るまで、あと五分かそこらである。もう颯も帰るのだろうか。ここで待っていたら会えないだろうか。切ない期待が、線香花火のようにちろちろと火を飛ばし、胸を焦がす。だが、やがて花火も燃え尽きた。会ったところでどうなるというのだろうか。颯は菜月から離れたがっているのだ。菜月を見かけたところで、親しく声をかけてくるはずがない。菜月は顔を俯けた。火傷が痛んだ。

諦めた菜月の足を停めたのは、急な夕立だった。ほんの二、三步進んだところで、突然雷鳴が轟いた。菜月は飛び上がった。雷は嫌いだ。昔、颯の家に預けられる前に、雷の所為で近所の家が火事になったのを見たことがある。トラウマとまではいかないが、一生癒

えない傷として、菜月の心に残っていた。再度空が閃き、菜月は反射的に建物の中に飛び込んだ。その直後の雨だった。あと五分以内に校門を潜り出なければならぬのに、こんなことってあるだろうか。菜月は呆然と立ち尽くしていた。

待っている間に最後の鐘が鳴った。菜月は半ば投げやりな気持ちになって、床に腰をおろした。どうにでもなれ。雷の音だけが聞こえないように耳を塞ぎ、菜月は考え事に耽ることにした。最初は次の大会のことを考えようとしたが、竹刀も防具もすぐに尼削ぎの少年に姿を変えてしまった。榊原颯、一刻も早く忘れなくてはならない存在。忘却こそが、過去の蔦を断ち切る刃であった。だが、その刃は手に取ろうとする者の手まで傷つけてしまう。颯を忘れることなんて出来ない。でも、忘れなければならない。何故？颯は最早こちらを見ていないからだ。然し、想い続けることだけは自由ではないか？駄目だ。想えば期待してしまう。期待するだけなら良いではないか？否、叶わぬ期待などしても傷つくだけだ。傷つくのが怖いのか？忘却を手にしても傷つく、手にとらなくても傷つく。どうしたって傷つかずにはいられないの？嗚呼、いつそ過去に閉じ籠っていたい。何故時はあの瞬間に静止してくれなかったのか。抱きしめられたままで、揺れる菜の花を見つめたままで、あの日の夕方に足を留めていればよかった

「どうして泣いてるの？」

耳元で囁かれた声に、菜月の体と心の全てが停止した。

「どうして泣いてるの？」

吐き出した息が震える。手を後ろに伸ばし、柔らかな髪を、なだらかな肩を、腕を、指の細くて大きな手を確かめる。あの日とは少し違うけれども、相変わらず、優しい愛おしい感触。

「泣いてなんか……」

あの日のように言えなかった。颯に嘘は吐けなかった。

「颯のバカ！」

菜月は颯の胸に顔を押し当て、声を上げて泣いた。その勢いは、颯も尻餅をついて呆気にとられるほどであったが、ぎこちなく笑いなおしたあとは、見つめなおしたばかりの愛情でその腕を菜月の肩に回し、強く抱きしめた。齡の割に幼すぎると思った。この少年は、成長を拒み続けてきたのかもしれない。

「こら、ナツ、もう下校時刻を過ぎてるんだから帰らなきゃ。先生に見つかったら罰則だよ」

「だって、傘が……」

漸く涙も収まってきた菜月は、しゃくりあげながら意味のない言い訳をした。

「傘なら僕が持つてるから。もう雨も小降りになってきてるし。行こう」

菜月をそつと体から話すと、颯は鞆から携帯用の折り畳み傘を取り出した。二人が入るのには少し小さすぎる気もしたが、肩や鞆が濡れるぐらいは構わないだろう。昇降口のガラス戸を開け、傘を広げた颯であったが、後ろからその傘を奪う者があった。

「僕が持つ」

表情もなく菜月は言った。泣いたことを今更後悔しているのだろうか。言葉まで素っ気無い。

「あのね、ナツ、身長差というものを考慮に入れて……」

「どっちが持つたって身重差は変わらないもん」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

菜月は無理に颯の手を引っ張り、千鳥模様の傘の中に二人の体を押し込んだ。颯は慌てて身を屈めた。間一髪で傘に頭をぶつけるところであった。

二人は黙って歩いた。曲げた腰は痛かったが、菜月は傘からも颯の右手からも手を離そうとしない。頭のすぐ上で、雨が傘に落ちる音が聞こえる。雨粒は軽快に不規則なリズムを刻みながら、二人の声なき会話を盛り立てていた。

「……怖かった」

雨音かと聞き紛うほどの声で、ぽつんと菜月は呟いた。

「もう二度と颯と一緒にいられないのかと思った。颯がどんどん遠くに行つて、僕のこと嫌いになつて」

「バカだね」

颯は笑う。

「そんなことするはずないじゃない。僕は君のものなんだから」

それに対して、菜月は何も言わなかった。足を速め、半開きになっている校門へと急いだ。背を屈めている颯は、追いつくので精一杯だった。待つてと呼びかけても聞き入れられない。一体どうしたというのだろう。翻弄するつもりが、此方が翻弄されている気がする。照れ隠しのつもりだろうか。それなら良いのだが　同じ傘の下、背の違う二人は、片方は無表情の下に感情を隠したまま、片方は戸惑いを口元に隠しきれないまま、校門を出た。今度は、菜月は急に止まったので、颯も足にブレーキをかけなければならなかった。どうしたのかと横目で様子を窺ってみると、くるりと菜月がこちらを向いた。薄い唇が行った。

「僕のことバカにしてるでしょ？」

颯は返答に迷った。果たして、さっきの「バカだね」に対してなのか、これまでの態度に対してなのか。

「颯が僕のこと弄んでること、分かった。でもやっぱり颯は僕のものだから」

「ナツ、何を……」

菜月は傘を足元に捨てた。颯が驚いて背を正すまでの一瞬の間だった。菜月は素早く爪先立ちし、黒い艶やかな前髪に覆われた颯の額に、素早く唇を落とした。

颯は声も出なかった。じつと下から見上げられるうちに、眼鏡のパッドの辺りに段々と熱が籠り、遂には菜月の顔さえ正視できないまでになってしまった。こんなはずではなかったのに。颯は胸中ぼやく。雨は止んでいる。だが、菜月は千鳥模様の傘を拾うと、自分の身だけに被せてたった一人で帰路を歩み出した。

同時刻、白のアトリエにて

ノアの淹れたココアのマグカップを両手に持て余していたクリスは、何の衝動に駆られてか、台所で此方に背中を向けているノアに言った。

「俺は、まだ菜の花はそよいだと思う」

ノアは振り返った。その表情には、どこか裏切られたような色が見られたが、クリスは図書館から借りてきたばかりの画集に既に意識を奪われていた。

ノアの手から、菜の花の押し花と蝉の抜け殻が落ちた。

第四話 夏は来ぬ・前編（前書き）

第四話主要登場人物

・関本来夏

クリスのクラスメイト。日英のハーフ。容姿端麗な特待生で、クラス中が一目置く存在。他の部活の助っ人をよく頼まれる。

・秋元真央

一年生。サッカー部のマネージャー。日仏のクォーターで、祖父がフランス人。明るく屈託のない性格だが、病を患っている。

・アニエス・ゾラ…フランス人。真央のいとこ。二十台半ばの女性。

・大河内孝則…サッカー部主将。寡黙な少年。2年B組の生徒。

第四話 夏は来ぬ・前編

一歩足を運ぶごとに視界が揺れる。

思わず大きく息を吐けば、その音を聞き漏らすことなく、従姉いとこは素早く振り返る。哀れな未亡人の瞳に、もう既に悲しみと影で満たされたアーモンド型の琥珀の器に、新たな不安が注がれるのを見る時、少年は、これ以上なく苦しく悲しくて、胸も張り裂けそうになるのであった。しかし、決して心を潮風に晒してはいけない。頭上の空と足下の海は快活を示して青く、目的の城は、雲に代わってあんなにも白いのだから。

「マオ」

未亡人の荒れた唇が、少年の名前を継ぐ。

「だいじょぶ？少し、休む？」

「ううん、平気。どうせ後二十分も歩けば着くから。それくらい大丈夫だよ」

「ごめんなさい。私、調べなかったから、バス、ちゃんと……」
「アニエス姉さんは悪くないよ。それに、僕、バスだとすぐに酔っちゃうし。入学式の時も酔っちゃったんだ。ここは景色も良いから、歩いてる方が気持ちいいよ」

未亡人は腑に落ちない顔に益々後悔と憐憫の色を強めたが、マオこと秋元真央あきもとまおは、笑顔と小さな手で、従姉の苦痛を押しつけた。骨に雪を纏ったような未亡人アニエスの手は、少年の優しさによって温められた。西洋の未亡人は、零れかけた涙を静かにしまいこむと、再びゆっくりとした足取りで進み始めた。傷ついたこの白い鳥を、誰か救ってはくれまいか　真央は自身の痛みも忘れて願うのだった。

真央はアスファルトのグレイから顔を上げる。きつと頭上の城に、懐かしの学園に、手を差し伸べてくれる人がいるはずだ。もがれた羽を寄せ集めて寄り添う、声なき二羽の小鳥たちに。

希望が真央を強く立たせた。

「ラーイ、全く朝から羨ましいな！」

「……落合、全く朝から気色悪いぞ」

満面の笑みを浮かべ、軽やかな足取りで席に向かってきた落合に、来夏が挨拶代わりに投げつけたのがこの言葉だった。もちろん、笑みは、落合の整った顔のパーツの配置を、決して崩してはいないのだが。この笑顔が今まで何を運んできたかをよく覚えているから、来夏の口もつい冷淡になるのである。落合も慣れて気にせず続ける。

「今日は大河内からお声がかかったぞ。これだから優等生は。やっぱモテるよなあ。俺も少しは真面目に勉強するか」

「……要するに、サッカー部から助っ人の依頼が来たってことではないんだな？」

「分かっているならわざわざ興奮させた言い方するなって。つまんねえな」

「お前の言い方だと紛らわしいだけだろうが」

来夏は頭の後ろで手を組んだ。頭脳明晰、運動神経抜群、容姿端麗の三つを揃えるこの特待生にとって、今のような依頼は決して珍しくはない。寧ろ多すぎて困り果てているほどだ。彼にも一応弓道部がある。正式に所属している部活動を、疎かにする訳にもいかならからだ。大河内とは、隣のクラスのサッカー部部长だが、過去に一度だけ助っ人を頼まれたことがある。その時は、確かD組レギュラー室井が、いじめた鶏に報復されて全治二週間の怪我をしたのが原因であつたはずだが……

「今度はひよこだつて」

隣の菜月が本を閉じて言った。何故こちらの考えていたことが分かったのだろうか。まあ、彼なら隠れた超能力でも持っているもおかしくはない。

「はあっ？ひよこ？」

「そう。ひよこの前で目玉焼き作ったんだって。そしたら、ひよこの大群が追っかけてきて、逃げるときに足骨折」

「随分鳥に縁の深いやつだな……」

菜月は特に感想は述べず、読みかけの本を抱えたまま教室を出て行った。その後ろ姿を見送って、落合が来夏の耳元で囁く。

「あいつ、最近元気ないよな？」

「そうか？」

来夏は分からないとばかりに肩を竦めた。事実、来夏は何も知らなかった。菜月が胸に秘めた恋慕と、それ故に起こる焦燥と苦しみと葛藤を。

菜月と入れ替わりに、クリスが息を切らして教室に飛び込んできた。寝坊したかどうにかして、慌てて駆けてきたのだろう。ふと時計を見ると、もう時刻は授業の始まる五分前に差し掛かっていた。一時間目は英語で、教室移動がある。そろそろ行かなければ遅刻してしまう。来夏は荷物をまとめて立ち上がり、落合に手を振ると、クリスの元へ寄った。

「おい、石崎」

「あつ、おはよう、関本」

クリスは真っ赤にした顔を上げた。よっぽど急いだのか、金色の前髪が大分乱れている。来夏は手を伸ばしてそれを整えてやった。クリスは気付いて、自分でも慌てて髪に手を宛がうが、それ以上手直しする必要もなく、来夏に腕を止められた。

「あつ、ありがと」

「どういたしまして。それより、早くいかねえと遅刻するぞ。ジャクソン先生には何されるか分からねえからな」

「確かに……うん、行こう」

二人は小走りで二階のＬＬ教室へと向かって行った。落合は机で頬杖を付きながら、「つまんねえな」と愚痴を零す。取り合ってくれる者は一人もない。かのように見えた。

「つまんねえなんてことはないわよ、落合。あんた、夏休みの宿題の英語のレポート、出してないじゃない」

落合は表情を強張らせた。恐る恐る教卓の方を望めば、教材でいっぱいバッグを胸に抱え、今日も朝から意欲に燃えた鳥居先生、落合の呼ぶところのみちるちゃんが立っていた。別の手には採点し終えたらしいレポートの束も持っている。

「なんで、俺は……！」

落合は頭を抱えて悶えた。全くついていない。

クリス、来夏、菜月、落合の四人が、それぞれ別々の思いを胸に再会したのは、二時間目の体育の時間であった。体育教師で生活指導部 即ち落合の天敵 森先生は、訊いてもいない愛娘の近況を、髭面を蕩けさせ、十五分ばかりかけて報せてくれた後、やつと本題に移った。今回も前回に続いて走り高跳びだ。クリスは特にどうとも思わなかった。運動は苦手な訳ではない。もしかしたら、少し得意な部類に入るかもしれない。だが、例によって例の如く、来夏が一番を浚っていった。来夏は学年トップの成績を叩き出した後、馬が脚をならすかのように、軽々と横たわる棒の上を飛び越えていった。

「さすが、ライ」

言う落合も大差はない。現在のところ、学年四位の記録を出していた。

「さっ、俺もそろそろ本気出すかな」

「皆さん、すごいですね」

背後で言われて振り返ってみれば、ノアが空の鳥かごを手に微笑んでいた。ノアの成績は、残念ながら芳しいとはいえなかったが、本人はまるで気にしている様子がない。

「有瀬はもう跳ばないの？」

クリスの問いにノアは微笑んだまま頷いた。

「ええ。僕はもう十分ですから」

その時、二人の視線は同時に同じ方向へと移動した。中庭から此方へやってくる二人の人間の姿がある。先頭を歩くのは背の高い女性で、遠目にも西洋人であることが分かった。黄褐色の巻き毛を胸元まで垂らし、肌は透けるように白く、いつそ不健康に見えるほどであった。萌黄色もえぎのシヨールに骨ばった肩と肘の線が浮き出て見え、白い薄い生地せぢのワンピースの裾からは、黒いエナメルエナメルの靴で包まれた足が見え隠れしている。女性は喪に服す人のように地ばかりを見つめて進んでいたが、時折ふと後ろを向き、自分の足跡を辿る小柄な少年に気を遣っていた。栗色の丸い頭をしたその少年はかなり幼く見えた。三宿学園高等部の制服を着ていなければ、生徒の弟か、中等部の生徒かと思間違えただろう。女性の影を照らすよう、少年のエメラルドの光線はまっすぐで明るく、頼もしかった。女性が不安げにか細い手を差し伸べれば、少年はそれを強く握ってやっていた。一つの絵になりそうな光景だ。

「綺麗な女性むすめだなあ」

クリスは女性の美しさに感心して言った。

「小鳥は迷い込む。籠の中、密室にして永遠の迷宮へ」

クリスの目に当てられない内に、ノアの顔からは笑みが消え去っていた。ノアは呟いたときり小さな唇を嚙み、鉄製の鳥籠の扉の開け閉めを幾度も繰り返した。授業終了の鐘が鳴る頃、そして来夏が一層高くひらりと飛び上がったその瞬間、女性を慰める少年の双眸がこちらを向いたことに、来夏は気付かなかった。

「秋元真央？」

屋上のカフェテリアは、一般に余りその存在を知られていない。役員以外の生徒に使用する機会はなかったし、野次馬のいない方が役員たちも都合が良かった。望めるものは只空と塔のみ。西を見下ろせば、果てのない海が続いている。床は白、丸テーブルとそれを囲む五つの椅子も白であった。テーブルの中央を鉄の棒が刺し貫き、

その頂で風見鶏は暇を持て余している。颯がつと伸べた資料を、コーヒーカップを持っていない方の手で受け取りながら、慎は真つ先に目についた文字を読み上げた。

「そう。今流行りの天才少年歌手。体が弱いらしくて、七月からフランスに静養に行つてただけで、今日学園に戻つてきたみたいだよ。祖父がフランス人のようだね」

「フン、どいつもこいつも天才少年ばかりだな。この間の天才少年画家と云い」

「そついう慎もね」

颯は空になつたカップを満たして言つた。慎はそれきり興味なさそうに資料を押しやると、向かいの席でコーラを嗜む陽を睥睨へいげいの對象に置いた。先ほどからこうして予算案の提出を促しているが、陽は予算案のよの字ですら思い出さないらしい。只、氷が少ないのだけを恨めしそうに、暢気にグラスの中をストローで掻き回している。彼の隣の席には珍しく誰もいない。慎はどちらを眩くらこうかと迷つて、胸に膨らみつつある苛立ちより、思考の管に引っかかる小さな疑問の方を選んだ。

「おい、川崎、てめえの相棒はどうした？」

「知らね」

尋ねられても、陽はストローを回す手を止めようともしない。慎の額に浮かんだ青筋に気付いた颯は、コーヒーカップに角砂糖を急いで二つほど加えて代わりに答えた。

「秋元真央の従姉と話をしにいったみたいだよ。若手フランス人ピアニストのアニエス・ゾラ。昔はソロ活動も行つてたけど、今は秋元真央の伴奏者としてしか舞台に立つてない。婚約者を交通事故で失つて以来だ。荔枝とは、婚約者を失くす五ヶ月前に共演してるね」

「なるほど、客に相方を取られて拗ねてやがるのか」

「バーカ言え。そんなんで一々やつてられるかよ」

「油断禁物だよ、陽。アニエス・ゾラつてもものすごい美人なんだから。それに、荔枝、今度二人で一緒に食事するつて言つてたし」

「はっ？」

思わず顔を上げたのが運の尽き。慎に返された資料を胸に抱え、微笑む颯の口元に、勝利が燦然と輝いていた。凧の下にも風見鶏ははためく。

「校長とアニエス・ゾラが」

放課後の校庭に見渡せば、おおこうちたかのりすぐに大河内隆則の姿を見つけることが出来た。色黒の背の高い寡黙な少年は、トラックの周りを走りこむ部員たちを見つめながら、思慮深げな黒い瞳を据えていた。来夏が手を振って駆け寄ると、彼は視界の中に来夏を認めた印に組んでいた腕を解いた。「悪いな」と呟く口に歓迎の微笑はなくとも、その行動は十分誠意と感謝に溢れていた。

「いや、俺の方こそ足引つ張るかもしれない。何せ久しぶりだからさ」

来夏は笑って言ったが、大河内は真面目な顔で首を振った。

「今更謙遜しないでくれ。俺も部員たちも、お前のことは信用しきっている。室井に代わるのはお前ぐらいしかいない……あいつの行動は確かに幼稚だが、腕は確かだからな」

「ああ……で、ひよこに襲われたっていうのは本当なのか？」

その時初めて大河内は口の端を緩めた。微笑と云うよりは苦笑であったが、室井の「幼稚」な「行動」を滑稽に思う心と同情は汲んでとれた。結局、大河内はそうだとも違うとも言わないまま笑みを振り払い、真顔に戻って言った。

「今度の試合はどうしても負けられない」

来夏は了解したの意で大きく頷いた。お互いへの信頼と尊敬に満ちた握手が交わされた。

来夏の運動能力、そして適応能力と、部員たちの協力のおかげで、練習はスムーズに進んだ。ボールで繋がれた皆の顔は、興奮でいつ

になくきらきらと輝いていた。大河内は無言の内に満足を示したし、松葉杖に縋って見学にきた室井も、来夏にブラボーと拍手を送った。しかし、誰よりも一層強い憧れの眼差しで彼を見つめたのは、スポーツ飲料を冷やしていたマネージャーの少年だった。彼こそが、昼休みの生徒会役員たちの話題になり、その従姉が陽を翻弄させた、秋元真央であつた。真央のマネージャー復帰を、大河内含む部員たちは大層喜んでくれたが、どちらかという到来夏の登場のインパクトに掻き消されがちだった。それでも真央は一向に気にしなかった。彼の心もまた、すっかり来夏に捕らわれていたのだから。

「お疲れ様です！」

礼儀と並々ならぬ憧れが、真央を真つ先に休憩中の来夏の元へ駆け寄せさせた。来夏は、見知らぬ少年の大きく煌く目に少し驚いた様子だったが、礼を言つて飲み物を受け取つた。

「僕、ずっと見てました。走り高跳びの時も。先輩つて本当にすごいですね」

真央は弾む胸をおさえきれずに言つた。真央には、目の前に立つその人こそ、自分が学園に求めた救い主だとしか思えなかつた。もちろん、彼が実際に何かしてくれることを期待した訳ではない。そんなことは、誰よりも高く跳び、誰よりも多くゴールを決めるということだけでは、到底望め得るものではなかつた。ただ、彼が憧れの人として、自分の心を照らしてくれるであろう未来を予感したのである。風にそよぐブラウンの髪、すらりと通つた鼻を軸に配置された、綺麗な眉と緑の瞳、薄い引き締まつた唇、鹿のように長い四肢。全てが真央の光だった。彼の憧憬を一身に浴びながら、来夏は愛想よく笑う。

「サンキュ。まあ、俺の本命は弓道だから、素直に喜んでいいものは分からねえけど」

「へえ、弓道も出来るんですか」

真央がエメラルドグリーン目の目を瞬かせたその時、せいぜいと息を吐いていた群れの一人から声がかかつた。

「おい、秋元、復帰したばかりだからって甘目に見ると思うなよ！早く飲み物くれねえと死にそうだ！」

「あつ、はい！」

真央は慌てて冷えたペットボトルをかき集め始める。傍で靴を履き直していた大河内が、叫び声を聞いて眉を潜めたのを、来夏は見逃さなかった。来夏に見られたことに気付いた大河内は、あまり気乗りがしなさそうに、彼にはやつとの大声で嗜めた。

「武田、秋元をこき使うんじゃない……まだ病みやがりだ」

「はいはい、分かっているってば、部長」

「そんな、大丈夫ですってば！」

真央は健康そうな笑顔満面で言った。彼に病の気配など影ほども見られない。一体どういうことなのだろうか。来夏が視線でしつこく理由を尋ね続けると、大河内もついに無視する訳にはいけなくなリ、渋々来夏の元へ歩み寄ってきた。何かをやりたがらなさそうにする大河内は、去年の地区大会優勝記念パーティで女装させられかけている時以来拜んでいない。セーラー服から必死で逃げ惑っている（といっても、彼らしく無言で）大河内を思い浮かべ、思わずくすりとしている来夏の耳元で、笑われている本人は知らずに囁いた。

「秋元真央だ。天才少年歌手の。知ってるか？」

「名前だけなら。それに、そういう奴が学園にいることは聞いてたが。本当に？」

来夏の顔からは笑いが拭い去られていた。大河内は既知をほんの少しの自慢に頷いた。

「いつからマネージャーだった？」

「今年の四月からだ。だが、関本が前回手伝いに来たときにはいなかった……静養中だった。持病で喉を患っている」

「喉を？歌手なのにな？」

「……それが哀れなんだ」

大河内はやや腹立たしげに呟いた。彼の双子の黒曜石には、ペットボトルを配る真央がちらちらと映り込んでいた。来夏は、彼が語

りたがらなかつた理由を悟つて合点した。秋元真央の病は秘密にするべきような話題でもないのに、来夏には秘匿したがつた、その理由 真央が来夏に異常なほどの尊敬を示すから。大河内は密かに真央を想っているから。

来夏は大河内の肩をぽんと叩いた。それが慰めになるかは分からなかつたが、彼の味方であることだけは伝えておきたかつた。まさか来夏は、親愛込めた自分のこの行動を、後に悔やむことになるうとは、思いもしなかつたのである。

花木先生を訪ねたのはやはり失敗だつたか。美術室から転がり出てきたときのクリスは、麻酔をかけられたようにぼんやりした頭で悔やんでいた。花木先生ならば、例の絵のことを知っているのでないかと思つたのだ。美術室へは以前授業で来たことがあるので、そこに志水晶の作品は無いことは既に確認済みだつた。もしかしたら、貴重な絵なので、どこか他のところに飾られているのかもしれない。自分贖買の花木先生だつたら教えてくれるかも。こう思い立つてから一週間、やっと来られたは良いが、花木先生の口から飛び出す言葉の群れに圧倒されて、クリスは撤退せざるを得なかつた。花木先生は様々な画家について批評したが、その中の一人の名前すら、クリスは思い出すことができなかつた。結局何も訊けなかつた。失望感が、クリスの記憶力を弱体化させていた。絵なんてやはりないのではないか。疑惑が胸に黒い影を差す。クリスは頭を振つた。それでも諦めきれない。画家として、志水晶を心から尊敬する者として。その敬愛の念は、最早ダンテにとってウエルギリウスの如く。「絵」という次元で完成されたその作品を、捜し求め続けなくてはならない。そんなものは無いのだと、目の前ではつきりと証明されるまで。

強く燃え立つクリスの目は、同様に煌く日の光に惹かれ、ふと窓の外を向いた。校庭でサッカー部が活動しているのが見える。来夏もいた。クリスが見ている間に、来夏は華麗なシュートを二本ほど

決めた。図書館に行こうと思っていたが、外に出て直接来夏の勇姿を拜むのも悪くはないかもしれない。ぼつりと沸いてきたアイディアは、勝手に足を動かしていた。三分後には、クリスは林檎の木に寄りかかり、ボールの蹴られる鈍い音も、騒がしい歓声も、舞い上がった砂のぱらぱらと落ちる音も、直接その耳に聞いていた。

「この生徒たちは本当に元気いっぱいですこと」

クリスから少し離れた場所で、会話が起った。覗いてみると、西洋人女性と校長とが、二人にこやかに並んでサッカー部の走り回る様を眺めている。体育の時間に見かけた、あの美しい女性だ。女性性は少しアクセントの違う英語を話していたが、それがまた、女性の罪のない艶やかさを、一層煽り立てているのであった。

「そうですねえ。いや、全く若いというのは良いものです。僕も遂先日まで、あの子たちと同じ年頃の少年だったのですがね……おや、失礼。うら若きご婦人にはまだ随分先の話でした」

「いいえ。きつと私もすぐにおばさんになってしまいますわ」
対する校長の日本語にも、女性は慎ましく笑ってみせた。

校長がクリスに気が付いた。目を逸らそうにももう遅く、風間校長は「おやつ」と声を上げると、親しげな態度でクリスの方へ歩み寄ってきた。

「こんにちは石崎君。良い天気ですね。お散歩ですか？」

「あの、そういう訳じゃないんですけど……」

クリスはもごもごと答えた。校長は快活で品のある笑い声を立てた。「まあ、これ以上は訊くのをよみましょう。青春真っ盛りの少年には、追求されたくない問題もいろいろあるでしょうからね。いえ、石崎君が疚しいことやまとしていっているのではありませんよ。ただ、いちいち行動の意味を問われるのはうんざりするのではと思わしてね。最も、君がまたあの塔に勝手にのぼろうと企んでいるのなら、僕はそれをとめなければなりません。どうですか、石崎君？」

「えっと、そういうことはないと思います……」

「そうですね。ならばよろしい」

今や女性も、萌黄色のシヨールをしつかりと肩に纏いながら、ア
ーモンド型をした琥珀色の目で、遠慮なくクリスの顔を射抜いてい
た。思わず頬が赤くなる。校長は女性に向き合って優雅に踵を回し
た。

「紹介します。石崎・エーリアル・クリス君です。彼は……」

校長が続ける前に女性は首を縦に振った。

「ええ、もちろん存じておりますわ。あの天才少年画家の。私の家
にも一つ彼の絵がありますのよ。フランスの方の家ですけど」

「おや、そうでしたか。それは光栄なことですねえ。そう思いませ
んか、石崎君？」

「はい、ありがとうございます！」

クリスは明るく言って頭を下げた。喜びが頬に更なる熱を集めて
いる。女性は目を細めて、彼の肩に手を伸ばし、昇おとがらせた頤かに儂おとがげ
な指を添えた。見返す二つのサファイアの無邪気さに、女性はくす
りと笑みを漏らして手を離れた。それら一連の行動からは、謙虚な
慈愛が見出された。彼女の愛は、クリス自ら燃え盛る炎の中に置い
てしまった、母の愛だった。忘却の彼方で疼く何かを感じたが、校
長が咳を払うと、その何かは再び眠りに帰ってしまった。

「さて、では、石崎君にこちらの方を紹介いたしましょう。こちら
はアニエス・ゾラさん……」

「有名ピアニストの？」

名を聞くなり条件反射のように尋ねたクリスに、校長と女性は驚
いたように視線を交わし、二人揃ってくすくすと笑った。

「いや、全く、これじゃあ僕はまるで役立たずではありませんか。

石崎君が音楽も嗜むとは、知りませんでしたよ」

「あつ、いえ、エマ叔母さんがよくゾラさんのCDを聴いてたんで
す。俺も傍で一緒に聴いてましたから」

「まあ。ありがとう」

アニエスは笑みを口に留めたまま、訛のある英語ではっきりと言っ

た。

「それはよかった。これでお互いが何かを知らなくて、気まずい思いをすることもなくなりましたね。では……」

演説の途中で校長は黒々とした眉を潜めた。クリスもその瞬間に、野太い男たちの「校長！」との悲痛な呼び声を聞いた気がした。

「こほん。では、僕はそろそろ失礼します。ああ、ゾラさん、今夜は約束どおり七時半にお会いしましょう。素敵なワインを注文しておきましたから。それでは」

言い終わった途端、校長は放たれた矢のように走り出し、奇術師のように、瞬く間に姿を眩ましてしまった。アニエスは不思議そうに大きな目を何度もぱちくりした。クリスはこの数日で大分慣れっこになっていたが、あの堅苦しい服装でどうしたらあんなにも速く走れるのかは、さっぱり分からなかった。恐らく、三宿学園七不思議の一つにでも収まっているのではないだろうか。

クリスはアニエスを間近で見直した。今朝発見したとおりだ。彼女の横顔は、深い彫りの中に、琥珀色の目の中に、相変わらず苦悶と悲しみの影を湛えている。彼女が婚約者を亡くしたのはクリスも知っていた。シヨックの余り彼女は活動休止を宣言し、エマ叔母さんが大騒ぎしていたからだ。しかし、クリスは、アニエスが先ほどこから何度も腹の上に手を充てていることに気がついていた。ただの意味のない行動とは思えない。一体彼女の身に何があったのだろうか。

「石崎君」

「はい」

今度はクリスも英語だった。

「私はね、従弟の付き添いでこの学園に来たの。従弟は生まれつき体が悪くて。それでもとつても明るくて優しい子なのよ。私とは7つも齡が離れているけど、まるで本当の姉弟きょうだいのようにして育ったわ。私たちの祖父は、心から音楽を愛する人だった。だから、私にはピアノを、従弟には声楽を教えた。私がピアノを弾き、従弟が歌を歌

った。従弟はとても歌が上手くて、忽ち評判になった。でも、あの子が十の時に喉に腫瘍が見つかったの。それは、彼が持つて生まれただもので、齢を重ねるにつれて次第に大きくなっていった。手術をしたけど大した効き目はなかった。いつか腫瘍は従弟の……マオの喉を覆い尽くしてしまう。いつかマオは大好きな歌が歌えなくなる……私は非常に衝撃を受けたわ。でもね、マオはそう宣告されても変わらずに笑っていたの。胸の中は不安でいっぱいなくせに。私たちを心配させまいとして。本当に優しい子なのよ。それでね……そう。そうなのだけれど……ごめんなさい、私、何を言いたいんだか分からなくなってしまうたわ。これじゃあ、ただの従弟自慢ね。ただのお涙頂戴話ね。貴方には関係なかったわ。ごめんなさい。ただ、何となく話したくなっただけなの……」

アニエスの視線に倣えば、その先には彼女の後ろをついて歩いてきた栗毛の少年の姿があつた。彼は両腕いっぱいペットボトルを抱え、サッカー部の動きにいちいち飛び跳ねている。彼が、彼女の云う「マオ」なのだろう。アニエスの言った通りだ。彼は傍目で見ている限り、健康な一人の少年にしか見えなかった。視界の端で、アニエスの頬が塩辛く濡れていた。溜まらずにクリスは言った。

「いいんです。話したいなら続けてください。聞きますから」

突然、アニエスははっと息を呑み、怯えたように琥珀を震わせた。彼女は胸元に右手を宛がってシヨールを手繰り寄せ、左手を腹部に宛て、クリスから逃れるように後ずさりして見せた。驚き、戸惑うクリスを前に、アニエスは大粒の涙を落としながら、小声で何度も自分に言い聞かせていた。何を言っているかは分からなかった。フランス語で呟いていたので。

「アニエスさん……？」

「違うの……なんでもないので……ごめんなさい。どうも調子が悪いのよ。ねえ、どこかに休める場所はある？そこまで行くのに、肩を貸してくれない？」

その言葉を聞くなり、クリスはすぐさまアニエスの横に立ち、彼

女の重みと疲労と苦悩とを半分預かった。アニエスは笑った。暗闇の中で光を求め続けてきた人が、遠くにほんの点ばかりの灯りを見つけた時に浮かべると、全く同じ笑い方で。

ふと触れたアニエスの腹は、小さく躍動していた。

「先輩、待つてくださいーい！」

東に向かって伸びた影が、下校時刻を知らせている。後ろから駆けてくる足音の主は、わざわざ確認せずとも分かった。飛び跳ねて、来夏の隣に並んだ影。見下ろせば、来夏の肩とほぼ同じ高さの場所に、もう見慣れてしまった秋元真央の人懐っこい笑顔があった。

「先輩、一緒に帰ってもいいですか？」

真央の息は小犬のように弾んでいる。来夏は胸中溜息を吐いた。断りたくても断れるはずがない。彼を心から嫌悪していない限りは。

「別に構わねえけど」

来夏が、前を歩く人への罪悪感から、素っ気無く言うと、真央は所々に丸みを帯びた顔面を、これ以上ないというくらいの感激で満たした。

「本当ですか？よかった！僕、憧れの先輩と一緒に帰ってみたいなって、ずっと思ってたんです」

来夏の頭の中で、小さく警鐘が叩かれる。

「憧れの先輩だと認定するのはまだ早いだろ。会って一日も経ってないんだし」

「いいえ、そんなことはありません。だってすぐに分かりましたもん。先輩こそ、僕の憧れになる人だって。それこそ、見た瞬間に」

「感覚ほど当てにならないものはないぞ。あまり過信するな。特に人間関係ではな」

「いいんです！先輩がどんなに否定したって、僕は信じ続けますから。ちゃんと聞こえたんです。先輩を初めて見た瞬間に、自分の声。が。例え、この後先輩が僕を貶めたり、酷い目に遭わせたりしても、

それでも僕はあの時間こえた自分の声を疑ったりしません。先輩がやめてくれって頼んだって、僕は先輩のこと尊敬し続けますよ」

大河内の背中ばかりに注意していた来夏は、突然胸に押し寄せてきた、酸っぱいんだか甘いんだか苦いんだか、まるで判別のつかない気持ちに促され、衝動的に真央を見た。真央は真面目そのものだった。どこの三文小説から引用したか分からない今の台詞も、この少年に於いては、嘲りもふざけも恥じもない舌に乗せられて紡がれるのである。来夏は呆れそうになり、怒りたくもなかったが、前を見ると誰もいなくなっていたので、結局笑った。真央はきよとんとして来夏を見返した。何がおかしいのかさっぱり分からないといった表情だ。しかし、来夏に説明するゆとりはなかった。最早来夏は笑いに取り憑かれ、他のことは何も考えられなくなっていた。

「変な奴だな」

ようやく来夏は言った。

「変な奴なんかじゃありませんよ。そう言って僕を怒らせるつもりなんですネ？その手には……」

「違う。気に入ったって意味だ」

「えっ？」

真央はその場に立ち止まった。来夏は彼を待とうとはしなかった。再び緩みかけた口元を、見られたくはなかったからである。それでも堪えきれずに漏らした笑声がばれぬよう、来夏は慌てて口を開き、声にそれを紛らわせた。

「ほら、置いてくぞ」

「あつ、待ってくださいよ、先輩！」

「ただの先輩じゃない。『来夏』先輩だ」

「へえ、先輩の名前来夏っていうんですね。どういう字ですか？」

「来る夏で来夏。まっ、夏が来るって言った方が良くもな」

真央の笑顔が凍りついた。

第四話 夏は来ぬ・後編

「まーお、久しぶりに帰ってきたってのにどうしたんだよ？折角大好きなカレー作ったのによー」

「…………ごめん」

「ほら、カレー！あかね明音特製カレー！」

「いや、えつと…………それは、ほんとに、いや…………」

得体のしれないものがうずまき、じゅうじゅうと煙の昇る鍋からは、食欲をそそる匂いがまるでしない。紫色は恐らく警戒色という奴だろう。けばけばしい色を見せ付けて毒を持っていることを主張するキノコと同じだ。しかし、作ったルームメイトが、拗ねて頬を膨らませ、そのカレーと名づけられたものを難なく食べているのを見ると、見た目と香りほどには酷くはないのかもしれない。だが従姉の不安げな顔が出てきて思い留まる。真央が今腹など壊したら、従姉はそれこそ卒倒してしまうに違いない。精神かき乱されているアニエスを、刺激するようなことはしたくなかった。

ルームメイトの好意を断った理由は、料理の色彩が尋常でなかっただけではない。真央はすっかり打ちひしがれていた。幸福の淵まで辿り着いたのだ。後はそこから飛び降りれば良いだけだと思っていた。だが、幸福は真央を拒んだ。真央は中から突き落とされた。どうして運命はこんなに非情なのだろうと、真央は柄にもないことを恨んでみる。少し咳が出た。

ポケットの中で携帯電話が鳴った。従姉からの電話だ。真央は急いで隣室に滑り込み、扉を閉めると、通話ボタンを押した。

「もしもし、アニエス姉さん？」

「ああ、マオ。元気？だいじょうぶ？」

従弟の自分さえどきつとするような、艶のある声が尋ねてくる。何せまだ彼女は若い。この哀れな未亡人は、今こそ身も心も花盛り

であるべきなのだ。

「うん、元気だよ。そっちはどうだった？」

「素敵だったわ、とても。校長先生は良い方。優しいわね」

「なら良かった。姉さんはいつフランスに帰るの？」

「アニエスは少し考え込んでから言った。

「私、しばらくいるわ、日本。学園の近くに、ホテル泊まるから。

しばらく仕事しないの。真央を見に行くわ」

「そんなに心配しなくてもいいんだよ」

真央は笑ったが、その言葉があまりにも虚ろであるばかりではなく、却って従姉を愚弄するばかりであることに気付いて口を噤くんだ。二人の会話に、避けては通れなかった沈黙が訪れる。アニエスが日本語を探すのでもない、二人がつながれているという安堵に浸っているでもない、お互いの傷から目を背け合うだけの重い沈黙だ。やがて開いた口から飛び出た言葉も、沈黙を断ち切るものではなく、その憂色を引き摺りながらに語られた。

「アニエス姉さん？」

「なあに？」

訊き返した声は優しくかった。真央は彼女を裏切るような気持ちで言った。

「僕の喉、いつまで持つかな？」

通話口の向こうで、アニエスが打ち震えるのが分かった。真央は唇の裏側に叩きつけられた衝動を抑えた。すぐにも謝りたかった。打ち消したかった。だが、真央はあまりにも苛まれすぎていた。夕刻から背負い続けてきた苦痛が、今や冷酷な感情へと変わって、真央を支配していたのだ。車の音が聞こえる。従姉は戸外にいるのだろう。夏の残骸を以って肌をじわりと湿らす空気に、身を巻かれているのだろう。そこから逃れたければ喋ってくれ。真央の心は残酷に叫んでいた。

「いつかよ……いつか……」

アニエスは真央の拷問にすすり泣きながら答えた。真央は黙って

電話を切った。恐らく今夜中に従姉が電話を返してくることはあるまい。自分は 真央は両手で頭を覆った。ああ、自分とはんでもなく酷い仕打ちをしてしまった。恥知らずと言われど、恩知らずと言われど、もう何も言い訳はできない。真央は疲れきっていた。何もかもが嫌になり、両手にある全てを投げ出したくなった。彼を慰めたのは、例の冷たい感情だった。嘘を吐く方が悪いのだ。知っているくせに、話さないから悪いのだ。

言えば良いのに。次の夏が来るまでだと。

翌日の練習の際、真央が来夏を追うために昨日ほどの意欲を示さなくても、来夏はあまり気にしなかったばかりか、却って当然だと思つてほつとした。大河内が昨日よりも無愛想に見えた所為もあった。しかし、真央の胸から、来夏への尊敬の念が全く消えてしまった訳ではなかった。ぎこちない笑い、時々零れる咳、こういったものが真央の顔を横切り続ける間にも、その目は来夏を追っていた。そして、いつまでも心を冷凍しておく訳にもいかなかった。来夏が鮮やかなシユートを二本連続で決めたとき、真央はとうとう胸を熱する興奮を抑えきれず、ぴよんぴよんと飛び跳ねて手を打った。

「先輩、すごいです！」

来夏はちよつと戸惑い、それから笑った。大河内は表情を変えなかった。

それ以来、真央は、来夏を見かける度に駆け寄ってくるようになった。来夏が部活に現れたときはもちろん、集会時や、廊下ですれ違ったときさえ。来夏は少し困惑したが、結局、あくまでも先輩らしい態度で真央に臨むことにした。落合を決して彼に近づけないようにしていたのも、寡黙な親友への思いやり故だ。最も、落合は大河内の方に関心を示すかもしれないが。しかし、彼が「年下好き」を主張し続けている限りは安心できない。

来夏と真央、二人が初めて一緒に昼食をとったのは、試合を二日後に控えた日のことだった。敬愛する先輩がクリスと話しているところをとっ捕まえた真央は、彼の手を引いて中庭に出た。ちょうど噴水前のベンチが空いていた。二人はそこに座り、それぞれの弁当を開いたのであった。

「先輩つて、肉嫌いなんですね。それなのに運動出来てすごいなあ」
ハムなしのサンドウィッチをかじる来夏に、真央は忙しく話しかけた。

「おまえは随分小食なんだな」

来夏は小さな弁当箱を見て洩らした。そうしながら、胸に起こる後ろめたさを、掻き消すべきか否かで迷っていた。

「ええ。自然にあまり食べなくても大丈夫なようになるんですよ…

…うちのルームメイトと一緒にだと」

「はっ？」

「いや、何でもありません。あまり動かないから、これくらいでも十分持つんですよ」

「んなこと言わずにちゃんと食べよ。栄養つかねえぞ」

「えっ、でも、太りたくないし……」

顔を真央から逸らし、言葉には霞みほどにも見られない当惑に眉をひそめていた来夏は、喉奥で起こった爆発に激しく咽むせた。危ういところだった。稀に見るこの優秀な少年が、パン一切れに殺されるところであった。来夏はサンドウィッチの破片を、濃く淹れた茶で慌てて流し込んだ。

「せ、先輩！大丈夫ですか?!」

真央は慌てて立ち上がり、茶を口にした後も俯いたままにいる来夏に、おろおろと言った。

「きゅ、救急車……!」

「静かにしろ。バカ、お前のせいだ」

「へっ？」

とりあえず救急車は必要ないことを知った真央は、119の11ま

で入力した携帯電話の画面から目を話し、きよんとして来夏を窺った。「もういい。何も言つなよ」

「えっ」

来夏は肩を震わせ、寄せては返し、また寄せる、夏の海の波のような、気まぐれで少し辛くて、でも温かい感情に心の船を任せていた。来夏の膝から転がり落ちたパン屑を目当てに、小鳥たちが足元に集ってくる。何なのだろう、この気持ちは。来夏は考えようとした。しかし、まだぼかんとしている真央が目に入れば、真面目な気分は失せ、次なる笑いがこみ上げてくるのであった。ああ、自分はこうしてこんなに愉快なのか。

「先輩、一つ言っておきますけど」

「何だ？」

真央が珍しく唇を尖らせていたので、来夏もやっと聞く気になった。

「先輩、僕のこと『変な奴』って言いましたけど、先輩だって相当変ですよ」

何かと思っただらこれだ。この調子では、自分はこの少年に腹筋を壊されかねないなと来夏は思った。来夏がまた笑い出したので、真央は桃色の頬を風船のように膨らませてみせた。彼なりの怒っているという印らしい。

「たまには真面目に僕のいうことも聞いてください！」

「聞いてるって。真面目だからおかしいんだよ」

「……先輩がこんなに変な人だと思いませんでした」

「俺を尊敬したことを後悔し始めてるのか？」

「それだけはないです！」

「本当か？」

「本当です！絶対絶対、僕は先輩を尊敬するのをやめたりしません！」「好きにしる。全く……」

笑い、よろめく体を支えるため、来夏は真央の肩に手をかけ、彼に覆いかぶさった。真央は目を見開いた。耳元に快活な憧れの音楽

が響く。自分は今、細くしなやかで力強い楽器に触れている。それだけで、真央はこの上なく幸せで、顔が火照っているのをからかわれても、言葉を返す必要性を感じなかったほどだ。来夏の体は熱かった。まるで真夏の日のように。幸福の絶頂で、真央は燃え盛る季節に全身を委ねようとした。力なくぶら下がっていた手を持ち上げ、ゆっくりと来夏の手を探り当てようとする。指と指が触れた。指先までもが汗ばんでいる。視界が揺れている。脳も目も、想いまでもが溶けてしまいそうだ。そして、更に奥へ……突然、小鳥たちが一斉に飛び立ち、二人は驚愕によって引き離された。小鳥たちは何に脅されたのだろう。見渡しても何も見当たらない。それでも真央は知っていた。小鳥たちを飛び立たせたもの。猜疑心さいぎと恐怖である。

「せんば……」

真央は何か言おうとした。だが、声は続かず、来夏の耳に入ることもなかった。

「珍しいな。陽がさばらずに生徒会に来るなんて」
「慎がいねえから来たまでだ。あいつが戻って来たらすぐに帰つてやる」

「困ったな、私はまだ原稿を書き終えていないのに」
「はあ？何でお前と一緒に帰らなきゃなんねえんだよ」

次回の代表委員会の司会原稿を書き進めていた荔枝は、おやと思つて手を止めた。試すように微笑んで陽を見上げれば、陽もまた、悪戯を仕掛けてすっかり自慢げな子供のような表情で、こちらを見つめている。最も、その目は前髪に覆われて見えないが。荔枝がティーカップの取っ手に指をかけて詳細を問うと、陽は机の隅に腰掛け、半分ほど残っていたコーラの瓶を飲み干した。

「オレ、颯と勉強会だから。誰と一緒にだか知らねえが、今夜は、そつちはそつちで楽しく過ごせよ」

「……今日はひどく冷たいんだな」

荔枝は芝居がかった口調で溜息を吐いて言う。微笑は留めたままだ。「だからよ、別にてめえと一緒にじゃないといけねえって法はねえだろ」

いつかの仕返しのもりだったのが、思ったほどの効果が見られなかった。陽は急に不機嫌になった。広げていた楽譜をファイルにまとめ、憤も帰ってきていないというのに、一人生徒会室の出口へと向かった。そんな彼の背中に、荔枝は呼びかける。

「陽、強情を張るな。颯はきつと忙しいぞ」

「何で分かるんだよ？」

振り返れば、麗しき黒髪の少年は、つんと横顔を見せ付けて窓を向き、青々として晴れ渡った真昼の空に呟く。

「今日は夕立が来そうだ」

放課後の音楽室には誰もいない。今日は弦楽部も吹奏楽部も休みの日だ。真央は歌の稽古のために、特別にここを使用する許可を取った。グランドピアノの前に腰掛け、次のコンサートで歌う曲を、冊子の中から探していると、真央は急な寂しさに襲われ、どうかすると、ページを捲る手も萎えそうになるのであった。伴奏者がいないのだから、自分で弾いて確認するほかない。音楽担当で、真央をやたら気に入っている、林原林太郎先生が、手伝おうとは申し出てくれたのだが、真央は断った。やはり、自分の伴奏はアニエスでなくてはならない。ところが、そのアニエスは、ひどく意地悪く接してしまつたあの晩から、一度も連絡を寄越さない。自業自得だ。果たしてどっちが？嘘を吐いた所為で傷ついたアニエスか、彼女を故意に傷つけた所為でその愛を失つた自分か。真央は鍵盤を押した。惨めなラの音が、ぼろりと零れた。

今度の歌は英語の歌詞だった。英語は苦手だ。日本語訳を見ながら、何とかその意味を解く。

Shall I compare thee to a summer's day? 君を夏の一日と比べてみようか?
Thou art more lovely and more temperate: だが君のほうがずっと美しく、もつと温和だ……

その時、音楽室の扉が軋んだ。真央は詩の黙読をやめると、はつとして顔を上げ、招かれざる客を見やる。防音機能を備えた厚く重い扉の奥から現れたのは、ワインレッドの髪に垂れ目気味の灰色の瞳をした小柄な少年で、胸にはスケッチブックと小さな包みを抱えていた。有瀬ノア 理事長の息子だという、一つ上の先輩だ。話したことはなかったが、こういう所以^{ゆえん}であまりにも有名だったため、学園を離れていた真央でも知っていた。しかし、真央は彼の登場に對し、何とも感想を抱けなかった。一人の時間を邪魔されて不快でもないし、だからといって歓迎することも出来ないし。ノアは真央の姿を認めると、丁寧に頭を下げた。

「ごめんなさい、お邪魔でしたか？」

「あつ、あの、いいえっ」

真央は両手と首を振って答えた。噂には聞いていたが、本当に腰の低い人だと思う。彼の立場上、せめて後輩ぐらいにはもう少し威張っていてもいいのに。

「えつと、林原先生なら職員室ですけど……」

「いえ、林原先生ではなくて、絵を描きに」

「絵を？」

真央は怪訝な顔をした。絵なら美術室で描けばよいではないか。それに、これといって描いて楽しそうなものもない。絵描きの心なあって、自分にはさっぱりわからないけれども。そんな真央の疑問を察してか、ノアはにこりと微笑んで窓辺を指差した。見遣れば、なるほど、鳥籠の中で、一羽のレモンカナリアが、止まり木のブラン

口を揺らして遊んでいるではないか。ぴちとも鳴かないため、今ま
でまるで気付かなかつたのだ。初めて人に注目され、小鳥は嬉しそ
うにぶるりと羽を膨らませると、元気よく囀りはじめた。確かに絵
にはなりそうだ。

「へえ、気付きませんでした。なんでこんなところに小鳥がいるん
でしょうね？」

真央は興味津々で問う。そういえば、アニエスはカナリアに歌を
教えるのが上手かつたはずだ。今でもフランスでは、番のローラー
カナリアを飼っている。もう綺麗に歌えるようになっただろうか。
「楽器の一つとしてじゃないですか？」

ノアは笑いながらもやけに冷淡に答えると、後ろ手で重い扉を閉
め、鳥籠の方に歩み寄った。反響する靴音とカナリアの歌とが混ざ
り合い、一つのハーモニーを作り出す。真央は暫しぼんやりと聴き
入っていたが、足音が止まるとすぐに自分のやるべきことを思い出
した。慎ましやかな先輩はもうスケッチブックを開き、山鳩色の細
い線を重ねて、絶えず動く小鳥の動きをとらえている。音を出して
も問題はなさそうだと判断し、真央は鍵盤の上に指を落とした。や
がて奏でられたのは、陽を浴びた丘のようになだらかなメロディー
に、恋人への賛美と少しの悲壮を秘めた曲であった。ピアノが弾き
続けられている間にも、カナリアは囀りをやめようとはしなかった。
寧ろ、その叙情的なメロディーに誘われ、一層美しい声で歌い始め
た。小鳥は相当に楽しそうに見える。否、聞こえる。伴奏者として
の喜びを知って、真央も思わず顔をほころばせたが、歌の終盤とな
って突如カナリアは囀るのをやめた。真央も伴奏を止め、胸を衝か
れたように鳥籠の方を振り仰いだ。そして安堵した。ノアが小鳥に
種の褒美をやっているだけだった。スケッチブックと一緒に持って
きていた包みは、カナリアの餌だったようだ。真央はまた演奏を始
めたが、急に咳がこみ上げてきて、慌てて口を覆った。前屈みにな
れば、思わず鍵盤に着いた手が不協和音を奏で、小鳥の嘴を凍らせ
る。喉が燃え、肺は悶え、ここは灼熱地獄かと紛うほど。真央は声

にならない叫び声をあげた。真つ青になったノアが駆けつけてきた。ノアは苦しむ後輩の背中をさすり、答えられない彼に幾度も尋ねた。「大丈夫ですか？大丈夫ですか？」腕の中から双眸そうぼうだけを抱き起こした真央は、そのぼやけた翡翠の表面に、ノアの投げ出した包みの中身を映した。床に散らばったひまわりの種　夏の花の胎児たち

どこからともなく吹いた風が、机からノアのスケッチブックを攫い、床の上に未完成の絵を晒し出した。鳥籠の中で囀るカナリア。風がページを捲る。歌い続けるカナリア、歌を止めるカナリア、ひまわりの種子を食すカナリア。そしてひまわりの種は小鳥の胃に根付き、やがて彼の身を蝕んで大輪の花を咲かせる。

閉じられた戸と、その向こうに消えていった少年を、ノアは同情するような目で眺めていた。しかし、間もなくその顔に笑みが宿った。窓はしっかりと施錠されているし、窓辺には何も無い。外にはもう夕立が来ている。

激しい雨が天より垂れて視界を塞ぐ。遠くで雷鳴が轟き、駆ける足が水溜りに踏み込む度に、制服のズボンの裾は重く濡れていく。雨粒は風に吹かれて顔を打ち、傘はあまり役割を果たしていなかったが、それでもしがみつく他にはなかった。

不安になつて何度も背後を見返した。真央は怯えていた。頬を流れるのは雨水ばかりではない。肩を縮めるのも、雨の冷たさばかりではない。只管ひたすらに怖かった。声を奪おうと、喉を潰そうと伸びてくる、炎の爪を持った手が。夏が。

半透明のベールの奥に見たのは、見覚えのある二本のすらりと伸びた脚であった。真央は傘を後ろに傾ぎ、自分を追い続けていた人の目を見た。傘も差さず、身一つでそこに立つその人の目は、輝く夏の葉の色をしていた。真央は喉を震わせた。何も口から出てこない。

「秋元」

つい先ほどまであんなに嬉しかった呼びかけにすら、自分はもう
応えられないでいる。真央はゆつくりと首を振った。頬を濡らすの
は雨だと誤魔化せても、翡翠を揺らす犯人は疾うに明らかであった。
真央はゆつくりと首で否んだ。

「秋元？」

「……ごめんなさい」

「おい」

「ごめんなさい……っ！」

どんな拷問に遭おうとも、この先は絶対に言えなかった。貴方が怖
いなんて、そんな戯言を。

「おい！」

真央は走り出した。来夏は引きとめようと腕を伸ばしたが、少年
の体は亡霊のようにすり抜けてしまった。足音が雨音と雷鳴に掻き
消されていく。

拒まれたのだ。来夏は真央を掴めなかった両手を睨んで確信した。
急に寒くなってきた。練習中に降ってきたこの雨は、既に来夏の体
を疲弊させている。早く帰らなければ。

だが、その前に。

「おい！秋元真央！」

誰もいない背中に向かって叫んだ。

「あの雨の中、傘なしで歩き回ってたなんてバカか。もうすぐ試
合もあつるっつーのに。見損なつたぞ、ライ」

返す言葉もなく、来夏は差し出された薬をぬるま湯で飲み込んだ。
雨はもうやんでいる。寮に帰ってからすぐにシャワーを浴びたが、
十分ほど前から悪寒と頭痛に襲われていた。困つたな、来夏は口に
残った薬の苦さを舐めながら思う。落合が淹れてくれた薄い茶も、
体を温めてはくれなかった。少し横になろうと立ち上がったとき、
部屋の戸が開いて菜月が帰ってきた。来夏の見たことの無い千鳥模

様の傘を右手に、何となく嬉しそうだ。こんなことは久しくなかった。下校時刻をこんなに大幅に過ぎていているというのに、何かいいことでもあったのだろうか。

「おう、酒本、遅かったな」

落合も驚いた顔をして言った。

「うん、ちよつとね……」

菜月は意味ありげに呟くと、靴を片方ずつぼんぼんと脱ぎ捨て、傘を胸に押し当てたままベッドにダイブした。来夏は溜息を吐きながら、菜月の元気が戻ったのに安心し、結局小言は胸にしまったまま彼の靴を整えた。屈みこむと、更なる寒気が訪れた。

横たわったシーツはひんやりと冷えていた。今朝から主人の温度を奪おうと待ち構えていたのだろう。束の間耐えれば良い話だ。来夏は喉を焦がすほど熱い茶を一気飲みし、分厚い布団を頭まですっぽりと被って保温に勤しんだ。舌がひりひりするのはまだしも、耳鳴りがして、吐き気までしてくる。頭蓋骨を、内側から拳で叩かれているような気がした。息苦しさ、動悸、あらゆる痛み、交互に襲ってくる寒さと暑さ、瞼の裏で点滅する光と影、こういったものから来夏を救ったのは、風邪薬の催眠作用だった。無感覚と暗闇の中に、来夏は落ちていく。

「ごめんなさい」

真夏の太陽は、絢爛な紅と豪華な輝きを身に施し、横暴にも、世界の玉座なる空に構えていた。全く以って見事な道化師である。しかし、そんな道化の嘲笑いも、地を煮えたぎらせ、来夏の肌を泣かせた。彼の笑いの聞こえぬ場所といえ、此処から数メートルほど離れた場所から拡がっている、陰鬱な暗い森ぐらいであろう。罪悪はこの夜の地平までも覆い尽くしていた。

真央は、森の入り口、先頭の木陰の中に立っていた。彼は来夏を見つめていなかった。俯いたまま、華奢な肩を何度も波打たせ、噁り泣いていた。塩のついた唇が再び紡いだ。

「ごめんなさい、先輩。関本先輩……」

「何で謝る?!」

抑えきれないほどの激しい怒りが、来夏の口を割って出た。何故こんなにも腹立たしいのかは、当の来夏でさえ分からなかった。日は益々高く昇り、真央の立つ場を削っていく。彼は返事をせず、ただ来夏の叱る声を聞いてしゃくり上げた。

「答える!何で謝る?!」

「答えられません。ごめんなさい、関本先輩……」

「来夏だ!」

来夏は吼えた。

「俺の名前は来夏だ!」

「夏が来るのが怖いんです!」

真央は悲痛に叫んだ。大きく息を吸った一瞬の間だけ、真央は来夏を正視した。だが、彼はすぐに目を背け、蝶のようにひらりと身を翻すと、鬱蒼と茂る森の中に自ら迷い込んでいった。

「待て!」

来夏は開いた口を覆いながら飛び起きた。寝ながらに周りへ配慮するという芸当を、彼は見事にやってのけた訳だ。若しくは、目が覚めた瞬間に展開された暗闇と静けさが、彼の理想に働きかけたか。恐らく後者に違いない、と来夏は思った。枕元のデジタル時計が、既に日付の変わったことを知らせていた。

来夏は身震いした。ワイシャツは汗でべったりと背中に張り付き、靴下を履いたままの足先に熱が籠っていた。指でさえ鉛のように重く、舌の奥では酸っぱいような苦いような味がしたし、頭痛は益々酷くなっていた。藪医者でも断言できる。風邪だ。熱も出ているに違いない。まずは清潔な寝巻きに着替え、皺の寄ったズボンにアイロンをかけようとしたが、こうして震えているのも億劫で、これ以上余計な騒音を出してルームメイトを起こさないうちに、ベッドの中に戻った。痛みだけが残った頭に、真央の悲鳴だけが響いていた

夏が来るのが怖いんです!

「39度。関本来夏、欠席つと」

来夏の脇から体温計を取り出した菜月は、それだけ言つとそそくさと立ち上がつて朝食の席へ向かつてしまった。全く薄情な奴だ、病人は思い切り顔を顰めた。しかし、十分後、菜月は粥をよそつた中国風の器を持って帰つてきた。湯気の立つ粥を口で吹いて冷まし、来夏の口元までレンゲを運ぶ。

「はい」

菜月は、差し出したからには食べ、と言わんばかりの鉄壁の姿勢をとっていた。来夏は素直に従つた。粥は熱かったが、美味しく頂ける程度に味が付いていた。厨房で作つてもらつたのだろう。

「悪いな、酒本」

一頻り粥を啜つた後に、来夏は言つた。菜月は肩を竦めた。

「別に。とにかく今日は寝てなよ。落合を叩き起こす仕事も僕がやる。先生には何て言つとけばいい？脳卒中と肝硬変の二択があるけど」

「口内炎とでも」

菜月の冗談に、来夏は微かに笑つた。菜月は、知らぬ人が見たら真面目に受け取つたのではと不安になるほど、無表情で頷いた。それから、まだ夢の中にいる落合を引きずり出す作業にかかった。来夏が見ているうちに、菜月は集められる限りの辞書を持って、落合の枕元に立つた。来夏が制止するより前に、無数の辞書の角たちが、無防備な落合の寝姿の上に降り注いだ。

「えつ、風邪ですか？」

真央が問い返すと、大河内は素つ気無く、でも完全には素つ気無くなりきれずに頷いた。言葉も浮かばず、ただ目だけで物聞く真央に、彼は希少なバスで続ける。

「昨日の練習の帰りに雨に打たれたそうさ。熱も高いらしい。今日は一日静養するそうさ」

「今日一日つて……でも、試合は明日ですよ！先輩、まさか、出られないなんてことは……」

ああ、何たつて先輩を惑わせるようなことをしたのだろう。真央は俯き、心の底から悔やんだ。あれは一炊の悪夢だったのだ。胸を刹那通り過ぎただけの影だったのだ。それなのに、自分は一々怯えて、まるでそれが凶悪な怪物か何かのように捉えて　夏が何だ。先輩の名前が来夏だからつて、それがなんだつて言うんだ。自分は全く関係ないもの二つ繋ぎ合わせて騒いでいた。その結果失ったものは？アニエス姉さん、先輩、自初心、勝利への希望……

真央は両肩に重さを感じて我に返った。大河内部長だった。彼は細い澄んだ漆黒の瞳で、十センチ以上の身長の間隔たりにも関わらず、真つ正面から構えるように真央を見つめていた。

「秋元」

力強い声で大河内は呼びかけた。

「関本のことを俺はよく知っている。あいつは来るといつたら来る奴だ。例え熱があるうが、右足を引き摺っていようが。だが、そうなるはこちらが困るのをあいつはちゃんと承知してる。だから何が何でも治してくる。関本が嘘を吐いたり、約束を破ったりしたことは一度もない……おまえはそれも知らずにあいつを尊敬していたのか？」

「あ、あの……」

真央は口ごもつて頬を染めた。大河内の目は、優れた教師にも稀に見る、思考と反省とを促す目だ。そんな彼の光に当てられて、それ以外に仕様がなない。

「えつと、あの、僕、でも……」

「関本が誠実な奴だと信じていた？」

「はい」

真央は素早く顔を上げた。黒と緑、決して混ざり合うことのない輝きは、今しつかりと取り交わされていた。大河内はふつと口元を緩めた。優しいが、どこか堪忍したような笑い方だった。しかし、

すぐにそれも引つ込めて、真央の頭を二度ぼんぼんと叩くと、グラウンドを駆ける部員たちの群れに加わっていった。

空を仰ぎ見れば、雲は薄く、日光は悠悠とそれらを突き抜けて地上に降り注いでいる。

一方、寮のある一室で、来夏は枕元の水差しに手を伸ばしていた。コップに水を注ぐまでは上手くいったが、コップを掴もうとしたその時、コップが倒れ、水が零れた。来夏は小さく悪態を吐いた。残念ながら、濡れてしまった絨毯を拭く気力は来夏にはない。もう一回挑戦するため、遠くなってしまったガラスのコップを取り戻そうとする。差し出した手が震えた。額に貼り付けられていた汗の玉が落ちる。

負けられない　強く思った。

そう、思ったはずだった

見知らぬグラウンドの片隅で、真央はすっかり色と自我を喪失していた。我が三宿学園高等部サッカー部は異常なまでに殺気立っていた。ユニフォームに着替え終わった十人の出場選手たちは、皆腕を組み、眉間に皺を寄せ、唇を真一文字にきつく結び、何も無い宙を睨みつけていた。あと二十分で試合が始まる。本来なら、今頃チーム一丸となつて士気を高め、軽くボールの遣り取りでもしていなければならぬのに。そう、十人なのだ。来夏が来ないのだ。

「畜生！」

武田が吐き捨てたが、大河内は何も言わない。たしなめれば、却って苛立ちを煽るだけだと分かっていたからだ。真央は先ほどから何度も大河内の表情を窺っていたが、とても複雑すぎて読めなかった。彼がまだ来夏の登場を信じているのか、それともさっぱり諦め

て、物言えぬ深い絶望に浸っているのか。

「全く、情けねえな！」

全くだ。全く。真央たちは情けない。こうして手を組んで祈ることしかできないのだから。あと十五分になった。お願いだ、先輩、早く来て

「……連絡もつかねえや」

性にもなく皆の怒りをかりたてるようなことを呟いた室井を、大河内は視線で諫めようとした。この状況で、これ以上チームを意気消沈させるようなことを言うて欲しくなかった。だが、観察しているうちに、大河内は、度合いが違っただけで、室井が何を言おうが、結局、チーム全体の気持ちは、失望一色で固められていることを悟った。どの目も険しいが、怒りも孕んでいない。武田の悪口でさえ棘がない。真央は知らなかったが、大河内はその時初めて落胆した。それでも諦めてはいなかった。目の右端の方で、真央が凜々しい表情で、ぴんと背を伸ばしているのを見たから。それに、来夏のことを心から信用していた。友人として、そして好敵手として。大河内は咳をした。何人かが、じろりとだるそうな視線を送っただけだったが、大河内は声を張り上げた。

「皆、聞いてくれ。関本は……」

「バスに乗り遅れた」

その場の空気がぱつと沸き立った。

全員が一斉に振り見たほうに、皆が待ち焦がれたヒーロー、関本来夏のご尊顔がのぞいていた。息を切らし、顔はまだ青白かったが、薄い唇はしっかりと笑みを造り上げていた。「先輩！」叫んで真央が真っ先に飛びついた。来夏は両腕を交わし、胸の中に視線を落とした。あの夕立の日に逃してしまったものが、紛れもなくそこにあった。彼の熱が、冷え過ぎた来夏の体に並々と注がれていく。これ以上に心地よいことがあるのかと、真央は塩っぱい目を閉じた。

「落合が熱冷ましをくれたんだけど、これがどうも効きすぎたみてえで……一晩の内にすっかり低血圧になってた訳だ。おかげで目が

覚めたのが八時だよ」

「普段の授業なら何とか間に合うんだがな」

大河内が朗らかな笑い声をたてた。

「今日だつて一応間に合っただろうが。今から一分で仕度してくる。真央、手伝え」

「はい……はい！来夏先輩」

真央は鼻を噉ると、その愛嬌溢れるつややかな顔を、この世で最上の世転びと涙とでぐしゃぐしゃにして答えた。

それから行われた、サッカーの試合の模様について語るのは、著者の無知を晒すだけなのでやめておこう。ただ、笛の音と来夏が仲間と手を打つ音が、他校の校庭に幾度も響いたことだけを述べておく。それで十分だ。真央は、歓声を上げたり、拍手したり、時々がっかりしたり、また跳ね上がったりと、目の回るような忙しさの中でも、手に入れたばかりの幸福を取り落としはしなかった。その癖きちんと清潔なタオルと冷えた飲み物は、傍らにあった。三宿学園高等部サッカー部のマネージャーとしての誇りが、真央の手を自然に動かしていたのだ。

「あつ、来夏先輩待つてくださいね。今すぐ飲み物を……」

試合を終えた来夏が戻ってくると、真央は残り一本になったペクトボトルを手に取りうとした。だが、彼より先に誰かの手がそれを奪い、「はい」と不慣れに呟いて来夏に手渡した。真央は信じられない思いで立ち尽くした。

「アニエス姉さん……」

「ハイ、マオ」

軽快な英語でアニエスは言った。少し見ない間に、アニエスの美貌は種類を変えていた。否、まだ少し翳りは残っているが。涙がちだった琥珀色の目は晴れ、潤んだ唇にしっかりと紅のルーージュを引き、重々しかった黄褐色の巻き毛は梳かれて、九月の風になびいている。人より小さな小鳥のような頭には、白い、グリーンのリボン

を巻いた帽子を被り、スカイブルーの丈がやや短めのワンピースに、薄いカーディガンを重ねている。その姿はあまりにも無邪気で魅力的で、男ばかりの校庭でやたら人目を引いていた。

「私の仕事、早いわね、マオより」

「どうしたの？どうやって来たの？」

真央が尋ねると、アニエスは人差し指を左右に振り、意味ありげにウィンクした。

「秘密。レディには秘密が沢山あるの」

途中からまた英語だった。それも、来夏に話しかけるための準備だったに違いない。アニエスは来夏に向かって微笑んだ。来夏は身を寄せてくる真央の肩でも抱いていなければ、地に足をつけていられなかったかもしれない。

「初めまして、関本来夏君。私はアニエス・ゾラ。真央の従姉よ。

もしかしたら、私を知ってるかもしれないけど　ほら、あそこにいるクリスマス君みたいに　まあ、あまり期待しないわ。私、昨日、学校を訪ねたの。真央の様子が知りたくて。そうしたら、校長先生が貴方のことを教えてくださったのよ。貴方のおかげで、真央は元気だった。でも、貴方は昨日元気じゃなかったみたいね。だって、風邪で寝てたって聞いたもの」

「初めまして。心配していただいて光栄です。ピアニストのアニエス・ゾラさん」

来夏は答えた。一体どうして校長は、生徒たちの細かい関係を知っているのかと疑問に思いつつながら。アニエスの琥珀が嬉しげに輝いた。「あら、期待してよかったみたいね！」

何の話をしているのか分からない真央は、その辺りで拗ね始めた。アニエスと来夏が機嫌をとり、真央が二人のかいなに片方ずつ腕を巻きつけてわらい顔になったとき、大河内から召集がかかった。武田と室井が何か大河内に囁くと、大河内は真っ赤になり、二人の後頭部をわしづかみにして、互いの額をぶつけ合わせた。地に伸びた室井の肢体の上に、あるうことか、空舞う鳩がちよつとした贈物を

授けていった。

「関本ー、次の試合絶対勝てよー！」

「関本様、頑張ってください！」

客席からクリスとノアの声が聞こえる。来夏は金とワインレッドの目立つ頭を見つけて手を振った。遠い中を、わざわざ来てくれたようだ。改めて友達の良いものだと思う。

アニエスが去ってから押し黙っていた真央だったが、やがて、薄桃色の唇を開いた。

「先輩」

「どうやら、今から何かを宣誓したそうだ。どうせろくでもないことなのだろう。例えば、「僕はやっぱり、絶対に先輩を尊敬するのをやめません」とか。」

果たして一語一句違わず同じ言葉が語られた。「勝手にしろ、バカ」。来夏が満更でもなさそうな表情で言う。だが、真央は次の言葉が胸に秘めたままだった。

「先輩、僕はもう夏なんて怖くありません。だって、声を失うその日にも、貴方が一緒にいてくれるような気がするから。夏を怖がる気持ちよりもずっと、貴方を尊敬する気持ちが強くなったんです。尊敬っていうのかな。分からない。えっと、尊敬っていうより、もしかすると……」

真央は胸の動悸を抑えた。先輩の風邪が移ったのかもしれない。

第五話 乙女に手折る清らけき白き花・前編（前書き）

第五話主要登場人物

- ・橋爪康太…数学教師。校長搜索隊幹部。内気な先生。
- ・桜木ほの佳…邦楽教師。和やかな雰囲気の中年の女性。
- ・谷口良隆…英語教師。通称ジャクソン先生。鳥居先生と仲が良い。

第五話 乙女に手折る清らけき白き花・前編

この学校の教師は変人だ 教師を変人と呼んで良いかの議題は置いておくことにして、これは直視せざるを得ない真実であった。

何と言ってもまず校長だ。校長の一日はランニングに始まる。花壇に水を遣り、妻とたっぷりとした朝食を楽しみ、本日の予想帰宅時間を告げて出勤する。そして、先生方の朝礼に少し顔を出して冗談を飛ばし、五分後、副校長が校長室を訪ねてみれば既にその影はない。後は校内校外神出鬼没だ。

校長搜索隊という、学校にしてみればとんでもなく不名誉な組織が存在していることは、既に申し上げた。彼らはオレンジ色の腕章とのぼりを手に、日々校長たずねて三千里を駆け回っている。隊長は副校長の川内淳一先生、幹部は、体育科の森先生と、今回の主人公、数学科の橋爪康太先生だ。はしづめこうたさて、橋爪先生の物語を始める前に、冒頭に述べた真実の一介を目の当たりにしていただきたい。

「欠席なし。皆、健康優良男児ってことねえ」

性格な表現のためなら、「え」の後ろに波線二本でも引かなければならないのだが、著者の主義のために割愛しておく。とにかく、数時間放置した麺類の如く語尾の伸びた独特の口調で、たにくちよしたか谷口良隆、自称、谷口・ジャクソン・良隆先生は言った。

「はい、問題ありません、ジャクソン先生」

クリスは気のない英語で返した。輝くばかりの金髪がジャクソン先生の目に留まって、「返事係」を命じられたのは、転校して最初の英語の授業のときだった。初めてジャクソン先生を見たとき、クリスは花木先生以来の衝撃を受けた。皆がジャクソン先生と呼んでいるので、てつきり外国人かと思っていたのだが、顔立ちはどう見ても純粹なる大和民族。いや、これくらいのことならよくあるのだが……誰が想像しようか。金のメッシュの入った女性用の鬘、黒い

ぴつちりとした衣装、カールをかけた睫に、極め付きにはチークと口紅。これらを纏った小麦色の肌の痩せた男性を。

「OK、じゃあ授業を始めるわよお。この間配ったテキストの6ページを開いてねえ……」

ジャクソン先生の語尾が、いつも通りにきつかり6秒伸びきらないうちに、教室の扉が開いた。少人数制によって1グループに割り当てられた10人ちよつとの生徒たちは、一斉にそちらを向いた。ひよる長いもやしのような印象の男性が、息を切らして立っていた。髪は薄い、幸いにもからかわれるほどではない。つるつとした顔には、細い目、下がり眉、青白い唇が並べられ、異様なまでの皺の少なさが若々しさを演じているが、橋爪先生に教えられている生徒なら、先生がもう定年に近いことを知っていた。授業中に聞かなくとも教えてくれるから。独り言の愚痴という形で。先生はいつもジャージ姿で、今日はお気に入りの黒いジャージを着ていた。左腕のオレンジ色の腕章が、校長搜索隊の活動中であることを示している。クリスと来夏は「ご苦労様です」の意を込めて頭を下げた。

「あらあ、橋爪せんせつ、どうかしまして？」

裏表ないのが取り柄のジャクソン先生は、変わらぬ調子で尋ねた。訊かなくとも用事は分かっつていそうなものだが。

「いえ、あの……校長先生を、見かけませんでしたか……っ？」

「もう、校長せんせつたらすぐにいなくなつてしまわれるのね！いいえ、残念ながらあ。でも、念のために掃除用具入れの中を覗いてみた方がよろしいと思いますわよ」

橋爪先生が忠告を聞き入れ、教室の後方にある四角い灰色の箱に一步近づいたその時だった。用具入れの戸が開き、一瞬スーツを着た何かの姿が見えた。その何かは鉄砲の弾より速く部屋を飛び出し、廊下を爆走していった。

「何の音だ?!」

「いました!隊長!校長を発見しました!」

野太い男性教諭たちの声と足音がこちらに近づいてきた。橋爪先

生はジャクソン先生に会釈をすると、間もなくやってきた群れに加わり、もう影も形も見えない校長の追跡を始めた。ジャクソン先生は、何事もなかったかのように扉を閉めたが、その表情には一抹の不安も見受けられた。今後の校長捜索隊の身を案じているのだろう。事実、捜索隊全16名の内半数は怪我で活動休止中だった。本日も三名以上が、里見先生のお世話になるはずだ。

「いつからいたんだよ……」
空っぽの用具入れを振り返り、来夏が隣で呟いた。

「最近元気ないんですね」

「えっ？校長が？」

「まさか。橋爪先生ですよ」

昼休み。クリス、ノア、来夏、菜月、落合のいつものメンバーに真央が加わり、中庭での昼餐は、普段よりささやかながら賑やかに見えた。腰を下ろした芝生は日に温められ、秋風に吹かれた花壇の花たちは、花房を俯けて転寝をしている。どのベンチも木蔭もすっかり生徒たちに占められていた。来夏は一種の怪談としてこの話を聞かせたのだが、彼を敬愛する後輩は意外なところに食いついてきた。

「橋爪って、あのもやしみたいなの？」

と、少人数制の関係でご拝顔の機会が少ない落合。

「はい、僕のクラスの担任なんですけど、最近授業中も溜息ばかりで。喋ってたが溜息吐いてるんだか分からないくらい……」

「ああ、それ、橋爪先生にしては普通だから安心しろ」

来夏の言葉にも根拠がある。彼はかれこれ三ヶ月もの間、橋爪先生の愚痴を聞き続け、微笑と同情とで慰め続けてきているのだ。因みにこの技は、生徒たちが作成した「一番前の席になると身につけられるスキル」のリストでは、上から三番目あたりに載せられている。それほど注目性が高いとも言えよう。

しかし、真央はベテランの意見をあつさり跳ね返した。

「普通じゃないですよ。実は、ここだけの話、橋爪先生は恋わずらいなんじゃないかって噂もあるんです」

「バカ言え、先生の年齢考えてみる。もうすぐ60だぞ？もう孫ぐらいのガキ相手に恋なんてできるかよ。しかも立派な犯罪じゃねえか」

「……落合先輩、何で生徒限定なんですか？」

「そりゃあ、真央、こいつの好みだからだ」

「えっ？違うの……？」

当たり前だと云わんばかりに、落合とノア以外の全員が頷いた。

首肯組に加わらなかつた理由は、落合は自分の嗜好が周囲と一致しないという事実にも呆然としているため、ノアは話の流れがあまりよくわかっていないためであった。菜月がどさくさに紛れて、弁当箱からコロッケをかつさらつていくのをクリスは見たが、今回は目を瞑つてやることにした。まだもう一個残っているはずだし……が、五秒前まで確かに存在したはずのもう一つも消えていた。

「もちろん先生ですよ。ほら、桜木ほの佳先生。ほくの先生のか邦楽の先生で、1年A組の担任の」

来夏と落合が納得したような声を出した。クリスはお目にかかつたことがなかつたが、二人の反応からして、どうやら橋爪先生の恋のお相手には至極妥当なようだ。と、また気を取られている間にハンバーグを掠め取られた。クリスは弁当をさつさと片付けながら、会話を堪能することにした。

「ほのちゃんなら有り得るな。あの人も橋爪先生より少し若いぐらいってとこだし、おまけに独身だし」

「ね、そうでしょ？」

手を打った落合に、真央も自慢げに言った。しかし、来夏は厳しい顔を作る。

「つつつてもまだ噂なんだろう？あまり変なこと言つて騒ぎ立てたら、橋爪先生にも桜木先生にも迷惑だろうが」

「そりゃ、まあそうですね……」

「確かめてみればいいじゃないですか」

突然ノアがすくつと立ち上がり、皆の注目がそこに集った。ノアは吸う歩進んで一番近くの林檎の木に近づくと、木漏れ日の破片をワインレッドの髪の上で輝かせながら、くるりとこちらを向いた。振り向いたノアの笑顔は、無邪気な好奇心と醜くない野次馬精神に満ち溢れていた。

「確かめてみればいいんですよ。それで、その噂が本当のようなら、僕たちで力を貸してあげましょう」

「よく言ったわ！」

近所の林檎の木蔭から飛び出てきた人影に、全員がひっくり返った。弁当箱が空っぽだったのを幸いに思いながら、クリスが痛む腰をさすって身を起こすと、この小さな混乱の元凶、ジャクソン先生が、ハートを撒き散らしてノアに痛そうな頬ずりをしていた。訳が分からずきょとんとしているノアを見て、クリスは何て大物なんだろうと感心した。自分がノアだったら、何をされているのか理解しない間に気絶できる自信がある。

「よく言ったわ！さすがノアちゃんねえ！ジャクソン先生感激だわあ！」

「先生、いつから聞いてたんですか……？」

「ふふ、乙女は恋の匂いを嗅ぎ付いたらレポートせずにはいられないのよお」

「先生、正直言わなくても気持ち悪いです」

来夏の素直な感想に、クリスも無言で同意を示した。が、ここで屈しないのが谷口・ジャクソン・良隆先生である。伊達に中性の世界を生きてはいない。ジャクソン先生は、青いアイシャドウで縁取った大きな目を剥き、金銀宝石の指輪が唸る重そうな両手を振り振り叫んだ。

「大丈夫！仕事をしているうちに、きつと具合も良くなるわ。ふふ、楽しみね。『橋爪せんせつと桜木せんせつのドキドキ大作戦』の始

まりよっ！」

誰一人として脱退したいと言えなかった。誰一人。

川島副校長はデスクに肘をつきながら、灰色の凛々しい太い眉を寄せ、脚を組んで座っていた。副校長の足元では、ぐったりと疲弊した校長捜索隊隊員たちが座り込み、先ほどから数分ほども収まらぬ洗い呼吸を、今も変わらぬリズムで刻んでいる。平然としているのは副校長と、幹部で体育科の森先生だけだ。全く、ただでさえ忙しいというのに。副校長はぬるい埃の浮いたコーヒーを啜^{すす}って胸中ぼやく。厄介な仕事を引き受けたものだ。橋爪先生の好きな人を訊いてきてほしいだと？恐ろしいほどの時間の無駄だ。四時までに校長に仕上げてもらわぬ書類は言葉通り山ほどあるというのに。副校長は橋爪先生にちらりと視線を遣った。隊員の中ではずば抜けて細く、ずば抜けて体力のない教師だ。それでも頑張りが一番だと、副校長は思っている。普段から何となく浮かない表情をしているのは、過去のあれこれのせいなのだが……副校長は溜息を吐いた。その音が、橋爪先生のそれと重なった。いつそ新しい恋でもさせた方がいいのだろうか。そうすれば、彼の心に執拗に絡みつく憎らしい罵^{のの}を、取り除いてやることができるのだろうか。

「桜木先生な……」

「へっ？」

思わず口に出した名前に、橋爪先生は誰よりも過敏に反応した。副校長がおやつという顔で見返すと、橋爪先生は真っ白い顔を薄紅色に染め、何でもないですと言いたげに首を振った。これはとんだ手間が省けた。谷口良隆の依頼は難なく解決したではないか。副校長は誰にも見られぬよう小さく微笑み、それからコーヒーの苦さに唇を歪めた。桜木ほの佳先生。三宿学園には七年ほど前から務めている。54歳。見た目は取り立てて美しいという訳でもないが、この年齢の女性としては十分だし、人間的にも問題はない。生徒た

ちからも好かれてるし、おっとりとした純和風なこの先生なら、橋爪先生にも妥当なのではないか。副校長はこう結論付けた。そして、何の前触れもなく席を立つと、へばっている隊員たちに喝を入れた。

「愚図愚図している暇はない！何としても、三時までには校長を見つけてるのだ！教室の用具入れ、化粧室、体育倉庫、床下、天井 思いつく限りの場所を捜せ！さもなければ、我々は三宿学園史上最大の不名誉を背負うことになるぞ！」

最早教師ではなかった。軍隊の司令官といってもよいくらい、その顔は厳しく変貌を遂げていた。隊員たちは慌ててうつぶせになり、出立前の腕立て二十回を終えると、先を争うように部屋を飛び出していった。案の定一人で送れた橋爪先生に、副校長は椅子に座るよう声をかけ、自身も元の場所に腰掛けて言った。

「あー、橋爪先生」

「は、はい……」

橋爪先生はおどおどと答えた。何となく目に落ち着きがない。

「とりあえず、何と言つか……こほん、私は君を応援しているよ」

「は、はい……はい？」

副校長は意を決し、苦く冷たいコーヒーを一気に流し込むと、橋爪先生の肩をぽんと叩いて搜索活動に繰り出した。橋爪先生は何を言われたのかさっぱり分からなかったようだが、三秒後にははっとして、慌てて副校長を追って外に出ていった。校長搜索隊本部と称されたその部屋の隅のダンボール。そこから、校長が光る頭をぴよこつと覗かせた。

「橋爪先生！」

背後から生徒に呼び止められ、朝の職員会議へと急いでいた先生も思わず足を停めた。振り返れば、秋元真央がこちらへむかっただとたと駆けてくるではないか。まさか、クラスで喧嘩でもあった

ではないか。橋爪先生は身震いした。やめてくれ、それだけは。例え三十年が経っていて、頭に受けた傷は癒えたとしても、その記憶は決して忘れ去られている訳ではなかった。

「先生、あの、ちょっとお話が……」

その言い方から察するには、緊急の用ではないらしい。橋爪先生はほっとしたが、職員会議のことが気になった。あと三分で始まってしまふ。だが、生徒が自分を追いかけてきてくれたのを思うと忍びなく、先生は頷いてしまった。

「はい、何でしょう……？」

真央はズボンのポケットに手をつっこむと、白い封筒を出して渡した。今度は爆弾ではないかとの疑惑が先生を襲った。だが、手に持ってみれば分かるとおり、それは爆弾でも、次にもしやと思つた大麻でもなかった。真央のコンサートのチケットだ。今週の日曜日、つまり明後日に行われるらしい。チケットには、真央と伴奏者アリエスの凛々しい横顔が描かれていた。つい先日クリスが緊急で仕上げたものだ。そもそもコンサート自身が、アリエスが日本にいるために開催することになったという急なものだったから。

「ああ、コンサートですか」

「はい。ちょうどいい席がとれたんです！先生にはいつもお世話かけてるし、来てもらえませんか？」

橋爪先生は日曜の予定を思い出してみた。電話脇のメモにも、ポケットに突っ込んである手帳にも、何も書いた覚えがない。橋爪先生はぎこちなく微笑んだ。

「ええ、わかりました。ありがとうございます」

真央の顔がぱつと輝いた。

「本当ですか？！うわあ、ありがとうございます！」

橋爪先生は真央の笑顔を見つめてつくづく思う。本当に、生徒の笑顔ほど良いものはないと。三十年近くも教師を続けてきた先生であつたが、どんなに気分が悪くても、生徒の笑顔があればたちどころに完治してしまつた。自分をからかつて笑つたその顔でさえ。そ

れとももうすぐお別れなのか。橋爪先生は急に虚しくなった。少し膨らんだ胸も急激にしぼんでしまった。が、響き渡った鐘の音が、先生の心臓をいつきに跳ね上がらせる。

「あつ、いけない!」

橋爪先生はつんのめる様にして走り出した。まずい、遅刻だ。真央の呼び止める声が追いかけてきた気がしたが、とりあえず手を振って反応するだけに留めた。後で用件は聞くとのメッセージを、左手に込めて。

「あーあ、行っちゃった……」

真央は肩を落とした。肝心な部分を伝えられなかったではないか。先生の目にちゃんとペア用チケットの白い文字が映ってくれるかは、ほんまは甚だ疑問である。

毎朝恒例、校長の駄洒落大会が終わる前に、橋爪先生は何とか職員室に滑り込むことが出来た。話題の人、桜木ほの佳先生は、橋爪先生に気付くと微笑んで会釈した。彼女以外の教員は、校長の駄洒落に身も心も凍て付いていた。

「……さて、それでは全員揃ったようなので本題に入りましょう。えー、最近学園の敷地内で不審者を目撃したという情報が相次いであります……」

「不審者?」

森先生が眉をひそめた。

「私の方に連絡は来ていませんが……」

森先生は口を噤んだ。副校長の目が「どうでもいいからとにかく黙れ」と語っていたからである。森先生は急いで首を振り、口の中でもごもごと呟いた。

「い、いえ、私の勘違いでした……」

「そうですね。まあ、とにかく不審者がうろついているという情報があります。今日の放課後から、先生方にペアを組んで、敷地内の巡回をお願いしたいのです。皆さん机の方に割り当て表が配られ

てあることと存じます」

皆が一斉に紙を手にとる音がした。橋爪先生もそれに倣い、目を凝らして危うく表を取り落としそうになった。橋爪康太・桜木ほの佳、午後五時半から六時半まで中庭の巡回

「あら、先生、一緒ですわね」

桜木先生は小声で囁いてくすぐすと笑った。橋爪先生は首をこくこくと縦に振るばかりで、相手の表情を盗み見る余裕などまるでなかった。首筋がいやに熱く、ジャージの襟がくすぐりたい。顔の色に驚きと焦りが出ていませんように。橋爪先生は祈った。

野瀬先生が手を挙げた。

「はい、何でしょうか？」

「校長先生、不審者が目撃されたのはいつ、どこで、どの時間帯なのでしょう？それと、外見などの情報は入っているのですか？」

校長先生は、その質問は最もだとも言うように頷いた。

「最初に不審者が目撃されたのは三日前。野球部の一年生二名が寮へ帰る途中、中庭を徘徊する怪しげな男を目撃しました。男は紫色の目出し帽に赤いジャンパーをはおり、黒いズボンとスニーカーを履いていたそうです。我々は警戒を強化しましたが、その翌日に、今度は居残っていた二年生の生徒が、同じような男を校門前で目撃しました。我々は更に更に警戒を強化しました。しかし、つい昨日も！」

風間校長はぴんと人差し指を天井にたて、もう片方の手で机をバンと叩いて力説した。

「同じく居残っていた生徒によって、同様の不審者が目撃されました。現在のところ、男の目的は不明。生徒を見ても特に危害を加える素振りは見せなかったようですが……いや、何かあるか分かりません！警備員ではそろそろ限界が来ています。本来なら警察に連絡すべきなのですが、ここはまず！教師が生徒のために体を張るうではありませんか！」

校長の熱中ぶりに感化されたよう、教師たちも揃って賛成の意を

示した。橋爪先生だけが真つ青だった。不審者退治を桜木先生と？冗談じゃない。自分はとても桜木先生を守る自信なんてない。先生に万一のことがあったらと考えるだけで身が竦んだ。だが、先生が反抗するいとまもなく、職員会議はさっさとお開きになってしまった。途端に拡がった職員室のざわつきの中に、桜木先生の笑声もまじった。

「ふふ、校長先生ったら珍しく熱が入って。頑張りましょうね、橋爪先生。私、走るのだけは得意ですから、逃げた不審者を追っかけることぐらいはできますわ。いつそ三味線の撥ぼちで叩いてやるうかしら。こうね、ぴしつと」

「ええ、ぴしつと……」

「あら、こうですね。ぴしつー！」

「ぴしつ……！」

「そうそう、お上手」

呆然自失の橋爪先生には、自分の手が何をやっているのかさえも、知る術がなかった。

しかし、不安も忙しさの中に紛れた。昼休みになり、橋爪先生が空きつ腹を抱えて職員食堂へ来てみると、養護教諭の里見先生がここにこと表情を緩めて近づいてきた。

「橋爪先生、今日から食堂が指定席になったんですよ。先生は一番奥の右から三番目の列です。ほら、桜木先生の向かい」

橋爪先生は卒倒しそうになるのを辛うじて封じ、無理矢理に笑みを作った。里見先生は、桃色のルージュをひいた唇を不敵に歪ませた。若く鋭い里見先生は、橋爪先生の想いなどつくに読み越していたのである。橋爪先生の顔に表れる変化を確かめ、先生はにっこりと満足し、途端に顔をぎゅつと顰めた。

「私は旦那の前なんです。もう、学校でも顔をつき合わせて食事をしろって言うの？そりゃあ、付き合う前とかだったら嬉しいかもし

れませんけど。ねえ、先生？」

「ぼ、僕にはわかりかねます……！」

橋爪先生は火のついたように超高速で逃げ出し、波乱の食堂の中へ自ら舞い込んでいった。里見先生は上手くいったとばかりにほくそ笑み、それから遠くに、夫である化学講師の冴えない姿を見つけて露骨に嫌な顔をした。そこに白衣の天使の姿はなかった。

「あら、橋爪先生ったら随分小食ですね。こんなにながつがつ食べる自分が恥ずかしくなりましたわ」

「いえ、ががつなんてとんでもない……！」

正直に言えば、それは本心から出た言葉ではなかった。桜木ほの佳先生は、橋爪先生にも劣らず細身で小さな先生だったが、食事の量は彼の十倍をゆうに越していたから。それでも、白いもののみじつた小鳥のような頭を少しも動かさずに、カレーうどんをこぼさず優雅に頂く先生は、乙女のような愛らしさと貴婦人のような気品に溢れていた。大きなメガネの奥で、細まった目が奥ゆかしく揺れている。今がチャンスだ。橋爪先生は手の震えを抑えようと必死だった。唇が何度か動きかけ、なれない誘いの文句を紡ごうとした。出来なかった。目を瞑る度、瞼の裏で、椿の香のする長い髪がなびき、若いまま保たれた美貌が、悲しげにこちらを仰いで言うのだ。

「私を置いていかれるのですね、康太さん」

声が詰まった。

結局、二人は掃除機の話をして終わった。一部始終を聞いていたジャクソン先生は額に手を充てて残念がり、携帯電話を取ってクリスに連絡をした。クリスは報告をきいても、乗り気でないように、はあと聞き流すだけだった。

「という訳でね、橋爪せんせつ、がペアチケットのことに気付いたのかは分からないのよお。どうしよう、クリス君？」

「どうしようって……秋元君が後で言うしかないでしょう」

「それがねえ、マー君、今日の午後から練習で学校早退しちゃった

のよお。他の人がチケットのこと知ってるのもおかしいい。本当にどうしよう?」

「そのうち気付きますよ。入場前とかに……それより先生、本当に今日の作戦やるんですか?」

「ええ、もちろん」

「本気で?」

「あたしに本気じゃないことなんてなくってよ」

電話越しに重たい溜息を吐く。クリスは失望のあまり頂垂れていた。あの羞恥心をずたずたにされるような計画を実行するなんて。

「いいじゃない。奉仕活動だと思って、ね?」

「……学園中のゴミ拾いの方がまだましです」

一方的に電話を切られても、ジャクソン先生はまるで気にしなかった。意気揚々としてテイベアつきの携帯電話をしまつと、一緒に席を立った橋爪先生と桜木先生を睨み、そこに秘密の約束が交わされていないかを見極めようとした。

「ジャクソン、から揚げもらっていい?」

「黙りなさい!」

鳥居先生はその返答をイエスと見なし、隣のプレートの上のから揚げを三つまとめて口の中に放り込んだ。

第五話 乙女に手折る清らけき白き花・後編

橋爪康太先生は、休まらない思いで校門前に立っていた。腕時計代わりのストップウォッチを見遣れば、後十分ほどで時刻は五時三十分になることが分かった。桜木先生はまだ見えない。橋爪先生は擦り切れたスニーカーの爪先を擦り合わせた。間もなく辛く不安な任務が始まる。今の処、誰からも不審者の目撃情報は入っていないが、安心するには早すぎた。不審者を目撃したのは居残りや部活で遅く帰った生徒たちだ。校長は直接語らなかったが、それらから推測するに、不審者が現れたのは、完全下校時刻の六時から六時半までの間と考えられる。つまり、時間帯的には、橋爪先生たちの警備活動と被っているということだ。

橋爪先生は黒い一重の目を落とし、改めて自らの心身の虚弱さを呪った。体育科の森先生ほどとは言わない。ただ、人並みの力と勇気さえあれば、もう少し張り切ってこの仕事にも望めるはずだった。もちろん、胸に滲む心配は変わらなかった。桜木先生に万が一のことがあったらどうしよう、という。しかし、まさか、彼女に危機が及ぼうとしているときに腰を抜かしている自分や、不審者が彼女に構っているのを幸いに逃げ出す自分など、思い浮かべずに済んだはずだ。意気地なしの自分は想像して震えている。心の底から情けなかった。

「それに、もし、おまえにもう少しの勇気があったら
意地の悪い声が言った。

「あの女を捨てて逃げ出すこともなかっただろうよ」
橋爪先生はこめかみの辺りを押さえた。ふつと身が軽くなるような感覚がした。懐かしい声が響く。かつて愛した声、そして今も、やはり心のどこかで愛している声。

「いいえ、それでも私は貴女を意気地なしとは呼びませんわ……！」

「橋爪先生？」

悲痛な叫びとは似ても似つかない、無邪気な声に名を呼ばれる。橋爪先生ははつとして目を上げ、何に対して謝っているのかはさっぱり分からないまま、とりあえず頭を下げて謝罪の言葉を述べた。黄色いカーデイガンで肩を包み、大きなメガネの奥で瞳をぱちくりしていた桜木先生は、堪らず笑い出した。

「もう、橋爪先生ったら、しっかりしてくださいな。謝らなければいけないのは私の方ですよ。すっかりぎりぎりになってしまつてさあ、早く中庭へ参りましょう。不審者を捕まえ損ねたなんて嫌ですからね」

校門から中庭までの道を共にいく生徒は多かつた。生徒たちは、並んで歩く橋爪先生と桜木先生の姿を指差し、何事か囁いたり、くすくす笑つたりした。橋爪先生は「警備係」と書かれた腕章を引き上げ、あくまでも仕事であること強調しようとしたが、生徒たちの疎くなった目には映らない。桜木先生も周りの目を気にする素振りも見せない。意識しすぎているだけなのだ、きつと。橋爪先生は急に恥ずかしくなつて目を伏せた。その動きに合わせるように、警備係の腕章もぐたりと頂うなだ垂れた。

「お疲れ様です」

中庭に到着した二人は、四時半からのシフトにあたっていた野瀬先生と花木先生と交代した。野瀬先生は体育教師で、花木先生は顔だけで十分な威嚇効果を持っている。屈強なコンビだ。もし、自分が不審者だったら、この二人の巡回中なら徘徊を諦めるだろう。それに引き換え、自分と桜木先生の何と頼りなくみえることか。橋爪先生は、不審者がこの身の弱弱しさに同情して、今夜の行動を延期してくれることを祈るばかりだった。

だが、桜木先生は随分と胆が据わっていた。先生は互いに別れて警備しようと言った。橋爪先生は、最初は頷かなかつた。もしもの

時は、二人一緒にいた方が安全と思つたからだ。すると、桜木先生はこう言つた。

「私たちは何が何でも不審者の徘徊をやめさせなければなりません。校長先生は『体を張つて』生徒たちを守ろうと仰いました。生徒たちに、万一のことなど絶対にあつてはならないのです。二人で別々に行動した方が、警備の目は広がりますわ。私、笛を二つもつてきましたの。これを首にかけて、何かあつたらこれを吹くことにしましょう」

橋爪先生は何も言い返すことができなかった。彼女に感服した。そして、我と恋する人ばかり可愛がつていた自分を、頭ごなしに叱り飛ばした。そうだ、これは生徒のための仕事なのだ。覚悟した先生には、きちんと褒美があつた。桜木先生とお揃いの赤い笛を持つことができたのだ。

「では、先生、お氣をつけて」

「ええ、桜木先生も……」

二人は別れた。桜木先生は噴水広場の方へ向かい、橋爪先生は林檎の林の中へと足を踏み入れた。ジャージの胸元で膨らむ笛が頼もしかった。二人は知らない。すぐ傍の花壇の陰に、酒本菜月が小さく丸まつていたことを。

「なんだか今日は先生方が騒がしいね」

生徒会室の窓際で、颯が呟いた。仕事を片付けている慎の姿を見飽きた彼は、ちょうど地上へと視線を落としたところであつた。先ほどから、何人も先生が、校庭やら中庭やら校門付近やらを、忙しく動き回っていた。陽の提出した予算書の数字が合わないことに気付いてしまった慎は、興味なさそうに鼻を鳴らした。

「不審者対策だそうだ。三日間相次いで知らない男が目撃されたらしい」

「不審者？おかしいな。僕はそんな話聞いてないよ」

「ああ、俺もだ。報告は愚か噂にも聞いたことがねえ。校長に訊いても何も教えちゃくれねえし……一体どうなってんだ?!」

一体どうなってんだ、とは、実際は、慎の予算書への素直な感想なのであったが、それを不思議な騒動に対するものを勘違いした颯は、顎に手を充てて考え込むような動作を見せた。

「慎にも教えてくれないなんて変だな。校長が何か企んでるのかもいや、待って……もしかして、あの人が?」

「どこのあの人だろうが、そいつが仕事熱心な奴なら会計の代わりに引き抜いてこい」

慎はぴしゃりと言って、颯の疑惑を潰した。どこかで笛の音が鳴った。

「桜木先生!」

橋爪先生は駆けていた。林檎の枝にお気に入りのジャージを引つかかれようが、木の根に躓つまずきそうになるうが、まるでお構いなしだった。広場の方から笛の音が聞こえた。聞き間違いなどではない。何かがあったのだ。不審者が現れたのかもしれないし、それよりもっと危険なことが、危険でないことが起こったのかもしれない。とにかく必死だった。どうか桜木先生のちよつとした勘違いであつてくれと、何かあつたとの確信を覆すほどに祈り続けた。

「桜木先生、大丈夫ですか?!」

林の奥に緋色の輝きが見えるなり、橋爪先生は何も考えずに噴水広場に躍り出た。

男は悔やんでいた。行動のタイミングを失敗したのだ。おかげでバットを掲げたまま、膝元に縮みこむ桜木先生の前に立ち尽くす羽目になってしまったではないか。先生もいい加減怪しく思っただちらを見上げてくる。その度に腕をぴくりとさせて威嚇したが、もうそろそろ限界がきていた。頼む、早く来てくれ、頼むから 橋爪

先生が桜木先生の無事を祈っていたように、男も目出し帽の中で祈っていた。もう無理だ。あと三秒の間に来なければ、くるりと踵を返して逃亡しよう。

「桜木先生、大丈夫ですか?!」

橋爪先生の声を目にしたとき、男は天にも昇る心地で、神に感謝してもしきれぬほどだった。だが、演技はこれからだ。男は更に高くバットを振り上げた。桜木先生が悲鳴を上げる。橋爪先生はこちらの狙い通りにタックルを仕掛けてきてくれたが、背中に伴う痛みは想定外だった。唇から漏れる悲鳴を懸命に堪えた。だが、こちらが悶えている間に、橋爪先生は、桜木先生に職員室へ行って報告するよう頼んでいた。桜木先生は素早く頷き、こちらにちらりと眼鏡の反射光を寄越すと、超特急で走り去っていった。橋爪先生が男の方を振り向いた。男は急いで立ち上がった。捕まって顔を見られたら終わりだ。さっさと退散しなければ。だが、橋爪先生はその場に立ち止まったままで、深い溜息を漏らした。盛んだった男の肺の活動は、その音を聴くなり鎮まった。疲労が、先生の顔面からアドレナリンを捌け、眼の奥にまで老いを注ぐのを見れば、男の胸も動揺をやめる。疲弊し、歳を重ね、悲しい悟りと諦めの泉に腰まで浸して、先生は静かに宣告した。

「もう結構です、こなくなくだらない茶番は」

男こと石崎・エーリアル・クリスは、何を言われたのかさっぱり分からなかった。気がついていたら、右手が目出し帽を脱がして捨てていた。橋爪先生はクリスを見て少し意外な顔をしたのみで、特別な驚愕は示す価値もないと結論付けたようだった。

「そこにいる人たちも出てきなさい」

「そこ」とは、先生の背後の茂みを指していた。先生の声音の硬さに命じられ、まず落合が気まずそうに這い出してきた。次に、菜月、来夏、ノア、そして……

「副校長先生、谷口先生まで……」

橋爪先生が驚き呆れたように言うと、二人は俯いて頬に影を湛え、

いかにも申し訳なさそうに双肩を縮めてみせた。クリス以外の六人は、できるだけ橋爪先生から距離をとりながら、まるで叱られている生徒のように横一列に並んで目を伏せた。橋爪先生は何も言わなかった。あまりのことに、言うべき言葉が見つからないようだった。居心地の悪い沈黙が訪れ、やがてそれは、発せられるべき怒りと咎めすら攫さらっていつてしまう。堪らず口を開いたのはクリスだった。

「先生！」

橋爪先生が振り返った。戸惑いばかり浮かべて。

「ごめんなさい！あの、俺たち、先生と桜木先生を……」

「いいんですよ。何だか具合が良すぎるなと思っていましたから。全部あなた方が仕組んだことだったんですね？食堂の席を指定席にしたり、いもしない不審者の噂を流したり……皆さんは僕を見くびっていらしたようですが、僕もそこまでバカではありません。違和感がありましたよ、薄っすらとね」

「先生、そんな……！」

「いいえ、何も言わないでください……しかし、まあ、よくもこの老いぼれを焚きつけてくれましたね。危うくもう少しで本気になるところでしたよ、この恋に」

橋爪先生は赤く燃える空を仰いだ。夜の筆より滴り落ちた墨が、茜色を少しずつ蝕みつつある。皆もそれに倣ったが、クリスだけは橋爪先生の横顔を見つめていた。斜陽のいたずらだろうか。橋爪先生の頬を、一筋の光が伝った気がした。

「僕は恋をする資格などない人間なのに」

今から三十年以上も前の話です。

教師の卵だった僕は、ある時一人の女性と出会いました。夜食にうどんを食べに行ったその帰りです。その女性は暗闇の中にしゃがみ込み、足首を押さえていました。時折あげる痛そうな声を聴く限り、まだ若い女性であるように感じられました。冴えない青年だっ

た僕ですが、怪我でもしたのかとかわいそうになって、女性に声をかけました。女性は足をくじいてしまったのだと言いました。僕は友人の医者の家まで肩を貸しました。友人といっても、僕より一回り以上も年上で、妻も子もいる人でしたから、大丈夫だと思いましたが、まあそのつまり……過ちは起きないだろうと思えました。

友人とその家族は快く女性を迎え入れ、その日一晩泊まる部屋まで用意してくれました。女性は、最初は遠慮していましたが、奥さんに優しく説得されて最終的にはその申し入れを受け入れ、深々と頭を下げて礼を言いました。黒く長く伸ばした髪、何遍眺めても飽きないような美しい女性でした。その心も素敵でした。優しく、慎ましく、善良で、美德を絵に描いたような女性でした。友人の元を去るとき、若かった僕は、既に淡い恋心を抱いていました。

数日後、女性から電話がありました。先日のお礼がしたいのでぜひお宅に伺いたい、女性はそう言いました。しかし、当時僕が住んでいたのは、家賃が安いだけが取り得のボロアパートで、夜中でも薄い壁を通じて、酔っ払いや柄の悪いごろつき共の怒鳴り声が聞こえてくるようなところでした。こんなところに、女性を一人で来させる訳にはいきません。僕たちは近所の喫茶店で会いました。何を話したのかはまるで覚えていませんが、その日から二人の付き合い合いが始まったことだけは覚えています。夢のような日々でした。僕は本気で彼女を愛しました。それは、単に彼女が美しいからではありません。彼女が例え醜くても、いえ、いつそ彼女が体を持たなくとも、彼女の真に美しい心がそこにあれば、僕はそれを愛したと思います。僕は彼女になら全てを捧げられる思いでした。結局我が身が一番可愛いのだと知るのには、もう少し後のことです。

幾月もの逢瀬あひせを重ね、僕らの口にしばしば「結婚」という単語がのぼるようになりました。ですが、彼女のご両親は断固反対なさいました。僕が恋したその女むすめは、由緒正しき家の娘さんだったので、戦後になって家の財政は傾く一方だったのです。ご両親からしてみれば、大切に育てた娘を、財産もろくになく、将来の見込みも

ないしが、ない教師などに遣る訳にはいきません。僕の母もこの結婚には反対しました。僕は非常に悩みました。彼女を他の誰にも渡したくなかったけれど、僕が彼女を幸せにできる保証はありませんでした。

ある夕方のことです。彼女が僕のアパートへやってきました。彼女は僕の部屋の戸を激しく叩き、僕が出るなり飛びついて、声を押し殺して泣きながら、駆け落ちしてくれと頼みました。僕はまるで頭を打たれたような衝撃を受けました。それはあまりにも現実離れした提案でした。しかし、麻痺した脳は僕を頷かせ、荷物をまとめさせました。財布の中のわずかな金を握り締め、僕らはその夜アパートを出、列車に飛び乗り、さびれた海沿いの田舎の宿に泊まりました。宿のおかみさんは僕らを胡散臭い目で見ましたが、しつこく干渉はしてきませんでした。砂のじりじりしたあさりの味噌汁と茶色いご飯に少し口をつけ、空腹に胃を痛めながら、湿ったかび臭い布団に潜り込みました。窓から隙間風が入り込み、畳は訳もなく軋みました。彼女が寝静まった後、僕は自分を苛めました。何故こんなことをしたのだ。何故彼女から幸福を奪うことをしたのだ。その次に、僕は恐ろしくなりました。自分が背負ってしまった責任の重さに気付いたからです。最早彼女のことなど頭にありません。駆け落ち未遂を起こした女性の哀れな末路など、僕には関係ないと思いました。自責の念、重い責任、目前に迫った貧困と不幸。こうしたものから逃げ出したい一心で、夜明けが来ると、僕は匿名で彼女の実家へ電話をかけ、彼女の居場所を報せました。そして、宿代だけ残して彼女の元を去りました。僕が部屋を出ようとしたその時、彼女が咳きました。

「いいえ、それでも私は貴女を意気地なしとは呼びませんわ……！」
彼女が寝ていたか起きていたかは分かりませんでした。確かめずに宿を飛び出してしまったのです。そうして、僕はたった一人の生活に戻りました。彼女からも、彼女の家族からも、一切連絡はありませんでした。僕はほっとしました。しかし、彼女への想いを断ち

切る機会は与えられませんでした。僕は重い罪と自ら捨てた愛を引き摺りながら、その後を生きることになったのです

これが、橋爪先生が語った全てだった。白のアトリエに集った面々　クリス、ノア、来夏、落合、菜月、ジャクソン先生、副校長先生、そして、実は今回の企みに加担していた校長　は、それぞれ椅子やソファや床に腰をかけ、黙って先生の告白を聞いていた。橋爪先生の声が失せると、居間に響く唯一の音は、鍋の中身がぐつぐつと煮立つ音だけになった。橋爪先生は息を吐いた。

「つまらない話をお聞かせしました。つまり、僕にはこういう経緯があるために、恋をする資格などないのです。ましてや、その恋を叶えて幸せになる資格など、とても……僕は孤独の似合う人間です。自分でもそう思います。僕が教師になったのも、子供たちとの関わりを求めてでした。しかし、僕が子供たちと心から通じ合うことはありませんでした。それは僕への罰なのかもしれません。でも構わないのです。罪深い僕には相応しい……」

ノアが出来たてのきつねうどんを配り始めた。誰が合図した訳でもなく、皆がほぼ同時に箸をとり、うどんを啜った。美味しい。口には出さなかったが、胸の中で誰もが眩き、そこに束の間の癒しを見出した。が、偽りの慰め合いと妥協にクリスは騙されなかった。

「そんなこと仰らないでください！」
少し苛立った面持ちと荒げた音色が、皆を驚かせ、その注目を誘った。

「恋をしてはいけないなんて、誰が決めたんですか？先生が勝手に思いこんでるだけだ。自分には孤独が似合うだって？似合うように振舞ってるだけじゃないか！先生は卑怯ですよ！現実と向かい合う勇気がないのを、全部過去の所為にしようとして。現実から逃げないでください！それじゃあ恋人を置いて逃げたときとまるで変わってません。俺は、先生は十分に償いをしたと思います。今まで散々苦しんできたんですから。でも、まだ償い足りないと仰るなら、今

度こそ逃げ出さずに、覚悟を決めて現実と立ち向かうべきです。一人女性を泣かせたのなら、一人女性を幸せにしてください」

「ああ、君の言葉は眩しすぎる！」

橋爪先生はうどんを床に置き、頭を抱え込んで叫んだ。張り裂けそうな胸が露になりそうなほどに。

「君の言葉は正しいかもしれない！だが、僕には眩しすぎる！僕は向かい合うことができない！」

そして再び、誰もが何も言わなくなった。クリスの刃もこぼれた今、そこに集った人々にできるのは、うどんを食べ、何も解決してはくれない安らぎに心憩わせることのみであった。橋爪先生は身を震わせていた。涙のない苦しげな嗚咽が、時たま静寂に足跡を落とした。「そういえば」

急に口を開いたのは菜月だった。

「桜木先生、右足引きずってた気がする。職員室に走ってく時に」

橋爪先生の嗚咽おえつが止まった。

「ああ、俺も見た。石崎に襲われたときに、足を挫いたんじゃないかと思っただけだ」

「まじかよ。それって見舞いに行った方がいいんじゃないか？つつつても、俺たち、ほのちゃんの住所なんて知らないけど」

と、来夏と落合。その時、校長がソファから飛び起きた。うどんが副校長のズボンの上に零れた。

「何と！僕としたことが！校長室の扉を開けっぱなしにしてきましたよ！机の上には職員の住所録が置きっぱなしだったっていうのに！」

「どうするんですか？七時半になったら教員も校舎の中に立ち入れなくなるんですよ！」

「校長せんせつたら、もう、お茶目さんっ！」

仕上がったズボンのしみが気になる副校長と、校長をちよいちよいと小突いてジャクソン先生が言う。皆が息を潜め、見つめる先は同じだった。とても視線に耐え切れなかった。橋爪先生は椅子が倒れるほど勢いよく席を立った。

「すみません！忘れ物をしたので学校に戻ります！お邪魔しました！」

橋爪先生が星のように部屋を出て行くのを見届けたとき、一同の顔にはどこか悪戯っぽい、でも優しい笑顔が溢れていた。しかし、ジャクソン先生だけが不思議そうに首を傾げた。

「橋爪せんせつは、チケットのことに気がついたのかしら？」

橋爪先生は夜を駆けていた。白のアトリエで先ほど確認した。現在の時刻は七時だった。もちろん三十分もあれば校舎に辿り着くとは付くのだが、一度走り出した以上は待ち切ることなどできなかった。

「橋爪先生、待つてくださーい！」

後ろから声が追いかけてくる。橋爪先生はもどかしい思いで立ち止まった。今更一体なんだというのだ？やって来たのはノアだった。エプロンをつけたまま、足には靴下を履いたのみ。両腕に白い花の鉢植えを抱いている。

「先生、これ……持つててください……ほんのお詫びですから……！」

ノアは息を切らしつつ、しっかり鉢植えを先生に手渡した。橋爪先生は礼代わりに一回大きく頷くと、疾走を再開した。負けるな、康太。逃げるな、康太。現実と向かい合うんだ。この恋と向かい合うんだ。僕は孤独なんかじゃない。僕には味方大勢いるんだ。

校長室の電話を拝借した。校長の言った通り、机に広げっ放しだった住所録を漁り、桜木ほの佳の名前を探す。示されていた電話番号を何度も間違えながらプッシュし、呼び出し音が鳴っている間に彼女の住所を手帳にメモした。五回目の呼び出し音が鳴り終わる直前、桜木先生はようやく電話に出た。

「はい、桜木です。どちらさまですか？」

橋爪先生は呼吸を一つして言った。

「もしもし、三宿学園の橋爪です。ええ、はい。あの、実は……」

「今日のコンサート、よかったぞ」

「ありがとうございます！来夏先輩！」

「ほのちゃんも橋爪先生もいい感じだったし。脚の怪我也結局軽いねんざだったらしいしな。ほのちゃんったら、意外とお洒落なのな。帽子に白い花なんか差して」

「女性はいつまでも乙女って言うからな」

「明るい笑いがさざめく。門衛に外出許可証を見せてつけて学園の敷地に踏み込んだ直後。もう星が空に煌く時限の三宿学園で。」

「じゃあ、俺たちはこっちだから。また明日な」

来夏が林檎の木で分かれた道の左側を指して言った。

「うん、じゃあね」

「今日はありがとうございました！石崎先輩、有瀬先輩」

「いいえ、こちらこそ。では、失礼します」

寮へ向かう四人と、アトリエへ向かう二人は手を振り合って別れた。あまり出歩けない夜の学園を、遠くに星や月や白い塔や校舎を望みながら、クリスとノアは楽しく語らって歩いた。アトリエへの帰路は遠かったが、二人はちつともそれを苦に思わなかった。互いの話が互いを魅了していたからだ。

「あれっ？」

アトリエに到着するなり、クリスは訝しげな声をあげた。ずらりと鉢植えが並べられる階段の中、一つだけ空っぽの段があるのに気がついたのだ。鍵を開けようとしていたノアも振り向く。

「有瀬、ここにあった白い花は？」

ああ、と思い出してノアは答える。

「橋爪先生に差し上げたんです。ほんのお詫びのつもりで。橋爪先生は桜木先生にプレゼントされたみたいですけど」

「えっ、あんな一生懸命育てたのに？」

「クリス様、前も言ったじゃないですか。花は世話なんかなくて

も勝手に……」

やっと鍵が開いた。どうも他の場所の鍵と取り違えていたようだ。きちんと目印をつけておかなければいけない。思いついて顔を上げたとき、ノアはクリスの手がすつと頬に寄せられたのに気がついた。クリスはノアの専売特許を奪って微笑むと、頬の上で指を火照らせ、月光に煌く青い目を細めて囁いた。

「優しいね、有瀬は」

ノアは灰色の目を大きく開けた。

同じ月と星の下、橋爪先生と遅めの夕食をとって別れた帰り、桜木先生は帽子の白い花に触れた。橋爪先生が私のために手折ってくださった。この老いぼれのために、清らかな純潔の花を、白百合を。桜木先生の胸は弾んでいた。まるで妙齡の乙女のように。

第六話 落ち葉色の美学・前編（前書き）

第八話主要登場人物

・小杉荔枝

3年生。生徒会議長。

気位の高い優雅なバイオリニスト。陽と共に行動することが多いが

……

・川崎陽

3年生。生徒会会計。

掴みどころのない不思議な少年。ドラムの腕で学園中の人気を集める。

・氷室弘毅…氷室財閥統領。

・氷室彼方…弘毅の養子。氷室財閥の跡取り。

第六話 落ち葉色の美学・前編

何故手に取ってしまったのかはわからない。恐らく見た瞬間に惹かれていたのだと思う。優雅で誇り高く、穢れを目前にしても尚頭を高く掲げ、深い紺青の奥で輝き続けていた赤い宝石。川底の丸石でさえ幼子を魅了するというのに、怒濤の海に潜むその宝石の、いかに人の心を虜にして離さぬこと。

海の紅玉に射すくめられ、荒い波に四肢をもがれた人は数知れぬ。ただ分かるのは、自分がその数多の先例に加わらなかつたことのみだ。宝石は浮かび上がり、この手に重さを預けている。時折歌を歌いながら。転がり落ちかねない危うさを保ちつつ。

「何あれ？」

「どれ？」

金曜日の放課後のことであつた。美術部に道具を借りて（部長である落合の友人という立場を利用して）颯に頼まれたダンス部の大会の背景を仕上げたクリスは、落合のまじいものを見たような声にも、ほぼ反射的に聞き返した。それから、落合が黙つたままでいるのを疑問に思い、ふと水道の絵の具から目を逸らして振り返り、落合と同じ色になつた。絵の具を頭から被つた訳ではあるまい。だが、二人の顔は言及せねばならぬほど、鮮やかな青に染められていた。

「と、鳥居先生……」

「みちるちゃん、何してんの……？」

「う、うるさいわね！放っておきなさいっ！」

歳の割につややかな顔面を朱に染めて、鳥居先生はやけになつて怒鳴つた。隣にはジャクソン先生もいたが、紫色のお化けと化した彼もしくは彼女のインパクトも薄れるまでに、鳥居先生は大変身を

遂げていた。栗茶色に染めた（落合曰く白髪染め）、普段は無造作に垂らした髪を上げてうなじを見せつけ、耳には小さな緑の石のイヤリング、真つ赤な顔に化粧を施し、鹿のようにしなやかな身はグレイのスカートスーツで覆われている。自慢の脚はストッキングを纏まとったのみで、膝から露になっている。否、美しいのだ。女性としては一級品なのだ。だが、出来すぎた装いが、綺麗なのにどこか冴えない鳥居先生を不思議と一層彷彿させるのだ。先生はそのことに気付いていたが、今更コーディネーターに文句を言う訳にもいかず、それが自分の美的感覚のみに留まることを願っていた。そして、緊張で死にそうなときにこの仕打ち。

「あー、もう無理よー、私帰るー、ジャクソンー！」

「何バカなこと言ってるの！子どもじゃないんですからねっ！」
と、親友のためには厳しいジャクソン先生。

「あの、何かあるんですか……？」

クリスが恐る恐る尋ねる。

「お見合いよ。お、み、あ、い」

「えっ、今からですか？」

「今からって何よ？今からって？！まさか歳のことじゃないでしょうね？！」

「まあ、そんなたいしたものじゃないんだけどねえ。あたしい、実はコーディネーターみたいな仕事をやってね、ああ、もちろんお給料をもらってる訳じゃないのよお。ただの趣、味。それがどうも評判よくなってねえ、結構有名な人とか、上流階級の奥さんとかも付き合うようになったの。で、ついこの間、まあ成り上がりって言えば成り上がりなんだけど、親切な奥様に出会ってねえ。で、紹介されたのが時の人！二十九歳の貴公子、氷室彼方ひむろかなたさんよお」

「二十九歳の……」

「貴公子……」

クリスと落合は実際に口に出してみても、語呂はいいが代名詞としての仕事か浅薄なことに早も気付いた。氷室彼方との名前にも聞き

覚えなく、二人は訝しげに顔を見合わせる。

「もうう、知らないのお？全く、これだから最近のお子様は。氷室財閥の跡取りよあ……氷室財閥ぐらいは知ってるでしょあ？」

二人は考えるもせず首を振った。

「もうう、信じられなあい。氷室財閥っていうのはねえ……」

人差し指の代わりに小指をぴんと立て、氷室財閥について長つたらしい説明を始めようとしてジャクソン先生の袖を、鳥居先生が引っ張った。

「ジャクソン、もういいわよ！私行くから！行くだけ行つてくだけてみるから！早くしないと遅刻しちゃう……！」

「はいはい。我儘なんだから、もう。まっ、氷室財閥のことは、後でじーっくりみちるに聞きなさいなっ。未来の氷室家のお嫁さんにね」

「う、うるさい！あ、あんたたち、余計なこと言いふらしたら承知しないからね！特に、落合！」

「俺が何するって言うんですか？せいぜい写真ばら撒くとか……」

「んなことしたらただじゃおかないわよ！」

キーキー喚く鳥居先生の襟を、呆れたジャクソン先生が破れないよう慎重に引っ張っていく。遠のく教師二名を見送りながら、クリスはあの二人のうちどちらの方がまともなのか考えていた。恐らくどっちもどっちなのだろう。しかし、鳥居先生がまさかの玉の輿だなんて。氷室財閥とその御曹司おんそうしの権威については、後で誰かに尋ねてみることにしよう。クリスはふと時計を見た。午後六時十分前。お腹も空いてきたし、そろそろ帰る準備をした方がよさそうだ。今日の夕食は何だろうか。ノアはもう仕度を始めただろうか。

落合を共だつての帰り道、クリスは噴水前のベンチに佇む二つの人影を見た。「おっ」と落合が感嘆の声を上げた。彼が立ち止まったのにつられて茂み越しに覗いてみると、生徒会役員の二名が腰をかけ、言葉少なく語り合っていた。クリスはその名を知っていた。髪を腰まで伸ばした紅目の先輩は小杉荔枝、生徒会議長を務めてい

る。もう一人の、長い前髪で双眸を多い、更に伸ばした頬の髪に紫色のメッシュを入れた方は、生徒会会計の川崎陽だ。二人が別々に行動しているのを、クリスはこれまで見たことがない。部活動はそれぞれ弦楽部と軽音楽部らしいので、離れることもやはりあるらしいのだが。クリスと落合が見ている内に、陽が何か呟いて二人は席を立ち、遠く夕日の揺らめく方へ去って行った。

「けっ、羨ましいぜ」

落合がぼやいた。

「いつつもある調子だもんな。あーあ、俺も中野君とあれぐらい……」

「まだ諦めてなかったの？」

いつしかその名を聞いたことを思い出し、クリスは思わず訊いた。

「はっ！俺は惚れると少ししつこいことで有名なんだぜ」

「そう……じゃあ、せいぜいストーカーで捕まらないよう祈っとくよ」

「おい、エーリアル、その言い草は何だ？俺は法に触れるようなことなど、断じて、いや、多分しないはずだ！」

「うん、それを聞いて安心した」

学園の入り口で、陽が急に足を停めた。荔枝も既に、学園の門に落とされた車の影に気付いていた。ただ、言葉にして存在を認めなかったのみで。二人の眼はたちまちリムジンの傷一つない車体に吸い寄せられ、紅と隠れた藍が、艶のある黒の上で重なり合った。陽より先を歩いていた荔枝は、少し足を戻して彼の隣に立ち、息を潜めた。やがて、黒服の翁おきなが運転席から出てきて、しずしずと後部座席の戸を開けた。星のような銀髪の、背の高い青年が、爽やかな笑みを携えて現れた。見る限りでは非の打ち所のない好青年だ。若く、賢く、秀麗で榮譽に満ち、青い切れ長の目に野心を燃やしている。彼は自分を観察する四つの視線は知らぬまま、煙草を取り出し、

そしてしまった。これから淑女と面会することを思い出したのだ。荔枝は薄っすら笑ったが、青年に寄せた目に面白がっている風味はなかった。

「我が君ご寵愛の彼方様は煙草をたしなむと見える。人は変わるものだな。ほんの少し前まで酒も飲めないお坊ちやまだったのに」

「少し潮風に当たって来たんだろ。そりゃ、いつまでも秘蔵っ子そのままの訳にはいかねえし。まっ、あいつを見る限り弘毅は現役みてえだな」

「まさか。もう六十近いはずだぞ」

「悪戯仕掛けた時だつて五十の真ん中は過ぎてたんだぜ？」

「彼方の方は？」

「もうすぐ三十」

「ふっ、随分歳をとつたな」

陽が再び歩き出したのを見て、今度はやや遅れ気味に荔枝は続く。何を考えているのだろう。見慣れたはずの後ろ姿を見つめながら、荔枝は思考を巡らせた。昔のことを思い出しているのだろうか。それとも氷室親子への嫌悪と軽蔑を、只管胸ひたすらの中に吐き出し続けているのだろうか。バカだな、荔枝は笑う。内に出しても反芻するだけなのに。そして少し吊り上げた口の端を緩めた。本当にバカだ。こちらはいつだつて何か漏らしてくれるのを待っている。二人は強い絆で結ばれてはいたが、所々糸の解ほつれているのを、荔枝は知っていた。いつもはその糸を繋げずともに済む。でも、時々、どうしてもその繋がりが必要になつたとき 陽は逃げてしまう。笑つたまま。まるで風に吹かれる落ち葉のように。

「何辛気臭いこと考えてる？」

「何で分かつた？」

「なんとなく」

前を向いたままの陽に向かって、荔枝は首を振った。

「落ち葉のことを」

「はっ？」

「もうすぐ落ち葉が美しい季節だと思つてな」

「お前……」

バカにするのも大概にしろ。振り返つた陽の表情はそう言つていた。荔枝はそこで初めて愉快そうな笑い声を上げると、陽の傍らの芝生を踏んで追い越し、右手の甲で長い髪を撫で上げた。気分が晴れた。やはり悟られない方がいいのかもしれない。あちらがはつきりと示してくれるまでは。

「おい、荔枝、怒つてんのか？」

「さあ？」

荔枝の足取りは軽い。

「ちよつと、待てつて。何か気に障つたなら謝るけどよ、なんで怒つてるのか教えてくれないと謝れねえつていう……」

「なら力尽くでも聞き出せばいい。私は覚悟しているぞ」

「なつ、お前……！」

おどけた顔を後方に引き離しながら、荔枝は再度呟いた。覚悟している、か。最後にその言葉を口にしたのはいつだつただらうか？そして、その時の覚悟とは、一体何のための覚悟だつただらうか？右肩を越せば広大な海原が見えた。波の音に唆されるまま、荔枝は思い出す。二人の出会つた遠き碧海を。

覚悟している 穢れることも、誰かの心を踏みにじること、感情を振り捨てることも。名誉のためならば厭わしいことなどなかった。そうなるように育てられたから。

伯母、氷室好ひむろのよみが亡くなつたのは、その年の夏であつた。享年は三十四歳、遺した夫とは二周りほどの歳の隔りがあつた。しかし、それ以上に心の隔りがあつたに違いない。きつとそれが、彼女の十三年間もいたぶり続けた病魔の餌となつたのだ。彼女は、氷室家に嫁いで間もなく精神を患つた。

彼女の夫だった氷室弘毅こじまは、つまりは、健康で立派な女性を病に追いやりながら、後はたいしたこともしない医者たちの手に放っておくような男だった。しかし、そんな男に気に入られることさえも名誉のためには必要だった。氷室財閥の跡継ぎとなるという名誉のためには。

ある秋の晩、十四歳の荔枝は家族と共に車に乗り込み、伯父の屋敷へと向かっていた。母親の指輪で飾った手には、氷室邸で開かれる盛大なパーティへの招待状が握られていた。

妻の死後、氷室弘毅はある宣言をした。氷室家の跡継ぎは、彼の二人の甥のうちから選ぶという。まさしく荔枝こそその甥のうちの一人であった。もう一人は川崎陽という同年の少年だ。彼について、荔枝は少しばかり調べてあった。二月十一日生まれ、血液型は不明。私立天星中学の二年生だ。報告書を寄越した情報通の友人、読者もご存知の榊原颯によれば、成績も優秀な、活発で明るく人気のある生徒だという。荔枝は苦笑した。颯は、荔枝が決して「活発で明るく」ないことも知っていたし、集う人気も陽のそれとは異質であることも見抜いてようだ。だが、荔枝は決して負い目を感じなかった。彼には天才バイオリニストという地位があったから。

颯の報告書には、きちんと顔写真もついていた。荔枝はポケットから、出掛けに急いで破り取ってきたその写真を取り出した。車の暗闇の中でも、飽きるほど眺めたその顔は、皺くちやになった紙の上に簡単に浮かび上がった。川崎陽は常に目を前髪で覆い隠しているようだったが、荔枝には黒いベールの向こうに潜む二つの瞳が見えていた。悪戯っぱい光を宿した藍の目は、荔枝の心の中まで見透かしてしまうようだった。悲嘆、苦悶、おごり、諦め、覚悟、そういったものたちを。この珍しい内視鏡の前に置かれるのは、不思議と心地よかった。全く自分も落ちぶれたものだ。彼は敵、これから蹴り落とす相手だというのに。今宵の夜宴は、荔枝と陽の選抜試験であった。荔枝は誰にも聞こえないよう溜息を吐き、月を見上げて紅の瞳を凍らせた。勝利はとうに確信している。これで決して、覚

悟が揺らぐことはないと思った。

氷室邸は、富の象徴そのものであった。時代を取り違えたのかと疑うほど豪華な建造物は、毒々しいまでに金と権力の匂いを撒き散らし、自らの場違いなものにも気付かず、堂々と両脚を広げていた。その滑稽さ、醜悪さは、少年の一瞥には余りすぎたが、荔枝は高慢を以ってこれを瞳の中に押し込めた。涼しげな微笑が次いで顔に出た。

「お待ちしておりました。弘毅様がお待ちでございます。奥の広間にお集まりください」

開かれた門の中は、色と光、音と匂いに満ちていた。赤い絨毯の上、偽物の蝋燭を模したシャンデリアの灯の下で、燕尾服と色とりどりのドレスがひしめき、ささやきあっている。女性たちのむつちりした腕や首に巻かれた金銀宝石が煌き、歩くたびにオーデコロンの香りが変わった。荔枝はむせる目も耳も鼻も意に介さず、優雅に気品高くその間を歩んでいった。彼を見るたびに、人々の口の動きは速度を増した。「まあ、見まして？あれが荔枝君ですよ」「あら、なんて立派なこと」「夏に会ったのが嘘みたいですね。あの歳の男の子は成長が早いよね」などと言いたければかりに。

伯父の方が先にこちらに気付いた。氷室弘毅は、背が高く肩幅の広い、威厳のある面持ちの男性だった。灰色の髪は、日焼けした額から後退する様子を微塵も見せていない。弘毅は荔枝に歩み寄りながら、歓迎の意思で顔を輝かせて言った。

「やあ、荔枝君。ようこそ、我が家へ。拙宅だがね」

「ご冗談を」

荔枝は丁寧に頭を下げた。

「まあ、今夜は楽しんでいってくれ。この人の多さじゃあ、とてもくつろぐことは難しそうだ。私が君の知り合いを招いたことを願うよ。ボリスは知っているかい？向こうでご婦人方に囲まれて喋っている果報者だ。ロシアのピアニストなのだがね。知らない？そう

か。まあ、そういうこともあるだろう。後で紹介するでしょう。今野彼方はどうだい？ああ、そうか。うむ。こちらも後で紹介しよう。そうだ、この間の演奏会は素晴らしかったね。今夜も演奏してくれるのだろうか？楽しみにしているよ。いや、しかし、最近では、あれほどの演奏は滅多に聴けない。しかも、君はまだ……」

弘毅は口をつぐんだ。彼は荔枝の肩を親しみこめて叩いていたが、その手も止まった。荔枝は思わず振り返った。弘毅の注目を奪ったのは、たった今広間に入ってきた小さな集団だった。あの頬骨の高い男女を越したところ、あそこに　川崎陽がいる。見なくとも分かった。恐れていたほど感銘は受けなかった。指もポケットの唇をなぞっただけだった。やがて男女の間から現われた陽の顔は、写真よりもずっと大人びて、退屈そうに見えた。今日も藍色の目は隠している。ふつふつと沸き上がる敵意の泡に、荔枝は一まず安堵した。彼は最早、荔枝にとつて完全な敵だった。

「おや、ちさ子たちが着いたようだ。君の伯母なんだが、会ったことではないだろうね……まり子は、君のお母さんは、彼女と仲がよくないんだよ。小さい頃からそうだった。全く、双子なんだから仲良くやればいいのにな。苦労するのはいつも私だった。仲の悪い妹たちの世話も、もうこれで終わりしたいね」

最後の呟きに込められた意味に気付き、荔枝は弘毅を振り仰いだ。弘毅は観念したように笑いながら肩を竦めた。

「君は賢そうだからな。下手な嘘を吐くよりも、いつそのこと正直に言った方がいい。ああ、私は今夜で全て蹴りをつけるつもりだ。小杉荔枝と川崎陽、君たちの中から跡継ぎを選ぶ。陽君はどうやら山上さんに捕まっているようだ。救出にいくとしよう。あの人の話は長い。君はここで観察しているといいよ。陽君にまるつきり興味がない訳でもないだろう？」

「いいえ、彼について全く興味はありません」

荔枝はきっぱりと言って首を振った。伯父は怪訝そうに太い眉を吊り上げたが、すぐに納得したように去っていった。励ますよう、

一瞬荔枝の右肩に触れて。一人になった荔枝は、言い切った自分を誇りに思いながらも、心のどこかで責めていた。彼を知りたくないと思ったのは、単なる臆病だったのではないか。疑問が胸の中で身をよじる。

「戯けたことを」

荔枝は自分に言いすてた。小さな反乱は制圧され、覚悟という国軍は一層力を増した。

今宵のスターである彼が、一人でいても良い時間などなかった。間もなく、小人のような翁が話しかけてきた。それは、伯父に追放された人、山上さんであった。

「もし。もしかすると、否、これは洒落じゃありませんがな。もしかすると、小杉荔枝君ではないですかい？」

荔枝が慇懃いんぎんに應對しようとしたその時、グラスの割れる派手な音と悲鳴があがった。伯父から逃げた陽が、一騒動起こしたらしい。このおかげで、山上さんは、呆れた荔枝に暫く存在を忘れられることとなる。

「伯父さん、バイオリンの練習がしたいのでどこか部屋をお借りしてもよろしいですか？」

「ああ、もちろんだ。私の書斎を使うといい。メイドに案内させるから」

「ありがとうございます」

上のような遣り取りを交わし、寡黙なメイドの案内で書斎にやって来た荔枝は、ふと壁の時計を見上げた。この屋敷に充滿している金の匂いは、この高価な時計の文字盤にも染み付いている。時刻は午後八時半。ここに来てから一時間近くが過ぎた。荔枝は革張りのソファに腰を下ろし、立ちっぱなしだった脚を休めた。彼は疲れていた。人々には見られ飽きたし、今夜は十二分に喋った。伯父の決断は正しい。こんな争いはさっさと蹴りをつけてしまふに限る。それに 荔枝は楽器ケースの中からバイオリンを連れ出した 勝

利はもう確定していたし。川崎陽に、氷室財閥の跡を継ぐ気はないことは、誰の目に見ても明らかだった。彼の笑いは蔑みの笑み、彼の今宵の使命は人々を混乱させ、愚弄することだった。有り難いことに、荔枝が直接の標的になることはなかったが。荔枝は指先で弦を掻き鳴らした。出かける前に合わせたはずなのに、もう 線の音がずれていた。配偶者もやはり、この空気には馴染めないらしい。荔枝は少し笑った。途端に緊張がほぐれた。後は一本道、茨の海を抜けるのだ。茨は道を示さぬが、彼ら自体が道である。

バイオリンの音は、書斎の窓を震わせ、戸外を落ちる紅葉を躍らせた。荔枝は時間も忘れて弾き続けていた。何者かが足を忍ばせて部屋に侵入してくるまで。荔枝が演奏をやめると、侵入者は声を上げ、こちらが望まなくとも正体を明かしてくれた。

「ふーん、やっぱりプロの演奏は無料ただでは聞かせられないって訳か」
「……私に何か用か？」

投げつけられたコインを手の甲で払い、荔枝は何の感情もこもらぬ声で尋ねた。両目はすぐに靴に落とした。振り返らなければ、あの目に見透かされる危険などなかったにも関わらず。

「別に。でも、せつかくいところに会えんだから、親睦を深めるのも悪くねえと思つてな」

「親睦を深める、か。しかし、君にとって、私はそれほどの価値があるのか疑わしいな」

「わざわざ謙遜していただくまでもねえ。オレだってそれくらいのこととは判断できる。まっ、そっちが迷惑だつて言っただつたら、さっさと退散するけどさ」

荔枝はようやく顔を上げた。先ほどのすれた大人びた表情も、大人びた冷笑も、既に影を潜めていた。ポケットの中にある笑顔と同一のものが、荔枝の前にあった。何故か試されていると思った。荔枝はバイオリンを下ろし、素っ気無く頷いた。

「構わない」

ソファの上にまだ行き着かない荔枝の腰を、回りこんできた陽の

手が素早くさらった。荔枝はすぐに抵抗を試みたが、皮肉なことに、信賴する愛器によつて阻まれてしまった。彼はかき集められるだけの憎しみと嫌悪で陽を睨みつけた。それが、彼に遺された唯一の武器だったから。しかし、荔枝が手に取ったのは諸刃の剣だった。陽の目から前髪のベールは取り払われていたのだ。ほとぼしる藍色の光線に、荔枝の紅い火は捕らわれ、目的地に辿り着かぬまま、途中で果ててくすぶった。

「何を戯けた真似を……！」

焼け付くように熱い喉の奥から出たのは、ひどく押し殺した声だった。怒りと恐怖が舌まで震わせようとするのに、荔枝は必死に耐えていた。

「別に。今の内にちゃんと顔を拝んどいた方が良い気がする。氷室弘毅の嫁なんかに行ったら、もう二度と見られなくなるかもしれねえし」

「私を侮辱するつもりか？」

「あんたみたいなプライドの高い奴が、オレみたいのに侮辱される訳ねえだろ」

「いい加減にしろ。手を離せ」

「ダメ。あんた、オレの言うことおとなしく聞いてくれそうにねえし」

バイオリンのネック越しに掴まれた手が汗ばんでいる。荔枝を押しさえつけ、支配しようとする力は予想以上に強かった。無傷であるためには陽の腕に身を任せるしかなかった。荔枝はそうした。やむを得ずそうしたのだと、目線でしつこいぐらいに訴えながら。

「それでいい。黙って聞けよ。てめえが次の氷室財閥の統領だ。もう決定しちまった。オレが良い子にしてなかったばかりにな。まっ、元々あんたの方がはるかに弘毅の趣味に合ってたんだ。品行方正で天才バイオリニスト、おまけに美少年」

陽は頬に手を添える代わりに、目で同じ行為を果たした。荔枝は苦しげに小さく喘いだ。

「あいつが結婚した女をどう扱ったのかは知ってるだろ？あいつは女なんか眼中にねえ。氷室弘毅はあんたにベタ惚れだ。言葉通りなしかも、あいつは跡継ぎを自分の手元で育てると言ってる」

風が吹いた。全ての捕縛が解けた。

「あんた、食われるぜ」

荔枝の身は固いソファの上に落ちた。彼の髪かみの鴉すいの濡れ羽色は、艶やかなあまり紛れることもなく、背景の漆黒に広がっている。消えかけた香料が微かに陽の鼻をついた。陽はソファの背もたれに肘を付き、発したばかりの警告が、果たしてどのよう*い*とこの内に染みていくかを見物しようとした。ところが、彼の楽しみはいとも簡単に打ち砕かれた。いとこの艶笑を模ったのは、絶望でもおののきでもなかったのだ。荔枝は身を起こした。先ほどの嵐が嘘のように、その顔から消え去っていた。彼の友、余裕が波風を凪いでいたのだ。荔枝は弓を左手に預けると、空いた手で長い髪を撫でた。優美な仕草だった。非常に優美な。

「君は氷室弘毅については相当な調査をしたようだが、私のことはあまり調べなかったようだ。私がそれしきのことたふちで躊躇ちゅうちよすると思つたか？私は私と一族の名誉のためなら命を捨てても惜しくない。他人を蹴り落とすことも、悪事に手を染めることも。ましてや……ましてや操など。そうだ。私は伯父にも劣らず心の冷たい人間だ。目的のためには手段を選ばない。狡猾で醜い。それを隠すために優雅に気高く振舞い続ける。君とは違う。君は素直で正直な人間だ。他人も自分も騙すことなどできない。私とは全く別の道を行く人だ。私の生き方など、理解できるはずがない」

荔枝は金の匂いのする時計を再び見上げた。大分時間を食ってしまった。そろそろ広間に戻るべきだ。書斎を出るために、何の弊害を乗り越える必要はなかった。部屋を出る間際、黙し、立ち尽くしたままの陽を振り向きもせず、荔枝はこう補足した。

「デユ・バリー夫人の真似事ではないが」

いとこの演奏が遠くに聞こえてくるようになった時、陽は部屋の

隅に積み上げられた紅葉の存在に気が付いた。先ほど受け取りを拒まれた効果が、その上に重なっている。陽が歩み寄って息を吹きかけると、葉の山はあっさりと崩れ落ちた。彼の前髪は所定の位置に戻っていた。

第六話 落ち葉色の美学・後編

「おめでとう、荔枝」

「何の話だ？」

「とぼけるなよ。氷室財閥の跡取りに決まったじゃないか」

「まだ正式に決定したわけではない。早まるな、颯」

「もう100パーセント確定だよ。これで僕は荔枝におめでとうを言った最初の人物になったみたいだな」

「相変わらず情報が早いな……」

パーティー用の礼装を崩した荔枝は、ティーカップに紅茶を注ぎながら、自室の座り慣れた椅子に腰掛け、受話器越しに溜息を吐いた。時刻は午前一時。中学二年生が電話をするには、随分と遅い時間帯であることは間違いない。だが、荔枝が心の鎮静に必要としていたのは、睡眠よりも親友との静かな会話だった。今夜は眠るには疲れすぎていた。

荔枝の部屋はさっぱりとして落ち着いていた。現在持ち主に使用されている椅子と机を除けば、大きなものは、クイーンサイズのベッドと本棚、一流メーカーの音楽再生機に繋がれたスピーカーに、ドイツ製のピアノぐらいしか見当たらない。もちろん、一般の人々の寝室のサイズには十分過ぎただろうが。受話器の向こうから颯の尋ねる声がする。

「で、どうだったの？」

「何が？」

荔枝は再び訊き返す。

「全く、じらすのが上手だね。川崎陽のことさ。わざわざ調べてやったんだから、感想ぐらいは教えてくれたっていいだろう？」

「ああ、彼のことが。取り立てて言うほどのことはない。仲良くやったださ」

「まさか、君が？」

荔枝は目を閉じて紅茶をすすった。何度追いかけてもまた何食わぬ顔をして戻ってくる。からかうような笑いと、その茶化した態度には似合わぬ鋭い藍色の瞳。目を開けても同じものがあつた。知らぬ間に右手はポケットの中を探っていたようだ。

「おい、荔枝？生きてる？」

「失敬な。電話したまま死ぬほど私は迂闊うかつではない。ましてやこのような晩に……そう、そのまさかだ。川崎陽とは何事もなく仲良くやった」

「ふーん。何か色々疑わしいけど、何も訊かないでおくよ。でも、大丈夫？あの破天荒な王子様にほれられたりしなかつた？」

「ほう、破天荒というのは初めて聞いたな」

「……荔枝、君ってどうして質問にすぐ答えないの？」

「悪い。いつもくだらぬ感想ばかり口走ってしまふようだ。しかし、それにしても今の質問は愚問だつたぞ」

「そうかな？十分有り得ると思うけど……」

「何か根拠でも？」

「いや、ないよ。だけど、君のことだから、色気で敵を落としたのかもしれないと思つて」

荔枝は声を上げて笑つた。寝ている両親を起こさぬほどの、しかし、受話器越しに颯を吃驚させるほどの音量で。

「颯、君はやはり川崎陽より私を分かっているよ。そうだ、私は目的のためならそうしかねない人間だ。だが、今夜はしなくて済んだよ。そもそもあちらに戦う意欲がなかつたからね」

持ち上げたティーポッドは空だつた。メイドにもう少し淹れさせようか。いや、今夜はこれで十分だろう。荔枝は立ち上がり、ほの暗い天井に両腕を伸ばした。

「変な荔枝。今日はもう寝た方がいいよ。僕の方も……あつ、ナツが起きちゃつたみたい」

「忠告ありがとう。わざわざ付き合せて悪かつた。では、お姫様を寝かす仕事に戻つていいぞ」

「言われなくとも。じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

荔枝は電話を切った。着替えるのがひどく億劫おっくうだったので、荔枝はそのままベッドの中に潜り込んだ。そして瞼を閉じれば、ほら、すぐに川崎陽が現われた。彼の前髪は風にはためき、奥に潜めた二つの宝石を見え隠れさせている。彼の姿を暗闇の中に映し出したまま、荔枝は額に手を充てた。熱かった。おまけに鼓動が嫌に速かった。風邪でも引いたのだろうか。だが、咳や頭痛などのいつもの兆しはまるでなかった。きつと疲れているのだろう。しかし、今晚で全ての重荷は消え去ったことだし、数日後には全ての栄誉がこの手の中に入る。休もう、今は。眠れなくとも眠っているのだと自分を騙せばよいのだから……

不眠に苦しんだ末、有明に見た夢は荒れていた。秋から冬への変わり目、急激に冷たくなった風が、麗しくも薄い衣を纏った荔枝の肌を苛め、木々から葉を奪っては荔枝の顔に投げつけた。荔枝は何も言わずに堪えていた。耐えられないことなどない。この冷風の次にも吹雪がやってくる。だが、それさえ終われば荔枝は暗闇の中で目を凝らした。前方に光は望めなかった。それは背後にあった。荔枝が突き進むうとしていた道の反対に。自分を呼ぶ声がする。うつうつしくて泣きたくなるくらい、何度も。

三宿学園中等部の教室で、千住慎は雑誌のページをめくっていた。雑誌と言っても、子どもが目も当てられないようなスキャンダルばかりつづつた猥雑なものではなく、彼の父の検閲を通して届けられた特殊な情報誌だ。彼の右肩に肘をかけているのは、彼と情報を共有することを許された唯一の友、颯だった。肩の重さが気になるのか、慎が不機嫌そうにぱらりとページをめくれば、氷室財閥次期統領の決定を報せるゴシック体と三枚の写真がそこに現われた。

「小杉荔枝、な」

慎は三枚の内もつとも目立った写真　バイオリンを奏でる荔枝を映したものを指差し、眉間の皺を微かに留めたまま、頬の筋肉を緩ませて言った。

「おや、その情報なら僕に聞いた方が早かったようだよ。僕はもう二日前に知ってたんだから」

「何だと？」

不快な驚きを浮かべた慎に下から睨めつけられ、颯は朗らかに説明した。

「荔枝は親友なんだよ。言わなかった？小学校のときに一緒だったから。今回の騒動の相談相手も僕が引き受けたのさ」

「フン、母親が氷室家のパーティに行けなかったばかりに、てめえに先を越されるとはな」

「それは残念。今回は僕の勝ちってことだね。荔枝に感謝しなきゃ」

慎は忌々しげに鼻を鳴らすと、文章中に何度も現われる荔枝の字を指で追いながら、その名を口に出して呼んだ。

「どうしたの、慎？」

「いや、名前が気になっただけだ。こいつが氷室弘毅に寵愛されるのも無理ないと思っただけ」

「……ああ、荔枝ね。そういえば、楊貴妃に愛された果物だったね、あれ」

何とも皮肉なことだ、と颯は思った。皮肉的といえば親友の報告もそうだ。「仲良くやった」なんて。あの自信家で、本人も認めている通り高慢な荔枝と、破天荒で、周囲を仰天させる才能に秀でた（颯の調査によると）川崎陽が、二人向き合っただけで何事もなく過ごせるはずがない。

慎と颯はふと沈黙す。たった二人の沈黙に、教室全体のざわめきが際立った。

「しかし、気に食わねえな。この顔」

慎が思いついたように呟いた。颯は少し遅れて反応した。これまた

皮肉的な記憶を手繰り寄せて。

「荔枝も同じようなこと言ってた気がする。慎の写真見たときに」
「いずれ本格的に深まるこの二人の敵対関係は、四年前の段階で既に基盤が出来上がっていたのである。」

彼自身の覚悟の監視下で、荔枝は得意の絶頂にいた。与えられた冠の輝きは、持ち主を一層優雅に、一層気高く照らし出した。誰しもがその栄光に目を惹かれ、喝采を浴びさせた。彼を追う足音は日に日に増していた。

虚しさを覚えることはなかった。覚悟という名の注射器は、二十四時間体制で稼動しており、絶えず荔枝の心に麻酔を打ち続けていたから。この麻酔に依存したままでも、頭を高く掲げて生きていける自信はあった。名誉がこの身と心を寵み続ける限り。そして、川崎陽が二度と目の前に現われない限り。

荔枝は陽の写真を捨ててはいなかった。何度も屑籠くすかごに放り込もうとしてみたのだが、右手は思いとどまってしまう。何度も丸めたり広げたりを繰り返した末、それは写真としての価値も失いつつあったが、他にはバイオリンのネック越しに掴まれた手以外、彼との関わりを思い起こすものはなかった。覚悟は、荔枝が時折写真を見つめて動かなくなる行動を次のように解釈していた。すなわち、彼に受けた屈辱を忘れぬようにするためだと。しかし、それには偉大な矛盾点があった。陽の顔を見るたびに、荔枝は怒りを覚えるどころか、心が休まったのである。つまり、彼を敵と見なす前の状態、覚悟を決める前の状態に戻ってしまったということだ。だが、そのことに気付かないままにいるのが、自らを葛藤の荒波から救う、唯一の方法であった。

「荔枝様」

あの夜会から一週間が過ぎた日のことだった。自宅の廊下を歩む彼を、古参のメイドが呼び止めた。やや不機嫌に振り返る主人にも、

メイドは慣れたように告げる。

「荔枝様、弘毅様よりお手紙を預かっております」

「読め」

メイドのしなびた手に握られた封筒を確かめてから、荔枝は素っ気無く言った。

「しかし、荔枝様。弘毅様はごくごく内密にとおっしゃって……」

「構わん、読め。ここには主人の話を盗み聞きするような不届き者はいない」

「……畏まりました」

手紙の内容は非常に簡素なものだった。その行数はわずか二行で、今すぐ某海岸沿いにある弘毅の別荘に来てほしいとのものだった。

ただし、両親にはそこにいることを秘密にしておいてほしい。自分と面会したことを、誰にも知られたくはないから。

「すぐに準備しろ」

荔枝はメイドに背中を向けてから命じた。

このような時、どのような格好をしていけばいいか、荔枝はもう分かっていた。ウォーキングクロゼットの扉を開け、薄手の露出度の少ない服を選んで着替えた。もちろん、襟元を開けば白い素肌も顔を覗かせるし、裾をめくれば……荔枝は何か厭わしいことをするように手早く着替えて、表に出た。車はもう待ち構えていた。

運転手は最短距離を選んだようだった。荔枝が住まう高級住宅街はあっという間に風に飛び、間もなく左手に海が輝き始めた。そのまま真っ直ぐ行き続ければ、一時間も経たずに伯父の別荘に着くだろう。荔枝は海を眺めて、何も考えぬように努めた。時々迷い出た思考の小道で声が出た。

「大丈夫だ」

「どうして？」

「私には光がある」

その時、荔枝は初めて、自分が川崎陽をどのように思い続けてきたかを知った。

あの夜、自分は陽に言った　私は伯父にも劣らず心の冷たい人間だ。目的のためには手段を選ばない。狡猾で醜い。それを隠すために優雅に気高く振舞い続ける。君とは違う。君は素直で正直な人間だ。他人も自分も騙すことなどできない。私とは全く別の道を行く人だ。私の生き方など、理解できるはずがない、と。

自分と川崎陽の間に線を引いてしまいたかったのだ。光と影に、二人を分けてしまいたかったのだ。美德と正義を失い、影を背負うものとして。暗い森をさまよい続ける者として。川崎陽に光を託したかったのだ。在り処が分からなくなつたまま引き摺り続けてきた光を。川崎陽の写真を見て覚えたのは、他でもない、彼になら光を託すことができるという安心感だった。彼の澄み切つた目を恐れたのは、この愚かな策略を見抜かれぬのではと警戒したからだ。そして、今、彼の写真を見て心安らんでいるのは　多分、自分の預けた光をそこに見て、安堵しているのだろう。他の者の手に渡つた子の成長を、実の親が微笑んで見守るが如く。

出来れば光と共に生きたかった。川崎陽に託した光だけではない。川崎陽という少年そのものと。だが、巡り会えてもそれは許されなかつた。だから、いつそのことと思つて全ての光を断ち切つた。私は影として生きる。頭に頂いた名誉という冠は、私の影を濃密にするばかりだから。今度こそ、何も恐ろしくなかつた。何も厭わしくなかつた。虚しくもなかつた。川崎陽の影として生きると思えば。

氷室弘毅の別荘とは、海に身を乗り出すように建つ、小さな白い灯台のような建物のことを指した。周囲に広がるのは海と砂ばかりで、その人目を忍ぶようにぼつんと立ち尽くす様は、あの傲岸不遜な氷室邸の兄弟分であるとはとても思えなかつた。車を降りた荔枝は、たつた一人の使用人に迎えられ、すぐに奥の間に通された。廊下を歩む足音も絨毯が吸収してしまつたために、屋敷の中はひどく静かだった。空を舞うカモメたちの鳴き声が、時折屋根越しに聞こえてきた。

「やあ、急に呼び出してすまなかつたね」

来客に椅子を勧めて開口一番、伯父はそう言って笑った。肘の上で両手を組み、身を屈めるようにして座る彼の後ろには、水平線までも望める大きな窓があった。午後の霞んだ太陽は、そこから部屋の中に白い日差しを投げ掛けてくる。低めのソファに挟まれて置かれたガラスのテーブルの上で、出されたばかりの紅茶は湯気を立て、この部屋に更なる白を増やしていた。

「いいえ。寧ろ招いて頂けて光栄です」

荔枝はティーカップの取っ手に指をかけたが、持ち上げはしなかった。弘毅の黒く鋭い目が細くなり、笑いはどこか含みのある微笑に変わった。

「はは、そんなに他人行儀にならないでくれ。こちらの身が引けてしまうよ。私と君は伯父と甥の仲なのだしね。それに、近いうちは……その……聞いているかどうかは分からないが……もし、君がよいというのだったら……」

「伯父さんと暮らすことに關して、私に異存はありません」

悠然と返した甥に、弘毅は不意を付かれて言葉を失い、彼の表情を見遣ろうとして、開いた胸元に目を留めた。純白のシャツのその下に、一層白く清らかな鎖骨が、まるで両腕を差し伸べるかのよう突き出ている。荔枝の本物の手は、顎を落ちてなだらかな喉を這って滑り、ワイシャツの襟に引つかかって止まった。弘毅が荔枝の顔を見上げると、何とも艶なまえかしい微笑みが彼を迎えた。谷を駆け上った山の麓、一面に広がる雪野を隠すボタンは、手の重みにきしんで不安げに揺れている。誘いを断らなくてはならぬ理由はない。弘毅は腰を上げた。その時だった。

「弘毅様！」

何とも絶妙なタイミングで、使用人が飛び込んできてくれた。本来ならば、こういう空気はまず壊さず、壊したとして修復可能な範囲にとどめて、さっさと退散する彼だったが、この時ばかりは違った。その慌てぶりを見ても、緊急事態であることはすぐに分かった。

弘毅は起こした体の方向をぐるりと変え、主らしい威厳を以って尋ねた。

「何だ、客人の前で騒いで。一体何が起こったのかね？」

「申し訳ございません。外で何か割れる音がしたので様子を見に出てみたところ、車の窓ガラスが割られています……」

弘毅の顔は見るみるうちに真っ青になった。

「何故だね？車庫の警報は鳴らなかつたぞ！」

「はい。警報装置も壊されていましたので……」

「音を聞いたのはいつのことだ？」

「つい五分前です」

「うむ。まだ犯人が辺りをうろついているかもしれん。様子を見に行こう」

「はい、弘毅様！」

愛車の破損がよっぽどショックだったのだろう。弘毅は甥の存在も忘れて部屋を飛び出していった。その後を、彼の従順な召使が追った。しかし、こんな人気のない場所に、物騒な輩がいるものだ。

伯父も可愛そうに。一人取り残された荔枝は胸中ぼやくと、何を思うでもなく目を閉ざし、シャツのボタンに指をかけた。今、荔枝は不思議な倦怠感に支配されており、この手に馴染んだ髪を梳くという癖さえ億劫だった。わざわざ損害の程度を検めにいく義務も感じない。一人の時間を悠々と過ごさせて頂くことにしよう。荔枝は海を見るために窓へ近づき、こつんとという小さな音を聞いた。ガラスに小石をぶつけたような音だった。怪訝な面持ちで立ち止まり、聞き間違いかと耳をすませれば、今度は音と共に、窓の右下に何かが見くのが見えた。まさか……荔枝は窓へ寄る足を急かした。大きく震える紅い目と、無邪気に窓の内をうかがう青い目とぶつかるなり、後者の持ち主、川崎陽は口の端を吊り上げた。片方の手で砂にまみれた貝殻をもてあそび、もう一方はグレイのパーカーのポケットに突っ込んでいる。彼は葉の落ちた木の幹に寄りかかっていたが、いところが窓を開けて顔を覗かすと、貝を投げ捨てて手を差し伸べた。

荔枝の驚き呆れる様子に対して、陽は風のように飄々としていた。彼は陽気に口を開いた。

「よう、久しぶり。ずいぶん洒落た格好してんな」

「どうしてここにいる？」

荔枝が棧に足を踏み出せないまま訊くと、陽は悪戯っぽく喉を鳴らした。

「他人の敷地内にこそそ入り込んでやることといったら決まってるんだろ？」

「……車を壊すことか？」

「とぼけんなよ。あんないけすかねえ奴の車なら、オレがやんなくても誰か壊すだろ。あっちはおとり。本当の目的は盗みだ」

「生憎あいにくここには盗むものなどない。強いて言うのなら私ぐらいだ」

「おっ、なんだ。やっぱ分かってんじゃん」

「だが……」

尋ねようとした。なぜ自分をここから連れ出そうとするのかと。

だが、窓枠に立ったままでは訊けなかった。無理矢理手を引かれて窓から転げ落ち、陽の腕の中に収められ、熱を分け合い、ふと離れて向き合った瞬間まで。

「どうして？」

離れる直前、やや反射的に取ってしまった指先の硬い手を、荔枝は自分の心臓の真上に押し当てた。陽はいい加減な態度で肩を竦める。「さあな。何て答えてほしい？」

荔枝は首を右側に傾ぎ、唇に折り曲げた人差し指を宛てて暫し考え込んだ。

「分からない……もう一度会いたかったと言ってくれれば、恐らく嬉しいと思う」

「あのなあ、もう一度会いたかったぐらいで、わざわざあんたの車追跡してやって来られるかつーの。ったく、これだから世間知らずの坊ちゃまは。とにかく行くぞ。あっちに車待たせてんだから」

「待て、どこに行くつもりだ？」

「知らね。それはあんたが決めることだろ。あんたが望むなら、家にだって送ってやるぜ」

二人は誰もいない浜辺を走った。まるで長く親しんできた相手にするように、互いの手をきつく結びながら。潮風が火照った頬を冷やし、髪をなびかせる。カモメのカツプルは声高く鳴き、白い翼が水と戯れるほど海面間近に飛んでいた。彼らが海に腹を浸すのを止め、空に高く舞い上がるのを見て、二人はおうやく立ち止まった。穏やかな波が反射した陽光が、二人の顔を明るく照らし出す。

「川崎陽」

握った手の持ち主に、荔枝は呼びかけた。顔も見ず。

「私はどこに行こうと構わない……君と一緒になら」

夢にまで現われたあの不敵な笑い顔が、視界の端に浮かんだ気がした。

「そうこなくっちゃ」

「ジャクソン」

「なによあ？」

「なーんで、私の見合い話はことごとく失敗するのよー？私はいつ結婚できるのよー？」

「……飲みなさい」

覚悟している 穢れることも、誰かの心を踏みにじることも、感情を振り捨てることも。命を投げ出すことも、名誉を破棄することさえも。陽のためならば厭わしいことなど何も無い。それほどまでに陽を愛しているから。

海に面したベランダに出でて、荔枝はバイオリンを奏でていた。慣れ親しんだ音色は潮風に乗り、見知らぬどこか遠くへ飛んでいく。

月は、星を彼女の軌跡のように煌かせながら、ゆつくりと南の空へと昇っている最中だ。三宿学園の夜は、波の音さえも包みこみ、厳かな静謐を作り出している。しかし、この静けさを妨げずに破る技を、荔枝は既に身に着けていた。颯の計らいでここにやってきてから早四年、その間ずっと付き合ってきたのだから。

「おいおい、また慎から苦情が出るぜ。朝の目覚めが悪くなるってよ」

バイオリンの音を止める効果なら、言葉がなくとも、肩に巻きつけられた腕だけで十分だった。荔枝が陽の声を聞き逃す訳がない。彼は優雅に笑声を漏らした。

「心配することはない。明日は土曜日だ。あいつだって少しは遅めに起きるはずだ」

「おっ、珍しい。一応奴に配慮してやってたなんて」
「まさか、この私が？」

荔枝は陽に肩を押されるまま部屋に戻り、バイオリンを丁寧に拭いてケースの中にしまいこんだ。広々とした室内は温度に満ち、陽が淹れたコーヒーマシンの香りが漂っている。愛猫のシャネルが荔枝にソファを譲ったので、座って紅茶をたしなんでいると、左からずしりと依存してくる頭がある。荔枝はもう習慣のように手を伸ばし、その髪を撫で上げた。

「なあ、荔枝ー」

「何だ？」

四年前は知らなかった、絡みつくような甘えた声。それに応じて荔枝は返した。

「おまえさ、まさかオレに嘔吐いたりしねえよな？」

「当たり前だ。これまでそうしたことがあったか？」

「ないつと。よし、これで万事オツケーだ」

「……一体何の話だ？」

怪訝な顔で陽の顔と向き直り、荔枝は思わず身を引いた。荔枝以外の人の前では、否、彼の前でも滅多に晒されない藍色の瞳が、黒

いべールの向こうで燦々《さんさん》と光を発していたのだ。獲物を狙う猫の如く。四年間の経験で嫌と云うほど知っている。そのの意味するものは 虚しい期待にかけて、荔枝は突如何かを思い出したかのように声をあげ、ツバメの旋廻するよりも素早くソファを立とうとした。が、無駄だった。彼の体は、その場にしっかりと固定されていたから。荔枝は赤い果実の皮を捲らせ、白い果肉を見せ付けて何とか微笑のようなものを浮かべた。その甘きが、人を狂わせるとは知らず。

「あ、陽、ほら、シヤネルに餌をやらないと……」

愛猫は白い身をひるがえしてあつさりと裏切った。

「んなもん後でやればいいだろ？それよりさ、さっきおまえのこと怒らせたことの方が気にかかってしょうがなくてよ。さっさと謝りてえし、力尽くでも怒らせた理由聞いておこうと思って」

「ああ、もうそのことなら気にして……」

「ダメ。オレが気になるから」

「陽！」

ひらひら、ひらひらと。果たしてどこへ行きたいのか。落ち葉の心は分らない。荒波を超えて来たものを確かな手と思って身を預ければ、それは手を模った落葉であった。

しかし、この摩訶不思議な幻想もまた、少年たちが望んだ美学の一つである。

第七話 見知らぬ影・前編（前書き）

第七話主要登場人物

涌水明音

一年生。サッカー部。真央のルームメイト。
慎を妄信的に慕い、追いかける。その訳は……？

千住慎

三年生。生徒会長。

ハリウッド俳優の息子で完璧な美少年。

絶対的な権力を誇り、その態度は傲慢に近い自信に満ちている。

第七話 見知らぬ影・前編

例え、気付いてもらえなくともいい。例え、誰にも知られなくとも、俺はこの体に流れるものを信じている。だから、例え貴方が俺の方をわざわざ見下ろさなくても、俺は笑っていられます

千住慎の悩みはやはり立場なりに多いけれど、彼が最も頭を痛ませるものといえば、帰宅するなり目につく「あれ」だ。「あれ」ばかりには、校長の逃亡癖も、颯が運んでくるファイルの山も、荔枝と陽の反骨精神も敵わない。この三つに散々を手を煩わせたその夜、帰宅ならぬ帰寮をした慎は、神経質そうに眉をぴくりと動かした。その動きだけで、執事には訳が通じた。従順な初老の男性は、かしくまりましたと頭を下げ、メイドたちに櫛の戸を開かせた。慎が扉を潜り抜けるのを見届けると、執事は「あれ」の元へ向かっていった。裾をめくり、片手にはしっかりと箒を手にして。

慎の耳に悲鳴と何かが壊れる音が届いたのは、彼がコーヒをたしなんでいる最中だった。良い気味だと胸中呟き、ほくそ笑むのを許されたのも束の間、今度は貞淑なメイドが慎の元に受話器を運んできた。慎は舌を打った。こんな嫌がらせのようなタイミングで、嫌がらせのような電話を寄越すのは、思いつき限りでこの世に一人しかいなかった。

「慎か？オレだ」

「何の用だ？」

慎は一語一語に苛立ちを込めて言った。

「てめえの家の庭先が騒がしいからよ。どうにかなんねえの？」

「うるせえ。こっちはむしろ被害者だ」

「そりゃ悪かったな。オレはてつきりパジャマパーティーでも開いてるのかと思っただぜ」

「……招いてやるうか？」

「遠慮しとく」

そこで電話は切れた。忌々しいことに、陽の苦情通りに庭はまだ騒々しかった。慎はきりきりと痛み始めたこめかみを押さえ、浮き出た青筋をカフエインとモーツァルトで何とか鎮めることに成功した。全く、いつになったらこの苦惱から解放されるのだろうか。

「ごきげんよう、慎。昨夜は随分盛り上がったな」

「ごきげんよう……じゃねえ。しょうがねえだろうが。例のバカが邸に忍び込もうとしゃがったんだから」

「知ってるさ。警報装置がうるさくて一晩中眠れなかった」

「ほう。じゃあ、てめえのバイオリンに悩まされる俺の気持ちがかつただろうな」

「戯けたことを。あんな騒々しい音と一緒にされては困る」

生徒会室で顔を合わせるなり、慎と荔枝の間に火花が散った。二人は恐ろしいほど馬が合わない。第一印象がそれぞれ悪かったせいだろうと、煎茶をすすりながら颯は推測する。二人とも勝気で自信家なので、同じタイプの互いが気に食わないのだ。二人の口元は笑っているが、睨みあう目に友好的な光はない。颯は溜息を吐いた。

「慎、荔枝、喧嘩はそこで中止だよ。今日中に二人とも仕上げなきやいけない原稿があるでしょ？ 慎は文化祭の開幕式での挨拶、荔枝は開幕式の司会原稿」

双方にそれぞれ四枚ほどの四百字詰め原稿用紙を投げつけると、二人は紙の束を見つめたまま何も言わなくなった。ちゃんと片付けておくよう颯は釘を刺した。これから中等部との生徒会役員たちと会議があるのだ。わざわざ中等部の校舎まで赴かなくてはならない。あちらの役員たちが、仕事をきちんとする真面目な生徒たちであることが、どうにか救いになっていた。

「あつ、そつだ、慎」

部屋を出る直前、颯は何かを思い出したように足を止めた。

「こんな時に言うのも何なんだけどさ、やっぱり君の盗撮写真、ネット上で大量に流出してるみたいだよ。昨夜みたいなこともあるし、少し身の回りを警護をした方がいいんじゃない？」

「私たちの安眠のためにもな」

「荔枝、頼むから黙っててね……」

やはり、慎と荔枝を一つの部屋に閉じ込めておくのは不安だ。だが、いたし方ない。陽が来てくれると良いのだが。颯は顔をしかめた。陽が来ても、慎の敵が一人から二人に増えるだけだ。三人を結んだらそれこそ魔のトライアングル地帯ではないか。

クリスは本棚の最上列を見上げながら、痛む首をさすって宥めていた。我が校の図書室は、インターネット検索という現代科学の技術に依存して、日に日に蔵書量を増しつつある。その充実さといったら立派なものだが、画面越しに指示された場所へ行ってもまだ本を捜す手間があるのには、いい加減うんざりしたくなるどころだ。破り取った日本史のノートに走り書きしたメモと、無愛想にずらりと並んだ分厚い本の背表紙を照らし合わせて約十分間、クリスはようやく、「あつた」との声を漏らした。耳ざとい司書に届かぬほどの小さな声で。

荔枝との無言の戦いに疲れた慎が、図書館に静寂を求めつつやってきた時、クリスはちょうど本に向かって懸命に手を伸ばしているところであった。慎は本棚の狭間にクリスの姿を見つけると、しばし立ち止まって彼の横顔をじっと見つめた。石崎・エーリアル・クリスは、慎の中では天才少年画家にして問題児であった。何せ、転校して一晩で二つの校則を破り、学園長の息子であるノアにまで絡んだのだから。しかし、風間校長が彼に下した罰は白のアトリエへの移転に留まり、退学や停学といった処分はなかった。慎は抗議を試みたことを覚えている。学園の秩序を守る者として。そして、水

晶の命令を託った者として。校長は笑ってはぐらかそうとした。話にならない、慎は思った。そして、遂に言ってしまった。

「校長先生、先生は石崎が天才少年画家という理由で、彼を甘やかしてはいませんか？」

その時だった。校長の目が初めて鋭く光ったのは。だが、校長は何も言わず、慎に続きを促した。

「彼の才能は確かに学園に更なる栄光や利益をもたらすかもしれませんが。ですが、彼は生徒の一人に過ぎません。校則は守るべきです。白のアトリエへの移転は、一体どういう意味で罰として機能するのですか？」

「君こそ石崎君が石崎君であると理由だけで、彼への罰を厳しくしようとしていませんか？」

校長はツバメが獲物を捕らえるよう素早く反撃した。その猛攻たるや、慎も一瞬たじろいだ。

「君は校則の名を語って、石崎君に更に厳しい罰を　　そうですねえ、例を挙げれば退学でしょうかねえ　　をくだそうとしています。それが間違っています。生活の隔離は厳重な罰則です。石崎君の犯した罪にはふさわしいほどの。確かに、彼はまだ転校して二日目ですから、大した効果はないと思われるかもしれませんが、僕はこの罰に別の側面があるので満足していますよ」

「別の側面？」

慎が怪訝な顔で問い返すと、校長はやつと笑いなおした。眼鏡の落とした影が、嫌に冷たく微笑に映えた。

「君たちへのあてつけです。直接的には君への。僕は偽善というものを心底嫌っていましたね。安易に人の行動を偽善だ偽善だと非難するのはどうかと思いますが、君の今の行動は間違いなく偽善ですよ、ええ。君は学園の秩序などまるで守る気はない。もし、本当にその気があれば、君は昨夜、石崎君を見逃すはずがありません。君は生徒会役員です。夜間の外出も塔への立ち入りも許されている身分ではないですか。どうしても誰にも知らせなかったんです？」

副校長の入室が、その後には繰り返されたとあろう不穏な遣り取りを未然に防いでくれた。慎は慇懃に頭を下げ、校長室を出た。慎にあれだけの動揺を与えたのは、前にも後にも風間校長一人だけだったし、一ヶ月で回顧しつくされたこの会話だけだった。そして、今、図書室にて、もしかしたら全ての元凶だったかもしれない少年は、悠々と学園生活を送っている。慎は小さく舌を打ったが、すぐに不敵な笑みが不機嫌にとって代わった。慎はクリスの方へ歩み寄っていた。

「よう、石崎」

話しかけられてクリスは固まった。目の前に立っている人物を、間違うはずがない。

「生徒会長……」

呟いた唇は凍てついた。写真で、廊下で、集会で、目にする度に瞼の裏を横切っていく思い出が、脳の奥から湧き出てくる。あの夜の不思議な出会い、塔の上で煌く水晶、鐘の音、窓辺で振り返るノアの灰色の目、闇の中に見出した手……

「元気にしてるみたいだな？」

「……おかげさまで」

確か生徒会長に対して最後に覚えたのは反抗心だったはずだ。無意識の内にそれを思い出し、クリスの口調もとがる。

「ったく、愛想がねえな。これだから有名人は」

「有名人って点では貴方も一緒だと思います」

「ほう、そうかもな。だが、てめえより愛想はある」

近現代日本の芸術家たち　クリスが求めていた本をいとも簡単に取り出し、こちらに差し出しながら慎は笑う。不審に思った司書が様子を見に来たが、慎の笑みに当てられた瞬間、顔を真っ赤にしてすくすくと退散していった。なるほど。人間広辞苑と呼ばれるつまり、動かしにくいという意味で　司書さえも、生徒会長の魅力の敵ではないということか。仏頂面で密かに感心しているクリ

スの方へ慎はくるりと頭を翻した。

「取ってやった礼がその顔か？」

「ええ。取ってくれって頼んだ覚えはありませんから。では」

胸に本を大事そうに抱いて、クリスは慎の傍らを通り過ぎようとした。だが、いつか頭を撫でた大きな手が、今度はクリスの肩を掴んで止めた。クリスは反抗心を剥き出しに手の持ち主を見上げたが、視線はあっさりと受け流された。一体どうやって拒めば、生徒会長は自分に絡むのをやめてくれるだろうか。「何か？」と冷やかに尋ねるクリスに、慎はわざとらしく真面目な顔を繕ってこう言った。
「石崎、てめえに用がある」

「はあ？生徒会長の護衛？何だそれ？」

こつちが聞きたいよ、とクリスが胸中返したのは、翌日の昼食時のことであった。10月も下旬にさしかかったこの日、冷たく済んだ空気は空を青く塗り、太陽が燦々《さんさん》と煌いている。噴水前のいつもの場所にシートを敷き、ノアの作ったサンドウィッチをかじりながら、クリスは昨日の放課後の体験談を語っているところであった。

「そう。ストーカーと盗撮被害に遭ってるんだってさ」

「生徒会長のストーカーって……まさか……」

「何だ、おまえ？何か知ってんのか？」

思い当たる節でもあるように口元に指を添えて考え込む真央に、来夏が尋ねる。

「いや、あの、えっと……」

「で、そのストーカーっていうのは誰なんだよ？」

落合の問いに答える代わりに、クリスはポケットから一枚の写真を出して掲げてみせた。真央はその瞬間、ため息を吐いて頭を抱え込んだ。何も心当たりのない落合、来夏、菜月、ノアが小さな紙切れの上に見たのは、一人の純朴そうな少年の姿だった。どうやらサ

ツカー部らしい。写真はちょうどリフティングしながら、こちらに向かってピースを決めているところだったから。シナモン色の髪はよく梳かれ、左耳の上の部分は二つのピンで留められている。二重の目は青色で、左耳のピンのアンバランスを補うように、右目の脇に泣きぼくろがあった。

「うわっ、俺の好みかもしれない」

「やめたほうがいいですよ」

落合が口笛を鳴らすのも待たず、真央は素早く言った。

「超がつくほどの変態ですから、ええ。一緒に住んでる僕がいつから間違いないです」

「えっ、じゃあこいつってお前のルームメイトの……」

「ええ。涌水明音です」

「涌水……ああ、こいつが……」

「……何で知ってるのさ、来夏？」

菜月がきいた。クリスの苺ジャムサンドを、標的に銃口を向けたスナイパーの如く、虎視眈々と狙いながら。

「いや、一度こいつの部屋に行った時に、表札に書いてあったからさ。その時は生憎あいにく留守だったんだけど……」

「あの時は生徒会長の家の庭にテントを張りに行っていましたから。」

「最近毎日ですけどね……」

「おい、待て、お前ら。何だ、もうそういう仲だったのか？部屋に行ったり来たり？」

来夏は表情も変えずに落合に鉄槌を喰らわせた。ついでに、なぜか頬をほんのり染めている真央にも。六人中二人が撃墜したところで、クリスは憂鬱そうな溜息で一同の関心呼び戻した。

「まっ、なんで俺がやらなきゃいけないのかは知らないけどさ。この……なんだっけ、涌水君？から、俺は生徒会長を護らなきゃいけないんだって。今日の放課後から」

クリスは珍しくむくれたように胡坐ひくまに肘をつき、写真で顔を仰ぎながら零した。気の毒やら哀れやら、またクリスとは全く関係のない

ところの痛みやらで、一同が何らかの表情を定めたとき、唯一前向きに微笑んでいたのがノアだった。

「大丈夫ですよ、クリスマス様」

ノアが言った。

「生徒会長から直接そんなことを頼まれるなんて、名誉なことじゃないですか。クリスマス様ならきつとできますよ」

「えー……出来るかな？」

心配しているのはそこではないのだが。クリスマスは頬をかきながら、曖昧な返事をした。しかし、やはり気が付かないのもノアだった。

「ええ、出来ます。今日は張り切って夕食作りますから、頑張ってくださいね」

「う、うん……」

笑顔全開のノアには、さすがのクリスマスも素直にならざるを得ないのであった。復帰したばかりの、落合がひゅーっと冷やかした。サンドイツはいつの間になくなり、菜月がもぐもぐと何かをむさぼっていた。天頂に立った太陽が、七つの影を草むらの上に落としていた。

10月17日火曜日 石崎・エーリアル・クリスマス二護衛ヲ頼ム

10月18日水曜日 午前五時起床、午前七時登校、午後零時半昼食

同じ階にあるといえど、やはり二年生の教室前と三年生の教室の前では雰囲気が違う。知らない教室の戸も、そこから覗く顔も、苛立つクリスには一層よそよしく思えるのであった。

千住慎の所属する3年A組は、目下のところシヨートホームルームの途中である。クリスは腕時計を見た。慎は四時に教室前に来る

よう呼びかけたのだが、現在の時刻は四時十分。3年A組の担任で、クリスには馴染みの深い花木先生の演説が終わる様子はまるでないでしょう。一度ここを離れてまた見にこようか。しかし、ホームルームが終わるタイミングを逃して、慎に小言を言われるのもしゃくに障るので、不本意ながら足を痛めて立ちっぱなしでいることに決めた。花木先生の声が一際太くなった。これは終わる合図か、それとも単なる盛り上がりの部分なのか。クリスは過去の失敗を思い出し、どうにか判定しようとした。

「おーい、クリス」

帰宅の仕度に励む友人たちを遠目に眺めていると、紙くずが足元に転がってきた。顔を上げた先にいたのは颯だった。先生にばれないように教室の後ろの扉をわずかに空け、椅子を引いて顔を出し、こちらに向かって手を振っている。クリスはきよんとした顔で見返した。

「颯先輩！」

「やあ、慎のお守りに来たのかい？」

「えっ、どうしてそれを……」

颯は先生に向かって何か素早く答弁した後、再びクリスの方を仰いだ。

「僕は情報網の広さが自慢なんだ。おかげで知りたくもないことを知ることもあるけど。情報っていうのは実に厄介だから……まあ、そんなことはいいや。しかし、クリスも真面目だね。僕なら逃げるけどな」

「俺だって逃げたいですよ。でも、後で捕まえられるのも嫌ですし……」

クリスは正直に言った。颯は二人にしか聞こえぬほどの声量で笑声をたてた。

「確かにね。慎はなかなかしつこいから。素直に従つとくのが得策かもね。おや、珍しい。先生の話が十五分で終わったよ」

椅子の足を床に擦る耳障りな音がした。花木先生は生徒たちから

貴重な二分間を奪ってまで、静かに美しく優美に動くことの大切さを語った（強面の花木先生には恐ろしく似合わない話題だと思った）。腰の折り方についてまた特別な講座があり、結局クリスは待たされること二十分で、ようやく雇い主と気の向かない面会に踏み込むことができた。

「よう、待たせたな」

「いいえ。別に」

どうせ労わりの意はないのだ。クリスは素っ気無く応じ、髪をくしやくしやにされる咎めを喰らった。それでも尚不満げに自分を見つめるクリスに、慎は悠然と言いつつ放った。

「いいか？てめえは転校初日にあれだけ校則を破っておきながら、まだこの学園生活を楽しんでやがる。俺の護衛ぐらいで済んでありがたく思え」

罰ならもうすでに下されたのに、何を今更。クリスは心中呟き、また、呟きのうちの半分ぐらいを顔面に映し出しながら、生徒会室へ向けて進みだした慎の後を追い始めた。が、最上階へ続く階段の一段を昇るか昇らないかの内に、踊り場の上で光がひらめき、クリスは思わず目を閉じた。続いてシャッターを切る音が響いた。これはもしかしなくても……

「逃げたぞ。追え」

「はあっ？」

「屋上の方に行ったはずだ。早くカメラを奪って燃やして来い」

「も、燃やすって……」

「早くしろ。命令だ」

「……もう！」

クリスは唇を引き結び、ずれ落ちかけた靴下を引き上げると、ぱたぱたと忙しなく階段を駆け上っていった。彼の後ろ姿を、慎はどことなく面白がっている風に見送ったが、ふいに階段下でフラッシュが瞬いたのに気付いた。慎は顔をしかめた。どうやら自分の見当違いだったようだ。執念深いストーリーカーは　　一体どんな神業を

使ったのかは知らないが　上ではなく下に逃げたようだ。

「おい、石崎！下だ！」

「はあっ？」

一つ上の階の手すりから、息を弾ませたクリスが顔を出した。

「奴だ。下にいる」

「忍者ですか?!」

「かもしれないな」

文句を言いつつも、クリスは律儀にこちらに下ってきた。走り回って頬を紅潮させているクリスを見たとき、慎の心にふと芽生えたのは、この少年を翻弄させてみたいという欲望だった。荔枝と陽は除くとして、慎にあそこまで反抗的な態度を見せるのは、この少年の他にいない。他の者なら素直に、むしろ誇りをもって行くであろうことも、この少年は洪面で片付けようとする。慎は隣を過ぎていった横顔に目を遣った。気高い横顔だった。サファイアの目は彼の心根のごとく真っ直ぐに光を放ち、あらゆる美德の輝きに照り輝いている。人は美しすぎるものを見ると、遂、壊したくなるという。先に述べた慎の欲望も、この破壊的衝動と似たものかもしれない。それに、物珍しかったのもあるだろう。自分だけに反僕しようとする、石崎・エーリアル・クリスという少年が。

「待て、石崎！」

「また上とか言わないで下さいよ！」

一つ下の踊り場から、クリスが叫ぶ。

「上だ」

「あの、会長……！」

「奴のことは放っておけ。上に来い。あいつが流出させた写真を始末する仕事你先だ」

クリスは最早、何も言い返す言葉が見当たらなかった。

第七話 見知らぬ影・後編

陽が入ってきた時、生徒会室には荔枝一人しかいなかった。荔枝は昨日の司会原稿の手直しをしていたところで、陽に気付くと少し顔を上げて微笑みを浮かべた。そして、また原稿用紙の上にペンを浮かせ、時折柳眉をひそめては、急いで線を引き、すばやく何事か書き込んでいく。さて。慎と、慎の護衛になったという例の少年はどこだろう。

「慎は？」

「さあ」

荔枝はまるで興味なさそうに答える。ペンは順調に原稿用紙の上を進んでいた。

「なんだ、残念。せっかく例のガキの顔でも拝もうと思ってたのに」
「天才少年画家君のことか？さっきまでここにいたぞ。なかなか素直ないい子だった」

「素直ないい子、ね。さぞかし慎にいたぶられてるんだろうな。かわいそうに」

「ところで、陽、第二次予算書が出ていないと、颯が嘆いていたが？」

愛情深い微笑を伴いつつも鋭い言葉。前言撤回だ。石崎なんたらよりオレの方がはるかにかわいそうじゃねえか。冷たい汗をごまかしながら、陽はしみじみと思った。だが、荔枝がそれ以上の言及を避けたので、陽は椅子を引き寄せると、その上で胡坐をかき、ペン先から文字が紡がれているのを見物することにした。

「颯は？」

「今日も中等部の輩と会議だ」

「けっ、ガキ相手かよ。肩が凝りそうな仕事だな」

「大丈夫だ。颯は子どもの扱いには慣れている……私と一緒にでな」

「はあ？お前、弟とかいたっけ？」

「いるはずないだろう。それくらい手がかかるのがいるという話だ」
陽は沈黙した。それはつまり自分のことを言っているのだろうか。
いや、愛猫シャネルのことかもしれない。だが、あれはなかなか利
口な猫で、荔枝の溺愛を買っている。その時、荔枝がちらりと一瞥
を寄せた。確信犯の目だ。正式の問い詰めは寮に帰ってからしつ
かり行うとして、ここではからかわれたのを逆手に遊んでみるのも
悪くないかもしれない。陽の口角が上がった。
「れーしお兄ちゃん？」
「気持ち悪い」
陽の企みと笑みはたちまち消え失せた。

どうしよう 真央が悩んで頭を抱えた対象は二つあった。一つ
は、テーブルの上の皿に盛られた、湯気をたてる赤紫色のスープ状
のもので、もう一つは、それを「シチュー」と称して出した製作者
であった。料理に関しては、かなり屈折した意味での特殊な才能を
持った彼は、何の躊躇もなくスプーンで液体をすくい、最早原型を
留めていない人参をもきゅもきゅという妙な音をたてて咀嚼してい
た。真央は自分の皿を見下ろすと、スプーンで黒く硬い何かを転が
した。食べても問題はないのだろう。口に入れた直後の舌の拒絶反
応以外は、勇気を振り絞った過去の二、三回の経験から、真央は推
測した。だが、食欲は到底沸かなかつた。

「何だよ、真央、食わないの？」

「いや、あの、お腹が空いてなくて……」

真央は、今度は別の黄緑の固体をもてあそんでいた。もしかしたら、
今回は前例が通用しないかもしれないとの疑惑が頭をもたげてきた。
だが、ルームメイトに何事もないのはどう言い訳しよう。それは

真央はとうとうスプーンを置いて考え込んだ。案外早く答えは出
た。それは、彼の、涌水明音の全神経が、テーブルの上に並べら
れた数枚の写真に集中しているからだ。

「えへへ、慎様っ」

そこに映されているものは、わざわざ覗き込むまでもない。今の眩きと、普段の明音の言動とを足せば、自ずと答えは出てくるものだ。彼が尊敬してやまない、生徒会長、千住慎の姿である。明音はスプーンを運ぶ手をとめ、先ほど現像したばかりの写真を三分間かけてじっくりと眺め、それからまた食事に戻るといふ、いつもの習慣を繰り返している最中であつた。その時の明音の表情と云つたら、こればかりは、言葉ではどうにも言い表せまい。写真にでも映さない限り。

「で、今日は何枚撮つたの？」

真央は空腹に茶を流し込みながら尋ねた。よくぞ聞いてくれましたとばかりに、明音の顔が輝いた。

「ふふん、八枚。今月中では一番の収穫だぜ」

「自慢げに言うけどさ、それって盗撮だよな？犯罪じゃないの？」

「分かつてないなあ、真央ったら。俺の慎様への愛の前には法律も罪もないの！」

「ふーん」と気のない返事をして、真央はその後の明音の行動を見守つた。警告はしたつもりだ。後はどうなつても知りはしない。明音は夕食の席を立つて鞆から手帳を取り出すと、本日撮つた写真について何やら熱心に記し始めた。10月16日月曜日、慎様と榊原先輩のツーショット、お気に入りランクB、と云つた具合に。今日のベストショットは慎と荔枝のにらみ合いらしく、手帳の端には「怒つた慎様も素敵」とのコメントが書き足された。やがて、明音は手帳をぱたと閉じ、残つたシチューを掻つ込むと、また元のふやけた笑顔を戻して今日の収穫に悦に入つた。真央は素朴な疑問で彼の鑑賞タイムを少し潰した。

「あのさ、何回もきいてるけど、生徒会長のどこがいいの？」

「そんなの決まつてるだろ？かつこよくて、美しくて、見目麗しくて、頭がよくて、運動神経も抜群で……」

「ら、来夏先輩にだつて全部あてはまるもん」

幾分むきになつて真央が言う。

「それだけじゃないぜい。リーダーシップもあつて、寛大なお心を持ち……」

「あの生徒会長が寛大？」

「もちろん。真央が知らないだけで、慎様は実はとーつても優しい人なんだぞ」

「嘘だね。来夏先輩の方が百倍優しいもん。リーダーシップだつてあるし。特待生だし」

「まだまだ。フェンシングの全国大会優勝者」

「来夏先輩だつて弓道の全国大会優勝者ですー」

「フェンシング部の部長」

「弓道部部长」

「生徒会長」

「学級委員長」

「ハリウッド俳優ホウセイ・チズミの息子」

「……でも、来夏先輩が一番だもん！」

喚く真央に、何とでも言うが良いと明音は笑う。明音はアルバムに写真を詰めながら、自分の愛の遍歴を辿り、やはり慎様が一番だとのいつもの結論に落ち着いた。本日は、このささやかな勝利もあつて、胸に沸き起こる愛の喜びと尊敬の念は一層強かつた。すねた真央が付けたテレビに、黒々とした髪の男性の横顔が映し出された。何たる偶然。険しい額、凛々しい眉、締まった口元、皺のない浅黒い肌に鋭く青い眼光とくれば、ホウセイ・チズミのご尊顔に他ならない。嬉しそうな顔をした明音を見て、真央はすぐにチャンネルを変えた。明音の悲鳴とも奇声とも付かない声が響いた。

クリスはすっかり疲労していた。長い時間焼却炉の前にいたせいでブレザーはすすっぱいし、その後は慎の気まぐれに散々振り回された。神出鬼没の涌水明音のシャッターが閃けばそれを追わされた

り、かと思えば途中でやめさせられて、しょうもない雑用を言いつけられたり。慎を家まで送り届けるといふ最大の任務が残っている。慎と共に暗闇に覆われた校舎を出で、クリスは鬱々とした思いを何とか意欲に変えようとしたが、原子が変化したり消滅したりしないのと同様、不可能だということに気付いた。慎への不信感は、クリスの心の中に原子レベルで組み込まれていた。

「もう少ししゃんとしたらどうだ？ 仮にも護衛だぞ」

白い舗道を目の前に歩みながら、まるで不貞腐れているクリスの顔が見えているように、慎が言った。

「ええ、そうですね、仮にも護衛ですよ。召使じゃありません。コ―ヒー淹れたり、書類を校長先生のところ届けたり、そういうのは俺の仕事じゃなかったはずですよ」

ここぞとばかりにクリスは仕返しをしたが、慎は不敵に笑っただけだった。

「疲れたか？」

「そりゃあ、貴方の我儘に散々つきあつてればね」

「ハッ、それじゃあ三日と持たねえぞ」

「三日も貴方に付き合う気はありませんよ」

「だったら、それ以内に仕事を片付けるんだな。まあ、護衛はともかく、執事としてはなかなか有能なのは認めてやる。素直じゃねえのが玉に瑕だがな」

「俺にしてみれば、素直になつたらそれこそ終わりですよ。俺は貴方に服従するつもりはありませんからね」

クリスは溜息を吐いて空を見上げ、天頂に瞬く無数の星影を仰いだ。今宵の空に月はない。下校時刻をとくに過ぎたこの時分、学園内は静まり返り、虫たちが鳴く音が、まるで教会のデイエス・イレのように、厳粛に響くばかりである。なだらかな丘を越えた彼方から漏れる蠟燭の炎ほどの灯りが見える。右手に聳える白い塔は、幾度もクリスの視界の端を掠めた。嫌でも思い出すのはあの晩のことだ。こうしてこの舗道を歩んだ。月に誘われ、星に誘われ、まる

で夢にとりつかれたように必死で。なくてはならないものを捜していた。今と反対に歩んでいたこの道の先にそれはあると確信していたのに。世界は変わった。クリスは気付いた。最早、誰もそれを欲してはいないことに。

クリスは慎の背中を見つめた。なぜこの人は今になって自分に罰を下そうなどと思いついたのだろう。慎は塔の上でクリスと出会った。クリスを校則違反の実行犯で見つけたのだ。だが、その時は何も言いやしなかった。ただ、学園長の息子であるノアの扱いに気をつけると言ったのみで。あのことはもう一ヶ月以上も前のことだ。ふと思いついたにしてもやや遅すぎないか。

「大体、貴方は生徒会長なんだから」

クリスは路傍の石を蹴飛ばした。「直接涌水君を呼び寄せればいい話じゃないですか。こんな方法よりずっと平和的だと思うけど。俺も貴方に煩わされなくて済むし」

「石崎、俺のことが嫌いか？」

「はっ？」

クリスは慌てて石ころから顔を上げ、「何だ」と呟いて溜息を吐いた。流し目でこちらを振り見る慎の口元には、クリスをからかうような微笑があった。口調のあまりの素っ気無さから、一瞬、本気で傷つけてしまったのかと思ってしまった。よく考えれば、この人は、自分に。彼が従える大勢の生徒のうちの一つの一人に。嫌われたぐらいで思い悩む必要はないのだ。彼はその地位と権力でクリスを好きなようにできるのだから。慎は咽喉奥で微かに笑声をたててまた訊いた。

「で、どうなんだ？」

クリスはつま先の正面に置いた石を拾って宙に放り投げた。

「ええ、嫌いですよ。貴方のことも、貴方の後を影みたいに追っかける仕事も……あっ」

石は予想外に飛んだ。クリスが気付いたときはもう遅かった。まづい。護衛のつもりが一步間違えて刺客になってしまっではないか。

だが、クリスは生徒会長を見くびりすぎていた。慎は天に向かつて高く腕を挙げると、掌の中に石を収め、白い完璧な歯並びが闇夜に覗くよう笑いを広げた。クリスはしばらくぼかんとその横顔を眺めていたが、やがて、どうしても言わなければならぬことがあると気付き、言うか言うまいかほんの一瞬悩んで、不承不詳口を開いた。

「あの……」

「何だ？」

慎は何も分からぬふりだ。

「えっと、その、すみ……」

クリスのはつと口を噤んだ。慎の横顔の向こう、学園の西に向かつて広がる林檎林の入り口の茂みに、きらりと閃いたものを見たのだ。夜風がクリスの耳に運んできたのは、間違いない、シャツターを切る音だった。問われている罪の二つ、ストーキングと盗撮の内、少なくとも後者を犯した犯人があそこにいる。

「どうした？早く続きを言え」

「あの、今、そこに……！」

クリスは走り出そうとした。慎の脇を通り抜け、自ら指差した先へと向かおうとした。だが、行動は慎によって阻まれた。慎は石を握ったままの手をクリスの前に突き出し、クリスの行方を塞いだのだ。焦った反動か、クリスは思わずかっとなって言った。

「会長、謝罪なら後でいくらでもします！今、あそこに盗撮した奴がいたんです！早く追いかけないと……！」

「いや、構わねえ。放つとけ」

「何言ってるんですか?!盗撮してる奴を捕まえるって命令したのは、貴方ですよ?」「だから、その俺が良いって言ってるんだ。今は諦める」

「何で……っ?!」

反駁しようとしたクリスは、無意識のうちに縋っていた腕にその身を抱きすくめられ、憤りの余りに肩を大きく反らせた。手は逃げようともがいたが、いずれも慎の掌中だ。ブレザーの紺とワイシャ

ツの白の中を交互に溺れた瞳は、慎の青い眼光に捕まえられた。クリスは息を呑んだ。慎の整いすぎた顔は、クリスのよく通った鼻の先からほんの数センチの場所にあった。

「なっ……」

「もし、ここであっさり犯人が捕まったら、てめえといられる時間が短くなるだろうが」

「なっ、何をふざけたことを……」

枝と葉の擦れる音、落葉を踏みしめ、遠のいていくゆるやかな足音、こつこつといったものだけが、虚しくクリスの耳に響き渡った。慎の直視に耐えかねて、クリスは思わず目を逸らした。早くここを逃れたいのに、何故自分は生徒会長の腕を解くことができないのだろう。彼が先輩だから？生徒会長だから？彼の権力が恐ろしいから？違う。クリスは内心密かに首を振った。思うままにできない何か、クリスのまだ知らない何かがそうさせてくれないのだ。それは一体なんだろう。胸の高鳴りが疎ましい。

「石崎、俺と会った夜を覚えているか？」

耳元でそつと囁かれる。クリスは操られたように頷いた。

「お前は校則違反の現行犯だった。だが、俺は見逃した。何でお前をあの場で処分にしなかったと思う？お前が気に入ったからだ」

先ほどの疑問への予想もしなかった答えを突きつけられ、クリスはびくんと跳ねて震えた。あの僅かな会談で、生徒会長が自分のことを気に入ったなんて。信じがたい話だった。慎の告白は続く。

「俺はもつとお前の傍にいたい。お前のことを知りたい。だから、俺は……」

慎は右手の石を地に放ち、クリスの頬にそつと添えた。クリスは唇を強く噛み締め、今度こそ表に出して首を振った。その瞬間、心身の所有権は再び彼の手に戻った。籠の下から飛び立つ雀のように、素早く捕縛から逃れたクリスは、数歩駆けたところで立ち止まり、振り返って慎を強くにらみつけた。その虚偽にはつきりと嫌悪を示した。

「石崎……」

「ふざけるのも大概にしてください。こんなことの為に俺はあなたの護衛になったんじゃない。俺は帰ります。護衛も辞退します。もうこんな仕事はうんざりだ」

毅然と背を伸ばし、帰路を歩み出したクリスを誰も止めなかった。慎も、そしてクリス自身も、林檎の林の中に行く人も。

「ただいまー」

白のアトリエの扉を開けると、エプロンを着けたノアがとたとたと駆けてきた。手にはボウルと泡だて器を持っている。夕食の支度をしている最中だったのだろう。普段はとくに食事は終えている時刻だが、クリスの遅い帰宅を見越して、今日は少し遅めに仕度しようだ。

「お帰りなさい、クリス様」

「ただいま、有瀬」

友人の屈託のない笑顔にクリスは思わずほっと息をついた。心が癒される気がした。やはり、満天の星の下に直接晒されているのは自分の性に合わない。自分には安全な屋根の下が一番合っている。そう思った。クリスが微笑み返すと、ノアはきょとんとして首を傾げた。

「お疲れの様子ですね」

「そんなことないさ。お腹は少し空いてるけど」

「今ちようど準備していたところですよ。すぐに出来ますから」

「そっか、ありがと。有瀬は気が利くね」

「えっと、あの、いいえ……」

ノアは染めた頬を落とした。笑ったクリスは、その時、居間で何やら物音がすることに気付いた。どうやらテレビの音らしい。それもドラマのようだ。泣き叫ぶ男女の声が聞こえる。ノアがテレビ、ましてやドラマを見ることはないし、クリスもせいぜいニュース番組

を見るだけだ。アトリエには珍しすぎる音楽だった。クリスの驚いた顔で大体悟ったノアは、にっこりと笑って説明した。

「ああ、今日はお客様がいらしているんですよ」

「客？」

「ええ………僕の仲間です」

居間に入ったクリスは、まずどういった反応しようか非常に迷った。客の正体は時の人、涌水明音だった。彼がこちらに向き直り、初めましての一言でもくれればまだ挨拶を返せるのだが、彼の目はテレビに、正確に言えばテレビに映った中年の男性に釘付けで、まるでこちらに気が付く気配がないのだ。どうすべきかと目線で問うと、ノアは笑ったまま容赦なくテレビを消した。涌水明音は言葉にならない声を挙げて振り返った。

「あーっ！何するんですか、有瀬先輩?!」

「ごめんなさい。でも、こちらに気が付かない様子でしたから」

ノアに手で示されて紹介され、クリスは「どうも」と手を振った。ふいに明音の顔が固まる。

「えっと、もしかして、石崎・エーリアル・クリス………先輩？」

「そうだけど、何で今先輩の前に空白が出来………」

クリスの言葉は明音の二度目の奇声に完全に掻き消された。クリスは思わず両手で耳を覆った。明音は勢いよく胡坐をかいた床の上から立ち上がり、こちらへ詰め寄って、クリスの襟をつかんでぐわんぐわんと振り回した。ふいにクリスの脳にフラッシュバックしたのは、転校初日の朝、花木先生と出会ったあの時のことだ。興奮の仕方もまるで一緒、まさにデジャヴだ。明音はクリスを揺すりながら、只管に沸き起こる思いをぶつけてきた

「先輩！護衛の役割、俺と変わってください！」

「はあ？何言ってるんだよ？護衛っていうのは………」

「慎様と一緒にいられるなんて羨ましくすぎます！今すぐ変わってください！」

「あのー、だからねー……」

「俺だつてちゃんと仕事はできますから！慎様の写真を流出させるなんて許せません！慎様のプライベートはちゃんと守られるべき……！」

「えっ……じゃあ、君じゃないの？」

「はっ？何がですか？」

お互いがお互いをよく理解しない故の、不可思議な沈黙が生まれた。鍋のぐつぐつと煮えている様子だけがよく分かる。

「えっと、会長の写真を盗撮して、それを流出させたのって……」

「バカ言わないでください！誰がそんなことするもんか。僕が撮った写真は、僕一人が楽しむためのものです。他人になんか絶対ゆずりません！」

「盗撮は認めるんだな……あれ？君いつからここにいるの？」

「一時間ほど前ですよ。ルームメイトと喧嘩して飛び出してきたんですって」

こちらにはノアが答える。慎と別れたのは三十分も前のことではなかった。

「っていうことは、君と別に犯人がいるってこと？」

クリスは椅子に腰をおろして考え込んだ。慎の推理は外れていたのだ。信用できるノアの証言もあるし、何より明音の真っ直ぐで純粹なまでの感情表現が、明音の有罪を否定している。ならば、一体誰だろう？そこまで考えて、クリスはふと、自分がもうそのような面倒ごとに関わらなくとも良いことを思い出した。そうだ、関わらないでいられるならば、それまでだ。明音はまだ真犯人への呪いを呟いていたが、クリスとノアが食卓につくと、自分も一緒に席にいた。明音はもう夕食を済ませていたので、彼には紅茶と特大のチヨコレートケーキが出された。明音は無言で貪り続けた。

「そうだ、涌水君、一つ聞きたいんだけど」

「明音でいいつすよ」

クリスたちも漸くケーキに追いついた頃、四切れ目にフォークを突

き刺しながら、明音は気前よく言った。明るい少年らしい。

「じゃあ、明音君、あのさ　まあ、くだらない質問かもしれないんだけど　何で君はそこまで会長にこだわる訳？」

「そりゃあ、もちろん、かつこよくて、美しくて、見目麗しくて、頭がよくて、運動神経も抜群で……」

「涌水君、クリス様が訊いているのはそんなことじゃないんですよ」
驚いてノアを見たのは、クリスも同様だった。一体どういう意味だろう。クリスは別に問いに他意はなかったはずなのに。ノアは自分で淹れた紅茶の味に満足したらしく、小さく微笑んで「美味しい」と呟いた。クリスと明音は顔を見合わせ、淹れてくれた人への礼儀として、ティーカップの取っ手に指をかけた。クリスが初めてここに来たとき、ノアが出してくれたのと同じ紅茶だった。柑橘類の香りとミルクの余韻の絶妙なハーモニーに思わず黙し、やがて、クリスは、明音の表情に変化を認めたのであった。

「誰にも言わないって約束してくださいね……」

それは明るく務めた声だった。表情も柔らかかった。まるで、愛おしいものを手の中で愛でているように。

「慎様は……俺のお兄様なんです」

明音は物語を切り出した。

「俺の母親は若い時女優だったんです。涌水静香っていう。結局大した出世はしなかったし、活動期間も短かったから、多分今はほとんどの人が知らないと思います。ある日、母はほんの脇役で登場する映画の撮影で、ハリウッド俳優のハウセイ・チズミと出会ったんです。その頃はまだ千住法正っていうのが名前でしたけど。当時、千住法正には奥さんも子どももいませんでした。でも……母のことを愛しました。ええ、愛したんです。決して、ちょっと手をかけたというようなものではない、私は本気で愛されたんだって、母は何度も繰り返していましたから。それで、母は俺を身籠りました。事務所も、映画の関係者も、誰もがこのことを隠蔽しました。母は纏まったお金だけ渡されて、今後千住法正と会うことを禁じられ、芸能界を退

くことを強要されました。母は受け入れました。どうしても子供を産みたかったから。そして、女手一つでここまで俺を育ててくれました。っていつても、二年前までっすけどね。病気で亡くなりました」

明音はそこで口を閉じ、重苦しい顔をしているクリスマスを見て笑った。「やめてくださいよ、先輩。そんな話じゃないっす。母は最期まで幸せでしたもん。大好きな人の子どもを産めて、大好きな人に愛されたって信じてましたし。母は、俺の父親のこと、まあつまり、千住法正のことだとか、俺と半分だけ血の繋がってる兄のこととか、よく話してくれたんです。慎様は有名な人だから、よく慎様の話を聞きました。慎様がフェンシングで勝ったとか、名門三宿学園に合格したとか、それだけで、俺はすごく誇らしくって。で、いつしか慎様のことを心から尊敬するようになって……まあ、そういう話っす。長くなりましたけど」

「そのことを会長は？君が弟だっすこと、会長は……？」

明音は五切れ目のチョコレートケーキに伸ばしかけた手を止めた。クリスマスを見つめた目は、睨んだといってもよいほどの強い光を放っていた。慎と同じ色だ。青い色だ。そして、先ほど、彼の兄がそうしたように、彼もその色でクリスマスを射竦める。

「知りません。そして、絶対に知らせてはなりません。それは慎様の家庭を、幸せを崩壊させることです。絶対に、絶対に、それだけは……ダメっす」

明音はブレザーの胸ポケットに手を入れた。取り出したのは手帳だった。慎の写真とそれに関する情報を記載した手帳。クリスマスに有無を言わせない強情さも、その手帳を開く頃には、甘く蕩けていた。彼が賞味した、ノア手作りのチョコレートケーキのように。

時計から鳩が飛び出し、深夜二時を過ぎた頃、まだ寝室には入れぬままの慎は、庭から確かな物音を聞いた。まさかあいつか。しか

し、こんな時刻に？まさか奴とて睡眠時間ぐらいは惜しむだろう。窓辺に寄り、疑問とその解消に暮れる中、暗黒に綴じられた庭に浮かんだのは一軒のテントであった。慎は顔をしかめた。とうとう奴も作戦を変えてきたのか。メイドはもう下がらせた。慎じきじきのお出ましとなる。彼には喜ばしいことだろう。

人工芝を踏みつける。右の暗闇からは小さな噴水の微かに脈動するのが聞こえ、左には風のそよとも吹く気配はない。真っ直ぐ向かった先、赤っぽい色をしたテントの中で、突如シャッターが閃いた。だが、カメラの奥にあったのは湧水明音の顔ではない。葡萄酒色の髪をした少年のものであった。灰色の瞳には果たして何も湛えず、口元には微笑を施し、青白い頬はテントから漏れる灯りに照らされている。慎は笑った。

「てめえか」

「そうだよ、久しぶりだね、慎」

「久しぶりも何も、最近はずっと俺のことを付回してたんだろうが」

「そうだよ。でも、おかげで見知らぬ影に気付けたでしょう？大丈夫だよ、慎。僕がいなくても、君にはちゃんと影があるんだから。

まだ君は認めないだろうけど」

ゆつたりと広い居間のテーブルの上、冷めたコーヒーの傍らに置かれていたのは古い雑誌の切り抜きであった。明朝体が叫んでいる。

『人気俳優・千住法正に不倫疑惑 突然の女優の降板に潜む影は？』

10月18日水曜日 就寝時間不明

第八話 アトリエの帝王・前編（前書き）

第八話登場人物

・有瀬裕

三宿学園理事長。ノアの養父。

淡々とした、物や常識に執着しない性格。ノアに対しては……？

第八話 アトリエの帝王・前編

「もし、ここであつさり犯人が捕まったら、てめえといられる時間が短くなるだろうが」

「お前は校則違反の現行犯だった。だが、俺は見逃した。何でお前をあの場合で処分にしなかつたと思う？お前が気に入つたからだ」

「俺はもつとお前の傍にいたい。お前のことを知りたい。だから、俺は……」

「……嘘、なんだ」

クリスは呟いた。窓辺から差し込む朝日が、部屋の中を白く染め上げている。いつそその中に紛れてしまふことができたらどれだけ良いやりと眺めた。夢の中に慎が出てきた。彼は記憶と寸分違わぬ言葉と表情でクリスを口説いたが、彼の腕の内にいるクリスは、昨夜とは違った。クリスの心は激しく揺れていた。抱きしめられながら、ずっとここにいたいと、彼の視線を正面から受け止めたいと思つている自分がいた。結局はまた突き放してしまつたけれども。

「でも、嘘だから、全部嘘だから、これでいいんだ……」

クリスは目を閉じる。まるで深い罪を犯した後のような、胸の痛みは一体何なのだろう。燃えるようにはつきりと残っている、慎の腕の感覚。耳を離れないあのささやき。吸い込まれそうな青い瞳。少しでも意識の手綱を緩めれば、昨夜の光景の無限ループだった。クリスは唇を噛み締め、一瞬苦悶するくもんような表情を作つてから目を開けた。

「よし」

クリスは飛び起きた。隣のベッドは空っぽだった。ノアはもう朝

食の仕度をしているのだろう。忙しない音と絶えず変わる香が、開け放った一階の窓から漂ってくる。クリスはワイシャツに腕を通しながら、ふと、目覚まし時計に注意を向けた。そういえば今日は時計が鳴ったのを聞いていないな。次の瞬間、クリスの口を「あっ」という人の声とはつかない悲痛な音が零れ出た。時計が止まっているのだ。そして、恐る恐る腕時計を見れば、時刻は既に普段の起床時間から三十分も経過している。

「あ、あれ……？」

クリスの首筋を冷たい汗が通過していった。

「ごめんなさい！クリス様！僕が気付かなかったばかりに！」

「分かった、分かった。分かったから早く！」

「はい！」

ノアが普段よりやや形の雑な卵焼きを、菜箸で弁当箱の中に入っ込み、やっとのことで今日の昼食が完成した。災難だった。二人とも時計が止まっているのに気付かず、いつも通りの感覚で、実はいつもより三十分も遅れた行動をしていたのだ。おまけにクリスがあまり慌ててそのことを教えたため、啞然としたノアはついつかり料理を台無しにしてしまったのだ。これは手痛い時間の損失だった。ノアは卵を冷蔵庫から取り出しながら頻りに謝り、弁当は学校で渡すから、先に学校に行っていてくれとさえ頼んだ。だが、クリスは承知しなかった。そんな無慈悲なことは友人に対してできなかった。クリスは信用できる腕時計を見、あと十五分以内にアトリエを出れば間に合うことを知ると、ノアが再度挑戦している間に、弁当が出来ればすぐにでも出発できるよう忙しく準備をした。そして、とうとう残された時間のカウンとも秒刻みとなった今、ノアは二つの弁当箱に蓋をし、クリスは鞆を持ち上げたのであった。

「有瀬、全速力で走るけど転ばないでね」

「えっ、あの、クリス様…… あっ……！」

アトリエを飛び出るなり、クリスはノアの手をとって宣言どおり

に勢いよく駆け出した。ノアは思わず目を見張った。風が激しく吹き付けて二人の髪を靡かせ、黄色い花を散りばめた緑の平原は瞬間に後方へと飛んでいく。梢で囀る小鳥はたちまち記憶の中のみ光景に、踏みしめた落葉の色も覚えられぬまま。校舎は遙か彼方に聳えているように見えた。二人の巡り会った白い塔は益々遠い。まるで二人から遠ざかっていくようだ。予鈴の鐘が、朝の清涼な空気を震わせ、学園内に厳粛と緊張とをもたらした。クリスは噛み合わせた歯の奥から苦しげな声を出した。だが、ノアが案じたその時には、クリスの表情は元の強い意志に満ちており、その脚の躍動も一層加速していたのであった。

「ク、クリス様……！」

唯一の近道、中庭へと続く急な丘を駆け上っている途中に、ふいにノアが呟いた。丘は萌えいずる若葉を白い花に覆い尽くされ、クリスたちが風のような一歩を進める度、雪のような花びらと芳香が舞い上がった。さすがに疲れたのか。でも、休んでいる暇はない。我慢してくれ、有瀬。クリスはそんなつもりでノアの手を一層強く握りなおした。ノアがはっと息を呑むのが聞こえた。そして、次の瞬間、二人の手は離れた。

「有瀬！」

まるで映像をスローモーションで再生しているかのようにだった。ノアの足がたちまち地を逃し、その身は花弁同様に風の中に舞った。落ち行く彼を抱きとめようとしているのは、花の絨毯ではなく、遙か下方の険しい大地であった。クリスとノア、空中で交差した青と灰、二つの色が見ていたのは、ここには存在せずとも同じものだった。二人は塔の上にいた。水晶の眩いばかりの煌きキラメキの下、ノアは純白のローブをまとうて窓の外に身を投げ出し、クリスは救いを求めるように伸ばされた腕を掴んだ。ここでも全く似たようなことが起きた。

「有瀬！」

クリスは腕を伸ばした。花びらが視界を覆う中でも、ノアの手の間

触ははつきりと分かった。クリスはあの夜、あの暗闇の中からノアを救い出したのだから。クリスは握った手を手前に向かって強く引いた。だが、今度ばかりは場合が違った。ノアの体重は、身投げの決意の重さは、クリスまでも奈落の底に引きずり込もうとしたのである。

「クリス様！」

クリスは勢いよく地を蹴った。その時こそ、二人の間の白い花弁の霧は掻き消えて、クリスはノアの顔をはつきりと認めることができた。恐怖に怯える煙水晶の瞳　クリスが想像していた通りのものがそこにあつた。しかし、一体何に対しての恐怖だろう？　いいや、そんなこと知ったこっちゃない。クリスはその名を呼びながら、ノアの体を宙で抱え込んだ。震える煙水晶を胸に押し付け、襲ってくる重力と落下の衝撃からそれを守った。二人は結びついたまま丘の斜面を転がり落ち、ふいに傾斜がなだらかになった場所で止まった。今度は上ではなく下に、クリスはノアの温度を感じていた。クリスは薄く目を開けた。吐息が交わるほど近くにノアはいた。二人は暫くそうして呼吸を重ね合わせていた。見つめ合う瞳はどちらも穏やかで、口元には微笑が宿っていた。繋いだ手は二人の胸の間に挟まっている。ふいにその手が花の上落ちて、二人を隔てるものは何もなくなった。

「クリス様……」

「有瀬……」

白い雪野に一筋の日が差し込み、薄紅色の花が咲いた。ノアは呼吸をふいに詰まらせた。だが、もう拒むことなど出来ないことを彼は知っていた。

始業を知らせる鐘が響き、二人はびたりと動きを止めた。絡めた指の力が抜け、限りなく優しくなった四つの瞳を、俗世的な失望の色が染めていく。

「お弁当、崩れちゃったかも……」

「で、二人仲良く遅刻って訳か。全く、羨ましいよな、お前らは」
「一体どこがさ？結局野瀬先生には怒られるし、うんざりだよ、もう」

「先生に怒られるのなんて、落合には大した問題じゃないもの。いつも怒られてるから」

「なるほどね」

「おい、それじゃ俺が性質たちの悪い不良みてえじゃねえか」

「事実そうでしょ」

「はあ？俺様の一体どこが……」

「落合、ちよつと来い！」

噂をすれば何とやらの類か、それとも絶好のタイミングを見計らっていたのか、ちよつと通りかかったばかりの体育教官室から、落合の天敵である森先生が厳つい顔突き出した。上ずった声で「はい」と答えた落合は、振り返る前にシャツをズボンの中に突っ込もうとしたが、その間も与えられずに、襟首を引っ掴まれて、教官室の中に吸い込まれていった。クリスと菜月は顔を見合わせて溜息を吐いた。

「確かに、あんな情けない不良はいないかも」

どうせ待っても無駄であることは知っていたので、クリスと菜月は一足先に図書館へ向かうことにした。二時間目の古典は、担当の先生が体調不良で休んでいるために自習になったのだ。クリスは迷わず図書館行きを選んだ。昨日、志水晶について興味深い資料を見つけたのだが、前に借りた本を返していなかったために、借りることができなかつたのだ。クリスが立ち上がると、安眠できる場所を求める菜月と、可愛い後輩との出会いの場所を求める落合も付いてきた。来夏は用事があるからといって断った。落合が真央の体育の授業でも見に行くつもりなのではとからかうと、来夏は無言で彼を小突きつつも否定はしなかつた。

「ねえ、石崎」

「何？」

歩みながら菜月が唐突に聞いた。

「有瀬ノアってさ、一体どういう人？」

「あ、有瀬？」

「うん」

菜月は頷き、胸元のシャツを拳で手繰り寄せた。ふと俯けたミントグリーンミントの瞳を掠めたのは琥珀色の虚無である。菜月がいまだ大切に両手に抱え続ける、最早その肢体は動かぬ抜け殻だ。

「どういう人って言われてもなあ。まあ、知っての通りだと思うよ。優しく、気が利いて、おとなしくて、料理が上手くて、あと花の世話も……」

「ふーん。そんな人なんだ」

「そんな人なんだって、酒本だつてまるで接点がない訳じゃないだろ？」

「違うよ。僕は石崎にとつての有瀬つてどんな人が聞きたかっただけ」

「俺にとつて……？」

クリスは怪訝な顔をした。菜月も変な質問をする。クリスにとつてのノアなんて、菜月にはどうでもよいことではないか。落合なら二人の関係を詮索してきてもまだおかしくはないが。クリスは考えながらノアはかけがえない友達だ。クリスと一番多くの時間を共有している人物だ。クリスがこの学園にきてからの一ヶ月とちよつと、白のアトリエという隔絶させた場所で、二人は共に起き、共に食べ、共に語らい、共に眠ってきた。高さは違えども、同じ部屋に隣同士寝転がり、触れ合った手の中で友情を育んできた。クリスにとつて、三宿学園での日々と有瀬ノアとは、切っても切れぬ存在だった。

「有瀬は大切な友達だよ。あつちはどう思ってるか知らないけど、少なくとも、俺の中では一番の」

「ふーん」

菜月はいつも持ち歩いている千鳥模様の傘を少し振り回し、抜け殻

を砕いた。

ダンス部の大会の背景がとうとう仕上がった。落合の協力のおかげだ。颯に知らせようとダンス部の部室をのぞいてみたが、生憎今日は生徒会に出ているとのことだった。生徒会室に向かう勇氣はともない。颯への報告は明日に回すとして、クリスマスは空きつ腹を慰めるためにすぐさまの帰宅を決めた。放課後の校門を潜ったとき、クリスマスは曖昧ながらも確かに違和感を覚えた。一人で林檎林の裾を掠め、白のアトリエの門を潜ったとき、クリスマスはまた違和感を覚えて振り返った。斜陽に照らされた雲が、西の空に斑模様を描いている。何の変哲もない風景だった。普段と何ら変わりはない。

扉に手をかけたその時、クリスマスは新たな植木鉢が階段の最上段に追加されていることに気付いた。ハウセンカだ。開花の季節には十月下旬というのは少し遅いのではないだろうか。しかし、その紅色は鮮やかで、ノアの繊細な気配りが感じられた。「でも、花は気まぐれですから。手を加えなくても、自分の咲きたいときに咲きますよ。僕は時々手伝ってあげてるだけです」これはノアの言葉だったか。

クリスマスは戸を引こうとして、鍵がかかっていることに気付いた。どうやらノアは出かけているようだ。こんなことは珍しいけれど、今日のように朝寝坊までした日には不思議ではない。「ただいま」と叫んでも案の定返事はなかった。電気だけが、アトリエ内に人いない暗闇を持ち込むことを恐れているかのように灯されていた。リビングのテーブルの上には小さなメモが置かれている。クリスマスは手にとって読んだ。ノアの小さな文字が、有り余るスペースにも関わらず、中央にびっしりと詰め込んで書かれていた。

クリスマス様へ

今晚は諸事情により遅く帰ります。

校則違反ではありませんからご安心ください。

鍋の中に夕食を作っておきましたので、温めて食べてください。僕のご事は待たずに、先に寝ていてくださいね。お願いします。

有瀬

スプーンが皿に触れる音ですら、空気を振るわせる。クリスは思わず手を止めた。一人の夕食の何と侘しいことだろう。自分の半分が欠けてしまったような気さえした。きちんと火を通したはずなのに中の冷たい人参を噛みながら、クリスはリモコンに手を伸ばした。ホウセイ・チズミでも映ってくればいい方だ。だが、テレビは付けられた直後にまた消された。クリスは、これが初めてとなる、アトリエの呼び鈴を聴いたのだった。

「はい」

ノアだったらわざわざ呼び鈴を押すような真似はしないだろう。膨らみかけた期待の芽が、育ちすぎないうちに叩き潰しながら、クリスは口の周りを拭い、玄関へと駆けていった。開け放った戸の向こうに、大きな影が浮かび上がった。知らない男性だ。年齢は恐らく60歳に差し掛かったというところか。額は広く、髪は薄くなりかけてはいるもののきつちりとまとめられており、睫毛の短く細い目と、引き締まった唇を持っていた。血色は悪いが、長身と立派な服装のおかげで貧弱な雰囲気はまるで感じられず、こちらを圧倒させるようなものはない代わりに、何か油断のできない印象を与えた。クリスが用向きを尋ねぬ間に、男性は勝手に玄関へと入り込み、靴を脱がずに済むぎりぎりの場所で立ち止まると、背伸びをして奥の部屋を見通そうとした。

「あ、あの、ど、どちら様で……？」

男性はクリスを無視した。土間と床の段差によく磨かれた靴の先を何度か押し当て、「バリアフリーじゃない」との結論を出すと、ようやくクリスの方を向いた。クリスは恐ろしく緊張していた。罰則

を喰らいに校長室に向かったときだって、ここまでひどくはなかつたはずだ。

「ノアがいらないみたいだけど」

「あっ、はい、出かけてます。今晚は遅く帰るって言ってましたけど……」

「つまり、僕は逃げられたってこと？」

「えっ？」

男性はクリスから目を逸らすと、諦めたように肩をすくめた。

「上がってもいい？」

「えっ、あ、あの、どちら様ですか？有瀬とはどういう……？」

クリスは勇気を持って再度尋ねた。男性は急に何かに興味顔を上げ、黒い芯のある瞳でまじまじとクリスの顔を眺めた。クリスは後ろ手で扉を閉めてもよいものかどうか、非常に迷った。来客の返答を聞くまでは。「有瀬？有瀬は僕だけ？」

「はい？」

クリスは自分の耳を疑った。

「だから、僕が有瀬裕あるせゆたか……ああ、君が言ってるのは息子の方ね。

有瀬ノアのことか」

男性は相変わらずの調子でこう付け加えた。ノアが息子だって？ということは、この男性はノアの父親ということになる。そうだ、有瀬裕だ。他でもない、この三宿学園の理事長ではないか。

「ねえ、上がってもいい？」

聞きながら、理事長はもう既に靴を脱ぎ捨てて廊下を歩んでいた。はっと我に返ったクリスは、理事長の靴を丁寧に並べると、棚からスリッパを一足引っ搦んで、慌ててその後を追った。

「うん、美味しいね、このカレー」

「……シチューだと思いますけど」

「どっちでもいいよ、そんなこと。どうせ黒いか白いかの違いなんだから」

「はあ……」

今現在、時刻で言えば午後七時半、クリスと理事長は向かい合って食卓につき、二人揃って、ノアが作ったシチューに舌鼓を打っていた。なぜこんなことになっているのかはさっぱり分からなかった。事の成り行きという奴か。理事長がクリスの食べかけのシチューを見るなり、空腹を訴え始めたのだ。他に出せるものを知らなかったので（アトリエに客は滅多になかったが、こういったことの世話は全てノアが担当していた）、クリスは場違いだと思いつつシチューをよそった。だが、これを理事長はいたく気に入ったようだった。理事長の話しぶりからすると、どうやらノアの料理を食べるのは初めてのことらしい。理事長は独特の表現で息子の腕を褒めあげ、ノアはコックにするべきかもしれないとも言い始めた。

「ええ、俺もそう思います」

ノアが自分以外の人に褒められているのが珍しく、クリスはい嬉しくなって言った。そんなクリスを、理事長は隙をみてちらちらと窺っていた。

「……君は、石崎・エーリアル・クリス君だよな？」

「はい」

クリスは大きな人参の一切れを飲み込んだ。

「どうしてノアと一緒に暮らしてるの？」

「えっ？ああ、それはそのー……ちよつと校則を破っちゃって、その罰則でここに引越すことになって……」

理事長が「ちよつと校則を破っちゃって」のくだりに触れてくれないうことを祈りつつ、クリスは答えた。

「それってさ、どちらが罰則になるのかな？ここに暮らすこと？ノアと一緒に暮らすこと？」

「そんなの決まってるじゃないですか。ここに暮らすことですよ」

「ふーん。どうしてここに暮らすことが罰則になるのかな？」

「そりゃあ、だって、他の友達と隔離されていますから……」

「じゃあ、ノアは罰則の装置の一つではないってことだね？」

「装置つて……」

「よし、それならオーケー。万事快調だ」

「……一体何の話ですか？」

クリスが空になった皿の脇にスプーンを置くと、理事長は一層忙しくなく食事をする手を動かした。有効期限付きの黙秘権を行使して、理事長はシチューを片付け終わるまでの間、喋るために口を開こうとはしなかった。だが、とうとう最後の肉が消えると、理事長といえども、真摯にこちらを認める青い瞳には、答えずにはいられなかった。理事長はぶっきらぼうに言った。

「僕はね、ノアを転校させるつもりなの」

その言葉は、一瞬で理解するにはやや難解で唐突すぎた。

「えっ……？」

理事長は立ち上がり、まるで散歩を楽しむように、ゆっくりとソファの近くまで移動すると、腰を下ろし、テレビのリモコンに手を伸ばした。ちょうど料理番組が始まったところだった。

「僕がいうのもなんだけど、ノアの成績はひどすぎる。正直、我が校のレベルには相応しくないんだ。そりゃ、血は繋がってなくても可愛い我が子だからね、できれば目をつぶってやりたいよ。だが、そういう訳にもいかない。だから転校してもらうことにしたんだ。今日はそのことを話してきたんだけど、ノアはいないみたいだから、君が代わりに伝えといて」

「待って下さい。それって、もう有瀬……じゃなかった、ノア君の転校は決まってるってことですか？」

エプロンを身に着けた五十がらみの女性が、鮮やかな包丁さばきを見せ付けている。理事長は煙草に火をつけ一服、そして、

「そうだよ」

当然のことのように言った。

「でも、本人はまだ転校するってこと知らないんですよね？」

クリスは食い下がらなかった。

「当たり前でしょ。それで、何の問題があるっていの？」

「大有りですよ。だって、それじゃあ、有瀬の意思はどうなるんです？」

「ノア君ね」

「どっちでも構わないでしょう?! 有瀬がここに残りたいていったら、どうなるんです?」

一分も立たぬ間に、生だった鶏肉は親子丼の具に姿を変えていた。理事長は改めてクリスを見直した。憤りと友情とが、頬を燃やし、サファイアの中に星を煌かせ、震える拳を固く結んでいた。養子にもこんな友達がいたのだ。理事長は無感動を装いながらも、内心では大層驚いていた。しかも、よりによつて石崎・エーリアル・クリスとは。彼はノアの……静まり返った部屋に、料理が完成したことを知らせる拍手が響きわたった。やかましい。理事長はテレビの電源を切った。

「石崎君、残念ながら、ノアがどう思おうと転校は免れないよ。これは三宿学園の在り方にも関わっている。個人の我儘をいちいち聞いている訳にはいかないんだ」

退出に先立ち、理事長は煙草をぽいと床に投げ捨てると、スリッパで踏み潰して火を揉み消した。ジュツというかすかな音が聞こえ、理事長が足を退かした場所に、小さな焦げ後がついていた。ノアならすぐさま片付けるだろう。だが、今ここにノアはいない。自分の身について話されているにも関わらず、別のどこかで何の不安もなく時間を過ごしているのだ。次第に廊下に向けて縮小されていく理事長の背中に、クリスは居間の入り口に立って叫んだ。

「俺がどうにかしますから!」

理事長の足が止まった。

「勉強なら、俺がどうにかしますから! 俺だって大した成績はとってないけど、でも、俺たちには勉強のできる友達もいるし、いつでも教えてくれるはずですから! ですから、転校はもう少し待って下さい! 俺は……俺は、有瀬ノアと一緒にいたいんです! 有瀬は大切な友達なんです!」

「……ノアに、シチューおいしかったとだけ伝えといてね」
学園長は扉を後ろ手で閉めて出て行った。クリスはまたアトリエ
の中に一人になった。

第八話 アトリエの帝王・後編

胸に感じるのは、目に見る有明の月とは全く対照的な、人肌の温もりであった。まだ夜明けの冷たさから目を離せないまま、慎は、ひんやりとしたシートに肩まで浸し、小さな子供のようすがに縋すがつてくるノアの髪を撫でた。それでも尚物足りなさそうにしがみついてくるノアの小さな頭を、慎は腕の中に抱きこんだ。ノアはようやく安心したらしく、こちらを見てもいない慎に向かって少し微笑んだ。

「やっぱり、こっちを見てくれないんですね」

窓から差し込む月光が照らし出していたのは、ダークグリーンの絨毯を敷き詰めた、天蓋つきの寝台以外何一つない部屋であった。その面積と空虚さが今一釣り合っていないせいで、この部屋には妙な物悲しさが漂って見える。恐らくまだ日が照る前だからということもあるのだろう。しかし、その寂寥じふりょうとした雰囲気は、名誉ある生徒会長にはあまりにも似つかわしくないように思えた。

「貴方は少しも変わってない。自分で汚しておいて、汚した後は見ようともしない」

「……何か問題でもあるか？」

「いいえ。でも、目を背けているときの貴方は、何だかとても苦しそうですから」

「同情されるほど落ちぶれちゃいねえよ」

「分かっています。僕は貴方のことを信頼していますよ」

ノアはシートから裸の腕をもたげると、凍てついた指でそっと慎の頬に触れた。慎はついに輝ける衛星から目を逸らし、自らの影の中に横たわる、ノアのあどけない笑顔に目を落とした。月光に背を向けた灰色の瞳は、闇の中で一層強く光を放つて見えるように見えた。慎も口の端を吊り上げた。この夜、輝きの内に生きる者も、その輝きの作った影に生きる者も、背徳と欲望の暗闇で一つに溶け合った。戻ってきたのだ。この一晩だけでも。ベッドの下にくしゃくしゃに

丸め込んだ雑誌の記事より、もつと美しく、もつと悩ましく、もつと自分にふさわしい影の姿が。

「ええ、僕は貴方のことを信頼してるんです。それは水晶も同じ。だから貴方は生徒会長の地位を手に入れることができた。そうでしょう？ねえ、学園の帝王さん」

ノアは慎の左手に指を絡ませて囁くように言った。二人の手の完全なる融合を、薬指にはめた水晶が妨げた。ノアは水晶に唇を落とす。まるで臣下が主に忠誠を誓うが如く。

「ねえ、アトリエの帝王さん、貴方は自分の義務を果たさなくてはなりませんよ。水晶の命令は絶対なんですから。僕が僕であり続けるために、何より僕が貴方の影であり続けるために……どうすればいいかお分かりですよね？」

「なんだか偉く慌てるように見えるが？」

ノアは慎を見上げて微笑んだ。

「ええ、少し。色々あったものですから」

「ですから、いくら理事長の提案であつても納得できません！ええ、理事長にも様々なお考えがあるのだということは存じておりますし、理事長は有瀬ノアの保護者でもあります。ですが、これは学園の方針とか、理事長の体裁とか、そういったものよりもっと重要な問題が関わっています！有瀬ノアという一人の人間の将来です！校長先生、私は有瀬の担任です。今回のことについては、明らかに私の指導力、監督力不足も関わっています。ですから、私にきちんと責任をとらせてください。私は有瀬のことを投げ出せません。投げ出しません。お願いします、有瀬を転校させることだけは、どうか勘弁してください……！」

朝の校長室にて。校長が逃亡する前を狙って、無礼を詫びつつ突然飛び込んできた野瀬先生の演説を、風間校長は最後まで黙って聞き遂げた。2年A組担任、体育科の野瀬先生は、ここまでいっきに

言い終えると、勢いよく頭を下げた。顔を伏せた瞬間、先生の目が潤んでいたのを、校長は決して見逃しやしなかった。

校長はふうと息を吐くと、椅子から立ち上がった野瀬先生の傍らに立ち、とんとんと肩を叩いた。

「まあまあ、野瀬先生、まずは顔を上げて、こちらにお座りになってください。そう、それでよろしい。えー、そうですね、有瀬君のことについてですが、理事長はまだ最終的な決定を下した訳ではないそうです。実は昨日まではほぼ確定的な話だったのでね。というのも、昨夜、石崎君もまた、このことについて強固に反対したそうで……」

「石崎が？」

野瀬先生は鼻をすすらせ、大きく見開いた瞳を揺らし、食いつくように尋ねた。校長は手でそれを制した。

「ええ、何でも白のアトリエを訪れたそうですよ。そこで石崎君にこの話をしたそうですが、石崎君は自分が何とかするからしばらく待ってくれと言ったそうです。また、こうも言ったみたいですよ。有瀬ノアは自分の大切な友達だと」

「石崎が、有瀬を……大切な友だ……」

最後の「ち」は口元を覆う手に吸い込まれて消えた。校長はズボンのポケットからチエック柄の群青色のハンカチを取り出して差し出した。だが、野瀬先生は感謝しつつも丁寧に断った。特に用途はないように思われたからだ。込み上げてきた塩辛い液体は、先生の強い意思の下に織り込まれ、ただ真っ直ぐに校長を見返す目に希望の光を宿す役割のみを担っていた。校長は眼鏡の奥で満足げに笑い、ふと笑みを崩すと、途端に唇を引き締めて窓辺へと歩み寄ってこう言った。

「僕も今回のことはあまり腑に落ちません。何とかして理事長を説得してみます。野瀬先生、貴方は石崎君と協力して、有瀬君の成績を伸ばすことに専念してください。いいですか？」

振り返った校長に向かって、野瀬先生は向かい直り、「はい」と言

つて大きく頷いた。

「大丈夫よ。大変だと思っけど今は頑張つて。私も何かできることがあつたら手伝うわ」

職員室を出ながら、野瀬先生は、先ほど桜木先生にかけられた言葉を思い返していた。今はほとんどの教職員に知れ渡っている真実（クリスたちのたゆまぬ努力の産物である）のおかげで、幸せの絶頂にある桜木先生が、やや事を樂觀視する傾向にあつたのは確かだつたが、先輩の意見は野瀬先生をおおいに勇気付けた。そして、先生の素直な心を報いるような出来事がすぐに起こつた。

「えっ？放課後ですか？ええ、空いてますけど……」

「よし。じゃあ、図書館で勉強会ね。先生は関本で」

「俺かよ。まあ、今日は部活もねえからいいけどさ」

「ありがと、関本！」

被服室から出てきた目立つ一団の中に、このような会話が聞こえたのだ。すれ違つて、野瀬先生は足を止めた。胸から全身に迸り、そしてまたこの胸に舞い戻ってくるこの気持ちを、表現する方法はたった一つだけだつた。

「石崎！」

「は、はい？あつ、おはようございます……！」

野瀬先生は親指を天井に向けてたてて、クリスたちの方へ向けて突き出した。

「グッドラック！」

理由はよく分からなかつたが、とりあえず野瀬先生の応援を受けた勉強会は、予定通りに開かれた。メンバーは、クリス、ノア、来夏、菜月、落合、真央に新しく明音が加わつた合計七名だ。それぞれ得意科目が異なるため、教科によつて教えられたり教えたり立場は変わったが、来夏とノアだけはどの教科でも位置が安定してい

たので、自然、二人の講習会が確立した。真央はどうもそれが気に食わなかったらしく、来夏に何か言っては怒られてしょんぼりしていた。涙ながらに慰めた明音を、真央は殴った。

「じゃあ、これがルート7になって……」

「そう。で、そこにさっきのを代入する、と」

クリスはノアの勉強が調子よく進んでいるのを見てすっかり安心して、来夏が数学を見ている間に、自分は英語の問題の添削でもしてやることにした。ところが、司書が不機嫌な顔でやってきて、クリスにあることを耳打ちし（落合と菜月が破壊しつつある図書館の静寂に配慮して）、クリスは開いた問題集の上に浮かべた赤ペンを、途中で止めてしまった。

「あれ、先輩どうしたんっすか？」

「ちよつとね……！」

明音の問いに、クリスはただ曖昧に微笑んだつもりだったが、きつと興奮は隠しきれていなかった。クリスは、司書が眉を引きつらせる程度の音をたてて本の森の中に駆け込み、本棚の木陰に身を紛らわせた。司書が伝えた内容は大体こうだった。クリスが注文しておいた本が昨日入った。実際の言い方は、これよりはるかに短く無愛想であったが、だからといってクリスの喜びを減らした訳でもない。期待で胸がはちきれそうとは、まさに今のクリスの状態のことを言うのだ。この4、指定された本棚の前についてたどり着こうとしたその時、見知った人影がクリスの目の前に現れた。慎だった。彼は梯子に寄りかかり、重そうな本の中身を眺めていた。そのタイトルは

「『志水晶、孤高の芸術家の生涯』な」

「あつ……」

慎はこちらを見て手を振った。

「よう、石崎。また会ったな」

「その本……」

「俺よりも本の方が心配か？安心しろ。お前が注文した本だ。お前

が最初に読む権利がある」

慎は本をクリスに手渡した。クリスは慎の双眸を直視できないままそれを受け取るうとし、一瞬触れ合った指先に気づいて肩を跳ね上げさせた。怯めば顎に添えられる手。持ち上げられる顔。今となってクリスの胸に蘇るのは、水晶の下の反感ではなく、夢にさえ現れた夜に拒んだ罪深き感情　ただ必死で掻き消す他になかった。

「……何ですか？」

「志水晶に興味があるのか？」

「貴方には関係のないことです」

クリスは慎の直視から目を逸らしつつ、本を抱く腕に力をこめた。激しく揺れる思いの中にも、やはりどうしても他人と共有できないものがあつた。慎は「ほう」と呟くと、目を細め、不敵に唇を歪めた。まるで赤い薔薇の蕾つぼみがよれていくように。

「まあ、てめえが興味を持ってでも不思議じゃねえが。天才画家つてことでも、この学園の卒業生つてことでも、色々と共通点があるよ
うだしな」

「俺はそこまで驕ってはいません。貴方じゃないんですから」

「はっ！随分と俺のことを誤解してるようだな」

「誤解なんかしてません。誰がなんと言おうと、俺には貴方が高慢で自信過剰なようにしか見えません」

「生意気な奴だ」

「正直な奴と言ってください」

クリスは頬に寄せられた手を払った。ぱんという乾いた音が、不発の手榴弾と同様の虚しさを以って響いた。それでも、慎はますます面白そうに笑みを濃くするばかりで、クリスのサファイア色の睥睨へいげいは少しも功を奏していない。この人とこれ以上話しても時間の無駄だ。早く有瀬たちのところへ戻ろう。クリスは頭も下げずに踵を返そうとした。その矢先であつた。

「塔の上に行けば、見つかると思つてたのか？」

クリスは足を止めた。森の出口を見つめた目は大きく見開かれ、音

もなくのんだ息は肺に留まり、本が分厚い本を押し付けた内側でざわめいていた。意識が砂色に染まった。今、会長は何て？背後から肩に手を回され、その手は更に本を抱くクリスの腕へと這い進んできた。拒もうとした時にはもう遅かった。クリスの左手の中に熱を綴じ込み終えた憤は、一人先に悠然と本の森を抜け出そうとしていた。

「待つて、会長……！」

声は届かなかった。夢の中と同じだ。本心だけはどうしても適わない。切なさややるせなさに打ちひしがれ、クリスは握り締めた拳を震えながら開いた。掌の真ん中に置かれていたのは、生徒会の証、千住慎から川崎陽までが嵌めている、水晶の指輪であった。

「これって……」

その時、クリスは誰かの目線に気づいて顔を上げた。すぐ隣の本棚の上に、相当危険な姿勢で佇み、望遠鏡を片手に持つ明音の姿があった。

「先輩……」

「明音君……」

しばしの沈黙。

「そこ、どうやって上ったの？」

「飛び上がって……」

午後五時を知らせる鐘が鳴る。一日目の勉強会の解散後、食事を作りに帰ったノア、ふて腐れた真央の機嫌をとりに行った来夏、剣道部の自主練に向かった菜月、英語のレポートが未提出だと鳥居先生に引っ張られていった落合に別れを告げ、クリスと明音は中庭の噴水の周囲を巡っていた。二人の間に特に気まずさはなかったが、何だか義務的に遠慮だけして、二人は黙ったまま歩いていた。やがて、明音が言った。

「先輩、慎様とそういう関係だったんっすか？」

「いや、違うけど……」

指輪はポケットの中にしまっていた。触れる気にもなれない。

「別に俺に遠慮しなくてもいいですよ。俺、慎様のことも尊敬してるけど、先輩のことも尊敬してますし。それに、慎様ってそういう噂が絶えないから……」

「誤解しないでね。君がいう『そういう』は、俺と会長の関係には全然あてはまってないから」

「じゃ、じゃあ、何であんなことに……?!」

「そんなの俺が聞きたいよ。とにかく誰かにちよっかいかけるのが好きなんだろ」

「うーっ、例え先輩であろうと、慎様を馬鹿にした者は許さ……!」

「き、君が言ったことを要約するとそういうことじゃないか!」

頬をつねろうと伸びてくる明音の手を押さえながら、クリスは反論した。あの時触れられた輪郭は、冷たい秋の風に曝された今も尚熱を帯びている。クリスは気づいた。自分は嘘を吐いている? 会長とは何もないと言い張りながら、胸の中では、抱きしめられたあの夜、左手を包み込まれた先ほどのことを思い返し、酔いしれれている? そんなことがあってたまるものか。否定の言葉は弱かった。でも、本人に向かつて言ったとおりだ。千住慎は高慢で、自信過剰な人物だ。人を翻弄させ、その心を弄ぶ、冷酷な人間だ。しかし、なぜそこまで言い切ることができるのか。自分が現に翻弄させられているからか? 心を弄ばれているからか? ということは、自分は本当に生徒会長に……

「痛っ!」

「食らえ、慎様の恨み!」

明音の攻撃が遂に決まり、クリスは降参の音をあげた。すっぱんのように食らいついて離れない明音をやっこの思いで引き剥がし、涙目をぬぐいながら、クリスはつくづく思った。もういい。自分にはこの痛みだけで十分だ。その他の煩わしいことなんて、全部捨ててしまえ。

「それで？とうとう慎は動いたのか？」

「そうみたいだよ。まあ、『影』からの直々のお願いとなれば、さすがの生徒会長も動かない訳にいかないからね」

「全く、世の中って面倒な問題ばっかで出来てんのな。そのくせ、出来上がったものはないしたもんじゃねえんだから」

慎が不在の生徒会室に集った颯、荔枝、陽の三人のうち、一人は懸命にペンを動かし、二人は状況に甘んじて仕事の手を休めていた。もちろん、前者とは颯のことで、これは先の委員会の記録を清書している最中であつた。その向かいで、荔枝はカバーをかけた文庫本を捲り、陽は楽譜を机の上にはら撒いて眺めている。颯が再び口を開いた。

「残念だな、クリス」

「何が？」

同時に問う荔枝と陽。

「慎に誘惑されちゃつてさ。やっぱり僕が代われればよかったかも。

僕の方が絶対クリスとの接点は多いもの。ダンス部の背景だってクリスに頼んだんだから」

「しかし、颯には王子様がいるだろう？」

「もちろんさ。それでも気になるぐらいクリスは興味深い子ってことだよ」

「報われねえな、王子様」

陽が茶化すように言うのと、颯は微笑した。

「そんなことないさ。僕はいつもナツに振り回されっぱなしだよ。傘も持っていかれるしね」

やっとひと段落ついたところで、颯は痛み始めた手首を振り、読書熱心な荔枝に尋ねた。

「ところで、荔枝、仕事さぼってまで何読んでるの？」

「『高慢と偏見』」

荔枝は颯の言葉に込められた皮肉は無視して答えた。

「……ああ、オースティンね」
「それで読み返すの何回目だよ？」
「この世に高慢と偏見がある限り、何度でも」
ペンを持つ手、本の表紙を愛でる手、譜面を辿る手、三人の手に水晶の指輪が煌いていた。

「ほっぺ、まだ赤いですね」
「うそ……」

ベッドの上で正座しながら呟いたノアに、布団を敷いていたクリスは思わずため息を漏らした。もう既に負傷してから四時間以上が経過しているはずなのに。ノアは慰めるように微笑むと、ふと気付いたようにベッドの下から携帯用の救急箱を引っ張り出し、筒状の容器に入った軟膏なんこうを取り出した。きよとんと見つめるクリスに、ノアは人差し指を軟膏に白くまみれさせて提案した。

「気休めにしかなりませんが、少し薬でも付けときましよう」
クリスはノアの隣に腰をかけ、確かにまだ疼く頬こほを彼の方に向けた。ノアは手馴れたように薬を傷につけ、円を描くようにして伸ばしていく。くすぐったくて、クリスは思わず笑った。

「動かないでくださいよ、クリス様」

「ごめん。でも、くすぐったくて……」

言いながらもクリスはわずかに身を反らす。

「笑わせるためにやってるんじゃないんですからね」

「有瀬に説教されるなんて珍しいな」

「説教だなんて。僕なんかがおこがましいです」

「おこがましくなんかないさ。ありがと、有瀬」

クリスは礼を言い、布団の中に滑り込んだ。いつもより安らかな気分になれたのは、昨夜の孤独が胸に堪えたからか。ノアは指に残った薬をふき取ると、電気のスイッチを消した。暗闇が訪れた。クリスは、音でノアがベッドに戻ったことを確認すると、あるはずの手

を求めて右手を伸ばした。だが、一日の隔離を経て、いつもの習慣は忘れ去られていた。

「有瀬」

「な、何ですか？」

なぜノアは慌てたようにどもるのだろう。

「昨日は何があったの？」

「いえ、大した用ではありません……」

なぜ伸ばした先に手がないのだろう。

「有瀬」

「は、はい？」

「やっぱりさ、有瀬がいないと夜はつまらないよ」

「はあ……」

耳でベッドが振動するのが分かった。慣れてきた目で、ノアがこちらに寝返りを打ったのが分かった。著しい段差のせいで互いの顔が見えないが、クリスははつきりと、この胸に寄せられるノアの灰色の目を感じていた。安堵してクリスは瞼をおろした。二重の暗闇の中には、無限の安らぎがあった。

「有瀬、君は……君は、大切な友達だよ」

「え、ええ。クリス様も、僕の……」

やっとなれ合う指先。

「有瀬、明日も勉強会、頑張ろうね。転校なんて、絶対しないでね」

「ええ……ええ、クリス様」

ええ、クリス様

今日のメンバーは少なかった。水曜日は部活が重なりやすい曜日なのだ。弓道部、剣道部、サッカー部と見事にとられ、メンバーは帰宅部のクリスとノアのみとなった。それでもクリスは決行をノア

に宣言したし、ノアもいつも通りに微笑して頷いたはずだった。

「あれ？有瀬？」

図書館をのぞいてみても、先に来ているはずのノアはいなかった。何か用でも思い出したのだろうか。昨日と同じ机には、ノアのノートと筆箱が置かれている。五分も待つていれば来るだろう。クリスは英語の問題集を開き、解答もなしに丸付けを開始したが、二十分も過ぎるとさすがにおかしいと思い始めた。携帯電話を開いても、何の連絡も入っていない。律儀なノアらしくなかった。司書の目を盗み、そつと電話をかけてみると、誰も出ない代わりにどこかで誰かの携帯が震える音がした。クリスが電話を切ると、音も途絶えた。二度試しても結果は同じだった。偶然ということはありえない。間違いない、ノアの携帯だ。ノアはこの図書館内にいるのだ。好きな本でも見つけて夢中になってるのかもしれない。約束を破るのよ、そちらの方がよっぽどノアらしく思えたので、ひとまずクリスはほつとして、図書館の中を巡り歩いた。

「有瀬？」

今日は落合と菜月の音がないため、声を落として呼んでみる。誰かの会話を聞きつけて、本棚の間隙からそつと覗いてみれば、はたしてノアはそこにいた。話をしているからには一人ではなかった。誰かと　そつだ、生徒会長と一緒に。クリスははつとした。話し声が途絶える。本を読み、思索するに理想通りの世界、完璧な静寂の世界が、二人の閉口によって創り上げられた。慎が急に屈んだ。そして、唐突に、慎とノアは唇を重ねた。

何か割れる音がした。続いて起こるのは、悲鳴、誰かの平謝りする声と、司書の叱るに叱りきれない言葉、割れた花瓶についての解説。こうしたものにもまるで構わず、慎とノアは二人きりの世界に留まっていた。二人が時々苦しげに漏らす吐息だけが、クリスの中の唯一の音楽だった。

知らず知らずにポケットに突っ込んだ左手、引き上げたとき、薬指にはいつの間にか指輪が嵌はまっていた。

第九話 この密室を愛せよ

クリス様へ

ごめんなさい。今夜も諸事情により遅くなります。

鍋の中に夕食を作っておきましたので、温めて食べてください。

僕のことには待たずに……

たった一枚、テーブルの上に残されたメモ用紙、そこに書かれたことを全て読み終わらぬうちに、クリスは手の中でくしゃくしゃに丸めて投げ捨てた。灯かりもともしていない部屋だ。目で追っていたものが、本当に文字であったかも分からない。クリスはソファの上に身を投げ出し、震える肺を懸命になだめた。暗闇の中、薬指をなぞる環の上の水晶だけが、唯一の光を放っている。クリスはその光に縋る^{すが}よう、右手で左の指を強く抱きしめた。もう隠し切ることはできなかった。今日の放課後、図書館で慎とノアのキスを目撃してしまったとき、クリスは悟ったのだ。こうしている間にも心の器に注ぎ込まれ、水面を波立たせる思いの正体を。折りたたんで重ねた膝をわずかにずらす。目を瞑れば息苦しい確信は高まる。揺れる水面に映り込む青い瞳と不敵な笑み　自分は、自分は会長に……

「おや、誰もいないの？鍵も開けっ放しなの？」

クリスは飛び上がった。突然訪れた明るさの中に浮かび上がったのは、薄い灰色のスーツにピンクのネクタイを締めた理事長だ。堂々と不法（恐らく）侵入を犯しておきながら「あれ、いたの？」と住人に向かって呑気に呟くあたりは、さすが学園のトップのことはある。ソファから転げ落ちたクリスは、ちかちかする視界で尋ねた。

「いつ来たんですか?!」

「いつって、今さっきですよ。ずっとここで待ち伏せしてるはずないでしょ。電気もついてないから誰もいないかと思っちゃった」

「あの、普通、他人の家に誰もいないと思ったときって入ってきま

すか？」

「いいんじゃないの。だってここは君たちの家ではないでしょう。それに、僕は三宿学園の理事長だし」

「そういう問題なんですか……？」

理事長は勧められもしないまま席につき、靴下の穴が急に気になったらしく、屈んでつま先を確かめようとして、床に捨てられたメモ用紙を拾った。クリスは急に表情を強張らせて立ち上がった。再びソファに身を沈め、太股の付け根に肘をつき、両手を組み合わせる。メモの皺しわが伸ばされていくかすかな音を聞きながら、クリスは無感動を装って言った。

「ノア君なら今日もいませんよ」

「知ってる。メモにも書いてあるし、そもそも僕の指示だから」
「はい？」

理事長はメモを丸めて床に置き戻し、そのまま浮かせた腰を利用して、台所へ鍋の中身を覗きに向かった。小さく歓声をあげた理事長は、部屋の主にも許可も求めず鍋を火にかけた。結局クリスは、出上がるまで夕食が何か分からずじまいということだ。

「あの、理事長の指示ってどういうことですか？」

クリスは戻った理事長の隣に座って訊いた。

「言葉通りの意味。僕がノアに今日は帰らないよう指示したの。今日だけじゃないよ。今日からずっと。今日からね、ノアは生徒会長と同棲させることにしたから……あつ、同棲とか言っちゃった」

「今日から、会長と……？」

「そう。会長の家庭教師と一緒に勉強を見てもらうことにしたから。別にいいよね？転校する訳じゃないし。学校でも顔は合わせられるし」

クリスは黙り込んだ。どのように答えればいいのか分からなかった。クリスにとって、ノアは白鈴学園での生活の一部であり、学園とノアは決して切り離せないものだった。自分の帰る場所にはノアがいなくてはならなかった。そう信じ込んでいたのに。今日あの瞬

間から世界が変わってしまった。ノアはフライパン片手に微笑んでいるノアではなくなった。慎に寄り添い、その接吻を受ける姿こそが、今のクリスの中の有瀬ノアだ。そして、クリスは、苦々しい思いをなくして、彼のことを思い返せなくなっていた。俺は有瀬と一緒にいなくて済むことにどこかでほっとしている？

「よし、それならオーケー。万事快調だ」

クリスの沈黙をどう受け取ったのか、理事長は満足そうに頷いた。オーケーかもしれない。でも、万事快調な訳がなかった。反駁は心の中のみで行った。ちょうど料理が温まり、クリスと理事長は口数少なく共に食事を済ませると、これまた嫌に素っ気無く別れたのであった。

一人の寝室は冷え冷えとして暗かった。電気をつけてみても、ただ物の形が鮮明になっただけで、クリスがそこから感じ取るものは変わらない。慣れなければ。この孤独な部屋こそ、これからクリスが帰る場所となったのだから。

布団を敷くのがひどく億劫に感じられ、クリスは最早彼のものとなったベッドに横たわった。ベッドは新しい主人に対してやけによそよそしかった。ばねの跳躍は硬く、シーツは凍てついていた。だが、クリスは誰の冷遇にも構っていられるような状態ではなかった。付けっぱなしの電球の下、うつ伏せになれば浮かんでくるのは慎のこと、ノアのことだ。まずは生徒会長　慎への想いは確定的だった。水晶が閃き、夢は変わった。振りほどこうともがいていた手は慎のそれと結ばれ、調整された視線の先にあったものを見上げる瞳は、恍惚として霞がかった。クリスは石灰岩の床に背伸びして立った。素足の元で白いローブの裾が風にはためく。唇が触れ合う直前、ふとその風に痛めつけられる者の存在に気付いて、アーチの窓の外を見遣る。すると、ノアが窓辺でこちらを振り仰いでいる。

「有瀬！」

思わず声に出して叫び、クリスのはつと口を覆った。もう大丈夫

なのだ。落ち行くノアを救うのは自分の役目ではない。生徒会長の役目だ。あの水晶の夜もそうだった。ノアが最終的に縋ったのは、自分ではなく会長だった。

ふいに訳が分からなくなつた。この胸を占めるのは何だ？ 慎への想いか？ ノアへの嫉妬か？ この二つのことは認識している。だが、同時に対極するものも存在する。即ち、慎への嫉妬と、ノアへの執着も。

感情の波がせめぎ合い、クリスは溺れる。藁わらをつかむ思いで伸ばした手に、何かが触れた。クリスは目を開けた。枕の下に挟まっているものがある。なんだろう？ 引つ張り出してみると、それはスケッチブックであつた。出席番号も名前も書いていない。ノアが美術の授業で使っているものとは違う。一瞬罪悪感に駆られたが、メモを投げ捨てたときの思いでクリスは紐を解き、目を見開いた。何の変哲もないスケッチブックは、鉛筆画集の傑作だった。そこにはあらゆるものが描かれていた。学園の至る場所の風景、花や鳥、それからクリスの知人数人の顔や姿も。菜月は机に突っ伏していた。来夏は真央の頭をくしゃくしゃにして笑っている。颯はファイルを抱えて何事か思案しており、荔枝と陽はくつろいだ表情で背中を寄せ合っている。明音などは、会長と思しき人の後を、カメラを持って追っていた。思わず笑いが漏れて次のページ、クリスはぴたりと静止した。自分だった。収められた人物画では、唯一頭から足先までがきつちり描かれている。絵の中の自分は、手を繋いだ誰かに向かつて笑顔を浮かべていた。その誰かは分からない。どうやら手しか入り切らなかつたようだ。隣のページは真っ白だった。

クリスはベッドを飛び降りると、鞆の中を漁ってすぐさま自分のスケッチブックを取り出した。必死でページを捲った。ここに来て色々なものを描いた。人の絵だつてももちろん描いた。だが「裏切つたのは、そつちだ……」

クリスは膝を落とした。絶望したように天井を仰ぎ、搾り出した言葉は保身のため。

天才少年画家の手を滑り落ちた経歴、そこに有瀬ノアの絵はなかった。

「はっ?!有瀬と別居?」

「うん、まあね……」

朝の教室によく響く声を上げたのは落合だった。力なく頷いたクリスに代わって落合の口をふさいだのは来夏だったが、彼の方も府に落ちない顔をしていた。来夏の拘束を逃れると、落合は再び問い詰めた。

「どうして?理事長は説得したんじゃないのか?」

「そのつもりだったんだけど、どうもそうじゃなかったみたい。生徒会長の家庭教師と一緒に見てもらうことにしたって」

「生徒会長?」

「そりや大した出世だね」

菜月は頬杖をつき、半ば興味なさそうに、半ば皮肉っぽく言った。来夏は視線で菜月を咎め、それからクリスの方を仰いだ。

「石崎……」

「まあ、そういうことだから」

クリスは腕を伸ばして言った。そういえば、ストレッチのリラックス効果について、誰かが保健の授業で発表していたな。

「まあ、そういうことだから、勉強会はもう用なしてこと。俺たちだけでやってもいいけど、どうせ皆忙しいから集まらなさそうだし。有瀬のことは、優秀な家庭教師が見てくれるみたいだし。はは、俺も追い抜かれないように勉強しなくちゃなあ。とにかく、一日だけだったけど、ありがと、関本」

「あんた本当にそれでいいと思ってるの?!」

叫び声と、荷物を取り落とすどさつという鈍い音に、一同の視線が教卓前に集まった。野瀬先生だった。いつも教室に来る時刻より、今朝は十分も早い。クリスを見つめる野瀬先生の目は揺れていた。

裏切られた者の目だと、クリスはぼんやり考えた。まるで、昨夜の自分のような。

「野瀬先生……」

先生は堰を切ったように話し始めた。

「あんた本当にそれでいいと思ってるの？あんた、自分でどうにかするって、理事長に言ったんじゃないの？そんな……そんな簡単に友達のこと投げ出して良いと思ってる訳？！有瀬のこと、大切な友達だと言ったんでしょ？！有瀬と一緒にいたいんでしょ？！」

「曜子ちゃん、ちよつと落ち着けて……！」

「黙ってて！違うの？！石崎、あんたそう言ったんでしょ？！」

制止しようとした落合の手を払いのけ、クリスの肩を揺さぶる野瀬先生。答えを聞くためか、感極まったのか、先生の動きが止まった隙に、クリスは小さく答えた。

「……ええ、言いましたよ」

「だったら何で？！」

先生のシャツを掴む手に再び力がこもる。クリスは色のない瞳を俯け、微かに笑いさえして答えた。

「だって、俺がやらなくても、他の人がやってくれるじゃないですか……」

クリスは自由になった。やっと解放されたとの安堵が頬の辺りに見られ、あとは深い影が彼の顔を覆っていた。来夏、菜月、落合の三人が思わず憐憫を握った瞬間であった。だが、同時にそれは、野瀬先生の手から一切の憐憫が離れた瞬間でもあった。

「野瀬先生！」

一昨日、図書館でクリスが慎を拒んだ時とは違う、もっと重く、もっと厚い音が、教室中に響き渡った。手榴弾の煙のような音の波に触れられるや否や、数少ない早朝登校組も口を閉ざし、教卓の方に身を反した。クリスは左斜め後方の机に肘をつけて、辛うじて立っていた。赤く染まった右の頬は、金の絹糸から剥き出しになっている。野瀬先生は疾駆した後のように荒く息を切らしていた。

「石崎、あんたが校長に訴えようが、理事長に訴えようが、私は今あんたを叩いたこと絶対後悔しないから。それだけは言っとくわ。これで最後の対面になるかもしれないしね……」

「おい、曜子ちゃん！」

「ごめんね、落合。悪い、関本、私の代わりに朝の連絡よろしく。酒本も日直なんだから、ちゃんと日誌を取りにくるのよ」

「野瀬先生……」

「うん、ごめんね」

先生は足早に教室の前を横切っていき、廊下を出るなり耐え切れなくなつたように駆け出した。まるで霞の向こうの出来事でも見るみたいに、頬の痛みも感じぬまま、野瀬先生の背を見送っていたクリスであつたが、ふと灰色の目線に気付いて振り返つた。ただ微笑しているだけのノアがいた。

「あら、野瀬先生もついにやっちゃったわね」

養護教諭の里見先生の反応は意外と薄かった。かたく絞つた濡れタオルに氷を詰め込みながら、世間話でもするような口ぶりと言う。懸念しているのは、クリスの付き添い（という名目のさぼり）でやつて来た、落合の方だ。

「あの、沙織ちゃん、『やっちゃったわね』ってね……曜子ちゃん、ほんとに大丈夫なのか？」

「平気だと思つたよ。野瀬先生は強い女性だから。はい、石崎君、これで冷やしとくといいわよ」

「ありがとうございます」

タオルの冷たさが肌に染みる。熱をもつた箇所急に冷たいものなご押し当てたからだ。それは、クリスがノアの孤独な心に押し付けた友情に似ていたのかもしれない。だとすれば、逃れなくなるのも頷ける。薬指の上で水晶が鈍く光る。

「いや、強い女性とかそういうことじゃなくてさ……」

「落合君、いくら心配しても現状は変わらないのよ。もっと気持ち

を前向きに持ちなさい。その方が救われるわ」

「はっ？何だよ、それ？」

「最近の私のお気に入りって奴よ。あと、鳥居先生ならこつも付け足すかな。今、英語の授業に出た方が、将来的にもつと救われるわよって」

「うわっ……」

「そういうこと。鳥居先生が心配なさってるから、早く君は行きなさい」

追い出された落合と入れ替わりに、今度は校長捜索隊の面々がなだれこんできた。クリスが、今のようない心理状態でなかったら、「朝からご苦労様です」の一言も言えただろう。里見先生は胸元のクロスを弄んでいたのをやめると、深いため息を吐いて、ようやく真面目な表情を作った。

「石崎君、奥のソファに腰掛けて少し休んでなさい。こっちは少し落ち着かないと思うから」

クリスが素直に従うと、里見先生は、部屋と称した区画をカーテンで覆って、周囲の騒がしさからクリスを謝絶してくれた。クリスは疲れきったように背もたれに体重を預けた。心はまだ麻痺していた胸の中に散らばった破片をどうにか拾い上げようとしても、拾ったものを収容する籠がない。また取り落とすしか術がない。持ったままでは、その切っ先が掌を切り裂くから。そして破片はますます細かく……煩わしくて、気だるくて、とてもやり切れそうにない。気がつくくと水晶ばかり見つめている。自分が真に欲しているものは果たしてどちらの夢なのだろう。舞台は同じ塔の上。人物は二択。甘い陶酔をもたらす慎か、それともホウセンカを差し出すノアか。

これで何度目の気がつくかと、だろう。だが、指輪の輝きに目を眩ませられる前に、クリスは急いで鞆へと目を移した。湿ったタオルを投げ出した手。その手で今度はノアのスケッチブックを取り出す。唯一信じられること。絵の中では確かに笑っていた自分

張り詰めた水面に筆先が落ちる。広がる波紋が、夕日が既に染め上げた水槽に赤を重ねていく。

つい十分ほど前までクリスの周りに集い、何を描いているのかと興味津々で見つめてきた美術部員たちも、今は落合の指示の下に帰宅していた。この静まり返った美術室をクリスと共有するのは、オレンジジュースの缶のみだ。ふとそのしまったままのプルタブの上で目を休めるとき、無言で缶を置いていった落合の背中が浮かぶ。硬くなった指先で触れてみれば、缶の表面は冷たく汗ばんでいた。

クリスは絵筆を水の中でかき回しながら、息を吐いた。とうとう最後の仕上げという段階までできている。あと少しだ。あと少しすれば、確かな結論がでるはずだ。信じて筆先を絞っていたその矢先だった。美術室の扉が開く音に、花木先生かもしれないと振り返ったクリスは、思わず筆を取り落としした。

靴音だけが彼の侵入してくる音だった。クリスは彼から目を離せないまま、描きかけの絵を隠すように立ちあがり、それ以降は何も出来ずにいた。しばらく向かい合って佇む中、急に腰を引き寄せられた。彼の胸元に手をつき、やはり悲しいまでに翻弄されながら、クリスは彼の目を見上げ、そして溺れた。

「生徒会長……」

慎は感じただろうか。クリスの吐息が含んだ、湿気と温度を。クリスの頬を包み込んだ右手の指で。慎は何一つ言わなかった。嘘甘い誘惑の言葉も、クリスの名前さえも。ただキスだけを施そうとした。それはまるで、最後の仕上げを無感動の内にやり遂げようとする人のように。

「駄目ですよ、千住様」

二人の影は、ふいにやってきた新しい影の中に紛れた。そして、その持ち主の一言で、少し爪先立ちになれば唇が触れ合いそんな距離を保って、二人は永久に隔絶されてしまった。

クリスが顔を向けたとき、ノアは、負傷した箇所を押さえるように

左腕の肘の辺りを抱え、美術室の扉の縁に寄りかかっていた。笑ってはいなかった。顎を引き、唇をきつく結び、眉を袂でぐっと締め、非難がましい眼差しで二人の僅かな間を睨み付けている。慎が仰ぐと、ノアはようやく口元を緩めた。

「絵を描いている人の邪魔をなさるなんて。貴方らしくもありませんね」

「……………そうだったかもな」

慎は声をたてて笑うと、初めて会った晩のようにクリスの髪をくしやくしやに撫で、ノアの元へと歩んでいった。行かないでと止めることは出来なかったし、そんなことをする気はまるで起きなかった。自分の元へ帰ってくる慎を見つめ、差し出された手にまわりつくノアは、ひたすらに無邪気だったから。

「邪魔したな、石崎」

振り返りもせずに振った慎の手に、水晶の指輪が一瞬煌いた。だが、その輝きは夢の如き儚さで消えてしまった。クリスの胸に永久に留まり続ける光なら、慎に寄り添いながらこちらに翻った、物悲しいノアの灰色の光のみだ。それだけが、唯一、クリスに落ちた絵筆を拾わせた。

白のアトリエの戸は開いていた。無用心だな、とノアは思った。

よほど慌てて家を飛び出したのだろうか。いずれにしても自分の知ったことではないのだ。かつての同居人が、自分に対してどのような感情を抱いているか、痛いほど知っていた。自分がそうするようにな仕向けたのだから。門から玄関へ続く階段の花々を見渡す。この住人は今朝、花に水を遣っていないのだろう。どの花房も小さく萎んで見えた。哀れだがこれでいいのだ。このままどんどん枯れてしまえばいい。花卉が地面に散り、人の足に踏み潰されて醜く茶ける頃には、自分も同情を忘れていよう。そうだ。養父の口癖ではないが、これで「万事快調」なはずだ。なのに、なぜだ。満足しきつ

ていない自分がいるのは一体なぜなのだ。

「お邪魔します」

誰もいないことは承知で言った。皮肉のつもりだ。歩む廊下に、覗いた居間に、風呂場に、洗面所に、一々彼の姿を見出した。台所には、鍋の中に冷たくなった昨夜の夕食の残りが置いてあった。そうだが、彼は何と言ったつけ。「有瀬には料理の才能があるよ」だったつけ？「もつと色んな人に食べてもらうべきだ」とも……思い出しながら、どうしようもなくてノアは笑った。自分は憐れまれたのだ。今、散々愚弄し、侮辱して相手に、かつては。三語ほど音を発して、そこでやめた。自嘲の笑いにはきりが無い。

聞き慣れた階段の軋む音で、ノアは自分が二階への道を進んでいることに気付いた。そうだ、そもそも目的は二階にあったのだった。夕日の差した寝室は、ノアにとっては見慣れぬものだった。もしかして、それだけではなく、もうこの部屋が自分のことを忘れてしまったのかもしれない。もうこの部屋はあの人だけのものなのかもしれない。ノアはベッドに目を落とし、これまた見慣れぬ形に歪んだシーツを見遣った。ノアは端を引っ張ってシーツを直し、枕を捲ってその冷たさに手を離れた。泣き出したいような、叫びたいような、狂おしい衝動に駆られ、思わず数歩後ずさる。茜色の海に膝を崩し、凍えた手を抱きしめた。見開いた灰色は揺れていた。

「……ス様……」

唇が勝手に名前を継ぐ。不揃いな呼吸を何度か繰り返した後、ベッドに手をかけ、ふらつく足で再度立ち上がり、傾いた枕とその斜線上に覗くものに、先ほどの衝撃が錯覚によるものではないこと確かめる。

「……リス様……」

枕を持ち上げる。そこに広がるのは、山鳩色と虹色のコントラスト。

「……クリス様……」

「……有瀬！」

扉を蹴り飛ばす音と、階段を駆け上る音に、感激に浸した身を翻す

間もなく、ノアはクリスの嗚咽おえつを耳の横で聞いていた。肩に巻きついているのは、クリスの腕だった。肩を湿らしているのは、クリスの涙であった。そして全身を包むこの熱も、優しさも、友情も、紛れもなくクリスのものであった。

「クリス様……！」

「有瀬のバカ！」

「えっ……？」

戸惑うノアを腕の中でひっくり返し、ぐしゃぐしゃになった泣き顔を手の甲で拭くと、クリスは濡れた手をノアの肩において、数度しやくり上げてから言った。

「友達を置いて、勝手に一人でどこかに行くなよ！」

威勢は結局それ以上続かなかった。クリスはノアを抱きしめなおし、一層高まる声を懸命に押し殺して泣いた。ノアはしばらく呆然としていた。友達　今まで聞き流していた言葉が、急に胸に引っかかり、どのような孤独の濁流を持ってしても、とどめずにはいられなかった。クリスの手をとったノアは、その手に最早何もはまっていないことに気がついた。クリスは捨てたのだ。友達のために、美しい水晶の煌きを。

二人は互いに肩を濡らしあっていた。日が暮れて、枕の下にあった絵が見えなくなるまで。クリスの笑顔が描かれたその隣のページに、絵の中の彼が手を繋いでいる人物が描かれていた。それは、クリスに対して微笑み返す、ノアの姿であった。

「お疲れ、慎」

「嫌味のつもりか？」

「あのね、慎、結果が上手くいこうとかまいと、お疲れっていう挨拶は使えるんだよ」

「……そうかもな」

天蓋に覆われたベッドの上には、横たわる人影が望めるのみであ

った。颯は、その傍らに肩膝をたてて座り込み、マグカップに注いだ煎茶の香を嗜んでいる。とある明け方のことだ。

「だけどさ、失敗した割には随分楽しそうだね」

「バカ言え。楽しんでる余裕なんてあるか。これから益々《ますます》忙しくなるってのに」

「でも、クリスのこと、気に入ったんでしょ？」

「いじめがいがあるのは認める。だが、今までののはほんのお遊びだ。これからは本格的に叩きのめさなきゃならなくなる。仲良くなりすぎると、後悔することになるぞ」

「わかつてるさ。大丈夫だよ。僕の前には煩わしいことが山ほどあるから、親交を深める暇なんてないさ。どこかの誰かさんのせいで」

「生意気言うようになったじゃねえか」

「荔枝と陽の影響だよ、きつと」

「フン、いずれにしたって気に喰わねえのは変わらないな」

「おいおい、召集かけておいて悪口でお出迎えかよ」

部屋の扉が開いた。颯がレンズを被せていない目なくとも分かる。

荔枝と陽だ。二人はベッドの元に歩み寄ると、互いにあまり距離をとらないようにして止まった。口元が緩んで見えるのは、同僚の失敗を聞いたせいなのか。

「おはよう、陽、荔枝」

颯は暢気に言う。

「ごきげんよう、颯。ところで、私は馬鹿とパジャマパーティーをしにきたつもりはないのだが」

荔枝は冷たい侮蔑の目をベッドに寄せた。

「だつてさ、慎」

「安心しろ。俺とてそんな気はねえ。ただ、ちょっと、貴様らの注意を喚起しようと思つてな」

「『注意を喚起する、なんて日本語を使えるなら安心した』だろ、

荔枝？」

「ああ。それともう一つ……」

「『馬鹿にも喚起できる注意があるのは初めて知ったが』」

「その通りだ」

「やれやれ、相変わらず手厳しいな」

陽は肩を竦めつつ笑っていた。言わんとしたことを読み抜かれても、相手が彼である限り、荔枝はまるで驚く様子もない。すっかり馴染みのことなのであろう。颯は、二人の関係に「羨ましいよ」との感想と微笑を零し、「コーヒーをまた含んでから、ベールの中に尋ねる。」「それで、その注意って何？」

東に向いた大窓から朝日が差し込み、絨毯の上できらきらと舞い踊つてみせた。踊り子の数人は、その舞台では飽きたらず、少年たちの水晶の指輪に飛び移ったが、それでも少年たちは一向に興味を持たない。観客の趣向を見抜いてか、舞台は早々と幕を閉じ、元の夜明けの暗闇と沈黙が、寢室の外を覆った。そして、一同は解散した。

「でも、しょうがないよね。その部屋が一番居心地のいいことを知ったら、扉を閉ざすしかないもの。その時やっと、新しい世界は完成するんだ。おめでとう、石崎・エーリアル・クリス。ようこそ、君と僕だけの密室へ」

第十話 笛が鳴って鳴るまで・前編

学園内が一層活気に満ちるその日の朝、風間校長は淹れたてのコーヒーをすすりながら、二学期に入ってから初めての「十分以上一つの場所に留まってもよい時間」というものをたしなんでいた。普段は酷使されている脚も、今はソファの上で丁寧に組まれている。今日は自分の代わりに、生徒たちが駆けずり回る日だ。部屋の隅のカレンダー、モネの絵の下の、赤いペンで丸く囲んだ27の数字を見つめ、校長は生徒たちの努力と結束にぼんやりと思いを馳せた。

「お入りください」

きつちり間隔のそろった三回のノックに、校長はすばやく立ち上がった。来客の正体は分かっている。細めた目を覆う眼鏡のレンズには、予想した通りの人物が映り込んだ。薄い灰色のスーツを着込んだ、長身の男性は、スーツと同じ色の眉を寄せた。

「おや、座ったままでよかったのに。どうせ僕だっただけで分かってたんでしょ？」

「お久しぶりです、理事長」

校長は律儀に頭を下げた。理事長はやれやれと首を振った。

「こんな時だけ真面目にやってもね、肝心な時に仕事をしてなきや意味がないんだよ。生徒会から三百回目ぐらいの苦情が来てるんだから。文化祭の予算書にサインがもらえないってね」

「だから、こういう時こそ真面目にやるものなんですよ」

校長と理事長はやっと目を合わせて微笑みあい、理事長は校長の力uppと向かい側のソファに、校長は新しいコーヒーをしつらえに向かった。主のいなくなった部屋を眺め回し、理事長は前にここに訪れた時から、部屋の様子が何一つ変わっていないことを確かめた。

ただ、カレンダーのページだけ 進み変わり行くものだけが 確かな変革を遂げている。いや、もしかして、机の上の書類の山は 量を増したかな？首を傾げて思案する理事長に、墨汁のように濃い

コーヒーと角砂糖の入った容器を差し出し、校長は再び自分の席に着いて尋ねた。

「それで、どういう風の吹き回しなんです？」

「どんな風もこんな風もないさ。大体風が吹いたらお前が困るだろう」

「……それはどういう意味ですか？」

「冗談だよ。だって、今日は球技大会じゃないか。生徒たちの元気な様子を見ておくのもいいと思って。この歳になると孫がいらないのがさびしくてね。どうせ僕は、ノアの子供を見る前にくたばるだろうし」

「個人的な見解を申し上げると、貴方は世紀末でも生き残っていないかな気もしますがね」

「……それは一体どういう意味？」

「いいえ、冗談です」

私立三宿学園高等部の球技大会は、バスケットボール、テニス、サッカーの三つの競技で成り立っている。体育祭から文化祭までのささやかな小休憩の間に行われるこの大会は、両者に劣らずおおきな盛り上がりを見せるのが恒例だ。今年も例外ではなく、秋晴れの空には花火が上がり、普段の授業開始時間よりはるかに早い時間にも、生徒たちは体育着を着込んで校庭に集まっている。クリスとノアは、お互いを見失わないようにできるかぎり密着して歩き、細い腕で人の波をかきわけて、やっとの思いでクラスメートの元へと辿りついた。ちょうど、体育委員の落合が野瀬先生に小突かれながら生徒の人数を数えているところであった。来夏が二人に気付いた。

「よっ、遅かったな」

「うん、有瀬が弁当に凝っててさ」

クリスが言うと、ノアはバスケットを少し持ち上げて微笑む。来夏の肘元で菜月が目を輝かせた。

「お菓子は？」

「ええ、クッキーも焼いてきました」

「やったー」

「……それで、お前ら、試合何時だっけ？」

菜月を引っ込ませながらの来夏の問いに、クリスはポケットに折りたたんでしまったプリントを取り出し、テニスのダブルスの欄を見て、自分とノアの名を探した。元々、クリスは来夏に手伝ってもらったつもりでダブルスを選んだのだが、来夏は急遽サッカーに移動せざるを得なくなり（理由については可愛い後輩のお願いとでも言うておこう）、空白となった席にノアが舞い込んだ訳だ。ノアの日ごろの体育の授業を見ていれば、勝ちを望めないことは分かっていたが、それでも精一杯頑張るのがノアへの礼儀だとクリスは思っていた。また、変に謙遜もしないノアの態度が、クリスには潔く、愛おしく思われた。

「えっと、九時からだからすぐなんだよね。まあ、酒本と落合の試合は午後だから見られそうだけど、関本のは、うーん、途中からになっちゃうかな」

「それまでに五点は決めておかないとな」

「うん、楽しみにしてるよ」

「はい、おまえら開会式中は静粛に」

明るい笑い声をあげているクリスと来夏に、ようやく仕事から解放された落合がもたれかかってきた。落合の体重を受けてそのまま沈み込むクリスに、ノアが慌てて肩を貸す。

「よっ、お疲れ」

身軽によけた来夏が言った。

「お疲れも何もないぜ。ちくしょう、曜子ちゃんの奴、落ち込んでると思つて心配したら、次の日にはぴんぴんしてるんだもんな」

「先生は強いからな」

落合は理解しがたいとでも言いたげにため息を吐き、来夏はクリスの肩からその腕を預かった。クリスは二人につられて野瀬先生を見

遣った。先生は体育科の教師として、きびきびと指示を出している。クリスに平手打ちを食らわせ、うなだれて教室を出た時の面影はない。ふと打たれた方の頬に手を充てられ、驚いて仰いだ先に、ノアの慰めるような笑みがあった。クリスも口元を緩めた。この場に紛れて、退屈な菜月は、バスケットの中からサンドウィッチを盗み出して頬張っていた。

コーヒーがほどよく冷めた頃合を見計らって、理事長は角砂糖をいっきに三個摘み、一つずつカップの中に落として黒い波紋を立てた。

「体に悪いですよ」

校長がすぐに見咎めた。

「体に悪いも何もないよ。人間どうせ最後は死ぬんだから」

「そういう自暴自棄な考えは心に悪いですよ」

更に二つ加えた理事長に、校長は見るもおぞましいといった表情で露骨に顔を背けた。理事長はスプーンでカップをかき回しながら、渴いた声で笑った。

「説教くさくなったな。君も歳をとったもんだね」

「老いぼれになっても、心だけは成長のし甲斐がありますね」

「成長、ね……」

コーヒーの漆黒に、溶け残った砂糖の白が浮かび上がる。

「では、一同、それぞれの競技場へ向かうように」

鐘の音に促され、生徒たちは動作を始めた。ノアを求めて振り返ったクリスは、戸惑う間もなく人の群れに押し流された。「有瀬！」呼んだ声もむなしくざわめきに掻き消され、あのワインレッドの髪はどこにも見当たらない。誰かに手を掴まれて辛うじてその場に踏みとどまった。騒乱がおさまった後、クリスを救った人物はついに正体を露にした。

「颯先輩！」

「やあ」

颯は片手を微かに上げてにこやかに挨拶した。クリスは安堵した。人が散らかってしまつた校庭に、彼以外の知り合いの姿は見当たらない。

「あ、ありがとうございます」

「たいしたことじゃないよ。流されてく君の姿が見えたからね。誰かを探してみただし」

「あつ、そうだ。有瀬をさがしてたんです。見ませんでした？」

「有瀬ノア？見なかったけど」

困つて肩を竦めたクリスは、自分の手首を握つたままの颯の手に気付いた。失礼にならないように解こうとすれば、今度は耳元の髪をくしけずられ、クリスは思わずその場に硬直する。ラベンダー色の目が二つのサファイアを覗き込んできた。

「は、颯先輩？」

「いつの間に有瀬ノアとそんな親しくなったのかい？」

「ええ。だって、一緒に暮らしてるんですもん。まあ、確かに最初はよく分からないところもあつたけど……」

クリスは颯にノアとの関係について相談したことを思い出し、気恥ずかしさに頬をほんのりと薄桃色に染めた。あれは愚の骨頂、否、そうまではいかなくとも、哄笑にふさわしい愚行であつたとは思ふ。ノアを避け、彼を必要以上に嫌悪したこと。世の嘲笑いを免れても、ノアへの罪悪感は掻き消せない。

「ねっ？僕の言った通りだつただろ？人間関係なんて付き合っているうちにどうともなるんだよ」

「は、はい……」

ささやきかけられた耳が熱い。颯の手は、クリスの手首から肩に伸びていた。うつむいても視界の端に颯の眼鏡の光が映りこむ。その奥にあるラベンダー色の瞳でさえ　突如、クリスは顔を上げて、飛び上がった。幻想のように遠くに聞こえていた足音が、友人の持

ち物であったことが発覚したからだ。慌てて颯から離れたが、菜月の疑うような視線は免れない。しかし、それより数倍強い視線にあてられた颯は、自らの潔白への絶大な信頼を軸に、少しの動揺もなぐ平然と立っている。気まずいのはクリスだけか。

「あ、あの、酒本……」

「やあ、ナツ、どうしたの？」

颯は菜月の元に歩み寄り、肩をそっと抱いて甘やかすように尋ねる。だが、菜月もその手には乗らず、ますます睥睨のミントブルーを重ねるだけだった。

「別に。どうもしないけど」

「だったらそんな怖い顔しなくてもいいじゃないか。ナツはバスケットだろ？最初の試合は審判じゃないの？」

「……そんなこと分かってる」

「ほら、一緒に体育館に行こう。僕はテニスだけど、まだ余裕があるから。ナツがちゃんと審判を務めてられるか見ててあげるよ」

「別に、そんなこと……」

クリスが呆然と見送るうちに、二人の背中はずいぶん遠ざかっていった。颯のことはよく分からない。生徒会長ほどでないにしても、人を惑わせるようなことばかりする。どうしてあんなに甘美にささやきかける必要があるのだろう。颯もまた、クリスを翻弄させようとしているのだろうか。何のために？憤と同じ生徒会役員だからか？

腕時計の文字盤が、クリスを青ざめさせ、足を突き動かした。

息を切らしながら駆けてきたクリスは、試合開始五分前のコートに、ノアが一人佇たすんでいるのを見た。クリスがフェンスを潜り、コートに足を踏み入れて笑いかけると、ノアもゆっくりとだが微笑をつくらった。審判から遅いとの叱責とラケットを受け取り、ネット越しに相手を見遣ったクリスは、再度ノアに向けた笑顔を変えることも忘れて固まった。これは一体全体どういうことだ。

「はは……ま、まあ、そういうルールですからねえ……石崎君は転

校してきたばかりだから知るはずありませんが……」

相手の一人が言った。何と、お気に入り黒いジャージを着込んだ橋爪先生ではないか。その隣にいるのは、胸元に P i c a s s o と刺繍された真っ赤なジャージの花木先生だ。二人とも手にラケットを握っている。握ってはいるが、まさか。監督のためにいるのだと思つた。間違つても、教師と生徒が対戦するはずがない。しかし、結局この球技大会は色々間違つていたし、それらは修正もされなかった。クリスよりこの学園に長く入る生徒たちは、皆平然と現実を受け止め、馴れきつたように楽しげに騒いでいる。橋爪先生の苦笑だけが新参者の味方だ。

「すまないな、石崎、有瀬。ひいきの生徒だからといって手加減する訳にはいかない」

花木先生は剥き出しの闘志をサングラスに黒光りさせていた。口元を緩ませたために出来た皺も、残念ながらクリスには闘犬の威嚇の表情にしか見えない。否、「いいえ」などと笑つて返すノアの方がおかしいのだ。

「花木先生、ひいきとか言っちゃいけませんよ。一応、教師ですから」

「おっと、そうでしたな。あはは、この歳になるとどうも思わず本音が零れてくるようになって。しかし、負けん気では橋爪先生も一緒でしょうな？」

「ええ、もちろんです。コンビを組んで早八年。負けたことなんて一度もありませんでしたし、これからもそうでしょう。例え……」

「例え、相手が元気な若者だったとしても、ですな」

二人は声を重ねて笑つた。異様な光景だ。学校一気弱そうな先生と学校一猛々しい先生が、そこに利害も弱肉強食の定理もなく、励ましい、共闘しようとしているのだから。

「では、これより、石崎、有瀬ペア対橋爪、花木ペアの試合を始めます」

劇の進行役として、神経質そうな体育委員の審判が宣言した。歓声

が二人を盛り上げ、微笑むノアは二人の引き立て役、目が点になっているクリスはまるで蚊帳の外。

「いや、勝ちましたね」

「うむ、見事な勝利でしたな」

「……まあ、負けたよね」

「頑張ったから立派な負けですよ、クリス様」

試合は熟練された技術とコンビネーションの圧勝で終わった。こ
うまでも鮮やかに叩きのめされてくると、いつそ清々しい気分にな
つてくるものだ。ノアの言った「頑張った」というのもきつと、さ
わやかな気分の一因にあるのだろうが。少なくとも、そう信じてい
たい。

「橋爪先生、お疲れ様です」

薄紫色のジャージを着た桜木先生の声が飛ぶと、周囲から低い口笛
と拍手が沸き起こった。慎ましい老カップルは照れたように顔を伏
せてしまったが、クリスも拍手にだけは加わっておいた。この二人
の間柄は早くも周囲の知れるところになっていた。

テニスコートを出たところで、クリスはノアを見失ったことを知
った。かくれんぼでもしているつもりかもしれない、クリスは足
をグラウンドに向けながらぼんやりと考えた。この群集の中でたっ
た一人の顔を見分けるのは不可能だ。しかし、だからといって放っ
ておくにもいかない。ノアはクリスの昼食を預かっているし、それ
に……

「クリス様！」

高揚した塊をやっとの思いで潜り抜けたところで声がした。クリス
は急いで背後に目を返したが、ノアの小さな体は紛れてしまつてよ
く見えない。

「有瀬？」

「クリス様、あの、僕、十二時半に、いつもの場所に、いますから
……！」

「どうして？一緒に関本の試合を見に行こうよ」
「十二時半までですよ、クリスマス様！そこで一度休憩なんです！」
「知ってるってば！ねえ、どこにいるの？有瀬！」
返事の代わりに鐘が鳴った。クリスマスは狐につままれたような気分で混雑と空疎のはざまに立ち尽くしていたが、やがて諦め、テニスコートを守るように密生した林檎の木の合間を進むことにした。今初めて分かった訳ではない。やっぱり変な奴だ。一緒に行動すればいいものを。一体どうして……

「おや、もうノアの試合が終わってしまったじゃない。どうして教えてくれないの？」

「見にくつもりがあつたんですか。安心しました」

例のコーヒーにシユークリームを添えてもよいものか迷いながらも、校長はそつと銀の皿を差し出した。理事長は礼の代わりに大きくうなずき、校長の言葉には片手を振って不満の意を表した。

「あのねえ、僕だつて一応父親なんだよ。血は繋がっていないとしても、ノアは僕の大切な息子さ」

「大切なお子さんなら、もっと頻りに様子を見にいらしたらどうですか？」

「そうもいかないでしょう。僕には君と違って忙しいんだから。仕事をしなきゃ、僕もノアも食べていけないし」

わざわざ柵まで取りにいったフォークを待たず、手づかみでお菓子を頂く理事長を見て、眉をひそめる校長。

「……子供に孤独を克服することを強いるのは、貴方が考えている以上に酷なものです」

「執着されるよりはましだと思っけど。別に、育児放棄してる訳じゃないよ」

クリスマスが試合の状況がよく見える地点に着いた瞬間、前半終了の

ホイッスルが鳴った。何とも間の悪い。グラウンドの真ん中で、来夏とサッカー部部長の大河内が手を打ち合うのが見えた。どうやら同じチームらしい。相手チームとの点数差さえ間違いない計算できれば、二人の活躍ぶりは見なくともよく分かった。来夏はきちんと約束を果たしていた。

「おーい、関本！」

クリスが大きく腕を振ると、来夏はすぐに気付いて寄ってきた。

その後ろを、まるで鶏の後を追うひよこのように、秋元真央がぴよこぴよこと駆けてくる。彼も来夏と同じ色のゼッケンを着けていた。「よう。試合はどうだった？」

「見事な惨敗。頑張ったからよしってことになったよ。事実を言えば、頑張らざるを得なかっただけなんだけどね。橋爪先生と花木先生の黄金ペアだもん」

来夏は快活な笑声をたてた。

「そりゃ、きついな。まっ、互いにお疲れ様ってことだ。ところで有瀬はどうした？」

「それが分からないんだよ。一緒に見に行こうって誘ったのに、十二時半にいつもの場所って言ったきり、どこか行っちゃったみたいで」

昔、来夏にノアの扱いのことで責められたことを思い出しながら、クリスは不自然でないように付け足した。来夏は眉をひそめたが、クリスが本当に戸惑っていることを見取って、肩を竦めただけで済ませた。

来夏の肩から真央がぴよこつと顔を出した。相変わらず人懐っこい少年で、来夏に寄り掛かりながら、爪先だけ地上に残したまま飛び跳ねている。

「石崎先輩、見てました？来夏先輩の活躍」

「バーカ、石崎は今来たばかりだ」

「惜しかったですね。来夏先輩、三連続でシュート決めたんですよ」クリスは感嘆の声を漏らして来夏を褒め、見たかったなと素直に述

べた。

「大丈夫ですよ。ねっ、先輩？後半も決めてくれますよね、三連続シュート」

「おまえがまともにパスを寄せせばの話だな」

「ええー、ひどいですよー。僕はただのマナージャーなのに、結局は同じサッカー部だからって無理やりサッカーに回されただけなんですよ。まあ、来夏先輩と一緒にいいんですけどねっ！」

「暑いからくっつくな……アニエスさんに誤解されるだろうが」

「えっ、アニエスさんも来てるの？」

クリスが聞くと、真央は小さくこくんと肯うなづつた。彼の麗うつくしき従姉いとこは、どうやらこの土埃と熱狂のどこかにいるらしい。来夏の腰にしがみついたままで、真央はこう補足した。

「僕が球技大会に出るって言ったら、母さんが卒倒しそうになって結局色々揉めたんですけど、アニエス姉さんが見てるならいいってことになったんです。僕の家族って本当に過保護で困ります。僕、この学校に来てから自分でもびっくりするぐらい調子がいいし、ちゃんと言ってるのに。これじゃあ、いつまで経っても姉さんが帰国できません」

「おまえが健康になりゃいいんだろ、バカ」

来夏は真央を小突いた。来夏の口調は乱暴だったが、満更思いやりがこもっていない訳でもなかった。クリスはそれを悟っていたからこそ、涙目で何やら訴える真央を眺めても、ほほえましい気持ちになっただった。

七分の休憩を経て、後半戦が始まった。クリスはアニエスとの合流に成功し、彼女の隣で観戦していたが、残念なことに、フランス人ピアニストはあまり良い観戦客ではなかった。真央の方向へボールが向かうたびに悲鳴にも似た興奮の声を挙げた。周囲の人々も次第に落ち着かなくなってきたので、クリスは、真央の方へボールが行くかどうかを監視し、警告するという義務を負う羽目になった。

「ほら！見て！マオ、ボール、蹴るわ！」

ア二エスが叫んだのは、後半三分、両チームの点数差が五点に引き離されて間もない頃だった。クリスがちょうど目を休めていた時でもある。怯えて跳ね上がった幾つもの肩に胸中謝罪しつつ、クリスは、痛いほど肩を叩くア二エスの手に促され、猛スピードで選手たちの間を歩きかうサッカーボールの行く先を見遣った。なるほど、確かに真央の元へボールが飛んでいったところだった。しかし、真央はどう動くだろう。

届いたボールを足先で持て余しながら、真央はボールの処理にすっかり困り果てていた。一体どうすればいいのだろう。たちまち室井、武田のハイエナ二匹に挟まれた。味方だと頼もしく思えるぎらつく目にも、今は恐怖と焦燥しか感じない。真央は口の中がからからに乾いていくのを感じた。

「おい、真央！」

「秋元！」

同時に二つの声が聞こえた。来夏と大河内が、真央の斜め前を駆けている。二人は一瞬はつとしたように視線を合わせたが、その時、真央の右足は既にボールに触れていた。本日二度目の転倒を代償に決まったパスは、距離とタイミングの僅差で来夏が受けた。

「いけ！先輩！」

歓声が真央の言葉を掻き消した。室井と武田が地団駄を踏む傍で、真央はいつまでも元氣一杯にぴよんぴよんと飛び跳ねていた。

第十話 笛が鳴って鳴るまで・後編

「お前さ、やっぱ今年も出ない訳？」

「ああ。人前で恥をかくのには慣れていないからな」

十月の寒波でさえも、くるくると回る換気扇の隙間を潜り抜けられない。すりガラスの向こうにきらめく日差しだけが唯一の灯かり、薄暗い更衣室の湿気は、確かに少年たちの熱を帯びていた。

陽はロッカーの戸を開けると、その奥に丁寧に畳んでしまったテニスウェアを広げ、満足そうに口の端を吊り上げた。まるで武器を吟味する兵士のように。そんな彼の傍で、荔枝はベンチに腰を下ろし、至って優雅に長く艶やかな黒髪をもてあそんでいた。頭を少し後ろに傾げ、相棒の背中に重さを預けながら。

「高校最後の年ぐらい良いじゃねえか。これからもう二度とこんな機会はねえんだぞ」

「そうか、今年で最後なのか……」

「ったく、これだから温室育ちは。お高くとまって困ったもんだ」
「毎年そんな風に言われてきたんだな。長いようであつという間だった」

荔枝の微笑を含んだ呟きに、陽はふと着替え中の手を止めた。

「……お前さ、最後だからって感傷に浸るのはいいけど、その、なんだ、オレたちも最後みたいな言い方はやめてくれねえか？」

「私をまだ愛しているということか？」

「どうしてそういう話になるんだよ？」

荔枝はすっと立ち上がって「さあ」と首を傾げた。そして何も纏っていない陽の肩に両手を置き、爪先を伸ばして愛しい唇の上にキスを一つ。

「お前なあ……」

黒い前髪のカーテンからのぞいた光を手で覆う。こんな真似をしなくとも、藍の目はもう怖くはない。ただし気恥ずかしかっただけ

で。くすぐつたい笑いが、音もなく重ね合わせた後の唇にこぼれ出る。

「頑張つて」

次の試合への進出が決まった来夏と共に、クリスはテニスコートへ続く林檎林を引き返していた。昼まではまだ間があった。もしかしたらノアがいるかもしれないと思ったのと、誰か知っている人が試合をしているかもしれないと期待して、二人は近づきつつある人だかりの歓声をぼんやり聞いていた。また橋爪・花木ペアが奮闘しているのだろうか。クリスとノアを破った後も、順調に教え子たちを打ち負かしていると聞いたし。二人とはまた別の「知っている人」が「試合をしている」ことに気付いたのは、応援の声を耳から五センチも離れないところで聞くようになってからだった。たくさんの人の頭ごし、緑のフェンスの奥に見えるのは、よく見慣れた髪型だった。クリスは足をとめた。

「あつ、颯先輩だ」

「ん？」

来夏は高い背のおかげで、少し首を傾げるだけで試合の様子を確かめることができた。颯の姿を認めて「ああ」と呟き、興味津々に見守るクリスにちらつと目を落とす。

「仲いいのか？」

「えっ？あつ、まあ、一応ね。えつと、相手は……川崎先輩だな」

「決まつてんだろ。こんな人が集まる試合はあの二人の試合しか有り得ねえよ」

来夏は呆れたように肩をすくめると、何とか鼓膜を保守するため、クリスを出いて先に進むよう促した。クリスは名残惜しく思いつつ、足を引きずるようにして歩き出した。それでも、視線はしっかりとコートの中に預けていたが、長いボールの遣り取りの後、ようやく颯が一点を決め、観客がどっと沸いて拍手喝采した。

「さっすがだな、颯」

敵である陽も手を叩いて口笛を吹く。颯は額に張り付いた前髪を払って笑った。

「ありがと、陽。でも、いい加減本気を出してくれないと困るんだけどな」

「はっ！バカ言え。試合は楽しむもんだろうか」

「全く、この調子なんだから。荔枝から何か言ってよ」

何も言われないことをいいことに、コートの中で脚を組んでいた荔枝は、颯の要望にいたずらっぽく小首を傾げた。彼だけは、このジャージの群れの中で制服という孤高の装いに身を包んでいる。しばらく考えた末、荔枝はふと挑発的な視線を陽に向けた。

「何だよ？」

陽が聞く。

「こついつのはどうだ？おまえがもし颯との試合に負けたら、私はしばらく……そうだな、一週間ほどおまえと口を聞かない」

「はっ、てめえの方がまたねえ癖によく言っぜ！」

「まさか。私以外に陽と付き合える人がいるとでも？」

「そりゃ、五萬ごまんというだろうよ。最悪、慎しんでも話し相手にするし」

「そこまで言い切ったからには見ものだな」

「……あのさ、二人の世界もいいけど、試合中はやめておいてほしいな。集中力が乱れるから。いい加減、陽と決着を付けておきたいんだよ」

「上等じゃねえか」

ちょうど試合の様が一変しようとしたところで、クリスは群集の中から押し出されてしまった。後は観客の歓声から様子を判断する他ない。クリスが少しつまらなそうな顔をしてみせると、来夏は苦笑しながら肩を叩いて慰めた。

「どうせ結果は見えてる。同点で終わるんだ。毎年そうだ」

二人は遠目にコートをのぞきながら、のんびりと歩き回り、他愛のない話題で絶えず口元をにぎわせ続けた。ようやく昼休みを知ら

せる鐘が鳴ったのは、二人が歩きつかれて木陰で涼んでいた頃で、沸き起こった興奮とはまた違う歓声に、クリスと来夏もつられて立ち上がった。やっとノアに会える。その時、クリスの胸に浮かび上がった喜びは、まるで自然な感情でありかのように立ち振る舞い、舞台を驚きの色で染めた。それは、長い苦痛の後の安らぎにも似ていた。

ノアがいつもの場所と指定した場所に、彼を含める皆は既に集まっていた。シートの上で、落合と菜月が待ちくたびれており、真央と明音は何やら論争を繰り広げている。クリスにはよく聞こえなかったが、来夏は真央の「来夏先輩の方がどうたら」の言葉を聞くなり笑顔を歪め、彼に鋭い一撃を食らわせた。

「アニエスさんは？」

潰れた真央に、来夏は非情にも返事をすることを強要した。

「あの、食事ですって……里見先生と……」

「沙織ちゃんど？いつの間に仲良くなったのか？」

「ええ、なんか……そうみたいです……」

落合の言葉に答えるまでが、真央の精一杯だった。

「ねえ、早くしよう。お腹空いた」

提案しつつクリスのように頬を膨らませている菜月には、最早誰も文句を言わなくなっていた。

「そうですね。では、適当に召し上がってくださいな」

クリスは靴を脱いでノアの隣に腰をおろした。ノアが膝を引いたのは、恐らくクリスが座れるように配慮したのだろう。卵焼きに手を伸ばしたクリスは、ふと見知らぬ力ラフルな物体がタッパーの中で震えているのに気がついた。

「あれ？ゼリーなんか作ってたっけ？」

ノアを仰いでクリスは尋ねた。灰色の魚を逃がすよう、ノアは視線をタッパーの上に寄越す。

「ええ、でも上手く固まらなくて。さっき冷蔵庫から取り出してみたら、どうにかいってみたいですけど」

「大丈夫つすよ、先輩。めちゃくちやうまいつす!」

明音が親指を突き上げて言い、ノアは礼代わりに少し微笑んだ。

「なるほどね。それで様子を見に帰ってたんだ」

「……ええ」

地面についたクリスの手の上に、ノアはややためらう素振りを見せた後、ゆっくりと小指だけを重ねた。おかずを取り合う落合と菜月にも、来夏に抱きつく真央とそれを振り払っている来夏にも、片手にゼリー、片手に今日手に入れた慎の盗撮写真を持つ明音にも、誰にも知られていない、二人だけの大切な時間だ。

「じゃあ、午後は一緒に回ろうね」

「はい」

返した掌の中に、クリスはノアの小指を包み込む。

体育館は、校舎の西側、塔から南へ引いた直線上にあつた。白亜の壁はつんとすまし、体内にとどろく躍動も歓声も興奮も、いつもはちらとも表に出さない。しかし、今日は開け放たれたガラス戸と窓とが、満ち溢れる熱気を恥じらいもなく吐き出していた。クリス、ノアの二人はギャラリーから、試合の様子を眺めることにした。落合が菜月にパスを渡した。落合の赤い髪は、動き回る数々の頭の中でよく目立つ目印になった。菜月はボールを受け取るうとし、頭上数十センチのところまで何者かに奪われた。生徒会長だ。クリスは苦々しげに唇をかみ締めただけだった。フラッシュバックしそうになった光景は密やかな動揺の内に脳の奥に押し留めた。それでも画像の一つが押し込めた指の間をすり抜けて瞼の裏を横切る。ノアの頬にキスしながら不敵に笑む慎の姿が、華麗にシユートを決めればかりの現実の慎の姿と重なった。

「相変わらず大人気ない奴だ。子どもから物を取り上げるなんて」
クリスは騒いでいた生徒たちがさっと割れて、道を作ったのに気づかなかつた。隣に訪れた声を見遣れば、颯、荔枝、陽の三人が、ク

リスとノアの横にそろって並んでいた。クリスは冷や汗をかいた。一刻も早くこの場を退散しなければ。しかし、くるりと半回転したクリスの体育着の襟を、荔枝の右手はしっかりと掴んでいた。運動能力が皆無というのは学校中に知れ渡った彼のプロフィールの一つであったが、バイオリンのおかげか手と腕の力は強かった。とりあえず、クリスを引き戻すほどには十分だった。

「別に遠慮しなくて結構だ、天才少年画家君。君は私たちの間では特別扱いだから」

「は、はあ……」

逆らうのはやめにした。丁度、落合が慎から一点取り返したところだったし。

「荔枝、子どもとは聞き捨てならないな。仮にも僕の王子様だよ？」涼しい顔で颯。彼の手には桜の枝ならぬ菜の花が握られており、先ほどから花弁をむしっては捨て、むしっては捨てている。荔枝はその動きを確かめて小さく笑ったが、結局何も言わなかった。

「へえ、慎もなかなかやるんだな。憎たらしいぜ」

「ほら、やはりあいつを話し相手にすることにならなくて良かっただろう？」

「……分かった、認めるよ」

「ということは、川崎先輩が勝ったんですか？」

ノアがクリスの奥から身を乗り出して尋ねた。あの賭けを知っているとすることは、ノアもあの試合を見ていたのだろうか。それとも毎年恒例のことなのか。陽は肩を浮かして笑った。

「そうじゃねえ。今年は残念ながら負けちまった。が、この四年間の総計で引き分けた。なっ、颯？」

颯は何も答えない。菜の花の茎を折る作業だけが続いている。

「ダメだ、こりゃ。完全に王子様に魅入っちまったみてえだ」

笛が鳴る。また慎が一点決めた。慎の一躍ごとに観衆は盛り上がり、限界のない興奮のボルテージは積み上げられていく。彼らと反対の心の動きを見せるのは、落合たちのチームだ。落合が忌々しそうに

悪態をつくのが見えた。菜月は黙っていたが、憎憎しげな目で、立ちただかる生徒会長の顔をじっと睨みつけていた。

「どうした、限界か？剣道部部长」

菜月は無言で背をひるがえした。せめてもの復讐に、隙あることに慎に抱きつこうと企んでいる明音を放り投げて。額をぬぐう落合の元へ歩みながら、首の後ろ、ちょうど黒髪で覆えなくなった辺りに突き刺さる二つのラベンダー色の針を、汗の上に感じていた。その顔を見上げる資格はないと思った。でも 不安に駆られてわずかに浮いた視界を、黄色い花卉が覆った。

「ナツはもつと強くならなきゃ」

遠い唇が膝を折ってささやく。

「みんなー、試合再開よー！英語の授業が終わったときみたいにもつと元気を出しなさい！男の子はやっぱり元気でなきゃ！」

険悪なムードをその容貌だけで吹き飛ばしたジャクソン先生が、「もう疲れた、どうせ歳なのよ」と自己嫌悪に陥っている鳥居先生を突き飛ばし、取り上げた笛をやかましいほど鳴らして叫んだ。何人かは耳を塞いだだが、菜月は投げ渡されたボールを両手でしっかりと受け取り、すぐにそれを落合の方へと回した。落合は慌てて耳にあてがっていた手を離し、ラインの外へ駆けていく。

菜月が慎の隣に立った直後、笛が鳴った。落合が投げたボールは、菜月と慎の頭上を飛び越え、いくら慎相手でも勝負は妥協しない主義の明音の手に渡った。菜月はすばやく動いた。身を屈めて慎の腕の下を潜り抜け、ドリブル中の明音と視線を交わし、ゴールポストの袖に飛び込む。

「菜月先輩！」

明音がボールを寄越した。視界の端に慎の姿がちらつく。菜月は前に出た。ボールは落合を中継点に、菜月の胸元まで届けられる。安堵する間もない。ゴールを振り見れば、やはりそこには慎がたちだかっていた。不敵な笑みが挑発している。やれるものならやってみろと。

やってやるぞ。

菜月は大きく跳躍した。窓から差し込む午後の光に、視界はあの菜の花色に染まる。もう二度と大切なものを失わないために、自分はもつと強くならなければならない。

「Cチーム、2点追加あ！」

笛の代わりに響いたのは、ジャクソン先生の声だった。着地した菜月は、明音と落合に抱きとめられ、彼らの腕を振りほどくのに一苦勞した。ようやく解放されて見てみると、慎は相変わらず笑っており、そして、頭上の人は楽しげに微笑んでいた。ひらりと落ちてきたものを手に取ってみれば、それは花弁をなくした菜の花の茎であつた。

「今日ありがとう。お昼までご馳走になっちゃったし」

「もうお帰りになるのですか？」

「うん、暇じゃないからね。午前さぼった分を取り返さないと……君も僕を見習ってくれていいんだよ？」

「はは、さすがにコーヒーに砂糖を五つも入れるのは真似できませんねえ」

もてあそんでいた爪楊枝を割り箸の空袋におさめ、うなぎで膨れた腹をさすると、理事長は大儀そうに立ち上がった。仕事をしなきゃと口では言いながら、やはり校長室でのひと時が名残惜しいらしく、カップに残っていた甘ったるいコーヒーを飲み干し、校庭のよく見える窓に歩み寄る。校長が食器を片しながら見守る間にも、理事長はぼんやりと景色を眺めている。鋭い黒い目は、窓の前の小道を行きかう生徒の横顔を追い、誰が通ろうともその動きは少しも乱れない。例え、観察する対象が息子であろうとも。

「……ノアは元気そうだな」

「そうですか？」

校長は冷えたコーヒーカップをかき回しながら聞く。

「うん、今ちょうど目の前を通ったからね。ルームメイトと楽しそうに話しながら歩いてたよ。まあ、あの子はいつだって楽しそうにしてるんだけどね。でも、あの石崎君って子は、なかなかいい子みたいだし、ノアの友達としてはよさそうだ。僕は、異存はないけどね。少なくとも、親としては」

「おこがましくも、僕の意見を述べさせていただければ……」

理事長は校長の方へと振り返った。校長はカップを置き、手に胸をあてて軽くこぼんとせきを払う。

「有瀬ノア君にとって、石崎・エーリアル・クリス君はこの上ない友達だと思うのですがねえ」

ため息が漏れる。肩が下がる。理事長はふいにネクタイピンの水晶がひどく恨めしくなった。

「まあ、僕もほぼ同意だよ。余計なものさえなかったらなあ……」
再び目を戻しても、クリスとノアの姿は再度のぞめるはずもなく。

日暮れと同時に、球技大会は終わりを告げた。クリスとノアは一回戦敗退という非常に残念な結果に終わったものの、サッカーでは来夏と真央のチームは優勝し、バスケットボールでも、菜月、落合、明音のチームは十一チーム中三位と健闘した。テニスはどうだったかというと、シングルの優勝は颯、ダブルスの優勝は花木・橋爪の黄金ペアの手に渡った。

「いくらなんでも教師が優勝は有り得ないよな」

友人らと共にのんびりと帰り道を歩みながら、クリスは零した。もう大分遅い時刻だった。あの後、来夏たちの優勝祝いに巻き込まれたり、野瀬先生の演説があったり、シャンパンならぬコーラをぶちまけられそうになったりと、色々あったから。そろそろ月も本格的に登頂を始めるはずだ。

「しょうがねえよ。毎年お決まりだしさ。相手が悪かったな、エー

リアル」

「でも、楽しかったよ。実際俺たちはあまり球技はしなかったけど……知り合いがやってるのを見るだけでもいいもんだね」

「来夏先輩、かつこよかったですよ」

「うるさい。どうせ俺は同じ言葉をお前に返せないんだよ」

憧れの先輩からの冷たい返事に、真央は子犬のようにしゅんと肩を落とす。明音の慰めは例によって例のごとく拒絶された。

「うるさい！どうせ生徒会長の写真取り巻くってご満悦のくせに！これが真央の言い分だった。」

「あの、クリスマス様……」

「ん？」

袖を引つ張られ、クリスマスは振り返った。ノアは試合後の菜月がすっかり空にしてくれたバスケットを両手に抱え、何だか申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「あの、僕、夕食の準備のために早く帰りたいのですが」

「あー、いいよ。無理しなくて。ほら、今日はもう遅いからさ……」

ノアは小さく首を振った。

「今日のお弁当で残り物全部使い果たしちゃったんです。ぼく、先に帰りますから」

誰が引き止めるのも待たず、ノアは小さく会釈すると、小走りですアトリエの方へと駆け出した。クリスマスはしばらく呆気にとられていたが、肩に置かれた明音の手に我に返った。光が戻ったクリスマスの目の色は悲しげだった。

「クリスマス先輩……」

「……俺もいつてくるよ。有瀬だけにまかせっきりにしてられないから」

今度は待たなくとも、誰も止めようとはしなかった。クリスマスは走った。夜風がクリスマスの金髪をさらおうと試み、頬を摩擦して熱く燃やしていく。まるで何かが起きるのを阻止しようとしているみたいだった。何かが、そう、例えばノアがいなくなってしまうようなこと

が。ノアは小走りだったというのに、クリスが全速力で走ってもその背はなかなか見当たらなかった。試合で流したより多くの汗が、首筋を、頬を、背中を、耳の後ろを伝っていった。呼吸する音がひどく耳障りだった。体中の血管を、血がかつてないほどのスピードで巡り巡っている。地面に叩きつけられて足の裏はじんじんと痛み、ふくらはぎが震えた。ようやくアトリエが見えてくる。窓に灯はない。開いたままの門とドアだけが、唯一誰かが侵入した証だ。

「有瀬！」

息を切らすのも忘れ、クリスは真つ暗な部屋の中に呼びかけた。返事はない。悪寒に皮膚と目を凍らせ、靴を放り捨てて部屋中の電気をつけて回った。浴室、洗面所、リビング、キッチン、庭、階段、寝室　とうとうどこにも見当たらなかった。クリスは玄関の前に立ち、呆然とした。何が自分からノアを奪っていたのか？自分は知らぬ間にノアを傷つけていたのか？あんな大勢の中にノアを無理やり引き込んだから？もう彼には限界がきていたのだろうか？疑問はやまず、吐き出されては絶望の海を漂っていく。なぜ？全ての疑問から読み取れたのは、その一語のみであった。

思考を紡ぎだす糸車を止めたのは、右肩に課せられた頭の重みだった。クリスはやつとの思いで息を継いだ。「ごめんなさい」小さな呟きが耳元に訪れる。

「真似してみたかったんです、クリス様。この間クリス様がしてくださいってみたいに、僕もクリス様を助けてみたかったです。絶望から救い出してみたかったです。だって、多分……そういうのが、友達だから」

鳴らないはずの鐘が鳴った。

第十一話 凍え死ぬ月・前編（前書き）

第二部 黙示録

主要登場人物紹介

篠木水無月

クリスのクラスメート。

聖書を愛読し、図書館によく足を運んでいる。

双子の弟との関係に悩む。

篠木白蘭

2年F組。水無月の双子の弟。

兄と似ずに粗暴で冷酷な性格。

男娼紛いの行為を行い、代価にランの花を要求する。

雲居芳乃

生徒会副会長。2年F組。

落合の幼馴染で、双子とも昔から付き合いがある。

明るい上辺とは裏腹に、白蘭のお得意様であり、密かに策略をすめる。

第十一話 凍え死ぬ月・前編

黙示録は永遠にぼくの膝の下にある。

無理やり信じ込んで毒の涙を飲み、ぼくは密室に横たわる。シヨパンの「葬送」が重苦しく、且つ爽快な音色で鳴り響き、曇った窓の外で木々は葉を寄せ合う。葬列を描いた回転のぞき絵シネマが回り出し、そしてぼくもまた、永遠に夢の中

とある放課後。三宿学園高等部の屋上にて。生徒会長、千住慎が円卓の上に差し出したのは、一通の手紙であった。赤と青のストラップに縁取りされた封筒を、他の生徒会役員たちは意外そうな表情を以って見遣る。宛先を記した細く神経質そうな字に、彼らは全員見覚えがあった。

「芳乃が戻ってくる」

慎は素っ気なく言った。

「そっか。もうそういえばそんな時期だったね」

腕を組みながら颯。旧友の帰国への喜びは、口元の微かな笑みに表して。陽が荔枝の肩の上で低く口笛を吹く。

「あのいけ好かねえガキか。何年ぶりだったか？」

「おいおい、雲居が向こうに行ったのはつい昨年の話だぞ」

「うん、高等部に上がった瞬間に留学しちゃったからね。あっちの学校でちゃんと単位はとってるみたいだけど」

懐古を胸に語らう三人の会話は、堅苦しい咳にさえぎられた。一同はやや呆気にとられて慎を見た。慎の顔は青白く、結んだ唇は咲き誇る前の薔薇のつぼみのごとく固かった。炯々《けいけい》たる青

い灯の元には薄く隈が浮かび上がり、その眉間の皺の険しさも種を違えて、いつもの自尊心と傲慢に溢れたいらつきの姿は見当たらない。その彫刻の影には、言及するのでさえ憚はばかられるほどの、刺々しい疲労が鬱積されていた。慎は椅子に腰をおろし、封の中から手紙を取り出して広げた。つづられた英文に、慎は風景でも眺めやるように目を通した。

「旧図書館を開放したいそうだ」

「旧図書館……」

四人の頭に浮かんだのは、白亜の体育館の背後に、忘れ去れたようにぼつねんとそびえる円形の建造物だった。古い木造の建物で、学園が開設されたときから存在している。蔵書量は、おびただしいと表現される当校高等部のそれを上回り、螺旋状に配置された本棚と、そこに並べられた本の背表紙を見ているだけで、眩暈がしてくるほどだという。学園の一種の名物でもあり、生徒、教師たちの恩人として長年親しまれてきたのだが、二年前の春、旧図書館の管理権を持つ時の人、雲居芳乃くもいよし乃が閉鎖を決めた時から、嚴重に鍵がかけられ、閉鎖されている。彼が閉鎖にふさわしい数々の理由を挙げ、施設の老朽化など全三十か条、閉鎖したにもかかわらず、どうして今更それを開放したいと言い出すのだろうか。颯、荔枝、陽の三人は顔を見合わせた。

「それで、慎はどうするつもり？」

颯に尋ねられ、やっと慎は笑った。余裕に満ちた不敵な笑みとも、自嘲の笑みともとれる笑い方だった。

「あいつのことだ。どうせ、許可するまで聞かねえだろうが」

慎は細かい文字の上に許可の赤インクを重ね、颯に「送っどけ」と手渡して一人黙って屋上を去っていった。三人は再び顔を見合わせた。

「あいつは胃潰瘍いかにょうでも起こしたのか？」

肌寒い曇り空の下に、荔枝は熱い紅茶を一口含んだ。すぐに陽がその隣に腰を下ろし、テーブルの上の冷えたコーラの瓶を開ける。そ

れを恋人の頬に宛がういたずらは、意味ありげな目線に気圧されてすぐに中止された。

「起こしたっていうよりは、これから起こすかもって感じかな。とにかく色々大変なんだよ。当分は君たち二人もそつとしてあげるこ
とだね」

「別に何もしねえけどよ。そつとしておくだけでいいのか？あいつ、
キれると何かやらかす野郎だぜ？」

「……まあ、慎にはこれがあるから平気ですよ」

颯が掲げたのは、左手の薬指にきらめく水晶の指輪だった。

「おい、いつまでいるつもりだ？」

「安心しろ。日が昇れば帰る」

「ずいぶん客に対して態度がでけえじゃねえか」

「俺にいたぶられて喜ぶ奴もいるからね。昨夜みたいのは久しぶり
だ」

空疎な寝室の窓、白みいく空の上にカラスの影絵が浮かび上がり、
遠くの仲間に向かってしわがれた声を上げた。寝台の上に慎と共に
寝そべっていたその少年は、くるりと身をひるがえして床に降り立
つと、足音もなく窓辺に寄り、ガラスの小さな扉を開け放った。カ
ラスはその音に驚いて飛び立つ。少年は残酷な満足を口元に、縮む
黒点を見送った。

少年の肌は文字通り、透けるように白かった。パステルブルーの
髪先が隠す首筋には、細い血管が確かめられ、荒々しい行為の後で
ますますその色を深めていた。その目は幾重にも重ねられた濃い蒼
で、海底の水のようにまるで光を必要としない。唇は薄いがほんの
りと色づいており、頬にも微かに朱に入っていた。首や手足は細い
ようだが薄い筋肉に覆われており、裸の胸に冷気を感じて急いで窓
を閉めた勢いは、思わず慎が顔をしかめるほどであった。少年はそ
んな彼を振り返り、猫のようになやかに天蓋の中に潜り込むと、

慎の痛む鼓膜の入り口を指先で慰めた。

「悪いな。偉大な生徒会長様への配慮がやや足りなかったみたいだ」

「それで？白蘭様は一体どうやって償うつもりだ？」

白蘭、^{びやくらん}そう呼ばれた少年は、慎の上に腹ばいになり、無邪気を装って小さく首を傾げた。そうして、しばらく考え込むふりをした後、白蘭はゆっくりと口の端を吊り上げ、慎の顎を取り、いぶかしむよう半開きになった唇に、自らの唇を強く押し当てた。反射的に突き出された手を胸元に引き寄せ、握りつぶすつもりかと思われるほど強く冷酷な力で抱きしめる。「これでよければ」長く粗暴な謝罪の後で微かに息を切らす慎に、白蘭はいたずらっぽく微笑みかけた。返事には、白いランの花が代わった。

日も昇って朝七時半、遠くに鐘の音を聞きながら、雲居芳乃は懐かしの校舎を彼方に仰ぎ、朝露にぬれた芝生を、磨き上げた革靴で踏み分けていた。その歩みは葬列に並ぶ人のように厳かであり、その山吹色の眼もまた、喪の服す人のように慎ましく足元を向いていた。彼を^{うしろ}弔うつもりはないのだけど、芳乃は荷の少ないのをいいことに、祈るように小さく両手を組んだ。それでも、せめてもの償いのために今は唱えるしかない。彼が敬い、信じ続けた神に。

「天にまします我らの父よ……」

その時、ふと芳乃の目に白く美しいものが映り込んだ。芳乃はさつと顔を上げた。白のアトリエ、確かそう呼ばれていた小さな家の前の植木鉢、咲き誇る白いランの花。足をとめ、息をとめて見とれていれば、アトリエの住人が姿を現す。金髪碧眼の、西洋人らしい顔立ちをした少年だ。少年はまず芳乃には気付かず、アトリエの中に向かって話しかけた。

「じゃあ、ごめん、有瀬！俺、レポートの提出があるから先に行くね！」

少年は同居人の返答を聞いて笑い、扉を閉めた後で、たたずむ芳乃に気付いた。芳乃がぼんやりと見つめていると、少年は笑顔を浮か

べて話しかけてきた。

「やあ、何か用？」

芳乃はきよとんとしていたが、相手の無邪気を悟ってすぐに微笑み返した。

「いや、お宅のランが見事だったから」

「ラン？……ああ、この白い奴ね。俺の友達が育てたんだ。花を育てるのが上手だから」

「へえ、興味深いなあ。ぼくも花とか動物とか、そういうのを育てるのが好きなんだ」

「そうなの？あつ、じゃあ、この花持って行ってよ。有瀬も欲しい人がいたら配ってほしいって言ってたし」

ありがとうとの礼を聞き、白い植木鉢ごと持ち上げようとしたクリスを、芳乃は片手を上げて制した。

「もしよければ、手折ってもらえると嬉しいな」

クリスは彼の希望通りにランを手折って手渡した。芳乃はいとおしげに一輪のランの花を両手で持ち、親切な初見の同級生に再度礼を言った。そして、校舎に向かって駆けていくクリスとは反対に、今まで歩んできた道を逆に辿り始めた。門を出ずる時、寝ぼけ眼の守衛は不思議そうに芳乃の横顔を窺った。

芳乃は小高い丘の上に立っていた。学園からそう距離を置かずに隆起したその土地は、青々とした草に覆われ、打ち捨てられたような孤独に満ちていた。丘の頂きにはたった一つの墓石がある。冬の朝日に照らされ、鈍く光を放つ墓石が。そこに刻まれた名は見えない、うず高く積み上げられた白いランの花と、墓前に立ち尽くす一人の人の影に覆われて。芳乃は携えてきたささやかな供え物を、軽すぎる雪山に加えると、自分の他、たった一人の参拝者の足元にひざまずき、空の右手に接吻を落とす。

「白蘭様……」

白蘭は虚ろな目のまま何も言わなかった。芳乃の存在を知ってはい

るが、わざわざ目を向けて確かめようとはしない。
「白蘭様……もう一度夢を……ぼくはそのために戻ってきたんです」
ランの花弁をなびかせていた風がふとやむ。

「旧図書館つて？」

朝のショートホームルームの際、野瀬先生が告げた連絡事項の一つに疑問を持ち、クリスは早速友人らに尋ねた。

「ああ、そういえば石崎は知らないよね。体育館の向こうに丸い建物があるでしょ？あれのこと」

「えっ、あれって図書館だったのか？」

来夏が物を知らないとは珍しいこともあるものだ。クリスは驚いたが、すぐに菜月によつて弁解がなされる。

「うん。でも、二年前に閉鎖されちゃったんだよ。だから、高等部から入った人は誰も知らないって訳」

「何で閉鎖されたの？」

「分からない。颯は建物が古いからって言ってたけど」

「何せ六十年も前の建物ですからね」

ノアが補足する。

「でも、また古いまま開放されるんだろ？……おい、落合、生きてるか？」

腑に落ちなさそうに呟いた来夏は、落合が、緊急で仕上げなくてはならない球技大会のレポートを書く手を止め、半ば本心状態に陥っているのに気付いた。何を言っても、来夏が目の前で手をかざしても最初は認識できずにいたようだったが、菜月がついにクリスのスケッチブックで頭を叩くと意識を取り戻した。その代償として、鼻を思いきり机に叩きつけていたが。メガネが割れなかったのが唯一の救いか。

「酒本、てめえ何しやがる？」

メガネをかけなおしながら、落合はいつもの調子で言った。菜月は

スケッチブックを既に手放しており、自分はすっかり関係がないような顔をしている。

「さあ？何のこと？」

「落合、本当に大丈夫？」

クリスが聞くと、菜月をしっかりと睨みつけながら、落合は数度頷いた。

「ああ、大丈夫だ。復讐はできるくらい大丈夫だ」

「おいおい、朝から物騒な真似はするなよ」

「そうそう。僕に構ってる暇があったら先にレポートを仕上げちゃえば？」

「うるせえ！余計なお世話だ！」

来夏が止める間もなく鬼ごっこが開始されると、クリスとノアは教室の中央に寄り、衝突の危険を回避することに努めた。音と物とが騒がしく頭上すれすれを飛び交う中で、二人は慣れきったように次の授業の準備を始めた。

「そついえば」

と、ノア。

「旧図書館には行かれないのですか？クリスマス様が探している資料があるかもしれませんよ」

自分が探している資料　ノアだけが、クリスが捜し求めているものを、この学園に来た理由を知っている。ノアの何気ない助言はその事実をクリスに改めて確認させた。旧図書館か。野瀬先生の先ほどの話によると、相当の量の本が収められているそうだが。行ってみる価値はあるかもしれない。

「うん、じゃあ今日の放課後行ってみようかな」

「そうですね……あの、僕も一緒にしてよろしいですか？」

「もちろん！」

クリスは笑顔を弾けさせて言った。桃真の猛攻と、ひらりひらりと身を交わす菜月、そしてそれを何とか鎮めようとしている来夏の苦勞は露ほども知らず。

「こらー、落合、酒本、教室の中で走り回らない！ほら、一時間目は少人数なんだから早く移動しな……っ！」

「悪い、みちるちゃん！」

教室にやってきた鳥居先生は、教卓の前などに立っていたために、やはり衝突事故の被害者になった。倒れた先生に来夏が手を伸べたが、次の瞬間、来夏は、自分が介抱しようとしているのが人間ではなく、最早鬼としか言いようのない存在であることを悟り、無言で手を引つ込めた。懸念は当たっていた。

「ふっざけんな！落合！」

「あつ、あつた」

菜月の指示ということもあって、半信半疑のまま進んだ旧図書館への道であつたが、体育館を過ぎ、薔薇の茂みに覆われた小道を抜けると、言われた通りの円形の建物は忽然と姿を現した。木材の壁にはペンキ一滴まとわず、床は六本の柱で高く持ち上げられ、蓋のように被された六角形の黒い屋根は、太陽に照らされ、濡れたように輝いている。ガラス窓は等間隔ではめられており、内側からベールのカーテンで覆われていた。屋根の上の風見鶏は凍りつき、クリスとノアの方を見向きもしない。周囲にもその内にも人の子一人いる気配はなかつた。本当に開放されているのだろうか。凜ないだ風と、人の沈黙のもたらす静寂に、クリスとノアはほのかな不安のうちに顔を見合わせ、入り口を探した。

入り口と思しき扉は、二人が進んできた場所から右斜めに顔を背けてあつた。一段一段に名画のタイルを敷いた階段を昇り、金のドアノブに手をかけた瞬間、押す間も引く間もなく扉は横にスライドした。クリスは声をあげて驚き、ノアがその様子にくすくすと笑つた。自動式なんて聞いていない。

「えつとー、失礼しまーす」

図書館にその言葉は不要かと思いつつ、誰かがいることを期待してクリスは言つた。返事はない。入ってみると、建物の円形に沿つ

て並べられた本棚と、それらに丸く囲まれた長椅子と机とが、窓から差し込む日の光に立ち上がって見えた。しかし、噂どおり、想像以上の蔵書量だ。クリスとノアは啞然として館内を見回した。

「すごいなあ」

その時、ノアがクリスの袖を引っ張って注意を引いた。ノアが指差したものを見てみると、金属性の板に刻まれた館内の地図のようで、どこにどのような本が置かれているのか明確に記してある。ノアは既に美術と刻まれた箇所に入差し指をあてていた。

「ここですよ、クリス様」

ノアはクリスがじっくり資料の選別をできるよう、わざと他の本を探しに行った。クリスは自分の身長は二倍はある本棚の前に十分近くも佇み、自分の手の届く範囲からは三冊、手の届かない範囲からは、倒れていた梯子を引っ張ってきて二冊選び、もう先にお目当ての本を楽しんでいるであろうノアを探した。ノアは、クリスのよく知らない生徒の向かいに座ってた。クリスがノアの真横の椅子を引くと、ノアは気づいて活字の列から顔を上げた。

「クリス様、見つかりました？」

「うん、一応ね」

クリスは、古いが頑丈そうで柔らかい椅子に腰を下ろし、それから相席の生徒を観察した。竜胆色の癖のない髪をした、肩幅の細い生徒で、薄い水色の瞳はすっかり本の中に吸い寄せられている。その内に、クリスはこの生徒に見覚えがあることを思い出した。

「あつ、篠木君？」

そうだ、しのぎみなつき篠木水無月 話したところそないが、クラスメートの一人ではないか。いつも教室の隅で本を読んでいる、物静かで温厚な少年だと記憶している。それを裏付けるよう、水無月は読書を中断させられても、何ら不快を表すこともなく、クリスとノアに穏やかに微笑みかけた。読んでいる分厚い本は新約聖書だ。

「どうも」

水無月はやわらかく挨拶した。

「へえ、篠木君も来てたなんて。さすが読書家だね」

「ううん。僕はただ聖書を借りにきただけなんだ。ずっと大切にしていたものが、駄目になってしまったから。石崎君こそたくさん本を読むんだね」

「あつ、でも、これ全部画集なんだけど」

水無月は積み上げた五冊の一番上の本を手にとり、その重さにも屈せずばらばらとページを捲った。

「石崎君は画家だものね。こうやって勉強するんだ。すごいなあ」

「いや、勉強っていうか、何て言うか……ね？」

クリスはノアに意味ありげに目配せした。ノアは口元に手を添えて笑った。

「僕の父も石崎君の絵を仕事場に飾っていたよ。父が死んだ時に、美術館へ寄贈してしまっただけ。何の絵だったかな？どこか高いところから庭園を見下ろしたみたいなお絵だった。少し雰囲気がこの学園に似ていてね、僕も好きだった。とても僕と同じ年の子が描いたとは思えなかったよ」

「ありがとう」

クリスはにこやかに言った。アニエスの時といい、面と向かって特技を褒められるのはやはり嬉しかった。まして、あまり言葉を発さない、この寡黙なクラスメートに褒められたとすれば。水無月は聖書を置いて脇に置き、画集をもう一つ取った。

「この画集は前に見たことある気がするな。確か、この辺りに石崎君の絵が……違っただけかな？」

「俺の絵はいいよ。自分で嫌ってほど見てるから」

「そう？でも、僕が見たいんだ。君の絵には何度も見たくなくなるような、不思議な魅力がある気がする」

「はは、篠木君は優しいね」

「水無月でいいよ」

「じゃあ、俺もクリスで」

「あれ、これじゃなかったかな？」

「あれ、有瀬？」

クリスは、いつの間にか隣から消えてしまったノアを呼んで立ち上がった。全く、すぐにどこかに行ってしまうんだから。だが、この時はすぐ傍の本棚の陰に隠れていただけで、新しい本を胸にすぐに笑顔をのぞかせた。赤い革のカバーには、白雪姫の金文字が確かめられた。

第十一話 凍え死ぬ月・後編

「さすが、芳乃。一年のブランクがあっても仕事が手早いね。どこかの誰かとは大違いだ」

「ありがとうございます、颯先輩」

二年生でありながら、生徒会副会長という地位を手に行っているのも納得がいく。完璧なまでにまとめられたファイルに目を通し、颯は心に浮かんだまでの賛辞を述べた。

「おい、そのどこの誰かっていうのは誰のことだ？」

礼儀正しく、にこやかに腰を曲げる芳乃とは対極的に、気だるそうに荔枝の膝に頭を預け、目の前の仕事にはまるで手をつけずに陽。

「分かっているでしょ」颯の口をため息が継ぐ。不満げに見上げた陽に、荔枝は微笑みを零し、慰めるように髪を梳いた。芳乃は二人の様子には慣れきっているらしく、その傍らで堂々と荷物をまとめると、鞆を肩に生徒会室を退出しようとした。

「おい、もう帰るのか？」

陽が顔も上げずに聞く。

「ええ、僕はもう仕事が終わりましたし。それに、部屋の整理があるので」

「けっ、嫌味な野郎だぜ」

「そんなつもりじゃなかったんですよ、陽先輩。では、失礼します」
「うん、お疲れ」

笑って振り返った芳乃は、一步廊下へ踏み出した瞬間に笑顔を引き割った。破片は小さな黒い粉となって飛び散り、仮面の下に現れたのは、憎悪と愛情と苦悶とが絡み合ってきた冷たい睥睨^{へいげい}であった。解かれた黄土色の髪、夕日色の瞳が見つめるのは、まさか彼の寝室ではない。残酷な微笑と、その持ち主と長々と繰り広げる行為そして深める愛おしさ。それらだけが、芳乃の心を捉えている。誰もいない最上階を下り、まだ少しざわついた四階にまもなくたどり

着くというその時、踊り場で懐かしい影が舞った。芳乃はふと足を止める。

「よう元気だったか？」

「落合……」

落合は反射するメガネを少しずらし、きらめく焔の目を映した。

「連絡もなしに帰ってくるなんてつれねえじゃん」

「急な帰国だったんだよ。本当はあともう半年滞在する予定だった」

「アメリカは楽しかったか？」

「まあね。僕なりに楽しんだつもりだよ」

「なんにも連絡寄越さなかったじゃねえか」

「……報告するようなことは、特に何も起きなかったから」

「ほんつれねえな。普通幼馴染には電話の一本ぐらいするもんだぜ」

芳乃はわざとらしく肩をすくめると、黙ったまま落合の隣を通り抜けていった。落合もそれを容認し、芳乃の足音が背の後ろに回っても止めるような素振りは見せなかった。だが、ふいにこらきれなくなったように拳を固め、青ざめた喉に掠れた声を上げた。

「芳乃！」

だが、振り見た先に芳乃の姿はなかった。落合ははっと息を呑んだ。芳乃の足音を聞いた場所では、ノアが年季の入った本を胸に、首を傾げて立っていた。

401、402、403……進むごとに扉に刻まれた番号は膨れていく。右側から夕日を浴びながら、水無月は寮の廊下を歩んでいた。それぞれの戸の奥からは様々な談話が聞こえてくる。水無月はそこから住人たちの生活を思い描くのであった。友達とふざける者、ゲーム機をいじる者、仮眠をとる者、夕食前に宿題を終わらせてしまおうと急ぐ者、お茶を楽しむ者。想像はできても最早遠すぎる者たち。水無月は緋色の光の中に自身の掌を映し出す。悲しげに

伏せた目は、斜陽が明るすぎるせいもあったのかもしれない。

408、409、410……

ようやく部屋の前にたどり着き、扉に手をかけた水無月は、一瞬開くのをためらい、その奥からどんな声が聞こえてくるか耳をあてようとした。その瞬間に内側から戸が開いた。内開きの扉に誘われ、水無月は部屋の中へと倒れこむ。打ち付けた顎の痛みに耐え、唇を噛みながら見上げた先に、灰色のカーペットの地平線に、彼は見慣れた裸の足を認めた。

「案の定引つかかった。いくら弟の話でも盗み聞きはよくないと思うぜ、水無月？」

「白蘭……」

白蘭は水無月の鼻にこすれるぐらいの至近距離で膝を落とし、まだ倒れたままの襟首を掴んで顎を持ち上げた。本人の歯が破った唇の端には、薄っすらと血がにじんでいるのが見える。指先でそっと拭い、赤く頬を汚してやると、水無月は怒りと屈辱に身を震わせた。

「何のつもりだ？」

「痛い目を見ないと分からねえんだろ？俺は客のプライバシーは絶対に守り通す主義だ。こそそこそかぎまわられると迷惑なんだよ」

「ふざけたことをぬかすな！ここは僕の部屋でもある。僕の部屋を汚らわしい行為に使うんじゃない……！」

水無月の言葉は、白蘭には最後まで聞き取れなかった。そもそも、彼は叱責を聞くのを拒んだのだ。白蘭は水無月の頬を張るとその軽い身を床に打ち捨て、苦々しく歪めた表情を彼に手向けた。水無月は痛みと憤慨の中で小さく動いた。

「白蘭……！」

「ねえ、白蘭様、もう僕には飽きてしまったの？僕にとって、貴方が僕以外の人に気をとられてることほど不愉快なことはないの？ねえ、僕の花をもついたらないとおっしゃるの？」

寝台の上、シーツに身を覆い隠しながら不満を唱えたのは芳乃であった。白蘭はようやく水無月から目を逸らし、ゆっくりと口の端を吊り上げた。

「まさか。お得意様の機嫌を損ねるつもりはないさ」

「だったら、早くそれを追い出してしまつてよ、白蘭様。二人の世界には不要でしょう？ねえ、僕だけだよ。貴方に心から服従していて、そして貴方を心から愛しているのは、僕一人だけ……」

白蘭は水無月の襟首を拾い上げ、兄の燃える頬と、そこにかかる竜胆色の髪、鋭い光を放つ薄い瞳を見遣つた。対照に自分の持つのは、色のない頬、髪はパステルブルー、光はあるが冷え切つた濃い瞳

でも、似ている。白蘭は密かに確信した。双子である限りは、やはり似ている。

「……分かつてる」

血縁者を部屋の外に放り出し、白蘭は呟いた。水無月は息荒く立ち上がり、鍵のかかつた扉を蹴破ろうと試みる。だが、開かないことは承知の通り。水無月は膝を崩した。心を焼かれるような思いがした。

「へえ、旧図書館つすか」

クリスとノアは、生徒会室に忍び込もうとして窓から放り投げられた明音を救出し、共に帰路を歩んでいるところだった。明音は、額にバツ印に張つたバンドエイドが気になるらしく、しょつちゆう手で触れている。今の言葉もその動作と同時になされた。

「うん。明音君、知つてた？」

「一応。慎様の周りを調べてる時にちらつと聞きました」

「えーと……何してるのつて、今更聞いても無駄なんだよね？」

「もちろんつす」

明音は親指を立ててしっかりと頷き、そのまま顎を落としてため息を一つついた。

「どうかしたんですか？」

ノアが尋ねた。

「最近、慎様あまり元気ないんすよ。顔色もよくないし。慎様らしくないです」

「そう？今日の朝礼の時は至って普通に見えたけどなあ」

クリスは首をひねりながら言う。実際、クリスはまだ慎を正面から観察できる状態にはなかったのだが。思わず嘘をついてまで口にしてしまったのは、早くその呪縛から完全に解き放たれたいと願っているせいだ。明音は口を大きく開いて反論しかけたが、ちょうど五時を知らせる鐘が鳴ったので、こうしてはいられないと慌てて走って去ってしまった。今日はハウセイ・チズミ 世間には隠された彼の父親 が出演する映画が放送されるのだ。呆れてその背中を見守るクリスに、ノアが袖を引っ張って示したのは、明音とすれ違いに來る水無月の姿だった。

「あつ、篠木……じゃなかった、水無月君！」

ぼんやりと足元を見ながら近づいてきた水無月は、クリスの声にはつと顔を上げた。クリスが大きく手を振ると、水無月も笑顔で小さく返礼し、とことこと小走りになって林檎並木の道をこちらへ駆けてきた。

「やあ、今帰りかい？ずいぶんゆっくり図書館にいたんだね」

「うん。司書がいらないから、本を借りるにも借りられなくて、全部その場で読むしかなかったんだ。そっちこそもう帰ったんじゃないの？」

「夕食前の散歩さ。寮にこもっているのは息がつまるから」
笑いながらそつと頬にあてた手に、クラスメートたちは気付いていない。なぜ頬を隠したのか。そこに灯る赤が、夕日に紛れていると信じることができない故に。

「ふーん。意外とアウトドア派なんだね」

「そついう訳ではないのだけど。昔から旧図書館まではるばる歩いてきたりしてたから、動かないと足が物足りないんだ。じゃあ、僕

はそろそろ帰るから。また明日ね、クリス、有瀬君」

「うん、じゃあね」

振り仰いだ道に重苦しい木陰を見出し、進まない足で引き返そうとした水無月に、ノアが何か呼びかけた。その言葉は水無月の耳にこのように届いた。「帰る場所なんて、あるんですか?」と。

「えっ……?」

水無月はノアを顧みた。ノアは不思議そうな顔でこちらを見つめ返している。

「今、何て?」

「いえ、あの、もしよければ、僕たちの寮に泊まりませんか、と。せっかく仲良くなったんですし、明日は祝日でお休みですから、いい機会ではないかと思って。食事はたいしたものを出せないのですが……」

だんだん照れて俯き加減になっていくノアの肩に、クリスが励ますように手を置いた。クリスの顔は名案を聞いた喜びと興奮とで輝いていた。

「それがいいよ。アトリエに人が泊まるなんて初めてだし。ねっ、来てよ、水無月君」

水無月は二人を見つめていた。渡りに船とはこのことだ。どうせ寮に帰っても、辛く惨めな思いをするに違いない。弟の蛮行に付き合わされるのはうんざりだし、助けてくれる友人も身近にいない。だったら、この温かな二人の住処にいる方がどんなに楽しいことだろう。一晩だけの現実逃避だ。もしかしたら、卑劣な行為に値するのかもしれない。それでも、水無月には、仮初の夢が必要だった。水無月は頷いた。

「うん」

今あるものが永遠だと信じ込んでいた。目の前にあるもの、幼い手に与えられた輝くばかりの美しいもの、その正体こそ永遠だと。

芳乃は変わってしまった。しかし、それは一年半の渡米がもたらしたのではない。はるか昔、四人がまだ同じ場所に立っていた時代に、変革はすでに起こっていたのだ。見えない場所で、少しずつそれに気付いていたにも関わらず目を背けた自分、乱暴な言葉で現実を叩き割ろうとした自分に、遠い日々を偲ぶ資格はあるのだろうか。

「だって、ミナとハクは双子で、俺とお前は幼馴染だろ？しょうがねえじゃん。こいつだけは変わりっこないんだから」

そう言っただけは変わりっこないんだから。二人対二人の構図を壊したくなかった。怖くて、恐ろしくて。四人の中の嫌だった。しょうがない、その一言は、小さな芽を摘み取るどころか、ますますその根が張る場所を掘り下げていったのだ。

「桃真まことって卑怯だよ。そうやってさ、いつも無視しようとするんだから」

「落合、夕食だよ」

菜月の声で意識を取り戻した。落合はテーブルに突っ伏した頭をかかげ、かれこれ二十分近く無意識の状態でいたことに気付く。その間、菜月のいたずらにも、来夏の宿題をするようにとの勧告にもあわなかつたのは、一種の奇跡といってもいいほどだ。いや、自分がそれと認識できなかっただけか。立ち上がり、最初に来夏と顔を合わせた瞬間、落合の疑問に答えが出た。

「珍しいな、授業以外の時に居眠りなんて」

なるほどな、寝ていたと思われていたのか。落合は腕を伸ばし、首をぼきぼきと鳴らして、台本通りに振舞った。

「そりゃ、まあ酒本に散々しごかれた後だしな。あいつ小さいくせに鬼なんだから、全く」

「おい、小さいとか言ってるとまた……」

「あつ、落合、ごめん」

頭をめがけ、前方から弧を描いて飛んできた何かを、落合は反射的によけた。とても頭に当たって無事で済みそうなものとは思えなかったから。足元に鈍い音をたてて落ちたそれを見れば、案の定、菜月の七つ道具、角が擦り減った広辞苑が開いていた。

「ごめん、落合。うっかり手が滑った」

「どこのどいつが手を滑らせて、こんなもん放り投げるか！」

走り出した落合の背を最早止めようともせず、来夏は呆れたまま、ともかく元気そうで何よりと思うのだった。二人のやんちゃぶりにはとても追いつける自信がないので、一人遅れて鍵を閉め、エレベーターで食堂へと向かった。3階に着いた途端、開いた入り口の前で待ち構えていたのは菜月だった。

「あれ？落合は？」

「はっ？一緒じゃなかったのか？」

「だって、階段の途中から追いかけてこないんだもん」

一つ上の階の廊下には、主がいなくなってしまうた部屋の戸を、ためらいながら叩く音が響いている。

「やっぱり、いねえよな……」

見上げた表札に、雲居芳乃の文字。

謙虚なノアは、先ほどの謙遜も必要なしのすばらしい晚餐をこしらえた。新しい料理を口にするごと、いちいち驚く水無月に、クリスはこっそり胸の中に満足感を抱いていた。実は、水無月を招待した理由の一つにこれがある。クリスはどうしても、ノアの料理の腕をもっと広めたかったのだ。

「美味しい」

トマト風味のスープをすすって微笑む水無月と、ほら見るとばかりに視線を向けたクリスに、ノアは慎ましくも頬を赤らめていた。

そこから寝るまでの工程は何事もなく楽しく過ぎ、消灯時間ぎり

ぎりになって三人は、寝具の数が足りないという問題に突き当たった。今までクリスとノア以外に夢をもたらしなかったことのないこのアトリエには、ノアのベッドとクリスの布団しか置いていない。今から管理人に届けようにも、既に帰宅してしまっていること間違いないし、今日一日のことだと思つて、じゃんけんで寝場所を決めることにした。勝った一人がベッドの上、負けた二人が布団を共有するということで。結果は客人があっさり勝利を決め、やや遠慮しながらも、ノアのベッドに寝そべった。クリスとノアも布団の中に収まり、暗闇の中で和やかな憩いの時間が始まった。

「何だか久しぶりだな、こういうの。中等部以来かもしれない」

誰にも顔の見えない場所で、水無月は密かに懐かしさを噛み締めて呟いた。

「こういうのって？」

「いや、他の人の部屋に泊まったり、友達と一緒に寝たりってことさ。昔はね、友達とよく部屋の行き来もしたのんだけど、今は忙しくてなかなかできなくなつて」

「そうなんだ。まあ、俺は一応罰則でここにいるからなあ。あまりうるちよろできないや」

「罰則つて、何かしたの？」

「ん？ん、まあ、ちよつとね……」

クリスは乾いた笑いでごまかした。不思議そうにこちらに寝返りを打つ水無月。ノアが急いで話題を変えた。

「クリス様、言い忘れてましたけど、今日お養父じうとさんから林檎が届いたんです」

「へえ、理事長から？」

クリスはあながち嘘でもない驚きを示して言った。何事に対してもひたすら淡々として薄情で、カレーとシチューの見分け方も覚えようとせず、まして息子をバカ呼ばわりして、本人の同意なしに転校させようとするような養父やちひぢだ。息子に林檎を送るなんて芸当を、一体どこで覚えたのだらうか。

「毒林檎じゃないだろうね？」

半分冗談、しかし実は半分本気でクリスは尋ねた。

「まさか。いくらお養父さんでもそれは……メロンに色を塗ってスイカと称して送ってきたことはありませんでしたけど」

「はっ？」

クリスと水無月の声は見事に重なった。

「いえ、まあ、昔の話ですから。とにかく、明日の朝ごはんには林檎を出しますね。あと、おやつも林檎のケーキにしようかな……」

思い描いた紅く丸く肥えた果実に、水無月はふと思いついた。そういえば、林檎は白蘭の好物だった。その昔、まだ白蘭が幼くて純粹だった頃、彼は夢中でこの果実を頬張っていたっけ。母が林檎を切って出した時は、必ず弟に自分の分をやったものだ。

「どうかした？」

黙り込んだ水無月に、クリスが気付いた。

「あつ、もしかして、林檎嫌い？」

「うん。そうじゃないんだ……弟が林檎好きだったなって、思い出して」

「へえ、弟がいるの？」

「そういえば、双子の弟さんがいましたよね。F組に」

「うん……」

なぜ迂闊なことを口走ってしまったのだろう。水無月は後悔した。それから逃れるためにここに来たはずだったのに。だが、知らないクリスはのんきなものだ。

「すごい、双子かあ。やつぱり似てるの？」

「そうでもないよ。二卵性だし。性格も正反対だし」

でもやはり似ている。それを自分も白蘭も確信している。

「ふーん。でも、いいなあ、兄弟って。俺は子供の親戚さえないからなあ。そういえば、有瀬も一人っ子？」

「ええ、実の両親は僕が生まれてすぐに亡くなりましたから。クリス様と一緒に、親戚もいませんし」

「そうだったんだ……あれ？有瀬、何か変な音しない？」

クリスが言った変な音とは、ピーという甲高い微かな音であった。どうやら階下から聞こえるように思われる。ちょうど、やかんの中の湯が沸騰した時のような音だ。ノアはおもむろに立ち上がると、稀に見る超特急で部屋を飛び出し、階段を駆け下りていった。寝る前に紅茶でも淹れるつもりでそのままだったに違いない。後を追おうとしたクリスは、ノアの枕につまずいてこけ、どしんと二階の床を震わせた。

「クリス様、大丈夫ですか？」

階下から異常を察して叫ぶノア。

「う、うん、何とかね……」

水無月はぼかんと開けた口を手をかざし、くすりと笑いを漏らした。こうした居心地のよい夢に誘われてしまう点、そこがきっと、弟と自分の最大の共通点なのだ。

夜半に月が揺れている。

その晩、水無月が一睡もすることはなかった。そもそもできるはずがなかったのだ。弟のいないこの部屋で。夢は優しいが、それは眠りの中にあるものだ。真の眠りがほしければ、そこを抜け出し、現の中に立ち返らなければならぬ。自分が率先して行わなければ、弟は永久に甘い海に浸っている。自分の痛みなど、この際何になるう。愛する弟に　弟以上に愛してしまつたその人に　自分は尽くすのだ。せめてもの罪滅ぼしとして。ErosでなくAgapeを。

足元で、二人の友人は指を絡めあい、静かに胸を上下させている。水無月は二人の安眠を妨げぬよう、音を忍ばせて部屋を出た。既に昨夜のなつた時分に、クリスに借りた寝巻きは、とうに制服に着替えていた。静寂よりも自身の決意を重んじ、水無月は両手でアトリ工の戸の背を押した。ばたんという音を聞いていたのは、ますます

強く繋がりあつたクリスとノアの指先だけであつた。

「ねえ、どこ行つてたの、ミナ？」

部屋に入った時、待ち受けていたのは暗闇だつた。数歩進んだ時、待ち受けていたのは白く細く、しかし強く残酷な二つの腕だつた。後ろから抱きすくめられ、水無月の抗う手も、罪の意識のうちに力が弱まつていく。

「ねえ、ミナ、僕を置いてどこに行くつもりだつたの？どこか遠くへ逃げるつもりだつた？でも、帰ってきてくれたんだものね。許してあげなきゃ。その代わり、もう二度と逃げたりしないって誓つてね。ねえ、ミナがいなくなつたら僕はどうすればいいの？死んでしまふよ？ミナ、それでもいいの？ミナは僕がいなくなつたら駄目だよね？だつて僕のことを愛してるんだもん。僕もだよ。愛してあげる。だから、ねっ……」

耳元でささやかれた言葉は、林檎を夢中でかじつていた時代と同じ音色で。天頂で月が凍えたのは、結びついた二人の体が、寝台の上で倒れてから。

「ハク……！」

愛していた。だが、我が身の可愛さに拒絶してしまつた。怖かつた。抱きしめられたら、甘えられたら、自我を失ってしまいそうな気がして。そして、今は彼の腕の中で

「もう絶対逃がしたりしねえから」

第十二話 その花の名は・前編（前書き）

新登場人物

屋城一穂

旧図書館の司書で理事長の姪。

美しい女性だが、少々変わっている。

好きな動物は鶏。

第十二話 その花の名は・前編

「水無月君、おとといはどうしたの？昨日起きたら急にいなくなっ
てびっくりしたよ……有瀬が何ともないっていうから、特に電話も
しなかったけどさ」

朝一番に顔を見つけるなり、クリスは本を読んでいる水無月に駆
け寄って尋ねた。特に責める調子も見られない。その言葉は、ただ、
純粋な心配と疑問とで成り立っていたが、水無月は微笑しながら、
唇の下に密かな皮肉の影を落とさずにはいらなかった。果たして
かけられなかった電話が、この胸に宿した傷を一つでも減らしただ
ろうか。その影をふとひそめて水無月。

「心配かけてごめんね。やっぱり、弟のことが心配だったから。何
も言わずに出てきてしまったし」

「えっ？でも……」

水無月は腕時計をちらりと見遣って立ち上がり、机の上で読みかけ
の本を静かに閉じた。

「ほら、クリス、一時間目は英語だよ。クリスはジャクソン先生の
クラスでしょ？移動しなくていいの？」

渋々ではあったが、時計を見れば確かに動かなければいけない時間
であったので、クリスは来夏の肩を叩いて教室を出た。水無月は重
々しいため息と共にそれを見送った。そのまま眺め続けた教室の出
入り口に、息を切らして駆け込んできたのは落合だった。落合は扉
の縁^{へり}mと膝の上にそれぞれ手をかけ、椅子に座ってぼんやりしてい
る菜月に怒鳴った。

「酒本、てめえ、俺の目覚まし一時間遅らせただろ?!」

「だって、まるで起きないんだもん。それに鳥居先生の授業が最初
だからいいかな、って」

「ふざけるな、俺があと一回遅刻したら欠席扱いになること知って
んだらうが?!」

「あれ、そうだったの？知らないよ。いちいち落合の遅刻の回数なんて数えてられないし」

「てめえ……！」

その時、落合はこちらに向けられた視線に気付き、その光源を悟ってふいに口をつぐんだ。水無月はすべきことが分からなかった。

黙礼することで、何とか旧友を無視したという状況を作らずに済ませた。顔を俯けたまま、半開きの唇が空気を紡ぐ。胸の内ですええ言葉になっっていないその声。謝罪であり、弁解であり、そして非難であった。目を上げた時、落合の関心は後ろからせつつく鳥居先生へと移行していた。

「あんだね、この間のことあたしが忘れたと思ったら大間違いなんだからね。ついでに夏休みのレポート出してないことも忘れてないんだからね」

「執念深い女は嫌われるぞ。だから、男が近づか……」

「言うな！」

今日は雲が速いな　出来上がったばかりのファイルを慎の机の上に置き、視界の端でちらりと捕らえた空の騒がしさに、颯は密かに呟いた。雲にぶつかった日の光が白く砕け散っていく様子や、今朝の天気予報を思い出し、慌てて駆けていく生徒たちの背や肩に、その破片が斑模様を作っている様などを、とてもものんびり眺めている時間はなかったが。そちらの方面は全て陽の専門だ。

「ちくしょう、傘を忘れた時に限って天気が悪くなりやがる」

陽が頬杖をつきながら忌々しげに感想を吐いた。

「ずいぶんお天気に嫌われてるんですね、先輩」

「予算書さえ出せば少しは好いてくれるかもね」

芳乃の言葉を受け、颯は思いつくままに言ってみる。二人揃っての見事な攻撃に、陽は舌を打ち、くるりと椅子を回転させると、クラシックを聞きながら黙々と仕事をしている荔枝にもたれかかった。

「荔枝、傘は？」

「生憎持つてきていない。二人で濡れて帰るしかなさそうだな」

「お前、天気予報見てたよな？」

「見ていても忘れることはある」

「嘘つけ。これで何回目だと思ってるんだ？バイオリンと傘持つのが面倒だったただけだろうが」

「そうかもしれない」

「……シャワーはオレが先だからな」

「どっぞ」

肩を掴んで凄む陽に、荔枝はくすりと笑いを含んで紅茶をすすった。雨に濡れるのが好きだという自分の妙な特性に、恋人はまだ気付いていないようだ。もちろん、二人で一緒に帰る時のみに限る。だってそんな時でもなければ、昔のように二人で駆けるチャンスなどないのだから。そんな思惑も知らず、陽は呆れたようなため息をつく。と、また首を所定の位置、すなわち荔枝の肩の上に戻してぼやいた。「そついや、慎はどうしたんだ？最近生徒会に来ねえけど。バカのくせに風邪でも引いたのか？」

「もうすぐフェンシングの大会なんだよ。昨日から授業全部休んで練習に明け暮れてるんだ。まあ、最近神経質だったのもそのせいみたいだね。もちろん、それが全部って訳じゃないけど……」

一瞬の沈黙。回想はフェンシング場へ落ちる。フルーレの風切る音と、それを白亜の扉越しに聞く明音のやるせなさ。

「大丈夫ですよ、生徒会長のことですから。大会で優勝でもしたら、また威張って帰ってきますって」

皆を元気付けるように、というよりかは、湧き出る明るい考えを抑えきれないという感じで芳乃。一同はふと口元を緩める。

「果たして……そうだといいが」

荔枝が本気で言ったかどうかを推理するのは、颯には立派すぎる時間の浪費のように思えた。もうすぐ雨も降りそうだったし。

旧図書館を見渡して、クリスはため息を一つ。

「今日は来てないかあ」

「誰の話？」

「水無月君だよ。ほら、篠木水無月君。同じクラスの」

「……ああ」

しばし考え込んでから、菜月はようやく合点がいったというように手を打った。クリスは呆れた目を向けようとして、そういえば自分も顔を見合すまで、いや、見合しても当分水無月に気付かなかったことを思い出し、自重した。ノアは何となくそれを察しているのか、くすくすと手をあてて笑う。クリスは横目で勘弁してくれと訴えた。「ふーん。なーんだ、中はちゃんと綺麗になってるんだ」

菜月が旧図書館に行きたいと言い出したのは、昼休みのことだった。「懐かしい」ので「見にいきたくなかった」そうだ。クリスは同様の懐古を抱いているはずの落合も誘ったが、落合は首を振った。未提出の世界史のレポートに触れても、今回はかりは渋々ついてこようともしなかった。もしかしたら、高等部図書館の司書がトラウマになっているのかもしれない、とクリスは思った。ついこの間の勉強会中にととうとう放り出されたので。全く、多忙ゆえに来られなかった来夏と立場を交換してあげるべきだ。

「司書さんはいないのかな？」

「司書さん？……ああ、そういえばいないよね。昔はいたの？」

菜月は古い童話の本を手にとり、ぱらぱらとめくりながら頷いた。

「うん、いたよ。なんか理事長の姪だかなんだったって言って、美人で有名だった人。落合がべた惚れしてたもん。変な人だったけど。司書室で鶏飼ってたし」

「鶏？」

クリスは聞き返した。理事長と近しい者はなぜ皆どこかおかしいのだろうといぶかしみながら。到底本人を差し置いてはいられないが、ノアがうれしそうに声を弾ませた。

「ああ、それ、お養父さんが一穂さんにプレゼントしたものなんです。一穂さんなら昨日帰ってきてますよ、学園に。ほら」

クリスと菜月はノアの指す方を顧みた。先日は気付かなかったカウソターの奥に、確かに女性が一人立っている。一穂さんと呼ばれた彼女は、ふとこちらを見遣り、寄ってくるノアに向かって小さく手を振った。クリスと菜月も顔を見合わせ、その後ろにならった。二人の会話が早くも耳に入ってくる。

「こんにちは、一穂さん」

「ええ、こんにちは。ノア君。今日はお友達と来たのね？」

「えっ、あの……はい……！」

女性は微笑んだ。なるほど。理事長は決して醜男ではなかったし、若い頃は美男子の部類にも入っただろうが、噂になるだけあって、やはり顔の造りは趣が異なって見える。例えば、垂れ目気味の二重の目は大きくて睫毛が長く、何となく眠たげな印象を与えている。

理事長の細く鋭く油断のならない双眸とは正反対だ。女性らしいふつくらした唇に薄くルーージュを引いており、頬には微かな膨らみがある。ノアと同じワインレッドの髪を短く切っており、その髪型が一層小顔を目立たせた。肌が浅黒くて女性にしては背が高く、髪と似た色の、なで肩のラインがよく出るスーツを纏っている。胸元の名札には「屋城一穂（いちほ）」との文字が見えた。

「老けないなあ」

菜月の呟きに、クリスは慌てて肘で小突こうとしたが、一穂は笑いながらクリスを押しとどめた。

「構わなくてよ。歳の話は嫌だけど、変わらないとだけだったら光荣なの。伯父さんなんて、褒め言葉のつもりかしよっちゅう（う）ずいぶん成長したもんだね」なんておっしゃるけど、子供じゃあるまいし、ねえ？」

「今までどこに勤めてたの？」

調子も狂わせずに菜月が尋ねた。

「アメリカに少し語学留学に。えっと、あなたは確か酒本君だった

かしら？」

「はい」

「落合君ってお友達にいたわよね？ あら、記憶違い？」

「友達かどうかは別にしてとりあえずいる」

記憶が正しかったことが証明されて、一穂は喜びを口元に咲かせた。クリスは思わず顔を背けた。落合が惚れるのも無理はない。この職場にはもつたいたいほどの美しさだ。

「よかった。この歳でぼけてたら洒落にならないものね、もう。落合君に今度来るように伝えてね。あの子のことはとても印象に残っているの。懐かしいわ。本当に面白い子よね…… あら、お天気の良いこと」

一穂につられ、三人も一斉に窓の外を見た。ひとつだけ幕の退けられたそこからは、長方形の灰色の空が見える。間もなく降り出すのだろう。日の光が欠片ほどにも見当たらない。ふと、クリスが気付くと、ノアと自分の間から、菜月の姿が消えていた。彼の居場所を示したのは、扉の閉まる音と遠のいていく足音だけだ。ノアと一穂は一向に気にする素振りもなく、古く楽しい話を親しげに語っていた。クリスは再び窓の外を見遣った。木々は怖いほどひっそりと沈黙している。

「一穂さん、オーガスタは元気ですか？」

「ええ。今は司書室で鳴いてるわ。さつき餌をやったばかりなの」
アメリカの知人の話と思い込んでいたクリスは度肝を抜かれた。

「あら、嫌だ。鶏の話よ」

颯が昇降口へと降り立った時、ガラス戸の向こうには、冷たく細い針が天の手をこぼれてぽつりぽつりと落ちてきていた。颯は肩をすくめた。予想通り、否、予報通りだ。仕方ない。とはいえ、やはり灰色の外界に踏み出すのは何となくためらわれて。戸を開けたままその場で踏む数歩の前に突如差し出されたのは、懐かしい千鳥模

様の傘だった。

「遅かったね、颯」

「ナツ、どうして……」

嬉しい驚きを隠せない颯の問いに、菜月はまず取り合おうとはしなかった。ただ、傘を右肩の上で傾け、空いた方の手を颯に向けて差し伸べながら、戸惑う彼を傘のある戸外へと誘い出した。

他愛もない会話を繰り返しながら歩む帰路を、雨は絶えず濡らし続けた。その勢いはますます強まるばかりで、ついには二人に一つの傘を脇から潜り抜け、二人の制服の袖やら裾やらをびっしょりと重くした。しかし、二人はそれらを厭う素振りもまるで見せない。二人で並んで歩く小道に、これ以上どんな注文のつけようがあるだろう。だが、それは無頓着というよりは、讓歩や諦めの一種に近いものがあつた。

分かれ道に差し掛かった時、二人は無言で顔を見合わせた。西の一般寮へと続く道と、北の特別寮へ続く道、二人はそれぞれ別の道を行かなければならない。菜月はほてらせた唇にのぼらせた言葉を途端にしまい、つないだ手を一層きつく結んで別離を拒んだ。無言の訴えに共鳴して颯の胸は痛いほどだった。二人の目に映つたのは雨の色、颯は眼鏡の奥で瞳を揺らし、この雨に甘んじて口を開いた。「ナツ、僕の寮へ来る？」

菜月は顔中に笑顔を響かせ、大きく一回頷いた。ねだっていた菓子をよくやく与えられた幼子のように。

颯の寮は、慎や荔枝と陽の寮とも佇まいが大分異なっていた。慎の寮は二階建てで、豪奢で趣味の良いワインレッドの洋館であり、花と訪れる小鳥のにぎやかな庭を持っている。荔枝と陽の寮は、海辺に面したバルコニーがついた、窓の広い開放感のある白い建物だ。変わって颯は、住まいの周りを果実のなる木々で覆い、厳かで神聖な空間を作り上げていた。金木犀の生垣を過ぎ、雨につやつやと光る小石の上を進んだ先に、菜月の目には懐かしい、社風の家屋が姿

を現した。昔暮らしていた颯の神社と赴きが似通っている。菜月の胸は知らぬところで小さく弾んだ。

「どうしたの？」

掴まれた袖越しにか、微かにそれを感じて颯。

「うっん、何でもない」

首を振る菜月はひたすらにいじらしかった。

「制服はそこに干しとけばすぐ乾くと思うから。タオルは自由に使って。風邪でも引かれたらたまらないしね」

「分かってるよ。子供じゃないんだから」

「はは、そうか」

暖められた畳の部屋の隅であぐらをかき、淹れ立ての濃い煎茶を少しすすって、菜月は苦そうに眉をひそめてみせた。颯は、それを見て声を上げて笑った。彼は既にワイシャツとパーカーを脱ぎ、濃紺に白く模様の入った部屋着の浴衣に着替えている。

「ナツは相変わらず苦いのが駄目だね。お菓子と一緒に飲めないんだから」

「別に、飲めないってことはないもん」

菜月は膨れ面をしてみせる。それでも颯が運んできた甘い茶菓子には、はばかりなく目を輝かせた。

「ほら、やっぱり……」

しかし、呆れながら颯が腰を下ろすと、菜月は菓子を見捨ててそつとその傍らに寄り添った。再び心通わせたあの日から既に二月近く、その間交わした言葉は多けれども、身を寄せ合い、腕を絡ませあうのは何月ぶりか。菜月は颯の正面に移ると、彼の背中に手を回し、彼の肩にくちづけるよう締めた口元を押し当てた。触れ合う体の面積に共有する熱は、互いの心臓の動作により、更に温度を上げていく。

「颯」

「何？」

菜月の髪からは微かにシャンプーの匂いがした。黒炭の色の、さらさらとした髪を撫であげれば、ますます香りは強く立った。

「好き」

「うん」

「大好き」

「……………知ってるよ」

「颯がそうやってはぐらかしてもね、もう離してあげられないくらい好きなんだよ。だから、ちゃんと……………ちゃんと応えてくれないと……………嫌」

「うん……………」

菜月はゆっくりと顔を上げ、一瞬ためらった後、存在を確かめるように怖々と額を重ね合わせた。何も見なくても済むように目は既につぶっていた。それから音もなく、触れ合うだけのキスをする。一度して悔やむように離れ、しかし堪えきれずにもう一度。幾度も繰り返される単調で深い行為。次第に胸の中にこみ上げてくる感情に、二人は気が付いた。あえてあの言葉に目を背けるのであれば、昂ぶりとでも言うべきか。愛の経過に組み込まれた花の実りを、二人も無視し続ける訳にはいかない。

雫滴る薄紅色の花弁。その花の名は、デルフィニウム

「菜の花がさつ……………！」

堰きこむように颯の口をほとばしりてた言葉に、菜月ははっとして身を震わせた。

「菜の花がさ、またきれいに咲いたって……………春の話だけど……………言っ
たっけ？」

「ううん、聞いてない」

菜月は素直に打ち明けた。何だろう。急速にしぼんでいく何かとやけに強すぎるこの心の安堵は。

「写真があるけど、見たい？」

「うん！」

前者についてはまだ知らない。後者についてはもう息苦しいほど馴

染んできた。そう、息苦しいほど。それでも、その中で窒息する方が箱の外に出るよりは楽なのか。

微笑みながら、懐かしみながら、結論なんて出るはずなかった。

花瓶の中には老いたる花、うら若き花が混在し、茎を掻き分けるごとにその美醜を順に曝していく。どれも夢の始まりにより行き場をなくした花たち。甘くぬるい情眠さえなければ、あの丘の墓前に高く積み重ねられていたものを。朽ちる前に風にさらわれて。

凍りついた窓越しに雨音を聞きながら、白蘭はベッドの上に横たわっていた。肌蹴たシャツが本来隠す部分に今更シャツを纏おうともせず、膝まで捲り上げたズボンのウエストはゆるい。ネクタイは花瓶の花を束ね、打ち捨てられたベルトと揃って、持ち主の罪を声高く糾弾している。しかし、どうして彼がその声を聞こうか。どうして彼が羞恥に顔を赤らめようか。芳乃が柄にもなくぞんざいに着た制服姿を見せても、白蘭はいっこうに無頓着という様子だった。薄く開いた唇からは、真珠のような歯が覗き、時折血ののぼった舌先を優しく噛んでいる。芳乃は白蘭の隣にそつと滑り込むと、後ろから彼の肩を包み込み、唇の中に指を押し入れて甘く溶け合う歯と舌をまさぐった。手を置いた白蘭の背は汗に湿っていた。

「どうしたの？白蘭様？」

白蘭はふと笑った。

「別に。枯れそびれた花が惨めだと思っただけだ」

「だったら捨ててしまえばいいのに。目障りだよね。こういつの」
芳乃は花瓶のしおれた白いランに手を伸ばすと、萼つぼみごと花弁をかどわかった。花は勢いで宙に舞う。しかし、二人はその着地点さえ見極めようとせず、花に目を背けて寝台の上で向き直り、愛の言葉一つなく、唐突に唇を重ねあった。雨音だけが絡まりあう熱のささやきを掻き消していく。二人の墮落を覆い隠すように。

「これはサービスなの？」

高揚する胸に手をあてながら、芳乃は尋ねずにはいられなかった。

「まさか。その手のものは好まない。花を駆除してもらった礼だ」

「ふふ、貴方らしいや。でもさ、本当に邪魔な花はまだ消えてないんだよ。もう冬だっていうのに、いつまで咲いてるつもりだか。目障りだよね……叩き潰さないといけないよね」

「俺のために？」

「もちろん」

白蘭は満足げに微笑んだ。芳乃は彼の傍らを名残惜しげに抜け出すと、花のない茎を退けて新たなランを挿し、先ほど放り捨てた花の顔を踏みつけて部屋を出て行った。踏まれた花の花弁の白が、春の日の色に変わる今、その花の名は

第十二話 その花の名は・後編

旧図書館の司書室にて。司書室は正方形の広々とした部屋で、床にはオリブグリーンのカーペットを敷き詰めてあった。きれいに埃が拭き取られ、何もかもが整頓された館内では、唯一雑多な感じのする場所だ。それは机の上に無造作に置かれた本のせいか。壁一面に張られた巨大なスクリーンのせいか。散らばった椅子と、部屋の真ん中にそびえる巨大な映写機のせいか。それとも部屋を自由に駆け回る鶏のせいか。

「オーガスタ、あまりうるうる歩かないで。映画に集中できないわ」
一穂は愛鳥に向かって呟きながら、スクリーンに向けたパイプ椅子を軋きませた。今日のような日のない雨空の夕方は、ただでさえ薄暗いこの部屋に、ちょうど白黒の人物たちが映えるだけの暗闇をもたらししてくれる。スクリーンの上では、西洋人の少年少女が、聞こえない笑い声をたてながら、自転車で坂道を駆け下りていた。

「ロマンよね」

鶏は飼い主の言葉に反応するようコツコと鳴いた。

その時、緋色の光が若い恋人たちの顔を掻き消した。誰かが司書室の扉を開けたのだ。せつかくの楽しみを妨げられても、一穂は一切迷惑そうな素振りを見せなかったが、わざわざ振り返って来客を歓迎するような真似もしなかった。鶏は両翼をはばたかせて白い羽を舞い散らせる。客は静かに扉を閉めると、散らばる椅子の一つに腰を下ろした。それでも尚、一穂は何も言おうとしない。

「どうしてぼくを無視するのさ？」

「貴方が言える立場にあるのかしら？今日はもう閉館よ」

「知ってるよ。だから来たんだ。誰にも邪魔されないからね」

一穂は肩をすくめて立ち上がり、暗闇の中を慣れたように進んで、部屋の隅のランプに火をともした。映写機の隣に運ばれた炎が照らし出したのは、振り返った一穂の密かな微笑と、胸元に抱き上げら

れた鶏だった。

「それで、何の用かしら？……君？」

「それで、僕に何の用なの？芳乃？」

「ええ。よかつたら、旧図書館の視察に一緒に行っていただけないかと思つて。ぼくもまだだったんです」

颯は眼鏡の奥で薄紫の目を瞬いた。一晩中降り続いた雨もやみ、水溜りに冬の青空が映るのどかな日の放課後のことである。芳乃のおかげですつきりと片付いた生徒会室には、颯と芳乃以外には誰もいない。慎は相変わらずフェンシング場にこもりきりだし、荔枝と陽はそれぞれの部活に赴いている。文化祭に向けての練習もあるのだろうから、今日のところは颯も見逃してやることにした。しかし、慎も荔枝も陽も大変だ。一方でダンス部は全国大会出場が決定したところなので、大分気が楽だった。颯は腕を組んで首を傾げた。

「そうだなあ……まあ、今日は皆もないし、仕事も特にないし、視察っていう仕事もたまにはいいかもしれないね」

颯の悪くない返事を聞いて、芳乃はえくぼのある笑顔を作った。
「ありがとうございます。よかつた、一人じゃ仕事も楽しくありませんしね」

「陽と一緒に仕事ができないときの荔枝の台詞だよ、それ」

「えっ？小杉先輩の？」

「そう。でも、本人には内緒にしておいてね。じゃあ、支度するかから先に昇降口で待つてよ。すぐに行くから」

「はい」

芳乃は素直に頷くと、荷物を抱えて生徒会室を出て行った。その背中を見送りながら、颯はぼんやりとかつての彼を思い出す。芳乃は少しも変わっていない。相変わらず真面目で無邪気で人懐っこくて一途な生徒だ。一年半という時間も、アメリカという親しみのない土地も、彼に何らかの感化を与えることはできなかったようだ。

この目に見える限りでは。窓に映った自分の顔を見て、颯は考えた。はたして自分はどうかだろう。菜月は確かこう言った。怖かった、と。自分がどんどん遠くにいつてしまうような気がした、と。自分は彼をバカだと笑った。そんなことはないと言い張った。だが、本当のところは？本当に自分は変わっていないのか。相変わらず菜月の所有物であるのか。違う。答えは案外すぐに、真っ正直に出された。自分は菜月から距離を置いていた。彼を嫌いになった訳ではない。むしろ彼のことや日に日にいとおしくなるばかりだった。それなのに、なぜその手から滑りぬけて逃げ回ったりしたのだろう。足場に迷って花の上を舞う蝶のように。

颯は冷たい窓に手をついた。自分の内に芽生えた、無邪気でも一途でもない残酷な感情に、もうすでに気が付いていた。菜月を安心させたくなかった。ひらひらと頭上で舞うことで、自分が目を離せば遠くにいつてしまうことを示したのだ。菜月が自分なしでは生きられないこと知った上で。いわば一種の脅迫だった。そうして菜月を独り占めしていたかった。自分は菜月のもの。そして、菜月は、ナツは

「ナツは……僕のものだ」

一人呟き、それから窓辺の自分にくると背を向けた。胸元に抱きしめたファイルの、いつもより少し軽いのに気が付きながら。

白亜の体育館の傍ら、そして薔薇の小道、かつて菜月と通った道とまるで変わっていないなかった。芳乃と楽しく語らいつつ、颯の胸は痛いまでの懐かしさに揺らいでいた。いちいち込みあがっては瞼を過ぎ行く思い出たちは、時の流れも忘れさせるほどに生々しく、色と温度と匂いとを帯びていた。

「おや、クリスマスじゃないか」

変わらぬ館内で、颯は早速後輩の姿を見出した。クリスマスはノアと水無月と共に長机の上に本を並べ、小声でおしゃべりしながら、楽しそうに眺めているところであった。歩み寄ってくる人影に顔を上

げたクリスは、颯の後ろからやって来る芳乃の顔にもすぐに気が付いた。

「あつ、颯先輩こんにちは。あれ？もしかして、この間の……？」

「やあ、その節はどうも」

芳乃は微笑みながら手を振ってみせた。颯は意外な接点の存在に驚いて、クリスと芳乃を交互に見遣って関係性を尋ねた。答えたのは芳乃だった。

「この間ランの花を頂いたんです。とても見事に咲いてたので」

「へえ、クリスが芳乃にランを？」

「有瀬が育てたんですよ。有瀬は花の世話が上手いから、何の花でもよく咲くんです」

「いいえ、そんなこと……」

ノアは首を振って照れくさそうに顔をうつむけた。そんなノアの謙遜を押しやってクリスが挙げる実例を、颯は微笑ましい気持ちで聞いていた。自覚がないだけに手強い敵だ。慎の言うとおりだ。本格的に叩きのめさなければいけないかもしれない。そのために、あまり仲良くするのはやめておくか。

「ごめんね、クリス。一応仕事で来てるんだ。話はまた別の機会に」
「あつ、ごめんなさい。邪魔しちゃって」

慌てて口を覆うクリスに、颯は思わず口元を緩ませた。

「いいんだよ。僕こそ読書の邪魔をしちゃったみたいで悪かったね」

「いえ、読書なんて大層なものじゃないんですけど」

「でもクリスにとっては大切なことなんだろう？頑張って」

颯は応援の言葉を裏付けるように、そっとクリスの肩に手を置くと、本の森の中へと消えていった。芳乃もその後を追いついて、笑顔で去っていく。クリスは小さく手を振り返しておいた。そういえば、校内新聞に生徒会副会長が帰ってきたようなことが書いてあった気がする。颯と一緒にすることは、彼がその生徒会副会長なのかもしれない。クラスはF組と書いてあった。名前は確か……

「水無月君、大丈夫？」

聖書をめくる手を止め、なにやら思いつめたように視線を落としている水無月の目の前で、クリスはペンを左右させてみた。水無月ははっと我に返り、寄せた眉の根を離して微笑む。睨み損ねた背中はどうに立ち消えていた。

思い出は知らぬ間に足を突き動かし、童話の棚の前に梯子を運ばせた。特にさがしている本でもないのに、わざわざ梯子まで運んでくるなんて子供じみている。分かっている、笑う気になれないのが今の心境だ。颯は懐かしの童話を求め、擦り切れた背表紙の上に何度も紫の光を流した。かつて、二人で夢中で読んだ本を。

「あの」

梯子に触れる者があつた。見下ろしてみると、見慣れた女性が鶏を大切そうに両腕に抱いて立っていた。颯は焦りさえ繕っていた表情を崩した。

「なんだ、一穂さんか。また戻ってきたの？」

「ええ。オーガスタも一緒」

賢い雌鶏はここでは鳴こうとしなかった。一穂は彼女の白い羽を優しく撫で上げた。

「あのね、榊原君、さがしてる本なら司書室にあると思うわ。ちょっとお話もしたいし、よかったら立ち寄ってくれない？伯父さんに美味しいお茶をいただいたの。榊原君に飲んでいってほしいのよ」「毒見をしてくれってことかな？」

「嫌ね、違うわ。もう、せつかく善意から申し出てるのに、最近の子は……」

颯は梯子を下りながら低い笑い声を上げた。まだ若い一穂から「最近の子」と聞くのも不似合いだったし、自分の思い出の本を当てられた衝撃を隠したかったのもあつた。一穂は颯の疑い深さに拗ねていたが、それでも彼が誘いに応じるような素振りを見せたので、少し嬉しそうに司書室への先導を始めた。

「ああ、芳乃も一緒なんだけど……」

その言葉は一穂には聞こえなかつたみたいだ。いいか、ほんの少しのことだし。鶏と女の背に招かれるまま、颯は司書室の戸を潜り抜けた。

手にこびりついた絵の具を制服のズボンでこすりながら、落合は誰もいない高等部の廊下を歩いてきた。文化祭に展示する作品のために、美術部もこのところは活動日数を増やしていた。上手く剣道部と両立しなければならぬが、部長という立場という故に、あまり美術部を空ける訳にもいかない。落合はため息をついた。難しい問題だ。考えるのはよそう。

ふと落合は立ち止まった。入ろうと思った教室から、入れ違いのように出てきた人影があつた。彼の山吹色の瞳は斜陽に溶け込み、横顔の輪郭だけがはつきりとこの目に捉えられる。彼の黄土色の髪の一房が、彼の顔に影を落とした時、落合はようやくその正体を確信できたのであつた。

「おい、芳乃！」

「なんだ……桃真か。びつくりさせないでよ」

落合は肩を大きくはねた。芳乃は今、自分を桃真と呼んだ。昨日まではいやに余所余所しかつたのに、その顔に親愛さえ取り戻して。

芳乃は落合の元へ近づくと、胸に頬をよせ、ネクタイの結び目を緩めるように指を絡めた。落合は反射的にその手を掴んだ。

「こんなところで何してんだ？お前の教室はF組だろうが」

「別に。桃真の知つたところじゃないよ。教えてほしければ、教えてあげてもいいけど」

「……何企んでやがる？」

芳乃は笑つた唇を歪めた。

「復讐だよ、桃真。あらゆるものへの復讐さ。君への復讐、過去のぼくらへの復讐、真実への復讐。それは同時に制裁でもあるんだよ。ぼくの部屋をかき回す奴らへの。そして、外側からうるさく戸を叩

き続ける奴らへの、ね。ぼくの部屋にはね、落合……ぼくと白蘭様しか入れないんだ」

芳乃は捕縛された手を振りほどくと、友愛の面を排他的な憎悪に満ちた面に返し、夕日が照らせなくなった方へと身を翻した。落合の喉は枯れるばかりで制止の声もでない。

「桃真つて卑怯だよ。そうやってさ、いつも無視しようとするんだから」

目を背けたあの日から、いつの日も、彼の言葉だけが真実なのだ。教室の机の上、花瓶に挿されたばかりのその花の名は

「ほら、これでしょ？」

一穂は緑茶を客の湯のみに注いだ後、つと古い本を差し出して自慢げに尋ねた。違うとは言えなかった。まさにその通りであったから。

「適わないなあ。何でもお見通しなんだから」

颯は本を受け取って降参したように笑った。薄く汚れたその本は、ピーターパンだった。昔、菜月と一緒に読んだ本だ。初等部の時に菜月が英語劇でピーターパン役をやるといっているので、寝る前の枕元で読み聞かせてやったのだ。一穂は足元のオーガスタを膝上に抱き上げると、濃く淹れた茶を口に含んでほっと息をついた。

「美味しい。オーガスタもお茶が飲めればよかったのにね。まあ、貴女はこれで満足しているんでしょうけど。榊原君、何でもお見通しと言っても本のことだけよ。誰がいつどんな本を借りたかは、大体覚えてるの。このことに関しては、パソコンなんかよりも正確だったりしてね。まあ、それは冗談だけど、あなたたちよくこの本借りにきてたから。ほら、あなたと酒本君で。そういえば、昨日酒本君も顔を見せたわね」

「ナツが？」

一穂はこくと頷いた。彼女の微かな体の振動につられ、鶏も首を縦に振った。

「ええ。そういえばあの子も童話のコーナーを見てた気がするわ。同じ本を探していたんじゃないかしら？ふふ、幼馴染って似るものね。思い出を共有しているせいなのかしら。まあ、育ったプロセスが一緒なものね」

颯は無言で本のページを繰った。菜月もこの本を探していた。恐らく、同じ思い出を求めて。だが、菜月が旧図書館を訪れたのは、あの出来事の前ではないか。二人きりの密室で、お互い見知らぬ花の名を知った。そして、手を伸ばしかけ、恐怖に駆られてやめたのだ。花言葉は欲望、花の香は媚薬、触れ合う快樂と高みに登りいく興奮への導きだった。子供の純潔を投げ捨て、菜の花の色を忘れるための。

「……ずっと子供でいられるって、素敵よね」

一穂の独り言のような呟きに、颯は顔を上げた。気付けば、本は彼女の手元にある。

「何も知らなくてもいいって、何も忘れなくていいって、すごく素敵なことよね。大人になった瞬間、まるで駄目だわ。汚れてしまったって感じるもの。子供のころは何ともなしにできてたことが、大人になったら色々考えてできなくなってる」

そうだ。二人きりで密室にいることも、今までは何ともなかったはずだ。抱き合うこと、触れるだけの接吻くちづけを交わすことも、ただ純粋な喜びに過ぎなかった。なぜ恐れる必要があったのだ。

「でも目を背けちゃいけないのが辛いところよね。だって目を背け続けたら、きつと生きられなくなってしまふもの。次の段階に踏み出せなかったら堕ちていくしかないんでしょね」

自分の中にも菜月の中にも変化の兆しは表れている。次の段階へと伸ばせる手をすでに持っている。千鳥模様の傘などいらないことを、もう悟っている。このまま晴れの日が来るのを恐れながら、傘を差し続ければ、二人そろって醜い姿を周囲に曝すだけ。傘の中で縮ん

だ背、曲がった腰、萎えた手足と日と隔たれて青白い顔

「子供でいればどんな罪も見逃してもらえるのにね、子供でい続けることだけは許してもらえないわ。そうよね、いつまでも規律から逃げ回っているのは立派な罪だもの」

「……罪、ですか？」

颯は開いたグレイのパーカーの前をかき寄せた。この冷ややかな室温にさいなまれても、絶えず思考する脳が放った熱は血管を巡り、颯の額に嫌な汗を浮かばせる。焦燥とためらいとの激しい葛藤が、血液の駆け足を加速させていく。頭の中で回りだす回転のぞき絵ソエトローブには揺れる菜の花。今にもその花弁を、色を、香を、風にさらわれそうになりながら。一穂は相変わらず微笑んだまま、取り返した「ピーターパン」を颯の手に握らせると、自分は立ち上がってカーテンを引き、鶏を膝の上に座りなおさせてスクリーンの方を向いた。かつて楽しげに笑いあっていた幼い恋人たちは、この一日の間に、片やたくましい青年に、片や麗しき婦人となって、涙滴る頬を震わせ、辛い別離に耐えていた。この無声映画は颯の眼鏡にも断片的に映りこんできた。スクリーンの中では存在する汽笛を合図に、二人の悲しみは最高潮に達した。汽車の窓から突き出した愛しい手に、婦人は幾度も接吻を落したが、惹かれあう濡れた唇と手とはたちまち引き裂かれる。乙女の裸足は小石の刺にも躊躇して、ただ咽びながら立ちすくむ間に、恋人は遠く白いばかりの地平線へと消えていく。

「ナツ……」

痺れた舌で紡いだ名。一穂が映写機の電源を切ると、部屋は一面の暗闇に覆われた。

菜月が教室に戻ってきたのは、弁当箱を忘れたことに気が付いたからだ。この季節ならば、一日放置したぐらいではどうにもならないとは思ったが、やはり衛生上よろしくないと思いなおし、わ

ざわざ剣道場から重い身をひきずってきたのだった。ただ比喩的に重かったただけではなく、実際荷物のおかげでごちゃごちゃしていたのだが。そして、ふと自分の机の異常に気が付いた。机の上の見知らぬ花瓶に咲き誇るのは、白いランの花だった。

「いじめ？」

思わず一人呟いて歩み寄ってみる。様々な憶測が感性を鈍らせる中でも、純白の柔らかな花びらは菜月を惹きつけずにはいられなかった。そっと触れて菜月は一步後ずさる。何だかそうしてはいけなかったような気がしたので。菜月は利き手を抱えて眉をひそめた。いじめとも取れるこの行為といい、薄暗い教室に白く輪郭が浮かび上がっている様といい、気味が悪いことこの上なかった。一体何のもりなのだろう。誰かの恨みを買ったつもりはない。強いて言うなら落合程度だが、まさか彼がこんな陰湿な手口を思いつくとは考えられなかった。

「誰が……」

菜月のミントブルーの目が見開いたのは、背中に何者かの手が触れたからだだった。長いこと雪の中に埋もれていた死者が、一途な無念だけを頼りに蘇り、菜月に縋ってきたかのような冷え冷えとした感覚に、菜月は身を強張らせた。ひるんだ隙にたちまち体は二本の腕に絡め取られ、くるりと翻される。強引に唇を奪われるのは間髪で防いだ。

「ほう。さすが剣道部部长。細い割に腕力はある様だな」

「何するんだ……っ?!」

菜月は相手の胸を押しやりながら、荒い息と共に吐き出した。背中から平然と後ろの机に飛び乗り、唇を歪めて感心してみせたのは、水色の髪の毛の高い少年だった。ネクタイは緩くずれおち、素肌がシャツの下からのぞけて見える。菜月は表情を尖らせた。篠木白蘭。噂だけは知っている。学園を影で統率する不良であり、権力ある生徒の間で暗躍する男娼だと。白蘭はたてた膝に肘をかけ、涼しげな様子で弁解した。

「俺は報酬に応えようとしたただけだ。今日は仕事がないっていうなら帰ってもいい」

「ふざけるな！そんなものないに決まってるじゃないか！この花を持ってとつとどこかに行ってくれ」

「ひどい言い方だな。あいつそっくりだ……気に食わない」

白蘭は口の中で密かにぼやくと、菜月の憤慨に促され、冷笑を浮かべたまま教室の出口へと静かに身を進めた。だが、素直に立ち去る彼ではない。突如菜月の睥睨の通路に、千鳥模様の傘をかかげて見せた。菜月は再度目を見開いた。

「どうしてそれを……！」

「ロツカーから失敬した。これさえあれば俺の話でもまともに取り合ってくれるかと思つてな。どうしようか？折って捨てることもできるし、これを餌にお前を買うつていう術もある」

怒りと衝撃のあまり口もきけない菜月を視界の端でとらえた白蘭は、声を上げて残酷に笑った。自分の優勢を見てとつた彼は、傘をもてあそびながら教室の中に舞い戻り、傘の先を突き出して壁の際まで菜月を追い詰めた。手を菜月の顔の傍らについて完全に逃げ場を塞ぐと、白蘭は傘をひっくり返して柄の方で菜月の顎を持ち上げた。

「急に猫みたいにおとなしくなりやがつて。それでいい。下手に動く大切なものがどうなるかわからない。しかし、まさか俺がこんな真似をすることになるなんて。普段は逆の立場なんだが………どういふことが分かるだろ？おまえは知らないふりしてるみたいだけだよ」

思い出に圧迫された喉を、菜月は抗議の代わりに小さく鳴らした。白蘭の口元から笑みが掻き消え、一瞬彼の顔が影に覆われたかと思うと、きつく結ばれた拳が菜月の耳元に叩きつけられた。

「目障りなんだよ。てめえも、おまえの恋人も、綺麗な佝でいようとする奴ら全員が。てめえらの純潔のためにどれだけのものが犠牲になってると思つてるんだ。何も見ないふりして自分たちだけ純粋なふりしてやがる……あいつも同じだ。あいつも……自分だけ逃げ

ようとして……許せない……」

白蘭の表情は一言ごとに蛇のように変化していった。菜月は細めた視界の中で察していた。今対峙している少年が何らかの冷たい感慨にふけっていることに。絶対零度の地、凍りついた暗黒が支配する領域。心深くにある海に身を浸しながら、彼は菜月から目を逸らし、鉛色の窓を凝視していた。廊下にのみ点された明かりが、ガラスの上に少年の影絵を浮かび上げている。それは、戒めるべきものを目前にしながら、罪悪感のために身を竦めている兄の形をとっていた。

「許さない……ミナ……」

白蘭が人影の本質を確かめようと入り口を顧みたその隙を、菜月は突いた。押し当てられた傘を掴み、振り払うように白蘭の手から奪い取る。千鳥模様の布に守られた脆い枝が、細い指に折られるほどの怒りを以って。白蘭ははつと息を呑み、求めていた背後に向かつてよるめいたが、花瓶を置いた机が彼の背を受け止めた。床に撒かれるのは白い陶器の破片、そしてそれと見紛うランの花弁と、水。白蘭がとうとう振り向いた先に、あるはずの人影はいなかった。

花瓶の水が教室の床を濡らした。天上でも何者かが花瓶を傾けたのだろうか。突然の雨に、下校中の生徒たちは二日続けて騒がしい旧図書館を出た颯は、尼そぎにした髪の毛の端に雫を垂らしながら、彼らとは反対に、校舎への道を辿っていた。濡れた制服は重く冷たく、できることなら走り出したかった。だが、今は足にも力はなく。

「あつ、颯先輩、傘、貸しましょうか？俺は有瀬と一緒に使いますから」

背中を追ってきたクリスが申し出る。颯はゆつくりと微笑を象ると、友人の傘の下に急いで滑り込んだ後輩に向かって、静かに首を振った。

「ありがとう、クリス。でも、いいんだ。僕も傘は持ってるからね」

「えっ、でも……」

颯はクリスの言葉の続きを待たずに歩き出した。その足取りは決然としていたが、横顔は何かしらの苦しみに耐えているようにも見えた。それは何故の苦しみだろう。新たな道をとらない罪を糾弾されながら、その罪を足元に置き捨て、再度目を背けて進むことに対するものなのか。薔薇の小道の出口で颯は足を止めた。白亜の体育館の影から現れたのは、共犯者と潰れた凶器。

「今だけは、ね」

差し出された傘に入るための免罪符はその一言だけだった。折れた傘でもまだ必要なのだ。臆病な自分たちにとっては。

そしてまた枯れ損ねる、その花の名は

第十三話 キャラバンの見た夢・前編

幸せだった時があった。私の名前を呼ぶ声が、一つは耳元で、一つは胸の内側で、これ以上望めないほど、何度も優しく響いていた。全てを一瞬で吹き飛ばしたのはただの金属の塊、そこに至るまでの過程を生み出したのは、私を含めた全ての人間たちの慢心と、私の愚かなまでの未来への信頼だった。私はまだ諦めきれない。来るはずもなかった幸せを。まだしがみついている。まだ執着している。汚れた羽で、小さな曲がった嘴で。私の前を過ぎ行こうとする輝くものを追っている。

「おい、秋元」

スポーツドリンクの容器を手にとってきた真央に、大河内が早速声をかけた。放課後の校庭は隈なく太陽に照りだされ、砂の一粒さえ光の共鳴から抜け出すことを許されなかった。空気は冷たく渴き、忙しく動くサッカー部員たちの喉から湿気を奪っていく。真央は慌てて駆け出したが、その必要はないと大河内は片手を突き出して制する。

「いや、違う。涌水を見なかったかと思ってな」

「明音ですか？いえ、見ませんでしたけど……そりゃあ、見ませんでしたけど……」

真央の語尾が苦々しげに弱まっていく。

「……悪い。聞くまでもなかったな」

「はい……」

涌水明音 シナモン色の髪をした部員の一人の居場所に思いを馳せ、二人は同時にため息を吐いた。少なくとも、この学園内にはいるのである。生徒会長がこの学園に留まっている限りは。

「でも、明音ったら、せつかくレギュラーに上がって、次の試合に

出られるっていうのに、一体どうしたんでしょね。前までは一応真面目に出てたのに。やっぱり生徒会長の不登校と何か関係があるんでしょか？」

真央が顔をうつむけ、不安げに言葉を漏らすと、大河内は目を細めてその肩にそつと手を置いた。彼が自分に慰めを求めていることは知っていたし、本当に彼のことを慰められるのは自分ではないこともわかつている。だが、彼を心から愛する者として、そうせすにはいられないのだ。自分の哀れな性を胸中嗤いながら、それでも見上げる真央を見ればこみ上げる愛しさに表情と声は和らぐ。大河内はためらいつつも真央の頬にそつと手をかざした。

「大河内先輩」

「大丈夫だ。どうしてもっていうなら……無理やり引っ張って来い」手を添えた真央の表情が笑いにぱつと輝いた。

「あつ、はい！」

鶏少年室井の呼ぶ声に飛んでいった真央の背中を、大河内は他の誰にも作れない優しい微笑を以って見送った。この想いは届かなくとも良い。心の中でゆっくりと静かに溶けきって、自分の精神の中樞まで染み渡って切れれば。そうすれば、きつと苦しみも痛みもしないで済むのだろう。だが、その時が来るまでは ふと振り返った大河内は、木陰に佇む一人の女性の姿に気付いた。長い黄褐色の髪を結い上げ、萌黄色のショールで細い肩を包み、手には緑のリボン付の白い帽子の鍰つばを持っている。彼女のことは知っていた。真央の従姉で、フランス人ピアニストのアニエス・ゾラだ。しばらくソロでの活動を休止していたが、最近また公演を始めたらしい。ようやく悲惨な事故 婚約者の交通事故 から立ち直り、可愛い従弟の傍にいて、少しずつ幸せを取り戻しつつあるところだろう。アニエスは大河内と目を合つと、美貌に更なる華を重ねて、小さく頭を下げた。大河内ははつとした。アニエスの琥珀色の瞳が、自分と全く同じ色帯びていることを見抜いたのだった。

「あの……！」

去り行こうとするその女性を、大河内は呼び止めようとした。だが、言葉が見つからない。大体どんな用件があつて彼女を呼び止めるというのだ。未亡人は行ってしまった。小鳥のような頭に帽子を被せて。

「じゃあ、また公演が決まったのね」

「ええ。12日なの。えつと、ら、来月の……」

アニエスの懸命な日本語に温かな笑みを見せたのは、養護教諭の里見先生であつた。彼女の無言の応援を受けて、アニエスもシヨールを下ろしながら照れ笑いを浮かべる。二人は今、校長がわざわざ淹れて持つて来てくれたコーヒのカップを片手に、応接間に向かい合つて座つていた。会話の切れ目に交わす微笑みを見る限り、どうも今日知り合つた仲でもなさそうだ。里見先生はカップにミルクを足し、校長はやはり暇なのだろうな、と密かに確信しながら、言葉をついだ。

「それで、最近の調子はどう？」

「とつても元気。サオリのおかげよ。サオリ、励ましてくれたから。この帽子も。素敵なプレゼントね」

「プレゼントつて、ただ一緒にお店に行つて選んだだけじゃないの」「いいえ。プレゼントよ、立派な……だって、サオリの気持ち、こもってるもの。私、嬉しくて」

アニエスは帽子にそつと触れてから、シヨールを丁寧に膝の上で畳み、皺が寄らないように両手でぴんと張つた。里見先生は彼女の短く切つた爪に目を落し、そこに何の彩りもないことを見つけた。ピアニストなんだから、指先ぐらい気を使つていてもよさそうなのに。里見先生はすぐに指摘した。

「ねえ、マニキュア塗らないの？」

「えっ？」

アニエスはきよとんとして顔を上げた。

「だから、ほら、マニキュア。きれいな指なんだから色が無いんじやもつたいないでしょ。ジャクソン先生に聞いてみるといいかも。服とかネイルとか色々詳しいみたいだし。この間も鳥居先生が大変身してたわね。あっ、大変身とか言うのと失礼ね……」

この二人にすでに引き合わされているアニエスは、里見先生の付け足しの意味も何となく察して笑った。里見先生は「言わないでね」と人差し指を唇の前にかかげた。

「まあ、よかった。貴女が元気そうで。また落ち込んでたらどうしようかと思ってたの。秋元君ともあれ以来上手くやってるみたいだしね」

アニエスはそつと顎を傾けて表情に影を落した。真央に初めて罪を糾弾された晩夏の夜のことは、今でも夢となつて、指先凍える冬の夜にさみしく擦り寄ってくる。まるで飼い主を忘れられない猫のように。真央は無邪気で素直な子だ。だからいつまでも甘つたるい嘘にひたつていることに耐えられなかったのだろう。自分とは正反対の道を行く可愛い従弟。彼が虚偽の世界を飛び立とうとしているのとは反対に、自分は羽の傷を理由にいつまでもそこに留まるうとしている。そして、自分はいつまでも彼の尾をくちばしで引いたまま。「アニエス？」

それも決して真央に執着があるからではない。自分はやはり真央にあの子を重ねて

「アニエス、大丈夫？もしかして……」

「違うのよ。違うの。でも、私、忘れられなくて、まだ、マオのこと……私、まだマオの傍にいたいと思ってるの。マオから離れたくないの。マオが遠くにいくのがとつても嫌。ねえ、こういう時、マオのことを『忘れる』っていうの？」

「そうね、『振り切る』っていった方がいいかもしれないわね」

「振り切る……できないのね、私、『振り切る』が」

アニエスは悲しげに首を振って呟いた。畳んだシヨールの上で絡めた指は、羽を寄せ合って慰めあう二羽の白い小鳥の如く。里見先生

はカップから離れた桃色の唇をわずかに開いたまま、ア二エスの揺れる琥珀を見つめていた。この悲しみの中にあつても美しい輝きだと思つた。この女性以外には決して釣り合わない光だ。彼女以外の他の誰が持つていても、その持ち主は琥珀を深い闇に埋めてしまふ。彼女だけが、悲哀と自責の水底でも瞳を輝かせられる。それを知つていたから、里見先生は決して彼女を哀れもつしなかつた。

「そんなに焦る必要ないじゃない」

里見先生は彼女の絡めた手をとつて自分の両手におさめて言った。

「いくら心配しても現状は変わらない。もつと気持ち前向きに持ちなさい。その方が救われる。忘れたの？ 貴女の婚約者の言葉でしょ？ 大丈夫よ。絶対に。秋元君は貴女の傍から離れていくでしょう。それは彼の成長には欠かせないことだから。でもね、秋元君が貴女を忘れることはないし、秋元君がいなくなつても、私がいつでも貴女の傍にいるわ」

窓から吹き込んだ風が、帽子をさらい、繫いだ二人の手を覆う。ア二エスははつとしたように顔を上げた。白い帽子の内側で二人の手は一層強く結びついた。

ランの寿命がまた一つ尽きて、花瓶から惨めに零れ落ちる。ネクタイの結び目も同時に解けた。

ボタンを外す指に熱がこもるのは、心から崇める主の双眸を集めているから。胸は露になつた場所から冷気に触れて微かに震え、羞恥に頬は赤らむ。裸の半身の前を覆い隠すように交差する手がベルトの金具にかかったところで、彼は主人を直視できないまま、脱ぎ捨てたワイシャツを拾い上げて小さく尋ねた。

「ねえ、白蘭様、ほんとに……ほんとにこんなことしなきゃ駄目？」

「今更何を？」

「だって……こんなに見られるの初めてだし……なんだか恥ずかしくって……」

白蘭はグラスに水差しで氷の浮かぶ冷水を注ぎ、喉を鳴らして飲み干すと、目を閉じて深く息をついた。無言の命令に促され、芳乃は熱い指先を以つてベルトを外し、それから枕元の水差しの元へと歩み寄ると、空のグラスに氷ごと水を注いだ。白蘭はまた水を飲み、口の中に余つた氷を噛み砕いた。ベッドに寝そべる彼の隣に滑り込んだ芳乃は、敬愛のキスを以てその破片を受け入れる。

「ねえ、白蘭様……」

「何だ？」

芳乃は白蘭のシャツの中にそつと手を滑り込ませてささやいた。

「もし、ぼくが貴方を置いて勝手にどこかへ行つてしまつたら、あなたは どうする？」

「おまえが？」

「有り得ないつて言うんでしょ。そうさ、有り得ないことさ。でも、もし、あなたがまだ必要としている人が勝手にいなくなつてしまつたら、あなたは絶対に許さないよね？何が何でも引き止めるでしょう？例え相手が死んでしまつたとしても」

白蘭は薄く目を開けた。例え相手が死んでしまつたとしても、か。その響きがなぜか皮肉っぽく聞こえるのは、自分が事実の要を見落としてゐるからなのだろうか。だが、仮にそうだとしても　白蘭はふと口元を緩めると、掴んだ手を強く引き、従順なる崇拜者を体の下に組み敷いた。芳乃の黄土色の髪が、撃たれた小鳥の羽毛のようにふわりとシートに広がつた。一度鳥かごに閉じ込めた小鳥、悲しくさえざる淡い瑠璃色の小鳥、どうして鉄はこみを入れたその翼を、再び空に帰そうか。

「……そうかもな」

そして始まる身の寄せ合い。花瓶を落ちたランの花びらは、白い羽根に変わつていた。

音楽室に響くのはテレマンの「ヴィオラコンチェルト」ト長調、

第二楽章のヴィオラのソロパート。その軽快なメロディとは裏腹に、奏でる人の表情は沈鬱である。水無月は忙しなく動く弓を見つめながら、昨日の光景に思いを馳せていた。偶然　否、本当に偶然だったかは分からない。何となく胸騒ぎがして向かった教室で、クラスメートに誘惑を仕掛ける弟を見た。止めなくてはならなかったのだらう。弟がこれ以上曲がった道へ進むのを止めるために。だが、彼の独り言にも似た呟きが、水無月の足をためらわせた。許さないといいあの一言。弟は忘れていない。兄が犯してしまった過ちを。自分の心が弱いゆえに、彼まで巻き込んで傷つけてしまった。彼の蛮行の原因は全て自分にある。彼の、白蘭の行為は、不甲斐ない兄への復讐なのだから。そんな彼の行為を、自分が止めたところで……

水無月は、もう一つの旋律が自分のそれに重なって聞こえることに気が付いた。目を上げて見て見れば、グランドピアノに軽く寄りかかりながら、同じ曲のバイオリンパートを弾く荔枝の姿がある。音楽室には二人の他に誰もいない。バイオリンとヴィオラの二重奏が終わると、荔枝は飴色の楽器を携えて水無月の方へ歩み寄ってきた。

「見事なものだ。休部中もよく練習したようだな」

「はい。僕にはヴィオラしかありませんから。それと、読書ぐらいで……」

荔枝は水無月の竜胆色の髪をそつと指で梳った。水無月の胸がとくと高鳴る。

「あつ、部長……」

「君さえいれば、今度の文化祭も安心していられるな。君がこの部活にいてくれてよかったよ」

「あ、ありがとうございます……」

「私は君の音楽が好きだよ。瑞々しくて素直で透き通っている。演奏者と同じだね」

「光荣、です……ですけど……あつ、その……部長っ！」

「何か？」

顎の下に宛がった手もそのままに、涼しげに尋ねる荔枝。切れ長の瞳に見つめ返されて、水無月は頬が火照るのを感じ、また、その温度が相手に伝わっていることにも気付いて目を背けた。

「部長つて……意外と悪い人なんですね」

「おや、一体何のことかな」

その時、音楽室の扉が開き、二人の注意はそちらの騒がしさの方へと移った。まずクリスが顔をのぞかせ、その次にアニエスが微笑みを見せた。クリスは室内の二人の姿勢に一瞬固まったが、アニエスはただくすりと笑っただけだった。

「天才少年画家君と天才若手ピアニストか。予想もしなかった組み合わせだな。お久しぶりですね、ゾラさん」

荔枝の丁寧な英語で礼儀正しく述べると、アニエスはクリスの脇をすりりと通り抜けて部屋に入り、いたずらっぽく手を振った。

「ええ、久しぶりね、レーシ君。貴方だったら、浮気現場を見られてもまるで平然としているのね。恋人さんが怒ってしまっわよ」

「お戯れを。浮気現場だなんて、人聞きの……」

途中まで言いかけて、荔枝はさっと口を噤んだ。聞き慣れたリズムが扉の向こうにある。クリスが戸を全開にしてやると、荔枝にもようやく現実が見えてきたらしく、無言で立ち去る陽の背中を見て呆れたようにため息をついた。

「全く……」

「いいわ。私、貴方に用があつただけど、先にアキラ君の機嫌を直してらっしゃい。私はこの可愛いヴィオリストさんとお話してるから。クリス君もこの子に用があつたみたいだし」

「お心遣いに感謝します」

荔枝が去ると、クリスはようやく扉の開放という仕事から解放され、ヴィオラを膝に乗せて気まずそうに佇む水無月の隣に座った。クリスはすぐさま水無月の楽器に興味津々になった。

「へえ、水無月君も弦楽部だったんだね」

水無月はやっとな微笑んだ。

「うん、しばらく休部していたんだけど。ヴィオラは六歳から習っていたから、何とかね。それで、僕に何か用？」

「あつ、うん、部活って知らなかったら、また一緒に図書館に行くのかなって思ってたんだけど。今日は有瀬が花木先生に捕まっちゃってさ。また長い演説を聴かされてるみたいだから……」

「それでも楽しそうなのが、彼のすごいところだね」

談笑する二人を傍らに、アニエスはピアノに向かっていた。真央がかつて彼女のことを恋いながら弾いたピアノだが、もちろん、彼女はそれを知るはずもなく。アニエスは和音を奏でてうれしい驚きに顔を包み、それからゆっくりと演奏を始めた。「トロイメライ」に始まって、しばらくは優美で穏やかな曲が続き、バッハの「月光」で少し悲しげな調子を帯び、それからシヨパンの「革命」、「幻想即興曲」でいつきに追い上げた。最後に、やや休めた指で彼女がゆっくりと作り出したのは、「葬送」のメロディであった。水無月のヴィオラのネックを握る手が震えた。

突如、彼の手から弓が零れ落ち、水無月は勢いよく立ち上がった。ピアノの演奏はびたりと止まった。

「水無月君？」

「……ごめんなさい。でも、急がないと、図書館が閉館してしまうから……」

水無月の言葉を受けて、クリスとアニエスは壁の時計を見上げた。

「あつ、ほんとだ。よかつたら、アニエスさんもどうですか？」

「あら、何のお誘いかしら？」

「旧図書館です。最近開放したんですよ。すごくたくさん本があるんです」

たくさんの本、ね。あの人だったら喜んで飛んでいったでしょうに。アニエスは再度ピアノに向き直り、名残惜しそうにラの鍵盤に指を預けた後、その響きを味わいながら、目を閉じてゆっくりと返事をした。

「ええ、ぜひ見てみたいわ」

第十三話 キャラバンの見た夢・後編

旧図書館というのは、人の出入りがクリスたちの他には少ない割に、意外な知り合いにはよく会う場所だ。この日もクリスは入館するなり来夏の姿を見つけた。見慣れぬ弓道着姿で、クリスでさえ目を回しそうな分厚い洋書を何冊も広げ、なにやらレポートらしきものを書き上げている様子だ。一穂が時折本の山に新たな一冊を積み重ねていく。一穂が先に利用客に微笑みかけ、来夏はその後に顔を上げて手を振った。

「よっ、石崎、篠……あつ、アニエスさんも一緒だったか」

「いいのよ、気にしなくて。私もお友達みたいなものでしょ？」
アニエスは陽気に言った。

「今日は一人で勉強？マオと一緒にじゃないのね」

来夏はさつと顔を赤く染め、何か言おうと口を動かしながら、結局諦めて困ったように頭に手を充てた。一穂がくすくすと声を出して笑う。

「いや、今日はお互い部活ですし。真央君もほら、大会が近……っていうか、別に毎日一緒に行動してっるって訳でも……」

「あら、そうなの？あの子があまりにもあなたの話ばかりするから、ついてつきり。あの子ったら、寝ても覚めても来夏先輩来夏先輩って」

「あいつ……！」

一瞬固く絞られた来夏の拳も、アニエスの微笑みによって力を失ってしまふ。来夏は彼女と同じ真央の保護者の立場になって、同様の笑みを浮かべようとしたが、途端に彼女は突き放すように微笑を隠した。驚いたのは、来夏だけでなく、クリスも一緒であった。その行為の釈明もせずに、アニエスは急に一穂に話しかけ始めた。戸惑いの内にクリスと来夏の青と緑の光線の下、水無月だけが無関心ですでに本を広げて腰掛けている。アニエスは、まだ途切れがちの日

本語で一穂に何やら頼んだようだった。一穂は了解したように一度頷いた。

「ええ、その本なら司書室にありましたよ。よかつたら一緒にお茶でもいかがですか？」

アニエスは屈託のない笑顔で嬉しそうな返事をした。若い女性二人は、互いの国籍も問わずに女という性別だけで早くも打ち解けて、楽しげに語らいながら共に去っていった。来夏は腑に落ちないように眉の根を寄せて、その背中を見送った。

「ところで、弓道部はどうしたの？」

クリスが来夏より一足速く困惑から脱却して尋ねた。来夏はクリスマスに向き直った。

「ああ、今日は花木先生が指導してくれる日なんだけど、さっき先生のところに行ったら『今日は大切な会議があるから一時間遅く始めろ』って言われてな。ここで時間を潰してたって訳だ」

「……その会議って、会議じゃないこと知ってる？」

「まあ、な……」

来夏はふと腕時計を見て、クリスが持っている最も薄い本一冊文ぐらい厚みのある表紙を、片手でぱたんと閉じた。こんなに本を積み上げておきながら、もう行かなくてはならない時間らしい。本の山の頂きを削り、四冊ほどまとめて抱え込もうとする来夏を、クリスは急いで制した。

「いいよ。俺が片付けておくから。すぐに部活が始まるんだろ？こんな大量に片付けてたら、時間がなくなっちゃうよ」

来夏は一瞬迷ったが、再度時計を見て現実的な見方に切り替えると、困ったように笑って本をおろした。

「悪いな、石崎。今度何かおごるから」

「それほどの仕事じゃないってば」

図書館を出て行く友人の背中に、クリスは明るく呼びかけた。戸が開かれると、白い壁の中に緑の長方形が浮かび上がり、その中に手がさつと振られてまた消えた。扉は再び閉じられた。

クリスは置き去りにされた本を出来る限り重ねて持ち上げ、背表紙に張られたシールで、しまうべき場所を確かめた。水無月はそんなクリスにちらりと一瞥を投げかけたが、手伝う様子もなく、ただ無表情に本を眺め続けた。クリスもシールの色の識別に精一杯で、彼の視線にはまるで気が付かなかった。やがて、水無月は静かに口を開いた。

「君はやっぱりそういう人だったんだね」

「えっ？」

クリスは本から目を上げて言った。その際に、五冊分の本の帰路を示す地図が、クリスの頭の中から吹っ飛んでいった。

「君の絵を初めて見た時にね、何か光り輝いてやまないものを感じたんだ。人を惹きつけて、魅了する力。何度も見て確かめたくなるような輝き。そういうものが、君の絵いっぱい溢れている。だから人は皆君の絵を見たがるんだよ。もちろん、僕もね。僕は君の絵を見て、きっとこの絵の作者も明るい光のような人に違いないと思った。その通りだった。君は光そのものだ。人を輝きで包み込む、そういう人だ」

水無月は本を開いたまま裏返し、体をずらしてクリスを正面から見つめなおした。彼の表情は真面目そのもので、評価の対象となつた少年をからかっているようなところは微塵も見られなかった。薄水色の瞳は、つい今なされた多弁には釣り合わないほど冷静で、小石を知らぬ澄んだ池の水面のようである。故にクリスは困惑した。クリスは頭をかきながら、真っ直ぐ向けられる視線を、むず痒そうに払った。

「えっと……褒められてるの、かな？」

「必ずしも褒めてもないさ。眩しすぎる光は人の目を殺めるだけだから」

「前にもそんなこと言われたかもしれない。確か、橋爪先生に」

「なら、やっぱりそれは真実なのさ」

「えっ？」

水無月は紙面に関心を引き戻し、瞼にかかった前髪を手でのけて、後は何も言わなかった。クリスは振り切れない思いを胸に、仕方なく本の片付けを再開した。

「あら、かわいい鶏さん」

「ありがとうございます。オーガスタって言うんですの」

アニエスが屈みこんで手を伸べると、鶏は真っ白い尾を左右に振りながら近づいてきて、それから訝しげに首をかしげた。アニエスは子供のような笑顔をたてて、艶かしい未亡人らしくなく、いかにも無邪気に振舞った。

「それにしても、英語が通じると助かるわ。私、日本語はどうしても上手くできなくて。今、何とか特訓中だけど、知らない人と話すとなると恥ずかしいわ。この学園の方は皆英語が上手ね。生徒の中にも話せる子がとても多いし」

「教養の高い子供ばかりが集まっていますもの。この学園の生徒は皆、名家の大切なご子息ばかりね。先生方についても、伯父が何かと口うるさく言ってますから。まっ、精鋭ばかりってところですね。私はアメリカ留学のおかげですけど」

「あら、いつ？」

来客用の椅子を勧められ、腰を下ろしながらアニエスが訊く。

「実は昨年行って、つい最近帰ってきたばかりなんです。それで、そう、これですわ、貴女がお探しの本」

一穂は映写機の影に探し物を見つけ出すと、両手を添えてアニエスに手渡した。表紙に触れる指先さえ震えていなかったものの、アニエスの瞳は感動に小さく揺れていた。世間は興味を持たなかった。

貧しい中年の作家が書いた本などに。また、そこに書かれた物語同様の見せ場もからくりもない、彼の事故死などに。彼の死は、彼の出来事ではなく、美しい若手ピアニストの出来事として語られた

ピアニスト、アニエス・ゾラに訪れた悲劇。婚約者が交通事故

で死亡　そんな売れない作家の処女作は、とうの昔に印刷を止められ、アニエスもまさか本気で図書館にあるとは思っていなかった。こんな遠く海を隔てた日本で？国内の古本屋にもないあの男性の本が？それでも冗談交じりに聞いてみればあると頷かれた。そして、ついに今この手に。ページをゆつくりと繰りながら、アニエスは胸の昂ぶりを押さえていた。目頭の熱い理由も、上手く機能してくれない脳の中で必死に縫い足していく。きっと鶏のアレルギーなんだから。おかしいわね、私、カナリアは大丈夫なのに……

「お好きな本なんですか？」

一穂が訊く。

「ええ、とても……とても退屈な本だけど」

「どんな話なんです？」

鶏を膝上に抱きながら、一穂は更に追い込んで尋ねた。アニエスは鶏の代わりに本で膝を覆った。

「話ってほどのものもないわ。あらずしも簡単なの。ただの家族の物語よ。夫婦と子供の三人家族の日常がつづられてるの。正直退屈なのよね。だって、主人公の家族が有り得ないほど幸せで平和な生活を送ってるんだもの。でも、それは多作者の遠い夢なんでしょう。誰もが普段描いている理想を書き留めたのよ。そう、誰もが持っている理想だったから、作品としてはちつとも成功しなかったのね……」

アニエスは堪えきらなかったように口先を走らせた。ふと口を閉ざし、疲れた舌を休ませたのは、聞き手の温和な瞳に気付いたからだ。頬を染めてうつむいた先に、淹れたての紅茶が差し出される。澄んだ琥珀色の香りよい液体は、傾けるなり白い陶器のカップの縁までせり上がり、薄く化粧した唇を濡らした。一穂も自分のティーカップで同様の行為をした。鶏はクツクと鳴いて、一穂の膝から飛び降りた。

「いいじゃないですか、理想でも。執着しない限りは、理想って素敵なものだと思いますわ」

次の一穂の言葉は日本語だった。聞きなれぬ言葉にアニエスは首をかしげる。

「しゅう、ちやく……？」

「ええ、そう、執着。あるものに囚われてそして永久にそこから出られないままの状態……それって、とても悲しいことよね」

アニエスはふと本の表紙に重ねた青白い手を見下ろした。微かに震えている。シルバーのリングをはめたままの薬指が一層激しく。違う、自分はそこから抜け出そうとしているのではないか。執着なんてしていいない。自分は彼の死も真っ直ぐ見つめることができる。泣くのも悲しさ故ではない。

「そう、一度執着してしまうと絶対に解放してもらえない。自分では心を解き放ったつもりでも、本当は他のものを代用しているだけのことが多いのよ。そして、絡みつく蔦はますますきつくなる。そういうものでなくて？」

紅茶の熱は、液体が行き着いた先の更に深くまで潜り込んでいた。その場所で、喪失したもの、諦めたものが、この場において未練がましく脈打っている。ふと従弟の顔が浮かんだ。「マオ……？」思わずささやいてみる。幻想の従弟は悲しく首を振るだけだった。ああ、そうだ。違う。まだ体内に燃え残っているこの小さな火は、真央ではない。失った時に彼に移し変えただけ。火を置くランプがどこにもなくて、真っ先に真央を代用した。自分に残された、たった一つの愛しいものを。そして、自分は最愛のものですら、それと認められなくなった。私はマオを、「あの子」の代わりとしてしか愛せなくなっただけだわ

椅子の背もたれにかけた帽子が落ちる。鶏が歩きながらその鏢を踏み潰す。涙で濡れた横顔を、解けた長い髪が覆った。告発者の瞳の中で、彼女がすすり泣きながら呟いたのは、以下の意味を持つフランス語であった。

「違うのよ、マオ……違うのよ……！」

何となく不安に駆られた。大河内からタオルを受け取った瞬間だった。

それは、間もなく展開された、鳩に襲われる室井という光景のせいではないはずだった。真央はタオルを籠に放り込めないまま、思わず両手で握り締め、はっとしたように周囲を見渡した。広々とした校庭のはるか向こうに、グラウンドを共有中の野球部が、連なつて走っている姿が見える。校舎の窓を絶えず人影が横切っている。耳元で風がやんだ。小鳥が飛び立つための、微かな風が。

「秋元、どうした？」

「先輩、あの……」

真央が大きな翡翠の目で大河内の顔を捉えたその時だった。瞳の端に、弱つたように歩み来る従姉の姿が見えたのは。真央は怯えたように彼女を振り仰いだ。アニエスは形の崩れた帽子を胸で圧迫しながら、苦しげに細めた目で真央を見つめている。瞬く度にはらはらと舞い落ちるのは涙なのか。

「アニエス姉さん……っ！」

「ゾラさん！」

力が抜けたようにその場に倒れこんだアニエスに、先に駆けつけたのは大河内だった。真央は呆然として立ちすくみ、何が起きたのかさっぱり理解できないでいた。その間に、サッカー部員たちが騒ぎ始め、真央を取り巻く音と人は幾重にも重なっていく。

「おい、どうしたんだよ？」

「このひと、秋元の従姉だろ？貧血か何か？」

「知るか！とにかく保健室まで運ぶぞ！岡田、手伝え！室井は先に行つて里見先生に知らせろ！」

「分かった！」

大河内が珍しく声を荒げて指示を出している。明音につつかれ、ようやく我に返つた真央は、彼に手をとられ、気を失つた従姉の後を追いつつ追いついたのであった。潤む目にも、明音は何も言わないでいてくれた。

手を優しく包んでくれる温もりがあった。そして胸の中にも全く同じものがあった。久しぶりに会ったあの人は微笑んで、私の肩を抱き、手を握ってくれていた。そして、ついに見なかつた私たちの子供は、私の腕の中で楽しげに笑っていた。ここは夢の国。偽りの国。でも、ここならば理想が叶えられる。一生こんな甘い嘘に浸っていられるなら、私は……

「……姉さん！」

それでも呼ぶ声がある。優しい夢を揺るがすほど大きく。悲痛で、いたましくて、愛おしくて。

「姉さん！アニエス姉さん！」

「秋元君、落ち着いて。大丈夫よ。見たところ特に異常はなかったから、すぐに目を覚ますはずよ」

「でも……！」

「バカ、少しは周りのことも考えろ！アニエスさんは無事だから。おまえは静かに見守ってる。俺も付いてやるから、な？」

「来夏先輩……」

駄目だわ。こんな甘い海に浸っている訳にはいかない。全て蹴り飛ばさなくてはならない。今度こそ、本当に、執着から解き放たれるために。私は目の前の絵を掻き消した。

「マオ……」

「姉さん……！」

血管の浮かんだ蒼白な臉は閉じたまま、それでも薄紅色の唇が呟くと、真央は飛び上がらんばかりの狂喜に駆られ、来夏の肩に泣き声と共に縋りついた。普段は拒む来夏も、今回ばかりは強く優しく抱きとめてやる。二人が真剣に見守る前で、アニエスはついに瞳を現した。まだ虚ろだが、そこには確かに光があった。

「マ、オ……？」

「アニエス姉さん……！心配したんだから！本当にっ！」

アニエスの視線に当てられると、真央は再び声を上げて泣き始めた。心配したんだから、か。アニエスは可愛い従弟の栗色の髪を撫でながら、ふつと口元を緩めた。自分は今もう心配されるようになってしまった。真央は成長したのだ。自分の手助けなんて必要ない。こうして改めて悟ったとき、不思議にも痛みはなかった。ゆっくりと胸に滲んできたのは小さな喜びだった。

「アニエスさん、大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとう、来夏君」

微笑みながら、アニエスは優しく来夏を見返した。今度真央を守るのはこの少年の仕事だ。今もこうして真央の不安を抱きとめてくれている。彼になら、真央を任せられる。真っ白いカーテンをめくり、今度は里見先生が嬉しさを理性と職務とで押しとどめているような表情をのぞかせた。

「アニエス、具合はどう？」

「何もないわ。本当に大丈夫よ。寝るの、遅かったの、昨日。いつもより……」

「そう。ちゃんと睡眠はとらなきゃ駄目よ？もう、私もびっくりしちゃったわ。まさか、サッカー部が総動員で運んできたのが貴女なんて。てつきり室井君かと思ったの。また鶏にやられたんじゃないかって。ちなみに、貴女を担いできてくれたのは大河内君よ。お礼忘れないでね」「ええ、分かったわ」

里見先生はそこで顔を引つ込めた。アニエスは手の温もりに知った。現実の世界でも、自分の手を温めていてくれた人の存在に。真央ではない。目が覚めた時、手はまだそこにあっただが、真央は両手を来夏の肩に置いていた。来夏でもないし、だとすれば考えられるのはただ一人だけだった。大切な、大切な、親友だけ。

秋元君がいなくなっても、私がいつでも貴女の傍にいるわ

そうだわ。私にはもう何の代用でもなく、かけがえのないものが

あつたじゃないの……

「マオ、私、来夏君と話あるの。まだ部活あるでしょ？お仕事行つてきなさい」

来夏がアニエスに語られたのは、彼女の過去であつた。真央にも語つたことのない真実がそこにあつた。婚約者の突然の死の後のことだ。悲しみのあまり、当時妊娠していた子を流産した。婚約者以外には、まだ誰にも知らせていなかった。そのことで、何とか無駄に傷口を広げずにはいられたが、故人との最初で最後の子供を失つた悲しみは深かつた。その悲しみを、自分は何とか埋めようとした。真央を失つた子供の代わりに愛することで。それが自分の何よりの罪、執着、真央に対する冒涇だつた。

今、真央は自分の手を離れようとしている。彼を自分の子供としてみていた頃は、彼を手放すことは到底出来なかつただろう。だが、自分は真央を真央として愛することが再びできるようになつた。今度は貴方に守つてほしい。私の大切な従弟を。貴方になら、絶対に任せられるから。

「弱つたな。俺に守つてほしいって言われても……」

来夏の困惑は、アニエスの微笑の前には無意味だつた。しかし、何もかもが完璧で満ち足りているような、そんな気がしたのは、来夏も否めなかつたはずだ。

ただ、それを部屋の外で聞いていた人のことを、彼らは知らない。大河内は廊下に背を重ねていたが、アニエスの笑声を聞くと、肩をすくめてその場を離れた。やはり選ばれたのは彼だつた。元々通じるはずのない想いだつたのだ。後はじつと待つしかない。この恋が消えるまでの時間を耐え忍ぶしかない。緩まぬ足取りが向かつた先は教室だつた。大河内は顔を上げて足を止めた。彼の机の上に花瓶が置かれ、白いランの花が一輪咲き誇っている。その花を手にとり、花弁に舌を這わすのは、薄い青色の髪の少年だつた。白蘭は大河内

を見て唇を歪めた。

「篠木か？」

「俺の名前を知ってるとは……よかった、紹介する手間が省けて」「何の真似だ？いたずらにしては悪趣味な気がするが……」

大河内は十分に警戒しながら言った。白蘭の噂は知っている。学園の闇を統括する不良。金の代わりにランの花を要求するという、麗しき男娼の話。白蘭は笑ってランの花を花瓶に挿した。

「いたずらなんかじゃない。この花は言わば招待状だ。深い闇の世界、憎悪、嫉妬、強すぎて歪んだ愛、そういうものが支配する世界への」

「……何を言ってるのかよく分からない。お引取り願おう」「何してやがる？」

第三者の声に、白蘭はひらりと振り返った。教室の入り口から、落合がじつと敵意に満ちた視線をこちらに投げかけていた。そうか、こいつは本気で自分が憎らしくて仕方ないのだ。白蘭は焰のような目にそう読んだ瞬間、大河内を離れて教室の真ん中に立った。残酷な楽しみに満ちた笑みが、返礼として落合にむけられる。落合の表情を動かしたのは、白蘭の腕に寄り添った芳乃の姿だった。

「芳乃……！」

「何してるの、白蘭様？こんなところでつまらないよ。早く帰ろうよ。ねえ、ぼくなら貴方を退屈させないからさ」

芳乃は真っ直ぐ白蘭だけを見つめ、つま先で立って頬に一つキスをした。落合や大河内にはまるで目もくれない。彼の世界には白蘭しかいなかった。白蘭が芳乃の髪をそつと手で梳くと、芳乃は恍惚として目を閉じた。白蘭は呟く。

「それもそうだな。せつかくの楽しみも潰された。今日は早々と帰ることにする。残念だよ、大河内孝則。お前が俺の世界を受け入れてくれる時間がなくて」

「おい、お前ら、待て！」

落合の呼び止める声も教室に響いただけ、二人は他の何にまるで

構うことなく、廊下の奥の闇に消えていった。落合は膝を落し、壁に拳を打ちつけた。悔しさと怒りとで、言葉も浮かばなかった。どうすればあの罪は消えるのか。芳乃を欺いてしまった、あの罪は「大丈夫か？」

落合の傍にしゃがみこみ、肩に取ったのは大河内だった。落合は絶望の元に、彼の真摯な黒い瞳を見上げた。それは、寡黙だが心温かな彼の心を示す、素朴で純粋な器であった。

「悪い、大河内……こつちのごたごたに巻き込まってしまった」

「構わない。お前のおかげで助かった。だから帳消しだ」

「大河内……悪い」

「だからもう謝るな。早く校舎を出た方がいい。もうすぐ鐘がなるから」

「ああ……」

大河内と並んで出た校門の前、ふと振り返ると、聳え立つ校舎とその奥の塔の上には、すでに星屑が投げられていた。いつになったら皆救われるのか。所詮小さな手を友に慰められながら、落合はぼんやりとそんなことを思っていた。

「クリス様、見てください！流れ星です！」

「えっ、どこ？」

「ほら、あそこですよ！」

白のアトリエのベランダにて。寝巻き姿のクリスとノアは、柵に寄りかかって身に乗り出し、数多の星々の間に必死に目をこらしながら、何か叫んではびよんぴよんとはしゃぎ回っていた。ノアに比べ、なかなか流れ星を見つけられぬクリスであったが、ようやく一つ目で捕らえ、ノアにならって飛び上がってみせた。

「流れ星といえば、願い事ですよ、クリス様。何をお願いするんですか？」

ノアの突然の問いに、クリスは興奮を鎮めて首を傾げ、真面目に考

え始める。

「えっ、なんだろう……やっぱり、早く絵が見つかるように、かな？」

「じゃあ、僕も、クリスマス様が早く絵を見つかりますように」

「駄目だよ。有瀬は有瀬の願い事を言わないと」

「そうですか？じゃあ、僕は、今夜もいい夢が見られますようにって」

「なんだよ、それ？」

「きつと誰もが願っていることだと思えますよ」

そう、誰もが願っていた。星を数えながら。アニメスは新たな夢の継続を、大河内は夢の終わりを、真央は楽しい夢の継続を。そして、その夜、満天の星空の下、来夏は燃え落ちた星の一片から、熱く光り輝く欠片かけらを胸に受け取ったのであった。

「まさか、あいつに……？」

第十四話 ガラス越しの記憶・前編（前書き）

第十四話新登場人物

千住薫

臨時の化学講師で慎の兄。

学園の出身であり、在学中は他の追隨を許さない天才少年だった。

第十四話 ガラス越しの記憶・前編

「すみません。黙示録を探しているんですが」

馴染みのない手に差し出された白い花は、目で捉えるまでに少し時間がかかった。その隙に額に落とされた唇の熱を、白蘭は手の甲ですつと確かめる。疲れた体では身じろぎするのすら億劫だ。それでも眠気を瞼から払い、重い上半身を起こすと、初めてのその客が、広い肩にシャツを着せるのが見えた。男は少し振り返って横顔で笑った。

「君はもう少し寝ていたらどう？まだ空は暗いよ」

男につられ、白蘭も窓の外を仰ぐ。知らない部屋の窓はやけに小さく、白い壁からそこだけ四角く切り取ったように見えた。その枠の向こうは、男の指摘する通りに暗い。白蘭は微かに目を細めた。

「いいよ。僕のベッドは今日の夜までは空いてるからさ」

「いや、用が済んだら帰る……長居は好まない性質たぶなんで」

「律儀だね。待っている人でもいるのかい？」

「さあ……」

白蘭は曖昧に首を傾げると、冷たい床に素足の裏を浸した。とにかく早く部屋に戻りたかった。自分のベッドに身を投げ出したかった。兄に朝帰りを知らせるのだけは忘れずに 自分は相変わらず復讐の中に生きている。例えほんの少し苦しかりうが、兄に痛みを与えないためなら何も厭うことはない。そうだ、こんなにも寒い暗闇を分け入ってまで帰ろうとするのも、そのためなのかもしれない。水無月を傷つけて、傷つけて、傷つけて……そして、最後には？

ふいに歪んだ視界と、鼻の上に課せられた不自然な重みに、白蘭は戸惑って立ち止まった。男の手が立ち上がったこの身を浚い、ベッドの上に押し付ける。優しさを偽った強い力で。喉の奥は少し熱

息を吐き出したのみで、両腕を使って抗う気力もわかなかった。まるで生気を全て吸い取ってしまったようだ。その時、白蘭はようやく視界がぼやける原因に気付いた。男がくつくつと笑顔をたてるのが聞こえる。

「無理はいけないよ、白蘭君」

「……余計なお世話だ」

「だって放っておく訳にいかないだろ？君も僕の大切な生徒の一人なんだから」

男は白蘭から取り返した眼鏡を、鋭く光る青い瞳の上に被せた。

起き抜けのコーヒーの黒い水面にすら、あの笑顔が揺れる。自分はきつとどうかしてしまったのだ。来夏はベッドに腰をおろすと、コーヒーカップを安全な位置に収めて溜息をつき、手の甲を額にあてたまま後ろに倒れこんだ。昨夜からだ。時折通り過ぎる星を眺めながら、アニエスに言われたことを思い返していた。貴方になら真央を任せられる。貴方に真央を守ってほしい。一体どうしてか。美しいフランス人の口からこのような言葉が出てきたのか、来夏には皆自分からなかった。確かに真央は自分を慕っているし、仲良くもしているけれども、それはどこにでもあるような先輩後輩の關係であって、とても、アニエスと真央、強く結ばれた従姉弟の絆に太刀打ちできるはずなのに。だが、そこまで考えた時、星がまた一つ落ち、来夏ははつとしたのであった。たつた今知った想いがそこにあった。真央を守りたい。共に過ごしてきた日々で、いつのまにか胸の中に育まれてきた感情だった。自分は素っ気ない言葉で抱きつく真央を引き剥がし、叱りながら、それでも泣きながら胸に縋ってくる彼のことは突き放せない。それは単なる優しさの問題ではなかった。抱きしめたい。傍にいたい。彼女は気付いていたのか？自分ですら知らなかったこの気持ちに？

疑問は昨夜から何度も来夏の脳の周りを駆け巡り、とうとう原型

を留めぬほどになった。運動の速度を緩めるのは、ただ時々浮かぶ真央の笑顔だけだった。来夏は額から落ちていく手を感じながら、まだ漠然とした世界の中にいた。一体どうすればいいのだろう。こんな場所から抜け出すためには。真央をこの腕の中に収めれば、本当に楽になれるのだろうか。確証はなかった。ただ、寝返りを打って振り見た先に、布団から突き出した両のつま先を寒そうに擦り合わせる落合の姿があった。

「まっ、苦しいのは俺だけじゃないんだもん……」

来夏はふと起き上がると、その冷たい足元にそっと自分のブランケットをかけてやった。あと十分後には、目覚まし時計が大騒ぎを始める時間帯であるにも関わらず。まだ湯気を立てるコーヒーを含み、窓の外を見遣れば、まだ眠そうな朝日は冷気につつつかれ、薄氷のような光を大地に投げかけていた。

無表情の野瀬先生が言わんとすることは分かっていた。分かっていたけれども、クリスは無言で差し出された紙切れを受け取ってから、しばらく笑おうか嘆こうか迷った。結局、「早く席にもどりなさい、石崎」の声に押され、どちらもせぬまま自席に戻り、脱力して机に突っ伏した。落合が笑いながら振り返った。

「どうしたエーリアル？また赤点か？」

「せっかく苦手な日本史ができたと思っただのに……次は化学だよ……」

落合は力ないクリスから勝手に小テストの解答用紙を引ったくり、苦いものでも嚙んだような冴えない顔をした。

「こいつは……ちょっと、な？」

「石崎、大丈夫？」

「……人に聞く余裕があるってことは、酒本は大丈夫だったんだね？」

「うん。僕、化学得意だし」

「おまえ、言つてやるなよ」

この場において、悪意のない菜月の自慢はかなり身に応えた。またテストを受けにいかねばならないという事実も、加わって気持ちを重くした。隣席で、来夏が出来る範囲でなら手伝つてやるよと苦笑する。ノアの名が呼ばれ、目を前方に遣ると、一瞬翻つた解答用紙が真っ赤に染まっているのが見えたが、ノアはまるで気にしていない様子だ。クリスと視線が合うと、にこりと微笑んで見せた。それでも気丈でいた野瀬先生だが、クラス全員にテストを配り終えると、先生はついに肩をすくめた。

「私は化学の担当ではないけど、見た感じ皆さんちよつと出来がよろしくない気がします。文化祭も近いし、気持ちが入り立つのも分かりますが、あなたたちはここ三宿学園の生徒なんだから、もっと自覚と誇りをもって勉強に励むように。それと、三十点以下の生徒は今日の放課後再テストだそうです。放課後化学室に行くように」

「よかった。三十点以下か……以下？あれっ？」

落合の最後の呟きを、クリスは決して聞き逃さなかった。

「で、俺たち再テスト受けに行かなきゃいけないから、今日は一緒に図書館に行けないや。ごめん」

クリスが手を合わせて謝罪すると、水無月は相変わらず人のよさそうに笑った。

「いいよ、そんなに気にしなくても。僕も今日は部活に顔を出そうかと思つていてね。それより再テスト頑張つて」

「はは、ありがとう」

水無月は「じゃあ」と言つて席を立ち、鞆を持ち上げ、宣言通りに音楽室の方へと立ち去つていった。その足取りは軽い。よほど部活が楽しみなのだろう。彼にとって音楽は、クリスにとっての絵画みたいなものであるから。特技に急ぐ彼と、苦手分野の試験を受けに行く自分を身とを照らし合わせ、クリスはやりきれなくなった。ノアだけが微笑んでその肩を叩いて慰める。

「ほら、クリス様、早くいかないと、テストが始まってしまいます。落合様はもう先に行ってしまったよ」

「やっぱ、こればかりはしょうがないよなあ……」

二人は並んで階段を下り、突っ切りたい昇降口を傍目に指定された教室へと向かった。化学室は一階の一番西側の部屋であるが、職員室など主要な教室が東の方に密集しているせいか、あまり付近の人通りは多くない。設備がよく、実験するのも憚られるような大変清潔な場所で、授業でも各クラス週に一度使えば多い方、後はサイエンス研究会とかいう実態のよく分からない同好会が月に2回活動しているだけだ。クリスに限らず、誰にとつてもあまり馴染みのない部屋である。クリスが緊張しながらスライド式の扉を引くと、染み一つない白い壁に浮かび上がったのは、今にも吹き飛ばされそうな里見先生の夫の姿ではなく、長身の若い男性講師だった。

「あつ、あれ、えつと……」

「化学の再テストかい？ここでいいんだよ」

新任の講師はよく通る低い声で言うと、長机に腰掛けていたのから静かに床に降り立った。それから、悪いところを見られてしまったと呟いて笑った。クリスも思わず微笑んだ。紺色の髪をさわやかに流している様子、線のはつきりした端正な顔立ちや、楕円形のメガネの奥に佇む物柔らかな群青色の瞳、白衣を着せた広い肩 並べてみるだけで、スクリーンの中でしかお目にかかれなさそうな好青年だ。しかも、それが講師としてここにいるのだから。しかし、三宿学園の教師陣を見回してみれば、教職にあまり容姿は関係ない気もする。ジャクソン先生然り、黙っていればモデル並の鳥居先生然り。逃亡癖のある校長のことを思えば、ついで性格も関係ないのだろう。男性講師は長い腕で名簿を取って、クリスとノアの顔と比べてみた。

「石崎君と有瀬君、そうだね？」

「はい」

二人は同時に答えた。

「今日は先生に用事があるから、僕が代理を務めることになっていくんだ。さて、これで三人揃ったみたいだね。勉強はもう終わりで良いかい？」

クリスは、既に席に着き熱い視線を代理の講師に注いでいる落合を、咳払いで現実世界へと引き戻した。それでも尚、落合は猫のように目を爛々と輝かせていたが、やがて講師の微笑にぶつかると、慌てたように口を開いた。

「あつ、はい！完璧です！」

「クリス様、落合様が『完璧です』ですって」

「うん、耳を疑いたくなるよ」

ノアの囁きに、クリスはばやきながら何度も頷いた。

「おや、頼もしいな。じゃあ始めようか。石崎君と有瀬君も席についてもらえるかな？配られたらすぐに始めていいよ。テストは四時二十分までだけど、終わり次第僕のところへ提出して帰ってもいいからね」

テストを受ける際の決まりとして、ノアとも落合とも間隔を空けて席についたクリスは、男性講師が問題用紙を配っている隙にふとネームプレートを盗み見た。化学講師・千住ちずみ薫とある。千住 生徒会長と同じ苗字なのは、何か関係があるのだろうか。確かに目の色髪の色、顔の造形など、どことなく似通った箇所は見つかったが。

だが、この講師の方には、あの尊大で高慢な雰囲気がない。容姿が冴えていても、やはり生徒を見守り、育もつとする温かな姿勢が感じられる。落合がこんこんとシャーペンシルを机に叩きつける音で、クリスははっと我に返った。落合は横向きに笑った。一緒にするなよ。クリスは胸の中で密かに反論した。俺はただ、生徒会長に似てるなって少し思っただけなんだから……

ペンはすらすらと進んだ。来夏のおかげだった。後でお礼を言わなくて。結果的に一番にテストを終わらせたクリスは、落合の恨めしそうな顔と、ノアのよかったですねという微笑みを背中に、軽い足取りで薫の元に歩み寄っていった。薫はテストを受け取ってざ

つと目を通すと、口元を緩めてクリスの頭を軽く叩いた。クリスはなぜか赤面している自分に気がついた。

クリスとノアに遅れて、落合が化学室を後にしたのは四時三十分頃。テストの出来云々はともかくとして、彼の心は浮き立っていた。薫先生と二人きりで会話することができた。優等生のエーリアル君にはかなわなかったことである。昇降口へ真つ直ぐ向かおうとしたその時、落合は英語のレポートを三日前に出し忘れたまま、机の中に入れっぱなしになっていることを思い出した。そろそろ提出しなければ、鳥居先生の堪忍袋の緒が切れるかもしれない。落合は浮き立つ気分を一変、重い足を無理に動かして階段の方を振り仰いだ。そして、傾き始めた日の光の中に、一人の少年の影を見た。落合は思わず息を呑んだ。

立ち止まったのは相手も同じだった。十数段の階段を隔て、二人はじっと見つめ合っていた。先に動いたのは上から見下ろしていた方で、彼が動くと同時に彼の顔を掻き消していた光が退き、水色の瞳に根を寄せた竜胆色の眉と、引き締めた薄い唇が明らかになった。水無月が無言で隣を過ぎていくのを、落合は言葉も発せず待っていた。思わず手を伸ばし、行こうとする肩を掴んでいることを知ったのは、水無月が黙ったままこちらを振り向いた瞬間だった。

「お前……」

声が震えた。水無月の水色の睥睨は、彼の弟のそれと重なって見えた。芳乃が崇拜し、身も心もささげて愛するその人の嘲りに。肩に触れた手に力がこもる。斜陽から隠された赤い瞳は、水無月の落す影によって険しく削り取られていた。正確には、彼に重ねて見ている少年の影に。かつての友の顔に浮かぶ影は眺めることに増えている。見せ付けられた接吻も

「お前は、どうして……！」

「言っな」

水無月の小さな唇を出た言葉。静かだが、それはれっきとした命令であった。平手打ちをくらったような気がして、落合は続きを口の中で噛み砕いた。水無月は肩の上の手を払うと、数歩後ずさりして落合を再度睨みなおした。水色の強い光線は、持ち主が無意識の内に被っていた白蘭の面を打ち壊す。その残骸は確かに落合の胸にも突き刺さった。

「全て君にはもう関係のないことだ。君はもうすでに君の世界を持つている。そこに愛してくれる人がいる。今更僕らの元へ立ち返る必要はないはずだ」

「ふざけたこと抜かすな！ 芳乃を放っておけるはずねえだろうが！ 落合の叫びも、目を閉じて頭を振る水無月には遠い。」

「君がどう思おうが彼の心は変わらないよ。わざわざ学園に戻ってきたぐらいなもの。君の行動は全て茶番だ」

「茶番だろうが何だろうが、そんなことに構ってられるか！ あいつは苦しんでる！ 俺が助けなくて、誰があいつを助けるんだ?!」

「さあ。彼自身しかないだろうね」

「てめえっ！ あいつを、芳乃を苦しめてるのは誰だと思ってる?!」

「さあ……それも彼自身だろう」

怒りに任せ、勢いよく伸びてきた両腕に、水無月は抵抗する術もなかった。元々そんな気などなかったのかもしれない。胸倉を掴まれ、顎を傾けられても尚、彼は何の苦しみも痛みも表情に映さずにいたから。その無表情がますます落合を激させるのを、彼は知っているのか知らないのか。落合はいまや、初めに水無月に触れた時とは、全く異なる感情によって身を震わせていた。しばしの沈黙の後、憤る余り塞がっていた喉がようやく開き、落合は搾り出すように語りだす。

「ふざけんな……芳乃があんなことになったのは……全部……！ あいつが苦しんでいるのは……全部……！」

「バカを言うな。君のせいじゃない」

落合は驚愕に染めた顔をあげた。本心を見透かされたのとは他に、

水無月の口調が妙に優しくかったのも、彼を驚かせた要因の一つだった。しかし、それが同情から出た言葉にせよ、水無月はその心を継続させようとはしなかった。水無月の落とした瞳の中には、自嘲と絶望とがあつた。

「誰もが選んで自分の道に入る。例え苦しい道だろうが、愛する人の傍にすることを選ぶ者は喜んでその道を進む。雲居芳乃は自らすすんでそこへ立ち入った。だが、彼のような者とは別に、誰かの言動によって無理に苦しみの道に突き出された者もいる。僕は弟を突き出したんだ。自分の心を守ろうと必死になる余り……僕は卑劣な人間だ。だから、僕は弟の後を追っている。弟の復讐を受けるために、僕はまだ夢の中にとどまっている。でも、桃真、君は僕みたいな真似をする必要はない。傷を受けるのは僕だけでいい……」

ようやく落合は気がついた。自分の手によって捲られた襟の中、白い胸元を覆う幾つもの青い痣に。水無月は耐え忍んでいた。弟の暴力と陵辱に。水無月は犯した罪のために、有り余るほどの罰を受けている。落合の憤激をぶつけられるまでの理由はどこにもなかった。水無月を突き放し、落合は声も涙もなく泣いた。悔し泣きであった。罪をこの身に受けられない悔しさ、芳乃を救えない悔しさ、部外者扱いされた悔しさ。なぜこんなことになったのだ。何もやりなおすことができない悔しさ。壁に手をつき、力なくうなだれる水無月も、同様のものを抱いていた。こうして夢の中にいる今、思い返せるのはガラス越しの記憶しかない。

第十四話 ガラス越しの記憶・後編

回転のぞき絵は回る。「葬送」の調べに促されて

「起きてよ、桃真」

乱暴に肩を揺する手が、落合の意識を夢の世界から引き戻す。甘く重たい液体から足を上げ、天井に向かって両腕をぐっと伸ばした。長い旅をしていたような気分だった。目が覚める時はいつもそうだ。擦ったせいで微かに痺れた瞼には、真つ先に幼馴染の顔が映りこむ。天使を思わす黄土色の巻き毛、小さな頬と額、弓形の眉と二重で丸い山吹色の瞳。これらの内のたった一つパーツ、否、一つのパーツにも満たないものを示されても、落合には誰のものかで見分ける自信があつた。

そんな見慣れた顔の後ろには、次々に、旧図書館、当時は唯図書館と呼ばれていた建物の内装が浮かび上がってくる。どうやら自分は宿題の途中にすっかり居眠りしていたらしい。ぼやけた落合の表情が、急に苦々しく引き締まる。長机の上に落とした目には認めたくない現実、算数の問題集は依然として三ページのままだった。

「図書館でも居眠りするなんて。もうすぐ閉館の時間だよ？閉じ込められたらどうするつもりだったのさ？」

「んな心配しなくっても、大丈夫だよ。いっちゃんはそんなことしないから。優しいし」

「先生をちゃん付けで呼ぶなんてダメだってば。吉川先生にも言われてるじゃないか」

「いいの、おっさんの言うことは無視」

「もう……」

落合の肩に後ろから抱きついたまま、少年は呆れたように溜息をついてみせる。落合は彼の頭を笑いながらそっと叩く。当時の彼らにとって、これが日常であつた。

雲居芳乃の存在は、物心ついた時には既に、落合にとつてなくてはならないものになっていた。中学時代以来の親友であり、また政友でもある二人の父は、息子たちにも同様の友情を強いたのだ。二人は常に隣に並べられ、互いの両親にも我が子と隔てのない愛情を受けて育った。母たちがお茶を楽しみ、父たちが忙しく語らうその膝元で、二人は共に積み木を重ね、ヒーローの人形を戦わせ、絵本を読み、習ったばかりの童謡を歌った。外出する時も一緒だった。公園でボールを投げ合い、野良猫を追いかけて、ある時は、危険だからという制止も振り切つて、川辺の冷たい水に足を浸して遊んだ。そして一緒に怒られて泣いた。その結果、二人の間には、父たちにも劣らぬ、友情という絆というか、そういった結びつきの類の中で、最も強力なものが生まれたのであった。落合は芳乃であり、芳乃は落合であった。二人は心を共有する相手に、互い以外の誰も知らなかった。母が「芳乃君と同じ小学校に行くからね」と言った時、幼い落合はこう言い返したほどだ。「えっ？あたりまえでしょ？」

「あら、もう帰り？」

出て行くこうとする小さな少年たちの背中に、司書がそつと問いかけた。伯父の勧めで今春に学園に赴任したばかり、いっちゃんこと屋城一穂は、まだあどけなさを残した、少女のような女性だった。尋ねる声は幾分高い。白いスーツもなで肩に馴染んでいない様子である。落合はきらきらした目を向けて返事以上の言葉を返そうとしたが、芳乃に引つ張られてついに扉の奥に消えてしまった。一穂は微笑み、手を振りながら彼らを見送った。これで最後の客が去った。ふと腕時計を見る。時刻は五時三分前。今日は来るはずがない。期待するなんて馬鹿げているし、間違っている。それでも落ち着かないのは、やはり疚しい女の心が自分の中にあるからだ。

振り切るように身を翻した。散らかった司書室を何とか片付けなさいといけないし、返却が遅れている生徒へ督促状を出さなければならぬ。五時を知らせる鐘が鳴り、一穂は自分をあざ笑う。散々ふみつけておけば、明日からはもう、こんな惨めな恋心は立ち上がれ

まい。だが、その時、確かに背中に風を感じた。

「何の夢見てたの？」

「はっ？」

踵を並べ、帰路を駆けながら、芳乃が唐突に訊いた。今まで黙って黙っていたくせに、急になんだろうと落合は戸惑う。風にさらわれ、芳乃の言葉がよく聞こえなかったのも真実だ。芳乃は怒りを思い出して一度諦めかけたが、見つめる落合の顔に悪意がないのを認めて繰り返し返した。

「何の夢見てたの？さっき」

「ああ。別に……どうして？」

「ぼくの名前を呼んでた」

「嘘だ」

「嘘じゃないよ。それにうなされてたんだから」

「夢のことなんていちいち覚えてねえよ、バカ」

「バカは桃真の方でしょ。ぼくに嘘がつきとおせるとでも思ってるの？」

落合は小さく舌を打った。こういう時、本当にこういう時だけは、この関係が何だか重々しくて面倒なものに感じられる。芳乃だって、隠したい落合の心まで分かっているはずだ。それでも聞き出そうとするのは、ただ好奇心故ではなく、落合のことを案じているからだ。落合は立ち止まった。ほぼ同時に芳乃もそうした。黙り込んだ落合の前に立ち、その胸に頭を預ける。この態度の変わり様に呆れながらも抱きしめたのは、訊かれた記憶の所在を探り当てたから。

「桃真……」

「いいんだよ。芳乃がここにいてくれれば」

「でも……」

不安に揺れる声を鎮めるたった一つの方法　顎に手を充てて、額の上の一つのキス。

「いいんだよ」

「本当に？ぼくが一番好きなのは桃真だけなんだよ。分かっている？」
「当たり前だろ」

母と交わした会話がふと頭に浮かんだ。「芳乃君と同じ学校よ」「当たり前前でしょ？」芳乃が見つめていなければ苦笑したくなる。いつもいつまでも一緒だと思っていた。今もそう信じている。無理にでもそう思いこませている。芳乃と離れてしまったら自分は終わる。だ。芳乃に大切なものを全て与えてしまった。こちらから離れていくようなことは決してない。でも、もし、芳乃に何らかの変化が起きたら？その時、自分はどうすればいいのだ？漠然とした不安が夢に出た。落合は再度芳乃の背に手を回した。その背を追うだけの自分にはなりたくない。彼に愛されたい。大人になっても彼と全てを共有していたい。

「なあ、芳乃、もう一度……」

言いかけた途端に芳乃は落合の胸を突き放し、強い目で彼を睨みつける。言いたいことはすぐに分かった。落合は了承の印に肩を竦めたが、芳乃は少しも表情を和らげようとしない。

「ダメ。もう一度は言わないよ。言っただけですます不安になるだけだから」

当たり前だ。心で繋がっている二人なのだから。言葉で何度「好き」と言ってみたとこで、心が伴わなければすぐに見抜いてしまう。こういった言葉は最高に気持ちの高まった時に、静かに寄り添って呟くべきだ。そして「知ってるさ」と返される

それから二年後の春のことである。

初等部を「リストラ」されることもなく無事卒業した二人は、中等部のレモン色の校舎に足を踏み入れることになった。寮も変わった。今まで六人部屋だったのが、今度は四人部屋だ。頬をすり寄せるようにして二人で覗いた部屋割りの一覧表には、202号室の列、自分たちの名前の隣に、篠木水無月、白蘭の名が連ねられていた。

「ああ、あいつらか」

落合は特に何とも思わずに頷いて見せた。似ていない双子として有名な篠木兄弟の父親は、かつては衆議院議員だった。三年前にガンで死亡していて、落合と芳乃の父たちとも関わりはあったようだが、その子供たちに校外での面識はない。仲の良い双子であることだけは確かで、初等部の頃は、気が弱くてすぐに泣き出す弟を、兄がたしなめつつも守っている、という状況に何度か遭遇した。さすがにこの歳になると、白蘭の涙腺もきつく閉じてきたようだが、兄に甘えっぱなしという状況はそう変わっていないようだった。同室ともなれば、目の前であるの甘い言葉の応酬を繰り返られることになる。落合は一瞬嫌な顔をしたが、少なくともこちらに干渉されることはないと感じて安堵した。

掲示板にたかる同級生の群れから抜け出し、ふと、芳乃の顔を見ると、芳乃はなにやら考え込んでいるような顔をしていた。

「どうした？」

落合は声をかけた。篠木兄弟との同居に何か不都合でもあったのだろうか。思い当たる節はまるでない。そのことが、落合を余計に不安に駆り立てる。芳乃はゆっくりと口を開いた。

「あのさ、ぼく、あの二人見るといつも思い出すんだよね」

「あの二人って、篠木水無月と白蘭のことか？」

「そう」

「思い出すって何を？」

「分からない？とでもいうように、芳乃は首を傾けた。

「ほら、あれだよ、あれ。国語の授業の時に源氏物語をやったでしょ？それの……」

「スズメがいなくなって泣くガキとその婆さん」

「そう、それ」

二人は同時に吹き出した。

初めてでもない対面は、部屋の中で行われた。今日からよろしく、と水無月は礼儀正しく頭を下げた。白蘭はベッドの陰でゲームに夢

中だった。全く対照的な双子だと、落合と芳乃はつくづく感じた。容姿についてもそうだ。水無月の髪が濃い青なのに比べて白蘭の色が薄く、瞳の色においては逆のことがいえるのだ。

「ハク、えつと、弟の方はあんな調子だけど、話しかければ応じると思うから。林檎を餌にすれば大抵のことはやるし……」

「んな、コインいれたら動くおもちゃみたいない方しねえでも」
落合の言い方に、水無月は笑った。仲良く出来るな、落合と芳乃は顔を見合わせてそう確信した。兄が他人と笑っているのが気に食わないのか、それとも単に言われ方にむつとしただけか、白蘭がベツドの後ろから水無月を呼んだ。水無月はすぐに飛んでいく。

「何だよ、ハク？」

「ここ出来ない」

「ここ出来ない、じゃないよ。攻略本はどうしたの？」

「なくした」

「あのねえ……」

「そんなものなくてもミナならできるでしょ？ 頭いいんだから。さつさとやってよ」

結局それから一週間、白蘭が二人に十分以上水無月を貸したままであることはなかった。

だが、同じ屋根の下に住みながら、存在を無視しあう訳にはいかない。一ヶ月、三ヶ月と時が過ぎると、四人も段々打ち解けてきて一緒に昼食を広げたり、図書館まで出かけたたりするようになった。

白蘭は口を開けば「ミナ、ミナ」だったし、落合と芳乃も相変わらず離れられずにいたが、その二人対二人の構図が、双方を安心させ、友情に潤滑油を刺していた。中学二年の夏休みには、四人ですぐ近くの海岸で遊んだ。本来は難しいことなのだが、生徒会役員選挙に当選した芳乃の権力を使えば、あっさりと許可は得られた。白蘭が波にさらわれそうになったときには三人とも寒気がしたが、花火に火をつけ、スイカを貪る頃には、全員の顔に笑顔が戻っていた。

「このままずっと一緒だったらいいのにね……四人とも」

芳乃が帰り道に呟いたのを、落合は純粋な感情で受け取った。夏にも関わらず、三宿学園の近くは空気が澄んでいる。空に輝く星が、芳乃の山吹色の瞳の中に煌いていた。芳乃は遠くを見ている。届かないほど、遠くを。

今思えば、それが最後の日だったのかもしれない。穏やかだった時代の終末。九月の始業式で森先生に目をつけられ、長い説教を食らって寮へ帰れば、芳乃と白蘭が楽しげに話している。落合の到着を認めると、二人の会話はすぐに三人の会話となったが、芳乃の声が、自分に対するのと白蘭に対するのとで、何だか違うように思われた。気のせいだ。違うと感じるのだとしたら、それはもちろん、自分が芳乃の唯一無二の親友であるからに決まっている。だが、無理に呑みこもうとすればするほど、異物感が喉を圧迫した。どうして？以前に芳乃の声にこんな違いはあっただろうか？

「あんな、芳乃」

焦りの中で、落合は説教でもするように切り出した。双子に双子として接するのは良いが、個人個人に踏み込むのはよくないと。あの二人は、双子という関係の中で均衡を保っている。二人は二人で一人なのだ。自分と芳乃がそうであるように。自分たちが踏み込めば、その関係が崩れてしまうと。何でと語調を荒げた芳乃に、落合はついにあの言葉を口にした。

「だって、ミナとハクは双子で、俺とお前は幼馴染だろ？しょうがねえじゃん。こいつだけは変わりっこないんだから」

感じた。最後の結びつきの中で。砕けて散った芳乃の心の破片を。信じていた者への失望、反抗、拭いきれなくなった不信任感。

以来、二人でいる場面を何度も目撃した。芳乃は本格的に桃真を避けはじめ、白蘭の傍にはかり侍るようになった。白蘭がまだ「ミナ、ミナ」の調子であってくれれば、何とか救いがあるのだが、見ていると何と驚いたことに、水無月と白蘭の仲まで疎遠になってい

くのだ。落合は恐怖を知った。なぜだ。こんなことは起こり得るはずがない。水無月と白蘭は同じ部屋でまるで口を聞かない。白蘭はどんどん奔放になり、乱暴になった。若紫に例えられた彼が、学園中の不穏分子を統率しはじめた。それでも水無月は何も言おうとしない。彼が体を売り始めたとの話が流れた時も、一晩じつとベッドに横たわって動かなくなっただきりで、白蘭をいさめようとはしなかった。白蘭も芳乃も、もう部屋に帰ってくることは相当に少なくなっていたのだが。落合は水無月を叱った。それは、ほぼ八つ当たりになかったが、彼の本心を聞き出すにはおおいに効果があった。水無月はベッドに腰掛け、薄い水色の瞳に絶望と自嘲とを躍らせて語った。

「僕に何ができるといふの？僕はハクを拒んだ。理由もなく突き放した。わざと冷たく振舞った。怖かったんだ。自分の想いを知ってしまったんだ。罪深いことだった。僕は最早神に顔向けできない状態にまで来てしまった……実の弟を愛するなんて」

衝撃を受けた。水無月は涙を落し、微笑みながら、聖書のページを捲っていた。落合はそれ以上何も言えずにその場を立ち去り、寮を出、引きつけられるように図書館まで来た。とつくに閉館時間は過ぎていたが、扉の鍵は開いていた。決して届かぬ空を求めるようにそびえる本棚の線を目でなぞり、灯かりのない暗い天井を仰ぐ。黙示録　水無月が表紙を開いたのは一体いつのことだったのだろう。その時、隠されていた彼の心は明らかになった。血の繋がった弟への切ない恋慕。信仰心の強い彼の中にはたちまち恐怖が生まれた。白蘭は水無月に甘えっぱなしでいた。いつでも水無月の後ろを追い、肩に抱きつき、沈んだ時には頬にキスを求めた。そんな白蘭の近さが、水無月には恐ろしかったのだ。このままでいれば、いつか箍たがが外れてしまうような気がして。そうでなくとも、既に水無月は背信の道を辿り始めていたというのに。だから、彼は語った通りに弟を拒んだ。突き放し、距離を遠ざけようとした。理由の分からぬ拒絶はどんなに白蘭の心を傷つけたことだろう。傷口から毒が染

みこんだ。純粹な兄への愛は、兄への復讐心へと色を変えたのである。白蘭は最愛の人を傷つけるためだけに毒を受け入れた。真逆だ。落合は思った。まるで対照的だった。自分と芳乃、水無月と白蘭。自分は遠ざかる距離に恐怖を覚えて無理に引き寄せようとし、関係を壊した。水無月は近づく距離に恐怖を覚え、無理に突き放した。愛情、嫉妬、復讐、失望、こうした四人の思いは複雑に歪み、絡み合い、もう解けぬところまでにきてしまったのだ。

「芳乃……」

そつと名を呼んでみた。遠くなくなってしまった名前。冷たい図書館の椅子に腰掛け、机に顔を突っ伏す。かつてこうしていた時、自分を揺り起こしたのは芳乃だったのではないか。瞳を揺らして落合を案じ、キスをせがんだのは芳乃ではなかったか。もう芳乃は変わってしまったのか。過去の芳乃はもう戻ってこないのであるうか。違う、自分を変えてしまったのだ。あの言葉で芳乃を引き寄せようとした。自分は芳乃の腕を引く手に、冷たい刃が握られていることを知らなかったのだ。

「だって、ミナとハクは双子で、俺とお前は幼馴染だろ？しょうがねえじゃん。こいつだけは変わりっこないんだから」

自分が憎い。思いつきり痛めつけて殺してやりたい。それができない悔しさに、落合は声もなく泣いた。司書室の扉の隙間から、一穗がその様子をそつと窺がっている。虚ろな琥珀を、大きな手が覆った。

梯子が傾いて落ちた。

鶏が鳴いている。司書室の中で。オーガスタ、名を呼んで一穂は微笑む。机の上には学園長からの誕生日祝いのメッセージ。これで夢から覚めることができる。いつでも、好きな時に。

芳乃の留学の話は風の噂で聞いた。直接口をきいてくれるとは思えなかったが、重大なことを打ち明けられなくなった自分へは、かつてない程の嘲りを投げつけてやった。卒業式が終わるなり、落合は図書館へと駆けつけた。芳乃の留学と共に、この図書館が閉鎖になることも知っていた。芳乃が決めたのだという。理由は建物の老朽化。だが、本当にそうであったのか。今となつては思い出せない。

「芳乃！」

叫べば彼は振り向いた。図書館に二人以外の影はない。倒れた梯子の前に、芳乃は立ち尽くしていた。あの決別以来彼の瞳を占めていた、敵意と憎悪の光はなかった。芳乃は祈るように手を組み、苦悶に瞳を揺らしていた。

「芳乃……」

「ぼくは行くよ。それしかぼくの道はない」

「どうしてだよ？俺は……俺は、誰にも言つたりしねえし、何も知らねえ。芳乃、考えなおしてくれよ。お前がいなくなったら、俺はどうすればいいんだよ？」

芳乃は指を振りほどいてふっと笑った。優しい顔だ。幼い日の懐かしい日々が蘇った。「芳乃……」

「知らないよ。桃真、君とぼくは別の世界の人間だ。小さい頃はよかったよ。ぼくも、君とぼくはいつまでも一緒だと信じてたし。でも、もう分かっちゃったんだ……ねえ、桃真、ぼくの罪は消えないんだよ。あの人を独占しようとして、あの人を最愛の人を奪った。永久に許されないのさ。ぼくは罪と一緒になんか生きられない。君と生きられなかったようにね。だから、ぼくは学園を離れるんだ。全部忘却のためさ。ぼくは罪をここに置いていく。罪と、最愛の人

をね」

芳乃は落合の肩を通り抜けていった。止められなかった。膝が崩れた。芳乃に置いていかれるのは、彼の罪と最愛の人だけはない。彼を最も愛している人も置いていかれるというのに。それでも、芳乃は知らないふりをして微笑んでいる。それはどんなに残酷なことであるう

「芳乃！」

また引き止めた。

「ほんとに……本当に、これでよかったのか?!」

返事はなかった。両手で戸を押す音だけが、芳乃の残した最後の音だった。それは、勢いよく本を閉ざす音に、どこか似ていた。

屋城一穂は二冊の本を手に、梯子の一段目にそつと足を踏み出した。エナメルの靴で包んだ小さな足は、慣れたようにとんとんと、綺麗に並べられた背表紙の前を登っていく。梯子の下では雌鶏のオーガスタがコッココッコと大騒ぎをしているところだ。先ほど司書室に掃除機をかけたのがいけなかったのだ。飼い鳥の掃除機嫌いは分かっていくくせに。

「オーガスタ、もうそろそろおとなしくなさい。閉じ込めてしまいわよ」

一穂は梯子の上から声をかける。反応は期待通りではなかった。鶏はすっかり、元々あるかどうか分からない理性を失ってしまったている。一穂は早々と諦めることにした。まだ生徒がくるような時間ではない。もう少しぐらいは興奮させておいてあげてもいいだろう。

本棚の空のスペースに、運んできた二冊の本が並ぶ。一冊は汚れたピーターパンの本、もう一冊はフランス語の古ぼけた本。またここに本が並ぶことになるのだろう。否、自分はきつとそうしなければならぬ。なぜならそれが自分の仕事だからだ。後悔やためらいはなかった。退屈さえもない。ただの仕事。ひたすら微笑んでいる

のだけが、唯一の「彼」への復讐だ。

その時、扉が開いて何者かが旧図書館へと入ってきた。一穂は怪訝な面持ちで振り返る。まだ生徒は授業中なのに。序々に描かれていく顔に、一穂は目を見開いた。胸元で十字架をかたどった水晶のペンダントが揺れる。鶏はいつの間にか騒ぐのをやめていた。

「どうして……だって、貴方……」

梯子の足元で咲き誇る微笑み。一穂は出来る限り身を返し、片手でペンダントをつかみながら、懐かしさをただ胸に。

「だって、貴方……」

二年後の同じ場所、掛け直された梯子の上で、一穂は声を震わせている。水晶のペンダントを胸元できつく握り締めて。見下ろした先で男は笑っている。

「すみません、黙示録を探しているんですが」

一穂は深く息を吸った。ひとまず動揺を収めることから始めた。もう会えないと思っていたのに。どうしてこんな形で、こんな場所であるほど、全て図書館で犯された罪のせいか。一穂は口元を緩めた。ようやく落ち着きを取り戻して切り出す。

「黙示録は、今はありませんのよ。いいえ……あるにはあるのですがけれど、貸し出しできない状況ですの。一人の生徒が隠してしまつてね。もう少ししたらいらしてくださいな」

「それはいけない。探し出すのが貴方の役目でしょう」

「ええ、でも……私にはこの子がいますから……」

一穂が雌鶏に視線を落としたその時だった。

「あつ」

男の手が梯子を傾けた。足の踏み場を失って、一穂の体は落ちていく。鶏が再び騒ぎ始めた。一穂は目を瞑った。旧図書館、もうそう呼ばれるようになった場所の灰色の床は、既に目前に迫っていた。

大きな手が彼女を抱きとめた。温かな胸の中で、愛する人の鼓動を聞き、一穂は小さく身じろぎした。顔を覆う影と、ルージュを引いた唇を包んだ温もり。なぜ忘れていたのだらう。こんなにも痛く、

優しく、淫靡なものを。

「誰も忘れられないんだ、犯してしまった罪を。誰も目を背けることはできないんだよ。それこそ、最も罪深いことなんだから……」
目を開ける。間近で反射するメガネ、その奥に佇んでいるのである。う群青色の瞳に想いをはせ、一穂は唇を微かに開く。ますます近づく距離の中で、薫の紺色の前髪が頬にかかる。黙示録なんかいらない。ガラス越しのキス、ガラス越しの愛、ガラス越しの記憶、今はそれでいい。

回転のぞき絵は回る。ソフトロップ「葬送」の調べに促されて

第十五話 さざなみの上 微睡みの中・前編

誰かの視線に射られて目を覚ました。穏やかな波の上で得るような、優しい眠りから。犯人は分かっている。人の寝顔を観察するなんて、そんな悪趣味なことをする者は、この家にはたった一人しかないから。

「陽……」

「あつ、生きてた」

あつ、生きてた、じゃない。荔枝は手の甲で両目を覆い、意識し始めた日光から安穩の暗闇を守った。監査人は二度目を防ぐべく、早速その手をとって退かしてしまう。開けつつも眩しげに細めた視界に、見慣れたいとこの顔が映った。小さな吐息が漏れる。口元が笑っているのはいつものことだとしても、なぜこんなにも嬉しそうなのだろうか。悪戯をしかけて楽しいというのだったら、まだ理解ができるのだが。まともな人間との自覚がある、少なくともまともな人間を自称している自分には、それがさっぱり分からない。

「わりいな、起こしちまつたみてえで」

ちつとも悪いなんて思ってないくせに。極限の呆れは微笑みに変わった。

「構わない。どうせ片付けなければならぬことがあったから」

「ふーん。忙しいのな」

「何を。いつものことさ」

寝そべっていたソファの上から、荔枝はゆっくりと半身を起こした。陽はソファの背もたれに肘をかけ、のぞきこむようにしてこちらの様子を窺がっていたようだ。まだぼんやりする頭で座りなおすと、空いたスペースに猫のようにひらりと飛び移り、また何が楽しいのか嬉しいのか、口の端を吊り上げている。本物の猫の方は、白くしなやかな身を真昼の日の中に伸ばしながら、二人の飼い主の様子を高飛車な緑の目で眺めていた。

「シャネル、おいで」

荔枝が呼ぶと、牡猫は美しい姿勢で歩いて膝の上に丸まった。毛並みの艶やかなことといったら、全く他の猫とは比べ物にならないと、荔枝と陽は密かに自慢に思っている。「片付けなければならぬ」とを整理しながら、その毛の上に何度も手を這わせていると、急に陽が肩を抱きすくめてきた。いつもの甘えるような調子ではない。その腕には、遠のいていくものを引き寄せるような強さがあつた。少し意外そうに見上げた先に、無理に繕つたような無表情が見つかった。

「どうした？」

「別に。なんも」

「私に構ってもらえなくて拗^すねていたのか？」

「ちげえよ、バカ」

「そうだと言ってくれたら私だつて素直に喜ぶのにな」

「だから、ちげえつて。つたく、これだから温室育ちは……」

未練がましく「自意識過剰」だのなんだの呟いているのを見ると、何か思うところでもあるのだろう。荔枝は陽の好きなようにさせておくことにした。こちらが黙つて身を預けると、あちらも口を閉ざした。触れ合う箇所が、肩が、腕が、背中が熱い。時折髪にかかる息や、右手に絡みついた指も、汗ばむように熱い。シャネルはぴよんと跳ねてベランダへ出る。その後姿を追つた後で、どちらから仕掛けた訳でもなく、双方が示し合わせていたように互いの唇を奪つた。胸にこみ上げてくるもののせいで、今はもう全身が熱い。それは愛だとか幸福だとかいうものであつたか。

「バカ」

長いキスの後で陽が言った。

「いつも拗^やねたり寂しがつたりすんのはそつちじゃねえか」

「たまには妬^やいてくれたつていいだろう？」

「夢にでも妬^やけと？」「それも一興だ」「はっ！んなもんが分かつてたまるかよ！」分からなくてもいいさ。荔枝は余裕の笑みで答え

る。癢にさわつたのだから、呆れたのだから、陽はそれを自分の胸に押し付けて見なかつたふりを決め込んでしまった。今度は笑いが音となり、静かながらに喉を震わす。

「何だよ？」

問いかけも無視した。「片付けなければならぬもの」は「永遠に片付けられないもの」になりそうだ。この少年という限り。

さとみつとむ

里見沙織先生の夫、里見務先生がぎっくり腰を理由に休暇をとつてから初めての授業は異例だった。生徒たちは代理講師千住薫の美貌に当てられて、すっかり高揚し、口早に囁きあっていた。一体どこの女子高かと来夏は呆れてみせた。クリスはつられて苦笑しながらも、先生が再テストの監督を休んだのも実はぎっくり腰のせいなのだと思つて同情したり、気付けば薫が背後に来ていて、実験器具の使い方について手をとつて指導してくるのでときまぎしたり、周りの生徒同様少しも落ち着かないのであった。

「慎様のお兄様なんです。高等部の卒業生で、今は大学の方で教師になるための勉強をしてるらしいですよ。そりゃ、あの容姿つすからねえ、他にも道はあつたんでしょうけど、なんでも教職が一番性に合つてるとか言つて。成績優秀で運動神経も抜群、高等部在籍中の賞状とメダルの数はダントツで、生徒会長兼フェンシング部の部長も務めてたらしいです。慎様のことも考えると、やっぱり千住家の血はすごいんですね……」

「来夏先輩みたい」と頬を染める真央を殴る来夏をよそに、クリスはちらりと視線を明音に寄越した。千住家の血は少なからず彼の中にも流れている。その血を褒め称えるとき、明音はどんな気持ちで賞賛の言葉を口にしたのだろうかと純粹に疑問に思つて。明音はぼんやりと考え込むような顔をしていたが、弁当箱の中でふらつく箸先は、きちんと得体の知れない緑色の物体 作った本人曰く卵焼き き を掴んで口まで送り届けた。もきゅもきゅという奇妙な咀嚼

音もこの際そつとしてあげることにして、クリスは、廊下を横切る影の中に薫の白衣を見つけ、一人胸を密かにときめかせた。生徒会長に翻弄され、惑わされた時とは違う。人並みはずれた才能を決してひけらかせず、優しく生徒たちを指導する薫に対し、クリスは早くも憧れに似たものを抱いていた。それに　自分は他の生徒たちよりも早く薫の存在を知っていた。再テストの時に、薫はクリス一人だけに向かって微笑み、褒めるかわりに頭を軽く叩いてくれた。一緒だったノアにも落合にもなかったはずの経験だ。その優越感が、薫への憧れをますます確かなものへと固めていた。

「やっぱり、千住先生ってさ、彼女とかいるのかなあ？」
菜月の冷めたような口調にも、落合はものめずらしそうな目を向けた。

「おっ、どうした。おまえにもついに浮気でもするつもりか？」
「バカいわないで。落合と一緒にしないでよ。僕は颯一筋……じゃなくて、この間屋城さんと一緒に歩いてるの見たからさ」
「いつちゃんと？」

落合の眉間を狭めた微かな暗雲に、気付いたものは誰もいなかった。落合の頭の中では、封じ込められた記憶がしつこく鐘を鳴らしている。だが、その音色を思い出せない。菜月が赤い顔のまま頷く。

「うん。中庭を散歩しててさ。なーんか、楽しそうに」

「そういふ相手がない方がおかしいけど。あの先生だったらな」

「そうですよ。あの慎様のお兄様なんですから」

「何で生徒会長が中心なの？」

「クリス様、お弁当、なくなってますけど……」

薫の影を限界まで追いかけていたクリスは、ノアのその一言ではつと我に返った。ノアの言葉が真実か否かは、わざわざ見下ろさなくとも弁当箱の軽さで分かる。「酒本！」叫んでクリスが立ち上がりぬ内に、菜月は靴を履いて駆け出していた。クリスも挑戦を受けてその後を追う。ノアが何やら止める声も、クリスの耳には全く入っていないかった。

「クリスマス様だったら。僕の分を召し上がればいいのに……」

「そももいかねえよ」

ノアはふと来夏を仰ぐ。

「お前な、いい加減気付いたらどうだ？そんな親切で石崎が本当に喜ぶと思ってるのか？」

「えっ？」

「考える。友達なんだから」

ノアの疑問は、抱きついた真央を振り払う来夏の声に掻き消された。なぜだろう。つい先ほどまで厳しく説教していた人の顔が、今はなぜか仄かな紅を帯びている。光の加減だろうか。それとも……

空を見上げた。よく澄んだ十一月の晴れた青空だ。冷気は漂う埃や澱みを凍てつかせ、地表に屈服させている。きれいだな、その時ノアは素直に思った。

「さ、桜木先生……」

「何です、鳥居先生？お顔が青いわよ」

「ちょ、ちよつと、せ、背中を貸してもらえませんか？」

「背中？えっ？あらっ」

桜木先生は、橋爪先生と話しながら階段を下りてきたところであった。職員室に向かおうと右方向に折れた瞬間、鳥居先生に出くわした。二人でいたとなれば絶対にからかわれる、何とか言い訳を考えなければ。桜木先生と橋爪先生は必死に脳を捻り始めたが、既に真っ青になっていた鳥居先生は、上のように断るなりいきなり桜木先生の背後に回りこんだ。桜木先生は驚きつつも、その小さい背中に鳥居先生を隠してやった。橋爪先生も困惑の下で協力する。

「いいですか？私は空気です。幽霊です。ここには存在しないんです……！」

鳥居先生は声押し殺してささやいた。

その直後だった。三人、正面から見れば二人の前を、校長と見知

らぬ男性が過ぎていったのは。桜木先生は普通に会釈しようとして、鳥居先生を隠していることを思い出し、小さく首を傾げるだけに留めた。校長は老教師二人に気付くと足を止め、賓客の注意をそちらへ促した。鳥居先生が小さく「このバカ！ハゲ！」と毒づくのが聞こえた。

「おや、おはようございます、桜木先生、橋爪先生。こんなところで二人で立ち話とは、相変わらず仲がよろしいことで」

「な、なにを……！」

二人は顔を染めて慌てふためいた。校長はにこりと笑い、まあまあと手を突き出して恋人たちを鎮める。

「冗談ですよ。全く、お客様の前で取り乱すなんて、お二方らしくもありませんねえ。氷室さん、当校音楽教師の桜木と数学教師の橋爪です。お二方、こちらは氷室彼方さんです」

ひむろかなた
氷室彼方と紹介された若々しい青年は、二人に向かって愛想よく微笑みかけ、礼儀正しく頭を下げた。彼のすらりとした姿には、先生方もつつい背後のことを忘れてしまいがちになり、おかげで鳥居先生は、桜木先生がきちんと腰を折るのにあわせてしゃがまざるを得なかった。

「これから理事長のところへご案内するのですがね、一向に理事長室の電話が通じないので。一体どこに行ったのでしょうか。橋爪先生、ご存知ありませんか？」

「さあ……あの方も神出鬼没ですからね」

「あの方『も』？」

「い、いえ、こつちの話です」

彼方の指摘を橋爪先生は急いでごまかした。仮にも名門、三宿学園高等部校長の名誉を守るべく。彼方が興味を示した校長捜索隊の腕章も、腕を後ろに引っ込めることで隠した。が、引っ込めた手がついでに鳥居先生の額に直撃し、鳥居先生は思わず蛙が踏み潰されたような声をあげた。

「おや、今何かおかしな音がしたような……？」

「き、気のせいですよ！校長！」

桜木先生と橋爪先生は声を揃えて叫んだ。

「そうですか。まあ、いいとしましょう。では、先生方、お話ししすぎて次の授業に遅れないようにしてくださいよ。もつとも、僕のような人間にこのような忠告をする資格はありませんがね。いえ、こつちの話です、氷室さん。さあ、こちらへどうぞ」

校長と彼方の背中がついに豆粒ほどになったのを見て、鳥居先生はやっと安心して真つ赤な額をのぞかせた。変な鳥居先生、桜木先生と橋爪先生は密かに思ったが、彼女と同じように、氷室彼方を遠くに認めてから、やっと影をのぞかせた者が他にいた。荔枝だった。彼は踊り場の上、先生方のちょうど後ろから、今の光景を観察していたのである。何を思うまでもなかった。荔枝は腕を組み、唇を噛むと、素早く優雅に身を翻した。行き先は生徒会室だ。

「氷室彼方、山上産業代表取締役・山上孝蔵やまかみこうぞうの三男。その後、氷室弘毅の養子に入り、氷室財閥の跡取りに決まる。でも、確か養子に入ったのは君たちが逃げ出してから二ヶ月後だったよね？面識があるの？」

キーボードを打ちながら、頭の抽斗から情報をいくつか取り出して颯が尋ねる。腕を組む荔枝に寄りかかりながら、のんきそうに頷いたのは陽だった。

「ああ、例のパーティーにいたからな。オレンジジュース浴びせてやったからよく覚えてるぜ」

「何だよそれ……」

颯がため息をつく。

「でも、どうしてこんなところに？君たちのことを嗅ぎつけた訳じゃないんだろ？」

「さあな。理事長の客として呼ばれた様子だが……或いはそういうことなのかもしれない」

「んなバカな。だったらとっくに一族総出でお迎えにきてるはずだ

ぜ。こそこそあいつだけ送り込むような真似なんかするかよ」

「まさか連れ戻しに来た訳ではあるまい。既に勘当された身だ」

「だったら尚更あいつがオレたちに何の用があるっていうんだよ？」

颯はそつと席を立ち、一生懸命ノートに何やら書き込む芳乃を連れて外へ出た。陽の顔から笑みが消えているのに気が付いたのだ。氷室彼方の登場は、程度の差こそあれど、少なからず二人に動揺を与えている。きよとんと自分を見上げる芳乃に微笑みかけながら、颯は部屋の前で議論が終わるのを待った。颯と芳乃が退室した途端、生徒会室は急に静かになった。どうにも嫌な予感がする。二人が喧嘩しているところなど、今まで見たことはないけれど……

「制裁、つてやつか？」

颯の悪い予感はどうにか外れたようだ。一方が肩を竦める気配がある。恐らく陽だろう。

「んなこといってもよお、雨に打たれた子犬みたいにぶるぶる震えてもどうにもなんねえし。出来る限りじっとしてるっきゃないんじゃないの？」

「……そうかもしれない」

「堅苦しくなるなよ、な？いざとなったら氷室の坊ちゃんぐらい打ちめしてやりゃいいんだから」

「ああ……」

「もついいから。とりあえずお前はオレの隣にいりゃ安全だって」

「陽……」

「あの、ぼくたち入るタイミングを完全に失ってませんか？」

「……少し、散歩でも、いこうか？」

颯はわざわざ気を利かせたことを多いに悔いながら、芳乃の肩をそつと押して最上階を後にした。芳乃の山吹色の瞳が一瞬無慈悲に光り、その中に二つの人影が映りこんだ。

頬を包む手は冷たい。押し付けられた唇も、絡みつく舌と唾液も、

敬愛するその人は何かもが生きる氷のようだった。

「どうしたの？」

校舎の壁と氷のような身との間に挟まれて、芳乃は微かに身じろぎをする。それさえも許さないで、再度攻め来る白蘭に、芳乃は昂ぶりと恍惚の中で、そつと尋ねたのであった。白蘭は何も答ええない。ただ返事の変わりに冷たいキスを寄越す。ランの花は二人の頬に擦られて花弁を落す。酸欠の息苦しさえも、二人にとっては最早快樂であった。

「白蘭様……ねえ、ぼくのことを愛しく思ってくださいませんか？ 貴方のためなら何でもできるぼくを、愛してくださいませんか？」

「愛してるさ、とつくの昔から」

「……そんな言葉信じられないよ」「芳乃？」

「でもね、いつか信じられるようになってみせるから。ぼくは決して許さないよ。ぼくたちをここまで陥れた奴らをね。この手で制裁を下すんだ。そして、思い知らせてやる……」

芳乃は空に高くランの茎を放り投げた。

「もういいから。とりあえずお前はオレの隣にいりや安全だった」

もういいから、つまり、もう心配しなくていいからとの意だったのであろう。お前は余計なことは考えなくていい。何かあったらオレが守ってやる。消えたバイオリンの音の代わりには、ため息が一つ奏でられた。いつまでそんな気にいるのだろう、陽は。いつでも一人で何かもかも片付けようとする。荔枝のこととなると不必要なぐらい干渉してくるくせに、こちらにはまるで手の内を見せようとしめない。そもそも今回のことは二人の問題ではないか。彼方に何らかの腹があつてここに来たのだとしたら、それはこの満ちたりた生活の終わりを意味することになる。

荔枝は目を閉じた。ネックは掴んだまま、バイオリンの胴を胸に預ける。弓は膝の上に置く。名誉を破り捨て、家を逃げ出したとき、長年馴染んだ楽器は当然手元になかった。解放された反発で、一族

に対して苦いまでの嫌悪感を抱いた荔枝も、本気で取りに帰ることを考えた。陽は荔枝に新しい風をもたらし、彼を常に驚かせて全く退屈させなかったが、ふとした瞬間にたった一人の幼馴染が恋しくなった。既に体の一部となって、自在に美しい音を奏でられたあの楽器を、せめて一瞬だけでも触れることができれば、と。新しい生活への動揺と、川崎陽という少年へ抱き始めた見知らぬ感情の裏に、荔枝は憧憬を隠していたつもりだった。だが、やはり陽には何もかも見透かされていた。ある日突然投げ渡された。オレのお古でよければと言われて。手にした時、久々に見た餡色のなめらかな肢体が、どんなに荔枝を感激させたか。自分でも定かではなかった。

陽の楽器を手にし、陽に翻弄され、陽を心から愛した。そういう日々だった、この四年間の生活というのは。最早一人で生きていくはずがない。もし、彼を奪われたとしたら、自分は一体どうすればいいのか。

ただ今の暮らしを守りたかった。陽に頼るのではなく、自分の手で、この幸福を守って生きたい。そんな強いけれども漠然とした思いが、荔枝の心の中で、地平を舐める炎のように、ゆっくりと広がっていた。

「部長」

肩を遠慮がちに叩かれた。ようやく目を開くと、ヴィオラを持った水無月が立っていた。やや緊張気味の面持ちだ。この間からかいすぎたのがいけなかったかな、荔枝は反省紛いのことをこっそりしてみた。

「おや、君の方から声をかけてくるなんて珍しいな。どうかしたか？」

「い、いえ、出来たら、一緒に弾いていただけはないかと思って……」荔枝は愛器の頭にそつと頬を寄せて口元を緩めた。出来る限りその音を聞かせる機会をあたえてやれなければ、陽とて、やった甲斐がないというものだ。曲はヴィヴァルディ、「弦楽のための協奏曲」ト長調 アラ・ルスティカ」第3楽章、軽快なソロの部分だ。無言

の内に承諾がなされ、二人はそれぞれ楽器を構えて立ち上がった。

その時、音楽室の扉が開いた。迷惑そうに二人が見つめた先には、何と我が校の偉大な校長が笑顔を覗かせているではないか。水無月は恐縮だとばかりにヴィオラをおろし、急いで頭を下げた。なぜこんな所に校長が？隠れ場所に困った訳ではあるまい。荔枝は鼓動が早まるのを感じた。弓を持つ手は自然に下りた。

「校長……」

「これは失礼。今からいざ演奏というところを邪魔してしまいましたね。おや、篠木君はいつの間に部活に復帰したのですか？」

「えっ、ええ、今度の文化祭には出ようかと思って……」

「それは喜ばしいことですねえ。いや、小杉君と篠木君の名演を聞いてみたいのはやまやまなんです、楽しみは後にとっておきましよう。老いぼれの先は長くないでしょうが、そこまで切羽詰っていませんのでしょうから。小杉君、君にお客様がお見えになっていますよ」

客？とわざわざ聞き返すようなことはしなかった。もう分かっていた。決して不要な懸念ではなかったのだ、先ほど陽と語り合った事柄は。星のような銀髪が現れる。それからいやに整った若々しい顔立ちと、野心に燃える切れ長の瞳も。非の打ち所のない笑み、冷やかな刃を宿した笑みが、荔枝に向かって繕われた。

「やあ、荔枝君……久しぶりだね。元気だったかな？幸せそうではないよ。僕としては、ね」

第十五話 さざなみの上 微睡みの中・後編

「やっぱりプロの画家は違うね。他の子たちと比べては悪いけど、やっぱり絵そのものが生きてるように感じるよ」

「いいえ、そんなことは……」

最後の二時限を占める美術の授業では、学園内の景色を場所は構わないので写生するよう命じられた。クリスは、ノアと共に中庭でも行こうと思っただが、生憎ノアが花木先生に捕まってしまったため、一人で少し遠出をすることに決めた。落合も二人と同じく美術を選択していたけれども、何だかまるで元気がなく、話しかけてもろくな返事もしないので、美術室の隅に放っておいた。今、クリスがこうして薫と並んでいる光景を見たら、一体何と言うだろうか。

最初に会ったとき、薫にどことなく生徒会長の面影を感じないでもなかったが、こうして間近で見ると、目元や口元、小鼻の辺りなどはとりわけてそっくりで、背も二人揃って高いことだし、慎が少し成長すれば見分けも付けがなくなるのではないかと思われた。ただ、あの高慢な少年が、成長に要する数年の間に、ここまで人の心をさざめかせ、同時に安堵させるような包容力を得られるかどうかはまた別の話だった。薫は饒舌だったか、相手　つまり、今の場合ではクリスの話を遮ることは決してなかったし、むしろ喜んで聞こえてくる言葉に耳を傾けた。話す声は落ち着いて深みがあり、一つ一つの言葉は心の奥にまで染み渡った。そういう摩訶不思議な人物であるので、自分に歩調を合わせながら颯爽と歩く薫をちらと見るだけで、クリスはもう頬に血がのぼる心地がするのだった。「千住先生はどうして先生になったんですか？」

話の成り行きでクリスは尋ねたが、半分は自身の好奇心によるものだった。薫は首をかしげる。

「どうしてと言われるてもね……僕が教職についたら、何かまずいことでもあるのかい？」

「いいえ。でも、お父さんみたいに俳優とかにはならないのかなあ
って思つて。だって、先生なら絶対に人気が出そうじゃないですか」
「まさか。僕は演技力がまるでないんだよ。芸能的なことに関して
は、慎の方が優れてるんだ。あいつは父親似で派手好きだからね。
僕はどちらかというと母親似さ。母はこっちが呆れるぐらいおつと
りした人なんだが、僕もそういう所を受け継いだらしいね。案外性
質は地味なんだねってよく言われるよ」

「そんな。先生が地味だなんて全く思えません。先生が優しすぎる
からそう言われるんですよ、きつと」

薫は肩をすくめて苦笑したが、クリスが気を悪くしないようにその
肩を優しく叩く気配りを示した。胸の中で一つ泉が湧き上がった気
がした。その水脈を辿ることは困難であつたけれども。二人はフ
エンシング場の横を通り過ぎ、間もなく薔薇の小道に差し掛かるう
としていた。ここを抜ければ旧図書館のそびえる開けた土地へとた
どり着く。クリスは実は、旧図書館をスケッチする気でやってきた
のだが、この薔薇の小道とて絵になる場所だ。クリスが丁度そんな
ことを思っていた時、偶々薫が口を開いた。

「そういえば、個展はもうしばらく開かないのかい？僕はとても楽
しみにしているんだけど」

薫の目は薔薇の花に向けられている。薔薇たちは季節はずれながら
にぎやかだ。

「あつ、はい。しばらくは学業に集中しようと思つて。叔父さんと
叔母さんにも約束しちゃいましたし」

「そうか、残念だな。でも君はなかなか優秀な方だと思つけどね。
化学以外は」

正直に言つた方がよいと思つたのか、薫は笑いながら最後の一言を
付け足した。クリスは微かな羞恥に顔を赤らめつつも、少し嫌な気
がしない自分に気付いていた。

「少し前まではよく出来てたんですよ、言い訳じゃありませんけど
……うーん、やっぱり日本史に打ち込みすぎたのかなあ？」

クリスは薫が聞いてくれるのを良いことに、学業とその他の悩みを
ごちゃ混ぜにしながら、口にのぼった順に薫に打ち明けた。初対面
の人にここまで打ち解けたことはいまだかつてないことであった。
だが、薫と一緒にいると、心にあることは粗方話してしまうのが、
当然のことのように思われたのだ。薫は辛抱強くクリスの悩みに付
き合っていたが、大体聞き終わった後で、ふと思いついたようにし
て漏らした。

「勉強なら、僕が見てあげてもいいんだけどね。一応化学の他にも
教えられる科目はいくつかあるから。といっても、僕がここにいら
れる時間はそんなに長くはないんだけど。中途半端になっても構わ
ないなら僕は喜んで教えるけど……」

「お、お願いします！」

クリスは誰と競うわけでもないのに、先を急ぐようにして口走った。
二人は一瞬きよんとして立ち止まり、見つめあい、そして一緒に
吹き出した。晴れやかな気分というのは、全く今のような心地のこ
とをいうのであろう。

「じゃあ、よければ明日の放課後から……」

薔薇の小道という細長い舞台の上で、二人の傍らを、新たな役者た
ちが追い越していった。黒い艶やかな髪が風に伸ばされて、クリス
の視界の端に入り込んでくる。彼が後姿となつてから、クリスはよ
うやくその正体に気が付いた。荔枝だった。いかにも素封家らしい
銀髪の青年に連れられ、青年の急ぐような足取りに遅れをとること
なく、優雅に毅然と歩き進んでいる。まるで、優雅であることが、
青年への唯一の反抗であるかのように。焦点の合わぬまま確かめた
一瞬の横顔が、クリスの脳裏に鮮やかに蘇った。重なったのは、ダ
ヴィットによる処刑前のアントワネットのスケッチだった。誇りを
失わず、背を伸ばし、真っ直ぐ前を見据える彼と彼女　不吉な予
感がした。

「どうかしたかい？」

薫が尋ねた。クリスははっと我に返った。肩が何やら温かいのは、

薫の手が優しく添えられているかららしい。クリスはまた真つ赤になつた。

「い、いいえ……大丈夫、です……」

司書室は散らかつていた。巨大な映写機が彼方の顔の左半分を覆うのはいいとして、少し手を動かしただけで、本やらペンやら紙くずやらが、机から落ちるような始末だ。おまけに床では鶏が暴れ、そこら中に白い羽毛を撒き散らしている。潔癖症のお坊ちやま彼方が、なぜこんな場所を自分との会場の場所を選んだのかまるで分からない。部屋の持ち主である一穂も、散乱の様をまるで恥じる様子もなく、微笑みを携えて客人のためにティーカップを温めている。一穂がポットを手にとると、ハーブの香りが微かに鼻をついた。それにしても彼女は変わらない。記憶から抜け出てきた時のように、相変わらず三年前に見た時のままの若さと美貌を保っている。強いというなら、少女のようなあどけなさが掻き消えたことぐらいか。荔枝は一穂が紅茶を淹れ、頭を下げて部屋を出て行くまでを見守っていたが、彼方が咳をして彼の関心を引き戻した。いつか遠くから眺めた青い野心に満ちた目は、氷室一族というおおまかな括りだけを通して、何とかその眼光を緩めていた。だが、直に化けの顔も剥がれるだろう。彼方が旧交　それもあるかないか分からないほどの　を温めるために学園に來た訳でないのは分かっている。荔枝はきつく唇を閉じた。

「さて、何やら話したらいいのだから。挨拶は先に済ませてしまったし。とりあえず、僕は聞き手に回るとしようかな。まず訳を聞きたいね。氷室財閥の跡取りであつた君が、名誉も権力も捨て、ライバルであつた川崎陽と共に一族の元を逃げ出したか、その訳を」

「……お話するほどのことはありません」

彼方が眉を顰めたのが見えた。だが、この青年に不快感を与えずして、今の日々を守ることはできない。最初から反抗の態度を示して

おくのは、せめてもの礼儀だった。それよりも、陽との思い出をこの無粋な青年にけがされたくない気持ちの方が強かったが。彼方は散らかりっぱなしの机に肘をおき場所を見つけて手を組んだ。容疑者に口を割らせようとする、いやみつたらしい刑事のように。

「君にとつては話す価値もないことだとしても、僕らにとつてはぜひ聞いておきたい話なんだ。君が事の重大さを理解していないはずがない。親御さんを捨て、一族の名を汚し、君を愛してくれていた多くの人々を悲しませた。君の良心は少しでも痛まないのかい？君には話す義務があるはずだ」

荔枝は紅茶を啜り、哄笑を押し隠した。親御さん？あれを親と呼ぶのか？子供のことを、名誉と金を得るための道具としか思っていないか？子供のような奴らを？「君を愛してくれていた多くの人々」の件もまた面白い。その多くの人々のたつた一人として、自分が知らなかったのは、一体どういうことか。氷室彼方はどう釈明してくるだろう。荔枝は思つたままを述べてみることにして、カップを置いた。

「義務やら良心やら仰いますが、私にはさっぱり分からないお話です。義務というのは親の義務のことでしょうか。確かに親には子を愛する義務がありますが、私の両親の場合はそれを果たしませんでした。ですから、彼らのために痛む良心を私に求めるのは、甚だ筋違いというものではないですか？それに、一体誰が私を愛してくれていたでしょうか？私は残念ながら一人としてそんな人物を知りません」

彼方はため息をついた。実に芝居がかつた仕草だった。

「君は何も分かつていない。そんなことを言つて、自分の振る舞いを正当化しようとしているだけだ」

「まさか、正当化など……」

「君のご両親も、君の伯父さんも、皆、君を信用し、愛していた。それは周知の事実だろう。そんな人たちの信頼を裏切つておいて、何も話したくないでは済まされないとと思うがね」

全く面倒な男だ。いちいち返事をしてる限り、同じ話を何遍も繰り返すのだろう。荔枝はまたカップを持ち上げたが、今度は口に運

ばずにいた。このハーブの香りはどうも好かなかった。返事の代わりには、小さく肩を竦めておいた。それが彼方の目にどう映るかは半分投げやりな気持ちで。彼方はようやく紅茶に手を出して続ける。「君もそろそろ大人になる。自分のしたことにはきちんとけじめを付けるべきだ。罪を犯した者には懺悔が必要だ。それをなくして、君に輝かしい未来など……」

「一つよろしいですか？」

「何か？」

「貴方はそんなことを言うためにわざわざ私を連れ出したのですか？」

「何？」

「私は後悔もしなければ反省もしません。私にとつても陽にとつても、氷室財閥やそこに関わる人間はもう捨て置いたものでしかないので。そんな私を、これ以上何を言えば説得できるとお思いですか？」

彼方はふと沈黙した。好都合だ。あまり軽薄な口を聞いているとうんざりしてくる。荔枝が馴染めない紅茶をもてあましている間、彼方の中で、降参とも諦めともつかない何かが決議したようだった。それは、綿に含ませていた針を、絹で覆っていた剣の切っ先を、ついに露にするとということであった。彼方の顔から馴れ馴れしい笑みが消え、鋭い青い目はついに野生を取り戻した。彼方は煙草に火をつけた。煙は狭い室内にゆっくりとひろがっていく。

「もちろんそんなことのためじゃない」

咳き込む荔枝に、彼方は擦り切れた声で言った。

「見逃してもらえらると思つたか？お前たちの身勝手な行動のせいで、氷室財閥がどれだけの損害を被つたか、知らないとは言わせない。お前たちのことを押し隠すために大金を要した。俺の突然の養子入りについても、うるさいマスコミや世間の口を黙らせるために多くの犠牲を払う羽目になった。今でこそ財閥は安定しているが、そのために一族の人間がどんなに奔走したか。お前たちは俺のことを甘

つたれていると嗤っているだろうが、甘ったれてるのは自分たちの方だ。許された気になって、すっかり安心しやがって。氷室家の人間は残念ながら寛容じゃない。制裁はきっちりを受けてもらう。幸せな生活がこのまま続くと思っただら大間違いだ」

荔枝の手首を、突然彼方の手が取った。カップに添えられた指に熱湯が零れ、荔枝は思わず抗うのを忘れる。彼方は荔枝を強く引き寄せて襟を掴み、後方の壁へと投げ飛ばした。何とか持ち直したものの、煙草の煙が喉を痛めつけ、視界を歪ませる。彼方はいつもの坊ちゃん気取りはどこへやら、歳より老けたえらく人相の悪い男となつて、荔枝の方へと歩み寄っていた。逃げるのは癪だが、憎悪に取りつかれたこの男が何をしてくすか分からない。案ずる間にも再度襟をとられた。浮いた顎の左下に彼方は小さな痣を見つけ、煙草の先を押し付けた。荔枝は歯を食いしばり、必死に弱い声を漏れるのを堪えた。首元の拳に手をかけるも、煙草の火の先がそちらに移っただけ。氣道は序々に圧迫されつつあった。

「こんな時どうすればいいと思う？俺としては、恋人に連絡するっていうのを推したいところだけど」

「陽は、関係ない……っ！」

彼方の口元に冷笑が閃いた。

「なるほど。恋人に危害を与えたくないという訳か。だが、俺がやらなくとも誰かがやる。罪は必ず糾弾されるものだ」

彼方の言葉に、荔枝は確かな戦慄を覚えた。もしや陽にも、何者かの手が忍び寄っているのではあるまいか。制裁を名乗る、残虐で冷やかな指先が、彼の心臓の元に

「おい、荔枝」

そう呼びかけて覗き込んだ音楽室には、ヴィオラを持った後輩一人の姿しかなかった。陽は少し嫌な顔をした。彼のことなら前に見たことがある。しかも荔枝とのツーショットで。自分をからかうた

めの演技だったとは言え、荔枝があんな風に他人と接している姿は好ましく映らないものだ。ヴィオラの少年は演奏をやめてこちらを仰ぐ。竜胆色の髪に水色の瞳をした、聡明そうな顔立ちの少年だ。

確か名前は……篠木白蘭、じゃなくてもう一人の方、水無月だ。つまり、あの問題児の双子の兄という訳だ。しかし、双子というからにはもう少し似ていてよさそうなものを。あまり気乗りはしなかったが、陽は似ていない双子の片方に声をかけてみることにしてみた。「なあ、荔枝は？」

「部長ですか？部長ならさつき校長先生とお客さんに連れられてどこかに行きましたけど」

お客さん　嫌な響きだ。隠れていた藍色の目が前髪に透けて見えるようになった。

「おい、客つてどんな奴だ？」

「男の人です。若い人でした。髪が銀色で……」

そこまで聞けば十分だった。陽はくるりと身を翻し、盛大な音をたてて音楽室の戸を閉じると、全力で階下へと駆けて行った。校一階の校長室の扉を無断で開く。部屋には山積みになったファイル以外に誰もいない。すぐ傍を通りかかった副校長を捕まえ、校長はどこかと聞いてみたが、我々も探している最中だとの返事。鳥居先生に至っては、氷室の名を聞いた途端逃げていった。陽は毒づいた。校長とて、客人との面会となれば、堂々部下に宣言できるはずだ。となると、彼方と荔枝は二人でどこかへ出かけたこととなる。荒げた息の代わりに悪態が出た。一体どこに行った？職員室も先生がこつた返しているばかりで、最も期待の高かった応接室にも灯かりはない。その時、陽の視界に、踊り場に消える小さな物陰が映った。陽ははっとした。あれは荔枝のバイオリンケースではないか。

「おい！」

ケースの運び主は答えない。足音だけがする。陽は急いでその後を追ったが、四階で足音が消えるまで、ついに犯人の姿は拝めなかった。夕日に浮かび上がった影絵だけが、一瞬壁に映るのだ。彼方で

はなさそうだったが、自分の声に応答しない場所、荔枝が誰にも触らせないバイオリンケースを持ち歩いているところ、何か一枚噛んでいるかもしれない。荔枝の居場所を一刻も早く見つけ出すのが先決ではあったが、手がかりがまるでない以上、この怪しげな人物を片付けた方がいい。

「おい！てめえ、どこ行きやがった?!」

陽がたどり着いたのは三年B組の教室であった。普段授業を受けている場所である。陽を散々翻弄した人物は、荔枝の机の上にバイオリンケースをそつと置くと、陽の方をゆっくりと振り返った。篠木水無月　そう一瞬見えた。だが、違った。冷酷な笑みを浮かべ、曝した白い胸もそのままにいるのは、彼の弟、白蘭であった。似てないという前言は撤回だ。何せ、一瞬見間違えたのだし。兎に角双子のどちらであろうが、陽は彼を問い詰めなければいけなかった。陽は焦燥と怒りを抑えて言った。

「てめえ……何でてめえが荔枝のバイオリンを持ってんだよ？荔枝はどこだ？」

「さあ、知りません。俺はただ、先輩たちに制裁を与えるっていう人に協力しただけですから」

「はあ？？制裁？」

白蘭はすぐ隣の陽の席の前へと移動した。陽は目を細めた。自分の机の上に何かある。花瓶だった。白いランの花を一輪生けたガラスの花瓶だ。白蘭は花の萼を二本の指でとって持ち上げ、花弁にそつと唇を落とした。一枚の白い破片がはらはらと宙を舞った。

「何のつもりだ？」

「別に。ただ先輩たちが妬ましくなって。だつてあんなに仲がよさそうだから」

「おいおい、ふざけたこと抜かすのも大概にしとけよ。オレだつて、いつも優しくいる訳にはいかねえんだからよ」

「でも、その通りなんです。だから、二人の恋が家族を裏切つて実つたものだつて知つた時、罰しなきゃって思つたんです。何か罪を

犯して、のうのうと生きられると思ったら大間違いですよ。先輩？」
埒があかねえ。陽は思った。こんな少年相手に話をしようとしたのがそもその間違いだっただ。陽は踵を返した。こうなったら、校内中のものをひっくり返したって、さっさと荔枝を見つけなければならぬ。彼方が荔枝に何もしないはずがないのだから。足を踏み出そうとしたその時、胸にしっかりと絡みつく白蛇のような腕の存在に気がついた。いつの間にか白蘭が陽の背に回り、その身を拘束していたのだ。その腕は、今にも獲物を絞め殺そうとしていた。

「おい、怪我したくねえなら離れる」

「随分物騒なことを言いますね、先輩」

白蘭は陽の肩に頬を寄せていた。

「このままじゃ言うだけじゃ済まねえんだよ。とっとと離せ」

「駄目です。制裁を下すまでは、ね」

陽の喉に手がかかる。白く細い手は、以外な力を持って、陽の首を締め付けた。白蘭を突き飛ばそうとするも、彼は蛇のようにしなやかに陽の手足を交わす。その内に酸素が足りなくなってきたのを感じた。首にしがみつく手を引き剥がそうにも、指先に力が入らない。息苦しさの中で却って克明になるのは、荔枝を案じる心だった。「そこまでにしとけ」

酸欠の中で陽は耳を疑った。白蘭の手の力がふっと弱まった。その隙に白蘭の体を抜け出し、廊下の壁に寄りかかって小さく咳き込むが、目は既に声のした方へと向けていた。紺色の髪、青い瞳、そして憎憎しい口元の黒子と傲慢な笑み。紛れもない。生徒会長千住慎が学園に舞い戻ってきたのである。まるで不死鳥のように。

「慎、てめえ……!!」

「なんだ、会長か。いつの間に戻ってきたのか？」

白蘭は却って馴れ馴れしい敬語を投げ捨てて問う。慎は鼻で笑った。「ちょうど試合から戻ってきたところだ。おい、白蘭、悪いことは言わねえ。とっとと失せろ。てめえの商売は今の客だけで十分成り立ってるだろうが」

「偶には他の層にも興味が沸いただけだ。まあ、いい。会長直々の命令とあれば、そうするさ」

白蘭はランの花を放り捨てると、陽の顔を堂々と横切つて階下へと消えて行つた。陽はすぐに我を取り戻した。白蘭はどうでもいい。会長の復活記念パーティも後だ。まずは荔枝の居場所だ。だが、走り出そうとした陽の肩を、慎が掴んで制した。陽は前髪を退けて慎を睨みつけた。

「おい、何のつもりだ？」

「歓迎の言葉がそれか？」

「わりいけどな、お前に構つてる暇はねえ」

「さあ、それはどうだかな」

慎は陽の肩から手を引くと、忌々しげな舌打ちと共に、青い目を踊り場の方へ放り投げた。駆け上つてくる足音がする。陽ははつとして動き出し、階段を数歩下りたところで荔枝と再会した。二人は信じられないように互いの姿を数秒間見つめあつていたが、やがて荔枝の方が相好を崩した。軽やかな笑いが彼の胸から喉を突き抜けていた。

「何だよ？彼方に頭までおかしくされたか？」

一瞬でいつもの様に戻つて陽。荔枝は笑いながら首を振る。

「いや、何だか慌てていたのは急に愚かしく思えただけだ。そつちは何ともなかつたか？」

「……お前の方は？」

「彼方様が少し暴走しかけたが、あいつはとことん運のない奴らしいな。人を旧図書館まで連れ出しておいて、間際というところで、せつかくのお楽しみを奪われた。千住薫にね」

「兄貴が？」

その一言で、ようやく荔枝は慎の存在に気が付いたらしい。突然の慎の登場は、荔枝を相当驚かせたに違いないが、さすがに慎の天敵と謳われたもので、すぐにいかにも嫌そうに眉の根を寄せた。荔枝は腕を組んで一歩後ずさると、慎の頭から爪先まで観察するように

眺めた。慎も黙ったままにはしておけず、わざわざ聞こえるように大きな舌打ちをしてみせた。久しぶりではあったが、互いに何とか皮肉っぽい笑みを浮かべることができた。

「これはこれは生徒会長。授業にも出ず生徒会にも出ず、こんな所で何をしているのかな」

「状況説明ならためえの相棒にもくれてやった。後はゆっくり寮で話でも聞くんだな」

「生憎そんなことに感いている時間はないものでね。では、生徒会長、明日こそ生徒会室でお目にかかれることを期待しておくよ。陽、行くぞ」

荔枝に手を引かれ、陽は結局慎に一言も言えぬまま去って行くことになった。いいだろう。どうせ明日にはまた顔を合わせなければならぬのだし。慎は変わらぬ天敵の様子に一先ず口元を緩めたが、ふと先ほど浮かんだ疑問が笑みを返めた。兄がなぜ旧図書館などにいたのか、と。

白猫は長い尾を揺らし、駆け回る鶏を爛々と輝く目で見つめている。旧図書館前の薔薇の小道でのことだ。やがて鬼ごっこが始まり、辺りの暗闇は突然騒々しくなった。

今夜はいつかと立場逆転だ。ソファで眠るのは陽の方で、荔枝が背もたれに肘をついて、ぼんやりとその寝顔を観察している。寝顔だけはやたらと無邪気だと荔枝はいつも思う。これが目を覚ますとあちこちにちよっかいをしかけたり、嵐を引き起こしたり。それでも愛しいことにはまるで変わりないのだが。

荔枝は床に座り込み、ソファの反対側から背もたれに背を預けた。そういえば、愛しいと素直に口に出したことはあっただろうか。あったとしても多分少ない。陽の方はもつと少ない。言わなくとも動

作で分かっていた。四年の月日を寄り添って過ごせば。そんな日が、今日で終わりになったかもしれないことに、荔枝は薄っすらと恐怖を感じないではいられなかった。私は　目を閉じる。私は、陽なしで生きることなどとても出来そうにない。

荔枝は淹れたての紅茶を口に含んだ。やはり飲みなれたものでないと美味しく感じられないものだ。それに、愛する相手を一緒に食べなければ。あのハーブティも、もしかしたら悪くないのかもしれないが、共に飲んだ相手が最悪だった。指先でやけどの痕にそっと触れてみる。顎の左下と右手の甲に一箇所ずつ。陽に打ち明けはしなかったが、どうやら気付いていたようで、帰るなり救急箱を取り出したのは思わず笑ってしまった。それで気を悪くして、ソファで不貞寝という訳だ。しかし、何分陽は薄着だし、被せた毛布もすぐに落としてしまう。風邪を引かれても困るので、そろそろ起こしてやることにしよう。荔枝はソファの正面に回りこみ、陽の肩をそっと揺さぶった。何度か揺すって名を呼んで、ようやく大儀そうな応答があった。安心したのも束の間、陽の伸ばした腕が荔枝の体をソファの上に横たえた。狭いソファの上から転げ落ちないためには、二人ともぴつたりと密着している他ない。こんなことには慣れているはずなのに、頬が仄かに赤らんだ。

「陽！」

「うるせえ。眠いんだから寝かせとけ」

「こんなところで寝てたら風邪を引くぞ」

「だからこうしてんだよ。少しは暖が取れるだろうが」

「私を一体何だと思って……」

「だからうるせえ。今日一日誰のために学校中走りまわったと思ってんだ？」

「……私のため」

「……分かってんならこのままでいい」

分かっている。陽の無言の愛、言葉ではなく動作で示す愛、身に染みるほど感じている。だから多少窮屈でもここにしようとするの

だ。思い出すのは初めて思いが通じた日のこと。無言で後ろから抱きしめられ、体の感覚が信じられなかったあの日。

荔枝もいつしか眠りの中に引きずり込まれていた。それは穏やかな波の上で得るような、優しい眠りだった。荒い航海の後に戻ってきたのだと感じた。さざ波の上に。微睡みの中に。

第十六話 孤独な光・前編

平和な朝の空に歓声が響く。通学路に散在していた人の塊が、誰に唆されたでもなく、自然に一本の花道を編み上げていく。高みの見物を決め込んだ生徒会役員たちは、生徒会室の窓からその様子を眺めていた。けたたましいまでの声の中を、一人の生徒が颯爽と歩いてくる。ここからは紺色の頭がやたら小さく見える。

「よくやるよなあ……」

荔枝の頭に手と顎を預けながら、陽が半ば感心したように半ば呆れたように呟いた。

「いつものことじゃないか。久しぶりだから余計に盛り上がってるだけで」

「こんなものに毎日接していたなんて。慣れとは恐ろしいものだな」
我らが生徒会長が無事校門を潜り抜けたのを見届けて、三人はようやく窓から顔を背けた。机の上には冷めたり炭酸が抜けたりしたそれぞれの飲み物が、飲みかけのまま放置されている。誰一人残りに手を出す素振りは見せず、颯が何を思ったか、急にコーヒを淹れ始めたところで、荔枝がようやく口を聞いた。

「ところで、颯、例の化学講師はどうした？」

「千住薫のこと？全く君って人は、慎の家族っただけで信用しないんだから。この間助けられたんじゃないやなかったの？少しは恩義を示したら？」

「誰にでも安易に礼を言っているのは口が欠ける」

「けっ、お前の口は陶器製かよ」

「試してみるか？」

「別にオレは構わねえけど？」

「……なんかこのコーヒをぶちまけたくなってきたよ。生徒会室を汚さない方法があるといいんだけど」

「やめとけ。バカには毒薬も効かねえぞ」

降ってきた台詞と扉の開く音に、一同は一斉に反応した。とうとう生徒会長のお出ましだ。意気揚々、凱旋した将軍のごとく華やかにやって来た慎は、右手に脱いだブレザーを持って背中に流し、左手に全国大会優勝のトロフィーを抱えていた。荔枝と陽がすぐに苦々しい顔を作った。一方で颯は落ち着いたもので、慎からブレザーを受け取ると、引き換えにファイルとコーヒートを机の上に並べた。慎はトロフィーをぞんざいに置いて、すぐにファイルに目を通し始めた。

「お帰り、慎」

颯が言った。

「ああ。相変わらず碌に仕事もしてねえみてえだな。安心したと言えば安心したが」

「そいつはよかった。散々サボった甲斐があつたつてもんだ」

陽は慎の言葉に含まれた刺を全く無視して言った。慎は頬の筋肉を引きつらせただけで、無言でファイルを捲り続ける。遂に元に戻った。一月前の、懐かしい生徒会に。だが、役員全員が揃った訳ではない。四人は芳乃の席を見遣った。校長にも見習っていただけ。まっさらな机には、ただその隅にランの花を生けた花瓶があるだけだ。そしてその水底に古びた銅の鍵が沈んでいる。「旧図書館……」
慎は呟いて眉を寄せた。彼の頬は、まだ薄っすらと青白い。

「芳乃は何のつもりで学園に戻ってきたんだらう？」
颯がふと口にした。

「全てを捨てて学園を出て行ったんじゃないのかな？罪に耐え切れなくて……ここを去った訳じゃなかったのかな……」

「今度は捨て置くことに耐え切れなかったのかもしれない」

荔枝は紅茶を淹れつつも、決して無関心ではなさそうな口調だ。陽も同様で、頭の下に腕を組んで宛がったが、瞳は前髪越しに蛍光灯を見上げている。

「もしくは、捨ててきたつもりがすっかりしがみ付いて来てた、とかな」

どこかで鶏の声が聞こえた気がした。

「オレたちには一生分かんねえよ。あいつが何考えてるかなんてよまっ、あいつだってこのままにはしとけないだろ。いつまでもぐっすり寝込んでる訳にはいかねえんだから」

「花はあと一つだ」

慎は険しい目でランの花びらを射た。花はあくまでも純白を主張し続けている。だが、それ故に益々毒々しく、危険なもののように思われるのだ。鍵に張り付いていた泡が一つ弾け、水面で消えた。回転のぞき絵は加速していく。いつか来る終わりに向けて。

「……母親の夢を見た」

「母さんの？」

冷たいシーツ、冷たい部屋、冷たい体、冷たい花。この身と部屋を形容するのは、どれも同じ言葉であった。だが、ふと語られた言葉には、その声に似つかわしくない温度があった。白蘭の言葉に驚いたのも、あの山吹色の瞳の少年ではなく、語り手の兄の方だった。裸の腕にシャツを通しながら、水無月は白蘭の言葉に耳を傾ける。

「何も映らなかった。何も覚えてねえから……ただ白いだけの夢だった。でもこれが母親だと分かった。何となく、そんな気がした……」

「分かるよ」

水無月はボタンにかけた指を止めて言った。

「分かる。僕も時々そんな夢を見るから。僕も何も覚えてないんだ。写真なら父さんに何度も見せてもらったはずなのに、すぐに忘れてしまう。僕には母さんは遠すぎるよ。それなのに、なぜか何ともない感覚が母さんのように思われて……」

「言うな」

水無月はベッドに腰を預けたまま、そつと首だけを動かして振り返った。白蘭はこちらに背を向けるように寝返りを打ち、何も纏って

いない身をシートで覆った。言うな、そう言っただけで自分も落合桃真の言葉を封じた。認めたくない真実、否、一重に愛の奇跡のために。だが、それがいかにおぼろげで曖昧なものかを、水無月は知っている。それこそ、母親の夢のように。言葉にした瞬間、全てが砕け散ってしまふ。そんな気がするのだ。誰もが言葉によって傷つけられたこの世界を見ると。

「ハク」

「……その呼び方で呼ぶんじゃない」

「僕は構わないんだ。ハクにどんなに傷つけられても」

「はっ？」

微かに衣擦れの音がした。シャツの落下を、灰色の絨毯受け止める音。

「僕は……僕はね……」

母さんの顔を知っているんだ

「母の夢を見ました。今日」

「お母さんの？」

当校時刻が比較的のんびりなクリスマスとノア、そして、珍しい夢に戸惑い、朝のお勤め（つまり慎へのストーカー行為）を怠った明音は、慎の凱旋も知らず、人も疎らな小道を抜けていた。ノアが登校中の花木先生に捕まり、なにやら楽しい話している間に、明音は思い出したようにそう言った。明音は、腹違いの兄たちと同じ青い目を濟んだ空に向けた。

「久しぶりでした、何か。母さんのことって、普段はあまり考えないし。いつも頭の片隅にいるから、何かわざわざ思い出したりしないっすよね。だから怒るのかもしれないっすけど」

「怒ってたの、お母さん？」

クリスが尋ねると、いいえ、と明音は首を振った。

「反対つす。笑ってました。そういえば俺、母親が怒ってる顔とか、泣いてる顔とか、見たことないかもしれませぬ。俺を叱る時まで笑顔でしたから」

「優しいお母さんだったんだね」

「さあ。何が楽しかったんだかよく分かりませんがどね」

「そういえば、明音君もそうだよ」

「えっ？」

花木先生の早足に付き合い、クリスたちより一足先に校門にたどり着いたノアが遠くで手を振っている。クリスも大きく手を振り返し、すぐに走り出す準備をした。だが、まだ啞然としている明音が気になって、肩をぼんぼんと叩いて言う。

「明音君もいつも楽しそうだよ。少なくとも、俺が見てる限りでは」クリスは走り出した。すぐに友人の横に並んだクリスは、花木先生がノアに吹き込んだ渋い話題に苦笑いをしながら、どんどん明音から遠ざかっていく。明音は「あっ」という形で口を開けたままにして、その場にしばらく立ち尽くしていた。冷たい風が吹き付けて、ようやく彼の意識を再起動させる。何が一体楽しいのか。母ではなく、自分に訊いてみた。答えはあまりにも明快だった。慎様がいるから。誰よりも素晴らしく、誰よりも崇高な存在として、慎様が存在しているから。そして、その慎様と同じ学園に通い、同じ空を見上げ、同じ血を分け合っているから。

分かった気がした。母がいつも笑っていた理由が。息子のように現在進行形の喜びではなかったが、母もまた嬉しかったのだ。千住法正に愛されたこと。千住法正を愛したこと。そして、千住法正の子供を授かったことが、彼女にとって最大の喜びであったに違いない。だから、母はいつもこの血の中で笑っているのだ。

慎を迎える声はどれも盛大で、温かいを通り越して熱かった。慎

自身は知らないところだが、その騒ぎようは、クリスたちからも、原因不明で欠席している落合への心配を追いやるほどであった。クリスは様々な思いで顔を歪ませ、また、真央は、周囲はあれほど騒いでいるが、自分は来夏先輩のことしかみていないと宣言し、見事に来夏に頭を叩かれた。菜月は颯と過ごせる時間が減ると言って不満げだった。ノアは皆を見てくすくす笑っていた。

しかし、こうした個々の声を無視したとしても、慎はどこかで煮え切らない思いを抱えていた。それは欲望のようなものであったが、何をどうしたい故の欲望なのかは自分でもよく分からなかった。心が勝利に慣れきってしまったせいだ。優勝したとはいえ今回で連続四回目であるし、実際に同年齢で自分に適うものがないことは知っている。だが、その勝利は当然であればこそ、それを得た者の自尊心を益々高めるのだ。他に何かがある。自分が手に入れられない何かがある。

「やあ、これは千住君。お久しぶりですね。優勝、おめでとうございます」

そう言って歩み寄ってきたのは校長だった。慎は慇懃に礼を言ったが、警戒心を決して解いてはいなかった。いつかの校長室での攻防のことを、慎はまだ忘れていない。

「しばらく姿を見せなかつたので心配しましたが、元気そうでしょうか。しかし、学生の仕事は一にも二にも勉強ですからねえ。それを怠るのは、僕の立場としては少し嬉しくないところですが」

「今後は文武共に精進いたします」

慎が素直に言っていると、校長はその表面的なのを悟りながらも、満足そうに微笑んで頷いた。それから、慎の肩越しにとある人物の姿を見つ、快活に挨拶を飛ばした。慎は振り返り、そして眉をひそめた。白衣を纏い、生徒と話しながら悠然とこちらへ歩み寄ってくる人は、紛れもなく実の兄ではないか。千住薫、見慣れた名前がネームプレートに揺れていた。そして彼の腰元にいるのは、何とかの石崎・エーリアル・クリスと有瀬ノアである。慎は見られないように下唇を

わずかに噛んだ。

「おはようございます、校長先生」

「いや、今日は見事に晴れましたね。千住君、おっと失礼、千住慎君の華々しい功績に、実にふさわしいお天気です」

クリスとノアは次の授業があるからといって、薫に会釈をして階段を駆け上っていった。慎は二人の後姿をじっと見つめている自分に気がついた。一瞬こちらを見たクリスと目があつたが、クリスは慌てて視線を戻して去ってしまった。水晶の指輪を外した今、クリスの心にあるものは一体何なのだろう。一方で、ノアは見向きもしなかつた。

「しかし、慎君はまさに学園の誇りですね。千住先生も鼻が高いのではありませんか？」

「いや、実の弟のことですから。こうやって褒められると、何だかこつちまで照れくさいというか……」

困つたように笑う薫。慎は表情一つ変えようとしない。

「全く以て謙虚なご兄弟ですねえ。これからも期待していますよ、千住君。もちろん先生の方も……」ところで、僕は少し急用を思い出したので失礼いたします」

校長は笑いながらさりげなく二三歩後ずさると、くると向きを変え、射られた矢のように猛烈な勢いで駆け出した。残された兄弟の脇を、彼らを避けるように二手に分かれた校長搜索隊のメンバーが、雄たけびと共に走り過ぎていった。搜索隊が遠くになると、廊下はふいに静かになった。慎は兄の視線を額の辺りに感じつつも、観察するように自分を見るその目を見つめ返せないでいた。担当科目のせいだろうか。液体の形や色の変わり方、原子の結合、そういったものばかり見つめているから、弟を見守る目の色さえも無機質で冷たいのだろうか。そんな薫の表情が変わった。薫は口元を緩めると、率先して重苦しい沈黙を破った。

「どうした？いつもみたく突つかかかってこないなんて、お前らしくないな」

それは、教える者と教わる者の壁を取り払った言葉だった。慎も微かに笑い返す。

「いつまでもガキみたいな真似をしてられるか。生徒会長たる者が、みつともねえとこを周囲に曝す訳にもいかねえしな」

「なるほどね。自覚がある、というのはいいことだ」

「どういう意味だ？」

先ほどの言葉はどこへやら、頭に乘せられた手を払いながら、慎は早速怪訝な顔で聞き返した。薫は返事代わりに微笑を繕い、弟が背中を向ける方に向けてゆつくりと歩き出した。白衣の裾をはためかせ、授業用のファイルとノートをしっかりと腕に抱えて。だが、薫は何を思ったか、慎の肩から数歩歩いたところで急に立ち止まり、顔は真つ直ぐ前へ向けたまま、言葉にしなかつた釈明を述べた。

「自分が高位にあるという自覚のことさ。適度な自尊心は人を高めてくれる。だが、結局は薬と同じようなものだ。過ぎれば毒となる用心しろ。お前は薬をやや服用しすぎる傾向にあるからな」

薫が横目で確かめた時、慎も既にこちらに背を向けていた。慎は笑うような音を発しただけだった。

「おい、慎……」

「そうか。わざわざありがとよ、兄貴」

「慎、俺は結構本気で言ってるつもりだが……」

「分かってる。だから礼だけは言つといた。だが、生憎十分間に合ってるぜ。今の俺にその薬だかなんだかは必要ねえ」

慎は制服の脚を伸ばすと、兄の顔は一度も顧みず、手だけ振って歩き出した。もし薫が止めなければ、慎はたちまち曲がり角に消えて階段を突き進んでいただろう。余裕の笑みを称えたままで。だが、薫は残酷だった。慎の姿が見えなくなる手前、彼が思わず足を止めるほど穏やかな調子で、こう投げかけたのだ。

「慎、優勝おめでとっ」

フルーレの風を切る音が、ふと耳元で聞こえた気がした。

呼びかけともつかない弱弱しい声にも、芳乃は反応した。口の字型の白い建物に囲まれた、寮の中庭での出来事である。落合は歩み寄ろうとして躊躇した。調子が悪いと嘘をつき、友人たちをベッドの中から見送ったのが今朝のこと。今は日も高くのぼり、体力をもてあました落合は、窓から幼馴染の姿を見つけ、慌てておりてきたのである。芳乃が見つめていたのは、四階の角にある小さな部屋の窓だった。落合はその部屋の持ち主を知っていた。篠木兄弟だ。全部屋共通の水色のカーテンが閉められ、窓の中の景色は到底のぞめそうもない。普段はその内側にいるはずの芳乃が、どうしてこんな風に外から見上げているのか。落合には分からなかったが、理由を聞くほどの勇気も沸かなかった。

「なんだ、落合か……」

芳乃は口元を緩めた。手には萎れかかったランの花を持って。

「学校は休んだのか？」

「もちろん。じゃなきゃ今頃こんな所にいる訳ないでしょ？で、そういうそっちも？」

「まあ、な……」

「ふうん。具合が悪いようには見えないけど」

「そっちもな」言いかけて落合は口を閉じた。揺れる山吹色の瞳、目元や頬を覆う深い影、芳乃はとても好調そうには見えなかった。落合は空で何度か唇を動かした。舌がもつれて上手く言葉がでてこない。自分に尋ねる資格があるのか、それさえも分からないというのに……

「何？」

芳乃は刺のある聞き方をした。まるで弱った動物が怪我を庇って威嚇しているようだった。自分は決して彼の敵ではない。彼に救いの手を伸ばそうとしているのだ。そう信じて問うことを決めた。落合は一步芳乃に近づいた。芳乃は立ち尽くしたまま、落合の顔を睨むように見つめるばかりだった。

「お前さ、その……白蘭とは上手くやってるのか？」

「上手くいってないとでも言ってるほしいの？」

芳乃の唇が冷酷に歪んだ。

「芳乃、俺は……」

「君の気持ちは知ってるよ。ぼくのことをまだ忘れられないでいる。でも自分で突き放したからには戻って来いとは言い出せない。だから自然にぼくが戻ってくることを望んでる。そうでしょ？」

「芳乃……！」

「君には残酷すぎる答えだったかな？でも真実はそういうことさ。それに、悪いけどぼくは君のところには戻らないよ。復讐してやるって決めたから。ぼくと白蘭様を傷つけた奴らにね。例えば白蘭様が他の人を愛していようが、最後に白蘭様の心を手に入れるのはぼくだ。その日まで……ぼくはどんな荊の道でさえ進んでみせる。白蘭様の心を手に入れるために、ぼくは白蘭様の望む世界を作り出してみせる……そうだ……そう……そう決めたのに……」

芝生の上に崩れ落ちた芳乃の体を、落合は駆けつけて抱きとめた。抗ってこの手を抜け出すかとも思われたのに、意外なことに、芳乃は落合の腕の中でおとなしく俯いていた。久しぶりに抱く幼馴染の体は、異様なほど軽かった。落合は少なからずぞつとした。まるで終わりの間際の人のようではないか。ふと、セーターの袖を濡らすものがあった、落合は黙り込んだ肩をそつと揺さぶってみた。芳乃はゆっくりと顔を上げた。疲れきった頬の上を、小さな雫がきらきらと光って伝っていた。

「ぼくはどうすればいいの……？もう何をやっても苦しいだけだ。どこにも逃げ場なんてない。いつか至福の時がくると思ってひたすら足掻いてきたけれど、その時が遠いのか近いのかも分からない。すぐだと思いついて一歩進んでもますます遠ざかる気がして……もう何もかも嫌になった。でも投げ出せない。白蘭様の心を求める気持ちだが、そうさせてくれなくて……」

二人は同じ窓を見上げた。まだカーテンは閉じたままだ。誰も中に

いない他の部屋と同様に、じっと動かないでいる。呼びかければ果たして応えてくれるのか。

「ぼくは白蘭様のことを愛してると思い込んでたんだ。自分を犠牲にしてもいいほど愛してるって。でも、違った。結局まだ我が身が可愛くて。白蘭様のために犯した罪が苦しくって……」

「もういい、芳乃。もうやめろ。今なら俺から言える。戻って来い。戻って俺の隣にずっといる。もう苦しむな。あの頃に戻ろう。なっ？」

芳乃はふるふると首を振った。涙の粒が飛んだ。

「出来ないよ……もうここまで進んでしまった。あと一つ、あと一つ花が残ってるから……！」

「おい、芳乃！」

「これで全て決着をつけるんだ。今度こそ白蘭様の厭うものを消し去ってみせる。そして復讐を……ぼくは完全な夢を作り出すんだ。安らかな夢、永遠の夢を。ぼくたちはそこで生きる。その完璧な箱庭の世界で。全ての罪さえも忘れて」

その時既に、芳乃は落合の腕を振り払っていた。涙を花卉に受け、ランの花が瑞々しく蘇っていた。酔うほどの芳しい香を匂わせて。落合は止められなかった。後一つ、余計な芳乃の苦しみを見ることになるにも関わらず。

「秋元君、悪いけど、電気を消してもらえるかな？」

「は、はい」

若い新任講師に頼まれ、真央が目の前を慌てたように駆けていく。友人たちは半ば興奮状態だ。普段は目だけでも前方なんて見ないくせに、今日は体ごと黒板に向けている。いつも通り机に頬杖をついているのは、明音ぐらいだろう。彼とて内心は決して平常ではなかったのだが。化学室を益々白く染め上げていた蛍光灯の灯が落ち、ぼんやりと眺めていた顔が暗闇に消える。だが、耳元で交わされる

ささやき声は更に音量と速度を増すばかり。ざわつく生徒たちに先生が静粛を求めると、ようやく生徒たちは唇を閉じた。薫はおかしそうに微かに笑った。

「協力ありがとう。それじゃあ、今からこの液体に火を近づけるから、反応をよく見ておいてノートを取ることに。いいね？」

明音は目を閉ざし、暗闇に暗闇を重ねた。今、すぐ目の前の教壇に立ち、教室中の注目と尊敬を集めているこの講師は、例え半分だけにしても紛れもなく血の繋がった兄なのだ。この兄は明音と十ほども歳が離れていたから、明音は幼い頃に既にその偉業を聞くことができた。母はまるで自分の子のように話して聞かせ、明音もどこかで親しみを覚えていたが、実際対面してみると、それがいかに浅はかで傲慢なことだったかよく分かる。千住薫という男性はあまりにも出来すぎていた。まるで雲の上の人間だ。この男性と血が繋がっているなんて、到底信じられない。クリスは彼に対する尊敬と親愛を同時に得たが、どちらも当初から持っていた明音の場合は、尊敬しか残らなかった。憤を追う勇氣と根気はあっても、薫の後を追う勇氣はわかかなかった。なんだかあまりにも圧倒されてしまつて。

ため息は二度目の歓声に掻き消された。やはりそうだ。千住家と自分には計り知れぬほどの隔たりがある。今まで憤を募ってきたこと。カメラにその雄姿を収め、行動を一つ書きとめ、その後をひたすら追ってきたこと。心の中では密かに兄と思っていたこと。プレッシャーと兄への劣等感にさいなまれ、フェンシング場に入り浸りになった姿を、密かに見守ってきたこと。全て出すぎた真似のように感じられた。自分にはきつとそんな資格はないのである。ホウセイ・チズミにおいても同じことが言えた。千住家を囁す声を耳にする度、実は自分の家族なのだと内心誇りに思い、おこがましくも他の者たちに対する優越感まで覚えたものだが、今となつてはそんなことはできそうにない。薫という人間が目の前に立つて示してくれたのだ。この完璧すぎる、水晶の輝きのような人間が。千住家と涌水親子との壮大な距離を。母は今泣いているだろうか。

「涌水君、大丈夫かい？」

明音ははつとして目を開けた。化学室は元の白い空間に立ち返り、クラスメートたちが自分の顔に注目している。明音の背中に立ち、その肩に手を置いてるのは薫だ。明音は赤面した。どうやら具合が悪いものと勘違いされたらしい。大急ぎで首を振った。

「い、いいえ……な、何でもないっす……！」

「そう？それならいいんだが。じゃあ、各グループで実験を始めること。涌水君、話は分かるかい？」

「えっ、えつと……」

「いいよ。僕が教えるから。ほら、その試験管を取って」

「は、はい……！」

明音は高まる温度を感じていた。薫に直接手をとられて指導される。自分と千住家の人間では、こんなことでさえ本当は許されないのに生徒と教師であるから初めて許される。自分がただの生徒に過ぎないから、優しく微笑んでもらえる。でも、もし、薫が、自分が腹違いの弟であることを知ったら、その時は

えっ？

明音は思わず叫びそうになった。ピーカーを持った手が止まり、透明な曲面に映し出された青い瞳が見開かれる。母の姿が揺れている。

「涌水君？」

気のせいだったのだろうか。耳元でそつと囁かれた気がしたのだ。

「知っているよ、全て」と。

化学室の窓に、背を返す一人の少年の影が映る。芳乃だった。行き場のない白いランを握り締め、彼の行き着く先はいずこ。

水底の鍵に寄生した泡が、一つまた弾けて消えた。

第十六話 孤独な光・後編

「俺は好きになれません……千住先生のこと」

「えっ？」

クリスは目を瞬いた。昼休みの中庭は騒がしく、クリスたちもいつもの通り日向にシートを広げ、それぞれの弁当を使っているところだった。時々他人の弁当を拝借する不遜な奴もいるが、それはひとまず置いておいて。先ほど何食わぬ顔でから揚げをさらっていった菜月を横目で監視しつつ、クリスは明音の意味深な発言の方に注目することにした。

「好きになれませんって、どうして？だって、あの人は……せ、生徒会長のお兄さんじゃないか？」

君のお兄さんというところを皆の手前のみこんで、クリスは言葉を継いだ。明音は小さく頷いた。

「そりゃもちろん。でも、あの人は慎様とは違うんっす。何と云うか……完璧すぎて、遠すぎて、自分の卑しさを思い知らされるような……」

「まあ、分からなくもないけどさ。確かに先生は出来すぎた人だとは思っよ。でも、優しい人じゃないか。生徒会長と違って人を見下したようなところもないし」

言った直後に慎の悪口を言ってしまったことに気付いたクリスは、弁当の中身を全て菜月にとられるのを覚悟で逃げ出そうとしたが、明音は乗ってこなかった。その不自然な態度には、会話に加わってなかった他の友人たちも、不審そうに眉をひそめて口を閉ざした。明音はぼんやりと箸先を見つめている。紫色の謎の物体がくっついた箸先を。

「明音……？大丈夫？」

「うん」

恐る恐る真央が尋ねると、明音は上の空で応えた。

「大丈夫。今日の夜ご飯何作るうか考えてただけで」

「そう……あの、頼むから、その今食べてるのだけはやめてね。あとカレーも」

「うん」

一同はついに顔を見合わせた。これは絶対何かあったというのが、満場一致の見解であった。膝を抱え、小さく上下に揺れながら、明音は四時間目の授業のことを思い出していた。千住薫は知っているのか。あれは自分の思い過ぎなのか。確かめるにも手段がない。もし、薫が、自分が弟であることを知っていたら、自分は一体どうなるのだろうか？学校を追い出されるのだろうか。周りは薫を優しい人だというが、自分にそうは感じられないのは、薫が無言の圧力をかけているからなのか。お前が千住家を家族と思うなんて、思い上がりにも程がある、と。

「あつ、千住先生！」

クリスの声を聞いた時、明音はどうか聞き間違いであつてくれと密かに願った。こんな時に顔を見なければいけないなんて、タイムミングが悪いにも程がある。明音の願いは通じず、朗らかな挨拶が聞こえた後、薫は屈みこんで明音の両肩にそつと手を置いた。思わず箸を取り落とした。慌てて拾おうとしたのよりも早く、薫が取り上げてこちらに手渡した。明音は小さな会釈でしか感謝の意を示せなかった。

「先生、どうしたんですか？」

明音の肩に置かれた手にほんの少し気持ちの良くないものを感じながら、クリスは聞いてみた。薫はやはり平等で、クリスに対しても優しく微笑んだ。

「いや、涌水君の様子心配だったから。さっきの授業はあまり元気がなさそうだったしね……」

「そうなんですか？明音君、どうして言わなかったの？だったら、保健室に……」

「いえ！あ、あの、別に何でもないんすよ！俺はこの通りピンピ

ンしてますから！」

クリスの申し出に、明音はわざわざ両手を振り回す妙な振りまでつけて、元気澁刺であることを証明してみせた。友人たちは思わず吹き出し、薫も笑声を立てた。明音はちらりと横目で薫を見た。内心はあざ笑っているのだろうか。やはり卑しい生まれの子供だと。だが、彼の掌は不思議なほどに温かく、細めた青い目は穏やかだった。薫と慎と明音、三人に共通しているこの瞳の色。これまでは誇りだった。でも、今は……

「えっ？」

薫が何か言っているのに気が付いた明音は、急いで姿勢を正して耳を傾けた。

「あつ、今なんて言いました？千住先生？」

「いや、少し君と散歩がしたくてね。僕はまだ学園の様子をちゃんと見ていないんだ。僕が卒業してからどんな風が変わったかみてみたいし……明音君、案内してくれるかい？」

明音はためらった。それは要するに二人きりで話す機会を作るということなのだろうか。もし、そうなれば、今ここでは話せない話題も出るかもしれない。しかし、明音の懸念を知らなかったのか忘れてしまったのか、クリスが明音の代弁でイエスの返答のようなものを口にしてしまった。

「俺も途中まで行きます。有瀬の様子も見にきたいので。ジャクソン先生に引つ張られていってそのままですから」

薫は満足げに頷いて立ち上がった。今更断る訳にもいかなかった。明音も、仕方なくそれにならった。想像したくはなかった。これからどんなことが語られ、どんな思いがこの胸を突くかを。

「じゃあ、ちよつといっってくるね」

「ああ」

来夏はパンを口にくわえたまま、さつと手を振った。薫を挟み、クリスと明音、二人の先輩後輩は、それぞれ対なつた表情と心で中庭を後にしたのだった。

クリスは昇降口まで二人に送られ、職員室を覗き込んだが、先生たちは大方出払っており、ジャクソン先生もその多数派漏れなかった。体育科の森先生がカツ丼を掻っ込んでいる姿に、なにやら畏怖のようなものを覚えながら職員室を後にし、クリスはカフェテリアへと出向いた。混みあった店内で、（よく目立つとはいえ）ジャクソン先生とノアを探し当てることは、なかなか難しそうのように思われた。クリスはすぐに諦めた。大体弁当を持ってきたノアを、ジャクソン先生がカフェになど誘うはずがない。ところが、カフェを出た途端、ジャクソン先生が鳥居先生の愚痴に付き合いながら歩いている場面に出くわした。クリスは急いで二人の後を追いかけた。

「ジャクソン先生！」

「あら、クリスじゃなあい。珍しいわねえ。どうしたの？」

「あの、有瀬は一緒じゃないんですか？」

「ノアちゃん？随分前に別れたけど？」

「えっ？」

クリスはノアの携帯に続けて三回ほど電話を掛けてみた。いずれも留守番サービセンターに繋がった。一体どこに行ったんだ？どこかですれ違ってしまったのだろうか？自分が千住先生と話すのに夢中だったばかりに。クリスは校内を駆け回り、副校長に廊下走行の現行犯で見つかって叱られ、そのついでにノアが西校舎の裏にいたという噂を聞いた。クリスは礼を言って、再び走り出した。

「有瀬？有瀬！」

焼却炉やら貯水タンクやらで立込んだ校舎裏は、あまり見通しが聞かない。クリスは親友を見落とすことのないよう、名を呼んで歩いた。ふと思いついたのは、そう昔でもない図書室での出来事だ。司書の神経を刺激しないよう小さく名を呼びながら、本の森を進んでいった。そしてその先で、慎とノアの密会の現場に出会ったのだ。まさか、今度も同じようなことではないだろうか。嫌な想像は、すぐさま頭から振り払うことにした。馬鹿げている。有瀬は、友達

との約束をすっぱかして、生徒会長といちゃいちゃするような奴じゃない。そう信じたかった。

人の声が出た。クリスは足音を忍ばせてそっと桜の木陰に身を潜め、様子をうかがった。林檎の林の入り口で、静かに動く二つの影。果たして、そこにいたのはノアと慎であった。熟れすぎた林檎を見つめるノアの頬に、慎がそっと手を伸ばした。裏切られた。一瞬そう思った。全身が凍る思いがした。しかし、ノアが慎の腕を振り払うのを見たとき、クリスの体を捕らえた氷は一瞬で叩き割られた。クリスははっと息を呑んだ。

「有瀬……！」

「ごめんなさい、千住様。でも、僕はもう……貴方の影ではいられません」

一度拒んだ手を両手に包み、相手に返すノアの気遣いは、クリスの目には残酷すぎるように見えた。ノアは静かに微笑んでいた。まるでやるべきことを遂げた人のような、満足感を以て。だが、その微笑は激しい揺さぶりと言問の中に消えた。

「なぜだ?!」

「先輩……っ！」

「理由を答える！お前は今までずっと俺に従属してきただろうが！お前は水晶の意思の通りに動くはずだ。今更になってなぜ俺から離れていこうとする?!」

「違います……違います……っ！千住先輩！」

「何が違う?!兄貴が来たからなのか?!兄貴が学園に来たから、俺は既に……！」

「やめろ！」

考えるよりも先に飛び出していた。慎の剣幕に怯えるノアを、大切な友達を、これ以上はとも見ていられなかったから。クリスは二人の間に割って入ると、ノアの前に立ち、庇うように右手を突き出した。「クリス様……」ノアが震える声で呟いて、クリスの肩に縋った。クリスは驚いた。真正面から睨んで見る慎の顔は、最後に球

技大会で見た時から信じられないほど蒼白だった。華やかに学園に舞い戻ってきたのかと思つたのに、疲れきり、光を失い、全てを消耗しきつていた。表情からはいつもの余裕が消えうせ、目元や口元に見える感情は露骨であった。それでも今の行為を許す訳にはいかず、クリスは勇んで彼に歯向かった。

「会長、どういふことですか？」

「よう、石崎か。久しぶりだな」

慎は微かに皮肉っぽい笑いを示した。相当無理にこしらえている笑みだった。

「挨拶は後です。とりあえず説明してください！どうして、有瀬にこんな風に迫つたりしたんです？貴方らしくない」

「はっ！『貴方らしくない』だと？笑わせる。てめえが俺の何を知つてやがる？いちいち口を突つ込むな。これは俺と有瀬ノアの問題だ」

「違う！有瀬をこんなに怖がらせて、貴方には有瀬を引き止める権利もない！大体……大体、従属つて何なんだよ？！有瀬を一人の人間としてすら見てない証拠じゃないか！」

「クリス様……」

「俺は有瀬のことをてめえが転校してくる前から知ってる。親友面するのもいい加減にしろ」

「そつちこそ！有瀬に所有物みたいな扱いをするな！」

もういいですから、それだけ口の形で呟いて、ノアはクリスの手をとつた。しかし、クリスも引けない所までやって来ていた。生徒会長然り、理事長然り。ノアを孤独に追い込み、自分の都合のよい時だけ利用し、その上で平気な顔をしている。そんな奴らの根性を叩き直してやりたかった。慎の顔からも不自然な笑みが消え、冷徹にクリスとノアを見下ろす青い瞳だけが、真昼の高い日に照らし出され、鷹の目のように鋭く光った。

「……そこまで友達が大切なら、いつそ綺麗に決めてやろうじゃねえか。今日の放課後、フェンシング場に来い。決闘だ。負けた方は

今後一切有瀬に干渉しない。それでいいな？」

「はあっ？待てよ、そんなのこつちが不利に決まってるだろ！そつちはプロ、こつちは剣にさえ触ったことがないんだぞ！」

「時間は五時だ。遅れるな」

「千住先輩待つてください！そんなの幾らなんでも……！」

「幾らなんでも無茶、じゃないか？慎？」

三人は同時に林檎林から顔を背けた。声の持ち主は見なくとも分かった。慎にとっては一番聞きたくない声、クリスにとっては一番頼りがいのある声だったから。白衣を脱ぎ、長い散歩の後で汗ばんだのかシャツの袖を捲くた薫は、信じられないように目を見張る明音を隣に、悠然とその場に立っていた。この修羅場を前にして、薫には余裕があった。まるで弟から奪い取ってきたかのように。薫は明音の頭をそつと叩いて言った。

「大丈夫だよ、涌水君……」慎、お前は後輩相手に何をむきになってるんだ？少し頭を冷やせ。初心者相手にフェンシングで決闘を申し込むなんて、卑劣極まりないやり方だと思わないのか？それでよくフェンシング部のキャプテンを務めてられるものだ。見損なつたよ、慎」

「千住先生……！」

今度は明音が薫の肩に縋つたが、薫は兄の義務の名の元に優しく彼を押し返して続けた。

「慎、俺の先ほどの注意は、どうやらお前の言うとおり不必要だったようだな。今のお前には自尊心なんて欠片もない。生徒会長の資格どころか、誰かに何かを命令する資格もない。お前にはつくづく呆れた。まあ、それほどまでに執着したいものがあるということは認めてやる。決闘なら俺が石崎君の代わりに受けて立つ。相手に不足はないはずだ。お前にとってはな。俺にしてみれば、そんな風に誇りを失つた相手など……」

「もうやめてくださいー！」

再び明音だった。明音は叫ぶなりその場に崩れ落ち、言葉も嗚咽も

伴わずに泣き出した。薫はそれ以上喋る気などなかったようにぴたりと口を閉ざした。薫の手がかけられると、明音の涙は一層速度を増して頬を流れ、膝頭に染みを作った。薫では逆効果になることに気がついて、クリスは明音の傍に寄っていったが、慎が後ろから追いつきざまに言った言葉は、はつきりと聞き取れた。

「それでいい」
それだけだった。

フェンシング場へ向かう足を取られた。明音は、白亜の建物に吸い込まれていくクリスを見、ノアを見た後で、薔薇の小道を走るようにして突っ切った。季節はずれの汗を臉から払えば、目の前に現れたのは、皆が噂するあの旧図書館であった。

明音は名画の階段を踏み、薄暗い館内の中へと進んでいった。なぜここへ来てしまったのかは分からなかった。初めて来る場所だ。そもそも高等部の校舎にある図書室ですら、慎のストーカー以外にはクリスに誘われた時にしか使用しないのに。今はたった一人で壮大な本棚に囲まれて立っている。微かに埃っぽい空気が、明音の喉を濁らせた。明音は咳をした。どうしようもなく切なく、さびしく、苦しく、物狂おしいなかで。入り損ねた扉の外から、剣を振るう慎をずっと見つめてきた。慎はまるでこちらには気付いていなかったけれど、それでも構わなかった。心から尊敬する慎と、例え半分でも血を分けた兄と、思いを同じに出来るのならば。

慎はずっと悩んでいた。彼はいつも薫の影に苛まれていた。それは、学園創立以来の天才と呼ばれた兄が、その栄光の元に落としていった影であった。幾ら進んでも、幾らのぼっても、決して兄には追いつけない。劣等感 最も慎に似つかわしくない言葉が、あるうことが、慎の胸に常に居座り、毒の鍋をかき回し続けていたのである。フェンシングに取り分け懸命に励んでいたのは、五年連続優勝を果たした兄に、今度の勝利でようやく追いつけると思ったから

だろう。これでやっと高等部最後の年で、兄の記録に並んだのだ。明音は慎の優勝を知って誰よりも高く飛び上がった。これで慎様は劣等感から解放されるんだ。そう強く信じて。

だが、慎が抱えた影は、たかが一つ兄と並んだぐらいですぐに払拭されるような、色の薄いものではなかった。明音が汲み取れるような、生温いものではなかった。兄の影は現実に彼の目の前に現れ、慎を惑わせ始めた。惑わせたばかりではない。弟に追いつかれても悠然と微笑み続ける兄の態度、近づいたと思えばまた離れていく絶望、これらが慎の劣等感を歪曲し、プライドという名の心の箍を外したのだ。慎は兄を追い抜けるものを手に入れようとして暴走した。そして、かつては自分の隣にあったもの、今は奪われてしまったもの、光を引き立てる影としての有瀬ノアを欲したのである。明音の胸を突いた思いはありすぎた。言いたい言葉はあまりにも多すぎた。慎を救いたかった。ただの引き立て役、添え物、一個としては不十分なものになっても構わない。慎の影の役割を担いたかった。何でも投げ出せる覚悟があった。命、名誉、記憶、友人、感情、或いは世界でさえも。それでも、慎は明音にその役割を与えようとならない。それは、自分があまりにも小さすぎる存在であるから。ただの熱烈すぎるファンの一人なのだ。画面の端にちらりと映っているだけの、名もない役者なのだ。

「どうして……？」

そうは言っても誰も責め立てることは出来ない。クリスも、ノアも、慎も、薫も、自分でさえも。自分は舞台の上にすら立てていないのだから。

脚に触れた何か柔らかな感触に、明音はびくっと身を震わせた。生物以外ではありえない、絶え間なく脈打つ温度。恐る恐る見下ろしてみると、何と信じられないことに、真っ白い羽毛を膨らませた雌鶏が、明音の足の間を通過していったところだった。

「チ、チ、チキン……っ?!」

「貴方、泣いてるのね」

明音は素早く振り返った。白いスーツを纏った浅黒い肌をした女性
が、司書室の入り口からこちらをじつと覗いていた。指摘の意味が
よく分からず、明音は指でそっと泣き黒子から伸びる涙痕を辿った。
湿った冷たい道であった。

「あつ、あの……」

「初めてここに来たのね？私は司書よ。今日はお客さんがいなくて
暇を持って余していたの。だから、少し司書室でお付き合いしてくれ
ると有難いわ。お茶とお菓子はいかが？」

「あの、その……」

一穂はルージユを引いて薄紅色に光る唇の端を高く引いた。

「いらつしやい」

すわり心地の悪いパイプ椅子の上に、明音はぎこちなく腰掛けた。
司書室は散らかっていた。映写機は巨大なスクリーンに古い邦画を
映し出し、その周りにノート、鉛筆、紙くず、本、鶏の羽などがば
ら巻かれている。それでもティーセットだけは清潔で、一穂は純白
のカップの内側を、透き通った琥珀色に染め上げた。差し出された
カップは、礼を言って受け取り、一口飲んだ。熱すぎて舌を火傷し
たが、香の良い紅茶であることはよく分かった。

「貴方、名前は？」

一穂がフルーツケーキを分厚く切り分けながら尋ねた。

「わ、涌水明音です。明るい音であかね……」

「あら、可愛い名前ね。女の子みたい、と言つては失礼かしら？
も素敵。それで、涌水君の学年は？」

「一年生です」

「そう。本はよく読むの？」

「えっと、正直言うともあまり……」

一穂はくすくすと笑った。明音は赤くなつた顔を背けた。この司書
に、母親の面影を認めた気がして。放り出した視線は、先ほどまで
一穂が手にしていた童話の表紙に着地した。人魚姫の金文字が辛う
じて読み取れた。

「ああ、その本ね、破れてたから何とか修復しようと思って……」
一穂はフルーツケーキの残りをしまいこむと、明音に差し向かいになつて座つた。ますます落ち着かなくなつた。ケーキを端からフォークで削つてみたが、口の中がからからに渴ききり、とても胸より高い位置には腕を運ぶ気になれない。少し冷めた頃を見計らつてもう一度紅茶に挑戦したが、濃く淹れた茶は胃に重く押し掛かり、舌の表から僅かに残つた水分をさらつていったばかりであつた。

「ねえ、涌水君、貴方はどう思う？」

「えっ？」

突然の問いを受け、明音は皿から顔を上げた。思いつめたように人魚姫の表紙を撫でる一穂の背後には、千住法正として活躍していた頃の父がいた。スクリーンの中で、父は何かを憂うるように腕を組んで立ち、ぼんやりと遠くを見つめていた。明音はそのシーンを知っている。華族の家に育つた主人公が一人の町娘と恋に落ち、彼女のいない舞踏会の会場で密かに思い悩んでいる場面だ。

「人魚姫の話つて悲劇的すぎると思わない？どうしてこんなに悲しい話を子供に聞かせなきゃいけないのかしらね。違う世界の人に恋しても、所詮その恋は叶わない。全てを捨てて恋に見を捧げても、結局はただの海の泡になつてしまふ。せめて子供だけには夢を見させてあげればいいのに」

それからふと一穂は口を閉ざし、突然何かに気付いたかのように明音の顔に目を凝らした。

「ねえ、貴方、兄弟はいる？」

「えっ……？」

映写機は微かに揺れて狙いはずれ、一穂の頬にも千住法正の一片を投げかけた。一穂の顔に父が重なり、父の顔に薫が重なつた。怯えながら臨んだ昼休みの尋問が蘇つてきた。それは、同じ質問で始まつた悪夢だつた。

「明音君、兄弟はいるかい？」

「えっ……？いいえ、いませんけど……」

「そうか、一人っ子なんだ。それじゃあ部屋は友達と一緒になのかい？」

「はい、そうです」

「羨ましいな。僕はずっと弟と一緒にじゃなきゃいけなかったから、友達と一緒に生活してみたかったんだ。兄弟だと何かと揉め事が多いからね」

「そう……なんですか？」

「うん。大体そんなものさ……ところで、話は変わるけど、涌水静香って女優さんを知ってるかい？」

「えっ？」

「いや、涌水って珍しい名字だから、もしかしたら親戚じゃないかと期待したんだけど。父の昔の映画に出ていてね。とても美しく、演技力も素晴らしい女優さんだった。残念ながら、その後女優としての活動はやめてしまったようだけどね……」

明音は拳をきつく握り締めた。汗ばむ手に力を込めすぎて肩が震えた。薫は嘘を吐いている。体面を整えるだけの嘘、見透かされるためだけに用意した嘘を。母は千住法正と共演なんてしていない。母は妊娠が発覚した時点で役を降ろされた。主人公に仕えるメイド役を務められる女優ならば、他に幾らでもいたから。母の名はどこにも記されなかった。千住法正と涌水静香は出会わなかったことになっっているのに。やはり薫は知っていたのだ。

「ねえ、涌水君、どうかしら？」

ここが司書室だか、尋問を受けた林檎並木の道の上だか、明音にはまるで分からなくなっていた。ペンと本が路上に散らばっているのが見える。人魚姫の本は新しく蘇り、真っ白いページを風に煽られている。陸に立っていた父と海の底にいた母は確かに出会い、恋をした。その結果として明音が生まれた。母は人魚姫などではない。彼女の恋は一時的であったとしても実ったし、彼女は永遠に幸せだ

った。そう信じたかった。だが、果たしてそうだろうか？母の思いも記憶も何もかも、この世界から綺麗に抹消されてしまったではないか。まるで消えいく海の泡のように。いや、泡はまだ弾けていない。この血の中に流れている。だが、もし明音の身が消えてしまったら？全ては本当に忘れ去れてしまう。薫たちに見れば、その時こそ本当に全てを忘れ去ることができなのだ。慎様も自分のことを知っているのだろうか？慎様も、自分の消滅を願っているのだろうか……

映画の中の父は、当時の大女優演じる美しい令嬢と踊っていた。明音は虚ろな目を白黒のスクリーンに向けた。たった一枚の画面越しにも、父らが嗜むワルツは聞こえてこない。踊る二人の背後を、様々な人の顔が飛んでいく。明音はフォークを取り落とした。

母がいた。主人公と令嬢が微笑みあう画面の隅に、ぼんやりと佇んでいる。共演していたという薫の言葉は嘘ではなかった。壁の花となってしまう乙女の一人の役で、彼女は確かに父と同じ画面に映されたのである。母の目が、ふと画面を向いた。横切る人に度々遮られるその小さな視線には、きつと今まで誰も気が付かなかっただろう。母は一瞬笑った。燕尾服の男性の影に隠れるまでのほんの一、二秒の間だけ。そして、その瞬間だけ、母は映画の中の人ではなかった。涌水静香という実在の女性であった。

「バカね」

母の声が聞こえた気がした。
「全てを賭けてもの恋が、儂く弾けて消えてしまう訳ないでしょう？」

パイプ椅子は背中から転げ落ちた。明音は立ち上がった。忙しない動悸と、さざなみのような興奮を胸に抱えて。人魚の泡が消えてしまう恐れなどない。泡は丘にのぼったのだから。母は明音を陸の世界で生み落としたのである。明音は最初から兄弟たちと足の踏み場を共にしていたのだ。行かなければならなかった。母が与えたこの足で、走っていかなければならなかった。慎が戦うあのフェ

ンシング場へ。

「涌水君……？」

「全てを賭けてもの恋が、儂く弾けて消えてしまふ訳がないっす。人魚姫の恋はまだどこかで息づいてますよ、きっと」

挨拶もお茶と菓子の礼も、全部その言葉に込めた。明音は倒れたパイプ椅子を蹴飛ばして、もう暗くなり始めた外の世界へと駆け出していた。一穂は椅子に座ったまま、膝の上の愛鳥を機械的に撫でていたが、やがて破顔した。その時だけ、彼女は与えられた役割から離れ、屋城一穂という一人の女性でいた。

「やっぱり貴方の弟ね。私はまるで歯がたたなかつたどころか、彼を勇気付けてしまったわ。だから……彼を影に追い込むのは、貴方たちが代わりやって頂戴ね……」

剣が宙を舞い、その切っ先がランの花から花弁を奪っていった。残ったのはたったの一枚。それでも花はまだ死んでいない。芳乃はランの花を祈るように持ち、フェンシング場のギャラリーを後にした。その姿を見ていたのは、勝利に悠然と顔を上げていた薫だけだった。

寒さが身に染みる。冷気は皮膚を抜け、肉を裂き、骨を突き通す。入ってきた順番と同じで、野次馬どもが先に去り、審判を勤めた森先生が退出し、最後にクリスとノアが白亜の建物を後にした。全ての影が薄れ始めた夕暮れのことだ。今や濃紺の空に星が光り、下弦の月が天頂に霞んでいる。慎と薫はまだ出てこない。二人の存在を示唆するのは、フェンシング場の窓から漏れる微かな灯かりだけだ。きっと慎様はまだ喪失を認めきれずにいるのだ。せつかく並んだと思つたフェンシングで兄に負けた。そんな劣等感も追い討ちをかけたはずだ。それでも慎様は必ず戻ってくる。誰に頼るでもなく、兄の影を打ち負かし、自分一人の力で華やかな凱旋を遂げるだろう。

明音にできるのは、その時をひたすら信じて待つことだけだった。たった一人の弟として。震える肩を抱きしめて、空っぽの腹をなだめる。後一分だけ、後一秒だけ、それだけ待てば、きっと慎様は……フエンシング場の灯かりが消えた。

「慎、強くなつたな」

「何を……」

「嘘じゃないさ。心からそう思ってる。俺は嬉しいよ。兄として、お前が誇らしい。だから、自信を取り戻せ」

「違う、俺は……」

「大丈夫だ。お前なら出来るさ。俺はお前のことを信じてる。それにほら……こうしてみると敗北もそう悪くないものだと思わないか？」

「兄貴……！」

慎、夢の中は心地がいいだろう？今、学園は眠っている。そして、嘘甘い夢に耽っている。だがその夢も直に終わるだろう。虚構の世界は所詮長くは続かない。

慎、この夢の中で、俺とお前が感じているものだけが本物だ。俺ならお前を救ってやれる。さあ、俺を信じて……全てをゆだねて……全ては水晶の意思のままに……

第十七話 夢の終わりの黙示録・前編

目を閉じたまま撫でたシーツは、昨夜の熱を失って冷たくざらついている。集めた砂を摘み上げて寝台の外に零し捨てた時、指先を包む温度に感じてそつと目を開けた。浅黒い掌は翻されて薄青い天井に砂の山を示し、馴染み深い親指がその微かな隆起を均していく。あつ、という小さな声が漏れた。全てが払われた彼女の手の平に、彼は自身のそれを押し付けるように強く重ねた。

「どうした？」

「いいえ……でもふと思ったの」

「何を？」

冷たくざらついた感覚が、彼に向けた背中にもひろがった。今この目で確かめられる彼の体は、ただ空中で頼りなく繋ぎ合わせた右手のみ。一穂は再び目を閉じた。消えかけたワイン色のルージュを拭い、舌先に押し付けてくる左手を感じながら。

「こんな夢がね……いつまで続くのかしらって……」

丸まった鶏が小さく寝言をもらした。

重苦しい布団を跳ね除けて飛び起きた。暖房のせいで妙に生ぬるく乾燥した肌に汗が滲み、寝巻きの下は不快な湿地と化している。芳乃は額に張り付いた髪をはがした。こんな部屋で寒気が止まらない。

枕元のグラスに手を伸ばすと、氷が溶けたせいなのか、水の量は寝入った時よりも確かに増していた。一口飲むと、冷たい刃が塞がった胃への経路を切り開いていくような心地がした。少しむせ、それからランプの灯りに現在の時刻を見る。午前四時少し過ぎ、窓の外は暗黒だ。

全く、悪夢に戦って飛び起きるなんて何年ぶりのことだろう。子供ではあるまいし。ベッドの上で胡坐をかき、壁にもたれかかりな

がら、芳乃は自嘲気味に笑った。いや、自分は分かっていた。悪夢を抽斗の奥に押し込み、鍵をかけ、目を瞑り続けても、美しい夢だけとの共生はできないことぐらい。悪夢の正体は現実だ。自分は抽斗を閉ざして確かに眠ったつもりでいたのに、痛みはまだ胸に曳いている。現実には夢の中でさえも襲い来る。時間切れなのだ。黙示録はその役目を果たさずにはいられない。それでも今まで必死に嘘を信じ、耐えてきた。そして今、目の前で崩れ朽ちていく棚を見ながら、たった一つの花弁を残したたった一輪のランに縋って生きていく。しかし、その一輪は、或いは奇跡の花となるかもしれない

萎れた茎を飲みかけのグラスの水に浸し、芳乃が脳裏に思い描いていたのは、輝くばかりの金髪を持った、青い澄んだ目の少年だった。この学園に戻ってきた時、彼が最初のランを芳乃に手渡した。人を惹きつけずにはいられないあの光、真実を照らし出すほどの眩しい光、思えばこの夢は始まりこそが間違っていたのだ。あんな光の下で、この夢がいつまでも安寧に続くはずがない。

芳乃は正面の壁を仰ぎ見た。銀の額に縁取られた絵は、見慣れすぎて暗闇の中でも目に浮かぶようだった。美しい水彩の花々が咲き誇り、草と木の青が朝日に霞む、広大な庭園の様子だ。それは、初めてクリスと水無月が出会った日、水無月が画集に求めたクリスの絵と同一のテーマのようにも見える。どこか高いところから庭園を見下ろしたみたいな絵。

光を叩き潰すしかない。決意する芳乃の薬指に、水晶が光っていた。

「クリス様……」

「何？お腹空いた？それともタオル？あつ、水でも持ってこようか？」

「いいえ、そうじゃなくて……」

ベッドに横たわるノアの頬は赤い。いちいち呼吸をするのもしん

どそつだ。小さな電子音が検温の完了を知らせると、クリスはノアの脇から体温計を取り出して眺めた。三十八度四分。予想はしていたが、まさか昨日わずかに咳き込んでいたのが、ここまでひどくなるとは思わなかった。繋いだノアの手が妙に熱いのに気付いて今朝も目が覚めたのだが。一体どこでこんな風邪をもらってきたのだろうか。フェンシング場が寒かったのが問題だったのだろうか。クリスは参ったように頭に手を充てた。

「うーん、これじゃあとても学校は無理だよなあ……」

「クリス様、あの……」

ノアの呼ぶ声には気が付かず、クリスは一度階下に向かい、桶の中にコップやらペットボトルの水やらタオルやら氷やら、とにかく大量に抱えて戻ってきた。氷水に浸したタオルをノアの額に宛がい、コップに余った氷と水を注いでノアの口元まで運ぶ。少し身を起こして水を飲み、再び枕に頭を置いたノアは、クリスの頬にますます熱くなった手を伸ばした。

「クリス様……」

「有瀬、大丈夫だよ。今日と土日で休んでればきつと治るから」

「クリス様、あの、そうじゃなくて……」

「何？」

ノアの手が力なく落ちたのを、クリスは両手で受け止めた。何度も息を吐き、もつれる舌を懸命に動かそうとするノアの口元に、クリスは耳を近づける。熱い息が鼓膜を震わせた。

「あの……その……」

「えっ？」

視界の端でノアの頬に更なる朱が重なったように見えたのは、クリスの気のせいだったのだろうか。

「いえ、あの……やっぱり何でもありません……」

ノアが寝返りを打った拍子に、濡らしたタオルが床に落ちた。クリスが急いで拾いあげると、先ほどまでひんやりと冷たかったはずなのに、額に宛がっていた部分はもう熱を吸って生温くほださされてい

た。クリスはまだ冷たい部分でノアの手を包み、タオル越しにキスを一つして微笑んだ。ノアの指先がぴくりと動いた。

「クリス様、違います。あの、別に、僕……」

「有瀬、今、何か食べられそうなもの作ってくるから、待っててね」
罪のない友の笑顔だけが残る。階段を駆け下りる足音を聞きながら、ノアはタオルを床に捨て、冷えた手をぎゅっと握って温めなおすことしかできなかった。

ノアに食事を作っていたら大分遅れてしまった。遅刻覚悟で通路の半分は歩いてきたが、途中で今日の一時間目は体育であったことに気付कि、クリスは慌てて走り出した。今日は朝から森先生の怒号を聞きたいような気分ではない。だが、慌てだしたのが遅かったのか、クリスが校門を潜ると同時にチャイムが鳴り、校庭で待ち構えていた森先生からは、案の定叱責を食らった。

「遅いぞ、石崎！早く着替えて来い！真奈美の話を聞かせんぞ！」
その一言で、クリスはカタツムリ並みの超低速行動を志した。クラスメートたちの羨ましげな視線が背中に突き刺さった。

驚いたことに、更衣室には先客がいた。正式には共に遅刻した同志ということになるが。水無月は部屋の奥に佇んでいた。脱いだワイシャツを手に握ったまま、何かぼんやりと考え込んでいるように見えた。水無月はクリスの来室に気付くと、怯えと驚きの入り混じった表情を浮かべ、シャツを翻して胸を覆い隠した。それでもクリスは見えてしまった。背後で扉の閉まる音がする。その衝撃さえも、二人の間に張り詰めた沈黙を引き裂くことはできなかった。自らの肩を抱き俯く水無月は、いつもの彼とどこか違っていた。

「水無月、君……」

「やあ、クリス」

クリスの鞆がどさつという鈍い音をたてて床に落ちた。

「何だよ、その怪我……」

「昔の傷さ。あまり人に見られたくはなかったのだけだ。見て気持

「ちのいいものじゃないしね。二年前に僕は事故にあって……」

「嘘だ……だって、その傷、最近のものじゃ……」

水無月の目がふと細くなつた。柔らかなパステルブルーの瞳が、今や弟のそれに近い濃度と鋭さを帯びて、真つ直ぐクリスを射抜いている。関わるな、干渉するな、そんな警告を秘めた視線であつた。

だが、クリスの目は温度を以てその鋼鉄の殻を崩し、水無月の本音、助けを求め弱弱しい声をさらけ出させてみせた。悟つて水無月は静かに目を逸らした。除湿機だけがくたびれたような音を立てる中で、クリスは乾いた唇を小さく開いて呼吸をしていた。

「水無月君……」

水無月はワイシャツを羽織りなおす。

「何があつたの……？」

第二ボタンに指がかかる。クリスの息が揺れる。

「どうして……どうして何も言つてくれなかつたの？ ねえ、水無月君……！」

「……君には関係のないことだから」

更衣室の窓の外で、熟れ損ね、青く冷たく死んだ林檎の実が落ちた。果実は白い石畳の道に落ち、ついに硬く結んだ果肉を潰した。ブレーザーのボタンをしめながら、水無月はようやくそんな答えを吐き出した。

「クリス、君はいい人だ。認めるよ。君は善良で真つ直ぐで明るい人間だ。でもね、気をつけないとその明るさで人を傷つけてしまうよ。誰もが君のように生きていく訳じゃない。この醜い世界は人を歪め、捻じ曲げずにはいられない。僕たちはその苦痛の中で日々生きていく。そんな人たちの安寧を壊してはいけないよ。それだけは忘れないで」

水無月はクリスの肩を通り抜けて行くこととした。最後の忠告は、短いなながらも仲良くしてくれたことに対する、せめてもの礼のつもりだった。もうクリスとは会わない。そんな予感と決心の下で、水無月は更衣室を去るうとしていた。すれ違い様にクリスの手が水無月

の手を掴んで引き止めた。

「何だよ……それ……」

「クリス……」

「そんなこと言われたって、分かる訳ないだろっ?! どうして関係ないなんて言うんだよ……?! だって……友達だと思っただのに……」

「何でもかんでも干渉するのが友達ではないんだよ、クリス」

水無月はそつとクリスの肩に手を置いて呟いたが、すぐに手を払われた。繋いでいた手も解かれる。水無月はわずかに後ずさった。

「分からないよ! そんなこと分かりたくもない! 俺はただ……」

続く言葉を水無月は唐突なキスで遮った。僅かに開いた瞳に、驚き見開かれたクリスの青い瞳が映り込んだ。白蘭と同じ色だ。そして、弟がもう失ってしまった光を保ち続けている。唇にしつとりとした熱を感じながら、水無月は瞼を閉ざし、クリスとの距離を益々縮めようと試みていた。クリスは白蘭なのかもしれない。本気でそう信じ込んでいた。あの日、自分が単なる臆病のために弟を冷たく突き放したあの日、どこかにある別の世界では、自分は弟を裏切らなかつたのではないかと。裏切られなかつた弟が、純粋なまま育つたのがクリスではないかと。そんな空想が確信に変わって。

だが、白蘭はここにいるもう一人の彼とは別に生きている。世界を共有する弟、自分に裏切られてしまった弟、誰よりも一番愛しい弟は、今、悲しんで苦しんで、必死にあがいている。自分の行為はきつとそんな彼の苦悶を助長することになるだろう。それでも麻酔はいつか切れる時がくるから。いつまでも続く夢などないから。

「さようなら、クリス。ありがとう。僕は君のこと好きだったよ」「み、水無……っ……!」

もう一度押し付けたキスが、恐らく最後に聞くクリスの呼びかけを遮った。離れた口の中に微かに塩辛いものを認めた。泣いているのは自分とクリスの一体どちらだろう。確かめる間も欲せず、水無月はクリスに向かってそつと微笑みかけ、更衣室を出て行った。

「待つて……！」

追いかけてようと動かし足は、塞がれた出口を前にその場で埋もれる。それでも一歩踏み出したクリスの行き先を封じたのは、新しく扉を開けた人、落合であった。落合は明らかに背後に気をとられていた。だから、後ろ手で戸を開けたままの姿勢で、倒れ込んできたクリスを受け止めることになったのである。

「お、おい、エーリアル？」

「落合、止めてよ……」

「はっ？」

「止めてよ……お願い、水無月君を止めてよ、ねえ……！」

落合の表情がはつと強張った。すれ違い様に囁かれた言葉、聞き取れずに聞き返したが、微笑みでごまかされてしまった言葉が、今初めて胸の中に蘇った。「クリスを守ってあげて。きつとまだ泣いているけれど。クリスは夢に疎まれた最後の光だから」そして、今ここで子供のように縋りついてくるクリス。一体水無月はクリスに何を言ったのか。守ってあげてとはどういう意味なのか。追いかけるならば。そんな衝動に駆り立てられたのも束の間、クリスの肩に触れた瞬間に、落合は急速に全てを悟った気がした。そうだ、水無月は……

「エーリアル、大丈夫だ」

「落合……」

肩に手を置いたまま、落合は静かに目を逸らした。残酷だとは分かっていた。こんな方法は間違っていることも知っていた。水無月はこんなことを自分に頼んだのではない。それでも

「心配するな。お前には……関係のないことだ」

それでも誰にも触れられなくなかったから。落合は駆け出した。これだけが芳乃にできるたった一つのことだった。

生徒会室には異様に緊張した空気が流れている。慎のファイルの

めくり方、颯のペンの動かし方、荔枝の紅茶のすすり方、陽の船のこぎ方にも、油断のならない何かを待ち焦がれているような警戒心が垣間見える。部屋の扉の開く音がすると一同ははっとして出入り口を振り見たが、入ってきたのは、いつものようにびしっと服装を決めた理事長であつた。

「理事長！」

立ちあがるうとした慎を椅子の上に留め、理事長は曖昧に何度か頷いた。四人は顔を見合わせた。理事長に関しては、最早珍しい客としか言いようがなかつた。

「おはようございます、理事長」

「やあ、君たち、久しぶり。元気そうだね。文化祭の準備は進んでるかな？」

「ええ、順調です」

「それならオーケー。万事快調だな」

理事長は声を上げて笑い、戸惑い気味の四人にも一向に気に留めず、空いた芳乃の席に腰掛けて、椅子をくるくると回転させた。四五回まわすと、理事長はいかにも気分が悪そうに机に肘をつき、青ざめた顔で頭を叩いた。

「全然万事オーケーじゃないな、やんなきゃよかつた」

「……あの、理事長、お茶いかがですか？」

「あつ、うん、じゃあ頂く」

颯の申し出に少し嬉しそうに頷き、理事長は椅子に座りなおして姿勢を正した。黒く鋭い眼は瞼の裏で落ち着いた後に復活し、差し出された湯のみを経て、空の花瓶の水底を射抜いた。四人は一斉に目を背けた。理事長が袖を捲くり、腕を花瓶の水に浸しても、誰一人止めようとするものはいなかつた。

「これは旧図書館の鍵かしら」

久しく重力と人の息に触れた鍵は、理事長の手の中に何の抗いもなく収まつた。

「ちようどよかつた。いつちゃんにね、旧図書館の予備の鍵を新し

く作ってほしいって言われてたんだ。でも、これのおかげでどうにか経費の節約ができそう。これ、持ってつてもいいよね？今日一日だけ」

「ええ……ご自由に」

誰よりも先に答えたのは慎だった。彼に続いて言葉を発する者がいないのを確認し、理事長は一瞬口元を皮肉っぽく歪めた。だが、すぐに表情を撤収すると、湯飲みの茶を一気飲みして鍵を背広のポケットにしまい込んだ。役員たちはまだ理事長をまともに見られずにいる。

「まさか、君たちは罪悪感なんて感じる訳じゃないよね？」

理事長はふと思いついたように聞いた。

「もっと喜べばいいのに。水晶と僕の意味が珍しく一致したんだからさ。まあ、もちろん目的を一緒にされちゃ困るけどね。僕は大切な学園の生徒を救うため、君たちはただ君たちの安寧を守るためなんだから」

「……理事長にとっての生徒を救うとは一体どういう意味です？」

慎がやや刺のある声で尋ねると、理事長は鍵を宙でもてあそびながら後姿で微かに笑った。

「嘘だよ。本当は経費を節約したいだけ」

「芳乃！」

戸を蹴破らんばかりに開いて部屋に飛び込んだ。鍵はかかかっていなかった。灰色の部屋にはまるで生活感がなく、酸素も匂いも冷え切っていた。ベッドだけがたった今主人が寝起きたかのように乱れを留めていたが、肝心の主人の姿はない。落合は洗面所、風呂場、その他芳乃が潜めそうな所ならば、手当たり次第に荒らして覗いた。意味もないことは分かっていたが、それでも僅かな可能性にかけたかったのだ。

「おい、芳乃?! 芳乃!」

その時目に止まったのが、氷水で満たされたコップと、そこに息づく白いランの花であった。昨日芳乃が手に握っていたものと恐らく同じ花だ。たった一枚だけ花弁が残されていた。手遅れだった。止めようと思ったのに。芳乃への罪滅ぼしとして、彼が新しく罪を作るのをもうやめさせたかったのに。落合は思わず床に膝を落とし、芳乃のベッドに腕を投げ出してもたれかかった。芳乃はもう謝罪さえも受け止めてくれないのか。否、そんなことは構わない。謝って許されて、それだけで幸せな生活に戻ることなど、時間と世界が認めない。だからといって、最後に無駄にあがいてみたところで何になるというのだ。芳乃の白蘭への愛はそれほどまでに強いというのか。だとしたら、とても自分は適わない。芳乃の悲しい台詞を、落合は真っ白い視界の中で思い出していた。

「ぼくはどうすればいいの……？もう何をやっても苦しいだけだ。どこにも逃げ場なんてない。いつか至福の時がくると思ってたから足掻いてきたけれど、その時が遠いのか近いのかも分からない。すぐだと思い込んで一歩進んでもますます遠ざかる気がして……もう何もかも嫌になった。でも投げ出せない。白蘭様の心を求める気持ちは、そうさせてくれなくて……」

「だからって、今更何ができるっていうんだよ、芳乃……もう全部終わりなんだよ……」

「分かってるくせに、また強がって……」

第十七話 夢の終わりの黙示録・後編

ただいまも言わずに扉を開け、足を忍ばせて階段をのぼった。そつと覗きこんだ部屋は薄い山吹色に染まり、ノアは布団を肩までかけ、手を組んで静かに寝息をたてていた。今朝かゆをよそつた空っぽの皿は、ぞんざいに床の上に転がっている。ノアの額の上で、タオルはすっかり温くなっていた。新しく冷たいタオルと換えてやっても、ノアの寝息の調子は変わらず、瞬き一つしなかった。指先で触れた皮膚はやや汗ばんでいた。クリスは皿を拾い上げて部屋を出た。

居間のテーブルに肘をつき、足を宙でぶらぶらさせながら、クリスはいつもとより苦い紅茶を飲んでいた。お前には関係ない。その言葉を発する時、人は一体どんな思いを胸に描いているのだろうか。冷たさを装った優しさなのか、それとも他人の介入への恐れなのか。誰にも知られたくないことがある、そんなことぐらい分かってはいた。だが、人に秘密を打ち明けるくらいなら身の破滅を選ぶ、その精神がクリスにはどうしても理解できなかった。水無月も落合も、辛く重苦しいことを一人で抱え込み、一人で傷ついている。傍から見ている者には、その姿が痛ましくてたまらないのに。もし「それ」が優しさのつもりだとしたら、泣きたくなくなるほど立派な失敗作だと思う。水無月と落合とて分かっているはずだ。そう、だから彼らに關しては、「それ」は他人の介入への恐れなのだろう。つまり自分は二人に拒まれたという訳だ。

クリスは紅茶を飲み残したまま席を立ち、ソファの上に横たわった。では、拒まれた者は対処をどうすべきか。放っておけ、と恐らく多くの人は言うだろう。自分の力を過信するな。他人の心を動かせると思つな。たとえどんなに身近な存在であっても、他人である限り慰めきめることはできない、そう言うのだろう。介入すれば却つて相手を傷つけるだけだ、とも。クリスは目を閉じた。その理論が

本当かどうかはクリスには判断できなかった。それでも納得できないものが、クリスの胸の中に生きていた。介入することで相手を傷つけても反対に傷つけられても、相手の負う深い傷跡を癒すためなら必要な犠牲なのではないかと。そう反論する声があった。

落合と水無月になら、うつつとうしがられても嫌われても構わない。もし自分に来ることがあるのなら、その方法を何とかして探り出し、そして実行したい。二人と直接語り合いたい。気付いた時には、クリスは立ち上がり、真っ直ぐに玄関へと向かっていた。靴を履き、扉に手をかけた時、ちょうど向こう側から戸が開いた。

「あれ？出かけるの？」

クリスは露骨に顔をしかめた。理事長だった。色々な意味で今は会いたくなかった人だ。まず相手をしている時間がない。それでも学園の理事長という立場の人を、また今度と言って追い返す訳にもいかず、クリスはきちんと頭を下げた。

「こんにちは、理事長」

「そんなに嫌そうな顔をしなくてもいいじゃない。出かけるのを邪魔したりしないよ。僕だってそれほど暇じゃないんだから」

「……それならいいですけど」

礼儀を失うぎりぎりのラインの台詞を、クリスは少しのためらいと共に吐いた。理事長は笑っただけだった。

「それで、ノアはいる？」

「いますよ……熱出して上で寝込んでますけど」

クリスは睨むようにして理事長の顔色の変化をうかがった。養子の病に、養父としての有瀬裕は一体どんな反応を示してくれるか。遠いように思われる昨日、ノアを心無きものとして扱う人間と敵対したクリスとしては、おおいに気になるところであった。理事長は一瞬眉をひそめた後、「そう」とだけ小さく呟いて、くるりと背を返した。

「お見舞いはいいんですか？」

クリスはかたい声で尋ねた。

「だって約束しちゃったからね。君が出かけるのを邪魔したりしないって」

「別に邪魔にはなりません」

理事長は後姿で肩をすくめた。

「それでも遠慮しとくよ。寝てるんだったら起こしちゃかわいそうだ」

「……それが貴方の愛情の示し方なんですか？」

「さあ、僕にも分からないな。愛情なんて示さない方が案外よかったりもするしね」

「一部の人にはね。でも有瀬にはどうでしょう？」

「どうなの？」

「興味もないくせに……」

クリスは花を愛でる理事長の脇を通り過ぎ、一人急いで門を出た。時間の無駄だ。こんな冷徹な人には何一つ分かりやしない。足をせかすクリスの後を、理事長も早足で追ってきた。追い抜き様に、理事長は何かをクリスの手に握らせた。クリスは思わず立ち止まった。右手を広げて中身を見つめ、ふと顔を上げた時、背広姿はもうずいぶん遠くにあった。

「理事長、これ……！」

「あげるよ、それ。旧図書館の鍵。僕の手には余るから」

「そんな。俺に渡されたって……」

クリスは仕方なく、ポケットに突っ込んだ右手を解き、再び歩き始めた。

必然的に最初に向かったのは旧図書館だった。足を踏み入れてみて、今日はやけに利用者が多いことにクリスは少し驚いた。見知った顔もいくつも見えた。菜月がびよんびよん飛び跳ねてもとれない本を、腕を伸ばしたただけで手にしてしまう颯、部活はどうしたのだから夏とそれに付きまとう真央、窓辺に佇む荔枝と陽、など。しか

し、水無月の髪はその中に見当たらなかった。クリスはため息をつき、それからいつかも水無月を求めてここに来たことを思い出した。そうだ、あの時から水無月は、クリスにずっと何かを隠し続けていたのだ。

もしかしたら本棚の影にでも身を潜めているのかもしれない、意図的にせよ、偶然にせよ。クリスは知り合いたちの視線をくぐり抜け、宗教書のコーナーへと足を運んだ。水無月がいるとすればそこしか考えられなかった。棚の前に立ち、水無月が愛読していた新約聖書の背表紙を探して目をのぼらせていると、急に隣から肩を叩かれた。視界の片隅に入った手の持ち主をクリスはつととして振り見たが、そこにいたのは水無月ではなかった。黄土色の巻き毛と山吹色の瞳を持ち、口元に微笑をさざめかせる、見覚えのある少年だった。名前は確か……思い出せない名の代わりに、クリスは小さな「あつ」という音を発した。

「やあ、久しぶり、クリス君」

「あつ、うん、久しぶり……えっと……」

少年は目を細めて穏やかな笑顔をとどめた。

「芳乃だよ。雲居芳乃。そういえば自己紹介はしなかったね」

「うん、でも校内新聞で見た気がしたから……あれ、何で俺の名前を？」

「何言ってるんだよ。君は有名人じゃないか。それに颯先輩が君の名前を呼ぶのを聞いていたしね」

「あ、そっかあ」

芳乃はくすりと微かな笑聲をもらした。初めて見た時もあったが、柔らかな雰囲気、それでいてどこか驕りかけのある少年だ。何か後ろめたいことがあるような、そんな笑い方をする。水無月と似ているような気もした。差し伸ばされた救いの手を拒み、自分一人で苦しみを負おうとする。人とは所詮皆そんなものなのかもしれない。孤独なさびしい生き物。自分の弱さを必死で押し隠し、誰のことも信用できずにいる。だから、愛は奇跡なのだろう。弱みを曝しだせ

る人を見つげられたという意味で。

「クリス君？」

「えっ？」

水無月の悲しい面影に思いを馳せていたクリスは、芳乃の言ったことを理解できずに聞き返した。

「何か探し物でもあるの？」

「ああ、うん。まあ、探し物っていうか人っていうか……あつ、そういうえば雲居君は生徒会役員だよな？旧図書館の管理もしてたよね？」

「そうだけど……」

芳乃は話を読めないような顔をしつつ頷いた。クリスはほっとしたように口元を綻ばせ、ズボンのポケットに手をつ突っ込んだ。理事長に押し付けられた面倒を片付けるために。

「さつきね、理事長から旧図書館の鍵をもらったんだけど、俺が持つても仕方ないし……雲居君が持ってた方がいいよね？」

「理事長が？何でだろ？変なの……」

芳乃の呟きは、手渡された物体のざらつきによって封じられた。水底に沈めたはずだった。もう二度と使用しないと誓ったはずだった。罪の真ん中に置き去った鍵が、どうして再び酸素に触れることになったのか。クリスの手が退けられ、茶色く錆付いた金属がずっしりと重く掌に押し掛かっても、芳乃は衝撃のあまり何も言うことができなかつた。

「えつと、雲居、君……？」

芳乃は鍵を握り締めることで、視界から覆い隠した。そしてクリスが戸惑いながらそうしたように、ポケットの奥深くに急いで押し込む。早急に光をつぶさねばならない。真実を照らし出してしまふ、自分たちには眩しすぎる輝きを。そしてその時、鍵は再び永遠の水底の闇に沈むのだ。

「雲居君？俺、何か変なこと言った？」

芳乃は無理矢理笑みを繕って首を振った。不自然に見えるようが、そ

んなことはお構いなしだった。

「ううん、まさか。ただ、少し足が痛んで……今日の体育で痛めたみたいなんだ」

「えっ、ほんと？大丈夫？」

「うん。それで悪いんだけど、この本棚の一番上にある本を取って欲しいんだ。童話がいくつかまとまってあるでしょ？白雪姫とか、人魚姫とか。ぼくはとも梯子はしはのぼれなさそうだし」

「うん、分かった。任せて」

クリスの履いた白い靴が次第に高くのぼっていく。焦点も合わさぬままそれを眺めながら、芳乃はチャンスの到来を待っていた。あと数秒間。あの時を思い出しそうになる。舌の上で酸っぱく苦いものが踊っている。違う、あの時を忘れるために自分はやらねばならぬのだ。ゆっくりと梯子に手をかける。汗ばんだ手に木の感触が冷たい。そして、力をこめて、強く

「あっ……！」

足元がぐらついたと思ったとき、クリスの足は踏み場を失い、体は既に宙に放り出されていた。梯子が傾くのが見えた。来る衝動に備えて目をぎゅっと閉じる。死ぬかもしれない。そんな危惧が、一瞬のうちに何度も頭を駆け巡った。

黒い世界にノアの顔が見えた。髪と同じワインレッドの睫毛がきらきらと濡れている。泣いているのだ。泣かないで、そう言いたく思わず手を伸ばした。その手は、伸ばした相手よりもはるかに大きく、力強い手によって包まれた。肩を包み込む温かな胸と長い腕の存在を感じ、クリスはそっと目を開いた。

「千住先生……」

「大丈夫かい？」

「は、い……」

薫の安堵のため息がクリスの鼻にかかった。心臓がとくとと高鳴った。こんなに間近に先生の顔がある。メガネの反射光が、その奥の優しい眼差しが、唇が。酔いかけたその時、クリスは初めて現場の

状況に気が付いた。生徒たちは梯子の倒れた大きな音に群がってき
ていた。薫は床に座り込むようにしてクリスを受け止め、クリスは
薫に強く抱きしめられて密かにときめいている。投げ出した薫の脚
の上にふと視線を伸ばせば、傾いた梯子が足首に倒れ掛かっている。
クリスははつと身を起こした。

「先生！脚が！」

「はは、何てことはないさ。どかしてもらわないことには動けない
けどね」

クリスは誰よりも速く梯子の元へ駆け寄って、恩人の足を救い出し
た。薫は笑いながら、足を引こうとして小さく不自由そうな音をあ
げた。周囲にざわめきが広がった。

「先生！」

「残念だな。やっぱりおとぎばなしの王子様のようにはいかないも
んだね……」

「何言ってるんですか？！早く、早く手当てしないと……！誰か、
里見先生を……！」

「大丈夫よ。手当てならここで出来るわ」

人の輪を掻き分けて現れたのは一穂だった。クリスは縋るような気
持ちで彼女を見つめたが、一穂はまるでいつもの調子で微笑んでい
た。

「誰かその頼りない王子様に司書室まで肩を貸してあげて。今道具
を取ってくるから」

一穂の足元で、鶏が羽を広げて大きく鳴いた。

「ごめんなさい、俺のせいで……」

「いや、君のせいじゃないよ」

「そうよ、貴方のせいじゃないわ。だから心配することは何にもな
くってよ」

赤く腫れた薫の足首は、クリスにとって直視しがたいものであっ
た。だが、幸いにも骨に損傷はなかったようで、薫も一穂と軽口を

叩き合っている。クリスは二人の姿を離れたところから眺めながら、なぜ二人がこんなに親しそうに話し合っているのか疑問に思った。一穂は先ほどからずっと薫のことをからかいつばなしで、薫は女性に対する礼儀を重んじつつもそれに乗っている。二人は付き合っている？ 疑問が頭を掠めた。その刹那、何ともいえない複雑な感情が心に立体の迷路を浮かび上がらせた。確かに、二人が一緒に歩いているところは何度か目撃されていたけれど……

結局聞く勇氣は湧かず、クリスは雌鶏に餌をいくら撒いてやった。鶏はすぐについばんだ。一穂と薫を見ているのが何だか急になくなって、クリスは司書室内を見回した。相変わらず物が散乱している。本、紙くず、ペン、映写機はともかく、かじりかけの林檎、おもちゃの短剣、安産のお守り、割れた貝殻などは一体なんのつもりでここにあるのか。椅子の下に放り出された古い靴は一体誰のものだろう。その椅子の背にもたれたロープは、一体何に使われたのだろう。

「しかし、屋城さんも物好きだね。この部屋を改装もせずそのまま使い続けてるなんて」

「だって、私、別に幽霊なんて信じてませんもの」

「おや、意外だな。女性は皆そういうものを信じてるのかと思ってたよ」

「それは女性に対する偏見ですわ」

「幽霊？」

口を挟んだクリスに薫は頷き、周囲を憚るように声のトーンを落としてゆつくりと説明を始めた。

「昔、ここで女性の司書が自殺したんだ。生徒が一人、この図書館でなくなってるね。梯子が転倒したらしい。何しろその梯子が相当古かったようだから。司書は管理責任を問われた。周囲から攻め立てられて、すっかり行き場を失ってしまった。そして、この司書室で首を吊って死んだんだ」

クリスは再度司書室を見渡した。首吊り自殺を連想されるようなも

のはどこにもなかったが、背中にぞくつとするものを感じた。いい気分はしなかった。

「まあ、幽霊が出るって話は聞いたことないけどね」

「当たり前ですわ。ですから、そんなものいませんもの」

薫の言葉に、一穂はびしやりと返した。

異変に気付いたのは、直後だった。図書館内がなにやら騒がしいのだ。クリスの転落騒動から数分が過ぎ、すでに館内は元の落ち着きを取り戻していたにも関わらず。嫌な予感がして、クリスは司書室を飛び出した。南東向きの窓に、生徒たちが集まっていた。中には外に出て様子を見に行くものもいる。クリスも様子をうかがおうと思ったが、人を押し退ける作業を始める前に颯に捕まった。

「クリス……」

「あつ、颯先輩。何かあつたんですか？」

「何か燃えてるみたいなんだ。煙が上がってる。方角的にどうも白のアトリエのようなんだけど……」

「……えっ？」

クリスは颯に手を引かれ、共に図書館の外へ出た。クリスは声にならない声をあげた。黒い煙が灰色の空にもくもくと上がっている。林檎林の上辺に、なにやら赤いものがちらちらと見え隠れしているのも見えた。間違いない。あれは白のアトリエだ。確かアトリエには

睫毛を濡らしたノアの泣き顔が瞼の裏に浮かんだ。

「有瀬！」

クリスは駆け出した。薔薇の小道には向かわなかった。一刻も早くアトリエに帰るため、林檎林の中を突っ切った。走りながら、汗を滲ませながら、息苦しさにさいなまれながら、一心に思っていたことはノアの無事だった。お願いだ、有瀬。死なないでくれ。もう誰かに助け出されていてくれ。ああ、どうして自分は有瀬一人を置いて出かけたりしたんだ。有瀬が一人じゃ何にもできないことを知っていたくせに。最低だ。これでもし有瀬に何かあつたら自分のせ

いだ。でも、お願い、責めならいくらでも負うから、どうか無事でいてくれ。

「有瀬……っ！」

燃え盛るアトリエの前には、人だかりが出来ていた。先生、生徒交じって必死の消火活動に務めている。クリスの登場に、人々ははつと表情を慄かせた。ノアの顔はどこにもなかった。

「有瀬！有瀬っ！」

アトリエの中へ飛び込もうとしたクリスを、森先生が抑えた。クリスははつと喚き続けていた。自分でも何を言っていたかは覚えていなかった。ただ必死でノアの名を繰り返したような気がする。クリスの声が途切れたのは、森先生の横を何者かが豹のように過ぎていった時だった。皆が悲鳴を上げた。

「理事長！お戻りください！」

校長が叫んだ。理事長は振り返りもせずにあつという間に炎の中へとまれていった。絶望を帯びた周囲の声を、クリスは呆然として聞いていた。どうして？理事長はノアを愛していなかったはずなのに。なぜ危険を冒してまでノアを助けようとする？

「愛情なんて示さない方が案外よかつたりもするしね」

理事長の淡々とした口調が、クリスの頭の中でそう繰り返した。知らず知らずのうちに涙が零れていた。あの言葉の意味を、今すぐ教えてほしかった。

「理事長……！」

その時、煙の奥から転がり出てきた人影に、わっと歓声が上がった。先生方がかささず駆け寄った。理事長は芝生の上に倒れ込み、手で口を覆ってごほごほと激しく咳をしている。負われていたノアは、養父の背から校長の手に引き取られた。小さな咳がクリスの耳にも聞こえた。クリスはその場に崩れ落ちた。ノアは無事だったのだ。そう、無事助け出された。あの冷たい養父によって。ノアが父

を呼ぶ声が聞こえる。校長が怒鳴りながらにやら指示している。だが、クリスには、全てが何事もなく終わったような気がしてならなかった。白のアトリエは赤く朽ちていった。

人気がない廊下を、芳乃は歩いていた。

薬指の水晶がもう外した。水晶は最早自分を助けられないことを知っていたから。終わったのだ。結局水晶の意思には敵わなかった。これからどうやって生きればいい？あの人を殺すか、それとも自分が死ぬか。

部屋の鍵は開いていた。荒れに荒れ、出かける前のきちんと整頓された様子は見る影もない。そんな部屋の真ん中に、ただそこだけは出かける前と変わらないベッドの上に、落合が座っていた。落合は眠ったように顔をうつむけていたが、芳乃の姿に気が付くと、上げた顔で優しく微笑んだ。メガネはケースにしまって手の中に抱えていた。

「よっ」

「……落合」

「悪いな、散らかしちゃって」

「別に構わないよ……」

芳乃は落合の隣にそっと腰掛けて呟いた。意地を張る気力もなかった。落合に肩を抱かれ、寄り添われて静かに泣いた。光をつぶそうとして梯子を押し倒した。それを妨げられれば、今度は光が最も大切に思っているものを奪おうとした。だが、結局何もかもが完遂されぬまま終わってしまった。自分にはもう罪を重ねる力さえもない。孤独なさびしい生き物。それでも、自分の弱さをさらけ出せる人は見つけられた。最初から隣にいた。ずっと拒み続けた手を、芳乃はようやく握り締めた。

「芳乃……」

「落合……全部終わったんだ。最初から全てが終わりだったのに、

ぼくはそれに気付かないふりをして、取り返しのつかないところまで来てしまった」

「……そうかもな」

「君に裏切られた日、ぼくは本当に傷ついた。だって、あの時、ぼくはまだ君を愛していたから。君はあの日初めてぼくのことを疑った。だからその疑念に伝えてやりたかった。白蘭のことなんて本当は愛していなかったんだ。それでも君への復讐のために好きになった。過剰なまでに崇めた。不必要なくらい体を重ねた……でも、その内に、段々と惹かれていったんだ。白蘭の心の中に孤独があった。ぼくと同じ、愛していた人に裏切られた故の孤独が。その孤独を癒せるのが水無月一人だけだって気付いた時、ぼくは、ぼくは始めて激しい嫉妬を覚えたんだ。そこで自分が本気で白蘭を好きになっていくことに気が付いた。そして、そして、ぼくは……」

芳乃は深く息を吸った。言葉は続かなかった。完全な沈黙が、ベッドで寄り添いあう二人を包んでいた。花瓶の中には萎れた花、床一面の衣類、倒れた椅子、色あせた壁の絵。

「芳乃」

「何？」

呼吸を重ねる、その瞬間。

「今度は俺も共犯者になる。元からそうだった。お前のやったことを、俺はずっと黙ってた……今度は一緒に手を汚す。二人で幸せにはなれねえけど、二人で苦しむことは多分あいつの信じる神様とやらも許してくれる気がする。だから、なっ？」

子供たちの笑い声が遠くに聞こえる。初等部の生徒たちだろうか。この辺にどنگりでも探しにきたのだろう。自分たちもかつてそうして遊んでいた。押し寄せてくるのは共に駆けた日々、共に笑った日々、共に泣いた日々。ずっと一緒だと思っていた。素直で純粹だった。好きという感情は、言葉で伝え合っていた。

「芳乃」

幼い落合が隣にいる。夕暮れの道。どنگりをポケットいっぱい

詰め込んで、図書館で司書にお茶とお菓子をもらった後。

「何があっても俺が一緒だから、な？」

差し出された手。微笑む幼い自分。

「うん、ずっとずっと一緒だよね」

繋いだ手。懐かしすぎて胸が痛いあの時よりもずっと強く。

「いいの、落合？……本当にそれで？」

並んで部屋を後にした。無理に合わせようとした歩調は何だかぎこちないけれど。

「いいんだよ。芳乃がここにいてくれれば」

答えは何気なく言われたあの言葉にあった。

第十八話　そして光満ちる場所へ

回転のぞき絵は止まる。「葬送」の調べに促されて

「ねえ、白蘭」

「何だよ？」

「聖書を借りにいってくれない？」

「……はっ？」

二人は同じベッドの上にいる。兄の方はうつぶせに寝転んで、弟の方は彼の足元に腰掛けて、枯れたランの花弁をむしっている。振り返った白蘭の顔は、敵意を含みつつも呆気にとられた様子がかげえる。何だかおかしくて、またそれが悲しかった。

「旧図書館にあるはずだからさ。昨日から外に出てないんだらう？」

「余計なお世話だ。行くんだったら自分で行け」

「まあ、そう言うと思ったけれど」

水無月は少し持ち上げた頭を再び枕に返した。全てが終わるまで、あと何分、あと何秒だろう。足音は確実に近づいてきている。閉じた扉の残響は、目に見えぬ波となって少しずつ鼓膜へと迫ってくる。ただ今はその時が来るのを待ちわびて　否、呼び寄せようとしているのか？僕は？あんなことを白蘭に言うなんて……

逆接にたどり着いた時、水無月の首に既に指先が触れていた。肩にかかった手で、無理矢理天井を仰がされる。ふいに白蘭の顔がその純白を塞いだ。

「ふざけるな！」

首に巻きつく熱と頬にかかる熱が、同じリズムで温度を上げていく。「許されたつもりなのか、お前は……っ！」

「ハク……」

「黙れ！俺は……俺はお前を……！」

部屋の戸の開く音に、白蘭は手の力を緩め寝台を飛び降りた。水無

月は深く息を吐いた。弟の跳ねた振動が疲労しきった肺を揺らす。締められた首の赤い痕は指で辿って見た。本気で殺されるかと思っただ。まるで恐怖はなかったけれど。いつそ白蘭に殺された方がよかったかもしれない。いずれ消え行く者の去り方としては。だが、白蘭に人殺しなど出来るはずない。自分に踏みにじられただけで、白蘭の心はまだ純粋なのだ。だから本気で自分に怒りをぶつけてきた。今酸素を蓄える幸福は、弟の本心に触れることができた仕合わせに果たして適うだろうか。

「白蘭様」

あの少年の声が聞こえる。今の彼の声に、ずっと嫌悪してきた甘えるような調子はない。

「ねえ、付いてきてくださるでしょう？旧図書館？」

「ああ」

いとも簡単に承諾するのは自分への復讐のつもりか。最後まで哀れで可愛い弟だ。共犯者はお前と「彼」じゃないよ。僕と「彼」だ。一瞬振り返った竜胆色の眼には、そんな同情を込めて微笑みを宛がった。勘ぐられないようにするためには、弟の後姿を目に留めるでもなく、顔を背ける必要があった。そして何度も聞いた扉の閉じる音。鼓膜を震わせる冷たく冴えた残響。身を起こし、その音を膝の上に抱え込んだとき、一筋の涙がすつと頬の上を伝っていった。だが、部屋に満ちた乾きを癒すのは、結局その一滴のみであった。水無月は再び天井を仰ぐ。今度は誰の強制でもなく自分の意思で。竜胆色の前髪がパステルブルーの瞳を覆う。色のない唇がそつと呟いた。

「さようなら、ハク……」

「いらつしゃい」

司書の笑顔は甲斐甲斐しい。ぼくの罪はああやっていつまでも笑っているといい。

斜め前を歩く人、薄い水色の癖のある髪と、濃く蒼い瞳をした、

ギリシヤ彫刻のような少年は、結局最後まで白蘭様だった。ぼくはこの人を好いている。愛している。でもそれは尊敬でも崇拜でもなかった。ぼくらは同じものを抱えていたのだ。だから惹かれあつた。最愛の人に裏切られたという孤独と悲しみを、胸の奥底に秘めていた。

「白蘭様、その本、とつて。その棚の一番上の」
「どれだ？」

むやみな傷の舐めあいは、ぼくらをますます独りにしただけだった。それでも表面上の二人に、ぼくらは何とかしがみついていた。いつしかぼくらは傷を重ねることを覚えた。それだけぼくらのたった一つの共通点だったから。そして行為に伴う痛みもまた、唯一の感情の共鳴であつた。神経が尖つていくのを知る度に、僕らは復讐を誓つた。復讐は過去への執着を強めるばかりだったのに。そう、ぼくらはいつまでも脱却しながらなかつた。

「ほら、あの、新約聖書つて書いてあるやつ。ここに梯子があるでしょ？ぼく、今日の体育で脚を痛めちゃつたみたいだから」

……だから慰めあいは失敗だったね、白蘭様。だけど、この失敗は全てぼくが償います。勝手にこの夢を終わらせることについても全て責任を負います。それでいいよね？貴方の心は結局ぼくのものにはならなかつたし。上手く責められないのは辛いけれど、こうしてささやかな仕返しをするぼくの心も最後まで揺れ続けていたんだ。

白蘭様の履いている革靴の黒い艶が、ゆつくりと視界の上へ上へとのぼつていくのが見える。聖書に行き着く指先は震えているのか。ぼくは見上げもしなかつた。肩の上にそつと置かれた手が準備完了の合図だった。落合は慰めるよう、励ますよう、ぼくの体を自分の胸の方へと押し寄せた。同時に、梯子にかけたぼくの手を、力を込めて強く包み込んだ。

ずっと待つていた。この瞬間を。今、罪を恐れるこの臆病な心は、久方ぶりの安堵を噛み締めている。異国の地に赴いても忘れられなかつたものを、こうしてまた手を汚すことで。

梯子が傾く。灰色の床に落ちていく人は、白蘭様ではなかった。

篠木水無月だった。

いつも兄の影を追っていた。幼い頃のことを問われても、白蘭はそれ以上のことを思い出せない。歳の離れぬはずの兄、名前で呼び同じように甘やかされて育った兄は、弟の目には、なぜかはるかに大人びて何もかも分かりきっているように見えた。白蘭が最初にそれを感じたのは、いつまでも砂場に留まる自分を置き、母が呼ぶ方へと急ぐ背中を見たときだ。泣きながら腕にすぎると、水無月はその時初めて止まり、少し笑って振り返った。「バカだな」そんな言葉を呟いて。

それから何度も兄が振り返って笑う姿を見てきた。白蘭が泣けば、水無月は必ず戻ってきた。喧嘩の後でさえそうだ。怒りに肩を弾ませながらも、兄は、泣き喚く弟を睨むだけではいられなかった。こうした背中と笑顔の積み重ねが、白蘭を幼く無邪気なものに留めていた。初めて兄が振り返らなかった時、それは弟にとってどんなに惨い衝撃であっただろう。

「待ってよ、ミナ！」

弟の呼ぶ声を、水無月は寂しく切なく聞いていた。彼の視界を離れたところで、ようやく膝を落とした。

気付いてしまったのはほんの数日前のことだった。

水無月は同じように膝をつき、ただし全く違う心地で手を組み、祈りの文句を唱えていた。敬虔なクリスチャンだった母親の影響が、この少年にも色濃く出たようだった。哀れな双子の母親は、毎週息子たちを教会に連れ、罪を悔やみ、平和と慈悲を請うように諭したのだ。しかし、そんな母も、今では夫の病死に弱りきり、病室の片隅からでしか神の愛を求めることができない。母の祈りきれない思

いの代わりに、また母の無事を祈って、その時、水無月は瞼を閉ざしていた。

「ミナ！」

部屋に飛び込んできた白蘭の声が、静かなる瞑想を遮った。叱ろうとして、泣きながら抱きつかれてそれを封じられた時、胸の中で舞い踊ったもの、血管の中でときめいたものをはつきりと感じた。その衝動の元で体は凍りつき、重ねた弟の皮膚の熱が溶解を促した途端、言い様のない恐怖が脳の奥から湧き上がってきた。

膝に顔を埋め、しゃくりあげる白蘭の背を撫ぜながら、水無月は呆然としていた。あの一瞬の昂ぶりは何だったのだろうか。正体を突き止める勇気はなかった。それでも否定するために恐る恐る手にとったものは、どれもずっしりと重い普段のつまらぬ感情ばかり。箱の半分まで腕を突っ込んで、水無月はかき回すのをやめた。ないものはない。有り得ない。自分が白蘭に恋をするなんて。だって、双子だぞ？血の繋がっている兄弟だぞ？水無月は忘れ去ることにした。箱自体を宙高く放り投げて。

そして最後の数日が恐ろしいほど平穩に過ぎ　部屋の戸を開けた途端、ベッドに横たわる弟の白い腹が見えた。水無月は部屋へ踏み入れる足を止め、しばらくは何の感情もなく立ち尽くしていた。入浴の後なのだろう。呼吸に合わせて上下する膨らみのない平地は、夕顔に降り立つ朝露のような雫に煌いている。閉ざした瞼は微かに震え、癖のない睫毛が揺れている。薄い唇は前歯に食まれて形を歪めていた。水無月は無意識にその表情を真似した。下唇を噛み、掌に掻いた冷たい汗を、強く圧迫して握りつぶそうとした。目を背けることも閉ざすこともできなかった。沸き起こる感情が悲劇的な愛ならまだ受け入れられた。例え実の弟であつたとしても、胸の奥に忍んで一人苦しむだけの愛ならば、*agape*ならば。しかし、こうして弟を凝視する目は、確かな情欲と肉感を帯びていた。弟の寝姿は無造作故に、艶やかに、淫らに、その背徳性を高めているのであつた。

昂ぶりの再来は、胸に確かな証拠を残していった。最早疑いようはなかった。息苦しささえ覚えながら、水無月は静かに部屋の戸を閉ざし、その前に跪いてひたすら祈った。全てが嘘であればいい。これが悪夢だと誰でもいいから言っただけいい。もし誰かがそう宣言してくれさえすれば、自分はその者についていけばいいだけの話だから。例え、そこにどれだけの搾取が待ち構えていたとしても。夕食の席にて。パンを取ろうとして触れ合った指先に痺れるような感覚が走った。微笑み返せない自分の中に、水無月ははっきりと事の終末を悟った。もう嘗てのように弟を抱きしめたり、手を握り合ったりはできないと。三度目の昂ぶりは翌日の朝に。その朝こそ、水無月が弟を拒んだその時であった。

去り行く兄の背中を見つめながら、白蘭は落ちるはずのない涙を待っていた。演技でも泣かなければならない。それでも胸に毒のように染み渡っていく密やかな満足が、白蘭の微笑を冷たく凍らせた。違うのだ。本当は気付いていたのだ。自分は兄が思うように無垢で純粹ではなかった。無知でもなかった。水無月が胸に感じたものなら、その弟と同様に感じていた。兄よりもずっと早く。

水無月に対して白蘭の違うのは、堪えようとしないことだった。何としても兄を手に入りたい。欲望のために、白蘭は今までの世界を全て捨て去った。兄弟愛も平和も宗教も日常も。今まで不自由なく全てを手に入れてきた自分が、実の兄だけ手に入れられないなどということとは、許されるべきことではなかった。汗をかいてもいい体に湯を被せ、肌を曝して寝たのも全て故意のこと。白蘭は水無月の心が自分に極めて近いことを知っていたのだ。けれど、お互い愛し合っていればいいなんて理屈が兄に通じるはずがないことも分かっていた。だから水無月を刺激した。こんな淫靡な手段で。兄は恐らく自分を拒むだろう。そして自分はその復讐の名目で、兄を手に入れる。

傷ついたふりは幾らでもできた。孤独が孤独を呼び寄せ、企みは

企みを呼び寄せたから。兄を傷つけるために、不良の道をとった。計画通りに傷ついてくれた水無月を、白蘭は完全に制服した。ただ一つの誤算は、真実が育つていたことと、真実と演技の両方をのせるには、舞台があまりにも小さすぎたことだった。その重みに古く朽ちた杭と木は耐え切れなかった。老いた梯子が舞台の象徴であった。

「篠木君、あのね……落ち着いて、聞いて頂戴ね……………」

白蘭は小さく目を開いた。潮の音が聴こえる。回転ソットローブのぞき絵がぴたりと止まった。どうして今まで思い出さなかったのだろう。水無月はもうここにいなかったのに。水無月は死んだのだ。旧図書館の梯子と共に転倒して。その報せを聞いた時、自分は初めて悔恨を覚えた。初めて兄への愛を知った。今まで水無月が世界の全てだったのに。水無月のために罪を犯し、背徳の道突き進んできたのに。世の中の全てを失って、ぶつける対象のなくなった罪を負うことに耐え切れなくなって、自分は現実から目を背けた。そして嘘甘い夢の中に浸ろうとしたのだ。水無月が生きているという錯覚を起こそうとして。ただ、自分の罪深さから逃れるために。

そつと身を起こす。旧図書館の司書室だ。ここで、水無月の死の責任を問われた司書が自殺した。その司書は今椅子の上で、鶏を乗せた膝を閉ざし、寝かせた白蘭を見下ろして静かに笑っている。水無月の棺の横で零れ出なかった涙が、今ようやく落ちてきた。

「ここで夢を見ていただけだった……………」
塩辛い唇で小さく紡いだ言葉。学園はようやく眠りから覚め、世界はようやく正常に動き始めた。椅子の上には鶏が鳴いている。微笑んでいた女の影はない。恐らくそれが真実であるから。

「夢は終わったよ。正しい光のおかげだね。だが、その光は決して

私たちの味方ではない。それだけは忘れてはならないよ」

ゆっくりと開いていく門の横で、彼は待っていた。木陰から乳白色の陽光の下にゆっくりと身をさらし、彼は不器用に微笑んだ。自分も不器用に笑い返した。歩み寄り、ふと立ち止まった二人の踝を長く伸びた草がくすぐる。二人の頭上には波を映した青い天蓋が広がっている。棚引く雲はあわ立つ波の白、澄明な空気は潮で洗われた後で。鳥のような風が過ぎ行く。

「どうしても行くのか？」

「うん……」

頷いたまま顔をうつむけた芳乃の顔に、落合はそつと手を伸ばそうとして躊躇した。零れ出たため息は、恐らく答えを予想していたからか。

「白蘭が退学したからか？」

「それもあるけどね、もっと重要な理由があるよ。分かってるでしょ、君なら？」

「芳乃……」

「知らないふりはもういいよ、落合。ぼくが辛いだけだから。ぼくは償いきれない罪を犯したんだ。例えそのことを知ってるのがぼくと君だけであつても、犯した罪の重さに変わりはないさ。ぼくは……」

「芳乃！」

「ぼくは……！」

遮った強い口調が、落合に今は亡き友人の言葉を思い起こさせた。

「言うな」彼は静かにそう言って落合の口を封じたはずだ。落合に続きを言わせないために。芳乃が今力強く落合の言葉を断ち切ったのは、自ら続きを口にするために。

「ぼくは人を殺したんだ。篠木水無月の死は事故なんかじゃなかった。ぼくが殺したんだ。旧図書館で、彼を乗っていた梯子ごと転倒させて。そうすれば白蘭様の心が手に入ると思ったから。でも、白

蘭様はますます水無月を慕うようになっただけで、その姿を見ているのがあまりにも辛くって、ぼくは白蘭様に嘘をついた。まるで水無月が生きているかのように。その嘘は次第にぼくを取り込み、遂に学園全体に蔓延した。学園の夢の中で、篠木水無月という人間は生きていた。ぼくの水無月殺しの罪は消え去った。それでもぼくが犯したもう一つの罪が、絶えずぼくを苦しめ続けていた。水無月の死の責任を問われて自殺した司書は、決してぼくの罪を忘れさせてはくれなかった。耐え切れなくなって、ぼくは旧図書館を閉ざし、学園から逃げ出した。それでも罪はぼくの後を追いかけてきたんだ。どうせ罪に負われるなら学園にいても外にいても同じだと思った。そしてできるならば、愛しい白蘭様の傍にいたいと。だから、ぼくは学園に戻ってきて、あの夢を再開させたんだ。全ては失敗に終わってしまったけどね」

一度落ちた落合の腕が、再び持ち上げられ、芳乃の頬にそつと触れた。芳乃は触れられた箇所から微笑を繕った。落合は眼鏡を外した。反射する朝日が、ぼやけてきた視界をますます歪ませるため。零れ出た涙を、芳乃は少し背伸びして唇で拭った。

「落合、ありがとう。ぼくのために泣いてくれて」

「……バカ、泣いてねえよ！あくびをこらえただけだ！」

「相変わらず素直じゃないね。でも、きつといつか君の心を汲み取ってくれる人が現れると思うよ。もしかしたら今もう傍にいるかもしれない。君が気付いてないだけで。ぼくはそんな人にはなれなかったけど……早く心から愛し合える人を見つけたい。ぼくの願いはそれだけだよ」

「じゃあ」そんな言葉で行こうとした。幼馴染は許してくれるはずもなく、後ろから手首を掴んで止めようとしたが、芳乃はその手を振り払うと、真つ直ぐ開いた門の向こうへと歩み進んでいった。門の外、光る満ちる場所へと。落合の問いが和やかな風をつんざいて追いかけてくる。どこに行くつもりかと。その問いに、芳乃は少しだけ振り返って答えた。

「まずは水無月の墓参りへ。それから……そうだな、それからまた考えるよ。白蘭様と同じ場所にはいられないから、多分どこか別の場所へ」

きつと私が死んだら、誰もが責任に耐え切れずに自殺したのだと言うのでしょね。現にこれを読んでいる貴方の世界では、皆がそう囁いていることでしょう。けれども、それは違います。私は貴方のためだけに死ぬのです。貴方には光がある。もし私との関係がばれたら、貴方は永久にその光を失ってしまう。貴方にはいつまでも光り輝く存在でいてもらいたい。それが私の願いです。だから死にます。責任に耐え切れずに自殺した、無責任な司書を装って。これがきつと神様のくださったチャンスなのでしょから。

本当は何も言わずに死ぬべきなのでしょう。貴方のことを思いやれば。それでも私は自分の心に抗うことができなかつた。まだ生徒である貴方を愛してしまつたように。私のことはどうか忘れてください。貴方になら出来るでしょう。貴方が優しいふりをして実はとても冷たいことを、私は知っています。本当は私を殺そうと考えていたのではなくて？ だつたら手間が省けたと喜んでください。私は貴方の手を汚さずに済んだことを喜びますから。もう時間がありません。私は最期まで貴方の輝かしい未来を祈っています。死後の世界は信じていませんから、この命が消えた後のことは約束できません。この遺書は焼き捨ててください。もしくは誰にも見られない場所に……いいえ、やはり破つて焼き捨ててください。偽物の遺書には手を触れないようにね。

三木ゆりか

「先生！」

自分を呼ぶ声に、薫は静かに顔を上げた。古びた紙切れはポケット

トの奥にしまった。まだ捨てられないでいることなど、誰にも知られたくはなかったから。司書室の入り口に、クリスが立っていた。鶏のオーガスタを胸に抱えてひどく慌てている様子だ。薫はふつと口元を緩め、伸びやかな脚で椅子から立ち上がった。窓の外には、鶏の白い羽毛のような朝日が地上に降り注いでいる。

「おや、君か。どうしたんだい？」

「オーガスタがあんまり外で騒いでたので室内に入れてあげようとしたんですけど、気付いたら……ほら」

かつての恋人の忘れ形見をそつと受け取りながら、薫はクリスの指差した先を見遣った。クリスをここまで狼狽させているものの正体を、薫はすぐに見つけた。白いはずの鶏の羽毛が、茶色く剥けているのである。

「どうしたんでしょう？つい最近まで真っ白だったのに」

「さあ。もしかしたら、チャボにただペンキで色を塗っただけだったのかも。色が落ちたのかもしれないね」

「ま、まさか……白いチャボ？」

「そう、ようするに、見せかけだけのものだったってことさ。真実というものは曲げられないものなんだよ……彼女はそれを教えてくれた」

「彼女……？」

やしゝゝろいちほ

薫は読みかけの聖書のページに急いでペンを走らせると、本は開いたまま、クリスの肩を優しく押しして部屋を後にした。

丘の上の墓の前に積み上げられたランの花は、今は風に吹かれて散乱し、墓石の名前をさらしている。篠木水無月、その名を読み取って、芳乃は新しい花を一輪手向ける。だが、跪く前にその花は、

ふいに訪れた冬の澄んだ風に浚われてしまふ。絶対に許されない罪がここにあるのだと、芳乃遠く飛んでいく花を見つめて知った。やはり残された道は一つだけだったのだ。

かつて四人で走り回った砂浜に、もうあの日は戻ってこない。今の光に薄く面を反射させて、波に煽られつつある一足の革靴とて運命は同じだ。その持ち主はもう永久に戻ってくることはない。宣言通りに、愛しい人とは違う場所へ、否、正しくは違う世界へと行ってしまった。己の罪深さと、知ったばかりの愛だけを勇気に変えて。

彼は今、光満ちる場所にいる。波音だけが響く、その場所。

第二部終

第十八話　そして光満ちる場所へ（後書き）

本編を読んだ方のみ

・三木ゆりか

旧図書館の司書。理事長の姪。

当時生徒だった薫と恋人関係にあった。

水無月の死の責任を取り、自殺したと思われていたが、実際は薫との関係を苦に思っている行動であった。

屋城一穂というのは、水無月同様死者の幻としてよみがえった彼女の仮の名前。並び替えると……

第十九話 大空の名前

「なあ、大河内―」

「何だ？」

「何で俺つてさ、全ての鳥類から嫌われてる訳？」

「……知るか」

十一月最後の土曜日は肌寒かった。間もなく冬が訪れるのだから、半袖姿で校庭の端を歩む二人の少年たちにとっては凍えるほど寒い日でもよいはずなのだが、今日は嬉しいことに日差しが強く、風がない。学園内のビオトープに遊びに来ていた水鳥に石を投げ、鳥類にあるまじき執念を以て復讐された親友・室井を連れ、サッカー部部長の大河内孝則は、体育倉庫の鍵を受け取りに向かっている途中であつた。今日の練習メニューを復習しながら、大河内は室井の戯言も軽く聞き流していたが、ふと友人の言葉が答えを求めていることに気付いて黙り込む。室井はこのように尋ねたのだった。

「なあ、大河内―」

「今度は何だ？」

「お前さ、実際どう思ってる訳？秋元のこと？」

大河内はふと、部員たちが忙しなく走り回る方を振り見た。いつも正面の木陰に佇んでいる小さな姿は、今日は見当たらない。確か用事があると言っていた。昨夜の電話では。明るくはきはきした、十六の少年にしてはやや高い伸びやかな声を、大河内の耳ははつきりと覚えている。その声が愛しくて、眠れぬ夜もあつたからには。だが……大河内は小さく肩をすくめた。呆れたように、しかし決して自嘲気味でなく、口元を緩ませて。

「……今は、何とも思っていない」

病室は思いの他明るかった。以前に見た病室が祖父の死に場所で

あつたせいか、どうも病院には暗く陰湿なイメージを描きがちであつたクリスは、朝日の眩しさに金色の睫毛を数度瞬かせ、そしてようやくベッドに腰かけるノアの姿を見つけた。ノアは既に着替えて荷物をまとめ終わり、こちらに向かつて手を振っていた。調子は良さそうだ。そもそも炎による外傷はなく、あの火事の中で密室に閉じ込められていた恐怖が、風邪で弱つたノアの心身により影響をもたらしただけだと言ひ難かつたので、理事長が大事をとつて病院に行くよう命じたのだ。結局、火事のあつた一晚と昨日一日様子を見ただけで、ノアは無事退院の許可を得た。その報せを聞き、クリスはどうしても待ちきれずに彼を迎えに来たのだつた。

「おはよう、有瀬」

「おはようございます、クリス様。わざわざ来てくださつたんですね。学園からは時間がかかつたでしょう？」

「そんなことはないよ。バスで町に下つて一本だつたし。それより、調子はどう？」

「ええ、大丈夫です。今すぐにも出発できますよ」

ノアは元気よく立ち上がったが、ふいにクリスの背後に目を遣ると慌てて慎ましさを取り戻して小さく頭を下げた。クリスもくるりと振り返つた。病室の入り口に、灰色のトレーナーにジーンズというラフな格好　つまり、いかにも高速で着替えてきたような格好

で野瀬先生が立つていた。顔つきは晴れやかだが、何だか生徒たちの手前無理に真面目さを繕っているように見える。やたら血色がよいのは、クリスと同様、急いで病院にすつ飛んできた証だろうか。しかし、いかなる推測にも表面上には何もにおわせず、先生は微妙に切らした息を静めながら、二人の元へ歩み寄つてきた。

「あつ、先生、おはようございます！」

クリスの挨拶にも、野瀬先生はわざとらしいそつけなさで頷いて見せた。

「おはよう、石崎。それで有瀬、体は大丈夫なのね？」

「はい、ご心配をおかけしました」

ノアは丁寧に言って再度お辞儀をした。顔を上げた時の彼の微笑みにほだされて、先生もようやく薄っすらと笑った。クリスの胸も弾んだ。

「それならいいわ。とりあえず、学園までは私の車で送るけど、先に言つとかなきゃいけないことを伝えとくわね……運転中に喋るのって好きじゃないのよ、どうも。まーず、そう、貴方たちは今日から他の寮に引越してもらうことになったから。生徒会用の個別寮ね。ほら、生徒会役員ってそれぞれ寮を持つてるけど、小杉と川崎が同居してるから、今は一つ余ってるでしょ？そこに住んでもらうことになったわ」

クリスとノアは顔を見合わせた。意外な気はしたが、特に飛び上がって驚くほどでもなかった。あの快適な白のアトリエの焼失は、確かにクリスの胸にも応えてはいたけれど、二人で一緒にいられるのならば、どんな所に住まわされても怖くない気がした。野瀬先生も、二人の反応は待たずに続けた。

「今、関本たちが引越しを手伝ってくれてるわよ。早く戻って参加しなさいね。しかしねえ……こんなことならいつそ普通の寮に住まわせばいいのに、校長先生も何を考えていらつしやるんだか。夜間外出ぐらいの罰なら、火災の被害で十分取り消しよね、石崎？」

「い、いや、あの、俺には、何とも……ほら、先生がそんなこと言うべきじゃありませんし……」

クリスは嫌な汗をかきながら、出来るだけこの話題を早く切り上げられるように努めた。野瀬先生は「そう？」と言って首を傾けただけだった。

「よっ、お帰り」

野瀬先生の素晴らしいハンドルさばきによる眩暈がまだおさまらぬまま、二人は歴史ある新たな住まいの前へとやって来た。知り合いの顔が荷物を持って忙しく出入りするこの家は、白のアトリエよりは一回りほど大きく、壁の色は茶色っぽい紫色をしていた。建物

の構造自体はアトリエとさほど変わらない。二階建ての建物で、門をくぐって階段をのぼった先に入り口がある。この階段には早く花を飾るべきだとクリスマスはくらくらする頭で思った。

クリスマスとノアの姿に真つ先に気付いたのは来夏で、彼は二階の窓から顔を出して二人に手を振ると、準備が大方終わった旨を伝え、早く上がってくるように言った。慣れない門をくぐりながら、クリスは波の音を聞き、潮の香を胸いっぱい吸い込んだ。新居は海に面しているのだ。ふと隣を見て、クリスマスは啞然とした。何と、生徒会長の寮があるではないか。

最初の衝撃は、新居に対する感動で次第に和らげられていった。風呂掃除をしていた明音がスポンジを動かす手を止めて、泡まみれのまま二人を案内してくれた。廊下を過ぎて広々とした応接間、大きな窓から波の模様を取り込んで、真つ白い天井に網目模様を描き出している。アトリエには花咲き零れる庭があつたが、こちらには代わりにバルコニーが付いており、波のさざめきを眺めながら、潮風を堪能できるようになっている。スケッチをするのに丁度いいかもしれない。フローリングの床は、真央が一生懸命にぴかぴかに磨き上げていた。応接間には脚の長いガラスのテーブルと、古いがスマートなデザインの木製の本棚、それと黒い革の椅子が二脚あつた。「あつ、先輩、こっちはキッチンですよ。ノア先輩はよく使いますよね」

明音にそう案内されてのぞいてみると、台所は奥行きのある空間で、シンクもタイルも白い蛍光灯の光に反射していた。クリスマスは、アトリエの台所とこちらのと一体どちらがいいのかはよく分からなかったが、少なくとも、冷蔵庫が大きい点ではこちらの方が優れていると思った。ノアも電子レンジの機能を確かめて楽しそうだ。ちょうど二階へ上ろうとしたところで、来夏とぶつかった。来夏はひとまず引越しの準備が終わったのを祝って、ささやかながらパーティを開きたいと言った。クリスマスとノアはもちろん賛成し、ノアは何か軽食を作るべく早速台所へと走って行った。

「元気そうだな」

その背を眺めて来夏が呟いた。

「うん。一時はどうなるかと思ったけど、何ともなくてよかった。もしあの時、理事長が有瀬を助けてくれなかったから、俺、どうしてたかな……なんか想像するのも怖いな」

二人が黙ると、波の音が微かに聴こえてきた。それから、その音に被さって、真央と明音が何やら騒ぎ立てる声が。クリスは笑い、来夏は溜息を吐いた。

「全く、あいつら早速この家を破壊する気じゃねえだろうな」

「そりゃ困るよ。また新しく寮を見つけなきゃいけないし。そういうえば、落合は？酒本もいないし」

「落合は知らねえけど、酒本なら……」

ちよつどその時扉が開き、満杯になったビニール袋を数個ずつ抱えて、菜月と颯がやって来た。「颯先輩！」クリスが声を上げると、颯はビニール袋をひとまず着地させてから、汗ばんだ額を拭いて手を振った。前方と後方を交互に見てその光景を確かめるなり、菜月は靴を脱ぎ捨てると、つとクリスの方へ歩み寄ってきた。

「……と、酒本」

「ふーん。僕は颯のついでなの？」

「いや、そうじゃなくて、ただ先輩がいたことに驚いただけで別に……痛い痛い痛い！」

「こーら、ナツ、ふざけてないで、さっさと冷蔵庫にしまうものはしまっっちゃわないと……」

「そうだ、酒本。今まで仲良くデートで楽しんでたんだから、少しは働け」

「デー、ト……」

来夏がからかうと、菜月の頬は仄かな朱に染まった。菜月はその色のまま、かくかくとロボットののような動きで台所の奥へと消えていった。蒸気さえ出していれば、機械そのものだったのに。つねられた頬を擦りながら菜月の後姿を見守るクリスの肩に、颯はぽんと手

を置いた。

「あつ、先輩」

「大変だったね。まさかアトリエが火事になるなんて思わなかったよ。学園内で火事が起きるなんて、前代未聞だ」

「は、はあ……」

クリスは身を振りつつ言った。こんな所を菜月に見られては堪らないし、しかも来夏が不審そうな目線をぶつけてくる中でなんて。クリスの祈りは通じたのか、遅すぎる颯を案じて菜月がちょこんと顔を出し、見事なまでの速度で颯はクリスの肩から離れた。菜月の呼び声に、颯は重そうなビニール袋を再び持ち上げて行こうとした。クリスはひとまず安堵の息をついたが、ふと思いついた疑問をどうしても後回しにすることが出来ず、急いで颯を呼び止めた。

「あの、先輩！」

颯が振り返ったのと、菜月が見張りのために再度顔をのぞかせたのが同時だった。

「あの、なんで白のアトリエって、あんな名前で呼ばれてたんでしょうか？」

颯の表情を、波の模様が遮った。彼の薬指に嵌められた水晶が、その一瞬に煌いていた。

「さあ……それは僕にも分からないな」

今は何とも思っていない　すでに口に出してしまった言葉に背を追われながら、大河内はその日の午前を終えた。室井は相変わらず疑うような視線を向けてくる。練習に集中しろと言いたかったが、そういう自分とて気が散ってどうしようもない状態であることに気が付き、口を閉ざした。ベンチに無造作に積み上げられたタオルで首筋の汗を拭い、何の気もなく空を見上げようとすると、途中で人影らしきものに視線が引っかけた。行き過ぎた目を引き戻して思わず「あつ」と声が漏れた。見知った赤い髪の少年がそこに立っ

た。

「落合……」

「よう。やっと休憩か？」

「ああ、まあそうだが……」

落合はタオルを退かしてベンチに座ると、誰もまだ口を付けてないスポーツ飲料を口に含み、苦いものでも嚙んだような顔をした。

「ぬるっ」

「今日は比較的暖かいからな。それで、何か用か？」

文句を言いつつ飲み物の容器を傾けて、落合は頷く。

「そつ。デートのお誘い。一名ほどこの休憩中にお借りしようと思つて」

大河内は微かに苦笑を示した。

「あまり部員を長いこと連れ出さないでくれ。それだけ守ってくれば、本人はともかく、俺はかまわないが……」

「じゃあ、オツケーだな。行くぞ」

「えっ？」

ベンチ越しに腕を取られる。まだ事態をよく飲み込めていない状態で、大河内はそのまま落合に連れ去られていった。その様子を目撃していたのは、鳶に弁当を寄越すようせがまれて大河内に助けを求めていた室井だけだった。

クリス、菜月、来夏、真央、明音、颯の一同が応接間に集まると、眩いまでに磨きあげられたガラスのテーブルの上にはパーティ用の料理を持った皿と、ジュース類を注いだグラスが飾られていた。クリスがグラスと取り皿の数が人数より多いことに気づいて間もなく、玄関の呼び鈴が鳴り、出迎えた颯が新しく来客を引き連れてきた。慎、荔枝、陽と生徒会が勢ぞろいし、そしてその後が続くのは……

「千住先生！」

「アニエス姉さん！」

薫は白衣を折りたたんでシャツの片腕に持ちながら、アニエスは空いたもう一方の腕にそつと手をかけながら、二人はそれぞれ、教子たち、或いは従弟とその友人たちに向かって笑顔を向けた。白衣を纏わぬ薫の姿は、クリスの目に新鮮に映った。一度、フェンシングの試合の際に薫の防護服姿を見たことはあつたとはいえ、あの時は友人の行方の方にすつかり気を取られていた。シンプルだが洒落た装いが薫らしかった。アニエスも、豊かな髪を白い帽子の中にしまい、レモン色のワンピースで身を包んでいる様子が美しく、並んで立たれると恋人同士のようにしか見えなかった。アニエスが真央の元へ駆け寄って行ったので、二人の手はようやく離れたが、クリスはしばらくアイスコーヒーを注いだグラスから視線を上げることができなかつた。

「姉さん、どうしたの？」

「フランスのお友達に日本のおみやげ頼まれたから、町にお買い物に来たの。ついでに学校に寄って行こうと思つて。サッカー部に行つたけど、マオ、いなかつたから、校長先生に聞いたら、多分ここにいるつて。来る途中でこちらの先生たちに出会つて、それで一緒に来たのよ」

「あれ？日本語上手くなつた？」

「そう。レッスンに通つてるから」

アニエスは何か悪いことを自慢するようにくすくすと笑つた。

クリスがぼんやりと見つめていたコーヒーのグラスを、何者かの手が持ち上げた。見上げてクリスは露骨に顔をしかめた。先日のこととをまだ許していないという意味で。だが、生徒会長はクリスの澁面をあつさりを受け流して鼻で笑つた。

「寮が焼けたつていうんでどうなつたかと思えば、案外元氣そうじゃねえか」

「おかげさまで。生徒会の方でもっと防火をすすめたらどうですか？日本の冬は乾燥してるんだし……」

クリスは目を逸らしながら呟くように言った。何だ、生徒会長だつ

て結構元気そうじゃないか。

「それで、わざわざ人の顔見物に来たんですか？生徒会長ついでにも案外暇人なんですね」

「その通りだよ、天才少年画家君。もつと言ってやった方がいい」

「てめえが生徒会役員で一番の暇人っていう噂もあるけどな」

「おや？それは謂れない中傷だ。心外だな」

慎を挑発するように優雅に髪をかき上げて、荔枝が微笑を浮かべる。こちらに向けられた彼の視線に、クリスは同志を歓迎する色を見た。何か秘密めいた煌きを持った色だった。荔枝が首を傾げたのでは、クリスは慌てて薫が話し始めた方を仰いだが、薫がつまらぬ言い争いを諦めるよう求めて伸ばした腕で、慎こそ抱き寄せることに成功したものの、荔枝のことは取り逃したことに気がついた。陽が超特急でその肩をキープしたので。

「おい、兄貴……！」

「何をバカなことを恥ずかしがってるんだ。別にかまわないだろう。兄弟なんだから。さあ、せっかく有瀬君が用意をしてくれたんだ。

食事にしよう。といっても、僕は招かれざる客かな、クリス君？」

「い、いえ、そんなことないです！あつ、アニエスさんも、どうぞ」

「あら、ありがとう」

一同が席に着く中で、一向に動かないのが荔枝と陽だった。というより、陽が荔枝を捕まえたまま離さないというのが本当のところだった。クリスがノアを手伝い、来夏がアニエスを英語で語らい、明音が慎の隣の席を取り損ねて泣き喚く楽しげなざわめきに紛れて、陽は長い髪に隠れた耳にそつとささやきかけた。

「てめえ、全部見えてんだよ」

「何が？」

陽は海原が望める広い窓を指差した。

「お前が石崎なんちゃらを誘惑してるどころ、全部窓に映ってたんだよ」

「誘惑だなんて……」

「謂れない中傷か？おい？」

荔枝はするりと陽の腕の中を抜けると、空いていた颯の隣の席に腰を下ろし、首をかしげて陽に向かって微笑みかけた。今さっき、クリスにそうしたように。

「陽も早く座ったらどうだ？」

「てめえ……絶対覚えてるよ」

「どこに行くんだ？」

ようやく事態が飲み込めた頃には、ただ学園の中をうろろするだけかと思っていた。だが、落合は中等部、初頭部の校舎の真横を過ぎ、ついに門を潜って大河内を学園の外へと引きずっていく。何度行き先を尋ねても、落合は笑って誤魔化して答えようとしない。だが、そんな彼に戸惑いこそ覚えながらも、大河内は不思議と落合を信頼している自分に気が付くのだった。何がここまで自分を無防備にさせるのだろうか。落合とはせいぜい昨年クラスが同じだった程度で、試合を共にした来夏とのような深い絆もないというのに。彼の目がどことなく寂しげなせいだろうか。一体どうして

「はい、移動完了」

濃度を増した潮の香と、靴を包み込む柔らかな砂の感覚に、大河内は立っている場所を知った。落合は宣言してきつく握り締めていた大河内の腕を手放すと、一人先にふらふらと波に沿って歩き始めた。大河内は一瞬ためらい、それから少し走って落合の真横に追いついた。落合は口の端が上がりきらないような笑い方をした。

「サンキュ。一緒にここまで来てくれただけで十分だぜ。あまり休憩時間もねえんだろ？見送りは出来ねえけど、帰ってきてくれて構わないぜ」

「まだろくに会話もしてない。あんなのはデートとは言わない。これからだ」

そう口走った自分に、大河内はゆっくりと頬を染めていった。何を

バカなことを。落合の言うとおりで、時間に余裕はないし、まだ昼食もとっていない。大体、部長が時間に遅れていくなんで許されるはずがない。分かっているのに、足は砂浜に留まりたがっている。気持ちに整理をつけるためだと自分に言い訳して、大河内はそのまま歩を進めた。落合は意外な返しに少し啞然としていたが、砂の上にならきら光る白い貝殻を集めつつ、胸のわだかまりのようなものを語り始めた。

「俺さ、失恋したみたいでさ」

「意外だな」

「そうか？」

「……百発百中のプレイボーイとの噂を聞いたが」

「だったらいいんだけどな」

「同感だ」

二人の乾いた笑声は、無人の冬の海岸に広がっていく。

「まっ、そもそも俺が何にも気付いてやれなかったのが悪いんだけどな」

「そう言ってみたいものだな。俺は単なる実力不足だ」

「おいおい、二人そろって失恋かよ」

「それを知って俺を誘ったんじゃないのか？」

「さあな」

「ずいぶんと傷口を抉ってくれるな」

「その傷口に漬け込んでやるうっていうのが俺の魂胆だから」

「……油断ならない」

落合はポケットいっぱいになった貝殻を、今度は左手に集め始めた。何となく大河内も、白の上に一層煌く白さを求めてしまう。ウミネコが遠くで鳴いているのが、とぎれとぎれに聞こえてきた。

そうか、失恋か。大河内は密かに頷いた。自らすすんで諦めたのではなく、実力不足を理由に諦めさせられた。秋元真央のことを守りたいと心の底から願っていたし、今とてその気持ちは変わらない。だが、真央にはもう自分一人で立ち上げられる心がある。頼りたい時

には頼れる、尊敬できる相手も自分で見つけた。かつて真央を庇護してきた彼の従姉も、彼が選んだ相手にその役割を授けた。自分は少しも必要とされてなかったのである。彼にも、今まで彼を守ってきた者にも。何も言葉はないまま引き離された。そして、今はその面影を偲ぶことしかできなくなっている。

「まつ、人生色々つーしな」

落合が集めた貝殻を波に向かって投げ始めた。立ち止まった落合の傍らに立ち、大河内は水平線の揺らめきに思い出を馳せる。初めて真央の歌声を聞いた時の衝撃、健気で純粋な翡翠の瞳に目を奪われて動けなくなった春の午後、その病を知った時のやるせない怒りと悲しみを。

大河内は落合が投げ損ねた貝殻を一つ拾い上げた。落合がポケットを空にした頃を窺い、大河内は貝殻を水平線の方へと放り投げた。

「僕は昔ここに住んでいたんです。慎と同じで生徒会長をやっていたので。あつ、自慢のつもりじゃないのですが……」

「いいえ。どうぞ、お続けになって」

「ありがとうございます。貴女が寛容な女性で助かりましたよ」

「あら、寛容ってどういう意味？」

「クリスマス様？」

この十分ほど、すっかりアニエスと薫の会話に聞き入っていた。

久しぶりに我に返り、コーラの入ったコップを倒しかけたクリスマスに、菜月が口笛を吹く真似をした。颯が優しくそれをたしなめる。予想外のクリスマスの慌てぶりに、ノアは二度ほど目をぱちぱちさせた。

「クリスマス様、大丈夫ですか？」

「あつ、うん、ごめん。ぼーっとしてて。それで何？」

薫と真央が交互に寛容の意味について語っている。気をとられないようするには結構な努力を要した。あつ、明音君が生徒会長に携帯を取り上げられてる……

「いえ。父が引越し祝いにもロンを送ってくれたそうなので、皆さんにお出ししようと思って」

「……今度はペンキを塗ったスイカじゃないだろうね」

「まさか。この時期にスイカはありませんよ。今切りますから、運ぶの手伝っていただけますか？」

「あつ、うん。もちろん」

クリスが立ち上がったのとはほぼ同じタイミングで、薫が席を立った。視線を背ける努力も忘れて、クリスは思わず薫を見た。目が合った。両頬に火が灯る。俯いたクリスの耳に、薫の声が響いた。

「盛り上がってる最中に申し訳ないが、そろそろ僕は失礼させてもらうよ。二時から補習教室があるからね。仕事をさぼる訳にはいかないし」

「あら、もうこんな時間なのね。私も行かなくちゃ」

アニエスも続いて腕時計を見て驚いたような声を上げる。真央が「どうせ先生と一緒に帰りたいだけでしょ」と呟くと、彼女は珍しく必死になって弁明した。

「ち、違うわよ！変なことを言わないで……サオリと約束があるから、私……！」

「おい、秋元、あまりアニエスさんを困らせるようなこと言うなよ」「はい」

来夏の忠告には、真央も素直に応じた。それでもまだ何か言おうと口をぱくぱくさせているアニエスを、薫が親密になりすぎない程度に肩を抱いて鎮めさせた。アニエスはぎゅっと閉ざした唇を落ちかけた口紅で彩らせて、帽子の影に表情を押し隠した。

「そんな風に思ってくださいれば光栄ですよ。さて、では大人は大人の時間に戻るとしましょう。行きましようか、アニエスさん？」

「え、ええ……」

「今からメロンをお出しするつもりだったんですが、召し上がっていきませんか？」

ノアの問いにも、薫はアニエスの肩に触れたまま笑って首を振った。

「ありがとう。でも、今日は時間がないからね」

「そうですか。では、お気をつけて」

大人二人が立ち去ると、会場は益々騒がしさを増した。一段と静かになったのはクリスだけだった。行つてしまった。結局一言も言葉を交わせなかった。話したいことなら山ほどあったのに。ノアに突かれて重い足を運んでいる途中で、クリスはノアが台所への入り口を見逃したことに気が付いた。指摘しようとした目の前で、ノアは二階へと続く階段を上つていった。階上にメロンを置いておいたのだろうか。尋ねる気力もなく、クリスは黙つて導かれるままに進んで行く。ノアは三つある寝室の内の一つに入り込み、一つしかない窓の前で立ち止まった。元々備えられていた白いカーテンを開けると、明るい午後の陽光が真正面から差し込んできた。ノアは少し体を避けた。

「クリス様、ほら、見てください」

クリスはそつと近づいて窓を覗き込み、思わず感嘆の声を上げた。そこから望めるのは、町の風景だった。学園は町よりのぼつた所にある。そのために、南向きの此の窓からは、海の煌きと港町の活気とが同時に見下ろせるのであった。船が汽笛を鳴らしているのが聞こえる。道路を走るミニカーより小さな色とりどりの車も、反射する浜辺の白い砂も、美しく精巧な建物の群れも見える。狭い窓枠に二人並ぶのはやや厳しくて、二人は窓枠で手を重ねた。二人の瞳は同じ輝きに満ちていた。

「わあ、すごいなあ」

「……白のアトリエが燃えてしまったのはショックですけど、きっとこれからいいことがありますよね。現にこんなにすばらしい景色が見られる場所に住めるようになったんですから」

「うん、そうだね」

「クリス様、この新しい家でもお互い助け合つて、仲良くしていきましょうね」

「うん、絶対に……」

大丈夫だ。二人なら何でもできる。どんな困難だつて乗り越えられる。クリスは強く確信していた。そう遠くない場所で大河内が、落合の横顔にそんな気配を感じたように。アニエスが薫に取られた手の熱にそんな予兆を読み取ったように。

第二十話 冬は色めく・前編(前書き)

第三部 Largo

第二十話 冬は色めく・前編

ヴィヴァルディ「四季」より「冬」第二楽章が鳴り響く中で。

「これで文句ねえだろ」

陽が投げて寄越した最終予算案を引きつった笑みで受け取り、慎は咳払いを一つして梓の中に乱雑に並んだ数字を眺めやった。一見何の問題にもないように見える。あくまでも一見は。不信感を隠そうともせず数字のチェックにあたる慎に、陽は腕を頭の後ろで組み、得意げに言い張った。

「おいおい、今回は真面目にやったぜ」

「当たり前のことを偉そうに言うんじゃない」

「三分でそれ仕上げるのが当たり前か？ハードル高すぎじゃねえの？」

「……陽、何で君って人は三分で仕上げた仕事は完璧で、一ヶ月かかって仕上げた書類は間違いだらけなの？」

「よっしゃ、上がり！おい、荔枝、帰るぞ」

颯の溜息ながらの皮肉に合格サインを聞き取ると、陽は待ちきれないように立ち上がり、窓辺でバイオリンを奏でる荔枝に呼びかけた。荔枝が振り返ると、一つ余分に鳴っていた第一バイオリンの音が止み、CDプレイヤーから流れる音楽は唐突にやせ細った。慎は忌々しそうに予算案を颯に投げ渡し、手の動きだけで校長に持つていくよう指示した。颯はもちろんよく心得て、他に処理すべき諸々の書類も共に抱えて席を立った。

「あつ、そつだ。荔枝、帰るつもりでいるらしいけど、文化祭実行委員の司会原稿、明日までだよ」

「今日の夜フックスで送るさ」

荔枝はバイオリンをケースにしまいながら、慌てる様子もなく返事をした。

「忘れないでよ。そう言っ君が送ったこと一度もないんだから」

「……今夜こそは必ず」
あつ、ダメだな。颯は半ば直感的に悟った。荔枝の悠然としすぎた微笑みや、彼を急ぎ立てる陽の声にも、不安の要素は立ち込めていた。今夜は二人への電話も禁止、と。翌日不機嫌な顔で対面するのはあまり好ましくないと思われるので。慎が乾いた舌打ちを響かせた。

「てめえらが何で生徒会役員なのか、本来なら小一時間問い詰めてやりたいところだ」

「選ばれたからだよ、慎」

「そう。水晶にね」

「文句ならてめえの兄貴に言えよ。ほら、行くぞ」

荔枝が陽に手を引かれ、颯が肩をすくめて部屋を出て行ったところで、ちょうど第二楽章が終わった。冬風のような旋律が不意に訪れ、慎一人の生徒会室を冷たく凍てつかせる。それこそが本来冬のあるべき姿なのだろう。だが、慎はリモコンを手にCDを巻き戻した。再び流れる第二楽章の暖かく柔らかな音色。窓の中から見ると雪は、白く明るく煌いている。

「ということ、ついに十二月に入ったので、文化祭実行委員をクラスから一名選出したいと思います。誰か立候補は？」

水曜日の四時間目、ホームルームの時間のことであった。野瀬先生はチョーク片手に腕を組み、文化祭の言葉にざわめく生徒たちを見回していた。上がる腕といえは、頭をかく手やら、消しゴムを投げる手やら、プリントを後ろに配布する手ばかり。内心密かに溜息を吐く。別に皆やりたくない訳ではないのだ。それは分かっている。恐らく指名されれば喜んで受け入れるのだろう。だが、担任という立場上、安易に指名する訳にはいかない。後五分待って、それでもいいようなら、推薦という形で生徒の中から出してもらう戦略は去年と全く同じだった。

しかし、野瀬先生にしてみれば去年と同じ話し合いでも、クリスマスにとつては、文化祭といい、文化祭実行委員といい、目新しい言葉ばかりであった。イギリスでクリスマスが通っていた学校では、文化祭というものは特になかったからである。そのため、クリスマスは訳が分からなかったり、どんなものかと好奇心を弾ませたりしながら、ひとまず説明上手の来夏の言葉を聞いていたのだが、野瀬先生の拍手によって中断に追い込まれた。

「もう一度聞きます。立候補する人は？」

予想的中。もちろん誰もなし。かといって、誰かがやることを期待して見回す顔もなし。

「じゃあ、推薦という形でいきたいと思うんだけど、誰か推薦した人がある人は？もちろん忙しい仕事だから、推薦されたからといって必ずやらなきゃいけない訳じゃありません。自分の都合ともよく考えてみてください」

直後にまっすぐ上がった腕に、野瀬先生の注目は引き付けられた。正しくは、腕の持ち主の腰元に。

「はい、落合。誰かを立候補する前にそのシャツを入れるように」

「了解。じゃあ、シャツも入れ終わっただんで、ライを推薦します」「俺かよ？」

関本来夏の名前が黒板に書かれると、クラスメートから承認の歓声と口笛が起こった。どうやら決まりそうだ。もちろん問題はなし。それどころか野瀬先生としてみれば大歓迎だ。それでも一応確認はしておかなければならない。先生はくりりと振り返った。

「ということに関本の名前が出るけど、他には？」

「ありません」

最前列で菜月が呟いた。それがクラスの意見だった。

「関本、できそう？」

野瀬先生の問いに、来夏はためらいがちに頷いた。

「まあ、推薦までされた以上は何とか」

「ありがとう。でも、関本は学級委員長も弓道部もやって忙しい

でしよう？誰か補佐についてもらった方がいいんじゃない？誰か指名したら？」

「そうですね……そうします」

呼ばれて来夏は教室の前に立った。どうせ一緒にやるなら仲のいい人の方がやりやすいだろう。といっても、来夏はクラスメートの大半と良好な関係は築いていたのだが。仲がよくて、真面目そうな人がいい。ふと来夏の目にノアの姿が留まった。特に会話をする訳でもないが、真面目な部類に入るはずだ。授業中鶴を折っていようが落書きをしていようが、クリスの世話のために飛び回っている様子を見ていれば分かる。そして何より、ここで彼を補佐として選べば、クラスの中での彼の存在感を、もっと引き立てられるかもしれない。ノアは視線に気付いて顔を上げた。首を傾げて浮かべた笑顔は、どう見ても注目を浴びることを望んでいる顔ではなかった。

「どうする、関本？」

視線は自然に右に寄った。その中で特別目立って目についたのが三つの顔だった。菜月はまず剣道部部长で忙しいし、何より望まない仕事をさせようとする逃げ出す癖があるので却下だ。落合もほぼ同様の理由だ。後の一人はどうだろう。慣れない仕事となるだろうが、誰よりも熱心に取り組んでくれそうな気がするのだが……

「石崎、やってみねえか？」

「えっ、俺？」

よほど想定外だったのだろう。クリスはきょとんと青い目を丸くして見せた。

「で、でも、俺はほら、文化祭のこととかよく分からないし……補佐どころか、多分関本の足手まといになる気がするから……」

「あら、いいんじゃないの。最初の方は研修ってことで、慣れたら手伝えばいいでしょ。やったことのないことだったら今のうちに挑戦しときなさい」

「そ、そうですね？でも……」

「おい、エーリアル、遠慮すんなって」

落合が横から手を鳴らしてクラスメートを煽ると、あちこちから賛同の拍手と歓声があがった。かくしてクリスは文化祭実行委員の一人となったのである。だが、これから彼を待ち受けている忙しい日々のことを書く前に、クラスメートたちに決して悪意はなく、むしろ好意から彼を実行委員に任命したことを言及しておこう。

第一回文化祭実行委員会は、その日の夕方四時から行われた。掃除をさつさと抜け出たクリスと来夏は、野瀬先生から伝えられた通りに一階の会議室に赴き、集う人々の顔を部屋の端っこで眺めていた。生徒会役員たちが仕事らしい仕事をしているのを、クリスはこの時初めて見た気がした。副校長と森先生の目があるからかもしれないが。いや、教師の目など気にするような人たちではないだろう。実際対立関係にあるという噂も聞くし。

「あつ、来夏先輩！」

「……お前かよ」

明るい声にふと横を振り見ると、来夏の元にはたばたと駆け寄ってきた真央の姿があつた。来夏は口調こそ落としてつつも、口元の緩み方から言えば決して嫌がつてはいなかった。

「先輩も実行委員だつたんですね！」

「ああ。お前と一緒に知ってりや辞退したけどな」

「ひどい！そんな言い方ないですよ、先輩！」

「あー、もううるさい黙つてろ」

「石崎先輩、来夏先輩って結構冷たい人なんですね」

「えっ、そうかなあ……？」

「お前にだけな」

「何ですか?!」

「なんとなく、だ」

手を掴んで揺すってくる真央から、来夏は静かに視線を逸らした。自分は本当にこの少年に惚れているのか。アニエスに彼を託された

日、自分は戸惑いと共に喜びも感じていた。人に信頼される喜び、それだけではない。真央を守ることを、言わば義務にされたことに対する喜びだ。明るく純粹で脆い真央の心を、そして喉を、誰にも壊されたくないと思った。だが、それだけの気持ちで彼のことを好きだと言い張ることができるのは、来夏にも分からなかった。真央にしても、自分のことを慕ってはいるが、その尊敬が恋愛と結びつくかはまた別問題だ。ただ分かることは、今握られている腕が嫌に熱いことだけだ。

「先輩？来夏せんぱーい」

うるさいと言つて真央の手を振り払おうとしたその時だ。人ごみを掻き分けてやつて来た里見先生が、真央の背後から肩をとんとんと叩いた。不思議そうに振り返った真央に、先生は真面目な顔でこう言つた。

「秋元君、今日定期健診の日よ。忘れてたでしょ？」

「……あつ！」

里見先生は少し笑つて溜息をついた。

「とにかく、今病院から電話があつたから急いで行つてらっしゃい。千住先生が車で送つてくださるそうよ」

「えつ、千住先生が？」

「なあに、石崎君？」

「い、いえ、べ、別に」

今度はクリスが顔を背ける番だった。こちらはまだ気持ちの整理はついていない。薫に憧れのようなものは感じているし、薫が誰かと睦まじくしているのを見ると掴みきれない感情が沸いてくる。しかし、だからって……

「でも、実行委員の方は……」

「代理をたてれば大丈夫よ。関本君に頼んでおきなさい。よろしくね、関本君。さつ、早く行かないと、千住先生をお待たせしちゃうわ」

里見先生に背を押され名残惜しげに部屋から去り行く真央を、クリ

スと来夏は別々の想いを胸に見送っていた。あいつ、まだ病院に行つてたのか。来夏は胸の中で密かにつぶやいた。不思議ではない。健康そうに見えても、真央の中にまだ病魔は潜んでいるのだから。それさえも忘れていた。自分の手はまだ小さすぎる。

「もう開始時間を五分も過ぎてるぞ。いい加減席につけ」
赤いジャージを膨らませて森先生が怒鳴った。クリスと来夏は野太い声にびくつと肩を震わせ、顔を見合わせて少し微笑んだ。教室の前方では、慎が不機嫌そうに頬杖をつき、いらいらと机に指を叩きつけている。空いている席を適当に見つけると、二人は人ごみを抜けて素早く腰を下ろした。

結局開始予定時間を十分ほど過ぎて、第一回文化祭実行委員は始まった。まずは颯によってレジュメが配られ、荔枝がプログラムに従って議事を進めた。周囲の静けさがクリスの緊張感と責任感を助長させた。クリスは、陽の居眠りを副校長が注意する一二分を使い、慎の連絡を必死でメモに取っていたが、ふと来夏の見事に要点を得たメモを見て感嘆し、自分は到底かなわないと思って諦めた。金曜日、あさつての第二回実行委員会に行わなければならないことも、彼のメモを見れば一瞬にして読み取れる。クラスの演目を決めてくることが、だ。演目というものが具体的にどのようなものを指すのか、クリスには想像がつかなかったが、話を聞く限りでは劇をやるのが模擬店をやるのが何でも良いらしい。クリスは更に文化祭が楽しみになってきた。

「えーと、最後に」

副校長が挨拶のために前に出て言った。

「我が校の文化祭には非常に多くの方が見に来てくださる。三宿市の方、学園の受験を考えている中学生や小学生、その親御さん、そしてもちろん君たちのご両親や兄弟もだ。そういった方たちに恥ずかしくないよう羽目を外さず、しかし、三宿学園らしい文化祭を作ってほしい。それが我々三宿学園の教師の一番の願いだ。私たちは皆、君たちを信頼しているよ。何かあったら生徒たちだけで解決し

ようとせず、先生にも頼るように。教師と生徒が一体となってこの第46回目の文化祭を成功させていこう。以上だ」

会議室の後方から、大きな拍手が聞こえてきた。一同不思議に思っ
て音源を捜し求めると、上下逆さまに置いてあったゴミ箱からふい
に足が生え、教室の扉に向かって動き出した。「校長！」副校長が
声を上げた時にはもう遅かった。校長と思しき人影は、被っていた
ゴミ箱を勢いよく放り投げ、廊下の向こうへと疾走していった。

「校長！待ってください！まだ予算書に判子を押ししてもらってませ
ん！」

「オレがせっかく三分で仕上げたのに……」
陽がぼそつと呟いた。

「関本は去年の文化祭は何をやったの？」

「ああ、何だっけ。確か迷路かなんか作った気がする……」

「へえ、そんなのもやるんだ。楽しそうだね」

「やめといた方がいいぜ。あれ準備と後片付けが大変だから」

「ふーん」

校長の乱入と逃走により一時中断された実行委員会だが、荔枝の
何事もなかったかのような進行で無事終了した。冬の夕暮れは早い。
最終下校時刻にもまだ余裕があるというのに、もう日は暮れている。
鐘の音だけが薄暗い中に反響していた。遠くに寮や校舎の灯りがち
ろちろと揺らめき、濃い紫色の空には帰りを急ぐ鳥たちが、捉えが
たいシルエツトを浮かべている。クリスは鞆から手袋を取り出した。
氷のような冷たさに、皮膚はぴんと張り詰めていた。

「今年は何をやるのかな？」

「まあ、明日相談つてとこだな。落合はどうせホストとかくだらね
えこというんだらうけど」

クリスは学園祭とホストを上手く結びつけることができず、しばら
く悶々としていた。

「俺としてはあまり手のかからねえものをやりたいところだけど。」

石崎は何か案でもあるのか？」

「うん、まだよく分からないし。でも、やってて楽しいものがないな」

「それは俺も賛成だ」

いつもの分かれ道に立ち、来夏に手を振ろうとしてクリスははつとした。そうだ。もう白のアトリエには戻らないんだ。友達とも少し長く一緒に帰ることができるようになった。少し嬉しく、少し寂しかった。ノアと二人で辿った道が恋しく懐かしく思えた。だが、その道を辿っても、二人で共に過ごしたアトリエには戻れないのだ。

「石崎？」

来夏の呼ぶ声に、クリスはゆっくりと振り返った。今まで背後にあったものは、今は目の前にあるのだ。

「道、こつちだろ？」

「うん……」

「大丈夫か？」

「……うん」

深呼吸を一つして道を正したクリスの肩を、来夏は手を置いて引き寄せた。クリスは顔を上げた。案外間近に親友の顔はあった。

「関本……」

「ぐずぐずしてる暇はねえぜ？英語の宿題もいつもより多く出てるしな」

「……そうだね」

「引越したって何にも変わってないだろ？この学園の中にいることも、俺たちと友達でいることも、有瀬が待ってることも。慣れない場所の有瀬は一人で待ってるんだから、早く帰ってやれよ。これから忙しくなるぜ」

「うん……あつ、そうだ。文化祭で何やるか、有瀬にも聞いてみようかな」

来夏に促され、クリスも新たな家路を進み始める。ただし郷愁は未

だ胸の中に。

第二十話 冬は色めく・後編

翌日のホームルームの時間に、話し合いは行われた。来夏の予想通り、落合はホストと叫び、野瀬先生に言葉通り手痛い一撃を食らっていた。菜月は昼食前で腹が減っているのか、たこ焼き屋からソースせんべいまでの食べ物屋の名前を言い尽くし、黒板に意見を書き留めるクリスの仕事は、ますます忙しくなった。意見は一通り出たが、正直皆ぴんとくるものはないらしく、何もまとまらないままにその日の話し合いは終わった。昼休み、クリスと来夏、それに野瀬先生の三人は、溜息を吐きながら机を挟んで向かい合っていた。

「どうしよう?」

「どうしようって言われてもなあ」

「本当。どうしよう、だわ」

三人は同時に、ホワイトボードへと変化しつつある黒板を見やった。「個性豊かなのは嬉しいんだけどねえ……」

「というよりは、皆いい物を思いつかないんだと思います。だから適当に思いついたものを挙げてるんでしょう。その……落合と酒本以外は」

来夏は冷静な分析を述べた。クリスは自分の手には負えない問題にぐっと腕を天井に伸ばし、そのまま机の上につ伏した。野瀬先生も腕を組んで考え込んだままで何も言わない。

「あーあ、何か食べ物の名前見てたら、お腹空いてきたなあ……」
来夏がちらりと腕時計を見た。

「そうね、そろそろお昼にしようかしら。まあ、また明日一日あるし。何かしらには決まるでしょう」

野瀬先生の言葉に三人が立ち上がった時、ちょうど良いタイミングで、ノアが教室に飛び込んできた。今日はクリスもノアも寝坊したため、昼食は購買で各自ということになったのだ。ノアはクリスの分も買ってきてくれたようで、多すぎる戦利品をクリスに見せてに

こつと笑った。クリスマスも急いで駆け寄った。

「適当にパンを買ってきましたけど、クリスマス様はどれにします?」

「そんな。有瀬が買ってきたんだから、有瀬が先に好きなのを選びなよ」

「でも、元々は僕が寝坊したせいですから」

「寝坊は両方の責任だって」

「そうですか?……あつ、野瀬先生!」

財布を手持ちに、カフェテリアへと向かおうとしている先生を、ノアが思い出したように呼び止めた。野瀬先生は立ち止まり、珍しく優しげに微笑んで「何?」と尋ねた。

「あの、父は今日高等部には……」

「今日はまだお見えになってないわね。明日には校長先生とお話しに来るそうだけど」

「そうですか」

ノアは相変わらずの笑顔で頷き、礼を言った。

「あれから理事長には会ってないの?」

「ええ。元々頻繁に顔を合わせてた訳ではありませんから。父のこゝとだから不思議ではないです」

菜月の鳶のような猛攻からメロンパンを死守しながら、クリスマスは紅茶でパンの破片を飲み込んだ。

「手紙とかメールとかでも何も言ってこない訳?」

「父は筆不精ですし……それに極度の機械音痴なんです。この間もテレビを蹴飛ばして壊してしまつて。これで今年に入って五回目なんです。今回で今年最後だと嬉しいんですけど」

「それはなんか機会音痴と違う気がするんだけどな……」

「そうですか?」

ついにメロンパンを一口やられた。鮫のように食いついてはなれない菜月にそのパンはやることにして、クリスマスは新しく焼きそばパンの袋を開けた。菜月ががつついていている間にさつさと胃に収めなけれ

ばならない。

二人のすぐ隣では、来夏が真央に昨日の会議の内容を伝えている。真央はいはいと素直に聞いているように見えて意外と理解していなく、来夏に何度も怒られていた。ふと話が脱線した拍子に、千住先生との名前が耳に入り、クリスは思わず聞き耳をたてた。込み上げてくる好奇心を抑え切れなかった。

「それで、検査はどうだったんだ？」

「別に問題はありませんでしたよ。だから言ってるじゃないですか。僕はもう大丈夫だって。皆過保護なんですよ。アニエス姉さんも、母さんも。千住先生にまで心配されました」

「信用ならねえんだろ、お前のことが」

「あつ、ひどい！」

「まあ、それは冗談にしても……用心するに越したことはねえんだぜ？ 検診の日も忘れんなよ。毎回千住先生に送ってもらえると思ったら大間違いだ」

「分かってますよ……でも、千住先生って素敵な先生ですね。優しく、それに頭もよくて、かつこよくて、車の運転もすごく上手かったし。昨日も病院の看護婦さんたちがすっかり見惚れましたよ。ほんと、先生には見えませんよね」

他の者の目には、来夏の顔が微かに引きつった気がした。

「お前、まさか……」

「違いますよ！ ぼ、僕はただ……」

真央は頬を赤らめて少し俯いた。クリスの不吉に高鳴った胸の音に、ノアの灰色の目が素早く移動した。

「僕はただ……その……高望みかもしれませんが……あの人がアニエス姉さんとお付き合ってくれたなあ……」

小さな安堵の息がどこから漏れたのか、クリスにも分からない。二箇所から聞こえたように思うが。来夏はわざとらしく呆れたような顔を浮かべてみせた。

「お前なあ」

「いいえ、別に本気で願ってる訳じゃないんですよ！でも、ほら、この間の石崎先輩たちの引越しパーティの時も二人で楽しそうだったし。姉さんがあんな表情もなんだか久しぶりに見た気がして。僕の方は安定してきましたから、あとは姉さんかなって……」

「クリスマス様」

ノアに肩を叩かれ、クリスマスはようやく手に持っていた食べかけのパンがいつの間にか消え去っていることに気がついた。超特急で振り向いた先に菜月はいない。沸きあがる水のカーテン越しに向こうを見やれば、もぐもぐと口を動かし、こちらの様子をうかがっている菜月の姿があった。

「あいつ……！」

ノアはくすつと笑声を漏らした。

「クリスマス様も懲りませんね。油断しちゃダメだってことぐらい、分かっているくせに」

「あつ、先輩、俺の弁当分けましようか？」

明音の有難い申し出を、クリスマスは丁重に断った。彼が緑色のスライム状のものを差し出してきたので。

「だ、大丈夫。お腹は別に空いてないから」

「そうなんっすか？」

「うん……多分」

「無理しないでくださいクリスマス様。後でケーキでも……作りましたよ」

「それで、あれから息子さんには会われていないのですか？」

「当たり前じゃない。用もないのに」

正午の日のよく当たる校長室で、理事長はコーヒーをすすりながらいつもの通り淡々と呟いた。全ての衣類をオーダーメイドにするのもいかなものかもしれないと考えながら。なぜなら、ぴたりと理事長の腕の長さにあった裾は、右手の火傷の痕を隠してはくれな

かったからだ。校長は時々そちらに、痛ましいような、皮肉っぽいような視線を送っていたが、理事長は平然としている。だが、何か反応してやりたくなくて、理事長は右手を持ち上げてしげしげと眺めながら、芝居がかった調子で言った。

「あーあ、これじゃあ天下の色男が台無しだ。そりゃ、男はちよつとぐらい傷があつた方がいいとも言っけどね」

「あんな無茶をされるからです。命があつただけでも有難いと考えなければ」

「君は意外と冷たいんだね。普段は散々ノアにもつと構え構えつてうるさいくせに。いざ命を助けたとなると皮肉ばっかりだ」

「息子さんを助け出されたことについては尊敬も覚えましょう。しかし、向こう見ずにも程があります。あの状況で火の中に飛び込むなど。もし貴方が亡くなつたら、奥様はどうなりますか？」

「喜ぶんじゃないかな、美和子なら」

校長は何も言わなかった。あの可憐な貴婦人が未亡人となつた時のことを思うだけで、哀れが身に染みる。校長はカップを持ち上げ、口に運びきれないまま受け皿に戻して再度説教を開始した。

「それにこの学園はどうなります？ 貴方がいなくなつたら、誰が学園を引つ張つていくのですか？」

「僕の仕事を見といてよく言うよ。あのねえ、僕も不死身じゃないの。今日だって帰り道にトラックに轢かれるかもしれないし、上から落ちてきた植木鉢に当たつて死ぬかもしれないの。僕がいなくなつたら動かないようじゃ、こんな学園は終わりだね」

「……そうですかねえ」

校長の口を、扉をノックする音が閉ざした。校長は訪問客が副校長だった時に備え、素早く臨戦態勢を取つたが、理事長の勝手な指示で入ってきたのはジャクソン先生だった。ジャクソン先生は瘦身に紫の衣装を身に纏い、理事長の顔を見て長い睫をぱちぱちと瞬かせた。

「あらあ、理事長じゃないですかあ」

「やあ、久しぶり。元気そうだね」

「おかげさまで。理事長はお元気？お怪我の具合はどう？何だか奇跡の大脱出を経てますます男ぶりが増したって感じもしますけどお……ごめんなさい、私お邪魔でした？」

「いや、構わないよ。校長に何か用があるなら座りなよ」

「ありがとうございます」

ジャクソン先生は腰をくねらせて薦められた席につき、理事長が背後から見守る中で、一枚の紙切れを校長に差し出した。

「これは何です？」

「企画書です。私、洋服のデザインが趣味なんで、今回の文化祭では是非ファッションショーをやりたいと思って。校長せんせつの許可をいただきたくて」

校長より先に理事長が企画書を手にとった。理事長は部屋を歩き回りながら楽しそうに口元をゆるめて何度も頷き、それから一頻り声を上げて笑って校長にも手渡した。ジャクソン先生は睫毛を高速に動かして、理事長の様子を観察していた。

「いいじゃないの。僕はいいと思うよ。生徒たちも面白いがるんじゃないかな？ねっ、風間校長？」

ジャクソン先生は嬉しそうに手を叩いた。校長も一回だけこくと大きく頷いた。

「ええ、面白いと思いますよ」

「ありがとうございます！じゃあ、校長せんせつ、ここにサインを……」

「まずい！」

校長は突如叫んでひらりとデスクを飛び越え、窓から飛び出していた。啞然とするジャクソン先生と理事長の前に、飛び込んできたのは副校長と橋爪先生だった。副校長はなにやら書類の束を抱え、橋爪先生は黒いジャージの膝に手についてはあはあ息を吐いている。

「校長はっ?!」

「今飛び出していきましたよお」

ジャクソン先生が答えた。副校長はがくりと肩を落とし、それからふと気が付いたように言った。

「あれ、理事長、校長との会談は明日だったはずじゃ……？」

「うん。ちよつと明日だと面倒だったからね。それより昼食は何がいい？うなぎ？寿司？蕎麦？うどん？天ぷら？」

理事長は、校長の机からファイルを取り出してぱらぱらと捲っていた。ジャクソン先生の「うなぎ！」の一声で、その場にいた四人分の昼食は決まった。

台所からうなぎの香ばしい匂いがする。理事長がわざわざ夕食を送り届けてくるなんて一体どういう風の吹き回しだろう。ノア曰く「どうせ昼食に余分に注文したんでしょう」とのことだったが。ちなみに、魚の区別がちゃんとしているかどうかについては、「父はうなぎが好物なので大丈夫です」とのことだった。

込み上げてくる唾液をぐくりと飲み込み、クリスマスは小さな二枚のメモ用紙を見比べて、順にチェックを付けていた。もう出し物が決まったクラスには何をするのか聞き込みに戻り、出すぎた案の中から被ったものを消去しているところだった。別に被つていてもよかつたのだが、集客という点でやはり不利になるし、似たりよつたりではつまらない。ミュージカルは1年B組と被るが、演目さえ違えば何とかなるかもしれない。三角つと。お化け屋敷は3年A組とB組が合同でやるようだ。三年生がやるものにはとても適わないだろう。こうしてチェックをしていくと、残ったのは菜月が余すことなく挙げてくれた食べ物屋ということになる。しかし、三宿学園の生徒は一般以上に味に厳しい。具材を余らせることはかたく禁じられているし、衛生管理も大変だ。恐らく全て却下となるだろう。すると、やはりミュージカルか劇となるのか？野瀬先生は裏方に回る子が多いからあまり好きじゃないと言っていたが……

「クリスマス様、夕食ができましたよ」

「あつ、うん」

クリスはひとまず筆記用具をしまつと、ガラスの平面の上に食事が並ぶのをおとなしく待った。その間も、頭の中では考えを巡らせながら。

「大変ですね。実行委員は」

「まあね。しょうがないよ。でも、本当に何をするのかなあ……この調子だと劇かミュージカルになりそうなんだけど。後は食べ物関係かな」

「劇でいいんじゃないんですか。ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「ええ、ありがとうございます」

クリスは箸とお椀を取った。一口含んだ味噌汁は何だかいつもと違う気がした。なぜだろう。口当たりから香り、味に至るまで、まるで馴染みがないのである。

「でもさ、劇だとやっぱり舞台に立てない子とか出てくるだろう？そういうの、野瀬先生はあまり好きそうじゃないんだ」

「そう言われても……僕なんかは、舞台裏の方が性にあってますし、そういう人たちは大勢いると思いますよ」

ノアはクリスに水を注いで渡した。

「そりゃあ、そうかもしれないけど。やっぱりつまらないよ。だとしたら、やっぱり食べ物関係なのかなあ。でも、色々大変そうだし……あつ」

「どうしました？」

尋ねてもしばらく返事のないクリスに、ノアは訝しく思って顔を上げた。クリスはうなぎを箸でほぐしたまま自分を見つめ、ぴたりと固まって動かない。ノアは首を傾げ、すぐにまた食事に戻った。自分の作らない料理を食べるのは久しぶりだ。父はもしかして気を遣ってくれたのだろうか。もしかして、全て見通しているのだろうか。

「そうだ……君が指揮を執ってくれればいいんだ」

そして、全て見通せていないのはこの人。

「……何のですか？」

「料理のだよ！だって、有瀬が作るものなら絶対人気が出るはずだし、お客さんだって絶対集まるよ」

「ご冗談を」

クリスマスの表情の輝きが一層強まっていくのが視界の端に見えた。そのまま目を逸らそうとして、何の気なしに机の上に置いた左手をぎゅっと握られていることに気付いた。途端にノアの頬が仄かに赤くなる。

「ねっ、有瀬」

「でも……」

「食べ物は何でもいいよ。有瀬の得意なもので。色々あるけどさ、焼きそばとか、ドーナッツとか。あっ、ほら、今日作ってくれたケーキとかでも」

「……ええ、じゃあ、ケーキなら」

ノアは小さく頷くと、クリスマスは飛び上がって喜び、席を立ち上がった。テーブルの上で皿がかたかたと音をたてる。

「本当？ありがと！じゃあ、ちょっと関本に電話してくるね！あっ、今日のケーキ余り、明日学校に持っていこうよ。皆に食べてもらえば、絶対にそれで決まるからさ」

食事中にも関わらず、クリスマスは携帯電話を取って二階の部屋へと駆け上がった。行儀の悪さも忘れて飛び出していくなんで、ノアに文化祭の主演になってもらうということが、よっぽどの名案に思われたのだろう。戸が二度三度と閉じる音を聞きながら、ノアは静かに肩を落とした。ちょうどいい。味噌汁も冷める。何とか上手く誤魔化すことができる。

「そうだね、じゃあ喫茶店とかでいいかな？うん。うん。大丈夫。

有瀬は色々詳しいから、何でも指示してくれると思うよ。一応明日皆に聞いてみるってことで。うん。ありがと。関本が賛成してくれてよかったよ。野瀬先生もきつと良いっていうよね。先生って結構

有瀬をひいき気味だし……あはは、冗談だよ。うん、じゃあ、また明日ね、おやすみ」

一階へと戻ってきたクリスを、ノアは黒い海原を背景に、どこかにはにかむような笑顔で迎えた。クリスマスも笑った。いつか言った言葉を思い出す。もったいないよ、こんなに上手なのに。もっと色んな人に食べてもらうべきだよ。あの時、自分とノアの絆はここまで深くはなかったけれど。でも、こうして友情で強く結ばれた今、あのふと零した言葉を叶えることが出来るのだ。

「じゃあ、クリスマス様、僕は食事が終わりましたから」

クリスが席についたのと入れ違いに、ノアは食器を持って立ち上がった。普段はクリスが先に食事を終えて待っている、というのが決まりのパターンなので、こういったことは珍しい。

「あつ、そうだ、有瀬、一つ気付いたことがあつただけど」

ノアの背中が止まった。

「あのさ、お味噌汁の味変えた？」

「ええ。お気に召しませんか？」

「うーん、俺は前の方が好きだけど……」

「そうですか」

ノアは相変わらずの笑顔で頷き、台所に向かって歩み始めた。ただ、一つの問題は、その笑顔がクリスマスには見えていないということだった。そして、ノアの表情は再びかく閉ざされていく。

不意に訪れる冷たい旋律。ただ巻き戻して、冬は色めき進み行く。

第二十一話 移り行く円舞曲・前編

見上げる空に夜の帳が下りる。月は冷たく冴え渡り、寄り添おうとする星たちを蹴散らかしている。騒がしい虫たちも今は息絶えて冷たい土の下、そして見下ろす町には灯りと人の呼吸が揺れている。開け放った窓から風が吹き、電話に押し当てた耳を凍らせた。それを合図にするように、少年はゆっくりと電話を下ろした。あの明るいきはきした声が消えたおかげで、背後にかかるワルツがよく聞こえるようになった。少年は振り返った。オレンジ色の光があふれる室内では、男が一人ソファの上に腰を下ろしてくつろいでいる。そっと歩み寄って頬に手を充てると、男は青い目を細く開いた。少年はその胸の中に身を預ける。

「それで、ここにいたためにどんな嘘をついたのかな？」

「嘘なんてついてません。父と一緒に過ごすと言ったんです。間違っていないでしょう？」

「そう……間違つてはない」

男の指が少年の髪を梳る。葡萄酒で染めたような鮮やかな赤紫色に、照明が線を引いていた。男は微かに緩めた口元で続きを紡いだ。

「間違つてはいないけれど、彼が想定している君の父上は違つんじゃないのかな。そこところを、ちゃんと説明してあげないと」

「嫌です。だって、あの人、きつと妬きますもの」

「妬くの？」

「ええ。僕は何もかもあの人を知ってるから分かるんです。

僕は一度もあの人のことをうらやましいと思つたことはない。本当はずっと軽蔑してるんです。光の中の真実は周囲に漏れ出してしまつから。でも、あの方は僕のことを何も知らない。何もかも分かつたような顔をしていても、やはり何にも分かつてない。気持ち悪い……僕はあの人のこと、好きじゃないんです」

「……随分ひどいことを言うんだね。我が息子ながら」

少年は父の抱擁を得て無邪気に笑った。

「ええ。だって、僕には貴方が一番愛おしいんですから」

「そっ？」

ワルツが止まった。そして、室内にも夜の帳は侵入する。聞こえたのは、小さく息を吐く音だけ。

「じゃあ、部屋の内装は今週中に考えてきて。次、メニューだけど
今日の話し合いでは、来夏が黒板を書き、クリスマスが司会を進めて
いる。来夏のようにスムーズにはいかず、やはりつかえつかえ
しながらも、何とかここまで辿りついた。休み時間まで後五分もな
い。メニューの全ては決まらないだろうが、一応大まかなことぐら
いは決めておきたい。ケーキが何種類だの、飲み物はどうするだの。
来夏と野瀬先生も口出しはせず、黙ってクリスマスの好きなようにさせ
てくれた。落合の腕が空中に上がった。

「何、落合？」

「いや、料理の指揮は有瀬が取ってくれるんだろ？だったら有瀬が
決めた方がいいんじゃないかねえかなって思ったんだけど……」

「あつ、そっかあ。どうかな、有瀬？」

落合の提案に頷き、急いで見遣った先でノアはにこにここと笑ってい
た。クラス中の注目を浴びても特に物怖じした様子はない。案外肝
が据わっているので、クリスマスも少し驚いたほどだ。

「いいえ。皆さんで決めてくださって構いません。できないものも
特にありませんし、おっしゃる通りにしますから。その方が僕とし
ては楽ですし」

「んー、そうなの？じゃあ、何か皆の意見を聞きたいんだけど……」
考える時間の二分を与えている内に鐘が鳴った。次の授業が体育の
せいか、クラスメートたちは皆、来夏の号令を聞くなり廊下へ飛び
出してしまった。ノアもその波に乗っていたことに気がついたのは、
来夏と共に遅れて準備をしていた時だ。落合も机に突っ伏して眠る

菜月を揺すっている。

「えっと、大まかなことは決まったよね。後はメニューを決めて材料の準備をしないと」

「それから内装に使う飾りもだ。今週中に予算を振り分ける必要があるな」

「あつ、そっかあ」

ぴくりとも動かない菜月をととう諦めて、落合は自分の席の上に座り、体育のワンセットがそろっているか確認しはじめた。腰が重いのは、天敵森先生の授業だからだろう。落合はたつぷり時間をかけて体育着を検めていたが、話し合いながら荷物をまとめるクリスたちに、思いついたように口を挟んできた。

「あつ、そうだ、エーリアル。一つ確認したいことがあるんだけどよ……」

「何？」

クリスが訊き返すと、落合の歯切れは急に悪くなった。

「いや、あのさ、有瀬のことなんだけど……本当に大丈夫か？」

「大丈夫って？」

「別に非難してる訳じゃねえけどよ、あの調子でちゃんとやってけるかなーんか不安で。大丈夫なのかなって思ってる……」

「大丈夫だよ！」

クリス間髪入れずに答えた。その語気の強さには、菜月も目覚めてようやく顔を起こし、眠たげに目をこすった。

「えっ、なに？」

「有瀬は大丈夫だよ！まだ少し慣れないから、自分の意見とか考えとか、素直に言えないだけなんだ。有瀬は頼りなくなかないし、料理のことなら、それこそ……！」

感極まって言葉につまったクリスの頭に、来夏がぼんと手を置いた。クリスの憤りに近い興奮は途端に鎮まり、クリスはきよんとした顔で前のめりになった。落合もからからと笑っていた。

「おいおい、エーリアル、そんなにむきにならなくても、俺は何も

そこまで言ってねえぜ。あつ、もしかして、お前、有瀬のこと……」
むきになった恥ずかしさからか、それとも照れからか、クリスの頬はたちまち真っ赤になった。

「な、何言ってるんだよ！有瀬は友達だってば！それに、俺は……」
クリスは思わず息を呑んだ。瞼の裏を横切った微笑み。風になびく紺色の髪、眼鏡越しに優しくこちらを見つめる青い瞳と、白衣を纏ったすらりとした姿。まさか、でも。違う。そんなはずはない。だって、だってあの人は

菜月が立ち上がる音で、クリスは我に返った。菜月は大儀そうにあくびをし、それからぐつと伸びをして、さほど感情のこもっていない口調で一言だけほやいた。

「颯は渡さないから」

「……はっ？」

去り行く菜月に、クリスはしばらく何も言い返せなかった。今のは一体何のつもりだろう。自分が想像していたのは颯先輩とは別の人だったはずなのに。単なる警戒だろうか。いつしか仲良くしているところを目撃されてしまったからか。

「何？お前、榊原先輩が好きなの？」

来夏はからかうように尋ねてきた。クリスは急いで首を振る。

「ま、まさか！」

落合もそろそろ動かなければいけないことを認めだし、三人は並んで菜月の後を追った。階段を下る途中でその人とすれ違った。だが、その人は鳥居先生と話すのに夢中でこちらに気付いてくれない。

「おっ、みちるちゃんにもとうとう春が来たな。よかったじゃねえか、千住先生なんて玉の輿だし」

クリスはその人の影を目で追うのをやめた時、薫はようやくクリスを顧みたのであった。

「なあ、ライ、今日の授業がAB合同だって知ってたか？」

「ああ。前回の授業の終わりに言ってたからな」

「じゃあ、今日の授業がダンスっていうのも？」

「ああ」

「じゃあ、最後に授業に来た奴はあの髭と組むっていうのも?!」

「うるさいぞ、落合、静かにしろ！」

あの髭こと森先生に叱られ、落合は青ざめた顔で肩を落とした。来夏と菜月の慰めには、あまり気が入っていなかった。体育館の壇上で、森先生が演説している。

「毎年恒例だが、文化祭の後夜祭では三宿市の方々も交えて盛大なダンスパーティーがある。この授業を使ってそのための練習をしておきたい。まあ、いくら張り切っても、残念ながらうちの真奈美は来ないがな」

「誰が四歳児と踊りたいと思うんだよ……」

落合がぼそつと呟いた。

「という訳で、怪我をしない程度にやってきたいと思う。という訳で、まずはステップの復習から始める。適当にペアを作れ。落合はすみやかにこっちに来るように」

忍び笑いが各所から漏れた。大河内もそれにならって微かに笑っているのを、落合は見つけた。クリスは自然ノアを求めて人ごみの中を探し始めたが、どこにもそれらしい姿は見当たらない。もう既に他の人と組んだのだろうか。いや、それならそうで構わないし、むしろ喜ばしいことなのだが。それでも……菜月が袖を引っ張ったので、クリスはノア探しを中止せざるを得なかった。しかし、三拍子のリズムを踏む足音にも、壊れかけたカセットテープが流す途切れ途切れのメロディーにも、ノアの影はちらりとも現れなかった。その代わり、菜月には「石崎、ダンス、下手」とのお言葉を脳が勝手に再生し始めるまで頂戴することになった。

「石崎、ダンス、下手」

「ああ、有瀬なら頭痛がするとか言っとったぞ。保健室を見に行っ

てみたらどうだ？」

森先生の忠告を得て、保健室へと駆け行こうとするクリスを、何者かの声が呼び止めた。しまった、クリスは思った。そういえば、この間、廊下を走って副校長に怒られたばかりだったっけ。だが、両肩を包み込んできた手は、とても元体育教師の厳ついそれとは思えない。不思議に思って振り返ると、黒いポロシャツにグレーのパーカーを羽織った颯が笑いながら立っていた。

「なんだ、颯先輩かあ。びっくりさせないでくださいよ」

「ちよつとからかってみただけだよ。実際に廊下を走るのは危ないんだから、気をつけなきゃ」

「はい」

クリスは頭をかきながら聞こえだけいい返事をした。颯は満足したように二三度頷く。

「それでよし。ところで、クリス、今度の文化祭でダンス部も公演をやるんだけど、その時の背景、また頼んでもいいかな？」

「えっ、あっ、はい」

あっさり受け入れた後でクリスは内心首を傾げた。そんな時間が自分にあるのかといぶかしんで。しかし、颯はもう微笑んでおり、その微笑を打ち壊すには、かなりの勇氣と非情さが必要だった。クリスはごくりと唾を飲んだ。

「ありがとう。いつも助かるよ、クリス」

「いいえ、そんな……」

「今度何かご馳走するよ。何がいいか考えておいて」

「あ、ありがとうございます！」

颯が去り、再び走り出そうとしたところで、副校長が踊り場から姿を現した。クリスはスタンディングスタートの体制を普通の徒歩の姿勢に大急ぎで改め、結果、不自然に進んでよろめいた。その様子はもちろん副校長にはばつちり目撃されており、恐々顔を上げたクリスはまともに目が合ってしまった。

「お、おはようございます……」

クリスは愛想笑いを浮かべようとして、今度は思いつきりこけた。副校長は不思議そうな顔をした。

「大丈夫か？」

「あつ、はい」

どうやら再び罪を犯そうとしていたことはばれなかったようだ。クリスはひとまずほっとして、一刻も早く副校長の目から逃れるべく早歩きで行こうとした。

「あつ、石崎、待て。話がある」

やはりそうは問屋がおろさないのか。渋い顔で振り向いたクリスに、副校長は慌てて駆け寄ってきた。少なくとも人のことは言えないんじゃないか、とクリスは思った。しかし、副校長の話題は、廊下走り抜けの件とは、全く別のことであった。

「石崎、今度の文化祭のことなんだが、個展を出してみないか？」

クリスは数度目を瞬かせた。

「……えっ？」

「いや、無理強いはいしない。そもそも君は実行委員で忙しいだろうし、別に客引きのために君を使うつもりもない。だが、もし、君にその気があるなら、派手な宣伝は特にしなないという方向で、小さな個展をやってみてはどうかと思つてな……」といつても、これは千住先生の提案なんだが。ちようと視聴覚室が毎年空いてるから、そこを使つてはどうだろう？ まあ、判断は君に任せるよ」

「えっ、千住先生が……？」

クリスは胸元に手を充てた。どうしよう。先ほど颯に頼まれたこともあるし、副校長の言うとおり実行委員の仕事もある。その上、日々の宿題が積み重なっているというのに、ここで安易な判断はできない。だけど、千住先生がわざわざ提案してくれたのだ。いつか自分の絵が好きだといつてくれた先生が、唇に触れた指先が桜色に染まっていた。副校長は待っている。恐らく保留したいとの答えを聞くために。後になったら領けなくなるかもしれない。忙しすぎる現実に埋もれて、この想いを台なしにしてしまうかもしれない。そ

うなる前に、自分を縛り付けてしまいたかった。埋もれて、二度と身動きがとれないように。クリスはそつと口を開いた。

「やります」

副校長は少し驚き、それから激励と感謝の言葉を述べてクリスの肩を叩いた。クリスにはほとんど聞こえていなかった。気のせいだったのだろうか。踊り場を見上げた時、一瞬薫の姿見えたような気がしたのだ。だが、追いかけることもできない今は、確かめる術もない。

「へえ、今日の授業はダンスだったんですか」

「うん……それより、頭が痛いつて聞いたけど、大丈夫？」

「ええ。少し横になつたらすぐに治りましたから」

「そつか。よかつたね」

里見先生からノアを預かったクリスは、昼休みの騒がしい廊下をのんびりと歩んでいた。ノアは元気そうだった。頭痛の原因はよく分からなかったが、大方睡眠不足とかその辺りだろう。昨日はひさしぶりに理事長と会つたそうだし。理事長とノアが会つて何をするのか想像つかなかったが、彼らは彼らなりに楽しくはしゃぎまわつたに違いない。クリスは嬉かつたし、いつもより浮かれた調子にも見えるノアが微笑ましかつた。だからといって、決して恋をしている訳ではないけれど。

「ダンスの授業だったら、ちゃんと出ておけばよかつたかもしれませんが。僕、ああいうの苦手ですから」

ノアが言った。ああいうのとは、つまり運動全般を指すのだろう。僻むような調子もなく、ノアは続けた。

「まっ、どうせパーティには出ないんですけれどね。人の多いところって何だか気後れがしてしまつて。知らない人が多いと、特に」

「そんな。もつたいないよ、せつかくの後夜祭なのに。」

不満を覚えるのは、文化祭実行委員の性なのか。ノアは笑つて首を

振った。

「いいんですよ。毎年そうしてましたから」

「今年ぐらい出てみようよ。後二回しかないんだよ？それに、俺、来年は学園にいるか分からないし。有瀬と一緒に出てみたいな」

「えっ？」

二人は同時に顔を見合わせた。一人は憂いを含んだ表情で、一人で意外なことを聞いたような面持ちで。

「クリス、様……？」

「いや、なんでもないよ。ほら、前も言ったじゃないか。俺は絵を探しにこの学園に来たからさ、絵が見つかったあとはどうするかあまり考えてないんだ。叔父さんは多分帰ってこいつて言うだろうけど……どうなるんだろ。その前に、絵はちゃんと見つかるのかな？最近なんにもしてないや。このまま絵のことなんか忘れて、普通の生活に埋もれていくのかもしれないな。それもいいかもね……でも、いつか絶対後悔する時がくるんだろうな。先のことなんて、分からないもんだよね。今、くよくよしてても、しょうがないか」

「クリス様……！」

突然胸に手を回されて、クリスは啞然とした。空っぽの教室の前、誰も見てない廊下の上のことだ。ノアの高めの体温が、ブレザー越しに感じられる。見上げたノアの灰色の瞳に、昼の日差しが揺れていた。クリスは一瞬言葉を失くした。何を言ってるのか、自分でも分からなかった。

「ノア……？」

ノアはクリスの胸元に顔を沈めた。彼がしゃべる言葉が直接心臓に当たって響く。

「お願いです。絵を諦めるなんて言わないでください。クリス様が絵を求めてこの学園に来たから、僕たちは出会えたんです。僕はクリス様と出会えて本当によかったと思ってます。例え、いつか別れなければならぬときが来たとしても、クリス様には絶対に夢を諦めてほしくないんです」

「有瀬……」

「ダンスパーティー、一緒に出ましようよ。僕、頑張って練習しますから」

「うん……ありがとう、有瀬」

クリスはノアの小さな頭を抱きしめて言った。踊りだすような優しい感情が何なのか、クリスには言い表すことができなかった。ただ、ノアが愛おしかった。

第二十一話 移り行く円舞曲・後編

「先輩、僕のクラス、ミュージカルやるんですよ!」

「ああ、らしいな」

来夏の適当な反応に、真央は不満げな顔をする。廊下を歩いていたら来夏をたまたま見つけ、急いで後を追って捕まえた放課後のことだ。それでも諦めようとせず、真央は明るく後を紡ぐ。

「僕、主役に決まったんです!」

「ふーん、そりゃよかったな。アニエスさんにはちゃんと連絡したか?」

「はい!っていうか、直接会って言いました」

「学校に来てるのか?」

「ええ。僕、歌の方でも出ますから、その伴奏の練習に。今日も昼休みに音楽室を借りて、少し練習をしたんです」

「……よく来るな、アニエスさんも」

真央はくすつと笑い、周囲を見渡してから小さな声で囁いた。

「多分、千住先生目当てですけどね」

来夏は怪訝な目で真央を見遣った。いつでも人の色恋話に良い顔をしていないのが、この先輩の性分である。真央は恥じ入ったような面持ちをしたが、その後すぐに照れ笑いを浮かべ、真正面へと視線を移した。来夏は呆れたような溜息を吐きつつも、お咎めの言葉はどうやら見つからないようだった。上手く懐柔されたものだ。来夏は密かに思う。

「先輩、ちゃんと見に来てくださいね」

「何を?」

わざと視線を背けた真央の瞳は、夕日と期待が投じた星できらきらと煌いていた。顔がじつと熱いのは、光としては偉大だが、熱としては最早衰弱しすぎた冬の斜陽のせいなのか。

「決まってるじゃないですか!ミュージカルと、それから歌の方も」

「ああ……まあ、気が向いたらな」
「えー」

安易に導きだせる答えを、来夏はまだ出したくはなかった。

夕食が済み、ノアがホットミルクとビスケットを運んできたところで、クリスはスケッチブックに書き溜めた絵を眺めていた。薫が提案してくれた個展のために、使える絵がないかと考えたのだ。人物画は出来るだけ使わない方向でいきたいが、なかなか上手く描けているのなどは、本人の許可を取って展示してみようか。あつ、この颯先輩と酒本は結構力作かもしれない。後は、校舎の背景に海を合わせたこの絵とか。千住先生はどんな絵が好きなんだろう。明日の化学の時間に聞いてみたりして……

「楽しそうですね」

ノアの言葉に、クリスはスケッチブックから顔を上げて微笑んだ。
「まあね。自分の昔の絵を見て、楽しいことってあまりないんだけど。そういえば、有瀬のスケッチブックはどうしたの？もしかして、火事で焼けちゃったなんてことないよね……？」

「ご安心ください、とノアはホットミルクを口に含んで頷いた。

「ええ、幸い花木先生に預けてましたから」

「よかった。あつ、あのさ、この間の絵、覚えてる？その……俺が勝手に描きたしちゃった絵のことなんだけど……」

「そんな言い方しないでください。二人の共同作ですよ、あれは」
クリスのビスケットを運ぶ手が止まった。ノアが窓辺へ歩み寄り、薄いレースのカーテンを抜けて、波間のバルコニーへと出て行った。冷たくも、暖房の効きすぎたこの部屋には心地よい潮風が、クリスの頬と耳をくすぐる。ホットミルクの白い水面が波立った。

「……有瀬？」

「何か？」

風に乗せられて、尋ね返すノアの声。後ろで空の花瓶が倒れる音が

した。

「あのさあ、あの絵、個展で飾ってもいいかな？」

「どうぞ、お好きなように」

何か言おうとして、クリスははつと口を噤んだ。波の寄せる音に混じって聞こえる、妙なる調べに耳をすませて。ベルリオーズ「幻想交響曲」第二楽章・舞踏会　クリスはその名を知らなかったが、その主旋律を一本のバイオリンで奏でるその音に、何か言い知れぬものを感じたのであった。

「小杉先輩がバイオリンでも弾いてるんでしょうね」

ノアが呟くのが聞こえる。ふと見ると、ノアはレースのカーテンをドレスのように身に巻いて、遠くクリスのいない方へ微笑を送っていた。クリスは静かに立ち上がった。もしかしたら、差し伸べられた白い手を取ろうとしたのかもしれない。その時のノアは、心を奪われるほど美しく輝いて見えたから。だが、一層強い風が吹き上げ、内側の分厚いスカイブルーのカーテンを煽った直後、ノアの姿は完全に覆われ、見えなくなった。気付いた時、舞踏会の音楽は百名以上ものオーケストラが奏でる歌に膨らんでおり、ノアは制服のままでクリスの隣に立っていた。

「クリス様、せっかくですもの。ダンスの練習、しませんか？」

ある日の放課後、クリスは仕上がった背景の下絵を手にダンス部の部室を探し訪ねていた。今、クラスでは、ついに完成したメニューを見ながら、ノアが材料の説明をしているところだ。本当は傍にいて見守ってあげたかったが、そんな我侭もかなわないほど忙しいのが、実行委員というか、それともクリスだけなのか。

軽快な音楽が、クリスを呼び寄せる鍵となった。「失礼しまーす」そう言つて、少し扉の隙間からのぞいた先に、予想通り颯はいた。一瞬戸惑ったのは、見慣れたように眼鏡をかけていなかったからだ。しかし、颯の鮮やかな跳躍と律動感は、とても普段の穏やかな彼か

らは想像できない。音楽のリズムに一分も遅れを取っていないかった。
「颯先輩！」

颯が息ついたところで、クリスは声をかけた。颯は眼鏡をかけなおし、首筋を伝う汗をタオルで拭うと、にこりと笑って手を振ってくれた。

「やあ、クリス。僕に何か用？」

「ええ。背景の下書きができたので、見てもらおうと思って」

「君が描く絵だったら何でもよかったのに」

「そんな訳にはいきませんよ！ダンスの雰囲気にあってるかどうか
も心配ですし！」

「はいはい。真面目だからな、クリスは」

「まさか。先輩には敵いませんよ」

颯が下書きに見入っている間、クリスはぼんやりと室内を見回していた。さすが全国大会レベルを誇っているだけあって、ダンス部の部室は広々として充実している。部員も多い。黒いTシャツを着た少年たちは、額に汗をきらめかせながら、音楽や手拍子に合わせて踊ったり、座ってスポーツ飲料を口に含んだりしている。懸命に手足を動かし、休んでも自然に体でリズムを取っている彼らからは、本番前ならではの緊張感が感じられた。

「文句なしだよ、クリス。やっぱり君に頼んでよかったみたいだ」

「そんな、早いですよ。出来上がりを見てからにしてください」

言いつつも、クリスはほんの少し嬉しそうに表情をほころばせる。

返された下書きを丁寧にファイルしまっクリスのそんな表情を、颯はじっと見つめていた。分かっている。こんな風に和やかな会話を交わしていられるのも、今の内だということ。いつまでこうしていられるのだろう。水晶がいつまでも穏便に事を眺めているとは思えない。クリスと有瀬ノアが同居している限り、水晶も安心はできないはずだ。突然、目が合ったのは、クリスが「あっ」と呟いて顔を上げたからだだった。

「……どうしたの？」

反応は少し遅れた。

「えっ、いや、言うの忘れてて。先輩のダンスってすごいですね！俺、ダンスのこととかよく分からないけど、あのダンス見たら、背景の方も頑張らなきゃって思いましたもん。見合うものが描けるかは分かりませんが、でも、俺……！」

覚えた感激をそのまま語るクリスの結んだ手を、颯はそつと解いた。クリスは驚いて無意識のうちに手を引つ込めようとするが、颯はかたく掴んで離そうとしない。眼鏡が白い照明にきらりと光った。

「は、颯先輩？」

「幾原、そこにある青いMDの6番流して」

「はい」

解放は待たれず、幾原少年のかけたワルツが流れ始め、クリスは素早く腰をさらわれた。ためらいがちに踏む足音は、颯の見事なりードによってリズム通りに床上に刻まれ、クリスの心を惑わせた。颯の微笑が優しい。しかし、握られた手の汗に、クリスは別の人の面影を恋うのだった。とある刹那、眼鏡以外の彼の顔が光の中に沈んだとき、クリスは実際にその人の顔を見た気がした。

「あっ……」

刹那の幻が想いの錯覚ではないと知ったのは、曲が終わってからだった。律儀な幾原少年がMDを止めると、幻だったはずの人はクリスに向かって優雅に微笑んでみせたのだ。喜びと驚きになりきれないときめきが、クリスの胸で弾けていっぱいに広がった。

「千住先生……」

搾り出した声は掠れていた。ということとは、自分は先生と踊っていたのか。いつの間に……夢のような現実を前に、颯の困ったような笑声が遠く聞こえる。

「先生、ひどいですよ。せっかくクリスと踊ってたのに、途中で無理やり交代だなんて」

「君こそ、大切な幼馴染を置いて他の子とダンスなんてひどいじゃないか。ずっと見ていたんだよ、彼は」

「彼って……」

颯は急に表情を変えた。その顔に浮かんだのは、幼馴染に見られていたことを知った焦りだけではない。颯は硬く唇を閉じたまま薫に黙礼すると、幾原少年に何か言って閉じたばかりの部室の戸に向かって駆けていった。恐らく、菜月を追って。

笑いながら彼の背を見送ると、薫はクリスの方を振り返った。指先に残る熱を頬で確かめていたクリスは、思わず肩をはねさせる。

「あつ、あの……！」

「君を探してたんだよ。酒本君に会って聞いたたら、多分ここにいるからって教えてくれて、途中まで一緒に来たのはよかったけど、彼には災難だったかな？」

「俺を？でも、何で……？」

背後からは相変わらず軽快な音楽が聞こえてくる。薫は微笑みなおし、白衣の腕を伸ばしてクリスの肩を均した。甘く暖かい何かが緩んだ体を包んでいくのを、クリスのはつきりと感じた。薫の手はそのままクリスの背中に回った。

「ここではダンス部の邪魔になるから、外で話そう。時間はあるかい？」

「えっ？あつ、はい。少しなら」

クリスは慌てて答えた。腕時計を確かめる時間さえも何だか惜しい気がしてならなかった。

二人で歩む場所には、廊下にも教室にも人はいなかった。二人は黙って進んだが、夕方の静寂は決してクリスの苦痛にはならなかった。夕日の温度が、薫の体温が、只々優しくかった。

「本当は大した用はなかったんだよ。礼を言おうと思っただけで薫がそう切り出したのは、誰もいない中庭のベンチに腰をおろしてからだった。」

「礼？」とクリスは返した。

「そう。僕の我侭を聞いてくれたからね。個展を開いてくれるんだ

るう?」

「あつ、はい。でも、それは別に……!」

「おや。僕のリュクエストを聞いてくれたなんて、おこがましい考え方だったかな。これは失礼」

「いえ、そういうことじゃなくて……!」

取り消そうと振った手が薫の白衣の裾に触れる。クリスはぴたりと動きを止めた。こんな騒々しさはここには似合わないのだ。たった二人でいられる場所には。冷たい金色の噴水がこんこんと沸きあがり、北風が凧ぎ、枯葉だけが時折かさかさ音をたてるこの場所には。クリスは制服の膝に目線を落とした。伝えたい言葉は単純だった。嬉しかったとそれだけ言えばいいのだ。なのに、舌が素直に動いてくれない。まだ他にも言いたいことがあるからか?だとしたら、それが何なのかはつきりしてほしい。

「先生は、俺の絵のどんなところが好きなんですか?」

「どんなところ?」

クリスは太ももの上で指を絡ませて頷いた。

「ええ。ずっと知りましたかっただんです。何で先生は俺の絵が好きなんだろうって」

薫は考え込むように腕を組んだ。風が少し吹く。

「……先生?」

「難しい質問だな。好きなものは好きとしか言いようがないけれど、強いて言うならば明るい輝きに満ちているところ、かな。君の絵には人間の汚い欲望や感情がない。絵そのものが、純粹で透明な光なんだ。どんなに悲しい絵でも救いがあると信じさせてくれる。そんなところが、多分好きなんじゃないかと僕は思うよ」

「そうですか……」

鐘が鳴るのが聞こえ、クリスは校舎の向こうに佇む白い塔を見遣った。似たような質問を自分の胸にも繰り返していた。どうして自分は水晶の絵が好きなのだろうと。それからクリスはくすりと笑みを零した。

「どうかしたかい？」

「いいえ。俺も同じだったんです」

「同じ？」

「ええ。俺がある画家を好きな理由も、今先生が言ってくれた理由と全く同じでした」

「ある画家って？」

「秘密です」

「そこまで言っておいて？」

「ええ」

二人は顔を見合わせて笑った。やり切れないような、言い切れないような、もどかしい気持ちは消えていた。幸せだけがそこに残っていた。憧れの人の傍にいる幸せ、その人が褒めてくれた純粋な光を以って彼と向き合える幸せだけが。

そろそろ行こうかと立ち上がった薫の左手に、クリスは輝く水晶を発見した。生徒会役員たちが付けているものと同じデザインだ。生徒会長だった時のものを、そのまま外さないでいるのだろうか。クリスの目線に気付き、薫は「ああ」と言って左手を掲げた。間近で見る指輪は古びていたが、確かな光を放っていた。

「生徒会役員だったときのものだよ。これを見ていると、自分が高校生だった時のことを思いだすんだ。高校生の時ほど楽しい時代はなかったよ。僕が教職を選んだのも、この学園に戻ってきたかったからなんだ。人生で一番楽しい時間を過ごした場所にね」

「でも、婚約指輪と間違われませんか？」

クリスの素朴な疑問を、薫は不思議な微笑で受け流した。逆光が黒く塗りつぶした彼の影に、指輪の光だけが眩しくきらめいたとき、クリスは初めて、薫の精神がもつと高尚なところにあったのだと知った。

「君にもそういう時間をここで過ごしてほしいんだ。そのためなら、僕はどんなことにも力を惜しまないよ」

歩き出した薫の後姿を、クリスはその場に立ち尽くしたまま見つめ

ていた。クリスの透き通った青い目は見開かれ、まるでこの世の美しいもの全てを小さな視界に収めようとしているようにも見えた。やがて、不審に思ったようにこちらを顧みた薫に、クリスは静かに歩み寄っていた。思わず白衣の背中にすがったのは、胸に溢れてくる素直で純粋な感情故に。

「石崎君？」

「……先生は俺の憧れです」

クリスはささやくように言った。

「俺は先生みたいな人になりたい。先生以上に尊敬できる人間なんて、今まで……」

「鳥居先生、またステップがずれてますわよ」

「あー！もう、分からない！これだから文化祭って嫌いなものよー！」

「桜木せんせつ、みちるはね、高2の文化祭で彼氏に浮気されたのよ」

「うるさーい！人の傷を抉るな、ジャクソン！野瀬先生、もう一度！」

「はいはい。お相手なら気が済むまでどうぞ」

「それよりジャクソン先生、頼んでおいた服、できましたか？」

「それよりって何ですか、里見先生?!」

「うーん、それがまだなのよお。ファッションショーの方で忙しくつてえ。ほら、これ、どうかしら？モデルは2AのなっちゃんとおBの颯君って決まってるんだけど」

「あら、二人がよく承諾したものね」

「もっちゃん！無理にでも承諾させるつもりよー！」

「……まあ、ジャクソン先生ならできるでしょうね」

「そうね」

「ナツ？」

教室の隅に丸まっている影を見つけた。ちょうど自分の席の上に溜息をついて肩をすくめ、隣の席をひとまず勝手に拝借することにして、馴染みのあるなで肩にそつと手を落とす。いつかと同じ。いつもと同じ。拗ねさせてしまった時は、一体どうしていたのだった？ 颯は小さな背中に頬を宛がう。

「ナツってば」

「……………どうしていつもそうなのさ？」

「何が？」

「だって……………！」

憤った声は脈打つ鼓動に乗って聞こえた。

「いつも石崎ばかり。颯が僕のこと好きなのは知ってるし、別に疑ってもないけど、颯と特別な思いをするのはいつも石崎じゃないか。颯は僕をどうしたいの？ 僕を苦しめておきたいの？ ずっと？」

「……………ごめんね。もうしないから」

安心させておきたくない、そんな風にはとても言えなくて、颯はその場しのぎの言葉を紡いだ。ガタンという音をたてて、菜月は勢いよく立ち上がった。くるりとこちらを向いた菜月の顔には熱があった。無惨にも倒れた椅子は天井に脚を晒しつつ、二人の間に境界線を引いている。

「ナツ……………」

「分かってるもん、そんなこと。それに、もうさせないから」

ああ、案の定怒らせたな。目をあわせられないまま手を繋いだのは、やはりやましい気持ちがあるからか。颯の答えは出ない。菜の花の季節は遠く、今はまだ冬。それでも花々は冬のワルツを踊る。

どこの家からか流れてくる円舞曲を、クリスはバルコニーで聴いていた。夜風に波がざわめき、星が冴え、灯台の明かりがマツチ棒の先の火のように、離れた丘の上に見える。波間に突き出した両手を見つめる内に爪先が動くのは、憧れの人とのワルツを思い出して。

音楽はなかった。誰もいない夕暮れの中庭で、たった二人だけが知っている調べ。

「クリスマス様」

薄いベールのカーテンをくぐってノアが顔をひよこりと出した。お茶の時間には早すぎると思うけど。そんなことを考えながらクリスマスがゆっくりと振り返ると、ノアはクラシック名盤とのCDを胸に抱えて立っていた。

「クリスマス様、よかったらダンスの練習、しませんか？」

ふと音がやむ。波も凪ぐ。クリスマスの足も止まる。

「……クリスマス様？」

「ごめん。今日はそんな気分じゃないから」

嘘ならば、蹴飛ばしてやりたいぐらいなのに

第二十二話 三宿学園七不思議？・前編

「終わったか、陽？」

「……ああ」

紫色のメッシュをかき上げて、いつもより低い声で呟かれた言葉に、荔枝は恋人の明らかな不機嫌を聞き取った。軽音楽部の練習はどうやら上手くいっていないようだ。慰めに差し出した手は一度拒まれた後、いらいらと先に進んでいった後姿に取られた。微かに声をたてて笑うと、今度は繕った不機嫌さでくるりと振り返る。

「おい」

「何か？」

「何か？じゃねえ。大体何でここまで来たんだよ？」

「もちろん、一緒に帰ろうと思って」

「部活の時はいつも別々だろうが」

「別に今日ぐらいいいだろう？」

「三日間連続ぐらいの間違いじゃねえのか？」

荔枝は少し緩めた口元をふいにそっぽへ向ける。灯りを奪われた廊下の暗闇が、彼の表情を飲み込んだ。掻き消えた微笑は手を繋いだままの陽に乗り移った。

「なるほどな、そういうことか」

「そういうことって？」

「お前、絶対あれのせいだろ。颯に聞いた噂、三宿学園七不思議の復活ってやつ」

「……た、戯けたことを」

今や、荔枝は首元まで真っ暗な中に突っ込んでいた。そんな光景に陽のいたずらっぽい笑みはますます意地悪く広がっていく。

「じゃあ、一人で音楽室にでも行ってみるか？女の霊が出るっていう」

「音楽室に用などない。用などないから行く必要もない」

「ただ行っただけならオレは待つてやってもいいぜ？」

「……う、うるさいっ！早く帰るぞ」

「おっ、早く帰ってオレのホラー映画鑑賞にでも付き合ってくれ
訳？」

「そんな暇はない！」

「ったく、今更何言っただか。素直に怖いって言えばかわいいの
によ」

いつもより少し急ぎ気味に歩く陽の後を、小さく駆けて追っていく
荔枝。二人の靴音と話し声が、まだそこだけ明るい二階の廊下奥に
消え、見回りに来た森先生が電気のスイッチを消した後、そこには
暗い陰鬱な沈黙が横たわっていた。昼間の活気などは微塵も感じら
れない。全ての生き物の存在と活動を否定するだけの沈黙だ。それ
を破る者が、月も高く昇ってからふいに訪れる。ただし、その破り
方は、決して静寂の掟には逆らわず……

三宿学園高等部七不思議

1、放課後、一人で北校舎の階段を下りていると、誰もいないのに
足音がする。人影が横を通り過ぎていくこともある。

2、放課後、一人で図書室から出ようとすると、後ろから本のペー
ジをめくっている音がする。その際決して振り返ってはいけない。
振り返ると永遠にこの世に戻ってこられない。

3、夜中十二時に西校舎二階のトイレの真ん中の鏡をのぞくと、死
ぬ間際の自分の顔が見られる。

4、美術室の「農民の結婚式」の絵からは時々声がある。

5、三宿学園の女教師の中には必ず一人一生結婚できない先生がい
る。

6、放課後の音楽室にはピアノを弾く女性の霊が現れる。

7、旧図書館にはそこで事故で亡くなった少年が出る。図書館が閉
鎖になったのはそのため。

「七不思議？」

聞きなれない単語を繰り返して、クリスは怪訝そうに首を傾げた。とある朝のホームルーム前のことだった。

「そつ。だから、今言ったやつだった。一時期はおさまってたんだけど、最近また復活したらしいぜ。学園中噂になってるぞ。遅れてるなあ、エーリアル」

「……だって噂に耳を傾けてる暇なんてないもん」

「そついやそつだったな。お疲れ、実行委員」

「そりゃどうも」

クリスは頬杖をつきながら溜息をつく。今も内装に使う材料のおおまかな値段を調べているところだったのだ。それが、落合が仕入れてきたおかしな噂話のせいだ。青いビニールテープの値段が189円だか176円だかさっぱり分からなくなってきた。だが、意外にも、来夏と菜月は熱心に話を聞いている。ノアは相変わらずにこにこして、話に興味があるんだかないんだか分からない。クリスは手を動かしつつも、一応は話を聞いておくことにした。

「しかし、ありがちだよな。北校舎の階段だとか、音楽室のピアノとか。大体放課後とか真夜中じゃ確かめようがねえっつーの。まっ、五番目とかはあまり他の学校じゃ聞かねえけど。あれだけはもう立証できてるよな。み……」

「落合、その後に『ち』と『る』が続いたら張り倒す」

「嫌だな、みちるちゃん。ちよつと自意識過剰になってるんじゃないの？『ち』と『る』の後に『ちゃん』も付くぜ」

レポートを提出するよう催促に来たのだろう。いつの間にか背後に忍び寄っていた鳥居先生にそう言い放つと、落合は席から飛び離れ、超特急で廊下の方へと駆け出した。先生は風だけをクリスたちの元へ残してその後を追っていく。クリスのメモが数枚ひらひらと宙に舞った。菜月は蝶を捕らえるように素早くそれらを捕まえた。

「ありがと、酒本」

「どういたしまして。でもさ、落合はありがちって言ってたけど、珍しいのもあるよね。『農民の葬式』がどうたらとか」

「『農民の結婚式』だ。七不思議だからって不吉にするな。確かブリューゲルの絵だったよな、石崎？」

クリスは考える間もなく条件反射的にこくと頷いた。

「うん。ウィーン美術史美術館にあるやつだね。俺も昔叔母さんにつられて見に行ったよ。この絵ってさ、一見楽しそうな絵に見えるけど……」

「声ってさ、どんな声がするのかね？『呪ってやる』とかかな？」
クリスの言葉に、菜月がわざとらしく張り上げた声をかぶせた。

「見えるけど……」

「さあな。何だって大して変わりはねえだろ。どうせ誰かが言いふらした悪い冗談だし」

今回は珍しく来夏も菜月に乗った。

「見え……」

「えー。そんな変な話普通思いつかないって。やっぱり本物だからこんな話が流れるんじゃないの？」

菜月は大きな丸い目をぱちぱちさせながら尋ねる。クリスと来夏は顔を見合わせ、同時にまさかと首を振った。

「絵が動くとかしゃべるとかその類の話はありがちじゃねえか。うちの学校にはたまたまモナリザがなかっただけの話で」

「そ、そうだよ。幽霊なんている訳ないんだから。ねっ、有瀬？」
「でも、父はよく子供の頃にあつた怖い話とかしてくれましたよ。」

小さい頃は靈感があつて、幽霊と会話できたとか。天狗と運動会したとか。あつ、あと、本物の猫又を目撃したそうです」

クリスの唐突な振りにきよんととして首を傾げ、そのまま語りだしたノアに、三人の動きは思わず固まった。始業時間五分前の鐘が鳴る。廊下は先ほどより騒がしさを増している。鳥居先生と落合の戦いは、まだ決着がつかないのか。

「……やっぱり理事長って変な人なんだね」

かの親にしてこの子あり。クリスが呟くと、ノアは笑顔で「はい」と頷いた。

「でも、クリスマス様、何で今更七不思議は蘇ったんでしょね？」

昼休みの生徒会室にはやたらと張り詰めた空気が立ち込めていた。慎は腕を組んで眉間に皺を刻み、颯は口元に指を当て、なにやら考え込んでいる様子だ。荔枝はこの件には一切関わりたくないといった風にティースプーンばかりいじっているし、陽だけがなんともなさそうに生ぬるいコーラの空瓶を投げて遊んでいる。やがて、慎は閉じていた目を開けて、たった一言だけ言葉を紡いだ。

「非科学的だ」

「そりゃそうだ」

陽が口笛を吹きながら、のんきそうに相槌を打つ。

「ちっ、七不思議なんてものがこの学園にあつてたまるか！どこのバカが言いふらし始めた作り話だ。そんなバカがこの学園にいたことだけでも恥なのに、どうして文化祭の準備がそいつのせいであんなく運ばない事態が起きてやがる?!」

「不覚だよ。まあ、僕たちの責任じゃないけど。でも、しょうがないよ。花木先生まで『見た』って言い始めたんだもん。あの先生が嘘をつくとは思えないし」

事の次第はこうである。慎、颯が所属する3年A組と、荔枝、陽が所属する3年B組は、クラスの出し物として合同でお化け屋敷を作ることになった。お化け屋敷のテーマは、二十年ほど前この学園で流行っていた「三宿学園七不思議」であり、生徒たちがそれぞれ調査を進めていたのが、その途中でおかしなことが起こり始めた。しばらく全く確認されなかった七不思議の怪現象を、実際に見たという生徒が現れ始めたのだ。最初はお化け屋敷を盛り上げるための噂話だと思われていたが、見た、聞いた、という生徒は増え続け、ついに先日、3年A組の担任、花木先生まで幽霊を目撃したと言い出

したのだ。生徒会役員たちのクラスメートはすっかり怯え、これは呪いだ、祟りだと、お化け屋敷の準備に手をつけられなくなってる、という訳である。

「『見た』って何を見たんだ？」

慎をなだめて溜息をつく颯に陽がふと尋ねる。ああ、と颯は話し始めた。

「音楽室から出てくる女性。今日のホームルームで離してくれたんだ。遠くからしか見えなかったらしいけど、何でも脚が透けて……」

「わ、私のいるところでその話はするな！」

「えっ、荔枝、どうかしたの？」

「心臓の具合がよくないんだとよ。ここ三日、いや、四日間か。あつ、おい」

これ以上は耐え切れないように生徒会室を出て行った荔枝を、陽は立ち上がって追っていった。颯がとめるのも聞こえていない。まさに瞬間的な出来事であった。本当は恋人を追いかける名目で仕事をさぼりたいだけなのではないか、との考えが颯の頭を掠める。こんなに忙しい時期だというのに。しかし、慎の怒りの矛先は、まだ非科学的な噂話の方へと向かっていた。颯は慎に向かい直る。

「それでどうするの、慎？七不思議がただの噂話ってことを証明しないと、みんな続きに取り掛かってくれそうにないよ」

慎の青い目がぎろりと颯を睨んだ。

「俺にそんなくだらねえことをやれと？山積みになった仕事を放つておいてか？」

颯は肩をすくめた。お手上げだ。自分の手ではどうにもならないし、慎の額の青筋は当分消えそうにない。とりあえずコーヒーのお代わりでも淹れておいてあげよう。いや、カフェインは精神的によくないだろうか。しかし、自分が先ほど指摘したことは事実であるし、誰かしらにその仕事をやってもらわなければならない。活発な議論を脳内で繰り返す内に、颯の中でぱつと一つの案がひらめいた。名案といえるかどうかは分からない。だが、提案してみる価値はある

だろう。颯はミルクでいつもの二倍に薄めたコーヒーを手に振り返った。

「ねえ、慎、あの子なら喜んでこの仕事をやってくれそうに思っけど……」

「と、いうことで、俺が選ばれたんで、手伝ってくださいね！」

「何で、俺たちが……」

放課後の中庭に集められたのは、クリス、ノア、菜月、来夏、落合、真央のいつものメンバーである。集合をかけたのはもちろんこのメンバーには欠かせないもう一人の存在、涌水明音だ。生徒会の依頼（依頼というよりは命令に近いが）は慎様の依頼、慎様が俺に依頼してくるということは、俺を信頼してくださっている証拠と、すっかり張り切っているのである。だからこそ、クリスたちには忙しいなか召集をかけられた理由が分からない。真央がすぐに聞いた。「ねえ、何で僕たちまでそんなことやらなきゃいけないの？大体七不思議の話なんて、初めて聞いたんだけど……一年生の間ではそんな話題になってなかったじゃないか」

「俺は慎様の会話を聞いて知ってたぜ！まっ、自慢はいいとして、俺、喜んで依頼を引き受けたんだけど、本当は幽霊とか苦手だし、だから、手伝ってもらおうと思って」

「……明音君、帰っていい？」

「あつ、ちよつと、駄目つすよ、石崎先輩！」

せつかく今日は実行委員の仕事がないというのに。家路を一步踏み出したクリスを、急いで明音が止める。

「おい、涌水、俺たちもそこまで暇じゃねえんだぞ」

落合の言葉に、明音は分かっていますとばかりに何度も頷いた。

「分かっています！お礼は必ずしますから！中野君の盗撮写真でいいつすか？」

「俺、どちらかというと最近佐藤君の方が気になってんだけど」

「分かりました！任せてください！」

「おいおい……」

付きたてた親指を合わせる明音と落合に、来夏は呆れたように呟いた。本人はもう逃げられないと覚悟を決めているようだったが。クリスと来夏は交わした目線で諦めを共有した。何やら楽しそうなのは、ノアと菜月だ。真央は七不思議の言葉に、早くも不吉な予感を抱いているようだった。

「まっ、とりあえず七不思議が全部嘘ってことを暴けばいいんだろう？ だったらさっさと終わらせようよ。まずはどれからいくの？」
クリスの言葉に、明音は嬉しそうに飛び跳ねて、ポケットからチエック表を取り出してみせた。

「そうっすね。じゃあ、まずは目撃談が一番多い一番目の不思議からいきましようー！」

七不思議

1、放課後、一人で北校舎の階段を下りていると、誰もいないのに足音がする。人影が横を通り過ぎていくこともある。

高等部は、学園の敷地内にある三つの校舎の中で最も小さな建物だ。三つの校舎というのはつまり、初等部、中等部、高等部の校舎のことである。幼稚園と大学の建物はクリスの部屋からも見下ろせる町の中にあり、落合が幼少期に通っていたのもそこであったし、薫もそちらの大学に通いながら高等部で講師を勤めているとの話であった。高等部の校舎が一番小さい所以は、中等部入学から卒業までにかけて大幅に人数が減ることと関係がある。学園の授業には付いていけないと悟りだした生徒たちが、次々とやめていくのが大体中学二年生辺りか。高等部からの新入生も一応募集してはいるが、ごくわずかな人数に限られる。クリスと真央が良い例で、二人とも絵と歌という特殊な技能があったから入学することができた。後は来夏のような秀才か、明音のような熱心な努力家に限られる。

話を戻すと、そういう訳で、高等部には余分な教室が必要ないた

めに、北から南に向かってまっすぐ引かれたI字型をしている。そこに格技棟が加わって、左側が小さなH型といったところだ。北階段はちょうどIの字の上辺にあり、日当たりが悪く、使用して便利な教室が美術室や調理室というマイナーな教室のせいか、生徒も教師もあまり好んで利用しない。いかにも幽霊が住み着きそうな場所であることは確かだ。もちろん、幽霊が存在すると仮定すればの話だが。

「ここっすね。えっと、一番最近の話だと、一昨日の放課後、この階段を一人で歩いていたら三年生の生徒が背後から足音を聞いたと。振り返ってみても誰もいないため、七不思議の話を思い出して走り出すと、足音も速くなり、気が付くと隣に男のような影が並んでいたそうです」

明音が颯から手に入れたらしいレポートを読み上げると、一同は黙りこくって、陰気な階段を眺めた。今一同がいるのは四階である。ここから降りればその幽霊とご対面できるかもしれない。

「そついや、大河内が室井もここで人影を見てすっころんだっつてたな。やつぱ何かいるんじゃないの？」

「それを確かめるためにきたんっすよ、落合先輩。じゃあ、じゃんけんで負けた人が実験するってことでもいいっすか？」

「何言ってるんだよ。君が依頼された仕事なんだから君がやりなっ
て」

「だから、言ったじゃないっすか。俺、ほんと、幽霊とが駄目なんっすよ！」

クリスの言葉に、明音は勘弁してくれといった風に突き出した両手を振った。クリスは思わず溜息をつく。唐突にノアが言った。

「僕がやります」

「えっ？」

クリスは思わずノアを顧みる。他にもノアを見つめた者はあったが、ノアはクリスだけむかって微笑んでみせた。

「有瀬が？」

「ええ。もし、足音が聞こえたら、父に自慢することができますし」「でも……」

「大丈夫ですよ、クリスマス様。じゃあ、行ってきます」

クリスの止める声も聞かず、ノアは普段の彼からは予想できない速度で、踊り場の更に下まで降りていってしまった。クリスが不吉な予感にとらわれるなか、菜月は「次は僕がやるう」と意気込み、真央は来夏に引っ付いて叱られていた。

数分後、俄かにこちらへと昇ってくる足音が聞こえ始め、ノアがとてとてと階段をのぼってきた。ノアの色の薄い頬が今だけきらきらと赤くほてっているのを見た時、クリスマスは別の意味で悪い予感があつたのだと気が付いた。

「本当ですよ、クリスマス様！確かに足音が聞こえました！人影は見えませんでしたけど、足音がすぐ後ろを追ってきて、いくら振り返っても誰もいませんでした！すごい、七不思議って本当だったんですね！」

「おい、マジかよ？」

「ほんと、それ？」

落合と菜月の興奮したような顔を見る間もなく、クリスマスは眩暈に襲われていた。

「ええ、試してみてください。本当に聞こえましたから」

落合と菜月もそれぞれ続いて降りていき、両目を輝かせて戻ってきて、同様の結果をもたらした。菜月はいいに人影を見たと言い出した。壁にもたれかかるクリスに、来夏が尋ねた。

「おい、石崎、どう思う？」

「酒本と落合はともかく、有瀬が嘘をつくとは思えないけど……」

「俺も同感だ」

「……僕もです」

明音は散々怖がっていたくせに、今はすっかり依頼内容を忘れ、飛び跳ねながら報告書の記入欄に赤ペンで丸印をつけた。

「じゃあ、次行きますよ！」

2、放課後、一人で図書室から出ようとすると、後ろから本のページをめくっている音がする。その際決して振り返ってはいけない。振り返ると永遠にこの世に戻ってこられない。

「ちょうど誰もいねえみたいだぞ。えっちゃんもいねえな。試すなら今だぜ」

落合が図書館の扉から顔を突っ込み、様子をうかがって報告した。えっちゃんというのは生徒から恐れられている怪物司書、市原悦子女史のことを指すらしい。こちらの階段の目撃談、というか体験談は、一つ目の話とくらべるとずっと落ちるのであったが、その理由はどうも、振り返ったらこの世に戻ってこられないという洒落にならない話が付随するせいらしい。それでも、ある生徒がここでページをめくる音を聞いたと触れ込みまわって以来、図書館の利用客はめっきり減っているとのことだった。クリスたちは円になって作戦を練り始めた。

「ここは普通に中に入って普通に出て行くしかないんじゃないんですか？いいですよ。僕が行きます」

言い出したのは真央だった。先ほどのクリスと同じ要領で青ざめた来夏が、急いでその肩を掴んで引き止める。

「おい、やめとけって」

「あつ、来夏先輩心配してくれてるんですか？」

「バカ言え。んな訳ねえだろうが」

来夏のすげない反応に、真央はがっかりしたように肩を落としたが、すぐに持ち直した。

「まあ、実を言えばちょっと怖いけど、さっきの先輩たち見てたら案外平気かもしれないなつて。絶対に振り返ったりはしませんから安心してくださいね、先輩。僕、先輩に会えなくなるのは嫌ですし……」

「前言撤回だ。やっぱりお前が行け。万が一ページをめくる音がし

たら振り返ってもいいぞ」

「えっ？」

言うなり来夏は真央を図書室に押し込むと、ぱたんと扉を閉ざしてしまった。一同は啞然として彼を眺めたが、来夏は特に後悔するような素振りは見せなかった。ただ、時々心配しているような素振りは見せた。やがて、扉が開いた時、来夏は誰よりも早く反応したが、彼の目に入ったものといえば、真央がしくしくと泣く姿であった。

「おい、どうした?!」

取り乱し方が尋常じゃないな、と、クリスはぼんやりと思った。何か恐ろしい目に遭ったらしい真央の方がはるかに落ち着いている。

真央は泣きながら、ぽつりぽつりと出来事を話した。

「先週返す予定の本……か、返すの忘れてて……市原先生にこつてりしぼられて……死ぬかと思って……」

来夏は真央の肩をゆるする手を止めた。

真央が「ごめんなさい!」を連呼し、クリスたちが首を傾げて何も言えずにいる中、明音は首をかしげながら、チェック欄に×を書き加えたのであった。

第二十二話 三宿学園七不思議？・後編

「ジャクソン先生、あの何度もすみませんけど……」

「まあ、里見せんせつ。もう、貴方もせつかちねえ。まつ、頼んでおいた服なら仕上げておきましたけどね。そこに置いてあるから、勝手に持っていったって頂戴」

「あつ、ありがとうございます！今度チョコパフェおごりますね」「じゃあこの間いったところの特大サイズでお願いね！」

「ところで、里見先生、それ誰かへのプレゼントですか？」

「ええ、ちよつと友達に」

「ジャクソン！私の教科書見なかった？」

「あら、みちる。あんたの教科書なんて見てないわよ」

「げつ、あんたまだ服作ってたの？テストの採点は？」

「もう終わったわよ」

「信じられない……あつ、そうだ、桜木先生、林原先生が探してきましたよ。音楽室の鍵を知らないかって」

「さあ、分からないわねえ。私、今日の授業はずっと和室で行ったのだけど」

「ジャクソン先生、今度は誰がモデルなの？」

「ふふ、よく聞いてくれました、野瀬先生。今度のモデルはねえ、慎君よ」

「……絶対断られるわよ」

「大丈夫。まあ、見ててくださいよ」

「ねえ、ジャクソン、私の教科書は？」

「知りませんっ！」

もう何十回サインをしたらだろうか。文化祭前は仕事が多いので好きではない。いい加減手も疲れてきた。慎は一时间ぶりに書類から顔を上げ、疲れた右手を宙で振った。コーヒーマットはとつくに冷めてい

る。新しいのを淹れ直したいが、湯を沸かすだけでまた時間がかかるし、今日は秘書役の颯もない。冷え切ったコーヒークップを持ち上げて一口すすり、思わず顔をしかめる。苦味がやたら舌についた。

扉の開く音に、慎はふと入り口に目を遣った。どうせ陽か荔枝だろう。それが、早々と調査を終わらせた明音か。しかし、入ってきたのは、実の兄、薫であった。慎の表情が一瞬揺らいだ。

「一人か？」

「兄貴……」

薫はくすりと微笑を零した。

「せっかく顔を見にきたのに、そんなに嫌そうな顔をするなよ」

「生憎今は手が空かない。歓迎を期待してたんだったら悪いな」

「……歓迎なら今だって期待しているさ」

扉の閉まる音、そしてそれに続いた小さなちやりという音に、慎は警戒心を起こさずにはいられなかった。嫌な胸騒ぎがする。しかし、まさか……唇に兄の指が触れた。慎は思わず青い目を細める。

薫の親指が唇を解していく一方で、残りの指が慎の顎を撫で上げた。思わず肩が跳ねる。首の辺りに触れたのは、冷たい舌先の感覚。

「……兄貴っ！」

「ずいぶん頑張ってるようじゃないか。だが、たまには力を抜くことも必要だ」

「何を……っ」

「あの子に仕事を依頼したそうじゃないか。それでいい。兄弟というものは本来そうやって助け合っっていくべきだ」

「あいつは兄弟なんかじゃない！バカ、やめろっ……！」

ふと首の付け根に走った鋭い痛み、慎は強く目を瞑る。喉を抜けた悲鳴を潰したのは、せめてものプライドのためだった。分かっている。どうせ自分は兄に適わないことなど。だからこそ抗いたくなる。例え、実らなくとも、自分が完全に服従などしていない証として。

「やめる！」

口元の指を強く噛むと、薫は諦めたように慎から離れていった。慎は途端に弾かれた立ち上がり、テーブルの横を過ぎて出入り口の傍に駆け寄った。兄との距離をしつかり確認しながらも、見えない視界で閉められた鍵に触れる。薫は指輪でも眺め遣るように、指の噛み跡を見つめた後、慎にむかってまた笑いかけた。

「ひどいな。ほんの少しからかったただけじゃないか」

何も他意なく見えるその笑みが、慎の恐怖を一層煽り立てる。

「まあ、傷口から言えばお互い様というところだな。邪魔をしたな、慎。俺は仕事に戻ることにするよ。教職員らしく、ね」

慎が散々手間取った鍵をいとも簡単に開け、その隣をすり抜けていくとき、薫はそっと自分が歯をたてた場所にキスを落としていった。兄の足音が遠くに去った後で、慎は制服の袖でその痕を拭いた。白い襟に赤いかすれた液体が付着した。目を背けるようにしてブレザーの中に袖をしまいこみ、慎は少し息を切らして席に戻る。仕事を続ける気はとづくに失せていた。

決して拒みきれた訳ではないことを、慎は知っていた。歪み、うねり、絡まりきった兄弟の絆は、もう決して元には戻れない。兄にとって自分が必要な存在であったし、自分にとっても兄は不可欠となってしまうた。例えこの醜い関係から逃れようとしても、兄が手繰り寄せれば、自分は引きずられていくしかない。今日は本当に慎をからかうつもりで来たのだろう。全て兄の予想通りに事は進んだのだ。こうして、いつまでも自分は踊らされていく。自分だけはなく、この学園の人間全てが。兄の手の上で。水晶の眩さの内に。

三宿学園七不思議

- 3、夜中十二時に南校舎二階のトイレの真ん中の鏡をのぞくと、死ぬ間際の自分の顔が見られる。
- 4、美術室の「農民の結婚式」の絵からは時々声がする。

3番目の話については、夜中十二時の話のため、目撃談はゼロ。ノアの報告でぐらついていた「幽霊はいない」の信条を、照れ隠しのためか早くも取り戻した来夏により、自分の死ぬ間際の顔がそれと判別できるはずがない、との指摘をいただき、一同は無視を決め込んだ。明音は今更依頼されたものとしての自覚がでてきたのか、それとも来夏の思想に触発されたのか、十二時まで学校に残って確認したいと粘ったが、森先生の目を潜り抜けて学校に居残ることはとても無理だとの結論が、落合によつてすぐに出された。秋の日はつるべ落としとは言うが、冬が日をも冷たく凍てつかせる今、斜陽はとうに地平線の向こうに消え、不気味とも言える薄暗さが校舎を覆っている。一同は四つ目の謎を説明すべく、美術室へと足を急がした。

「失礼します」

「万が一、花木先生がいた場合、顔が利くようにとクリスが先頭に立った。部屋のスライド式の扉をノックした後、開けた部屋から漏れ出てきたのは、蛍光灯がところどころ消えかけた廊下となんら変わりのない夕闇の色であった。もちろん、こんな中に花木先生は見出せるはずはない。クリスはためらいつつも、見慣れた部屋を進んでいった。

「うわあっ!」

鈍い音がしたのは、明音がどこかの机の角に腰をぶつけたせいだった。

「暗いですね。電気つけましようか？」

「電気なんかつけたら、出るものも出ないと思うけど」

ノアの提案も菜月に却下され、壁にかけられた絵の判別もまともに行きぬまま、クリスたちは噂の絵を求めて散らばった。しかし、正直に言えば、ブリュウゲルの「農民の結婚式」を知っているのか正直怪しいものもあり、そうした者は、ゴヤの不気味な「我が子を食らうサトウルヌス」を突然目前に見て飛び上がった、マルガリー

夕王女の愛らしさに思わず感嘆したりするのだった。クリスは半ば呆れながら壁の前を巡った。一体どこに「農民の結婚式」はあるのだろうか。

「クリス様」

ノアに突然耳元で囁きかけられ、クリスは飛び上がりそうになった。だが、ノアはそれに対しての弁明は特にしないで、押し殺した興奮を以ってクリスの手首をぎゅっと掴むと、やや強引にクリスを黒板の右脇へと連れてきた。クリスは思わず小さな声をあげた。気がつかなかった。こんな狭いスペースに、探していた絵があったなんて。「クリス様、耳をあててみてください」

クリスはノアにならって絵の表面の横顔をあてた。そしてどきりとした。声が聞こえた云々ではなく、ただ単に、ノアの唇が触れそうなほど間近にあったために。

「どうした？」

来夏が気付いて尋ねると、ノアは「しっ」と言って人差し指を口元まで持ち上げた。一体何があったのかと絵を探していた友人たちが集まってくる。確かに聞こえる。人の声。野太い男性の声が。声色が変わる。話者が変わったのだ。クリスは耳をすませたが、美術室の沈黙に乘せられて、次第にその眉の根は近づいていった。そう、確かに「結婚」という単語は聞き取れたのだが……

「おい、聞こえるのか？」

待ちきれずに落合が聞くと、クリスは気のない頷き方をして絵から頬を離れた。

「まじかよ？」

「うん。だけど、なんか……違うみたい」

「はっ？」

「多分これって、こういうこと……」

ノアを片手で引き寄せると、クリスは耳を充てていた場所に今度は手のひらを押し当てた。金属が軋るような不吉な音が、静かな教室に響き渡る。最初に見えたのは、蝋燭でもとしたような小さな灯

りだった。木屑のまじった薄茶色のほこりが立つ。ごほごほと咳き込む一同全ての耳に、その話し声というのは明らかにされた。ついでに、話し声の主たちも。

「おや、見つかってしまいましたか」

なんてことはなかった。ブリーユゲルの絵は美術準備室に続く扉を隠すようにかけられていたのだ。準備室で話をすれば、まるで絵から声が聞こえるように思われる。たったそれだけのことで、恐らく四番目の七不思議に関しては、勘違いからきた噂話というよりは、このことに気がついた者が作り上げた話であったのだろう。ただ、この初歩的なトリックに気がついたクリスにも、小さな円卓におかれたランプの周りに計三名の男性教諭が集い、ラーメンをすすりながら談笑している光景など、とても想像できなかったが。

「校長先生、何してるんですか？」

「いや、ここは僕たち男性教師の溜り場ですね。僕などは、妻と喧嘩して家に帰っても夕食が用意されていない日に使わせていただけのですよ」

「僕はほら、帰っても一人でさびしいからね……」

慌てる様子も恥じ入る様子もなく、悠長に答えた校長に、皆開いた口が塞がらない。橋爪先生も照れたように付け足すと、一同はますます混乱してくるのであった。準備室の管理人、花木先生は、来客を見るなり立ち上がって胸像やらパネルやらが立て込む方へ消えていったが、戻ってきた彼の手には、きっかり人数分のお椀が抱えられているのであった。

「お前らも、どうだ？」

「い、いや……遠慮しときます」

クリスは代表で答えると、全てをなかったことにするために静かに素早く扉を閉めた。疲れたような溜息が、皆の口を割って出た。だが、再び扉は開かれ、顔を出した花木先生はしっかりと鍋つかみまですで装着していた。

「大丈夫だ。人数分あるぞ」

「は、はあ……」
最早、七不思議なんてどうでもよくなっていた。

「今日は変な一日だったね」

「はい」

「結局あそこでラーメン食べた後は流れ解散になっちゃったし。しかし、一体なんだったんだろうな」

「さあ……不思議ですよ」

ノアが電気のスイッチを押すと、今や新居とは思えなくなった家の寝室から灯りが消えた。代わって映えるのは、結露した窓の向こうに輝く町のネオンと反射する波の線。そして遠くの灯台と船にともった小さな光たちであった。クリスマスは顎を枕にしたまま、そんなぼやけた景色を眺めている。手についたままの絵の具をシーツに擦り付けてなんとか拭いとろうとしながら。ほんの申し訳程度の距離をあけた二つのベッドのもう片方では、ノアが灰色の眼でまっさらな天井を仰いでいた。

「クリスマス様」

「何？」

「クリスマス様は七不思議を信じますか？」

「……分からないな。俺は今までずっとないと思ってたけど。でも現に君が足音を聞いたって言うし。それでも七不思議のうちのほとんどはやっぱり確認できなかったし。俺はまだ幽霊を信じる気にはなれないな。理事長には悪いけど」

「なぜ父に悪いんです？」

「いや、どうやら信じてるらしいからさ、そういうの。あと、君もか」

クリスマスは折りたたんだ腕を頭の下にしまいこんだ。ノアはきよとんとしたようにクリスマスの顔を見ていたが、目が合うと口元に微笑をひらげた。ノアがこちらに向かって腕を伸ばす。握ろうと返したクリスマス

スの手は無視され、ノアの手はクリスの頬の辺りに触れる。

「クリス様は……優しいですね」

「何だよ、急に」

互いのシーツは冷たい。

「だって、貴方は僕を信じてくれるから」

「当たり前じゃないか。君を信じてるのは俺だけじゃないよ。関本も、酒本も、落合も、みんな君のことを信用してるんだよ」

「いいえ、僕は貴方が信じてくれるだけで十分ですから」

「何言つて……」

子供のように胸元に顔を埋めてきたノアに、クリスは思わず言葉をなくした。「有瀬？」そつと呼びかけてみても、ノアは返事を寄せさない。ノアの頭に触れないよう慎重に顎を落として覗いてみても、親友の表情はうかがえなかった。彼が眠りに落ちたことを知る唯一の方法は、抱きしめるように背中に手を回してみることだった。クリスの唇は切なさに微かに開いた。

「君はずるいよね……」

思いついた言葉をそのまま紡いだ。柔らかなワインレッドの髪を指先で梳きながら、クリスは続ける。

「十分なんて言葉を使つて、いつも求めることから逃げてばかりで叱ろうとした途端にそんな風に甘え始めて。そんな手に引つかかっってしまう、俺もきつとどうかしてるんだろっけど……」

暖房を止めたせいだろうか。水滴が零れ落ちて、窓の外の光たちが先ほどよりやや鮮やかに見える気がした。そういえば、最近のノアは何だか変なところがある。文化祭のことをプレッシャーに思っているのかもしれない。だとしたら、自分がしっかり支えていかなく

ては。
明日からまた忙しい日々が始まる。描きかけた絵も明日のうちの仕上げなくてはならない。

明音はその後一人で七不思議について調査を進め、かなり充実したレポートを慎に提出したらしい。おかげで七不思議の噂は消え、慎からも一応お褒めの言葉を預かったらしいが、写真を取らせてくれとの頼みは見事に断られたそうだ。クリスにしてみれば、一人でできるなら最初から一人でやってくれという気持ちだった。

買出しのリストを手に、一時は全く人気のなくなっていた北階段を下っていたクリスは、ふと背後に足音を聞いて立ち止まった。クリスが止まっても、足音は変わらず一定のリズムを刻んで追ってくる。まさか、七不思議なんてあるはずがない。現に明音が全て嘘だと証明したのだから。いや、だが、二つの怪談に限っては正直相当苦しい言い訳をしたと、後日明音が語ってくれた気がする。その階段というのが確か、音楽室の女性と、この足音の話と……はっとして振り返ろうとしたその時、クリスの真横を人影が通り過ぎていった。

「あつ……」

思わず目でその背中を追う。ふと彼が振り返る。

「千住先生……」

「おや、君か」

薫は足を止めると、クリスは緊張が解けた反動もあって、いつもよりずつとにこやかな笑顔を浮かべてみせた。薫も一層柔らかな微笑で返す。

「こんな所でどうかしたのかい？」

「い、いえ、何でもありません！ただ、足音が聞こえたから、誰かなあって思っただけで、別に……」

「例の七不思議ですか？」

隠しきろうとして隠しきれてないクリスの右肩に、薫は手をまわして進みだす。クリスは指摘された途端、ぱつと頬を染めた。

「えっ、えつと、あの……！」

「恥ずかしかることないよ。僕も実は信じてるんだ、七不思議の噂」
「先生が？」

「何かおかしいかい？」

「だって、先生は化学の先生じゃないですか。非科学的なものは信じてないんだとばかり思っていました」

薫は笑声をたてて、空いた手でクリスの頭を撫でてから言う。

「それは偏見というものだよ。確かに幽霊とかその手の話は科学では証明できない。でも、だからといってむやみに否定するものじゃない。ただ我々の科学が証明できる段階に追いつかないだけ、そういう考え方だって十分できるはずだろう？」

「えっと、俺は……」

それでも信じられない、そんな言葉をのみこんで、まるで今初めて会った人を見るように薫を見遣る。薫はクリスの返事を待っている様子もなく、ただ微笑んでいるだけだった。

「そういえば、石崎君はどこへ向かってるんだい？」

「あつ、町に買出しに行くんです。先生は？」

「僕は音楽室に少し用事が」

肩に置かれていた手が離れ、クリスは思わず顔を上げた。階段脇の表示には確かに2Fの文字がある。音楽室はちょうどこの階にあるから、ここで薫とはお別れだ。短い散歩だったな、とクリスは一人名残惜しく思う。

「じゃあ、車に気をつけて。帰りはなるべく遅くならないようにね」

「わ、分かっていますよ。子供じゃないんですから……」

それでも遠のいていく薫を消えるまで見守り続けていた自分は、やはり子供とした言いようがなくて。彼が閉めた後の音楽室の戸のノブを掴んだ手も、自分の目には妙に頼りなく幼く見えて。昨夜寄りそってきたノアの心が、何だかいやに分かるような気がした。

「千住先生……」

「またいらしたのね。困った方」

「貴方こそ困った人だ。貴方が一人でピアノなんて弾いているから、

生徒たちが幽霊だと怖がつて噂をたてているんですよ」

「ええ、マオに聞きましたわ。でも、仕方ないじゃありませんか。あの子の発表のためなんですもの」

グランドピアノ前に腰掛けていたアニエスは、立ち上がって両手を組むと、薫が歩み寄るのをはにかんだ様に、でも余裕と凛々しさを以って待っていた。里見先生に選んでもらった例の帽子は、もう大分季節はずれとなりつつあるが、それでもピアノの上にちょこんと乗せてある。薫にバレッタを奪われ、豊かな黄褐色の髪が自由になると、アニエスはほんの一瞬だけ、縋るような目で帽子を見た。だが、斜陽に投げかけられた二つの影が重なった後は、アニエスも不安を映した目を瞼の下に押し込んで、体温の求め合いに応じた。それは背徳でも過ちでもない、大人の男女の宿命と言うべきか。

第二十三話 少年たちの世界

休日の校舎が珍しく賑わいを見せている。文化祭も一週間後の迫った土曜日のことだ。基本的には部活や生徒会以外の休日活動は禁止されている三宿学園だが、文化祭前だけは特別で、一週間前から休日でも準備をして良いことになっている。いつもより少しラフに着くずした制服姿に、中に詰めるものが少なすぎて肘ではさむと潰れかける鞆を持った生徒たちのざわめきは、興奮と楽しい焦燥感を以って、さざなみのように学園中に広がっていた。2年A組の教室もその波紋からは逃れられず、40人のクラスメートたちは、それぞれ紙の皿とプラスチックのフォークを手に、胸に溢れ来る感激をどう表現したものかと悩み悩んでいるところであった。

「こんなのでよろしければ、作り方は教えられますけど」

「無理！絶対無理だって！俺たちにこんなのができるはずがない！それが言い表せる精一杯だったのかもしれない。ノアの謙虚な言葉に、すぐさま一人の生徒が返して言った。

「いえ、意外と簡単なんですよ。普通のチーズケーキ作りの課程にほんの少し手を加えれば……」

「おい、石崎！」

皆に囲まれて賞賛の言葉を浴びるノアを満足げに見守っていたクリスは、来夏の呼び声に振り返った。どうやら実行委員会の方で招集がかかったようだ。クリスは教室の雰囲気壊さないように、あまりのチーズケーキをががつと貪る菜月に簡単に用件だけ伝えて、来夏と共に廊下へ出た。二人の移動は当たり前のように駆け足で、ただ副校長に見つからなければよいのであった。

「えっと、今度は何？」

クリスは舌を噛まないよう慎重に言った。

「予算書の見直し。昨日ちゃんと提出してくれたよな？」

「うん。でも、まだ今日と明日で買わなきゃいけないものが増える

かも。材料費なんてほとんど当てにならないし……」

「その時はその時だ。あつ、カフェテリアの机と椅子は予定通り借りられそうだけ」

「なら、よかった」

ちよつと鳥居先生の姿を前方に認めたので、二人は急激かつ自然に速度を落とした。鳥居先生は目の前の書類に夢中で、幸い二人には気がついていなかった。しかし、その幸いというのも結局二人にとつてに過ぎず、鳥居先生は間もなく教室から飛び出てきた副校長と衝突し、生徒同様叱られる羽目になった。

「あーあ」

クリスが思わず呟くと、来夏は微かに苦笑してみせた。

「まっ、おかげで俺たちは副校長に見つからずに済んだけど」

会議室では、颯によって予算書について簡単な補足説明を受け、各自足らないところの手直しをするよう命じられた。颯な几帳面な赤い文字は、全ての代表者の顔に青さを滲み浮かばせていた。クリスと来夏も例外とはならず、細かい指摘には思わず絶句する他なかった。クリスの特に苦しいのは、部屋を去り際の颯のウインクによって、一切の苦情を禁じられたことだった。

とりあえず予算書は来夏に任せることにして、クリスはカフェテリアに向かつて2Aの文字が書かれたシールを約十五台の机と三倍の数の椅子の脚に張る仕事に勤しんだ。それから再度教室に戻り、ノアに指導を受けたクラスメートたちが、様々な台所用品を手に試行錯誤を始めるのをうかがって、また提出用の書類をいくつかまとめ、休憩時間になってようやく手を休められるようになった。

「クリス様、お疲れ様です」

ノアが弁当箱を手に駆けつけてきたので、クリスもこわばった筋肉を動かして笑った。「ありがとう、有瀬。有瀬の方も色々大変だっただろ？」

「いいえ、僕はちつとも」

クリスはノアの髪についた小麦粉を指で払ってやった。

「今日はどちらでお弁当を？」

「あつ、うん、今日は教室で食べるよ。昼休み中に絵を一つ完成させちゃいたいから」

「まだやるんですか」

ノアは垂れ気味の丸い眼を瞬かせて尋ねる。クリスは弁当を受け取って頷いた。

「うん……でも、完成するかどうか。千住先生が望んでくれた個展だからさ、千住先生の好きそうな絵を描きたいんだけど、なかなか上手くいかなくて。今日先生が来てたら、色々聞いてみようと思っただけけど、土日は来てないっていうし。本当に個展になんかできるのかな……」

千住先生の好きそうな絵を描きたい、この思いだけはまさしく本物であったし、純粹であると胸を張って断言することができる。瞼の裏に、あの優しいげな落ち着いた大人の男性の横顔を思い浮かべながら、クリスはぎゅっと胸元のシャツを握った。だが、なぜ薫の期待に応えたいのかというと、顔を真正面に向けて答えるには、少々難しいところがあった。薫が個展を望んでくれたから、という理由は既にクリスの中では随分白々しくなっていた。薄々でもなく、クリスはもう感づいている。自分は、きつと……

「……大丈夫ですよ」

クリスの思考を遮るように、ノアが言った。

「大丈夫ですよ。クリス様なら、きつと最高のものが作り出せます。そんなに思い悩まないで、感性の導くままにやってみてください」
クリスはいつの間にか俯けていた顔を起こす。冬の日差しの中に見えたノアの微笑みは緩やかだった。

「あつ、颯だ」

「あつ……ナツ」

すぐさま袖にすがりついてくる菜月に颯がいまいち良い顔をしな

かったのは、菜月に会いたくなかったからというよりは、自身の格好のせいだった。尼そぎにした颯の髪型は男にしてはかなり珍しいものであったが、今回はそれを上手く友人たちに利用されたのである。背が高すぎるだとか、裸眼では暗闇の中で身動きすらとれないだとか、合理的な理由を散々あげたにも関わらず、クラスメートたちはそのまま颯を座敷童子に指名してしまったという訳だ。3年A組とB組が合同で行うこのお化け屋敷には、座敷童子やらドラキュラやら狼男やら、思いつく限りの怖いものを好き勝手に詰め込んだため、まるで統一性のない、それでいて客を驚かさそうとする点では抜かりのないものに仕上がっていた。

「座敷童子でもやるの？」

「まあ、そんなとこだけだ」

浴衣だ、と言つて、女物の紫の浴衣を興味津々に見つめる菜月に、颯は溜息をついた。

「どうせだったら、ナツがやった方が似合うのにね」

「……僕の背が低いって言いたいなの？」

「ナツの方がかわいらしいって言いたいんだよ」

「別に嬉しくないもん。颯だつてかわいいよ」

「かわ……」

その時慎に呼ばれて振り向いていなければ、颯は頬が赤く染まり行く様子を菜月に目撃されるところであった。何を自分は慌てているのだろう。自分より年下の者にかわいいと言われて（しかも自分は男であるのに）、思わず頬を染める奴がどこにいるだろう。いや、むしろこの感情は照れというよりは気恥ずかしさの方に近いのだろう。慎の用事にも適当な生返事ばかりして、颯はようやく落ち着きを取り戻し、菜月の方を振り返った。

「あつ、ごめん、ナツ……」

菜月は颯が振り向いてもしばらくは誰もいない空を見つめていたが、ふと暗示から覚めたような眼で颯を見つめると、ふいに纏わり付いていた裾の手を取り、強い力でぎゅっと握った。

「ナツ、痛いんだけど……」

しかし、菜月は黙ったままで一向にその手を緩めようとせず、やがてひらりと軽やかに身を返して何も言わずに去って行った。

颯はしばらく啞然として彼の後姿を眺めていたが、はつと我に返ってから後を追うものか追わないものかと激しく葛藤した。慎が後ろで呼ぶ声がする。恐らく先ほど陽が提出して　というよりも、慎にむかって投げつけていった　書類に不満があるのだろう。菜月の汗で湿った手の感触がまだ指の合間合間に残っていた。

「おい、颯！」

「ごめん、慎、ちよつと！」

颯は素早く駆け出した。規律重視の彼からはとても想像できないスピードで。慎はいらいらと教卓の隅に叩きつけていた人差し指の動きを止め、「かわいい、か」と一言呟いたのであった。

無言で背を向け合い、片や丁寧に楽器を磨き、片や一仕事終えてイヤホンから流れる音楽に聴き入っている彼らは、そうしているだけで言いようのない充足感を覚えるようであった。冷たい冬の風も、唇を乾かす温風も流れぬ音楽室であったが、不思議と快適で居心地がよく、二人はいついつい一つしかないピアノの椅子に長いこと腰を落ち着けたままでいた。しかし、身を預けあう安寧だけはいくら過ぎやすい部屋とて到底演出しきれるはずがない。かつては自分のものであった楽器が、白い布の下に滑らかな琥珀色の肢体を晒していくのをピアノの黒光りする皮膚の上に見つめながら、陽は口元を緩めた。

「どうかしたか？」

唇を漏れる微かな音でも聞いたのか、荔枝がすかさず尋ねた。

「何も」

そっけなく、しかし笑いは相変わらず留めたままで答える。

「どうせよからぬことでも企んでるんだろっ？」

「へえ。例えばどんな？」

「私が考え付くようなことなら君はしないさ」

「まっ、オレの思考回路も温室育ちのお坊ちゃまが追いつくほどには出来ちゃいねえもん」

荔枝は密かな呟きを諦めたような笑いに紛らわせた。そうは言っただって、結局大差なくせに。陽は自分や颯、時には慎のことも（慎と一緒にされるのは荔枝にとって相当不服であるのであったが）、世間知らずな御曹司のように思っている節があり、特に恋人である自分に対してはそれが顕著になるのであったが、荔枝が少しも気にしない様子で受け入れているのは、例え世間のことについては多少陽の方が詳しくあったとしても、雨にも風にも当てられないように育てられたという点では、ほぼ同等だと知っていたからだ。しかし、本人一人そのことに気が付かず、自分を甘やかしたり、からかったりする陽が微笑ましくて、とても指摘するような気にはなれないのだ。陽はいつも、荔枝の方が一枚上手なことに気がついていない。そういえば、あの時も……

「何考えてる？」

「さあ」

今度は陽が尋ねたが、荔枝は楽器を拭く手を止めないまま、少し首をかしげて肩をすくめた。

「仕返しのつもりか？」

「まさか」

「だったら言えよ」

「口に出して言うほどのことでもないさ。とりとめのないことだ。それ以外話題がなくなったら話す事にする」

「……おまえって嫌味な性格してるよな」

「そんな風に思われるなんて心外だな」

「ああ、そうかよ」

荔枝はケースに楽器を収めて、二人で共有していたスペースから優雅に立ち上がった。陽に横顔をじっと見つめられたときのくせが出

て、右手は勝手に艶やかな黒髪を梳く。時刻は午後一時三十分。腕時計も音楽室にかかった壁の時計も、その点に対しては異存がないらしく、二組の時計の針はぴったりと同じ角度を作っている。あと十分ほどで弦楽部の練習が始まる。その前にコンサートマスターと話しておきたいことがある。陽がしつこく自分の顔を見続けているので、荔枝は鞆を拾い上げながら右手の癖を二度も三度も繰り返した。ふと目を合わせたその時、荔枝は初めて、前髪に隠れた陽の視線の中に批判的な光があることに気が付いた。

「どうかしたか？」

先ほどの言葉を、荔枝は無意識のうちに再度繰り返した。陽は無言だった。

「言いたいことくらいはつきり言ったらどうだ？」

荔枝は上げかけた右手を方向転換して、陽の頭上へ持っていったが、荔枝の忠告を素直に受け入れることにしたらしい陽によって、素早く掴まれてしまった。困惑したような荔枝は、一瞬の間を置いてたちまち元の席に引き戻され、そして陽の腕の中に収まった。荔枝は頬が一気に熱を帯びたのを感じたが、それは決して、陽の高すぎる体温から奪った温度ではなかった。

「陽……？」

一時しのぎであれ、すぐに冷静さを取り戻した荔枝は、陽の肩の辺りで呟いた。

「突然どうした？」

「てめえ、さつき絶対自分の方が一枚上手とか考えてただろ」

「はっ？」

「惚けんな。分かってんだよ、てめえのことは全部」

「……脅しのつもりか？」

「お前も少しは立場をわきまえろってこつた」

まるで子どもみたいだ。少しバカにされたぐらいで怒って。こつちはきちんと掌の上で転がってやったのに。だが、陽の背中に腕を回したその時には、全身に痺れるような酔いと熱が回っており、最早

どちらが上手なのか、どちらがどちらを操っているのか、荔枝には判断がつかなくなっていた。

「おい、大河内！」

声をかけるべきかどうかは迷わなかった。大河内孝則の後姿を視界に認めたとき、落合はすぐさまその肩に向かって駆け出した。大河内は全て分かりきったように振り返り、体を完全に落合に向けて微笑んだ。

「落合か……」

「何だよ、その『落合か……』っつーのは？」

「別に不服だった訳じゃない。文化祭の準備か何かか？」

「ああ。大の親友が実行委員なんざやってると、どうしてもさぼりにくくなって嫌なもんだぜ。それも二人もだもんなあ」

大河内は和やかに笑い、落合と肩を並べ、傾きかけた日にきらめく中庭を、共に歩み始めた。落合はふと大河内を三宿海岸まで誘いだしたことを思い出し、覚え始めたばかりの戸惑いを持って大河内の記憶を呼び起こそうとしたが、大河内は分かっているとも言いたげに、こくりと大きく頷いた。あの日のことをよく覚えているのは、拾い上げた浜辺の白い砂の中に、何か輝くものを見た気がして。

「それで、失恋は癒えたのか？」

「さあな……」

大河内は素直に答えた。

「そっちはどうなんだ？」

「んー、俺の方もよく分かんねえや。でも、まっ、どうせ引きずってたってどうにもならならねえし、ポジティブにいくことに決めただけだな」

「要は諦めどころだ。今でも時々、自分の手の届くところにあの子がいる気がする。そうすると、また未練がましく追いかけたくなる気持ちが出てきてつい引きずり込まれそうになって……散々苦しみ

ぬいた後で、ようやく理性が思いを抑えつける」

「だったら、そんな苦しさがないだけ、俺は楽なのかもな」

何気ない顔で呟いた落合の、その悲しく自嘲的な声は、嫌でも大河内の耳についた。大河内はどこか憐れむような目で落合をじつと見つめたが、何の感情との関わりもなく泣きそうになる落合には、その視線が痛かった。確か彼も足を止める時が分からなくなったといった。深い愛情は百万人の先人が述べたとおりに彼を癒すどころか彼を引き返せぬ場所まで追い込んでしまったのだ。いや、追い込んだのは自分なのか。まとまりのつかない話を、こんなところで蒸し返したくはなくて、落合は目をこするふりをして浮かんできた涙を拭いた。いつの間に関はここまで女々しくなれたのだろう。一生分の涙なら、流さなくてもいいように彼が唇で受け止めてくれたではないか。大河内は小枝でさええずる雀たちに突然興味を抱いたようだった。落合の前を歩いて、後ろはまるで振り返ろうとしなかった。「……男が失恋の話ばかりしては、みつともないな」

落合の自重を分かち合うように、大河内が前を見たままでそう言った。落合はメガネをかけなおし、呆れたように頷いた。

「全くだ」

普段以上にいらつかれることが多いにも関わらず、慎は文化祭という行事は決して嫌いではなかった。もちろん、神経を逆撫でしてくる輩に報いるために、楽しんでいる様子などはおくびにも出さなかったが。たまにはクラスにも顔を出してくれと懇願され、午後からであった休日出勤ならぬ休日登校を早めた慎であったが、七不思議事件以降、お化け屋敷の準備は着々と進んでおり、慎はさほど教室内の自分の存在に意義を見出せず、疲労しきった神経と凝り固まった肩をどうにかしたい気持ちもあり、今ではすっかり見飽きつつも足の運ぶままに生徒会室へと向かった。慎が教室の中に行かないことに気が付けば、颯もじきに来るだろう。熱いコーヒーでも淹れ

てもらおうとしよう。

と、慎は悪寒のようなものを感じて立ち止まった。いくら疲労が重なっていたとて、こうした大きな行事を前に風邪なんぞ引く訳がない。気が付けば、慎は鞆の中で一番重量のありそうな本を選び出し、背後へ投げつけていた。蛙が潰れるときに出すような悲鳴が聞こえた。

「……やっぱり、てめえか」

「わ、分かってくれたださったなんて、光栄っす……!!」

慎は振り返ってわざわざ被害を見遣るようなこともせず、これで数時間ほどは静かな時間が過ごせるだろうとの確信の下、再び歩を進めた。ところが、生徒会室にたどり着いたとき、慎は、後ろから全身を引きずりつつもこちらに忍び寄ってくる不吉な音を聞いたのであった。

「てめえ……警察に引きずり出されたいか？」

「ま、ちよつ、まつ、待つてください、慎様！わ、忘れ物です……教室に……！生徒会室の鍵……！」

鍵ならここにある、とブレザーのポケットに手を入れた慎であったが、おかしなことに手になじんだ金属の感触がない。慎は引きつった笑みをますます尖らせた。そういえば、先ほど何かの拍子に教室の机に上に取り出した記憶がある。ということは、明音が持っているその鍵は本物ということか……慎は決して感謝してはいないことを示しすぎたほど示した表情で振り返り、今にも天に召されそうな自身のストーカーから探し物を受け取ったのだった。案の定明音は泡を吹いて倒れたが、気絶の手前に慎の顔をアップで撮影しておくことを忘れなかった。慎は握り締めた拳に青筋を浮かべた。

「いい度胸だ……！」

それからふと、慎は強く固めた掌を広げる。赤くなつた皮膚には、鍵の形が白くくつきりと残っていた。その痕から、慎は水泡の重みに沈んだ銅の鍵を連想した。そして、今では学園の誰もに忘れられた、波の彼方の少年のことも。

彼を思えば、鍵を渡してくれる人物がいるだけで幸せなことなのかもしれない

自分の胸に起こった考えに、慎は忌々しげに鼻を鳴らしただけだった。足元で痙攣している奇妙な生物はそのままに、慎は鍵を開けて生徒会室の中に入り込んだ。その後、明音の「慎様……」との咳きが彼に聞こえたかは明らかではないが、慎は、空の花瓶の底に落とした部屋の鍵と、生徒会室の窓から望んだ風景に何を思ったのか、明音の身を引きずって生徒会室の中に入れてやった。途端に明音は目をぱちぱちさせて起き上がった。

「し、慎様……！」

明音は胸の前で熱烈に手を組み、今にも慎に飛びつかんばかりの勢いだ。親犬を前にした子犬のようなその様子に、慎は危惧さえ感じて急いで冷たい言葉を見つけて言い捨てた。

「勘違いするな。鍵を持ってきてもらった礼だ。三分経ったら出てけ」

「はい！もうなんでもいいです！」
とりあえず慎の傍にいられるだけで幸福な明音は、慎の手からコーヒーカップをさっさと取り上げると、実に手際よくコーヒーの準備を始めた。明音の料理の腕を知っている人ならば、明音がコーヒーの瓶を開けた時点で逃げ出しただろうが、幸いにも慎はそれを知らなかったもので、ただ少し感心したような素振りを見せてからいつもの指定席に腰をおろした。だが、明音がコーヒーを淹れている間はとてもゆっくりとくつろぐことなどできず、つい今片付ける必要のない書類を手元に取り寄せてしまっただった。

「どうぞ、慎様」

ちやっかり自分の分まで淹れた明音は、慎にコーヒーカップを手渡した後、角砂糖を砂糖入れにあった文だけ黒い液体の中にぶちまけた。慎の口元がぴくりと動いたが、慎は何も言わずにコーヒーを含

んだ。それは奇跡的要因がいくつも積み重なった結果であることを、彼は知らなかったが、慎はなかなかよく出来ていると明音を褒めた。「ありがとうございます！あの、ついでに写真撮っていいですか？」

「早死にしたいのか？」

「すみません、何でもありません」

ミルクと砂糖を大量に入れられて既にコーヒーと呼ばなくなっている代物を、明音は喉を鳴らして、ジュースでも飲みように摂取していた。慎はカップの縁越しにその輝きに満ちたサファイアブルーの目を眺めやった。まるで鏡を見ているような気さえた。自分の目と同じ色だ。しかし、明音の持つ無垢な心は、千住家の色を自分などよりはるかに鮮やかに煌かせている。だから、きっと自分は、ヤマアラシが寄り添い合うような恐怖を知らずにこの少年に向かい合えるのだろう。それは果たしてよいことなのだろうか。

慎は砂時計をひっくり返していた。三分間きっちり計ってやろうと思って、勝手に荔枝から拝借したものだった。砂はとうの昔に落ちきっていたが、兄と弟が無知ゆえの安らぎに浸っている三分間は、まだ当分終わりそうにない。

来夏は重い左腕を持ち上げた。そろそろクラスメイトに下校を促してもよい頃だった。会議室で実行委員の仕事に勤んでいた来夏であったが、ここから教室まで階段をのぼらなくてはならないと思うと、何だか足を一歩進めることだけでもうんざりしてきて、この座り心地の悪いパイプ椅子にずっと腰掛けていたい気にすらなるのだった。それでもクリスが個展の絵の仕上げのために不在な今は、自分が行かなければならない。突然立ち上がったせいで足元がふらつき、細かい数字ばかり相手にしていた目と頭とが、空中で二度も三度も回った気がした。上から漂ってくるチーズケーキの匂いだけで胃がむかつく。調理班はついにケーキ作りに成功したようだ。

不思議な調べを聴いたのは、そんな頭で廊下を突っ切っている時

だっただろう。来夏は思わず足を止め、音が零れ出てくる方に顔を向けた。麻痺しきった脳を内側からほぐしていくような柔らかな歌声、包み込むように優しいピアノの音、あの従姉弟を除いて、はたしてこんな音楽を作り出せるものがあるだろうか。来夏は声をかける気はなく、ただ音楽室の防音扉が少し開いていたのをいいことに、そっと顔をのぞかせた。途端にピアノの音がやんだ。

「マオ、20小節目のリズム、少し違うわ。楽譜、見て」

上達した日本語でアニエスが歌うように言った。真央は催眠術にでもかかったような顔でこくと頷き、指摘された箇所からまた声を出した。ミュージカルの主役選ばれたということ、人一倍練習に励んでいるのだろう。来夏は顔を引つ込めた。邪魔はしたくなかったからだ。扉の前に立ち、来夏は何か次第に理解しつつある気持ちを胸に、真央の歌を聞いていた。自然に頬が緩んだ。愛おしい、真央が　澄み渡った歌声は波のように後からも後からも追いかけてくる。

「守ってね、真央を。お願いよ……」

いつしかアニエスが涙ながらに自分に頼んだ。戸惑いながらも受け入れてしまったその頼み。彼女が守つてと頼んだものはなんだっただのか。真央自身であったのか。それともこの美しい歌声であったのか。そうだ、忘れがちになっていたが、真央の声は今この瞬間にも、残酷な病魔に蝕まれつつあるのだ。しかし、来夏は医者ではないし、将来そちらの方面に進む予定もない。もちろん、病魔と闘うような術は持っていない。来夏にどうやって真央の声を守れというのか。やはりアニエスは、真央自身を守ってくれと来夏に頼んだのか？なぜ？真央を襲ってくるものが、病魔のほかは何があるのか。そして、例えそのようなものがあり、自分がそれを見つけたとして、自分に戦い抗う術があるのだろうか。いや、自分はなんとしても見つけなければならぬ。何があっても、必ず……待て。

「マオ、最初から通すわよ」

真央の稚拙な英語の発音を聞いていた来夏は、ある考えに思い至

ると、ぞつとして思わずその場を離れた。美しい調べ、人を癒し歓喜に導く音楽　来夏も今、全ての疲労を現れたような気がしていたのに、恐ろしい考えがその効果を追い立ててしまった。真央への愛情さえ、恐怖にすっかり踏みにじられていた。もしや、アニエスは、声の出なくなっただ後の真央を自分に任せようとしているのではないだろうか。名声と栄誉を失った後の真央を世間から守る役として、自分を選んだのではないか。

胸の奥では、虚ろな目をした真央が、声もたてずに笑いながら来夏を見上げていた。

第二十四話 星の波止場・前編

「おい、まーお」

「うわあっ!」

寮のベランダでぼんやりと星を見上げていると、突然後ろから飛びついて、真央を土ばかりの花壇へ突き落としかけた者があった。今夜の明音はいつもに増して機嫌がいい。たらこクリームスパゲッティと称して出した料理も、珍しく(とというか奇跡的に)まともな味つけだった。麵に関しては、噛む度にもきゅもきゅという謎の効果音がついてきたが。

「ちよつと!明音、落ちる……!」

何とか足を地面につけたままにすることに成功した真央は、明音がぱつと離れた隙にようやく体勢を立て直した。

「明音!」

真央はくるりと振り返って言った。焦りと恐怖が反動的に怒りになったはずだったが、真央の小さな顔ではとてもその感情を表しきれない。明音も悪いとは言いつつ、少しも悪びれている様子はない。却って楽しげに笑顔をたてるという有様であった。

「全く、もう……」

真央は溜息をついて、再び星空に帰った。その溜息は、決して明音に対する呆れだけが引き起こしたものでないことを、自分でもよく知りながら。明音はいい。いつもは拒絶されるばかりの人と一緒にコーヒーを飲んだというのだから。一方で自分は、やはり、高望みだったのだろうか。夕方の音楽室で楽譜の端にちらりと見えた来夏の影、その影が扉の向こうに消えた後も、真央は密かに彼がそこで待ち続けていることを期待していた。していたけれど……駄目だ。こんなのは我俣に過ぎない。来夏先輩は後輩として自分を可愛がってくれるだけなんだ。だから、来夏先輩は僕のことなんて……

「星が綺麗だぜ」

「えっ？……あつ、うん、そうだね」

隣で並んで明音が呟いた一言に、真央は少々呆気にとられて頷いた。星が綺麗？確かに人の届かぬ深海のような暗黒の中に、砕かれた寶石のように星々が煌いている様は美しい。だが、そんなことぐらい目に見えている。真央は今、こうして星を見上げているではないかなぜ、明音は知らせるように言ったのだらう。

「それでいいと思うぜ」

「へっ？」

「星が綺麗ってだけでいいと思うぜ。くよくよ考えないでさ。誰かを好きになるって、きつとそれだけのことだろ？」

「……言ってる意味が分からないよ」

「だからさ、関本先輩が好きになったなら、もうそれでいいじゃん。先輩が好きになったら、好きになった時点で全部完成。先輩に振り向いてもらうとか、付き合うだとか、そんなことは全く別の次元の話でさ。俺は星が綺麗ならそれでいいと思うもん。だから、真央が今悩んでることは先の話だと思って、今、自分が先輩を好きだと思えることを喜ぶべきだと俺は思うぜ」

府に落ちないような顔をしている真央に、明音はにこりと微笑みかけた。それでもまだ真央は困惑したままで、どこを見たらよいかさえも分からず、仕方なく夜空に視線を戻した。そして思わず息を呑んだ。本当だ。一体、自分が今まで見上げていたものは何だったのだらう。星が綺麗だった。他には何も考えられないほどに。

これでいいんだな、真央は胸の中で密かに言った。今はただ来夏が好きだという気持ちだけでいっぴいだった。それだけでもう何もかもが完成されて、もう何も付け足す必要がないような気がした。そしてまた、その夜、真央は初めて来夏への恋心と正面から向かい合えたように思えたのであった。

もう正面から向かい合うことができない。あの大きく丸い緑の瞳に。かつては愛おしく思えたあの瞳に。

土曜日から今日まで、来夏は怯えるようにして日々を送っていた。追いかけてくる真央の笑顔を見る度に、未だ内側から来夏を見上げ続ける虚ろな笑顔が浮かんで笑えなくなつた。それでも真央が何も気付かないのが辛かつた。いつそ恐怖を露骨に示すことができたかどうか。真央に怯える心、それを隠そうする心、妥協しあう二つの心はどちらとも、自分の弱さゆえに生まれたものだった。

一方で、来夏はそればかりを悩む訳にもいかなかった。時は順調に進んでおり、今こうして一人で廊下を歩んでいる時分にも、文化祭は翌日に迫っていた。クラスではちょうど装飾が行われているところだ。何人かの生徒には材料の買出しも頼んだ。そろそろ帰ってくる頃だろう。彼らが帰ってきたら、またノアと一緒に作り方の手順を最終確認しなければならぬ。誰かと話したい気分ではないのに……校舎は興奮と歓喜と期待とで爆発寸前といったところであった。笑っている者、怒っている者、仕事をしている者、つかの間の休息に浸る者、いずれの生徒たちも、その表情は不思議な期待で輝いている。来夏には、自分と彼らと同じ世界の人間だなんてとても考えられなかった。もう喜びとか嬉しさとか、そういつたものは全く隔絶されてしまったようだった。落合の冗談に笑う時、来夏は自分の笑い声に、声を失った真央が託した、乾いた虚ろな音を聞くのであった。

「あつ、関本」

自分を呼ぶ声で、来夏は我に返つた。疎外感を胸にぶらさげたまま他人と話すほど、来夏は愚かではなかった。来夏はいつもの明るく活動的な表情を、西洋人の血が多く通つた端正な顔に映すと、心中の鬱々とした暗い森からは到底考えられない朗らかさで、相手を振り向いたのであった。

「ちようどよかつた。ちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど

……」

その頃、クリスはできる限り無表情を保ちながら、目の前の敵と対峙していた。目の前の敵とは、つまり理事長のことで、文化祭前日の視察とやらで高等部の校舎を訪れたらしいのだが、いつもどおりの恐ろしく気のない挨拶を投げかけても、理事長の反応はなかった。これは、火の海となったアトリエの救出劇をもっと評価するべきだとの無言の批判だと思ったクリスは、今度はもう少し明るい調子で「こんにちは」と言ってみたが、それでも理事長は黙したままだ。そこまで嫌われているのではしょうがないと、理事長の脇を通り抜けようとすれば、今度は黙ったままの状態で通行を妨害する。クリスは忙しいのと明日を不安に思う気持ちで気が立っていたため、怒鳴りつけないにするのに八割がたの精神力を浪費した。

「あの、理事長」

クリスは深く息を吸い込んでから言った。

「僕に何か用ですか？そうでなければ、そこを退いて……」

「君はなーんにも気付かないの？」

理事長の第一声は、いつもと変わらぬ調子であった。だが、クリスはそこに、何やら無視できないものを感じ取った。

「はい？」

「君、ノアと一緒に住むのをやめた訳じゃないでしょ。それなのに何も気付かないの？食べてるものも分からないほど忙しいから？」

「一体何の話です？」

理事長は答えなかったが、クリスはそのことを半分予想していたため、特にいらだちも驚きもしなかった。その代わり、落ち着いた声でちゃんと反撃はした。

「言うてくださらなければ分かりません」

肩をすくめた理事長に呆れている様子は見えなかった。

「……別に僕は怒ってる訳じゃないから。ただね、まあ、少しね、ノアが「可哀想」だなあって思っただけ。それに、そうだね、ほんの少しだけ君に失望したんだよ」

「有瀬に関係あることなんですか？」

クリスがはつとする思いで尋ねても、理事長は返答を拒否し、何も言わず足早に去っていった。追いかけてまで答えを聞くような気力も時間もなかった。ただ、乱雑になりながらも透き通っていたクリスの心に、一つ暗い影が落ちただけだ。

しかし、一体どういう意味なんだ？有瀬がかわいそう？俺に失望した？自分は有瀬に対して何かひどいことをしたり言ったりした覚えはない。それなら逆なのか？自分が有瀬に対して何もしなかったから……

クリスは急いで首を振った。そんな懸念をする必要があるなんて、考えたくもなかった。ノアと自分との友情をかたく信じる気持ちがあった。まさか、その中に、意地やらプライドやらいうものが混じっているとは思わなかったが。

「クリスマス様、チョコレートケーキがやつと出来ましたよ」

「あつ、焼けた？」

ノアが一瞬ためらうような素振りを見せたのは、理事長との会話を聞いたせいなのかもしねなかった。しかし、とりあえず、ノアは頷いた。

「ええ……『出来』ました。これならお店に出せそうです。間に合っつてよかったです」

もうすっかり模様替えした教室の中からは、ケーキを絶賛する声が溢れ出てきていた。ノアは照れたように、クリスマスは嬉しげに笑った。「オツケー。じゃあ、後は材料がくるのを待つて、全部冷蔵庫に詰め込めば完成つて訳か。午前で全部片付いたよ。意外とあっさり行くもんだね」

「ええ、でも、喫茶店が大変なのはどちらかといえば本番の方ですから、気は抜けませんけど。ミュージカルなんてすごく忙しいって秋元君が言っていましたよ。リハーサル中なんて怒鳴られてばかりだつて」

「へえ、俺ならとても耐え切れないや」

クリスは腕時計を見た。そろそろ弦楽部のリハーサルの時間だ。クリスは実行委員の仕事の一部として、弦楽部の発表の際の照明の役目を背負わされており、全く関係のない減額部の練習に召集されたことが、これまでも何度かあった。幸い荔枝と知り合いであったから、優雅ながら皮肉的な微笑を数度向けられただけで済んだものの、クリスの照明の腕は実際のところ半殺しものだった。同じ実行委員で、弦楽部の発表ではマイクの設置を担当する真央からは、「石崎先輩って何ていうか……ステージクラツシャーですね」とのありがたい言葉を頂戴した（真央はとりあえずカタカナを使っておけばかつこよく聞こえると思っただけ）。

「じゃあ、有瀬、俺、そろそろ行くから……！」

「ええ。クリス様が帰ってくるまでに、『完成おめでとう＆成功祈願パーティー』の支度を終わらせておきますから。野瀬先生も連れてきてくださいね」

「そのパーティー、何か間違ってる気がするんだけどな。まあ、いいや。落合にくれぐれも装飾を壊さないようっておいてね」

「大丈夫ですよ、クリス様。いつてらっしゃい」

笑顔で手を振るノアを見た時、彼に対して何かし損ねたのではないかというクリスの懸念が完全に消えうせた。ノアは全てに満足そうだった。クリスとの関係においても、自分が2年A組というクラスに貢献できたことにおいても、ケーキの味においても、自分の顔だけ見て去っていった養父に関することにおいても、本当に何もかも二人の絆を妨げられるものなんてない。クリスは強く確信した。

しかし、ノアとの会見がもたらした明るい気分は、長く続いてはくれなかった。階段を駆け下りる途中で、クリスは薫とアニエスが仲睦まじげに立ち話をしているのを、偶然見かけてしまったのだ。クリスは薫が女性教師と話していても勘ぐるようなことはしなかった。まず、野瀬先生、里見先生は既婚者だし、桜木先生は歳も歳だし、すでに橋爪先生という素敵な恋人がいる。ジャクソン先生は何の理由を捻らなくとも論外と考えられ、鳥居先生については、落合

がしきりにはやし立てていたが、本人がいるところでは口が裂けてもいえないような理由で、恐らく恋の萌芽はあり得ないだろうとクリスは思っていた。薫が生徒に優しくしているのをみても、そういう先生なのだとばかり思っただけで、尊敬がますます強まるだけだったし、クリスは他人と薫との関係のことでは、多少揺さぶられようが、最終的には何もないと勝手に落ち着いて、ただ自分ひとりのもどかしさに悶えていればそれで済んだ。でも、アニエスは例外だった。あの美しいフランス人の未亡人を、クリスは心の底から好いていたが、彼女が薫の隣に連れ添っているのを見るときだけは、心がざわついた。アニエスは真央の歌の練習のために、最近足繁く学校に通っていた。そのために、アニエスが薫や校長先生あるいは里見先生に、校内を案内されている光景を見ることも珍しくなかった。誰もが認める似合いの二人だ。二人とも絵のような美しさを持ち、善良で親切で才能に溢れ、欠点がるでない。相性がよく、話題も合うよううで、よく二人で夢中で討論している。おまけに、アニエスは再婚を、薫は結婚を考えてもおかしくない頃だ。それに、思い込みかもしれないが、薫もアニエスに対する態度だけは、他のどの女性とも違うような気がする。

「あら、クリス君」

アニエスが気付いて笑いかけた。クリスは軽くお辞儀した。浮上したクリスの視線を捉えたのは、薫の目だった。

「おや、石崎君、急ぎの用かな？」

「ええ。ちよつと実行委員の仕事があつて……」

「仕事熱心だね、君も」

脈打ちながらも共に不安を噴出している心臓は一体何なのだろう。

「クリス君、お仕事頑張つてね。クリス君の絵の展覧会は、絶対見に行くわ」

アニエスが日本語をたどたどしくなぞった。それは愛らしく微笑ましい動作であった。クリスにはあまり喜ばしくないことに。

もつと立ち止まって話していたい気もしたが、前回の練習の惨憺

たる結果を考えると、遅刻なんてすれば、さすがの荔枝も黙つては
いないだろうと思われた。クリスはまたお辞儀をして、踊り場の方
へ舞い戻った。アニエスと薫はまるで子どもを見守る夫婦のように、
クリスの後姿を見送っていた。薫の腕がアニエスの白いワンピース
の腰のラインを撫でた。

「あら、里見先生、どなたかお探し？」

「あつ、桜木先生、アニエスを見ませんでした？」

「ゾラさん？いいえ。学校にいらつしやるの？」

「ええ。秋元君が文化祭で発表をするので、その練習に。一緒に昼
食でも思つて、音楽室を見てみたんですけど、誰もいないし……」
「変ねえ。ピアノの伴奏ならどうせ音楽室しか使えないでしょうに」
「ごちゃごちゃうるさいわね！いいからさつさと捕まえていらつし
やい！」

「無茶言わないでよ、ジャクソン！生徒会長なんて絶対無理！内心
私のこと見下してるオーラ醸しすぎだもん！捕まえて、その上ファ
ックションショーに引きずりだすなんて芸当なんて出来っこないわよ
！」

「あんたそれでも教師なの？！みちる、あんた独身のこと気に病み
すぎよ」

「おい、誰が三十路で独身なことに負い目を感じてるって言った？
！」

「まあまあ、淑女がそんな騒いでしたくない。あなたたちは何なん
です？」

「聞いてくださいよ、桜木せんせつ！あたしのファックションショー
のリハーサルに、生徒会の子たちだけ集まってくれないのお。全く、
素直じゃなくて困っちゃうわあ」

「だからって、生徒会長を引っ張ってくる役目を私に頼むのはどう
なのよ？」

「あらあら、そんなことで。皆さん人探し中のことです。よろしい、私が校内放送でもかけてみましょう」

「そんな、桜木先生、悪いですよ。アニエスはきつとどこかにいますから……」

「いいのよ。その方が時間の短縮になるでしょ？それに、『葉桜』はもうすぐ混んでくるわよ。貴女方も、私が適当な理由をつけて呼び出しますから、さっさとさらっていきなさいね。私も恨まれたくないから」

「はい」

「あら、早くしないともうすぐ三味線のお稽古の時間だわ……」

「先輩、そこ、もうすこし左ですよ」

「えっ、あっ、うん」

真央に耳元でささやかれ、クリスは急いで後輩の指示に従った。

しかし、どうも照明の位置を左に向けすぎたらしい。楽譜を見つめる荔枝が眩しげに眉をひそめるのが見えた。クリスは今すぐにも逃げ出したい衝動に駆られた。

「こりや照明の方が練習しないといけねえよなあ」

生徒会の仕事を抜け出てきたのだか何だか、陽が背後でぼそつと眩いた。おっしやる通りです、と、クリスは冷や汗をたらし、照明の微調整をしながら密かに頷いた。その時、美しい弦楽四重奏の後ろにくぐもった女性の声の放送が入った。クリスの耳には一言として届かなかったが、陽は放送を聞くなり怪訝そうな顔をしてホルを出て行った。荔枝も少し顔を上げた。

「なんだろ、アニエス姉さんも呼び出されてるみたいだけど……」
クリスよりスピーカーに近い位置にいた真央は首を傾げた。曲が終わった。ハイドンの「皇帝」第二楽章だ。急いで照明のスイッチを消す。別の照明担当の少年は、抜かりのない動きでフットライトをともした。

「さあ……」

必要もない応答をしたことを、クリスマスはすぐに後悔した。真央が不思議そうな顔でこちらを見ているのが分かる。クリスマスは弦楽部のメンバーたちが何事か打ち合わせているのを確認し、こほんと咳をしてから言った。

「そういえば、さつきアニエスさんを見たけど。千住先生と一緒にいたよ」

「あーあ。姉さんってば、千住先生とばかりいちゃいちゃするんだから……いや、他の人とされても困るんですけどね。最近学校来てるのだって、僕のためというよりかはずっと先生のためみたいなもんですもん」

「そうなの？」

クリスマスが精一杯の平常心を保って聞くと、真央は呆れたように頷いた。

「ええ。姉さんは何も教えてくれないけど、僕、あの二人が付き合ってるような気がするんです。こういう話は来夏先輩が好かないから、石崎先輩に話しますね。でも、そうだったらいいな。だってそうしたら、千住先輩が僕の従兄に……」

「中断してすまない。続きをしよう」

荔枝の声が真央の楽しいな想像を突き破った。クリスマスはそれでほっとした。これでやっと神経を、アニエスと薫のいないところに注ぎ込める。だが、クリスマスの照明の腕は下がる一方で、ついには2度目の「ステージクラッシャー」の称号を授かることになった。

何もかもが上手くいっている、それが理事長の感想であった。それ以上何か意見を求めても理事長が何も言わないことは知っていたし、あえて聞く気もなかった。校長はただ、「そうですか」とだけ言つて特製のコーヒーを差し出した。理事長はすぐに飲むと舌を火傷することを既に学習しており、湯気が活発なうちにはカップに手を伸ばそうとせず、一緒に出されたカステラだけ手で掴んで二口で食べた。

「息子さんの様子はどうでした？僕の記憶では、クラスでもずいぶん活躍していたように思いますが……」

「ふーん、そうなの？知らなかった」

「ええ。料理のことに關しては、ノア君の右に出るものはいないでしょうからね」

「じゃあ、一言ぐらい何か言えばよかったかな。忙しそうだったから、声かけるのやめたんだけど。珍しく大勢の友達に囲まれてたしね」

「石崎君のおかげですよ」

校長は嫌に苦いコーヒーを含んで顔をゆがめた。どこで失敗したのだろうか。コーヒー豆がいい加減古くなってきているのか、それとも機械が悪いのか、それとも作る人間がぼけてしまったか……

「石崎君？石崎クリス君？」

「ええ、もちろん彼のことです。彼はノア君にとって最高の友人と言えるでしょうね」

ソファから立ち上がり、ガラスの瓶越しにコーヒー豆の様子をうかがった。特に問題は見られなかった。蓋を開けて匂いを嗅いでみても異臭はない。その時、「最高の友人ねえ」との皮肉っぽい呟きが聞こえたため、校長はさつと顔をあげた。

「何か異議があたりですか？」

校長にとつては予想外だったことに、理事長は曖昧な唸りと共に首を縦に振った。

「ああ、多いにあるよ。君でも納得しそうな正当な理由でね。でも言わないさ。答えは彼が一人で見つけるべきだもの。君に話したら、君はまた余計な忠告をしそうだし」

「……言っておきますけど、僕は結構放任主義ですよ」

「おや。僕には散々ノアに構えていつてるくせに？」

「あなたのはただの放置、虐待でしょう？」

「他の先生方に君を探させといて放置するのも僕は虐待だと思っな機械にも故障がないことを確かめて、校長はソファの上に戻り、再

び理事長に正面から向かった。先ほどのことが思い違いだったことを祈ってもう一口飲んでみたが、やはり露骨な苦味は健在だ。カステラの甘さで何とか舌の不快感をかき消した。当分コーヒーを淹れるのはやめよう、紅茶にしよう、と校長は心の中で決意した。

「それで、火傷の具合はどうです？」

「ん？今日はまだ舌を火傷してないけど」

「舌ではなくて右手の方です。病院には行きましたか？」

理事長は何も応えずに、ただ実物を示すことで答えを出した。校長は深い溜息をついてから、差し出したその右手でコーヒーカップを取ろうとしている理事長に忠告した。

「そのコーヒーは飲まないほうがいいですよ」

第二十四話 星の波止場・後編

よろよるとホールの扉から転がるように出てきたクリスは、再び不安に苛まれ始めていた。早くパーティに來いとの場合からのメールも、あまりクリスを元氣付けなかった。真央の言ったとおり、ア二エスと薫は本当に付き合っているのだろうか？薫の心は既にあの可憐な未亡人のものなのか？もし、そうだとしたら いや、そうだとしたって一体何の問題があるのだろうか。自分の薫への氣持ちは純粹な憧れだったはずだ。それがなぜ……そんなことはどうでもいい。自分は一体どうしてしまったのか。そしてどうすればいいのか。どんな適当な答えでもいい。他人が投げかけてくれるなら、クリスは喜んで受け止めたはずだった。

「クリス」

名前を呼ばれてもしばらく脳内に留まっていたクリスだが、肩を叩かれるとようやく颯の存在に氣が付いた。颯は黒いパーカーを羽織っていたが、袖をまくり、暑そうに手で扇いで風を作っていた。メガネは外しており、携帯用の音楽プレイヤーが首から下がっている。ダンス部の練習をしていたに違いない。三宿学園のダンス部といえば、文化祭の大きな見ものであると聞くから、きっと力も入っているのだろう。

「あつ、こんにちは、先輩……」

クリスは礼儀正しく言ったが、何だか颯に心の眩きを聞かれてしまったような氣がして、妙に落ち着かなかった。

「実行委員の仕事だろ？お疲れ様」

「えっ、あつ、はい。先輩もダンス部の練習ですよ？お疲れ様です」

颯はずれ落ちたパーカーを肩の位置まで引き上げて笑った。

「僕の方はいいさ。ダンスは好きでやっつてることだからね。でも、クリスの方はそうじゃないみたいじゃないか」

「あはは……もしかして、荔枝先輩が愚痴ってたとか？」

「僕は情報が速いんだよ、誰よりね」

颯ははぐらかして言ったが、やっぱりそうなんだと青い顔をするクリスを見て、慰めるように付け足した。

「大丈夫だよ、別に荔枝は怒ってる訳じゃないから。本気で君が嫌ならいくらでも変えることができるはずだし、正直言つとなんだか面白がってるみたい」

「面白……」

噂にしていた本人が出てきたため、クリスはぴたりと口を閉ざし、謝罪と非難の視線を片方ずつまっすぐに送ったが、彼はまるで無頓着だった。クリスには一瞥もくれず、運動後の爽快な輝きを顔にともした友人に挨拶もなく声をかけた。

「颯、先ほど呼び出しがあったようだが、一体何だったんだ？」

颯は思わず苦笑した。ちょうどその時、クリスのポケットの中で、携帯電話が震えだした。クリスは急いで画面を見遣る。関本来夏からの着信。

「もしもし？何？落合？」

「ああ、あれね、校長からの呼び出しってことだったんだけど、実際はジャクソン先生のファッシュションショーのリハーサルのことだったんだ。ほら、僕たち揃ってポイコットしちゃったから。僕と君は運よく集合しなかったから助かったけど、慎と陽は捕まっちゃったみたいだよ。かわいいそくに」

「全く不運だな」

口ではそう言いつつ、荔枝は自らの無事に安堵した様子であった。陽のことはさほど気にならないらしい。というよりは、ファッシュションショーで衣装を着せられている陽を見たい気持ちの方が強いのかもしれないが。クリスは最後に「分かった」と言って電源を切った。颯はクリスに注目を戻した。

「すみません、先輩。俺、まだ仕事があるんで」

「そう。じゃあ、当日も頑張ってるね。ダンス部の発表は絶対に見に

来るように」

「分かってますって」

駆け行くクリスと入れ替わりに、慎と陽が揃って不機嫌な顔で廊下の奥からやって来るのが見えた。颯と荔枝は顔を見合わせて笑った。ようやく合流した二人には、颯が「ご愁傷様」とだけ伝えた。

「もう二度と校内放送の召集なんて信じねえぞ」

陽が忌々しげに吐き捨てた。

「ああ、その方がいいだろうな」

荔枝はあまり同情してなさそうな調子だった。陽に睨み付けられても、どこか楽しそうな微笑は崩さない。

「それで、何を着ることになったんだ？」

「ところで、慎、クラスの方の様子はどうなの？」

陽と慎の表情がいつきに険悪になったのを見て取って、颯が急いで聞いた。慎は無言で肩をすくめた。

荔枝が陽の機嫌を取るためにその手を取ってどこかへ連れて行った。颯は黙り込んだままの慎を、何を思っているものかと興味津々で観察していたが、結局慎の口から零れ出たのは気分を執り成すための溜息のようなものだけだった。慎はふと言った。

「ずいぶん石崎と親しくしてるようだな」

「心配しないで。けじめはついてるさ」

颯ははつきりと言い切って微笑みかけたが、慎はにこりともしなかった。颯は特に気にする様子もなくポケットのメガネをかけ直したが、途端に彼の微笑は冷たい影のある嘲笑へと変わっていった。

「親しい者に裏切られる方が、却ってショックは大きいんじゃないかな？」

彼がやがて紡いだ言葉も声音も、取り付きようがない程の冷酷さを含んでいた。

そうすることで、胸に留まり続ける一片の暗雲を吹き飛ばせるよ

うな気がして、クリスは階段を駆け上っていた。誰かが開け放った窓から吹き込む風が、加熱していく両頬を冷やす。視聴覚室に飛び込んできたクリスに、来夏は驚いたような顔をして振り返ったが、パネルに掛けられたいくつもの絵の沈黙の中では、その作者の登場が恐ろしく場違いだったせいもある。クリスは運動のせいではなく頬を赤らめた。

「あつ、悪い、別に急ぎつて訳じゃなかったんだが」

「いや、あの、俺も別に……」

クリスの言葉は尻つぼみに消えた。咳をしたとき、一瞬うつむきかけたその目で、クリスは来夏の様子をうかがった。なんだか顔色が悪いように見えるのは気のせいか。緑色の瞳も何だか今日は光が薄いし、閉じられた唇がきつく締めすぎて白くなっている。はつきりではないが、やはりそれぞれに疲労の色が読み取れた。働き過ぎもしそうだとすれば、それは一体誰のせいだろうか。

「まつ、とりあえず一回りしてみてください。一応石崎の要望どおりに並べたけど、いくつか題名がこんがらがってんのがあってさ。あと、花木先生が取り外して眺めてたのがいくつかあったし。先生がちゃんと戻してるかどうか自信がねえんだ」

クリスは頷くと、赤い顔をしたままパネルの路に迷い込み、さつさと壁の後ろに顔を隠してしまった。たちまちクリスは、自分の絵の世界へと引き込まれていった。正しく言えば自分の精神世界へと。

絵がクリスの精神であり、心である以上、絵もクリスも同一だった。二つはある一点で繋がっており、クリスは無意識のうちにその入り口を探り当てることのできたのだ。懐かしいロンドンの人ごみの中に、湖水地方にある叔父夫婦の別荘の庭に、売れない手品師が芸を繰り広げていた夕方の町に、不安と無気力にとらわれていたバスの中に、ほんの目と鼻の先にある三宿学園の中庭がかつて秋の歯にきらめいた頃に、クリスは作者の権限として、誰よりも早く、誰よりも深く、入り込むことができた。そして、ふとした瞬間に、一枚の画用紙に描きこまれた全てのものに対する愛情と、彼らがかなく

消えて滅びていく運命への嘆き、彼らの永遠を深く願う気持ち、クリスの中に泉のように湧き出てきて、心を満たすのであった。その感情を形容する言葉を、クリスはまだ知らなかった。

革靴が床を打つた一つの音で、クリスははじめて来夏が後を追ってきたことに気がついた。来夏は音を一つ鳴らしたきりで立ち止まり、放心したような、それでいて厳しい表情で、じつと一枚の絵に見入っていた。一体何を描いた絵だろうか？クリスは遠くから眺め遣ったが、画面の右半分を覆いつくす草の色がどうにか望めただけだった。クリスは先へと進み、最後の絵の前で来夏を待った。絵の順番などは最早意識していなかった。もし違っていたとしても、これで十分なはずだ。最後の絵は、クリスが様々な思いで胸をいっぱいにさせながら描いた、白のアトリエの絵であった。今はただの残骸となり、無残にも雨風に晒されたままで置かれた懐かしい小さな家。ただ思い出の中だけでも、いつかの午後のように柔らかな日の光に包まれていてくれたら。

「アトリエか」

来夏が隣に歩み寄ってきて言った。クリスは微笑んだが、まだ目はアトリエの庭をさまよっていた。

「懐かしいな。まだ一月も経ってないのに……人間、案外たやすく変化に耐えるものなんだな」

「そうだね」

クリスは頷いた。

「でも、そうじゃなきゃ到底生きていけないもん……」

突然来夏に肩を抱かれ、クリスは啞然として声を上げることもできなかった。継りつくようにクリスにもたれかかる来夏の顔が、先ほども増して蒼白なのをクリスは見た。そして、クリスは来夏の中を巡る恐怖をはつきりと感じ取ったのであった。

「関本？」

クリスはそのと呼びかけた。

「大丈夫？」

「ああ」

来夏はうめくように言った。掴まれた手が怖いほど冷たかった。

「どうしたの？」

クリスは近くにパイプ椅子があることに気がつき、そこに来夏を座らせようと少し体を動かしたが、来夏はクリスの体を離そうとはしなかった。

「関本、何があつたんだよ……？」

その時、クリスは、来夏が没頭して眺めていた絵の正体に気がついた。9歳のときにピクニックで訪れたイギリスの村の風景だ。村の名は忘れたが、のどかな田園風景の端からひろがる黒々とした森が恐ろしくて、その二つの対比がいつまでも脳に残っていたのだろう。あの絵は、温かな人々の営みのすぐ近くに深い闇があることを、光と影との繋がりを暗に示したものであつたのだ。

「人は変わるんだな」

来夏はクリスの肩の上でそう紡いだ。クリスは何も言えなかった。何かを言う資格が自分にあるとは到底思えなかった。

重たく冷たい沈黙を、二つの携帯電話による二重のバイブレーションが打ち破った。凍りついたままのクリスを置いて、来夏が先に手を動かした。来夏はボタンを数回押しして無表情で画面を見つめると、すぐに電話をポケットの中にしまいこんだ。来夏の腕がクリスを離す。彼の顔に例の疲労は見られなかった。

「……関本？」

「落合からだ。主役がいなきゃパーティーが楽しくないらしい」

来夏は悪戯っぽく笑った。

「野瀬先生にサプライズを仕掛けるらしいぜ。参加しねえ訳にいかねえだろ？」

「でも……」

「ちなみに有瀬のケーキは間もなく品切れだそうだ」

同じことが恐らくクリスにきたメールにも書いてあるのだろう。携帯電話さえ開けばすぐにでも分かる。それでもクリスは、パーティー

をしたがる人の気持ちが出来なかつたし、来夏の気持ちについてはもっと知れなかつた。人は変わるんだな　　来夏のその眩きが、脳内で皮肉っぽく響いていた。

パーティが楽しくなかつたといえは嘘だつた。ノアはクリスマスが見た中で一番頻繁に笑っており、落合はいつもに増して機嫌がよく、クラスをおおいに盛り上げた。菜月は用意された菓子を誰よりも素早く多く食べたが、これは別に愉快な出来事でもなかつた。来夏はいつもの調子に戻っていた。先ほど彼の顔に見た疲労は、幻覚だつたのではないかとクリスマスが疑つたほどだつた。来夏の合図で材料の買出しにまぎれて買つてきた花束が渡されると（なぜかこれを渡す大役はクリスマスに任されたのだが）野瀬先生はしばし笑顔を固めて言葉を失い、少し潤んだ目を花束の中につずめた。何枚か花びらが散つたが、誰も気にしようとしなかつた。明日の文化祭に向けた意気込みは、この出来事のおかげで異様なほどに高まつた。夕方になり、日が傾きはじめると、皆は清潔で華やかな小さな店内を見回し、非常に満足して帰つていった。

「そんな、いいよ！先に帰つてて！」

律儀にクリスマスを待とうとするノアを、実行委員のミーティングがどれくらいかかるか分からないからといって説得し、クリスマスは会議室へと向かつた。来夏はやはり先にいたが、その隣の席はとうに真央によつて占められており、真央は興奮しきつた様子でしきりに来夏に話しかけていた。だが、そこにきてようやく来夏の表情には青白い緊張が戻っており、口を開くことさえ厭わしいと思つているようだつた。クリスマスは少なからずショックを覚えた。確かに、来夏は今まで真央に優しい態度でのぞんだことはなかつたが、それもまあ、幼い男の子がよくやる、好きな子に対するいじわるというか何というか、そんな類のものだつた。それなのに、今の来夏ときたら、あんな冷たい言葉と態度の裏に、愛情を感じ取れるとでも本気で思つ

ているのだろうか。真央の口数が次第に減っていくのを、クリスマスは離れた席から聞いていたが、やがて二人の収まったところは、先ほどのクリスマスと来夏のような気まずい沈黙であった。

文化祭の前日になっても、2年A組のように士気を高めるとか、一致団結するとか、そういったことに興味がないらしい生徒会役員は、淡々と事務的な口調で最終確認と注意を終えた。委員会は長々とついた。一時間、二時間　カーテンで閉ざされてはいるが、冬の夜のひえびえとした暗闇は教室の中にも入り込んできており、間もなく赤と緑の二枚のジャージを着込んだ橋爪先生が暖房をフル稼働させた。だが、生温い空気は委員たちの眠気を誘う仕事を実によく頑張ってくれたので、副校長がスイッチを切って窓を開け、生徒たちはブレザーの下で凍え、橋爪先生は三枚目のジャージを羽織って着膨れする始末だった。ゴミ箱がカタカタ言いながら教室から出ていった事実には、わずかに何人かの生徒が気付いたただけだったが、恐らく校長も寒さに耐え切れなかったのだろうかとクリスマスは思った。委員会が儀式的な礼で終わると、クリスマスは人ごみの中で来夏を探したが、彼はそそくさと帰りの準備を進めて会議室を出ていた。真央だけが寂しそうに、ぽつねんと腰をおろしたままでいた。

「僕の方を向いてもくれなかった」
共に廊下を歩くとき、真央は悲しげに笑って首を振った。

「どうしちゃったんでしょう。これまでも……機嫌が悪いときだつて何度かあったけど、あんな様子じゃなかったのに。確かに最近疲れているのかなとは思ってたけど、でも……ついこの間まで何にもなかったのに、僕が何か……」

真央の目に涙がたまっていくのを見て、クリスマスはいたたまれない気持ちになった。関本に起こった変化は一体何なんだ？人は変われるのだと彼は言ったが、はたしてその意味は？どうして急に真央に対する態度が激変したのだろうか？まさか今日突発的に真央が嫌いになったとは考えにくかったが、彼に対する冷たい態度の発端としては、あの絵のことが考えられた。穏やかな人々の生活の傍に暗い森があ

る。そして、恐らく来夏の愛情の傍にも　　クリスは来夏から感じ取った恐怖を再度思い返してみた。

薄暗い廊下の奥から、クリスは昇降口の戸をくぐりぬけていく来夏の後姿を見つけた。真央は怯えたように立ち止まった。

「さあ」

クリスがすぐにその背中を押して、追いかけるように促した。真央は暗闇でも分かるほど真つ青な顔でクリスを見上げ、涙で潤んだ目にクリスの青い目を映し出した。

「でも、先輩……」

「直接話して来いよ。それしか事実を確かめる方法はないんだから。ほら、早く！」

真央はまだ戸惑っていたが、クリスが再度「さあ！」とささやくと、鹿のようにとたとたと駆けていった。後は全て天に任せるしかない。

星が夜空に散っている。月に追われるように真央は夜道を駆けていた。冷気が開いた口から入り込んできて喉を冷やす。切きつく巻いたマフラーがいやに熱く感じられた。もっと速く走らないと、来夏先輩は足が速いから。いつか後を追ったときはこんな風ではなかったはずなのに……

「先輩、待って、ください……！」

息も切れ切れに真央は叫んだ。喉に切られるような痛みが走る。来夏には無視することもできただろうが、彼は振り返った。しかし、その目は明らかに真央を疎んでいた。真央は一瞬言葉を失くした。

「先輩……僕……」

「もう俺の後は追うな」

実行委員たちが遅すぎる帰宅に急ぐ声も足音も、寮に灯る数々の灯も、二人には遠すぎた。寒さが一層身に染みる夜だった。初雪が降り注いでくる。二人の制服のブレザーに、鞆に、髪に、いつかは繫いだこともある手の皮膚の上にさえ。真央は白い息を震わせることしかできなかった。

「どうして、でも、先輩……！」

「俺はお前に何もできない。俺に期待しないでほしい。アニエスさんにそう言ってくれ」

「何言ってるんです？そんな、姉さんは……」

「もう耐えられないんだ！」

真央の肩が跳ねたのは、来夏の大声だけが原因ではなかった。もう耐えられないという、来夏の悲痛な言葉こそ、真央を慄かせた元凶であった。

「もう耐え切れない！自分の臆病さにも、無力さにも……何もかもに腹が立つ……！」

「ごめんなさい……！」

くるりと踵を返し、白い粉雪の向こうに去っていたその人の叫びに、真央はいつかの自分の声を聞いた。そして気が付いた。あの人も怖いのだと。涙がぼろぼろと零れ出てきて留めようがなかった。膝をつき、見上げた星たちはただ明るく美しく、寡黙で非情だった。自分はどうすればいい？雪の一片が真央の涙に触れて解け、頬の上の雫をひろげた。来夏先輩が恐れているものを、僕は何か知らない。例え知っていたとしても、僕のために克服してくれなんて、言えるはずがないじゃないか。ああ、やはり　星が綺麗なだけでは、誰も救われるはずがなかった。

今宵は波の上に星がさすらう。昨夜から今夜まで心の船を渡す星の波止場。そしてまだ、明日の夜の岸は見えなかった。

第二十五話 Festival Vivace・前編

一体真央はどうしただろうか？来夏は大丈夫だろうか？クリスマスとノアは早々とベッドに入ったが、隣で安らかに寝息をたてるノアを見つめながら、クリスマスは不安いっぱい夜をすごしていた。あの後、真央が引き返してくることはなかった。上手くいって二人で帰ったならよいが、それでも……クリスマスは携帯電話を開いた。真央に送ったメールの返事はまだきていなかった。

不安は次第に翌日の文化祭に関するものへ移って行った。ありとあらゆるトラブルが頭の中を次々と駆け巡って行く。配膳のミス、材料の不足、集団食中毒、テロリストによる学園占拠、などなど。最後に、菜月がテロリストに向かって振り回したフライパンがクリスの頭にあたって自分が脳震盪を起こしたところまで思い描き、クリスマスは思わず口元を緩めた。一番の心配は客が全く来ないことだと思いついたからだ。料理においては、クリスマスは全く心配していなかったが、それはノアを全面的に信頼しきっていたからだ。ノアと、その指導を受けた生徒たちであれば、客を十分に満足させる料理を作ることができる。それは恐らくクリスマスだけの確信ではなかった。

クリスマスは喉が乾いていることに気付き、ノアを起ささないようそととベッドを抜け出して、一人キッチンで水を飲んだ。台所はどこもかしこも磨き上げられている。開けてのぞいた冷蔵庫は物が少なすぎてクリスマスがびっくりしたほどだった。もちろん、台所が清潔なのは不潔なのより何百倍もいだろうが、クリスマスは何かしらの違和感を覚えて暫しそこを見回していた。だが、冷蔵庫がブーンと低い音で唸ったので、クリスマスはコップを綺麗に片付けてまたベッドに戻った。

「クリスマス様……」

ノアが呟いた。クリスマスはノアを見遣り、起こしてしまったことをすくなく詫びようとしたが、ほぼ消えかけた町の灯が、かたく閉じたノ

アの臉や一定のリズムで上下する小さな胸を、クリスの前に提示していた。

「クリス様、明日は……に……」

クリスは掛け布団を胸まで引き上げると、二つのベッドの境目におかれたノアの手を、そっと握り締めた。温かな毛布の恩恵を逃れて、小さな手は冷え切っていた。自分の夢でも見ているのだろうか。いや、寝言は夢と関係ないのだという話を、ロナルド叔父さんから聞いたことがある。それからクリスはようやく眠りに落ちたが、遠くに鐘の音を聞いたと思った瞬間、日が昇った。

「おはようございます、クリス様」

「うん、おはよう……」

食卓についたクリスの右腕は起きていて、バターをぬったトーストをきちんと口元まで運ぶ仕事をしていたが、本体は運ばれたトーストをかじったり、こくりこくりしたりを交互に繰り返していた。紅茶をパジャマのズボンにぶちまけたとき、クリスはようやく目をさました。紅茶が淹れたての熱々でなかったのはほっとしたし、口からほとばしりてた英語の悪態をノアに聞かれなかったことにも心底ほっとした。

二人はいつもより一時間も早く「渚の家」を出た。ちなみにその「いつも」というのも、朝から夕方まで文化祭の準備に忙しかったこの一週間のことであるから、二人が目覚めたのは日が昇る前、二人が出かけたのが空に清涼な青が広がりきった頃であった。学校では、落合が景気づけのつもりか校庭で花火をいくつかバチバチやり、早くも森先生に連行されていくという事件が起こっていた。しかし、クリスを含めたクラスメートたちはこの知らせに大爆笑した。

「ほんと、傑作だよ」

菜月が笑いの渦の中でぼつんと呆れたように呟いた。

皆がようやく平常どおりの呼吸を取り戻し、クリスの指示を待つ

ようになると、クリスははてきぱきと適切にクラスメートたちを配置した。ただ一つの不安だけがクリスの明るくなりかけた胸を曇らせていた。来夏がいないのだ。この教室に来た時からちらともその顔を見ていない。クリスは帰ってきた落合を捕まえると、来夏が今日学校に来ているかどうか聞いてみた。落合はちよつと驚いた顔をした。

「そりや来てるに決まってるだろ。俺たちよりずいぶん先に出てっちまったけど。実行委員の仕事じゃねえのか？」

「あー、うん、もしかしたら最終の打ち合わせに行ってるのかも……」

来夏が校内を見回る巡回係だったことを思い出して、クリスは頷いた。込み上げてくる悪い予感全部追いつめた。まさか、来夏に限って、そんなことは……

ノアに「また後で」と手を振ったクリスは、体育館へと向かった。そして、来夏を見つけた。来夏は他のクラスの委員と一緒に来賓席を作っていた。クリスが名を呼ぶと、来夏は顔を上げたが、それは一瞬の出来事で、すぐ作業のために顔をうつむけてしまった。クリスは呆然とした。自分まで避けられているのか？

それでもなお彼の元へ近づくと、来夏は何の釈明もしないまま、パイプ椅子をクリスに手渡した。二人は黙々と仕事をした。一分、二分、三分。ざわめき色めく体育館の中で、たった二人だけが口をきいていなかった。来夏の目の下には薄紫のくまが見て取れた。

「ねえ、関本……」

ようやく言葉に出来た呼びかけでさえ、別の人物の登場によって遮られてしまった。真央だった。来夏もひどいといえばひどいが、ただ塞ぎこんでいるだけといえばそうとも見える。だが、真央の表情には、この世の中で最低最悪の出来事が起こったということを実に語っており、事情をよく分かっている友人たちを啞然とさせていた。クリスはさっと来夏の横顔をうかがった。固まった横顔に何の変化も見られない。真央は「おはようございます」と言っ

リスの隣に並んだ。こんなに苦しい流れ作業はなかった。来夏がクリスに椅子を手渡し、クリスが真央に椅子を渡す。「秋元君、大丈夫？」

仕事が終わったのを見計らって、クリスは真央を舞台の下手側に引き込んだ。真央は途端に真つ赤に泣きはらした目からぼろぼろと涙を零し始めた。

「秋元君……？」

真央はクリスの差し出したハンカチでそっと涙を押し拭った。それから途切れるようにか細い声で、絞り出すようにして、昨日の出来事を語り始めた。

「……先輩が、もう俺の後は追うなって……」

クリスは再び怒りを覚えたが、一方的に来夏を責める訳にもいかないことを知っていた。来夏の中に何かがあったのだ。その「何か」について、具体的なことをクリスは知らなかったが、稚拙な推理ならすることができた。あの絵を見たときの彼の態度から、真央へぶつけたいくつもの心ない、しかし悲痛な言葉から。来夏は真央への愛に恐怖を見出し、それに抗えない自分に絶望しているのだ。自分には真央を守ったり愛したりする力がないと悟った。だから、何も言わなければ寄り添ってくる真央を無理やり突き放した。問題は、彼がその恐怖を打ち明けてくれない限り、第三者の手にはとても負えないということだ。

「先輩、僕、どうすればいいんでしょうか……？」

真央が打ち震えながら尋ねた。クリスは真央をそっと慰めてやりたかったが、口から飛び出てきたのは、まっすぐで淀みのない詰問の言葉だった。

「君はどうしたいの？」

真央の潤んだ目がますます大きく開いて揺れた。

「関本と仲直りしたいんだったら、それ相応の覚悟が必要だと思つよ。あのね、真央君、関本は多分、なんていうか、怖がってるんだと思つ……」

「何にですか？一体何にです？」

真央は咳き込むように小さく叫んだ。クリスはそこで初めて真央の肩に手をまわした。しかし、口調は相変わらず厳しかった。

「それは君が自分で探すことだ。関本の心は誰も読めないんだから。君自身が答えを見つけ、解決しないと。関本は君のことを嫌いになつてなんかないよ。君のことを……そう、嫌いになつてないからこそ、あんなに苦しんで怖がつてるんだ。分かる？」

「分かりませんよ」

真央は駄々をこねる子どものように首を横に振った。

「分かりません。だって、何で……？僕の何を先輩は怖がつてるんです？先輩が怖がるようなものなんて僕はなんにも持つてない。僕は弱いし、何一つ来夏先輩に勝てるどころなんてないのに。それに、大体僕のことを嫌つてないなら、何であんな態度をとつたんです？僕には何もできません……でも、僕は、ううん、それでも、できない……」

分かつてるじゃないか。クリスは苦い思いで密かに呟いた。クリスも今はつきりと分かった。来夏は真央が壊れてしまうことを恐れている……クリスはもう一度真央の肩に手を置きなおし、心を鬼にして口を開いた。

「いい？今はつきりここで決めないと。苦しい思いをしても関本の後を追うの？それとも諦めるの？」

真央の答えは聞き取れなかった。その時、スピーカーからキーンという甲高い音が響き、副校長がマイクのテストを始めたからだ。真央は噁り泣きながら走り去っていった。クリスは肩を落とす気力さえもなかったが、自分にできる精一杯はやつとことを知っていた。あとは来夏だ。

しかし、下手から会場に出てみると、もう会場の電気は消され、自由自在に散歩する五つのスポットの光だけがぞくぞくと集まってくる生徒たちの影を映し出していた。たった一人の顔を探し出すなんてとても無理だった。

「紳士淑女もしくはそれ以外の皆様、まもなく開会式が始まりますので早急にお集まりくださるようお願いいたします」
荔枝の高飛車な司会を、クリスはぼんやりと聞いていた。

「紳士淑女もしくはそれ以外の皆さん、こんなに心の浮き立つ日が一年の中に何回あることか数えてみようではありませんか？」

風間校長はこの呼びかけを大変気に入ったらしく、さっそく壇上で用いてスピーチを始めた。開会式は最高の盛り上がりだった。校長の一言一言にすら、生徒たちは熱狂し、スピーチの後には口笛と拍手喝采で体育館が壊れるかと思つたほどだ。冷え切つたクリスも段々その温度に懐柔されつつあつた。来夏がいつの間にか素早く隣に滑り込んできたにも関わらず。

来夏があぐらをかいていたクリスの膝を突いた。

「石崎、少し外に出られるか？」

膝に手が触れたのは偶然だろうとにらんでいたクリスは、来夏のさやきに少し驚いた。

「えっ、あっ、うん……」

二人は興奮しまくつたクラスメイトたちの間をくぐり、共に人ごみの外へ出た。しかし、来夏の言つた「外」はその場所を指していた訳ではないらしい。あまり気にも留められずに、二人は体育館の外へ出た。クリスは新鮮な冷たい空気を胸いっぱい吸い込んだ。クリスは肺から緊張を覚えた。

「それで、えーと……」

「あいつに希望を持たさないでくれ」

来夏が目を合わせずに呟いた。真央と同じ緑色の目は、虚ろな光をともしたまま、窓から望める木々に注がれていた。しかし、その声はしっかりとっていた。

「真央を励ましたりしないでくれ　お前のことだから、さつきもきつとそうしたんだらうけど、俺はあいつの傍にいる資格なんてない。だから、もうあいつと付き合うつもりはない。俺はもう、あ

つの顔なんて見たくないんだ。俺はあいつを諦めないといけない……」

「言つと思つたよ、そんなことを」

英語が出た。クリスは先ほど真央に向けた非情さで、今度は来夏に對していた。来夏が驚いたようにクリスを見つめた。クリスはその皮肉っぽい調子で外国語を続けることにした。

「資格がないとか、諦めないといけないとか、責任感の強い君がいそつなことだ……」

「からかうのはやめてくれ」

来夏も英語で答えた。青ざめた頬に微かに朱色がのぼった。

「冗談で言ってる訳じゃないことぐらい分かつてるだろ？俺は本気なんだ。あいつを守るためにはこれしかない。あいつの傍には、もつとふさわしい奴がいるべきだ」

「ふーん。それで、ふさわしい奴って？」

「あいつが……そう、もし、あいつが……声を失くした時にも、傍で見守っていられるような奴だ」

来夏はかなりの覚悟を決めて、この言葉を吐き出したらしかった。逸らしていた目に挑むような色を添えて、まっすぐとクリスの顔を見つめた。ああ、そういうことが。クリスの中で合点がいった。同時にクリスは、来夏への一切の同情が胸の中から掻き消えて、青い怒りの炎が立ち上るのを感じた。

「そうか！」

クリスは怒鳴った。

「分かったよ！関本は自分が傷つきたくないだけなんだ！秋元君が壊れるのを怖がってるんじゃない。秋元君を見て自分が傷つくのが怖いだけなんだ！」

「何度も言わせるな、石崎！」

来夏も応酬した。今や彼の顔は真っ赤だった。

「俺は秋元を傷つけないんだ！自分のことなんて、俺は……！」
「秋元を傷つけない？じゃあ、冷たい態度で彼を泣かせたのは

なんだつたのさ?!」

「あれは必要な犠牲だ! あいつがもつと傷つかないためには必要だった!」

「そんなこと、君に決める資格こそないさ!」

クリスの声の大きさに、ついに橋爪先生が何事かと飛び出してきた。誰よりも長い付き合いの友人として、同じイギリス人と日本人のハーフの少年として、今まで信頼しあい、助け合っていた二人が、今にも相手に殴りかかりそうな形相で向かい合っている姿に、先生はまごついてた。先生がおどおどと言った。

「君たち、一体何を……」

「いいか? よく聞け! 秋元が君を選んだ! 秋元が一番必要としてるのは、君だ! 他のどんなに勇氣と包容力に富む人でもない!」

「お前にあいつの何が分かる?!」

「そつちこそ、何にも分かってないじゃないか?!」

「俺は……!」

「少しは冷静になって考えてみる、この臆病者!」

「何だと?!」

「やめなさい!」

英語が専門でない橋爪先生は、クリスと来夏が何を話しているかはさっぱり分からなかったはずだが、来夏の腕が素早く振り上げられたのにはすぐに気が付き、その瘦身からは想像もできないほどの力で来夏を押さえつけた。二人ははっとした。

「一体何のつもりだ?! こんな大切なときに! 勝手に開会式を抜け出したりして。早く体育館に戻りなさい!」

さすがのクリスと来夏も、橋爪先生の剣幕には敵わず、呆気にとられたまま、催眠術にでもかかったように館内へと戻っていった。ようやく我を取り戻した頃、二人は並んで両膝を腕で縛り付けて座りながら、ぴりぴりとした緊張した空気を共有していた。だが、クリスは、前をまっすぐ見つめる来夏の頬をきらめきが一筋伝っていくのはつきりと見た。来夏が呟いた。

「頼む、もう見逃してくれ……」

かくして大波乱のうちに文化祭は幕を開けたのであるが、クリスと来夏の間には、鉛のような沈黙が後から後から追いかけてきて、何かの拍子にどんと居座るのであった。クリスはノアと一緒に教室に戻った。朝の教室は、廊下から照りこむ光に明るく照らされ、背後になるジャズが済んだ冬の空気に溶け合って、何とも素敵な喫茶室へと大変身しているのであった。何もなければ素直に喜べたに違いないのに。クリスは来夏を恨まずにはいらなかった。

ノアが昨日のうちに冷やしておいたケーキを取り出し、綺麗に八等分に切り分けて、皿に盛っていた。その隣で、料理班の生徒たちが飲み物を作ったり、ケーキの隣にさくらんぼやチョコレートソースを添えたりしている。一般客の入場も始まり、すでに階下は騒がしくなりつつあった。クリスは最初の客がくるのを待ちながら、椅子に腰をおろしていた。ノアが頑張って指揮をとっている姿にも、いつもなら励ましの言葉を送れるはずだった。だが、来夏の影がノアを見守る視線を遮っていた。今頃、校内を巡回しながら、憂鬱に浸っているだろう彼。大喧嘩した後でも、来夏はまだ親友だった。クリスは手招きで落合を呼び寄せた。落合はいかにも本物のカフエテリアの従業員にありそうな、袖の長い白のシャツに、黒いズボンを着込んでおり、本人も自負するとおりに、なかなかいけていた。クリスは身を屈めた落合に言った。

「俺、ちよつと実行委員の仕事に行ってくる。仕事をいくつか忘れてたんだ」

落合は不審そうな目をメガネ越しに投げかけたが、すぐに笑顔で頷いた。

「分かった。頑張れよ、エーリアル。こっちは俺がしっかりやつくからさ。あつ、さっそくお客様だ」

「うん、ありがと……」

「うん、ありがと」が落合に聞こえていたかは分からない。落合は中学生らしいシャイな女子たちを、白い歯と甘く丁寧な言葉を用いて相手をするのに忙しかったからだ。クリスは吹き出しそうになるのをこらえながら、廊下を走り出した。菜月の言うとおり、ほんと傑作だ。

一つ下の階の廊下は、人に満ち溢れていた。この熱気が四階まであがってくるのも時間の問題だ。明音がリスの気ぐるみを着て、クラス劇の呼び込みをしているのをクリスは見かけた（明音と分かったのは、たまたま傍を通りかかった慎にすばやくカメラを向け、叩きのめされたからだ）。最近落合と一緒にいるところをよく見るようになっていた、大河内ともすれ違った。大河内が何やら急いで階段をのぼっていくのを確認して、クリスは落合のために止めてやるべきだったかどうが一瞬ためらったが、結局落合にはいい薬になるような気がしたので放っておくことにした。

花木先生は美術室にいた。扉一枚隔てた外はお祭り騒ぎだというのに、この教室だけは異様なほど静かだった。花木先生は楽しそうに「ルージユの伝言」を鼻歌で歌いながら、妖精のようなものの絵を眺めていた。クリスに気付くと、花木先生は嬉しそうに声をあげた。

「おつ、石崎。ちょうどいいところに来たな。ほれ、見てみる、この絵は近代芸術の傑作……」

「先生、お願いがあるんです」

クリスは花木先生の言葉を遮って言った。

「美術室をしばらく貸していただけますか？俺、その、どうしても個展に飾りたい絵がもう一つあって……」

花木先生はぎよろつとした目でクリスを上から下まで眺め回した

当然、絵の鑑賞時にはサングラスを外していたので、それから相変わらず機嫌がよさそうに頷いて、もみ手をした。

「おお、構わないぞ。好きなように使え。じゃあ、俺は邪魔しないように、綿菓子でも食いにいって来るとするか」

「ありがとうございます」

花木先生は歌を口ずさみながら部屋を出て行った。「しかつてもらうわ、マイダーリン……」そこまでがクリスにも聞こえた。扉が閉まるなり、クリスは入り口左手の抽斗に駆け寄り、授業用のスケッチブックと絵の具を取り出した。一瞬クリスのことが頭を横切った。ノアは大丈夫だろうか？何も問題は起こらないだろうか？だが、クリスはクラスメートたちを信用することにして、スケッチブックのページをめくり出した。大丈夫だ。今は、ただ、自分のやるべきことに集中しよう。そして、仕事が終わったら綿菓子でも買いに行こう。そうと決まれば、売り切れないうちに仕事を終わらせなければならぬ。

第二十五話 Festival Vivace・後編

「応援する必要もないと君は言うだろうな」

「まさか。オレは人の好意は喜んで受け入れる主義だぜ」

「あまり受け入れられすぎると私が困るのだが……」

「妬いてんの？」

「そうだな。陽が観客席にいる女子の半分の好意でも受け入れれば、妬くかもしれないな」

「今日は存外素直だな。つまんねえの」

「本番前につまらないこと言い合ってもしょうがないだろう？」

荔枝は肩をすくめて言い放つと、ソファの上に腰をおろし、撥ばかりをくるくると両手でもてあそぶ陽の肩に、後ろからそつと手を置いた。クリスと真央と来夏の一騒動がある一時間前、登校する前の二人の遣り取りだ。陽の膝の上では、白い雄猫のシャネルが満足そうに丸くなっている。荔枝は陽の小さく結んだ髪を解き、意外にも滑らかな黒髪を手櫛で何度か梳いた。まさか荔枝には敵わないが、男にしては十分長すぎる髪だ。本人が気に入っているらしいので、切れとも言つつもりはないが。しかし、一体いつ頃から彼は髪を伸ばし始めたのだっけ？高校の入学式で隣を見ながらふと、長くなっただなと感じた記憶はあるのだが。

「また長くなつたな」

両手を駆使して綺麗に髪を一つにまとめながら、荔枝は呟いた。

「ん？そっつい最近忙しかったしな」

「そろそろ切るつもりなのか？」

「まっ、これ以上長くても邪魔なだけだしな」

カモメが一羽、窓の外に止まったのを見咎めて、シャネルがひらりと身を起こした。ビー玉のような緑色の目が爛々と輝くのを、陽がぼんぼんと叩いていさめる。12月の朝早くから窓を開けてやる気は到底沸かなかつた。シャネルはびよんと陽の膝を飛び降り、ガラ

又越しに何食わぬ顔をしているカモメをじつと睨んだが、結局何もできないことを悟ると、また陽の上に戻って体を横たえた。

「ほんと、シャネルってお前に似てるよな」

「私に？」

荔枝は怪訝そうな顔してみせた。先ほどの一連の流れの間に、陽の髪はいつも通りに束ねられていた。

「そつ。プライド高くて我儘で温室育ちなところとか。勝手にどこか行ったくせにまた勝手に戻ってくるどころとか」

「少なくとも最後の一つは、むしろ君に当てはまると思うが……」
荔枝は陽の隣に腰をおろしながら抗議した。陽の手が荔枝の髪に触れ、項を晒すように頭の低い位置で結い上げた。荒れない皮膚は確かに猫と同じ白さを晒している。そこに唇が落とされるのを待って、荔枝は陽の手をそつと振り払った。長い髪がベールのように陽の頭を覆った。

「そろそろ行くか？」

荔枝が尋ねた。陽も猫も、放っておけばずっとそのままの体勢でいそつな気がしたので。

「……君はリハーサルがあるんじゃないかなかったのか？」

「まあ、そんな気もしないでねえけど」

陽がどこか物足りなげな顔をしているのを、荔枝も「そんな気がしないでもない」でやり過ごした。二人の賢い愛猫は、主人が大理石の玄関で靴を履くのみで見守っていたが、外の冷気を感じた途端、「にゃあ」と鳴いて温かなリビングの方へ戻ってしまった。

「温室育ち……」

荔枝と陽は顔を見合わせもせず笑った。身を切るような寒さの中で、繫いだ手だけが春風の中にいた。

朝一番の公演は目が回るほど忙しい。開会式の終わりと同時に衣装と一緒に更衣室に駆け込み、自分でも何をしているのかよく分か

らないほどの速さで着替え（おかげでＴシャツの前後ろを逆さまに着ている部員ばかりか、ズボンとＴシャツを間違えた者さえ何人が現れた）、ちよつとでも無駄口を叩くものがいれば柄にもなく怒鳴りつけて、リハーサルへと向かわなくてはならない。颯は廊下を走りながら、早くも汗が肌を湿らすのを感じていた。こんなにバタバタしなければならぬのも、実行委員と颯を抜かした生徒会役員たちのせいである。ダンス部の集客力に目をつけて、人の少ない朝一番の公演を押し付けたのだ。これはほぼ毎年のものであったが、颯は自分の代でこそ何とかして部員たちの負担を減らそうと、慎に陽に荔枝に取り計らつてみた。が、この点だけは、いつしか魔のトライアングル地帯とさえ評された三人も、なぜかがつちりと一致団結して、颯の頼みを頑として聞き入れないのであった。

颯は音楽を止めてリハーサル用にとつた小さな一室を見渡した。壁一面を覆つた鏡を前に、部員たちはそれぞれ、不安な箇所を練習してみた。体のまだ温まっていなるところを動かしたりしていた。これで文化祭最後の公演になるのだ。実感の沸かない言葉だけが胸に浮かんできた。もう二度と学園の体育館で踊ることはない。そして、踊るその姿を菜月に見てもらつても……颯は少し苦笑した。菜月ならこれからもダンスを見せる機会はずっとあるはずだ。あくまでも、ここで見てもらう場合の話であつて。本番前に立派な演説をつてるほど颯には余裕がなかった。あとは皆のやる気に任せることにしよう。颯はコンタクトを入れた目を数回瞬かせた。それから、ふと左指に張り付いていた水晶の指輪に気付き、丁寧にメガネケースの中にしまいこんだ。踊っているときだけは、何にも縛られない自分でいたかった。

「さつ、そろそろ行くよ」

菜月は鉛筆を啜えながら、颯よりも汗を流し、周囲の興奮やざわめきにはまるで無関心なように、観客席の最前列に腰をおろしていた。隣の二人連れの少女たちがよほど気になるようにしよつちゆう

自分の方を振り見ていたが、菜月は愛想にも微笑む気になれなかった。そもそもそんなものが彼の中にあるのかさえ怪しいが。

胃をしめつけられるような緊張を覚えるのは毎年のことだ。颯がちょうど思っていることを、この文化祭の日だけはまるで自分のことのように感じられる。もしかして、菜月がただそう思い込んでいただけで、颯はまるで平然としているのかもしれない。それでもよかった。だとしたら、自分が颯の身代わりになっているというだけのことだ。

颯の公演がこれで最後だということを、菜月は痛いほど頭の中で繰り返していた。もちろん、颯のダンスを見る機会がこれで最後だとは思わない。ずっと一緒にいると約束したのだから、例えばこの校舎を去ろうとも、菜月には必ず颯のダンスを見る機会があるだろう。それでもどうしても切ない気持ちを感じられないのは、颯が自分より先に成長していつてしまう恐怖があるからか。菜の花の黄色が消えていくのを、唇をかみしめて見ていたあの頃の大統領で、今も自分は颯の晴れ姿を待っている。

観客席の明かりが消え、隣の少女たちがぱつと黙り込んだ。菜月は期待と恐れのコモった目で、そつと空っぽの舞台を見上げた。その時、稲妻が閃くように突然、舞台が明るく映し出され、音楽が大音量で鳴り始めた。観客が言葉にならない声をあげた。

颯は最初に舞台に乗り出してきた。正直、颯が最初だろうが最後だろうが、菜月にはあまり関係なかったが。どうせ彼しか見ていなかったのだから。菜月は手拍子にも声援にも参加せず、何か難しいものを一目で覚えようとするかのような敵かな思ひさえ抱いて、颯の一挙一動を見守っていた。動くものをよく見慣れた菜月の目には、颯のどんなに細かい動きもよく見えた。颯の動きは相変わらず完璧だった。結局、何も変わってはいないのだ。「神社の子がダンスなんて変なの」と言ったあの日から。ダンスをするときの颯の顔はいつも輝いている。その時だけは嘘はない。そして、その嘘のない顔が、一瞬だけ菜月に向けられてちよつと笑った。菜月は胸の中が熱

いもので満たされていくのを感じた。

「颯！」

拍手をしすぎた手がまだじんじんと痛む。更衣室から出来た背中に菜月は素早く呼びかけた。声もかすれていた。颯はもうメガネをかけていたが、まだ薬指に指輪をはめてはいなかった。颯が笑って聞いた。

「やあ、ナツ。どうだった？僕の高校時代最後の公演は？」

「最後とは限らないよ。留年って場合もあるしね」

菜月はそう言って、満面の笑顔で浮かべた。颯が少し驚いたのがまた嬉しかった。

「んー、でもね、とりあえず……今までで一番よかったと思う！」

「全く大繁盛にも程があるぜ」

教室の前にずらりと並んだ人の列を眺めながら、落合は冷や汗すらかいて呟いた。

「一体全部入るのに何時間かかるんだか……」

その時、桃真は人ごみの中に、ちょうど階段をのぼってくる大河内の顔を見出した。実を言うとこれで三回目なのだが、一度として落合は大河内の相手をできずにいた。接客ではたばたしていたせいである。しかし、今はちょうど準備時間を経て営業を再開したところであり、席につく客たちもようやくフオークを持ち始めたところここで、落合の仕事は当然（といてもせいぜい五分か十分程度の話だが）ないように思われた。落合が手を振ると、大河内も落合に気付いた。

「よう。元気か？クラスの方はどうだ？」

「ああ、おかげさまで繁盛してる。こちらにはとても及びそうにもないがな」

大河内はそう言って微笑んだが、その笑い方は何となく、咎めるところがあるという風だった。落合はすぐさまその色に気付いた。

「どうかしたか？」

「いや、なんでもない。ただ……いや、関本はいないか？」

「ライ？あいつならずつと実行委員の仕事で出かけてるぜ」

「そうか……なら、構わない」

二人の間に沈黙が走った。全くもって二人の間のみだった。他の人々は相変わらず騒がしく、楽しそうで、何も知らなかった。子どもが廊下を駆けまわり、大人がそれを叱っている。

「あー、あいつの携帯にかけてみようか？」

落合が申し出ても、大河内は何も言わない。何か言葉を探しているようだった。「うん」とか「いや」とか、ただ会話を繋ぐための言葉ではない。きっと、落合との絆を示すような言葉だった。

「そういえば、君の絵を見た」

「俺の？」

大河内が思いついたように言うと、落合は驚いたような顔をした。大河内は小さく頷き、なぜか赤面してみせた。

「ああ、美術部で絵を飾っていたらどう？」

「あつ、そういやな。まあ、でも、展示なら全部石崎の個展の方に持っていかれそうだけど」

「そんなことは……ない」

再び沈黙が訪れた。今度こそ、二人は完全に話題を失った。固まりきった二人を動かしたのは十二時を知らせる鐘の音だった。大河内は「じゃあ」と言って行こうとし、そして落合はそれを引き止めた。不思議そうに見上げる大河内の黒曜石のような真っ直ぐな目に、落合はおおずとであったが悪戯っぽい笑みを投げかけた。

「おいおい、ここまで来といて手ぶらで帰るって訳にはいかねえだろ？」

「だが……」

大河内が込み合った店内を見渡して躊躇するように口ごもる。落合は取ったその手を引っ張って教室の隅に除けるように置かれていた椅子に座らせ、テーブルとして教室の机を持ってくると、俊敏なウ

エイターの動きでメニューを差し出した。嘩然としている大河内に、落合は、他の客の元へと急いで駆け寄りながらも急いで付け足した。「あっ、もちろん俺の奢りだから。特別招待席な。何でも選べよ！」大河内の胸を締めていた不安は、一時的ではあったが、この少年によって取り去られてしまった。まるで手品のように。

例え「やめろ」と言われたって、一歩ごとのスキップと、緩む口元と、お気に入りの鼻歌だけはどうしてもやめられない。前を歩く人はいらいらしている。歩調で分かる。自分を置いていこうとして、少ずつ早足になっているからだ。

「慎様、早いつす!」

「そのふざけた歩き方をどうにかしたら追いつけるようになるんじゃないのか?」

「そんなことないつすよ。慎様が早いだけで……」

「ご機嫌取りはいいからさっさと歩け。それができないなら付いてくるな、バカ」

「バカ……バカって……」

追いかけてこでもするように。次第に早くなっていく二人の足音は、一つ下の階の喧騒に紛れることなく、ここだけ静かな最上階の廊下によく響く。

午後一時。クラス劇の宣言という午前の仕事が終わわり、一息つこうと思っているところを、偶然捕まった。朝に飛びついた償いをする、とのことだった。もちろん、明音は大喜びで応じ、食べかけのハンバーガーも丸呑みして、慎の後をついてきたというわけだ。午後の仕事といえば、クラスの劇の出番があるが、どنگりをヘディングしながら舞台を通り抜けるだけのリス役であるから、リハーサルが全く必要ないどころか、正直本番にいなくてもあまり支障はないのであった。

「慎様、俺が手伝うのって何の仕事つすか?」

明音は早くも立ち直って尋ねた。スキップはおさまっていたが、顔は相変わらず緩みっぱなしだった。

「力仕事だ。生徒会室のダンボールをゴミ捨て場まで運んでもらう」「ダンボール?」

明音は空のダンボールを想像していたに違いない。もしかしたら、ご丁寧にもしちんと置かれた状態まで期待したかもしれない。慎が生徒会室の鍵を開け、部屋の隅に詰まれた重そうなくつもの箱の山を指したとき、明音の顔は引きつるところか、今日の空と同じくらい真っ青になった。泣きぼくろでさえ、一瞬色素が薄れたように見えた。

「えっ、えつと、これって……」

「この間片付けたときにでた不要物だ。文化祭後に片付けるって手もあったが、今片付けたほうが手っ取り早い。全部で十五個ある。平均すると大体一つ十キ口程度だ。客にぶつからないよう北階段を使っ行ってよ」

「……これ、全部、俺一人で?」

慎はその時初めて笑った。ただし、明音には嬉しくない不敵で高圧的な笑みであった。

「俺がこんなことをやると思ってるのか?」

何か唸り声のようなものをあげながら、ダンボールを引きずっていく明音を見送り、慎は天井に向けてぐつと腕を伸ばした。窓の外を見遣れば、木々と草の緑、花の虹色、いたるところを人々が埋め尽くしている。こんなに騒がしい日は文化祭を置いて他にない。そして、自分にとってはこれが最後の「騒がしい日」となるのだろう。

慎は窓辺に椅子を引き寄せて座った。水晶の指輪が、真昼の日を浴びてきらきらと反射している。憎いのかどうかは分からない。この水晶のおかげで、自分は今の地位を得た。権力を得た。しかし、同時にどれだけのものを背負わされてきたか。義務、裏切り、嘘……

何か重いものと人が階段から転げ落ちていくような音と、断末魔の悲鳴が聞こえたが、慎はあまり気にしないことにした。慎は溜息

をついた。まあ、いい。あまり小難しいことは考えないことにしよう。水晶とて、文化祭中は行動を起こさないと言っていた。それが自分たちへの気遣いだとは到底思えなかったが。

慎はコーヒーを淹れる準備を始めた。さて、あいつは一体どれくらい砂糖を必要としていたっけ？

「出来た！」

叫んだのが最初か、椅子から飛び降りたのが最初か。絵の具が完壁に乾いていることを確認すると、クリスはすぐさま描き終わった絵を小脇に抱え、絵の具がパステルの上で乾くのもそのままに、美術室を飛び出した。しかし、夢中で廊下を駆け抜けるという訳にはいかなかった。それをするにはあまりにも人が多すぎたので。途中で幾人かに声をかけられた気がしたが、クリスは適当に手を振って対応しただけだった。一刻も早く出来上がった絵を飾りたかった。これで、親友が救われるのならば。

「あら、坊ちゃん、順番よ……」

視聴覚室から続く列の横を抜けようとすると、優しそうな老婦人がささやき、そして口をつぐんだ。クリスの金髪は並んでいる客たちの目をよくひいた。何人かがひそひそと興奮したように話し始めたのを、クリスは遠い呼び込みの声や歓声にまじって聞いた気がした。しかし、こうしたものはまるでクリスに対して意味を持たなかった。クリスは視聴覚室に素早く滑り込み、啞然とする客たちの目の前で堂々と絵をかけ換えた。来夏が恐れたあの田舎町の絵から、たった今完成したばかりの新しい絵へと。クリスは少し満足そうに微笑んだ後は、何か客から訊かれる前にと急いでその場を離れた。

いい加減教室の様子を見に行かないといけない。客は来ているだろうか。ノアは上手くやっているだろうか。それに、他のクラスメートたちも……期待と不安に胸を膨らませながら階段を駆け上る途中、クリスは踊り場で危うく何者かと正面衝突しそうになった。二

人は驚いて飛び上がり、クリスは自分の声にまた驚いて数段階階段を滑り落ちた。相手の生徒も膝に手をあて、ごほごほと咽こんでいた。

「落合！」

クリスは心臓を押さえながら言った。

「びつくりした……シフトは終わったの？」

「それが、エーリアル、ちよつとした事件が起こったところですよ」
荒く息を吐く落合の顔には、めつたに見られない心配の色が見えた。クリスは嫌な予感がした。昨夜思い描いていた不安が、テロリストの学校占拠も含めて鮮やかにクリスの脳に蘇った。一体何が起きたんだ？

「その、客が予想外に多すぎて、急遽また料理を作らなきゃいけなくなっただけだ。まあ、それはいい。幸い調理室も借りられたから。それに、店の方もなんとかいつてる。ただ、有瀬の奴が突然消えちまって……」

「有瀬が消えた？」

クリスは困惑を以って呟いた。あまりノアに友好的でないはずの落合は、こくと頷いてこう言った。

「別に店に影響があるわけじゃねえけど、調理室に入った瞬間、血相変えて飛び出してたからやっぱり心配だよ。エーリアル、お前有瀬のこと探してこられるか？俺、実はまだシフト終わってねえんだ」

二人はその場で別れた。クリスは「任せて」とは言ったものの、すっかり混乱していた。ノアがどうしてしまったのか、全く見当もつかない。落合はノアが逃げ出したのは、「調理室に入った瞬間」と言った。調理室に何かあったと考えるのが適当だろう。もしかして理事長がその場にいたということは？しかし、ノアに養父を恐れる理由があるのだろうか。

調理室に入った瞬間、クリスには全てが分かった。ノアが血相変えて飛び出していったのと、寸分違わないタイミングで、クリスは全てを悟った。一瞬のうちに、クリスの目の前を様々なものが通り

過ぎていった。不自然な我が家のキッチン、何度か違和感を覚えたノアの言葉、最近の食事、味噌汁の味、そして、白のアトリエ
「有瀬！」

調理室で焼きそばを焼いていた一年生が振り向くような大声をあげ、クリスはくるりと踵を返した。行き先は分からない。でも、とにかく、足の赴く場所へ。ノアが恐怖に小さく凍えていそうな場所へ。

鏡で見た臉は惨めなほどに腫れていた。こんな顔でミュージカルの主役を務めていたのかと思うと、とんでもなく申し訳ない気持ちで沸いて来る。閉幕時の拍手喝采がなければ、今頃首を吊っているところだ。衣装を着替え、真央は里見先生に渡されたばかりの保冷剤を、赤くなった目にそっと押し当てた。せめて、一時間後に待つ単独での歌の発表までには治したい。保冷剤に巻いたクリーム色のハンカチは、アニエスに借りたものだ。真央の顔を見た時の彼女の驚きぶりといったらなかった。最近の真央は精神的にもすこぶる調子がよく、アニエスも「いつでも国に帰れるわ」と冗談を言っていたのに。従姉のいつになく艶めいた肌の上に不安の翳りが現れるのを、真央は確かに見た。そして心苦しく思った。上手くいつていたのは自分だけではなかった。

「来夏……」

せんぱいという言葉は喉元で空回りした。もう一度咳こうとしてみた。かつては恐れていた名前を、何度も何度も。それでも名前はついに声にはならなくて、代わりに少しだけ涙が零れた。乾ききった瞳からやつとしぼり出した一滴であった。

関本は多分怖がってるんだと思う。クリスの言葉が蘇った。返した言葉は今も尚正しいままで。一体何を？来夏が怖がらなければならぬものなんて、真央にはまるで思いつかなかった。それよりも、来夏が真央に嫌気がさしたのだという説のほうが、ずっと信じやすく、現実的であった。嫌気がさした原因ならいくつか考えられたからだ。先輩は気付いたのかもしれない。自分が先輩に恋心を寄せてることに……胸に鋭い痛みが走った。

「マオ？」

防音加工が施された重たい音楽室の扉が開き、アニエスが小鳥のように慎ましい頭をのぞかせた。

「マオ、大丈夫？」

真央は微笑んで見せた。保冷剤が臉に重かった。アニエスは考え深げな顔をしながら部屋に入ってきた。もう本番用の衣装に着替えている。冬にはずいぶん涼しげに見える薄い紺色のドレスで、開いた胸元に白い薔薇のコサージュを咲かせている。今は黒いコートを上から羽織っていた。

「姉さん、きれいだね」

「ありがとう」

アニエスは笑いもせずと言った。

「マオ、少し来てほしいわ。私について来て」

「でも、リハーサルは？」

「後でいいわ。早く」

従姉がいつになく振り下ろすように命令するのにはやや驚いて、真央はピアノの椅子から飛び降りた。アニエスは真央を待たずにさつさと踵を返しており、支える細い腕をなくした扉が、真央の目の前でぱたんと音とたてて閉まった。

冷やかな沈黙が二人の肺を蝕んでいた。かつて二人がこうした呼吸をしていたことは一度もなかった。文化祭の色と音が届かない静かな林檎林の真ん中で、来夏と大河内は黙り込んだまま向き合っていた。

騒がしい休日のきらびやかな真昼の陽光が、二人の皮膚に枯れた小枝の影絵を投げかけていた。降り積もった葉の表面が微かに湿っているのを、靴の裏で感じる。風はない。小鳥が楽しげにさえずっている。それさえもわずらわしく感じるのは、きつと大河内の目をまっすぐ見返せないからである。苛立ちと焦燥と臆病と自己嫌悪が、来夏の胸でもどかしげに身を振っていた。先ほどから口元に自然に浮かんでくる、自己嫌悪を駆り立てるだけの笑いなくしては、口を開くことなんてとてできそうにない。

「何か用か？」

大河内の目がきらりと光った。軽蔑と静かな怒りに満ちた黒い槍を、来夏は蒼白な頬の上で受け止めた。

「……自分のしたことが分かっているのか？」

「ああ、分かっているさ」

来夏は林檎の幹を蹴った。途端に笑いも弾けとんだ。こんな風な説教が始まることはとくに分かっていたし、もううんざりだった。

今朝の石崎との怒鳴り合いで十分だ。来夏は吐き出すように言った。「分かっているし、俺だって好きでこんなことをした訳じゃない。確かに最良の方法ではなかった。だが、もう弁解もしない。言い訳がましいから」

「なぜ、秋元を拒む？」

「だから何も言わない。悪いが説教は間に合ってる」

「いや、間に合ってなんかいない」

大河内を睨みつけたとき、初めて来夏は正面から彼の顔を見た。いつもなら好ましい大河内の乱れぬ口調が、今となっては憎らしかった。何も知らなくせして、なぜ断言ができるんだ。叫び出したいのを喉元で必死にこらえ、来夏は友人から顔を背けた。ここからそう離れない場所を、子どもたちが明るい声をたてながら横切っていく。

「なんで俺に構うんだ？」

来夏は自分の声に哀れさが滲むのを聞いた。

「こんなこと、俺とあいつの問題じゃないか。俺があいつとこれ以上付き合わないと決めたらそれでも何もかも終わりだ。そんなにあいつが落ち込んでるなら、頼むからあっちの方を慰めにいってくれ。俺がいなくても大丈夫なようにしてくれ。何を言われたって、俺には何もできない。俺はあいつが怖い。あいつの傍にるのが怖い」

「バカを言うな。お前と秋元の問題なら周りが介入する隙を与えるんじゃない」

「……その隙を見つけて入ってくるのは誰だ？」

「何を怖がる必要がある？秋元に慕われて、ゾラさんにも頼りにされてるお前が……」

「あいつが壊れていくのを見るのが怖いんだ！」

クリスに告白したときは違う、強く猛々しい勢いで、来夏は怒鳴った。

「慕われてるから苦しいんだ！頼りにされてるから辛いんだ！あいつの傍にいて守ってやらなきゃっていう重圧に耐え切れないんだ！ああ、俺はあいつが好きだ、愛してる！だからこそ、こんなこと俺には出来ない！もしも病気が悪化して、あいつの声が失われたら……？あいつが声を失ってく様を、じっと見てなければならぬ。俺には何もできない。あいつの傍にいていうのはそういうことなんだ！俺はできない！どうしても！」

来夏は袖で目元を拭った。涙だか汗だかは分からなかった。一言叫ぶたびに恐怖が増した。脆い心ではとても包みきれないほどに。恐怖は成長し、来夏の血となり、来夏の全身を駆け巡っている。楽になる方法が全く分からないまま、来夏は絶望の淵に立ち尽くしていた。

来夏は前髪越しに大河内を見た。大河内の表情はまるで変わっていなかった。相変わらず厳しく強固で、来夏に対する哀れみを微塵も見せようとしなかった。人の憐憫を乞うなんて、絶対に自分にはないと思っていた。来夏は情けなさに声をあげて泣きたかったが、真昼の明るさがそれを許してくれなかった。光とて人を苦しめることがあるのだ。光と影は紙一重。

「大河内……！」

ふと目を瞬いた際に、大河内の表情が豹変した。来夏が求めていた色が彼の顔にあった。腐りきった安堵が胸の中で踊った。大河内はこちらに歩み寄ってきた。差し出された手を来夏は握りたかった。そして、あいつを任せると言いたかった。それで、自分が楽になれる。

だが、大河内の手は来夏の手を取ることはなかった。高く振り上げられたその手は、乾いた音をたてて来夏の頬を打った。世界が真っ白になった。やがて聞こえてきたのは、大河内の激しい息遣いだ。つた。

「ふざけるな……！」

来夏を叱り飛ばしているのは、来夏が今まで聞いたことのない声だった。

「ふざけるな……！お前のためにあの子がどれだけの恐怖を乗り越えたかも知らないで、よくそんなことが言えるな。あの子は夏を連想させるお前の名を怖がっていた。あの子の声が持つのは来夏の夏までだと医者に言われていた。せつかく心から尊敬したその人が、自分の最も恐れるものを持つていたことで、あの子はどんなに苦しんだか。ああ、あの子以外には何も分からないだろう。そんなくならないことと笑うかもしれない。だが、あの子にとっては何よりも重要な問題だった！俺もそれを知っていたし、ゾラさんも知っていた。あの子を大切に思う人ならみんな理解した……お前だって分かるはずだ。冷静になれ！声を失うことを一番恐れているのは誰だ？お前じゃない！あの子だ！周りで見守る者にとっては、あの子が壊れていくのは苦しい光景かもしれない。だが、自分が次第に壊れていくことがどんなに恐ろしいことか。それでも、あの子はちゃんと立ち向かおうとしている。お前を受け入れたときに、あの子はもう病に打ち勝つ勇気を得た。次はお前の番だろう！お前があの子を受け入れる勇気を得る番だろ！あの子を愛してるなら、あの子を支えろ！それであの子ははじめて救われる！」

大河内はそこまで言い切ると、口を閉ざし、それから深く息を吸ってまた言った。今度はがらりと調子を変えて、優しさと悲しみが入り混じった、ゆっくりとした声で話した。

「ずっと見ていた……俺はあの子が好きだった……あの子を守っていくと密かに誓っていた。だが、あの子がそれを求めたのはお前だ。いや、実際はそんなことを求めるほどあの子は欲深くはない。ただ

お前の傍にいて、お前の役に立ちたがっている。優しい子だ。俺の光だった……でも、今は違う……」

再び沈黙が訪れた。来夏は近くの木に体を預け、大河内は根が生えたようにその場に立ち尽くしていた。来夏は顔を空に向けて、大河内は顔を俯けて、各々に声もなく泣いていた。たった一人の少年を愛するという奇跡が、こうして二人をこの林檎林に呼び寄せた。来夏の見上げる空に小鳥が飛んでいた。明るい声をたてて、どこまでも楽しげに。

「来てほしい」

大河内が口を開いた。

「見てほしいものがある。石崎の個展は見たか？」

「ああ。昨日のうちにな」

「だったらもう一度見直した方がいい。一緒に来てくれ。そしたら、秋元の歌を聞きに行く。無理にでも連れて行くつもりだ」

来夏は何も言わなかった。まだ決心はついてなかった。それでも、大河内に手を取られれば、歩き出せそうな気がした。

「有瀬！有瀬！」

例え呼び声が届く場所にいたところで返事をしてくれるだろうか。クリスは確証が持てなかった。自分はノアの返事を聞く資格なんてないと、そればかりが胸を突いた。それでもクリスは叫ばずにはいられなかった。この声が枯れて、足が疲労に悲鳴をあげるまで。

「有瀬！」

「呼んだ？」

クリスは振り返った。中庭の噴水前、いつもの昼食会場でのことだった。反射的に振り返ってしまったのだが、もちろん尋ねたのはノアではない。その養父の有瀬裕の方だ。黒いスーツにしみ一つない真っ白なシャツ、折り目のついたズボンの下にぴかぴかに磨き上げた靴という完璧な格好だ。この嫌味らしい衣装にも、クリスはまっ

すぐに目を向けることができなかった。理事長の前で恥じ入るとい
う侮辱は二度目だった。何も知らないと思っていたのに、この人は
とっくにお見通しだったのだ。

「理事長……」

「おや、その反応だと、僕を捜してたようじゃなさそうだね。大方、
ノアの方でしょう?」

「……はい」

理事長は真つ青な空に向かって両腕をぐつと伸ばした。逸らしたク
リスの目にも一瞬だけ、手の火傷の痕が映った。

「……理事長は、いつからご存知だったんですか?」

「ずっと前からだよ。そう、厳密に言えば火事のあった直後にはも
う分かってた。血は繋がってなくとも親子だからね。君よりも、ノ
アとの付き合いは長い」

「俺を怒ってますか?」

「別に。君にそこまで期待したつもりはないよ。この間言ったこと
はただの冗談さ。別に気にしなくていい」

「俺は気にします」

「そう?じゃあ搜索活動を続けたら?」

理事長がふいに冷たく言い放った。クリスはごくりと唾を飲んだ。
言い返したいのに言い返せない。理事長に背を向け、行こうとした
とき、同じくクリスに背を向けた理事長が、諦めたようにこう言っ
た。

「ノアなら保健室にいますよ。里見先生にも席を外してもらってま
す。早く行ってあげなさい。あの子は結局君を必要としてるみたい
だから」

一瞬言葉を失ったクリスは、理事長の姿が遠のいていくのを振り見
てもしばらく黙ったままだった。それから静かに頭を下げ、「あり
がとうございます」とだけ言うと、理事長を追い越して校舎の方へ
と向かっていった。今度は見る側になった理事長が肩をすくめた。

保健室には電気もついていなかった。人の気配もまるでしない。扉にかけられた「先生はいません」の看板がますます人を追い払っているようだ。クリスマスは葬儀の場に入るよりも、厳かに部屋に入った。

「失礼します」

真っ白い部屋の中で、ソファを囲うカーテンだけが揺れていた。クリスマスも以前そこに避難されたことがある。野瀬先生に横つ面を張られた直後の話だ。意を決してカーテンへと歩み寄り、引き裂くように布を開くと、ノアが不安げな顔でじつとクリスマスを見上げていた。肩が微かに震え、祈るように組んだ手が白くなっている。小さな唇が微かに動き、声を出そうとして躊躇し、それからまた動いた。

「クリスマス様、ごめんなさい、僕……」

「ごめん、有瀬！」

クリスマスはノアの前に跪いた。ノアよりも震えた両手で、親友の手を握った。慄くノアの膝元で、言葉が勝手に口をついで出た。

「君は何も謝らなくていいんだ。謝るのは俺の方なんだ……」

「クリスマス様……」

「俺は君の親友だっと思ってた。俺だけが君の苦しみを全部分かってあげられるっと思ってた。でも、全部思い込みだったんだ！俺は何も知らなかった……知ろうともしなかった……君が……」

「クリスマス様！」

「君がああ火事以来、ずっと火を恐れていたってこと！」

あの事故以来、ノアは「焼く」という言葉を使わなかった。クッキーやケーキを焼くことは全て「作る」と言っていた。味噌汁の味が変わったことに、クリスマスは気付いた。ノアは火を使えなかった。市販のインスタント食品を彼なりに上手く味付けして出していたのだろう。他の料理も全てそうだったはずなのに、クリスマスは他には何も気付かなかった。文化祭で料理の店を出したと言った時、ノアがケーキならよいと言ったのは、直接火を使わないからだ。昨夜の違

和感のあるキッチン、あそこは清潔すぎた。なぜなら、ノアはコン
口をまるで使っていなかったから

調理室では他のクラスが火を使っていた。ノアはそれを見て恐れ
て逃げ出した。当たり前だ。あの火事するとき、火の中で自分が焼け
死ぬのをじっと待つしかなかった。クリスはかつて、両親が同じ目
に遭っているのを静かに想像したことがある。全く同じ場面に、ノ
アは現実として直面していたのだ。顔を上げる勇気さえでなかつ
た。ただ謝罪してし続けて、この内気な友人にできるものなら、口
汚く罵られたかった。

「助けてあげられなかった……いつも傍にいたのに。いつも隣で寝
ていたのに。君が俺に縋ってきたときにすら、俺は……」

「いいんです、クリス様……」

ノアの手がクリスの手を握り返すのを、クリスのはつきりと感じた。
「あなたには他にやるべきことがあったから。あなたは僕に対して
何も義務を負ってはいなかった。本当は僕の方から打ち明けるべき
だったんです。だって、僕たちは……」

クリスはそつと顔を上げた。ぼやけた視界では何も見えなかったが、
冷たく熱い何かの手の中に零れ落ちてきた。

「僕たちは友達だから……隠すべきじゃなかったのに、全部打ち明
けるべきだったのに」

「友達でもいえないことだってあるさ。それでも俺は分かってあげ
なきゃいけないかったんだ。ごめんね、有瀬……」

「やめてください、そんな言い方……」

クリスはノアの隣に腰掛けた。ノアの濡れた顔がクリスの胸元に寄
せられ、クリスはワイレッドの頭をそつと抱きしめた。

「もう謝らないで。あなたが苦しければ、僕も苦しい。お願いだか
ら笑ってください。そうしたら、僕もきつと笑える気がするから……」

……

「お願いだから来てください。そうしたら、僕もきつと歌える気が

します」

大河内が見せたいと言った絵の前で真央と出会った。目を晴らした真央は、はつきりとした声で、失われることなんて到底考えられないような声で、来夏にそう言った。来夏は目を見張った。真央の表情は強く凛々しく、いつもの手折られた花のような弱さはどこにも見られなかった。

「僕の歌を聞いてから、先輩が恐れているものを克服できるかどうか考えてほしいんです。お願いします。来夏先輩」

真央は一礼して去っていた。来夏に残されたのは、アニエスの微笑と、大河内と、たった一枚の絵。来夏が真央の頭をくしゃくしゃにして笑っている。何も考えていなかった時代の二人。溢れるばかりの光に影なんて一点もなく。

来夏は大河内を見、腕時計を見た。あと三十分だ。「楽しみだな」と呟くと、大河内も祝福するようにやっとなんかと笑ってくれた。

第二十六話 F e s t i v a l r i t . . 後編

ピアノの壮麗な和音で曲は始まった。人々の閉ざされた呼吸が、小さな会場内の空気を極限まで張り詰めさせている。しかし、真央はまるで別の世界の人のように目を閉ざし、緊張感とは無縁のところをさまよっていた。来夏は何の感情もなく見つめていた。真央の声を聞けばその瞬間に、自分の答えは分かる。心の底から確信していた。

空気が震えた。来夏の目には、振動する一筋の金の糸が見えた。日の出の輝きが地平線から煌き出するように、真央の歌声は明るく澄み渡り、喜びに満ちていた。隣の老婦人が感極まって息を吐くのが聞こえた。来夏は表情を変えなかった。ただ、真央が今大きな緑色の目を開き、楽しげに歌っているのと代わって、今度は目を静かに閉ざしていた。来夏は初めて朝というものを知った人のような心地がした。

「信じられません……」

四階まで駆け上った直後、ノアが言った。教室の前には見渡せぬほど遠くまで人が並び、わいわいと校舎で一番の賑やかさを見せている。落合が参ったようにそれでも迅速に人を捌き、ノアの指導を受けた生徒たちは、これ以上ない速度でケーキを切り分け、皿に盛っていた。椅子の上には長らく待ってようやく椅子にありつけた、楽しげな客の姿が見える。ここまで繁盛しているとはクリスマスもノアも思わなかったが、クリスマスはあえてその驚きを隠した。喜びに頬を染めているノアの肩を叩き、クリスマスは当然だという顔で微笑みかけた。そして、言うべき台詞を言った。

「当たり前だよ、君の店だもん」

「でも、まさか、こんなに……」

「おい、エーリアル！」

二人の姿を見つけた落合が、倒れこむように教室から飛び出してきた。冬だというのに人ごみの熱気のせいで汗をかき、エプロンがすでによれよれになっていた。

「有瀬も見つかつたみたいだし、ちようどよかつた。もう三時間も店番やつてんだぜ？代わつてもらえるよな？あつ、待つた。あの先頭の女の子たちまで俺が案内してもいいんだが……」

クリスは落合からエプロンとメニューをひったくると、素早くウエイターとしての身なりを整え始めた。ノアも既に厨房に駆けつけており、四苦八苦していた他の生徒たちが大歓迎されているところであつた。クリスとノアは一瞬だけ視線を交わした。どちらの目も熱意に輝いていた。

何やら抗議のようなものを始めた落合に、クリスはにっこりと笑顔を向けた。その意は「後は俺たちに任せておいて」であつた。もう問題を一人で抱え込んだりしないと誓い合い、手を伸ばしあつた自分たちに、超えられない障害などないと思われた。例え、遊園地のアトラクション並みの行列が、目の前に横たわっていたとしても。

ちようど昼食時を過ぎて、特別に一般客にも開放されていたカフェテリアはがらんと空いていた。窓際の、ちようど日がよく差し込み、風にざわめく木々の緑がよく見える席を、理事長は陣取つて座つていた。店番をしているPTAの女性の役員が、先ほどから何かと気を遣つてくれている。息子さんが作ったケーキだからと、2年A組からわざわざケーキをもらつてきてくれた。ノアの苺のショートケーキは、自分よりもむしろ妻の方の好物だが、今日は生憎来られなかつた彼女の代わりに、理事長が頂くことにした。しかし、一口食べて、妻への後ろめたさとか申し訳なさといったものから、いつきに解放されたことを悟つた。

「息子さんのケーキですか？」

「いや、違つね」

後ろから流された雲のように現れて尋ねた校長に、理事長は振り返りもせずに答えた。

「ノアの味じゃないよ。僕はどうも運が悪いみたいだね。まあ、これだって十分美味しいけど」

「息子さんは調理の指導もされたようですからね」

「ふーん、ノアがねえ……」

目の前に腰掛けた校長に理事長はケーキの残り四分の三ほどを差し出して呟いた。何の感慨もない呟きだ。例の気の利いた婦人がぱたぱたとかけてきて挨拶をしたが、校長は愛想よく頷いて、コーヒーを一つ注文した。

「楽しんでますか？」

理事長に向き直ってから校長は聞いた。

「文化祭のこと？もちろん。とつても楽しんでますよ」

「そうですね。貴方の顔がどこか浮かないように見えるのは僕の錯覚でしょうか？」

「うるさいな。元々こういう造形なんだよ」

「おや、これは失礼しました」

「で、僕の顔の造形について文句を言いに来た訳じゃないでしょ？」
「珍しいところで見かけたものですからね。僕もようやく川内副校長から解放されたところなんです」

「どうせ、またさぼってたんじゃ？」

校長の都合のよいことに、コーヒーが運ばれてきて、話は一時中断した。コーヒーは非常に上手く淹れてあり、原因不明のまま台なしにしてしまったコーヒー豆の全盛期が切なくも憊ばれた。心地よい余韻に浸りながら、校長は少し溜息をつき、それから思いついたように言った。

「ところで、ノア君はどうしましたか？」

「話を逸らすつもりだね」

理事長は、再び手をつけたショートケーキの甘さに反して苦々しげに顔をしかめてみせた。ちょうど二人の他にいた三人連れが席を立

ち、静か過ぎる店内に曲がかかりはじめた。ヴィヴァルディの「四季」冬の第二楽章。

「ノアのことは石崎・おせっかい・なんちゃら君に任せましたよ。彼がすすんでやってくれるっていうもので。ノアにとってもそれが一番いいだろうし」

「彼のことは信用していないんじゃないですか？」

「そりゃもちろん。でも、父親っていうのは子どものために、苦しなくてもベストな道を選ばなきゃいけないものなんですよ。君には分からないだろうけど」

「そうですね。残念ながら」

同じメロディが先ほどから繰り返されている。店番の婦人が首を傾げながらCDプレイヤーをのぞきこんでいる。ある一定のところまできて、音楽はそれ以上進むのをためらっているようだ。このなかなかな時間が終わるのを恐れているのだろうか。冷たい冬の中の束の間の安息、暗闇を照らす小さな蠟燭の火、それらが掻き消えてしまふその時を。

「どうすれば」

理事長はクリームをフォークですくいあげ、校長のコーヒーの上に垂らした。今度は校長が笑みを閉ざす番であった。これでこの人は気を利かせたつもりなのだろうか。

「どうすれば人は子どもを忘れないでいられないんだろうね。文化祭を見て思ったよ。人はいつから大人になるんだろうねえ。生徒たちはなんだかんだいってもまだ子どもです。無邪気で明るい。何もかもが楽しくてたまらなさそうで、嫉妬さえ覚えそうになりますよ。子どもたちの明るい笑顔を見ると、僕たちは何だか腐りきってしまった気がするね」

「大人と子どもは対にあるものではありません」

校長はコーヒーカップにかけていた指を取り払いながらきっぱりと言った。

「子どもは自然に大人になる。光があれば影ができるのと同じです。

しかし、その影とて見つめてみれば美しいものではありませんか。僕たち教師が道を教えてやりさえすれば、生徒たちは影の見つめ方、影と共に生きていく方法を身につけ、自分を卑しめることなく人間として正しい道を選ぶことができます。僕はそれを教えるために教職を選んだんです。最も……」

思慮深そうに聞いていた理事長が訝しげに顔を上げた。ウインナーコーヒートの仕返しにと、校長は口走った。もうすでに椅子から腰が浮いていた。逃げ出す準備は万端だ。

「貴方に関していえば、腐ったという表現もあながち間違っていないんじゃないんですか？」

午後四時に三宿学園の文化祭の全ての演目は終わった。門へとなだれ込んでいく人々を見ながら、生徒たちは皆クラッカーを鳴らしたり、誰彼かまわず抱きついてみたり、かと思えば何とかして教室を片付けるべく駆けずり回ったりした。こうしたイベントが終わると、無気力に襲われる者も多々あるが、残念ながら脱力するにはまだ早かった。七時になれば、一度は退散した一般客が今度は美しく着飾って現れ、華やかなダンスパーティーが始まる。誰もがその時を忙しない中で楽しみに待っていた。

アニエスに渡された手鏡を、真央は教室の隅っこでそっとのぞきこんだ。目の腫れはもうほとんど分からなくなっている。静かでやさやかな嬉しさがこみ上げてきて、しつとりと胸を濡らした。それは、今まで真央が共にしてきたどの感情とも違う、少しほろ苦い心地であった。

来夏の答えはダンスパーティーの時に聞こうと真央は決心していた。人ごみの中ならば、例え拒まれたとしても互いの顔が見えないところへ紛れ込むことができる。そして、闇夜が夏の日のように輝かしい日々を覆い、愛しい記憶との決別を促す。それはきっと、心の平穏なうちに。

真央は潰しかけていたダンボール箱を片手に持ったまま、開け放った教室の窓から顔を出した。冬の風が火照った頬に触れた。見上げる夕暮れの空に星をのぞむ時、自分はどんな思っているのだろう。

「間もなく七時になります。生徒たちは各自体育館に集まること。尚、校長先生、至急川内のところまでお越しください」

スピーカーから流れた副校長の声を機に生徒たちは昇降口へと流れ出し、冷気と興奮に震えながら、体育館へ進む足を急かし始めた。クリス、ノア、菜月、来夏、落合の五人も点在する黒い塊の一つとなつて、緩やかに傾斜した丘の道を歩んでいた。菜月と落合は相変わらずふざけているが、来夏は押し黙りがちであり、誰かが話題を振っても応じないことが多々あった。その一方で、ノアは初めてのダンスパーティーでよほど上がっているのか、いつもより多く話し、同じ話を二回も三回も繰り返した。

「どうだったの？秋元君の発表」

クリスが尋ねても、来夏は頷いたきりで何も言わなかった。誰に対しても、本人に宣言するまでは答えは明かさないつもりらしい。

「おい、エーリアル、明日の打ち上げ、四時からの予約でいいか？」

「あつ、うん、任せるよ」

クリスは一人「そっか」と呟いて溜息をついたが、それでも来夏は何も言わなかった。

体育館の窓はどこも全開にされていたが、室内の熱気のもり具合ときたらそれでも十分なぐらいで、誰もが頬に化粧を施したように見えた。生徒たちはいつもの黒いブレザー姿だが、生徒会役員たちだけは特権なのか義務なのか、それぞれ正装して、熱気とは無縁のギャラリィから群集を興味なさげに見下ろしていた。ノアを腕に引っ付けて体育館にやってきたクリスは、一瞬慎と青い目をぶつけどあったが、慎は不敵な笑みを浮かべてくるりと背を返し、クリスの目の届かないところへ行ってしまった。再度出没した時、慎は腰に

まわりつく明音をしつこそうに追い払っていた。クリスは少し笑った。七時を知らせる鐘が鳴ると、校長と来賓の方々の挨拶があり、ざわめきにしみこむようにワルツが流れ始めた。クリスはノアの腰をとった。ノアははにかむような上目遣いで、黒目勝ちな灰色の目でクリスをじつと見上げ、クリスは応えるように微笑んでみせた。二人の動きは完璧からはほど遠かったが、形だけはなんとか出来あがっているようで、クリスはほっとした。次第に館内の前方に押し出された二人には、自然、先生方が手を取り合って踊る姿がよく見えるようになった。桜木先生と橋爪先生がぎこちない動きでステップを踏んでいる。校長は誰か知らない女性の手を取っていた。白髪交じりの髪を優美に結び、サーモンピンクのドレスを纏った中年の婦人だ。ジャクソン先生は副校長と踊っているが、意外にも二人は息がぴったりで見事な足さばきを見せ付けていた。我らが野瀬先生は森先生と、鳥居先生は先ほど市議会議員として紹介された男性と、里見先生は花木先生と、それぞれペアを作っている。ターンをしたついでに、クリスは生徒たちの群れに目を凝らした。生徒会役員たちは市や学校の関係者の相手に回っていたが、落合は大河内をしつかりとリードしており、菜月も剣道部の仲間と（何度も颯の方を仰ぎながらだが）踊っていた。

一曲目が終わると、荔枝と陽、颯と菜月の当たり前のペアが、磁石で引き付けられたように出来上がった。壁際でひとまず息をつくクリスとノアの元には、校長と踊っていた優雅な女性がやってきた。女性は挨拶するより早くノアを抱きしめ、ノアも細い腕で女性を抱き返した。

「養母トクモです」

女性から離れたノアがそう言ったので、クリスは驚いた。そういえば、養父である理事長とはすっかり対面を果たしていたけれど、母の話は聞いたことさえなかった。並んだ二つの顔が似ていなかったが、どちらの顔も久々の再開の喜びにきらきらと輝いていた。

「初めまして。有瀬美和子と申します。石崎君ですわよね？主人か

ら話は伺っております。ノアがいつもお世話になって」

「いえ、俺の方こそ、迷惑かけっぱなしで……」

今日の事件が脳を横切つて、クリスはその言葉に一層力を込めて言った。ノアの母親は柔らかな笑い声をたてた。

「まあ、そんな言葉、とても信じられませんか。ノアに友達が出来たつて聞いた時、どんなに驚いたことか。貴方のことは天才少年画家として存じておりましたけど、優しい方だとは知りませんでした。今日の個展も本当に素晴らしくつて」

「ありがとうございます」

クリスは丁重に頭を下げた。それから、有瀬夫人が息子と話し始めたので、クリスは気付かれないようにその場を立ち去り、少しでも涼しい空気に当たろうと入り口付近に足を運んだ。もう既に姿を見つけた友人や知り合いの他に、もう一人だけ捜している人物がいた

千住先生はどこだろう。クリスは手を取られた記憶をふと思い出し、一人左手をぎゅっと握つた。奇跡をもう一度望むのは愚かなことであろうか？ チェロが奏でる重厚な三拍子が、軽やかなメロディを越えてやたらと耳についた。色彩の多様さに目も疲れてきたその時、クリスは薫の姿以外にもう一つ注目すべきものを見つけた。

来夏と真央だ。ちょうど踊り終わった真央に来夏が何やら話しかけている。クリスは二人の表情をじっと見つめていたが、著しい変化をそこに認めることはできなかった。クリスは二人が踊り出すものと思つたが、真央はこくりと頷いた後、来夏に続いて体育館を出た。二人がどうなるかは、クリスにも分からなかった。躊躇が足をとどめようとしているが、これは彼らを追つてもよいのだろうか？

「クリス君？」

クリスの罪悪感にとってはちょうどいいタイミングで、進もうとする背後に話しかけるものがあつた。クリスは鼓動が一つ高鳴るのを、耳とは別の場所ではつきりと聞いた。クリスは振り返つた。その間も思考は絶えなかつた。ネクタイが曲がっていないか、シャツが出ていないか。しかし、照らし出されたような薫の立ち姿を見た瞬間、

そういつたくだらない懸念はいつきに吹き飛んでいつてしまった。
真央と来夏のことすら、頭の片隅にほんの少し引つかかった程度であつた。

「千住先生……！あつ、こんばんは……！」

「こんばんは。パーティは楽しんでるかい？」

「えつ、あつ、はい」

薫はクリスの隣に並んだ。クリスは心臓が正しいリズムを刻めているか不安になつた。顔や胸が燃えているようだ。ここはこんなに風通しが良いというのに……

「君の個展はすばらしかったね」

「……本当にそう思います？」

「もちろんさ。どうして？」

「いいえ。だつて、お世辞だつたら嫌ですし。悪いところは指摘してもらわないと……」

どうしてだろう？有瀬夫人も用いた「素晴らしい」という言葉が、いつのまにかこんなにも重要な意味を持っている。たった数分の間、取るに足らない時間で。頭に置かれた大きな手が、クリスの不安を削いだ。目だけでじつと頭上を窺えば、薫の笑顔はこの上なく優しかった。

「悪いところなんてまるでないさ。君の絵は本当に素晴らしかった。これ以上の言葉は見つからないよ。僕の我侂を聞いてくれて本当にありがとう。とても素晴らしい贈り物だつた。二日分早いクリスマスプレゼントというべきかな？君のような生徒と出会えて、僕は幸せだ」

クリスの両目が揺れた。抱きしめた左手が疼くのを感じる。喉元まで声が出掛かっている。苦しいほど溢れ出る思いを、どうやって言葉にすれば

「千住先生、俺……」

その時、クリスは雷鳴が轟いたかと思つた。胃袋に直接響くすさまじい音量で、オーケストラがわめき始め、館内にいた全ての人が慌

てて耳をふさいだ。誰かが音量調節を間違えたらしい。曲は急いで止められたが、人々が立ち直るのにはしばらく時間がかかり、クリスが言いかけていた言葉を忘れるためにも、時間は十二分に足りていた。

体育館の外の世界は恐ろしいほど静かだった。大地と夜が紡ぎ出した沈黙を安っぽい言葉で破るような真似など、真央にはとてもできなかつた。恐らくそれは先を行く来夏も同じだったのだろう。二人は何も話さず進んだ。目的地は分からなかつたし、感覚もほとんど失っていた。指先を擦り合わせる動作さえ、かじかんでいくのを感じない体にとっては、本能的な動作であつた。

最初の一曲はアニエスと踊り、アニエスが薫に奪われてしまつてからの一曲は、近くにいた貧相な体つきのおウムのような老女と踊つた。それから来夏がやつて来た。来夏は極めて無頓着を装つていたが、その頬の白んだ部分に緊張が露わになつていた。却つて真央の方が落ち着いていたくらいだ。

「秋元」

真央がまつすぐ自分を見つめていたにも関わらず、来夏は呼びかけた。「はい」と、真央も聞き返した。

「少し話がある……大事な話だ。外に出ないか？」

真央は迷わず頷いた。来夏はまだ緊張を宿したまま、それから十分近く保つことになる無言を携え、まるで一人で散歩にでも行くように体育館を後にした。真央もそれを追つた。そして、今、こうして冬空の真下を歩いている。各々に、懐かしい記憶を手繰り寄せながら。

僕は先輩が好きだ　真央は暗い足元を見つめながら密かに呟いた。でも、先輩が僕を受け入れられないなら、それまでだ。僕は十分に幸せだった。明音が言ったように「星が綺麗」という事実だけで、僕はこの上なく楽しい時間を過ごせたのだ。だから、僕は答え

を恐れない。僕は先輩のおかげで前向きになれた。先輩のおかげで強くなれた。本当は傍に寄り添うことで恩返しをしたいけれど、それが単なる我侷にしかならないのなら、僕は身を引くことで恩を返そう。

真央は足音が止まったことも、自分が何か温かいものに包まれていることも、来夏の息遣いが耳元に聞こえることにも、長いことがつかないでいた。潤んだ目で星を見上げようとしたときに、やっとな事実を知り、体を震わせた。声を出していい瞬間が、やっと訪れた。

「先輩……？来夏、先輩……？」

「何も言っな」

来夏の声は掠れていたが、真央が口を噤んだ。二人は薔薇の小道の真ん中に立っていた。もしも陽光さえ差し込んでいれば、一年中花をつける、美しい花びらがのぞめるはずだった。来夏の鼓動がすぐ傍に聞こえる。

「秋元……悪かった」

ゆっくりと引き離されて、真央は今にも泣き出しそうな自分に気付いた。何もいえないのが楽であると同時にとても辛かった。

「許してくれ、秋元。俺は弱かった。今も弱いままだ。これからもきつとな。それでも、約束だけはきちんと守る。俺はこれからどんなことがあってもお前の傍にいと約束したい……俺は、真央のことが好きだ」

抱き合いもしなかった。唇を重ねあうこともしなかった。ただしばらく硬直したように見つめ合った後、恐々と差し出された右手の小指が二人の距離を結んだ。真央は息をつまらせ、来夏は笑った。そして、二人はようやく強く抱きしめあった。

「先輩のバカ！」

「すまなかつたな」

「先輩のバカ！僕は先輩にずっと憧れて、本当に本当に大好きで……！」

「ああ」

「でも、好きでいられるだけで幸せだって、そう思い込もうとしてたのに！ついさっきまでそんな気分だったのに！今は……先輩と離れたくなくて！ずっと一緒にいたくて！時間なんて止まればいいのにつて願ってて！」

「……俺もそんな気分だ」

「バカ、バカ、バカッ！」

「おいおい……」

夜空には満点の星空が輝いている。凍える日にも煌いていた星たちは、今日も全く同じ光を以って浮かんでいる。さながら高飛車な恋の女神と同じで。それなのに、なぜ今宵の星はこんなにも優しく思えるのだろうか。真央は今、この上なく幸せだった。

夜明けの空に小鳥が羽ばたく。右手から飛び立っていったその小さな影を見て、アニエスは満足そうに微笑んだ。抱き寄せられた肩から触れる愛しい人の温度。黄土色の髪を撫でていた指が白く尖った顎に触れ、頬を持ち上げる。交わした接吻の甘さに、アニエスは目を閉じた。名をささやく隙すら与えてくれない、その人。

「カオル……」

生徒会室には楽しげなメロディが響いている。ヴィヴァルディ「四季」より「冬」第二楽章。生徒会役員たちは各自の仕事を片付けるべく、黙々と手を動かし続ける。荔枝さえもリズムをとろうとしない。黙殺された第二楽章が終わると、慎が急いでリモコンを取り、曲を巻き戻した。ちょうど二曲分だ。始まるのは第一楽章 冬の寒さの中で凍える人の歌。

「嵐が来る」

慎の言葉に、役員たちは唇をきつく閉ざした。空は灰色で見るからに寒々しい。冷たい風が、容赦なく飛ぶ鳥と木と人々の肌を切りつ

けていた。

「遊びは終わりだ。水晶は目的のために本格的に動き出すぞ」

「どうやら僕たちも嵐に巻き込まれずにはいられないようだね」

颯が言った。

「僕らは全てを試される。試されて、認められた者だけが生き残る。例え仲間を切り捨てても、僕たちは水晶の命令を遂行しなければならぬ」

「仲間など元からいない。私たちはただ同じ主人に仕えているというだけのことだ」

「全く、どいつもこいつもえげつねえな。まっ、うかつかしていると蹴落とされるってこつたな」

冬の風が吹いている。その声よりも酷く。

第二十七話 チョコレート同盟

「では、文化祭の成功を祝って、乾杯！」

「乾杯！」

「ジャクソン先生、ファッションショー、ほんとうにお疲れ様でした」

「ありがとうございます、野瀬せんせつ！もう、本当に一時はどうなるかと思いましたがね。無事成功してよかったですわあ」

「私が無理やり生徒会役員引つ張ってきてあげたからでしょ！着替えさせるのも一苦労だったんだから！」

「分かっているわよ、みちる。好きなだけ飲みなさい」

「やった！ありがと、ジャクソン！」

「……少しは遠慮したらどうなの？」

「でも、鳥居先生、本当にどうやったんですか？他の生徒はともかく、榊原君に十二単着せたり、小杉君なんてチャイナドレス……」

「いや、里見先生、あれは結構簡単だったんですよ。先に酒本と川崎に着せといたから。二人も和服と漢服だったけど、男物だったから割合抵抗なかったみたいで。で、一度着ちゃうと、相方にも着せなくなる、って訳」

「まあ、心理学者のようね」

「生徒の心はそうやって動かせるくせに、男の心はどうにもならないのね……」

「うるさい、ジャクソン！いいじゃない。どうせここにいる皆、クリスマス・イブなのに女性だけでつるんでることだし」

「二つも三つもお忘れでしょうけど、野瀬先生と里見先生は既婚者、桜木先生には素敵な恋人がいるわよ」

「うわー、地獄だ！」

「桜木先生、いいんですか？せっかくのイブなのに橋爪先生と過ごさなくて」

「ええ。今日だとドタバタすると思ったから、明日約束をしたのよ。本来盛り上がるべきはクリスマス当日……あなたたち、何を聞いているの？」

「もう、そこまで言うておいて」

「桜木先生、完全にのろけてましたよ」

「そ、そういう里見先生は？」

「主人は今日から実家に帰ってるんです。なんでも伯母さんがイタリアから帰ってきたから、ご機嫌伺いとか言ってます。私のご機嫌伺いはしないみたいですけど。そういうことだけやたら気がまわるんだから」

「そういう年もあるわよ。私も本当は家族旅行の最中だったんだけど、旦那と子ども二人で行ってもらったわ」

「うわー！」

「奇遇ですよ！こんなところで会うなんて」

「そうだね」

共に歩く足取りが弾む。12月24日の三宿市内は、どの家も店も美しいイルミネーションを纏って輝き、恋人たちや家族の楽しげなささやきに繁華街は色めいている。しかし、その微笑ましい騒音もここからは遠い。二人が歩く橋の下をくぐり行く波は、あくまでも静かで黒かった。

クリスは水色のマフラーを巻きなおし、冷たく赤くなった耳を毛糸の帽子の中に押し込んで、隣を歩く人を見上げた。白衣を着ていない薫は、これまでも数回ほど見てきたが、今夜は一段と違って見える。濃い灰色のカシミヤのコートが、その長身を際立たせ、頭上で笑う顔をなんとなく遠ざけていた。磨かれた黒い革靴が電灯の下で時折光った。二人が出会ったのは、先ほどクリスの言ったとおり、全く奇遇なことだった。クリスはちょうど文化祭の打ち上げの帰り、薫はどこか用事に出かけた帰りだというのだ。それに、クリスが一

人にいるというのも偶然だった

「有瀬君は一緒じゃないの？」

薫が尋ねた。二人の隣を通って、数台の車が住宅街へと抜けていき、ヘッドライトが二人のコートや手袋の色を映し出した。

「ええ。クリスマスには家に帰るんだそうです」

「仲のいいご家族なんだね」

「正直うらやましいです。俺には両親がいないし。いや、有瀬だって本当の両親はいないけど、それでも昨日有瀬と有瀬のお母さんが話してるのを見たら、やっぱりいいものだなあって……あつ、別に僻んでる訳じゃないんですよ。俺だって、イギリスに叔父さんと叔母さんがいますから」

「君は叔父さんと叔母さんに育てられたのかい？」

「はい。俺の絵の才能を見つけてくれたのも、叔父と叔母なんです。俺の恩人です」

「じゃあ、二人は僕の恩人でもあるということだな」

「えっ？」

クリスマスは薫を見上げて訊き返した。薫は微笑んでいたが、具体的な答えは何も言わないままだった。それでも、クリスマスの頭のとっぺんに一瞬だけ触れた手が、クリスマスへの細やかな愛情を示していた。胸がとくと高く鳴る。同時に果実の皮をかんだように、切なさがいっせいに溢れ出す。昨日いえなかった言葉を思い出して。いや、例え何もいえなくても、この人に寄りかかりたい。腕を取りたい……

「ということ、君は、今夜は一人なのかい？」

薫がまた訊いた。

「いいえ。今夜は友達が押しかけてくる予定なので。多分、徹夜で大騒ぎってことになると思います」

「それは楽しみだね」

クリスマスは肯定のつもりで笑った。しかし、今この瞬間よりも幸せな時間が今後訪れるかどうかは、甚だ疑問であった。薫の青い目がメガネの奥からじっと自分に注がれていることに気付いた時、クリスマス

は顔を少し背けた。見つめられた部分が微かに熱を帯びているような気がした。薫の手がクリスの手を取って、手袋越しに熱を伝えた。

「あつ、来夏先輩、そこにリースお願いします」

「しかし、いいのか？勝手に石崎の家なんて入り込むなんて、家宅侵入罪にならないのか？」

「硬いこというなよ、ライ。そもそも、ここは家じゃなくて寮だぜ」

「あつ、落合先輩が良いこと言っただす！」

「まあな」

「ねえ、落合、ポテトの量が明らかに足りないんだけど」

「どうみてもそれで十分だろうが。足りないなら自分で買って来い

よ、酒本」

「やだ」

「俺に買いにいかせるつもりか！」

「でも、来夏先輩と真央は本当によかったんっすか？」

「何が？」

「だって、イブと言ったら恋人と二人っきりで過ごしたいと思うでしょ？」

「いや……まあ、まだ付き合い始めたばかりだしな。これといって実感もわかねえし」

「大体いつも一緒にいますもんね、先輩」

「あ、ああ……」

「おい、ライ、秋元、甘ったるい会話してる暇があったら、手を動かせ」

「……落合がひがんでる」

「黙れ、酒本！」

「でも、落合もいるよね」

「はっ？」

「恋人。B組の大河内孝則君」

「別に、まだ付き合ってる訳じゃねえよ」

「まだってことはこれから付き合う予定があるってことだよな？」

「……うるせえ！」

「先生は、今日は何の用事があったんですか？」

「ああ、シスターを訪ねていたんだ」

「シスター？」

「学生時代にお世話になった方だ。とても優しい方なんだけど、何年前に病気をして、この町の病院に入院していてね。そのお見舞いに行つてたんだよ。でも、参つたことに、本人は少しも病人らしくしてくれないんだ。健康なこつちの方が色々振り回されて、今ようやく帰りつてところさ」

「……すごいですね」

薫は肩をすくめてみせた。

「まあ、彼女はまだ若いからね。もちろん、僕よりもずっと年上の方だけれども……それでも死ぬにはまだ早い」

クリスは黙りこみ、しばらく静かなままに道を歩き続けた。薫の悲しみを垣間見てしまったことが、異様なほどクリスの胸をざわつかせていた。死にいく人の姿を目前にして何もできずにいるもどかしさを、クリスは知っている。両親を亡くしたばかりのクリスを慰めようと、娘を亡くした苦しみを必死に堪え、面白くおかしい話をたくさんしてくれた祖父。いつもおどけてみせてくれた祖父。そんな祖父がベッドに伏し、言葉も発せず、曇つた水色の目を億劫そうに動かすだけで送った最期の三ヶ月を、クリスは傍らですつと見ていたのだ。幼心にも何もできないということは、とても辛かった。

「悲しいですよね」

クリスは言った。

「大切な人ほど早く逝ってしまふんです。俺の父も母もそうでしたし、祖父もそうでした。祖父もまだ若かつたんです。癌で亡くなり

ましたけど。それで、俺、昔はよく考えてました。なんで俺は両親と一緒にデパートに行かなかったんだろうつて　俺の両親はデパートの火災で死んだから」

「……なぜ君は死ななかつたのか」

薫の呟きに、クリスはこくと頷いた。

「ええ。でも結局はよく分からなくて。叔父は『何か死なせなかつたんだろうつ』としか言ってくれませんでした。俺も多分そうだと思います。それとも、結局ただの偶然なのかな……」

「偶然じゃないさ」

薫のいつになく強い言葉の調子に、クリスは顔を上げた。薫はまっすぐ前を見つめていた。語る言葉は、世の中の人全てに語っているようにも、自分一人に語っているようにも見えた。

「偶然なんかじゃない。君の叔父さんの言うとおりだ。何か大きな力が運命を支配していて、人々を生かしたり殺したりしている。罪もない清らかで弱い人々が押しつぶされる……そして、なぜか、俺のようになつまらない人間だけが生きている」

車がまた横を通り過ぎていく。

「ジャクソンちゃん、楽しんでる？」

「まっ、^{かおる}郁ちゃん！久しぶり！」

「あら、お店の方とお知り合いなの？」

「そうなんですよ、桜木先生！紹介しますねっ。あたしの中学時代の同級生で、このお店の店長の郁ちゃんです！」

「まあ、そうでしたの」

「初めまして。三宿学園の先生方にはいつもご贖いいただいていますわ」

「えっ？」

「よくいらっしやいますのよ、男性の方々が。よくお越しになるのは、校長先生と副校長先生ですけど、里見先生という講師の方も

お一人でいらつしやいますね」

「なるほど。夜帰りが遅い時はここで一杯飲んでたつて訳ね……」

「里見先生、落ち着いて！」

「あつ、そつだ。今日ね、主人の実家から蟹を届けてもらったのよ。今茹でてお出しするわ。私からのクリスマスプレゼント」

「まあ、いいんですか？」

「ええ。ちよつと待つててくださいね。今、準備をしてきますから
綺麗な方ね、郁さん」

「ええ、だから主人も来るんでしょうね」

「里見先生……」

「かおる……」

「鳥居先生、どうしたの？」

「野瀬せんせつ、察してやってくださいな。ほら、かおると言えば
もう一人いるでしょ？」

「ああ、ちず……！」

「それ以上はストップ！」

「鳥居先生、千住先生と何かあつたんですか？」

「失恋したんですよ、里見せんせつ」

「失恋？」

「そつ、失恋。Broken heart」

「だつて、だつて、しょうがないじゃない！あんな美人な女性に私
が太刀打ちできる訳ないじゃないのよ！」

「まあ、美人な女性つてどなた？」

「アニエス・ゾラですよ、桜木せんせつ。あのピアニストの。昨夜
腕を組んで帰るところ、あたしとみちるでばつちり目撃しちゃった
んです」

「まあ……」

「しかし、いいのかしらね。ゾラさんつて秋元君の従姉だつたと思
うけど」

「私、知らないつとー！」

「先生はつまらない人間なんかじゃありません」

ほぼ反射的にクリスは言った。それは、本心から出た意見であつたし、決して安っぽい慰めの言葉ではなかった。だが、落とされた青い視線の突き放すような冷たさには、はっとして口を閉ざす。何だか妙に軽々しいことを口にしてしまったような気がして、羞恥と戦慄とが繋いだ手を同時に走った。

「どうしてそんなことが言い切れる？」

薫の声に温度はない。

「どうして、俺がつまらない人間でないなんて言い切れるの？」

「それは……」

「俺のことを周りがどう評価しているかなんて知ってるよ。でも、全部買いかぶりだ。俺は皆の思うような存在じゃない」

立ち止まった二人の右手には、一日の仕事を終えた船が、母に抱かれる子どものように、波に揺らされて眠っていた。ここは車の通りもない。限りなく静かな場所だ。町が明るく輝くのは、風が吹く時だけだった。薫はそつとクリスの手を離し、海辺に臨む石垣に肘を突いた。遙か彼方まで続く海原の穏やかな起伏に、歪んだ月明かりだけがぼんやりと反射している。クリスもその隣へと歩み寄ろうとしたが、足は二、三步進んで止まってしまった。

「俺はつまらない人間だ。全く」

クリスは唇を噛んだ。それは、何もできないもどかしさによる行為であつたが、死んでいく人に対しての感情ではなく、生きて、目の前に立っている人への感情であつた。灯台の光が一瞬だけ遠くに閃いた。永遠の静寂の中で風向きが変わり、潮の香が鼻を刺す。

「……すまないね。こんなことを君に言うなんてばかしてる。でも、どうしても言いたかった。謝ってみたかった。誰でもよかつた訳じゃない。こんな風に思うのは君だけだ」

「先生……」

薫は体を少し傾け、こちらに向けて悲しげに微笑んだ。クリスがその隣へと歩み寄ると、薫はクリスの肩に手を回し、ほんの少しだけ引き寄せた。まだお互いが触れ合うには遠すぎる距離を残して。後の距離は自分から進んでいかなければ埋められないことを、クリスは知っていた。だから、顔を少し傾けて薫に寄り添おうとした。その無言の行為によつて、心から尊敬し、愛する人の自嘲的な告白を打ち消せばいいと思った。しかし、薫はその行為を拒んだ。恐らく何も知らない内に。

「今夜はもう遅い。行こうか」

クリスの頭をくしゃくしゃと撫で、引き寄せた肩を叩いて、行こうとする薫の顔には何の迷いも見えなかった。

「ジャクソン先生、ご馳走様でした」

「いいのよ、里見せんせつ。たまにはあたしだってパーツとやりたかったし」

「鳥居先生、元気でました？」

「あつ、桜木せんせい、そろもちろん！男のことなんて気にしませんよ！あらしには優しいともらちがいますしね！えへへ……！」

「完全に酔ってるわね……」

「失恋するといつものこうなんです。まっ、とりあえず部屋に放り込めば静かになりますから」

「でも、寮まで結構距離あるわよ。タクシーでも呼んだ方がいいんじゃない？」「ありがとう、野瀬せんせつ。いえ、みちるは車酔いがひどいからやめといた方がいいでしょうね。なんとか歩いて帰ります」

「うわあ、大変。頑張ってくださいね」

「里見せんせつこそ、あまり旦那さんに厳しくしちや駄目よ」

「あはは……分かってますって」

「笑顔が怖いわよ」

「では、皆さん、お休みなさい」

「お休みなさい。ジャクソン先生、本当にありがとうございました」
「いいのよお、全く」

「慰めてあげてね、鳥居先生のこと」

「ええ？もう帰るの、ジャクソン？まだ飲み足りないわよお。ねっ、駅前のお店寄っていいこう？」

「はいはい、まっすぐ歩く」

「ねえ、ジャクソン、副校長って独身だったよね？」

「いくつ歳が離れてると思ってるの、あんたは？そんな弱気にならないでも、あんたはまだ若いし綺麗なんだから、素敵なお男の人が現れるわよ。あたしが保証するんだから安心しなさい」

「あっ、あの空き缶、ポンペイウスに似てるー」

「……」

「あの電球もジャクソンそっくり……」

「ああ、もう、黙りなさい！」

唇に触れるものがあつた。温かく、愛おしいものであつた。そんなことしか、クリスには分からなかつた。

薫が「行こう」と言つて道を歩み出したとき、クリスはまだその場に立ち尽くしていた。中途半端なままに捨て置かれた問題を、そのままにしていきたくなかつた。なんとしても伝えたいことがあつた。昨日まで、否、ほんの少し前までは、自分のために伝えたかつたことだ。今はその人のために伝えたい。クリスが付いてこないことに気がつき、薫は不思議そうに後ろを顧みた。クリスは俯けていた顔を上げた。なぜかは分からなかつたが、涙が一つ零れた。

「クリス君？」

薫は歩み寄り、クリスの頬に触れてそつと呼びかけた。クリスはゆつくりと首を横に振つた。涙は目じりに次々と溢れてきては、薄暗い視界を歪ませ、頬を濡らしていく。マフラーの繊維が塩気と水気

を吸って膨らんでいく。クリスは何か言おうとして口を開いたが、凍てついた潮風が舌から言葉を奪い去ってしまった。またいつもと同じなのか。薫への想いはこんなにも鮮やかに変わったのに。悔し涙が夜の暗闇を曇らせたその時に、クリスはそれを感じた。

クリスは目を瞬いて、睫毛で邪魔者を除けた。奇跡的な一瞬は既に終わっていた。ただ、ほんの名残として、顔からそう大して離れないところで、薫が笑いかけていた。背伸びさえすれば、届く距離。「どうしたの、クリス？」

「……薫さん」

今度こそ想いが受け入れられる時と信じて。クリスはすつと爪先を伸ばした。

同じ感触だった。甘く、切なく、狂おしいほど熱く、そしてほのかに塩辛くて。もしかしたら、それは少し、溶けたチョコレートの味に似ていたかもしれない。しかし、クリスの胸にあるものは、そんな比喩的で曖昧なものではなかった。薫への強い愛情だけが、たった一人で心を占めていた。

「薫さ、ん……………」

第二十八話 波間の足元・前編

「……あの人がいますね」

「どこに？」

「ここに」

窓の外には寝静まった町がある。少年がここと言っ指した場所は、男性の唇だった。男性は唇の真下に少年の細い指を残したまま笑った。

「違いますか？」

「さあ。どうしてそう思ったの？」

「だって、知ってるんですもの、あの人の味を」

「なぜ？」

「一度だけ唇を奪ったことがあるんです。あの人は知りません。何も知らないで、僕に手なんか預けて、ぐっすり眠ってましたから。でもほんの一瞬だけ だって触った場所から憎らしくなってきた。それでも僕は勝ったんです」

少年はベッドの上の男性の膝を降り、窓辺へと歩いてブラインドを閉ざした。煌々と照る月の光も絶たれ、ランプだけがベネチアングラスの美しい色彩を枕元に投げかけている。今そこに見える色は、微笑みを携え、壁に身を預けてくつろぐ男性の目の青のみであったが、ふと少年の髪の毛のワインレッドが迷い込んだ。そして、少年の目の星のような灰色も。青と灰色が蠟燭の火のように立ち消えて、二つの影が重なったとき、煙が立つように艶かしい呼吸が漏れた。

「貴方は僕だけのものなの」

少年の声が言った。男性のシャツの裾を掴む拳は物陰の中にあつた。「どうしてあの人は奪おうとするんです？ どうして貴方はそれから逃れようとしななんです？ 僕だけが貴方の子どものものに……ねえ……」

「何も考えなくていい」

男性は答えの代わりに小さな頭を胸の上に押し当てて呟いた。少年の涙がじんわりと胸元に染みていくのを、彼は感じていた。ランプの光の中にある男性の顔に表情はなかった。見上げた少年の潤んだ目がそこに何らかの変化の兆しを見た直後、灯りは掻き消された。

「何も考えなくていい。お前はここにいるだけで十分だ、ノア」
身を預けきつた少年が最後に見たものは、畳まれたメガネの反射光だったかもしれない。

静かな朝の教室では、クリスの思考を遮るものは何もない。来夏、落合はほとんど呼吸を増すことなく、平らかな寝息を続けている。窓の外に庭園の美しい緑を臨みながら、クリスは半開きになった唇に昨夜の感触を思い起こそうとしていた。しかし、今はもう遠い。寝る前のお祭り騒ぎが全てを吹き飛ばしていつてしまったようだ。果たしてあれは夢だったのだろうか？二人並んで歩いた道も、薫の告白も、涙も、抱擁も、何もかもが甘く優しすぎて、全てが嘘のように感じられた。愚かな夢が自分を惑わせようとしているのかそれでも、囁くように呼んだあの名だけは、どうにか舌が覚えてくれた。

「薫さん……」

そこに愛情さえなく、ただ浮んだ名前を呟いてみた時、唇に触れた温かいものが次第に蘇ってきた。掌に押し付けられた愛情に確信が持たなくて、自分から爪先を伸ばして確かめた。心から愛しい人と交わす初めてのキスだった。クリスは深く溜息をつきながら、机の上に上半身を崩した。頬が柔な熱を帯びるのを感じていた。

薫の本音を知って、その弱さを知って。眩いばかりの輝きがその内部にくつきりと影を落としているのを見た。自身をつまらない人間だと言って貶し、自嘲気味に笑う薫は悲しすぎた。そして、そんな薫の姿を認めたとき、クリスは千住薫と人を愛する新しい境地に至った。それまでの自分は、ただ薫の光に憧れていただけで、今ま

で必死に思いつめていたのも胸をときめかせていたのも全て戯れに過ぎなかったのだ。今になってクリスが望むのは、薫の支えになることだけだった。例え誰に　薫本人にさえ　そうと分かってもらえなくとも、薫の心に一番近く寄り添っていたかった。

学校の先生を好きになるなんて間違っていると分かっていたのに、もう修正のきかないところまでできてしまつて、自分は一体どうなるのだろう。薫にさえ会えば、その答えが見つかる気がしたのだけど

……

「あつ、有瀬！」

教室に入ってきたワインレッドの頭を見るなり、クリスはさつと立ち上がった。昨夜共に盛り上がった仲間たちは、歓迎の意思があつたにせよ、クリスほど正直には表せないでいた　なにせ、全員6時間分の睡眠を取り戻そうとしていたので　しかし、ノアはまるで気にしていないように、クリスに向かってにっこりと手を振つた。

「おはようございます、クリスマス様」

「おはよう。どう？クリスマススイブは楽しかった？」

「ええ。久しぶりに家族水いらずといった感じで。クリスマス様はどうなんです？」

「大騒ぎしたよ。結果がこの有様だもの……」

なぎ倒された稲のように机に突つ伏して眠る友人たちを見て、クリスとノアはくすくすと笑つた。この五人は本日が終業式でなければ来なかつたと思われる組である。まったく昨夜ときたら、飲んだり食べたりしゃべつたりと大騒ぎだった。クラッカーの紙ふぶきが一晚中天井に絶えなかつたし、床は菓子紙の包み紙であつという間に見えなくなるし、窓ガラスは少しでも曇る度に皆の落書きできれいに拭われた。明音は踊り、真央は珍しく調子外れな歌を歌つた。打ち上げではしゃいだ後によくもあれほどの元気が残つていたものだ。

クリスは来客五名とは全く別の理由で相当に遅く寝たのだが、不思議にも目は冴えきつており、時々頭を鈍痛が襲うほかは何の障害も

ないのだった。クリスは妙な興奮状態に陥っていた。心だけがやたらと浮ついて、理性が追いつくより前に喋ったり動いたりしている。今まで何も仕出かしていないのが不思議なくらいだ。いや、実はもう何か仕出かしていて、自分が気付かないで入るだけか。

ノアは机へと歩み寄り、鞆をひろげて教科書の整理を始めた。その様子をびよんぴよん飛びあがりたい衝動と戦いながら見ていたクリスは、ふと朝日の中にあるノアの顔が得体の知れないきらめきに満ちているのを見た。クリスは既に床から離れかけていた踵を床につけ、じつとノアを凝視した。一体この感覚はなんなのだろう。ノアがまるで別の世界の生き物をように感じる。例えるならば、額縁の中の人物のように。自分とは無関係で、それでいて非情に興味深く、美しい存在のように。ノアはすぐに気づいて顔を上げた。小さな頭が傾く。

「どうしました？」

「……いや。なんでもないんだ……」

クリスは口ごもりつつ、それでも尚ノアから視線を離せずにいる。ノアはまるで何事もなかったかのように整頓を続ける。額縁の中の人物は鑑賞者の目など気にしない。二人が住まう世界は違う。

終業式が始まって、来夏たちはこくりこくりするのをやめなかったが、昨夜遅くまで起きていた者はそう珍しくなかったと見えて、校長の演説中、半分以上の者が床を向いていた。しかし、生徒会役員も校長も既にそんな状況に慣れ切っているのか、校長はにこにこと機嫌よさそうに口を動かして、生徒会役員たちは相変わらず取り澄ました様子であった。クリスはノアが隣から囁き声で話しかけてくるのに応対しつつ、そっと壁の辺りに目を遣って、薫の姿を探していた。どこにも見えない。きつと休みなのだろう。薫のような人が、クリスマスに限って時間があるということはあるまい。そこでいう時間には仕事をする時間はもちろん、自分と会う時間まで含まれていた。クリスはノアに向けた微笑みを影の中に落とした。胸の中で

息づいていた興奮が萎んでいくのを感じた。薫は今頃誰とどこにいるのだろう。急に昨夜の出来事が信じられなくなった。

「で、お二人の冬休みのご予定は？」

「いつも通り学校に残るに決まってるんだろ。オレたちに帰る家なんてねえしな」

「最もその『いつも』も今年で終わりだが」

今年最後の集まりにさえ特別な名残もなく、生徒会役員たちは淡々と執務をこなし続ける。そのペンの動きを見る限り、クリスマスイブは特に騒ぐことなく皆それぞれに静かに過ごしたらしい。それでも時折小さな欠伸を隠している者の姿もあつたが、その名は言う必要もなさそうなので述べないでおく。

「それで、そういう君は？」

また一つ欠伸を押し隠しながら尋ねる。

「僕もいつも通り家に帰らせていただくよ。神社を手伝わないと、正月は混むからね」

「可愛い恋人も一緒に？」

「さあね、付いてくるとは思っけど……：：：：慎は、今年はどうするの？」

「少なくとも家に帰る気はねえな」

慎は気のない声で答えて、サインを素早く書き加えた。一同の予定を把握した颯は「ふーん」と言っただけ、ぱたんとノートを閉ざした。次にこのノートを開くのは、きっと年が明けてからだ。それまでに一体どれだけのことが起こるだろうか。左腕を見遣ると、腕時計はそろそろ席を立つべき時刻を示していた。

「じゃあ、後のことはよろしくね。あつ、そうだ、慎、この間言ってた議事録は全部緑色のファイルの中に入ってるから」

「ああ」

ここでも慎は適当な返事をする。もしかしたら、優秀な秘書を一時的にはいえ失うことに不満を覚えているのかもしれない。しかし、

颯はそんなことをつゆほども知らず、手際よく荷物をまとめていく。陽と荔枝は顔を見合わせて少し笑った。

「では、よいお年を。三人とも喧嘩しないようにね」

生徒会室の扉の前で、きちんと踵をそろえて注意した颯に、「好きで喧嘩している訳じゃない」との意の三重の返事があった。

「全く、返事からしてこれだもの」

颯は諦めたように呟くと、時計の針に促されてすたすたと廊下の奥へ消えていった。颯がいなくなった後の生徒会室には、彼の予見どおり、不穏な空気が流れ込んだ。三人とも顔を上げることさえ憚っているが、それでも尚、沈黙は重苦しく肩の上を圧してくる。最も早く仕事を仕上げた者の勝ちというところだろう。三つのペンの速度はますます早くなるばかりであった。

「……そういやさ」

「何だ？」

思いついたように声をあげた陽に、慎は不機嫌に尋ね返した。

「今年は何で家に帰らねえんだよ？」

「悪かったな。俺だつてためえらバカップルと一緒に仕事したい訳じゃねえ」

「おつと、今の発言は見逃してやるぜ。それで、何でだ？」

前髪をさらりとかき上げて、それでもはらりと落ちてきた黒く長い髪越しに、荔枝も視線を投げかける。慎は咳をして唇をわずかに噛んだ。別に理由なんてない、本心からそう言ってしまうれば楽だったのだが、生憎、慎にも家を厭う理由はよくわかっていない。兄の影は既に至るところに染みこんでいて、自室の白い壁やら冷たいシートだけがそれを思い起させるわけではない。この生徒会室にさえ、兄の幻影は見える。それはぼんやりとしているが、時々しっかりとして形をもつて、慎の心を苛める。違うのだ。慎は突如思った。

兄はその影を部屋ごとと落としていくのではない。兄は慎の体に黒さを刻み付けていたのだ。皮膚の上にも、唇の上にも、髪の上にも触れた場所から凌辱の刃で。

「おい、聞いてんのか？」

「……別に理由なんてない」

「はあ？」

「何度も言わせるな！別に理由なんてねえ！」

「やれやれ。近頃の青少年はなかなか気難しくて敵わないな」

老境のような言葉を発しながら、何も知らない荔枝は優雅に紅茶を啜っている。慎は青い目で静かにこの少年を睨んだ。大人の慰み物にされかけたところを間一髪で救われた彼。そして、抗えぬままに兄に翻弄されつづける自分。何が二人の運命を色分けしたのか。まだ知る由もなく。

どうして好きになってしまったんだろうとの後悔が押し寄せてくる。午前いっぱい授業が終わり、学園で受け取る初めての成績表を鞆の奥に押し込めて帰ってきた昼過ぎのことだ。クリスはベランダの手すりにもたれ、いつも以上に穏やかな海を眺めていた。群青色に凪いだ海は、留まることなく流れ出る悩みを吸い込んでいく。

薫は今どこに誰といるのだろうか？到底解明するはずもない謎を悶々と繰り返している。「こんな苦しい思いをするくらいならいつそ会わない方がよかった」とは、古典の物語に聞いたようなさび付いた愚痴だが、どうにかした拍子に口から零れ出そうになるのを、クリスは堪えているのであった。本当に、先生に恋をして罪を重ねたり、罪悪感と嫉妬と孤独とに二重にも三重にも苦しめられたりするくらいなら、クリスは三宿学園などに来ない方がよかったかもしれない。学園に来る前の生活は極めて簡単で、そこに伴う感情も単純だった。ただ叔父と叔母を愛し、絵を描くことに喜びを感じていればよかった。こんな風に誰かを本気で愛することなんてなかった。あふれ出す愛情の熱にささくれた心に灰汁のような毒々しい思いが浮かび上がるのを、知らないでもすんだ

「クリス様」

ノアの声が後ろから呼びかける。クリスは振り返らなかった。ノアはこの恋に干渉してほしくない人物リストのトップを見事に飾っていた。

「クリス様、あの、関本君からお電話ですけど……」

「ごめん。今忙しいから後でかけなおすって言っておいて」

「そうですか。分かりましたあつ、あの、クッキーが上手く焼けたので、よかつたらどうぞ」

「うん……」

「あつ、すみません。今忙しいそうなので、また後でかけなおすとのことです、はい」

「うん……」

「……クリス様？」

受話器に語る自分にまで対応するクリスに、なんら不審なものを感じたのだから。ノアは電話を切ると、訝しげに、心配するように、灰色の視線を投げかけてきた。クリスは首の後ろ辺りにそれを感じていたが、上手く対応できるほどクリスは優しくなれなかった。自分がいかに冷たく浅ましい人間かは痛いほどわかっている。でも、今は精一杯で手がつけられそうにないのだ。

「ごめん」

クリスは前を見たまま言った。ノアの肩がびくんと跳ねて、波風を微かに震わせる。

「ごめんね、有瀬。俺は今こんなことしか言えないから」

「そんな……なんでクリス様が……」

クリスはきつく目を閉じた。これ以上ノアと一緒にいるのは限界だった。辛くてやり切れそうにない。瞼の裏が熱くなって、一瞬涙が零れるものかと期待したが、絞っても何も出ないことに気がついた。クリスは薄っすらと自嘲気味に笑った。乾ききって、虚ろな自分。何もかも全部海に、薫に吸い取られてしまつて……

「クリス様……!!」

「ノア！」

クリスは素早く身を返した。慣れない呼び名に、ノアが大きく目を見張った。クリスは浅く呼吸をしていた。二人の視線が潮風の中で交差する。ノアは期待したに違いない。友人が何らかの思いを吐露してくれることを。だから、不可解な親友の行動への言及を避け、唇を閉ざして静かにクリスを見つめたのに。クリスは浅薄に笑って、ただこう頼んだのである。

「有瀬、電話いいかな？ かけなおさなきゃ…… 関本に」

第二十八話 波間の足元・前編（後書き）

2010年最初の更新となりました第28話「波間の足元」前編は
いかがでしたか？

間もなく連載一周年を迎えます。本年度もどっぞどっぞ愛読ください。
よろしくおねがいます。

篠原零

第二十八話 波間の足元・後編

はたして菜月は来るだろうか。学園の門の前に立ちながら、颯は道路を睨む勇気を起こせずにはいた。この日に家に帰るのは毎年恒例の行事であるから、菜月が知らぬはずがない。高校にのぼって以来、菜月は急にこの行事に参加しなくなったが、今年は来るだろうとの確信があった。確信があったにも関わらず、颯は同じぐらい強い恐怖と戦っていた。全て自分の思い込みではないのか。菜月は友人たちと過ごす方を選ぶのではないか。車が来てしまつたら、自分ももう菜月を置いていくしかないのではないか。こんな風に自信を持ってなくなつたのはいつからだろう。恐らくいつという時はないのだろう。不安は最初からこの胸の中にあつた。菜月を愛おしく感じ始めたその時から。愛と共に不安も育んできた。ただそれだけの話だ。自分たちは愛し合うには大きくなりすぎたのかも知れない。伸びすぎた背が菜月の手を握るには不都合なことを、颯は知っている。それでも背をかがめ、菜月の隣に立つてきた。他の人を愛する方法は学ばなかつた。もしずるずる引き摺り続けているこの関係に楔が打ち込まれたとして、自分は一体どうすればよいのだろうか？もし菜月の姿が今日、あのなだらかな緑の上に見えなかつたとして。

車が横をすり抜けていく音に、颯は飛び上がった。遠のいていく車の色は、間もなく学園と神社を包むはずである雪と同じ色をしていた。颯は、安堵の溜息が唇を割って出るのを確かに聞いた。自分はまだ弱くて幼い。

幸か不幸か、そんな自分の弱さと立ち向かう機会はまだ与えられなかつた。遠くに小さな影が見えた故に。大きく手を振り、満面の笑顔を浮かべながら必死に駆けてくる小さな影が。

「面白かったですね、来夏先輩」

「まあな。だけど、あの結末はいただけねえよな……」

「そんなことないっすよ！俺、めっちゃ感動しましたもん！」

「ライは映画についてはうるせえもんな。この間も一緒に見に行つた映画にケチつけられて……おい、エーリアル、どうした？」

「……えっ？」

船の汽笛がこんなにもはっきりと聞こえる。それでも人の声は相変わらずくもったままだ。クリスはナッツで飾ったチョコレートとバニラのアイスクリームをなめた。海の見える公園は多くの人で賑わっている。皆で腰をおろしている石の階段は冷たいが、上から照る日は温かい。多くのカップルが散歩を楽しんでいる。薫さんも誰かとの公園を訪れていたりして　もうやめよう。先生ことを考えるのは。

映画を見終わった後特有の症状でまだ頭はぼんやりしたままだが、それとこの虚ろな気持ちは関係がない。寮を出たときからずっとこの思いと共に歩いてきた。ノアを置いてきてしまったことに後ろめたさを感じる理由はないと、先ほどから自分に言い聞かせている。ノアは自ら寮に残ることを選んだのだから。ノアに何も打ち明けられないことについても、不可能という理屈において同様のことが言えた。これで良いのだ。一つぐらい親友に打ち明けられないことだつて……

「友達でもいえないことだつてあるさ。それでも俺は分かつてあげなきゃいけないかったんだ」

友達のために呟いた言葉を、今は保身のために繰り返している。自分はその少年に悟ってくれることを望むのか？ やつと深い暗闇から立ち直りかけたばかりの友達に？

「おい、エーリアル、本当に大丈夫か？」

返事もせずに考えに耽るクリスを不審に思ったのか、落合は再度尋ねた。クリスはただ元気がなく頷いた。もちろん、誰も信じようとし

なかった。

「先輩、何かあったんですか？有瀬先輩と喧嘩したとか？」

「……喧嘩はしないよ」

「じゃあ、まさか、クリス先輩まで映画のラストに何か不満が？」
親切心と好奇心でずんずんと突っ込んでくるのは一年生の二人組みだ。来夏は二人の頭を叩いてたしなめているが、こんな状態では最早迷惑だとも思わない。クリスは微笑んだ。心配してくれる友人たちを愛しいと思う気持ちだけが先走っていた。

「石崎、あー、その……」

「いいんだ」

来夏の言葉を遮ってクリスは言った。

「嬉しいよ。ありがとう、気遣ってくれて」

「先輩……」

「でも、本当に、すぐ解決するようなことだから。大丈夫。きっとまるで自分に言い聞かせるような口調だった。クリスは立ち上がり、明音が撒くポップコーンに群がる鳩たちの間をすり抜けて、石の壁にぶつかっては白く弾けていく波を覗き込んだ。三宿海岸付近の海は都会の海であるにも関わらず本当に美しい。しかし、この公園から望めるのはやはり港の海であり、いくら見渡しても水平線は見えなかった。貨物が観光客か、そのどちらかを運んでくる船が忙しく出入りしている。あのオレンジのマークの船は寮の前をよく通っている。

「おい、石崎！」

しばらくクリスを一人にした後で、来夏が呼びかけた。クリスは素直に振り向いた。ノアに話しかけられたときは違って。

「この辺りで解散にするつもりだけど、お前はどうする？」

「皆はどうするの？」

「俺と涌水は町をふらつくつもり。ライと秋元はデート。まあ、どの道この二人には交じれないぜ。鉄則な」

「おい！」

「分かってるよ。そうだな。帰っても仕方ないし、一緒に町を歩こうかな。有瀬へのお土産でも探そうつと」
帰っても仕方ないというのは本当だろうか。自分は寮に帰ってすべきことがあるのではないのだろうか。疑問符は全て掻き消した。クリスは碎けていく波を最後にちらと拝んで、溶け始めたアイスにそろそろ本気で対処しながら、来夏と真央に冷やかしの言葉をかけて右の方向へ進んでいく落合と明音のグループに加わった。

「おまえは暢気のんきでいいな」

嫌味のつもりかと思っただけ振り返ってみれば、そう話しかけられているのは猫の方だった。シャネルはソファの上の荔枝の膝で丸くなり、その細い尻尾を時折揺らしながら、全身を撫でられるがままにしていた。荔枝は高貴な猫の無防備な様子が可愛いらしく、猫用のおやつを時々指でつまんで小さな口元まで運んでやっている。陽はコーヒールを一口含んだ。昨夜の残りのクリスマスケーキは甘すぎる。

「そうか？人間様には分からないだけで、猫だって結構苦労してるかもしれないぜ」

「例えば？」

「オレが知るかよ。ご本人に聞け」

「シャネルが話せるならもちろんそうするさ」

「しかし、生憎猫は何も話せないつと」

元々猫の苦労などには興味がないらしく、陽はそう言っただけで話題を打ち切った。食器を台所まで運んでいる途中で、彼は猫と恋人と二人とが揃って欠伸をする光景を目にした。ペットと飼い主とというのは本当に似るものらしい。口を閉ざした後で上目遣い気味に周りを窺う少し生意気そうな仕草までそっくりだ。カップを完全に片し終えて、陽はソファの背もたれから腕をまわして荔枝の肩を抱いた。シャネルはもう色々承知の上らしく、ぴよんと荔枝の膝を

おりて、速やかにリビングから退散していった。荔枝は「あつ」と言って無念そうに猫の辿る道を目で追っていったが、陽に目を覆われて途中で断念せざるを得なかった。

「猫を見るな猫を」

「嫉妬なんてするものじゃないぞ」

「黙れ」

荔枝は笑って目の上の陽の手を払いのけ、肩を抱いている方の手にはキスを落とした。怪訝な顔をする陽に、荔枝は肘掛にもたれかかりながら言う。

「君は撫でてでも機嫌をとれる訳じゃないからな。猫ほど暢気じゃない」

「……これで機嫌がとれると思ってるのか？」

「もちろん」

「バカか」

言って電光石火で部屋の出口に向かおうとする荔枝を捕まえた。後ろから抱き込んで頬に触れ、先ほど荔枝がしたように掴んだ右手に唇を落とせば、荔枝も既に堪忍したように身を預けてきた。その様子がどこか猫に似ていると思ったのは、果たして何かの錯覚だろうか。

落合は店番の可愛い女の子と話し込み、明音は店の前にいる大きなテリア犬に夢中になっている。クリスには狭く細長い店内をゆつくりと回る他ない。白い壁には様々な絵がかけられており、有名画家の作品の模写もあれば、この町に住む無名の画家たちの作品や、店主である浅黒い肌の老人が収集した非売品などもある。老人は相応に鋭いセンスをしているようで、クリスはたちまち非売品コーナーに釘付けになったが、その中の一枚にクリスは思わずはっと息をのんだ。

見慣れた海が

寮のベランダに打ち出でて望む海が

額の中

にあっただけでなく、その風景が心から尊敬する画家の筆によって描かれたものであったからだ。クリスは目を数度瞬かせ、目の前の絵が幻影ではないことを確かめる必要があった。手と足の先が最初に冷え、それから肩と胸が震えた。間違いない。絵がここに存在すること、これが志水晶による作品であることも、描かれた波間がいつも見る波間と変わりのないことも、全てが真実であった。クリスは絵の右下に目を遣った。専ら白の絵の具で記される志水晶のサインがない。しかし、この絵が志水の絵でないことなんて考えられようか？贋作だとするならばサインがないことが尚更不自然であるし、そもそも三宿学園の生徒以外、しかも、生徒会役員の特別寮に住まう者以外、この景色を知るはずがないのだ。学園の卒業生であった志水なら、絵に描かれた海を何らかの形で見ていたとしてもおかしくはない。クリスは落合と女の子をびっくりさせながら店のカウンターに駆け寄り、パイプをふかして静かに瞑想している主人に尋ねた。

「あの絵は志水晶のものですか？」

老人は片目だけをクリスに向けてこくと頷いた。

そうだ。やはりそうなのだ。ふらつく足で絵の前に戻り、クリスは深く溜息をついた。そもそも志水晶以外にこんなにも美しく、鮮やかで、それでいて物悲しくて、白く縁取られた波の光に目を細めなくなるような絵を描ける訳がないんだ

これが求め続けていた絵なのかもしれない。ふと、クリスの胸にそんな考えが閃いた。すると、激しい興奮にいてもたってもいられないような気持ちになった。志水晶が学生時代に描いた絵は三宿学園にあるとの話だったけれども、出所も確かでないものだったから例えその絵が学園ではなく学園近くの町にあったとしても、特別不思議なことはない。では、本当にこの絵が……？学園来てからの喜びも悲しみも苦労も全部この絵のためにあったというのか？来日を決めた夜が、叔父と叔母に決意を話した午後が、学園の門をくぐった朝が、図書館の本棚を漁った放課後が、走馬灯のように頭の中に

蘇った。それからクリスは、ノアの顔を思い浮かべた。ノアはクリスが学園に来た目的を話したたった一人の相手だ。もしクリスが本当に探し求めている絵を見つけてしまったとするならば、今すぐにもノアに伝えなければならぬ。

「ごめん、落合、明音君！俺、先に帰るから！」

「えっ？」

「あつ、先輩！」

駆け行くクリスが思うノアは、本心を打ち明けられない相手ではなく、白のアトリエの寝室で指を絡めあつたノアであつた。

「なんか緊張しますね……」

「お前何回目だよ、それ？」

海岸を歩きながら、呟く真央に来夏は呆れて言う。

「だって、ほんとにほんとに緊張するんですもん！」

「別にいつもと変わらないだろうが。そんなに硬くなられるとこっちがやりづれえんだよ」

「き、気をつけます……」

全く、普段並んで歩くのと何ら変わりはないというのに。どうして真央はこんなに胸をどきまぎさせているのだろう。手もとれないような雰囲気に来夏は悩む。やはり意識の問題だろうか。お互いの愛を知っているか知らないか、それだけでやはり二人の関係は違ってきってしまうのだろうか。この胸にある愛に変化はないというのに？

「先輩、顔が赤いですよ」

「はっ？」

来夏は慌てて手を顔にあてた。確かに頬が熱い。ただ愛について考えただけで、なぜ赤面する必要がある？まだまだなんだ、と来夏は胸の中で言った。二人とも未熟で初心だ。先ほどから何度もすれ違っているカップルのように、手を繋ぎ、腕を組み、笑いながら道を行けるようになるには、まだ時間が必要なのだ。それでも少しずつ

歩み寄っていけばいつかはなんとかなるだろう　こんな先行きの長い思いで果たして本当に大丈夫かどうか不安はある。しかし、それでも、一度決めたこの道を行く他ないのだ。

「先輩、手」

「えっ？」

「手ですよ、手。貸してください」

すぐ横を見ても真央の顔がなくて。不思議に思ってみれば、海岸に沿って連なる石のブロックの上に真央のスニーカーがあった。いつの間にかよじのぼったらしい。そして、来夏の悶々とした心の内もいざ知らず、平然と左手を差し出している。バランスをとりたから掴んでいてほしいということらしい。来夏は数秒ほど言葉を失ったが、やがて笑い出し、毛糸の手袋に包まれた手をぎゅっと握り締めた。真央は来夏が笑っている理由が不審らしく、顔をしかめた。

「なんですか？どこがおかしいところでも？」

来夏は別にと行って首を振った。その間も笑いは途絶えない。

「あーあ、また発作が始まった……」

「誰のせいだと思ってるんだよ？」

「僕のせいですか?!」

「当たり前だろうが」

「えー……そんなに变ですかね。ブロックの上歩くのって」

「いや、そういうことじゃなくてだな……」

真央は傾きかけた日に横顔を染めながら首を傾け、落ちないようにゆっくりと足を進めている。その右隣に（来夏にとってはその奥）に、斜陽を映しはじめた海がある。

「アニエス姉さんがよくやってたんですよ。前の婚約者と。こういうことしてる時だけは、姉さんもさすがに子供っぽいところがあるんだなあって思っていました」

「へえ、アニエスさんが」

あの可憐な未亡人が真央の姿に重なって、珍しさについつい来夏も

話題に引き込まれていく。

「ええ。今頃もどこかで同じことやってるのかもしれないね、千住先生と。僕のずっと前にいたりして」

「おいおい」

「あの二人、もうお付き合ひしてるみたいですよ。文化祭の夜も一緒に腕組んで帰ってるの見てしまって……僕は姉さんが幸せならちつとも構いませんけど……」

ふと真央が立ち止まったので、来夏も横に向き直る。これまで従姉と薫のことを話しているときには必ず見られた、期待するようないかにんだ微笑みが、今の真央にはなかった。「どうした」と続きを促してみると、真央はゆっくり、一言ずつ噛みしめるように語り出した。

「なんだか怖くて。姉さんが姉さんでなくなっていくような気がするんです。なんて言ったらいいのかなあ……女性らしくなっちゃって、うん、何だか見透かせなくなった感じなんです。先生と話してる時はもちろんだけど、僕を見てるときの顔まで時々違って見えて。誰かに恋したら人も変わるもんなんでしょうけど、姉さんの変化の仕方はなんだか普通じゃない気がする。あれで幸せになれるのか、僕は確信を持ってません……」

「カオル、もういいわ。降ろして頂戴」

腰に腕を回され、ブロックの上にあつた真つ赤なハイヒールが宙に浮くとき、潮風になびいていた前髪が恋人の胸に埋もれるとき、彼女の笑い声は高く、その顔は恍惚としていた。夕日と沈黙の中で、お互いの香水の匂いが混じりあう。

「私は幸せよ」

ア二エスが薫の胸に手をあてて囁いた。

「貴方に会えて、私は幸せ。ずっとずっと傍にいたい。貴方に愛されていたい。貴方となら他の誰とも行けなかった場所に行ける気が

するの……」

アニエスを抱きかかえたままで、薫は彼女の後頭部へと手をのばし、バレッタを外してその豊かな髪を解き放った。長い髪が重なり合う二人の唇を覆い隠した。

「今夜、電話する」

彼女を地面へと下ろして薫は言った。アニエスは無言で頷き、腕時計を見た。もうすぐ夕食を兼ねた次のコンサートの打ち合わせが始まってしまふ。今からタクシーを捕まえれば、何とか間に合うはずだ。

去っていく彼女の後姿を見送って、薫は先ほどから自分射る青い視線の元を振り返った。クリスだった。交差点の向こうに立ち尽くし、何の表情も窺えない顔をこちらに向けている。車が一台二人の間を横切って、クリスの視線を遮った。そこにある種の光があるのに、薫は気がついた。

「おいで、クリス」

薫が呼ぶと、クリスは素直に道路を渡って薫の前にやって来た。薫は褒めるように微笑んだ。

「どうしたの？学校へ帰る途中かい？」

「薫さん……」

クリスは薫の背中に腕を回し、温かく大きな体に縋るようにしがみついた。薫はクリスの見えないところで微笑みを消し去った。両手でそつとクリスの肩と頭を抱く。そこに子供を慰めるような生ぬるいものはなく。

「他の人と付き合っている、それでも僕のことを好きかい？」

「はい」

虚ろな瞳から迷わず紡ぎ出される答え。澱みなく。

「僕は先生だ。君は生徒じゃないか」

「そんなこと何の関係があるんです？」

「でも、もしこの恋がばれてしまったら？」

「逃げるだけです。それだけでいい」

「本当に俺のことを愛している？」

「ええ、愛してます。心から」

「……俺も君のことを愛している」

嫉妬も不倫も世間体も、全てを超越したところに初めての愛を覚えて。少年は毒の中に自ら足を浸し、おぼれていく。愛する人に手を引かれて進む悪徳の道。足元は揺れる波間。その景色は、果たして傍観者の目を楽しませるに足りるだろうか。傍観者の冷たい灰色の瞳を。

第二十九話 細雪が照らす・前編

「よく考えたら、町の外に出るのは初めてかも。学園まではバスで来たんだけど、あまり覚えてないんだよね。気付いたらいつの間にか眠っちゃって。目が覚めたとき最初に海が目に入ってたよ、すごく綺麗だったなあ。実は正直なところ、俺、あまり学園に期待してなかったんだよね。ただ絵のことしか思ってたんだ。でも、やっぱり来てよかったよ、学園に。いろんな人にも会えたしさ。それに何より君にも……あつ、もし寝てたらちゃんと起こしてよね！今日は何も見逃したくないんだ……」

「ええ、分かってますよ。クリスマス様」

「あつ、あれが、皆がよく話してる展望台か。一度見てみたかったんだよね。学園が一望できるってほんと？えつ、別にいいよ、行かなくても。どんな場所なのかなあって思ってただけだから。うん、本当にいいつたら！あつ、それよりさ、朝ごはん何食べた？俺、今朝はあまり食べてなくてさ。いや、具合が悪かったとかじゃそういうことじゃなくて。でも、そろそろお腹空いてきたなあ。お昼にはまだ早いかなあ。そうだ、すっかり忘れてた。サンドウィッチ作ってきたんだよね。鞆に詰めてきたはずだけど……えつ、展望台？いいよ、本当にいいつたら！ほんとにいいのに……」

「いいんです。大丈夫ですよ、クリスマス様」

「やっぱり高い所は気持ちいいなあ！イギリスの叔父さんが湖水地方に別荘を持ってさ、そういう小高いところから原っぱとか湖と

が見下ろすのも楽しいんだけど、思い切り高いところから町を見下ろすのも気持ち良いなあ。スケッチしたいなあ、こんな景色。あつ、あれって学園だよな？ここからでもあの白い塔って見えるんだ。ピサの斜塔みたいだよな、あの塔って。何であんな建物が学校にあるのかな。あの塔の上ってさ……いや、なんでもないや。ねえ、ずっと気になってただけだよあの建物って何？」

「さあ……」

「そういえばさあ、この間教室にスズメが入ってきたんだよ。本当大変だったよ。英語の時間だったから、ジャクソン先生が一生懸命捕まえようとしてただけで飛び回るばかりでどこにも落ち着かないし、窓に二回も衝突するし。結局、校長先生を捜しにきた橋爪先生の頭の上に止まったんだけど、橋爪先生つてばそのまま気を失っちゃってさ。鳥が嫌いなんだって。昔、鶏に追いかけられたとか何とかで。スズメを外に帰すのは関本が上手くやってくれたからよかったですけど、それから橋爪先生の方に手がかかったよ。ジャクソン先生が教科書で頭叩いたら余計伸びちゃってさ……」

「クリスマス様、お茶はいかがですか？」

「遊園地なんて久しぶりだな。小さい頃に両親が連れて行ってくれた記憶はあるんだけど、叔父さんと叔母さんは連れて行ってくれなかったから。連れて行くんだったら美術館って感じだったし。おかげで俺は色々学べたんだけど。最初は何に乗ろうかな？観覧車はやっぱり最後だよな？ジェットコースターとか乗ってみたいなあ。小さい頃は乗れなかったから。あつ、ねえ、君は何に乗りたい？」

「……クリスマス様、お茶のお代わりはいかがですか？」

「あつ、もうすぐ観覧車の一番上の辺りに来るね。うわあ、海がすごくきれい。今日は高い所からものを見下ろしてばかりだね。車もミニカーよりずっと小さいや。人なんて全然見えなくなっちゃうね、こんな高いところだと……えっ、別に、変な感傷に浸ってる訳じゃないさ。でも、ほら、ここから見ると俺たちがいちいち悩んだり考えたりしてることなんて小さなことなんだあつて。それが良いことかどうかはよく分からないけど、少しは慰められる気がするよね。ねえ、そういえばさつきからあまり喋らないけど、どうかした？嫌だな、なんかこういいう感じ……ねえ、もっと喋ってよ。俺、貴方のことを色々知りたくて。あつ……」

「貴方は何も知らなくていいんです。クリスマス様……」

布団から突き出した両足の指を擦り合わせ、爪先に血を通そうと空しい努力を繰り返している。冷え切った真夜中の寝室で、二人は珍しく背を向き合って眠っていた。いや、真実を言えば眠っていた訳ではなく、ただ冴え切ったビー玉のような目を大きく見開いたまま、片手でシーツのしわを寄せ、ぼんやりとそれぞれに感慨に耽っていたのであつた。崖下の繁華街の灯は今尚鮮やかに窓に映って点滅している。いつものように手を繋いだり、指を絡めたり、くだらないことを話せばいいのに。口を開く度に胸の何かが拒む。親友を嫌いになった訳でもないのに、彼を避けようとする働きが心のどこかしらにある。得体の知れないだけにその感情は毒々しく、正義や友情よりも一層強烈にクリスマスの体を支配していた。クリスマスは泣き

たかったが、涙は乾ききっていた。何もできないもどかしさに悶々としていく間に夜は更けていく。ノアは一体何を考えているのだろう？せめて、それさえ知ることができたなら

「クリスマス様、起きてます？」

「……うん」

寝ているふりをしたがる感情をようやくのことで踏みつけて、クリスは答えた。背筋から冷たいものが駆け上がった。しかし、クリスが震えたことを、後ろ向きのノアは知らない。

「何？どうかした？」

「いえ、ただちよつと明日の……あつ、もう今日になっちゃったのか」

「明日でいいよ、まだ夜だから」

「そうですか？じゃあ、明日の予定を聞こうと思って。ほら、明日は大晦日ですから。」

「何か予定がありますか？」

「ああ、うん……」

クリスは寝返りを打った。せめてノアの背を見つめられればと思ったのだが、生憎同じタイミングでノアも振りかえったようで、二人はいつも通りに向き合う形となった。クリスは曖昧に笑うしかなかった。伸ばせない手が布団の中を必死にまさぐっていた。

「どこかにお出かけですか？」

ノアが重ねて尋ねる。クリスは何とも突かない唸り声のようなものをあげながら、自分を振りかえせなかった正体が後ろめたさにあつたことを知った。後ろめたさとは、今年最後の日を親友と一緒に過ごせない故のものである。

「あの、有瀬、すごく悪いとは思っただけ……その、あのさあ……」

……

「ええ、分かってますよ。クリスマス様」

ノアは微笑む。

「ごめん、有瀬……」

「いいんです。大丈夫ですよ、クリスマス様」

「でも……」

「実は僕もそのつもりで予定を入れてしまいましたから」

「えっ？」

いたずらっぽくウィンクするノアに、クリスマスは目を瞬いた。クリスマスがようやくノアと目を合わせられるようになった瞬間であった。なんだ、ならば後ろめたいことなど何もなかったのだ。自分は彼と出かけられるし、ノアも誰かと……まとまった形にはなれない安堵が、ゆつくりと心の上を滑っていくのがわかった。

「なんだ。そっかあ、君もかあ」

「クリスマス様もデートですか？」

「クリスマス様もってことは、君もなんだね？」

「さあ……」

不思議な笑い声が二人の口を伝って出た。楽しげだが喉元から出る乾いた声であった。それでも涙まで浮かべて笑いこけているクリスマスの前で、ノアはおもむろに立ち上がり、部屋の灯りをともした。窓の街の灯が消えた。二人の笑いも消えた。クリスマスは心の底の辺りに霧のようにひろがっていく不安の影を見取った。

「クリスマス様、お茶はいかがですか？」

「えっと、今から？」

「はい。どうせ眠れそうにありませんし、いいじゃありませんか。」

二人とも明日のことが心配で緊張しているでしょう？僕たちにとっでは今夜が今年最後の夜になるんですから」

ノアの提案を素直に受け入れたクリスマスは、時計の短針が十二を回っている傍でベッドを出た。二人は通っていく道ごとに電気をつけながら居間へと向かい、ノアが湯を沸かしている間、クリスマスは椅子に座ってぼんやりと暗い海を眺めていた。一見暗闇のように見えるのが海、灯台の光が当たればその皮膚が見える。なめらかではない。

しかし、荒れてもいない　　そうだ、決断は急がれていない　　紅茶の香りがほのかに漂ってくる。まだ台所にいるノアにクリスマスは思

いついたように聞いてみた。

「ねえ、有瀬は誰とデートなの？生徒会長？」

「秘密です」

ノアは姿のないまま即答した。

「クリスマスこそ、誰なんですか？」

「俺も秘密だな」

クリスマスが答えたところで、暖かく心地よい部屋に茶会の道具が運ばれてきた。二人は手分けして紅茶の用意をした。ノアがカップに熱い紅茶を注いでいる間、クリスマスはお茶請けのクッキーを綺麗に皿に盛った。二人は完全に黙って準備を行った。やがて、パツヘルベルの「カノン」が流れ始め、二人が音もなく席につくと、忘年会代わりの和やかな茶会が始まった。

「今年も一年間、お疲れ様でした」

呟くように言ったノアに、クリスマスはただ頷いた。

「思えば色々ありましたね」

「……そうだね」

「まず、僕たちが出会ったのが今年なんですものね。今年の9月。出会ってまだ四ヶ月しか経ってないなんて考えられません。僕はずっと前からクリスマス様という気がします」

笑いながらクリスマスが一口含んだ紅茶は、白のアトリエでノアが最初に振舞ったあの不思議な柑橘の紅茶だった。クリスマスは椅子の上で折りたたんだ膝からふと目を上げた。白い壁に飾られている絵は、クリスマスが個展のために仕上げたものを数枚持って帰ってきたうちの一枚である。額縁の中には在りし日のアトリエの姿があった。あの懐かしい家ももう燃えてしまって、今は黒い残骸だけが「立ち入り禁止」のテープの中に忘れられたように燻っている。ノアの言うとおりだった。全てたった四ヶ月の中の出来事なのだ。この学園に来たのも、ノアと出会い共に暮らすようになったのも、白のアトリエでの平穏な日々も、アトリエが燃えてしまったその日も、ここに降り住んだのも。ノアが分ならず苦しんだのも、心を通わせられるよう

になったのも、互いに裏切り裏切られたのも、手を取り合って泣いたのも。こんな日々を越えた先に一体何があるのだろう。クリスマスは何も知らない。何も。今、もし自分が何も決断しなかったとしたら、今まで積み重ねて来たものを守っていけるだろうか。何も知らないふりをして、このまま流されていけば、せめて。

「ねえ、有瀬」

クリスマスはもう少しだけカップの中にミルクを注いだ。紅茶の色がまた少し変わっていく。落ち葉の色が秋の深まるにつれて変わるように。

「俺は君に言わなきゃいけないことがあるんだ」

「……………何ですか？」

はつきりとは分からない。白濁した水面ははつきりと映してくれなかったから。それでもノアの横顔が少し揺れた気がした。

「あのさ、俺、今日町でね……………」

「クリスマス……………」

「今日、関本たちと一緒に町に出たときにね、見つけたかもしれないんだ。あの……………」

「クリスマス……………！」

「有瀬」

クリスマスはカップの縁に唇を押し当てた。紅茶を飲んだのか飲まなかったのかはわからなかった。ただ陶器が唇に触れたことだけは覚えている。

「お願い。聞いてほしいんだ」

今まで二人で作り上げてきた色をたった一枚の紙が吸い上げる。そして、それがこの部屋からベランダから望む海を描いていくとき。

「見つけたかもしれないんだ、ずっと捜してた絵を。町のお店に飾ってあったんだ。紛れもなく志水晶が描いた絵だったんだ。この部屋のベランダから見える海が描いてあって……………はつきりと分かった気がしたよ。俺は志水晶の歩いた道を辿ってたんだって」

カノンはもう終わっている。クリスマスが目を向けると、ノアはうつむ

いたままじつと黙りこくっていた。しかし、ソーサーに小指だけを預けた左の拳がかたかたと震えているのにクリスは気付いた。クリスは手を伸ばしてその拳に重ねた。それでもノアの表情は変化しなかった。

「有瀬、大丈夫だよ。まだ俺はどこにも行きやしないから……あの絵が本当に捜してた絵なのかどうか確証もないし、まだ時間がかかりそうなんだ。少なくとも確証が得られるまでは一緒にいられるからさ。それに、あの絵が本当に捜してた絵だった場合の話だよ。違っていたら、俺はまた振り出しなんだ。だから、ねっ、そんなに落ち込まないで……」

「……クリス様、お茶のお代わりはいかがですか？」
恐らくそれが今ノアに言える精一杯だったのだろう。クリスは微笑むと空のカップを見下ろし、自分が先ほど紅茶を飲み込んでいたことを知った。クリスは何も言わずにカップをノアに渡した。気持ちは通じるはずだった。

沈黙の中、ノアから受け取った一杯を飲んでいるうちに、強烈な眠気がクリスを襲った。そろそろお開きにした方がよさそうだ。時計も一時をまわっている。クリスはベッドに行こうとノアを誘おうとして、途中で力尽き、テーブルの上に突っ伏した。ノアは冷やかにその様子を眺めていたが、やがて何か言おうと口を開き、言葉にする前にまた口を閉ざした。死んでしまえばいいのに、このまま眠ったまま死んでしまえばいい。そうしたら、きつとずっと……野暮だとは分かっていたし、自分がとるべき道に背くことも知っていたが、確かにそう思うもう一人の自分がいた。ノアは力なく伏せられたクリスの手を取り、始末に困って、しばらく両手の中に置いておくことにした。

第二十九話 細雪が照らす・後編

見上げれば、澄み切った快晴の空にカモメが数羽浮んでいた。これで一体何羽目だっけ？学園から海沿いの道をずっと走ってきたのだから、もう相当の数を見かけたはずだけでも。空ばかり見ているクリスの肩をぼんぼんと叩く手がある。助手席のきついシートベルトの中で少し身を捻り、その手が示す方向を見遣れば、クリスの知らない街があった。クリスは思わず歓声を漏らした。そこは崖の下に広がる歴史ある港町の三宿町とは違う、近代的な町であった。まっすぐにそびえ立つビルの無数の窓が朝日に輝き、遊園地の観覧車やジェットコースターが賑やかに活動している。膨らんだ巨大なバルーンの赤や黄色がビルの灰色に彩りを添え、海を優雅に進むのは観光客用の遊覧船であった。この新しい感激に対照して思い出した懐かしい気持ちを伝えるべく、クリスは口を開いた。

「よく考えたら、町の外に出るのは初めてかも。学園まではバスで来たんだけど、あまり覚えてないんだよね。気付いたらいつの間にか眠っちゃって。目が覚めたとき最初に海が目に入ってた、すごく綺麗だったなあ。実は正直なところ、俺、あまり学園に期待してなかったんだよね。ただ絵のことしか思ってたんだ。でも、やっぱり来てよかったよ、学園に。いろんな人にも会えたしさ。それに何より君にも……あつ、もし寝てたらちゃんと起こしてよね！今日は何も見逃したくないんだ……」

車はついに見知らぬ町の中へと飛び込んでいった。屋根のない車の上でクリスはまともに潮風を頬に受けながら、クリスは他愛のないことばかり語り続けている。自分の滑稽な失敗談、友人の話、学校であったこと、期末テストの結果、昨日見た映画の感想、などなど。その間、言葉は少しも澁まない。年末の町は多いに賑わい、美

しい。繁華街の真ん中を突き抜ける車の横を、輝かしいものたちが飛んでいく。そして喋りつかれた喉を休め、コーラの缶を飲んで、クリスがシヨツピングモールや博物館の壁の向こうに見出したのは、そう遠くない山の中腹辺りに見える、白い円筒状の建物だった。

「あつ、あれが、皆がよく話してる展望台か。一度見てみたかったんだよね。学園が一望できるってほんと？えつ、別にいいよ、行かなくても。どんな場所なのかなあって思ってたただけだから。うん、本当にいいつたら！あつ、それよりさ、朝ごはん何食べた？俺、今朝はあまり食べてなくてさ。いや、具合が悪かったとかじゃそういうことじゃなくて。でも、そろそろお腹空いてきたなあ。お昼にはまだ早いかなあ。そうだ、すっかり忘れてた。サンドウィッチ作ってきたんだよね。鞆に詰めてきたはずだけど……えつ、展望台？いいよ、本当にいいつたら！ほんとにいいのに……」

結局わがままを言った形になって、展望台までできてしまった。車をおりる足さえ遠慮がちにためらうのに、大きな手がクリスの肩を押しすぎていくと突き進んでいく。高校生用のチケットを渡されたクリスはおずおずとそれを受け取ったが、エレベーターを無視して螺旋階段を駆け上り、三百六十度が窓で覆われた展望室にたどり着く頃には、興奮しきってすっかり遠慮を忘れていた。クリスは窓の前の手すりに手をついて、ガラスが許す限りぐつと体を前に乗り出した。海のきらめくのが南の方向に見える。車で抜けてきた町と、クリスが暮らす町との色合いの対比が、ここならばはっきりと分かった。クリスはぐるりと部屋を一周回って、すぐ見下ろしたところに電車がトンネルを出てくるのや、逆に遠くに雪を頂いた美しい山がそびえているのを眺めた。

「やっぱり高い所は気持ちいいなあ！イギリスの叔父さんが湖水地方に別荘を持つててさ、そういう小高いところから原っぱとか湖とか見下ろすのも楽しいんだけど、思い切り高いところから町を見下

るすのも気持ち良いなあ。スケッチしたいなあ、こんな景色。あつ、あれって学園だよな？ここからでもあの白い塔って見えるんだ。ピサの斜塔みたいだよな、あの塔って。何であんな建物が学校にあるのかな。あの塔の上ってさ……いや、なんでもないや。ねえ、ずつと気になつてただけだよあの建物って何？」

サンドウィッチでも堪えきれなくなった空腹は、町のイタリアンレストランで慰めることにした。店内はひどく混みあっていたが、それでも雑然とした感じがないのは、清潔でシンプルな店の内装と人々の話し声を調和させるジャズ、後は客の品位の高さとかそういうたもののおかげだろう。クリスタちはちょうど海の見える窓辺の席に案内され、食前にオレンジジュースを飲み、それから各自好きそうなスパゲッティやピザを選んで食べた。この店の料理は小さなお皿に綺麗に盛られてくるために悪戯に腹を満たすということはなく、美味しい紅茶とケーキのデザートまでしっかりと頂くことができた。クリスタはチョコレートケーキを三角形の端っからフォークで小さく切り分けながら、ふと先日のお珍談を思い出して喋った。

「そういえばさあ、この間教室にスズメが入ってきたんだよ。本当大変だったよ。英語の時間だったから、ジャクソン先生が一生懸命捕まえようとしてただけで飛び回るばかりでどこにも落ち着かないし、窓に二回も衝突するし。結局、校長先生を捜しにきた橋爪先生の頭の上に止まったんだけど、橋爪先生つてばそのまま気を失っちゃってさ。鳥が嫌いなんだって。昔、鶏に追いかけられたとか何とかで。スズメを外に帰すのは関本が上手くやってくれたからよかったんだけど、それから橋爪先生の方に手がかかったよ。ジャクソン先生が教科書で頭叩いたら余計伸びちゃってさ……」

十分に食休みをとった後、車を駐車場に置いて、二人はしばらく海岸沿いを散歩したり、ショッピングモールをのぞいてみたりした。

それでも特に買いたいものもなく、午後の気だるさがクリスを不思議な安心感となつて包みはじめた頃、遊園地に行つてみないかとの提案がどちらからともなく出た。遊園地とはいつても町の中の一つの景色としてあるもので、さほど大きくはないし、遊具だつて精に限られていたが、観覧車の大きさは有名だつた。クリスは子供のよつに飛び上がつて喜び、おおいにはしゃいだ。

「遊園地なんて久しぶりだな。小さい頃に両親が連れて行つてくれた記憶はあるんだけど、叔父さんと叔母さんは連れて行つてくれなかつたから。連れて行くんだつたら美術館つて感じだつたし。おかげで俺は色々学べただけ。最初は何に乗ろうかな？観覧車はやつぱり最後だよな？ジェットコースターとか乗つてみたいなあ。小さい頃は乗れなかつたから。あつ、ねえ、君は何に乗りたい？」

夕日が沈みかけている。今日は水平線には沈めない夕日。仕方なく低く垂れ込めた灰色の雲の中に落ちる。雲が微かに緋色を透かす。感傷的にはならないために、クリスは必要もないことの中継ばかりした。観覧車ももうすぐ円のでつぺんに来るだとか、海がきれいだとか、車がミニカーよりずっと小さいだとか、人なんてまるで見えないだとか。怖いのは沈黙で、相手が何も喋つてくれないので余計クリスの声を上ずるのだが、自然にクリスの声音も落ちていく。今日の最後に、今年の最後に、鮮やかなまでに夕日を映し出して見せた先刻の海が瞬きする毎に瞼の裏に輝いて。苦しくなる。もつと喋つてと懇願する。でない、何か恐ろしく寂しいものに呑みこまれてしまひそうである……

「あつ……」

突然左手をとられて、クリスは思わず小さく叫んだ。するすると薬指にはめられていくのは、見覚えのある指輪だつた。生徒会役員たちが常に肌身離さずつけている水晶の指輪。クリスの瞳が揺らぐ。いつか慎にも同じ指輪を送られた。結局その指輪ははずしてポケッ

トに入れたままどこかに落としてしまい、クリスは探しもしなかったが、あの時、指輪がクリスに何らかの良い感化を与えたとは考えにくかった。今左の指にはめられた指輪も同様だった。クリスの目を惹きつけて離さない。まるでその透き通った光に酔うように、クリスは息をひそめて指輪を見つめていた。

「指輪……生徒会の……」

「俺が生徒会長の頃つけていたものだ。古いけれど水晶の輝きは鈍らない」

「ええ、綺麗です……」

クリスは唇を弱弱しく引き上げて微笑んだが、もう表情をつくる力すら指輪に奪われてしまったようだった。静かな感激の中で落ちる涙をクリスは止めようとしなかった。一粒落ちてズボンの染みになって、一粒落ちて水晶の光の糧となる。

「おいで」

伸ばされた腕の中に飛び込んで、クリスは愛しい胸の中に顔を埋めた。涙がまだ伝っている頬が持ち上げられ、残照に映える。そしてクリスは唇にキスを受けた。ほろ苦くもあり、そして甘くもあり。

「……今日は疲れただろう？」

尋ねられても返事をするほどの気力もなく、クリスは恋人の胸元で浅い呼吸を繰り返している。大きな手が頭を撫でる。

「クリス、君はとっても可愛いよ」

「子供扱いなんて……」

「してないよ。愛してるから言ったんだ」

優しくなだめられてクリスは拗ねたように黙り込む。観覧車は円を辿りながら下降を続けている。抱き締められて、またキスされて、翻弄されて。耳元で囁かれる。

「ここを出たら少し休もう。僕の家に来るかい？」

クリスは少しの間を経た後、その腕の中でこくと小さく頷いた。

「Lasciate ogni speranza, voi ch' intrate」

塔の上からは様々なものが見渡せる。天井から垂れる巨大な水晶の輝きが全てを照らし出すから。ノアは塔の中心を貫く柱に寄りかかり、アーチ型のガラスのない窓から星を眺めていた。間もなくあの星たちが降ってくるだろう。しかし、ここはいかなる温度とも無関係である。ノアは左手を色のない光の中に掲げて見せた。

彼を信頼していたのか？本気で？頭上から降り注ぐ光の粒が薬指に落ちて灯る。答えはノーだった。彼は何も知らない。分かったふりをしてるけれど、やはり何も知らない。ノアはローブの肩を素早く抱いた。只々彼が憎らしく、心底気持ち悪いと思った。ノアはその場にそっと腰をおろした。なぜこんなにもどす黒い感情が心の中をかき回したように湧き上がってくるのか、自分にも分からなかった。全ては水晶の意思通りに進んでいる。父の敷いたレールの上に全てが規則正しく並んでいる。これでいいのだ。目を閉じさえすれば、また背中を柱に預けてここで眠っていた時のことを思い出しさえすれば、後は何も考えずに済む。光と影は永遠に別たれたまま。自分はノアとして生き続ける。光は影のために潰える。そして、それまでは

窓の外が明るくなったような気がして目が覚めた。もう朝なのか。年が変わるのも意識せずに夜を過ごしてしまった。そんな風に悔やみながら体を起こしたのに、窓辺には未だ暗闇が佇んでいる。一体自分を起こしたものは何だろうと妙に白けた視界で見れば、はらはらと闇を舞う雪が見える。明るい雪が。人の心の隙間にまで落ちてきそうな細やかな雪が。肩まで引き上げた布団がはらりと落ち

るとき、クリスの喉が、肩が、首が、胸が映し出される。それぞれの肌に咲く赤い花びらのような印も。

クリスはゆっくりと熱を失ったベッドの上に崩れていく。見慣れぬ部屋、見慣れぬ寝台、ここで自分は時の移り行くよりもはやく変わってしまった。後には愛情しか頼るものはなく。

鐘が鳴る。年が変わるとき、クリスはメガネを外した恋人の微笑みを見上げて、その胸に静かに身を預けた。

「薫さん……」

「貴方は何も知らなくていいんです、クリス様……貴方は砂の玉座に座り込んで、波が砂を侵すのを待っていてくださいね」

ノアは微笑む。鐘が鳴るのはすぐ真上で。塔が震えた。

「この門をくぐる者は一切の望みを捨てよ」

第三部終

第三十話 水晶の塔（前書き）

第四部 革命

第三十話 水晶の塔

会議室へと向かう理事長の顔には相変わらず何の表情もなかったが、その足取りは重かった。左手首にはめたカルティエの腕時計がその理由を示している。現在の時刻、午前八時四十分。これが平日ならばいつもより三十分早く起きなければならなかったという程度で不満は済むのだが、ちょうど文字盤の4数字の左横のところ、小さな窓枠から覗く3という数字が、理事長の不満を一層煽り立てているのだ。全く自分は理事会の輩を少々見くびっていたようだ。会議会議と繰り返しては、残り半分もない大切な人生の四時間やら五時間やらを奪っていくいけ好かない連中ではあることは知っていたが、まさか人の正月休みまで奪っていくなんて。もう少し家族サービスすることを教えた方がよさそうだ。こんなことを風間の奴に言ったら、きつとまた嫌味の一つでも言われるに違いない。ああ、そういえば風間も今日は来ているんだった。このつまらない会議が終わったら、昼飯につき合わせよう。何がいいかしら。美和子も呼んでやって三年ほど前までよく通っていた天ぷら屋でも行こうかしら。あの店の名前は何て言ったっけ……？牛歩作戦ではないがとにかく遅くなるばかりであった足も、ついに会議室の前に着いて、理事長は重苦しい溜息をついた。分かった、堪忍した、入るしかない。扉に手をかけた途端、部屋の中から戸を開ける者があって、理事長はまだ心の準備が十分にできないままに会議室の有様を見せ付けられ、そして啞然とした。腹を長机に押し付け、ぴんと背を伸ばしている理事たちの姿勢はいつもの光景であるけれど、あの敵意に満ちたざらざらした目を理事長は知らない。一体何があったというのだろうか。理事長は自分を待ち構えている理事たちに気付かれぬよう、部屋の隅に座る風間校長と素早く視線を交わしたが、彼の顔にもいっぴく緊張感と不安が漂っていた。不気味なほど静まり返った中で、理事長は席についた。口を開いたのは議長の男だった。痩せ

ているかがつしりした体型の多い理事会の中で、唯一腹を風船のように膨らませている男だ。やがて彼の言葉で理事会は始まるのであるが、その会議の怪しい雲行きを、理事長と校長は早くも感じ取っていた。

夢のようなひと時を僕は永久と呼びたかった。無限の色彩の中に僕はいた。両手は常に絵の具に干からびていた。それでも、僕は夢のような世界にいた

「逢ふことの、絶えてしなくは……」

「取った！」

パーンと大きな音がしたと思った瞬間、明音が飛び上がって歓声を上げていた。友人たちの拍手に加わりながら、クリスは参ったように笑って肩をすくめた。まさか初戦で勝てるとは思っていなかったが、この負け方だけではどうもよろしくない。皆で百人一首大会をやるう、ということになったのがつい一昨日のことであり、本来ならばその日のうちにも行われるべきだったところを、クリスのために猶予を与えてもらった訳だからせめてもう少しは取りたかったのだが。昨日はノアと向かい合い、床一面に散らした長方形のカードを睨んで一日を過ごしたのだ。その成果は出したかったのだが、まあそれを阻む理由の一つには、あらゆるストーリーカー行為で鍛えた明音の凄まじい反射神経もあるので、クリスはいい加減に痺れた足を伸ばしてふうと息をついた。

「あつ、エーリアル、大会中は正座がルールだぜ」

「勘弁してよ。俺、慣れてないんだから」

「慣れてないって言ったならライだって大して変わらねえじゃないか。なっ、ライ？」

「いや、俺は父親の躰が厳しかったからな……」

来夏は同情するようにクリスに微笑みかけた。

「そろそろお昼の時間ですね。一度中断しませんか？」

読み手を務めていたノアの提案に、クリスマス同様惨敗だった真央が真っ先に賛成して、皆は転倒しないように十分気をつけて立ち上がった。いつもこうした集まりはクリスマスとノアの寮で行われるのだが、菜月がないこともあるしたまには場所を変えて、と来夏と落合が部屋を提供してくれた。この十六畳半の部屋こそ、クリスマスが転校してきたその夜に友人たちが歓迎会を開いてくれた部屋で、クリスマスも時折床から顔を上げて、壁や家具などを懐かしく見回したのであった。

「ああ、よかった。僕、お腹もすくし足も痺れるしでどうなるかと思いましたよ」

「体が軽くなつて正座が楽になつたかもな」

来夏と真央の会話を横に、クリスマスはふと明音の持ち札に目を落としました。すっかり忘れてしまった先ほどの歌の下の句。ああそうか、人をも身をも恨みざらまし 逢ふことの絶えてしなくはなかなか人をも身をも恨みざらまし 歌と明音のあまりの不似合いさに、クリスマスは思わず笑った。全く会わなければいつそ諦めることができるのに、なんて、追いかけてきたのは誰だったかと。

少ない自分の持ち札の中には、そんなにクリスマスの目を引くような歌はなかったけれど、思わずクリスマスが顔を赤くして伏せたのは、長からむ心も知らず……の歌であった。そんなクリスマスの表情を見ていたのは、読み終わった歌とまだ読んでいない歌を仕分けしていた、ノアだけであった。

「今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな……」

「あのさ、有瀬」

散々遊んだ後の夕食の席で、ハヤシライスを掬って口を切ったのはクリスマスだった。ノアはいつも通り「はい？」と言って首を傾げる。どんな話題に対してもそうするように。

「この間、町で見かけた絵の話なんだけど……やっぱり、俺、あの

絵は探してた絵と違うんじゃないかなって、そんな気がするんだ。はつきりしたことは何にも分からないけど。でも、志水晶がその作品で『絵』っていうものを完成させたんだとしたら、だったら、あの絵は違うと思うんだ。すごく素敵な絵だし、志水晶が俺と同じ場所にいたのかって思うとすごくときどきさせられるのは確かだよ。でも、やっぱり……違うと思うんだ」

「……そうですか」

ノアは一瞬間スプーンの凸面に自分の顔を映すようにして俯いたが、その後静かに呟いた。それが喜びを表しているのか、それとも何か別の感情を表しているのかは、クリスには理解できなかった。ただ、また手を動かし始めたときのノアの表情は悲しげにはあつたが微笑んでいたし、灰色の瞳にも優しげな光が輝いていた。

「残念ですね」

「えっ？」

「せっかく見つけたと思ったのに」

「そんなこと言わないでよ。実は少し俺もほっとしてるんだ。近い将来学園を去ることにならなくてよかったって。君ともっと……」

「クリス様」

「何？」

「グラスが落ちそうですよ」

「えっ？あつ、ありがと……」

ノアが自分の言葉を遮ったことに、クリスは直感的に気が付いた。だから敢えてクリスも続けようとしなかった。なぜ言わせてくれないのだろう。照れ隠しのつもりだろうか。それから食器を洗い、冬休みの宿題と一緒に片付け、お茶を飲み、共にベッドに入るまで、二人は他愛のないことばかりを選んで話し続けた。灯りが消えて、互いの顔が見えなくなったとき、絡めた指先の冷たさばかりが互いの存在の証となったとき、クリスはようやく呪縛から解放されたよくな気がした。今なら語れると思った。恐らく、ノアの表情に何かしらの責任を負わなくてすむから。

「今夜は同じ夢が見られるといいですね」
それでも一足早くノアが言葉を放つ。

「……そうだね」

何の感慨もなく、クリスは緩く握った拳の甲を額にあてて同意した。二人が同じ夢を見る意味とは一体なんだろう。

「でも、夢つてすぐに忘れてしまいませんか？朝起きたときには気分だけがそのまま残っていて、後は何にも覚えていなくて」

「そうだね。そういえば、今まで見た夢のことってあまり覚えてないや」

「だから、今夜は一緒の夢が見られるといいですね。そうしたら片方が忘れても、片方が覚えていられるから」

結局二人はそれきり黙したままだった。クリスは何も聞く気をなくした。ただ、二人並んで同じ夢を見る、そのことばかりについて考えていた。その行為の意義も、夢を覚えていなくていけない理由も、どんな夢ならば二人を結びつけるのかも。思案する中で夜が更けていった。やがて真夜中を告げる鐘の音が響く。その荘厳な音に交じって、今夜は強く吹く風が木々をざわめかせ、窓を震わせる音を、クリスは微かに聞いた気がした。

そつと胸元に手を忍ばせ、取り出したのは水晶の指輪だった。この暗闇の中でも僅かな光を受けて見惚れるばかりの輝きを放っている。なぜ生徒会役員の指輪を付けているのか訊かれたくなくて、更にもつと言えば薫との関係を気付かたくなって、年が明けてからはずつと紐を通して首から提げていた。ただノアが寝静まつてから一人物思いに耽るとき、こんな風に取り出して眺めたり、薬指に嵌めてみたりすることはあった。床に散らかした百人一首のカードのように胸に散らばった雑念を、指輪がまとめてくれる気がして。また左手に乗せて見つめ続ける。その光の中に、クリスは何を見たのか。

それでも夢のような時は終わるから。命と水に満ちた森を抜けて人はいずれ荒野に出でる。そして果てしない暗黒の中をさまよい続ける。人間の本来の居場所は、所詮そんな場所なのだ。

僕は今日息子を亡くした。妻を二十四年間に渡って苦しめた病気は、息子を二年ほど苦しませてそして殺した。僕だけが生き残っている。惨めな「健康」なんてものを引き摺りながら。僕には何も残されてはいない。僕は持っている希望全てを失った。もう僕は何も描けない……しかし、僕は学生時代に既にこの絶望への対策を考え出していたではないか。そのための犠牲が必要である。僕と、そして深い闇に心を明け渡した少年が。

水晶を融かしたような海を見つめ、自分を憐れむ声を涙一つ流さず聞いていた。海辺の墓で、幼くして両親を失った幼い少年の姿に誰もが同情し、その行く先を案じた。しかし、クリスマスにとって未来とは虚無であり、何の意味も持たなかった。虚無という言葉を知らない時代の彼は、ただ胸の中で未来と過去の重さを比べてみただけだった。何もない未来　見通しのない暗闇の世界と愛情に囲まれていた輝かしい過去。もちろんその比重は言うまでもない。

「まあ、碌なことにはならないと思ってたけど、まさかこれほどまどとはねえ……」

湿っぽい葬式の中で幾度か聞いた、白けて乾ききったような声にも、クリスマスはますます未来の陰鬱さを思い知らされた。葬儀に参列した父親の親戚たちはほんの僅かに過ぎなかったけれども、彼らとて、両親の反対を押し切って外国人を妻とした父を決して許してはいなかったのだ。イギリスにいる母の親戚たちもそうだった事情に配慮したと見えて、クリスマスにとって叔父と叔母にあたる夫婦だけが来日していった。二人にはクリスマスも以前一度だけ会ったことがあり、叔父の青い目を見ると、クリスマスは凍りついた心の中に少なからず親近

感を覚えた。自分と、そして母と同じ瞳だ。しかし、それでもクリスは救われなかった。クリスは相変わらず闇の中にいた。

「本当に哀れなこと……」

やがて夜の帳が落ち、波の一つ一つに星が煌き始める。生きている者は撤退を強いられたはずの場所で、クリスは墓石の影にじつと身を潜めていた。恐怖は感じなかった。今、クリスがひれ伏すこの土の下に眠る人は、ひたすらに優しい人たち、愛を注いでくれた人たちであった。例え亡霊となつてでも出てきてくれればどんなによいか。クリスはぼろぼろと零れる涙の痕が、睫毛の直ぐ傍で夜気に冷やされていくのを感じた。なぜ両親は自分を置いて逝ってしまったのだろう？なぜ自分も一緒に死ななかったのだろう？こんな世界に一人だけ残されて、自分はこれからどうやって生きればよいのだろう。頼れる人もなく、愛する人もなく、一欠けらの希望さえないこのまま一晩をここで過ごせば死ぬことができるだろうか？それとも死ぬためには、幾日もの飢えと乾きに耐える必要があるのだろうか？両親はいとも簡単に死ぬことができたのに？いつそあの海に身を投げ入れれば……

「いけないよ」

ふらつく足で立ち上がり、虚ろな目で波を掴んで海の方へ歩み寄っていくクリスを、静かな声が止めた。クリスは振り返った。その声に聞き覚えがなかったにも関わらず、クリスは一瞬、背後に父の姿を期待した。声の正体はもちろん異なっていたが、父の亡霊がそこにいたよりも、その人物の存在はクリスにとつて異様なものだった。子供が一人墓地にいて、しかも投身自殺をはかっているというのに、この冷静さは一体何だろう。真つ直ぐな体の痩せた男だ。ほとんど青年といってよいぐらいの歳に見えるが、無表情でいるために若々しさというものは感じられない。生きているように思えず、かといって死んでいるようにも思えない。全身が銀色がかって見えるのも果たして月明かりのせいなのだろうか。男は再度口を聞いた。

「自分を殺してはいけない。自分を殺した者は木となってアルピエ

にその身を啄ばまれる、地獄だね」

「アルピエって？」

「ハーピーのことだ。上半身は女で下半身は鳥の姿の怪物だよ」

「ふーん……」

クリスは男をじっと見返しながら、ぼんやりとその怪物の図を頭に思い描いていた。女の上半身を持つといっても、きつと醜悪な顔をしているのだろう。いずれにせよ、両親が地獄にいるはずがない。自殺では両親と同じところには行けないのだ。クリスは海へ向かっていた足を今度は反対方向へ向けて、男の方へと歩き出した。男は微かに笑った。

「死ぬのが怖くなったかい？」

「別に」

「死を恐れるのは心が健全な証だと言うけどね」

「僕は父さんと母さんのところに行きたいだけだもの。誰かが僕を殺してくれなきゃ……」

「悪いけど、僕にその役目は果たせないよ」

「だったら、やっぱりあの時に一緒に死ねばよかったんだ。一人残されても辛いことだらけだもの。ねえ、僕には歳をとるまで行き続けるしかないのかな？ 貴方は死んでいるの、生きているの？」

「……死者は蘇らないよ、決して」

男は笑みを崩してそう呟くと、音もなく身を返し、墓地の奥の更なる暗闇へ紛れようと足を進め始めた。クリスはためらわずにその後を追っていったが、男の方も特に止めようとはしなかった。最初の内は白くぼんやりと浮び上がっていた墓石も次第に消え、足元に踏む草の豊かな土も、ある時から石畳の道に変わっていった。しかし、今どんな場所を歩いているのかは闇が覆ってしまっただけで、四方は全て沈黙と暗黒に閉ざされていた。これが死への道だとしたら、それはどんなに素晴らしいことだろうか。クリスは思う。静かで痛みも苦しみも伴わない。足を動かしても疲労も湧かない。クリスの心はか

つてないほど穏やかだった。

突然、頭上に星空が戻ったのは、随分長いこと歩いた後であった。間もなく、クリスは星空を遮る白く巨大な影に気がついた。最初は積み上げられた墓石かと思っただが、どうやらそうではない。塔のようだ。その堂々とした頭に鐘を頂いていて、いかにも荘厳に夜空に聳えている。男が塔への入り口となつてゐる装飾のある門を示したので、クリスも続いて塔の中へ入った。塔の中は空洞となつており、円になつた壁に寄り添つて螺旋階段がどこまでも続いている。男はもう大分上を歩いてゐた。ここまで来たからには最後までついていくつもりだった。クリスは階段をのぼりはじめた。

足元は薄暗かった。ガラスのない窓が等間隔で細長い光を投げかけてはいるのだけが、唯一の灯りであつた。しかし、幼いクリスは格別に警戒することもなく、ひたすら頂上を、男を目指して上り続けた。男はクリスより二段ほど高い円を巡つてゐる。彼が何かを見せようとしていることにクリスは気付いてきていたが、まるで見当はつかかなかつた。それは恐ろしいものだろうか。それとも美しい、希望を抱かせるようなものだろうか。答えはあの白い丸天井の上にある。そして、時間や距離に対する感覚がクリスから一切奪われた後で、ついに答えは示された。

クリスのはつと息をのんだ。美しく、しかし同時に恐ろしいものが、何の前触れもなく目の前に現れたからだ。クリスが訪れたのは、いくつものアーチ型の窓に囲まれた円形の部屋で、巨大な水晶が天井から垂れ下がつてゐた。その輝かしい結晶のうち、最も大きく真っ直ぐ床に伸びたものが、部屋の中央にある円柱と繋がつてゐる。床も壁も一面白く、水晶は月明かりや星の光を受けるでもなく自ら輝き、光の波を部屋の至る所に投げかけてゐる。部屋の入り口に立ち啞然とするクリスの顔にも、円柱に手を寄せ、水晶を見上げる男の顔にも。

「こつちへおいで」

男が呼んだ。クリスは言われた通りに歩み寄り、背後から両肩に彼

の手を受けて再び水晶を仰いだ。その瞬間にも、水晶はオーロラのように光の色と形を変えていく。

「美しいだろう？」

男の問いかけにクリスは頷いた。何か言いたくてもそれが精一杯だった。

「あれは世界で最も美しいもの、世界で最も光り輝いているものなんだよ。あの水晶は、この世界の全ての人の憧れであり、夢であり、この世界の全ての人を支配するものなんだ。僕が完成させた。僕がやっと形にしたんだ。たった一つの筆で。僕の願いをこの水晶が叶えてくれる……」

それから男は不意にクリスの肩に涙を落とした。クリスは振り向いてその顔を見上げた。男は手の甲で涙を拭って笑いなおした。

「すまない。でも、悲しくて泣いてる訳じゃないんだ。ただ、夢が叶った時のことを思っていたんだ」

「貴方の願いは何なの？」

クリスは聞いた。男は笑ったまま答えない。

「ねえ、貴方の願いは何？」

「……僕の願いは死んだ息子を蘇らせることだ」

「息子？」

「そうだ。病気で死んでしまった。大切な大切な僕の子供だったのに。僕の光だったのに。クリス、僕たちは似ているね。二人とも大切な人を亡くしてしまっただけだから。ただ、失った人たちを蘇らせられる力を持っているか、そこだけが違う」

「なんで僕の名前を知ってるの？……蘇らせるってどういうこと？

……だって、貴方は……」

水晶のシャンデリアの上で揺れる鐘の音が、クリスの言葉を遮った。真夜中を知らせる鐘、日が変わる瞬間、それでも夜は終わらない。男の微笑が色のない光の中で怪しく閃いた。男は片方の手をクリスの肩に乗せたまま歩き、水晶を指してクリスの視線を誘導させると、耳元で誰かの名前を囁いた。誰だろう？知らない名前だ。僕はそん

な名前の人間ではない。いや、僕の中に彼がいるのか。クリスの青い目の色は、次第に水晶の光に呑みこまれて虚ろになっていく。でも僕の名前はノアじゃない。僕は

世界が真っ白になり、また暗く閉ざされて、酸素に満ちた重たい液体がクリスの肺に流れ込んできた。クリスは水の中で目を開けた。水面から差し込む朝日のような優しい光が、クリスに向かって微笑む少年の顔を歪みなく映し出していた。クリスと少年は手を繋いでいたが、クリスが浮かび上がっていくのに対し、少年の方は水底へと沈んでいこうとしていた。クリスは手を離したくなかった。その少年に対し今まで一度も愛情を感じたことがなかったにも関わらず、そんなクリスを見て、少年は口を開いた。

「手を離して。僕は貴方のために行かなければ」

「僕のためって？」

手を離すまいとますます必死になりながら尋ねる。答える少年の声は穏やかだった。

「貴方が生きるために。そして僕が生きるために。貴方は弱さを捨てて強く生きられる。僕はそれを心から望んでいます」

「君は……君は誰なの？」

「僕は……」

二人の絆は辛うじて指先で繋がっているだけになっている。もう間に合わないことは分かっていた。それでも最後の瞬間まで、クリスは爪の端にまでこめた力を緩めようとしなかった。二人の手がそして離れていく。少年は相変わらず微笑みをとどめたまま、底に沈んでいく。その身が水底の闇に染められていくにつれ、その髪と目の色が鮮やかになっていった。浮かび上がって行くばかりのクリスは、間もなく空気に触れようとしている唇を動かし、この水の隅から隅にまで届くよう、めいっばい叫んだ。

「待ってて……」

灰色の小さな光だけになった少年の目が驚きにきらりと光った気がした。

「待ってて！必ず迎えに行くから！今度は僕が助けに行くから！」

「でもその時には、君たちはもう別々の人間になってしまっているだろう。二人は永遠に離れてしまった」

「それでも僕は行かなくちゃ……！」

暗闇の中に置いてきた君を、僕は決してそのままにしておいたりしない。必ず僕は迎えに行く。そして、絶対に君を助けるから

「君を助けるから……」

浴槽から顔を出して、クリスは濡れたままの唇で呟いた。今あげた水しぶきが、湯から出したばかりの火照った肩や腕に零れかかった。額に張り付いた前髪をかきあげる。誰かとそんな約束をしたような気がした。でも、まさか。そんな大々的で気障な約束なんてするはずがない。漫画やアニメではあるまいし。しかし、風呂の中に顔まで浸している時、そしてしたはずのない約束を呟いた時、心に光のさすような、懐かしい気持ちになったのはなぜだろう。分かるはずがない。今のクリスには。

クリスは防水加工済みの時計を見て、かれこれ一時間近く風呂場にいることに気がつき、慌てて浴槽の縁に裸足をかけた。今朝は何となく目覚めが悪く、珍しく朝風呂を使ってしまったが、ノアはとつくに朝食の支度を済ませて待ちきれないでいるに違いない。クリスが超特急で着替え、最後にセーターの袖に腕を滑らせたその時だった。コンコンと扉を叩く音がして、クリスの名を呼ぶノアの小さな声が聞こえてきた。

「……クリス様？」

「ごめん、有瀬！俺、色々考え事しててさ。なんか今日見た夢のことを思い出そうとしてたら頭がこんがらがっちゃって……今行くから、あと少しだけ……！」

「クリス様、父が理事会を追放になりました。昨日のことです。父はもう理事長ではありません」

「……えっ？」

自分の耳を信じられず、クリスは扉を開けた。エプロンを装着しておたまを持ち、ノアが洗面所の前に立っていた。特に憔悴した様子もないが、動揺したその名残がノアの表情の中に認められた。

「有瀬、今なんて……？」

クリスはごくりと唾を飲んで言った。声が掠れる。ノアは囁くように返した。

「父が理事長をやめなければいけなくなっただけです。昨日の理事会でそう決定したそうです。父はもうこの学園に対して何の権力も持たなくなりました」

音をたてて床に落ちたおたまの凹面に、朝食を並べられた二人の間が映りこんでいた。

第三十一話 時雨を待ちながら・前編

ひとり風の音に耳をすませるとき。時雨を待つとき。

「これで一つ僕は目的を果たしたよ。あの男が我が物顔で僕の学園を歩いているのには心底嫌な心地だったよ。そうだろう、ノア？」
「ええ、お父様」

薄暗い照明にワインの濃い色が映える。安楽椅子に凭れ掛かり、グラスを揺するのは紛れもなく薫であったが、その表情、仕草、声などに普段の彼と異なる所が見られた。ノアはまるで臆することなく、そんな薫の真向かいに立ち、静かに手を組んでいる。二人の間には丸テーブルが置かれ、その上には絵を入れた額がある。遠くから見れば、それは神々しい女神のようにも、可憐な妖精のようにも見える。だが、傍に立つノアにはその絵の正体が見えていた。

「あとは光を消し去るだけだ。水晶の美しい輝きならいい。だが、世の中には目障りな光もある。全て紛い物だ……」

薫はふと天井を見上げた。電灯が放つ光は先ほどから弱々しく揺れている。ノアは二歩ほど後に下がり、くると向きを変えて部屋の出口を目指したが、そう広くないこの部屋ではいとも簡単に捕まってしまう。後ろ向きに引つ張られたノアがぶつかった衝撃で、丸テーブルは大きく揺れ、絵が床に落ちた。

「……っ！」

「大丈夫だ、ノア。怖がらなくてもいい。光は直に消える」

「僕は時々分からなくなるんです……貴方は誰なんですか？」

「お前の父親さ。紛れもなくね」

目を閉じてノアは思い出す。心待ちにするのはバカげいるけれども、どうしても忘れられないあの言葉　今度は僕が助けに行くから……

……！

冬休みの最後の三日間は宿題を片づける作業で潰された。二週間弱の休みもすり抜けるように過ぎていき、始業式が行われ、授業が始まった。教师生徒共にまだ正月ボケが抜けていないらしく、鳥居先生は英語を発音しようとして一時間に三度も舌を噛み、橋爪先生は公式を書き間違えた。この時期に生徒がぼんやりしているのは言うまでもないことだが、しかし、年が変わって以来、校長がぴたりとサボリ癖を出さなくなったのは、さすがに事情があるらしいのだ。噂では理事長が変わったのが原因だということだが、この突如の理事長追放事件については、授業中はぼやけている生徒も教師も急に深刻な顔を始めて、こそこそと少人数で固まって意見を交し合っていた。クリスはその群れに入らないでいたのは、ノアの心を慮っての行為であったが、ノアは案外平然としていて、新しく理事長になった大林という鉛筆のような男にも、きちんと腰を曲げて挨拶する始末であった。クリスは一度、理事長はどうしているのかと恐る恐る尋ねたことがあったが、こちらもこの少年の父らしく、落ち込みもせず、寧ろやつと暇ができたと喜んで、元来の美食家の気質を満足させることに熱中しているらしい。やっぱり変わった人だとクリスは思った。

本人がまるで気にしていないなら、周りが格別懸念するようなこととはなさそうに思えたが、それでも、理事長の追放にはやはり不審なところがあるし、生徒にこそ伝わってこなかったが、先生たちの方では遣り方に大分変わったところが見えて、不満を漏らす声もあるらしい。しかし、何せ今度の理事長がえらい強硬派で、下手なことをすれば首を切られかねない。自分のことは良いにしたって、この理事長の思いやりのなさときたら、生徒にも危害を加えかねないということ、先生方は生徒たちのために出切る限りの沈黙を保っていた。一方で、生徒会役員たちは大林理事長に前任よりもずっと懇意にしている節があった。

「訳がわからねえ」

「ああ、全くだな」

「校長は犬なので金色のスカートを持っていますってどんな状況だよ？」

「……和訳し間違えてるんだろ」

来夏が落合のテキストに横から顔を突っ込んでいる最中、クリスたちは理事長と談笑して歩く生徒会役員たちを観察していた。「様子！」と騒ぐ明音を鎮める役は真央が務め、菜月は颯の姿を目で追いながらつまらなそうにシャボン玉を膨らませている。クリスとノアはシャボンの液に十分警戒しながら、弁当を使っていた。

「酒本、颯先輩は何か知らないの？理事長のことについてさ」

「知ってても教えてくれないよ。秘密主義だもん」

クリスの問いに、菜月は気のない声で答えた。

「そっかぁ、教えてくれないのかぁ」

「有瀬こそ自分の父親なんだから聞けばいいじゃん」

「父も何も教えてくれないんですよ。秘密主義ですから」

「確かに……」

間もなく生徒会役員と理事長の姿は見えなくなり、いつもの中庭での穏やかな昼食が再開された。明音も騒ぐのをやめ、今日もこちらを見てくださらなかったとしょ気ていたが、ふと、真央の様子が彼の気を引いたらしく、心配そうに尋ねる声が左から聞こえてきた。

「秋元、どうかした？」

「えっ、あっ、ううん、何でもない」

「どうした？」と来夏も尋ねる。なんでもないと言いながら、真央は喉の辺りを押さえて小さく首を傾げていた。同じ事態を思い浮かべ、皆の間に緊張が走る。

「おい、まさかお前……」

「ち、違いますよ！さっき食べた鮭の骨が引っかかりましたみたいで」

なんだと息をつく一同は、来夏の色が誰よりも早く変わったのを見届けた。

「おまえなあ……気をつけろよ。喉傷つけたら歌えねえだろう」

「そうでした……」

「そうでした、じゃねえよ。早くうがいでもしてこい」

「はい」

やはり喉に違和感を覚えて、わざとらしい咳のようなものを繰り返しながら、真央は素直に水道のある方へと向かっていく。溜息をつきつつも足取りが軽いのは、来夏の言葉が嬉しかったからだ。ぶっきらぼうな言葉で、無愛想な表情で、自分を心配し、愛してくれる先輩が好きだ。まだキスもしてないけれど……真央は思わず指を口元まで持ち上げた。指で触れただけなのに、薄桃色の唇は形を崩す。いつか指ではないものが、この唇の形を崩す時が来るのだろう。自分はいく少し背を伸ばして。先輩は少し身を屈めて。楽しくもあり気恥ずかしくもある空想が途絶えたのは、ふと自然に咳が零れた拍子だった。口を押さえた後の掌を見て真央は立ち止まり、しばしその場で呆然としていたが、冬空に飛び交う小鳥たちのさえすりを機に、掌を隠すように拳を握り、水道へ走り出した。幻覚だ。嘘だ。有り得ない。そんな言葉が脳を横切っていく。真央は深く息をついたあと、ようよう震える拳を解いたが、水に濡らした掌には最早何も残ってはいなかった。

「秋元君？」

真央ははっとして振り返った。ラベンダー色のセーターの上に白衣を纏い、右手に救急箱を、左手にサツカー部の室井の襟首を掴んで引き摺っているのは、養護教諭の里見先生だった。

「大丈夫？どうかした？」

「いいえ……何も」

真央は自分の言葉が事実よりも胸奥で疼く願望の方を多く示していることに、密かに気がついていて。

「冬休み中は何をしていた？」

「別に、何も」

放課後の誰もいない教室の前を右肩に、荔枝と颯が歩いている。

荔枝は黒く長い髪を乾いた空気に時々舞わせながら、颯はきつく組んだ腕の中に数冊のファイルをきちんと収めて。

「惚けることはないだろう」

「惚けるも何も、別になんにもしていないっつたら。今年も相変わらずさ。神社の手伝いして、菜月と宿題して……」

「隠すなよ、颯。私と君の仲じゃないか」

「……そんなこと言ってるよまた陽が拗ねるよ」

「私は変なつもりはなかったのだけど……なぜ？」

優雅に首を傾げる親友に、颯は呆れた微笑を向けながらファイルを二、三冊、腕の中から引つ張り出して預けた。全く、荔枝もつくづく人が悪いと思う。小学生から海王学院初等部からの付き合いであるから、この学園の生徒の中では、菜月の次か同じぐらいに古い絆を持つ友人である。しかし、それを絆とか友情と呼んでよいのか、はつきりとしたことは分からない。互いに大切な友人であることは確かであるし、着飾らずに遠慮なく淡々とした会話のできる相手という点でも、互いに貴重な相手である。それでも、やはり二人はいつも距離をおかずにはいられない。友情からくる細々とした愛はまるで生まれてこない。これはきつと颯と荔枝だけにいえることではないのだ。生徒会役員たちの全ての相互関係において言えることで、唯一の例外が荔枝と陽の恋人関係ということになるが、彼らの愛とて本式の恋人の愛情といえるかどうか怪しいところが少々ある。四人はどんな建前があるうとも、互いに信頼はしている。けれども、決して互いに頼りあったり、本音を語り合ったりすることはない。それを寂しいとか虚ろだとか批判するのは、また外界の人間の話だ……

「新しい理事長を君はどう思う？」

こんな思考をしている間に、荔枝はさらっと直球で投げかけてくる。「どんな人だろうと関係ないよ。どうせ水晶の言っどおりに動いて

るんだから。強硬派だなんだって先生方は仰ってるけど、あんなのただの操り人形で言われた通りにしてるだけさ。まあ、そういう意味では前任よりはよっぽど愚鈍なんだろうね……」

「君のその考えを採用すると、私たちまでもが愚鈍ということになるぞ。私たちとて、水晶の言うとおり動いてる人間だろう？」

「そうさ。僕は自分のことを差し置いて物を言ったりしないさ。僕も、そして君も愚鈍だよ。そして、同時に賢い。僕たちは自分の住む世界に従うしかないじゃないか」

颯の横顔を暗い影が横切るのを、荔枝は一瞬見た気がした。肩を竦めて小さく溜息をつく。反論はできまい。窓の外を見遣れば校庭に運動部の生徒たちが集まっているが、結局彼らとも自分たちも大差はないのだ。決められたものに従い続ける。光を求め、その下に集う。自分たちを惹き付けるものの正体を知っているか、知らないか、それだけの差で、自分たちは校内におり、彼らは校外にいる。荔枝はふと思いついて窓を開けた。冷たい風が不意に二人の傍を駆け抜けていく。

「……こんな日には時雨が来そうだな」

右手を開いた窓の外に手を突き出して、荔枝が呟く。颯も隣に立って空を見上げる。吹き抜ける風が微かに湿ったように匂う気がした。

「冬休み中に美術館へ行っただろう？」

「おかしいな。相当ばれないように気をつけたつもりなんだけど」

「私には私の情報網があるのさ。安心しろ。どうせ水晶は気付いていない」

「だといいいけど。まっ、美術館に行った目的までは喋らなくていいよ」

荔枝はただ微笑みの形だけを浮かべた。

目を素早くかつ慎重に動かして、居間の椅子に花を持って斜めに腰掛ける真央と、スケッチブックの中の線とを見比べてみる。やや

形に修正すべきところがあって、急いで消しゴムを取る。真央は飽きる様子も疲れた様子も見せず、よく耐えてポーズをとり続けている。マネージャーとしてサッカー部の生徒たちの世話をした後だというのに、大した気力であると、見守る友人たちはひたすら感心していた。金曜日の今日は、明日も皆遅いこともあって、夕食をクリスとノアの寮でとることとしたのだ。カレーライスとスープの温かい食事は皆終えたところで、明音の「何となく」の発案によりクリスが誰かの絵を描くこととなって、来夏の「さり気ない」提案によりモデルは真央と決まったのだ。よく見れば、真央はぼんやりした様子で、食事時もスプーンの動きはゆるやかであったが、このモデルの役割だけは素直に受け入れた。ノアの育てた白い薔薇の茎を持つ真央の手は、じんわりと汗ばんでいく。

昼間の光景は、花持つ手に見た赤さは、果たして幻覚であったのか。そんなことが絶えず頭の中を巡っている。幻覚であると認めようとすればするほど、そうでない主張し続ける意地の悪い声が高くなる。ためしに咳をしてみても、何かそつと言ってみても、澁みなく言葉は出る。まるで確証がつかなかった。自分はまだ笑えるし、喋れるし、歌える。それは自分が健康である紛れもない証拠になる。だというのに、なぜ心はこんなにも不安でぐらぐらと揺れたままなのだろう。誰か何か言ってはくれないのか。

「クリス先輩、今度慎様の絵も描いてくださいよ。今ちようど、ベツドの上の天井のところに貼るポスターがないんすよ」

「えー、嫌だよ。なんで生徒会長の絵なんか……」

「それより先にベツドの上の天井って何なんだよ」

落合がこつんと明音の頭を拳で叩きながら言った。明音が、起きた後と寝る前に好きな人の顔を見る幸せを語り続ける傍で、クリスはうるさそうにもしないで、熱心に手を動かし続けている。その少し後ろから来夏と菜月が興味深げにその動作を眺めている。来夏の目が時折、自分の上に注がれるのに、真央は気がついていない。何かクリスの動作を見るのとは違う、独特な色を帯びた目だ。恋人を見る

眼というのがあのような目なのであろうか。そんな素朴な疑問にも真剣になれない自分がいる。もしあの光景が本物だったら、自分の身を何か汚染されたようなものが蝕んでいるとしたら。そんなことは想像するだけで、どこかに逃げ出したいような、目を閉ざしてしやがみこみたいような衝動に駆られるのだった。

「お茶が入りましたよ」

ノアがティーセット一式を揃えて、台所から顔を出した。こういう時に限って行動の早い菜月は、さっさと椅子を飛び降りて、自らノアを手伝った。アップルティーの甘くさわやかな香りが皆の鼻についた。菜月はノアの手作りクッキーの缶を見て、早くも飛び上がった。菜月はノアの手作りクッキーの缶を見て、早くも飛び上がった。

「ごめんね、真央君。後もう少しだから。ちょっともう少し肩のところをどうにかするだけで……」

「いいえ、お構いなく。僕は大丈夫ですから」

真央は屈託なく言った。自分とクリス以外は揃ってテーブルを囲み始めているが、今日は食後のせいとか、特別うらやましさも覚ええない。来夏はなんとなく遠慮して紅茶を口に運ぶ手も遅れ勝ちであったが、菜月はクッキーを次から次へと頬張っている。落合が角砂糖を三個ほど口に放り込んだその一瞬だけ、真央は再び喉に違和感を覚えた。

「あっ」

クリスは鉛筆の先を素早く手の中でひっくり返そうとして、鉛筆の線を描きかけの絵の中に一本引いてしまった。後で消すのだから別に放っておいてもよいのだが、場所が不吉なだけに、誰にも気付かれぬうちにと急いで消しゴムを取った。真央の喉に一本、横切るような線を引いてしまったのである。

「まあ、出ない……」

里見先生は苛々と携帯電話の電源を切って腰を手に据え、がくんとうな垂れた。これで四回目だ。時間も三十分毎にきちんとあけて掛けているというのに、友人は一向に出てくれず、メールの一通も

寄越さない。今夜は仕事が入っていないと言っていたはずで、もしかしたら一緒に食事行く予定が入っていたかもしれない日だったのを、こちらの都合で断ったような次第なのに。さては、デートにでも出かけたのだろうか。土日を前にした、恋人たちの甘く耽美な時間。自分からはかけ離れてしまったもの。里見先生はソファに腰をおろす。おろした直後に、鈍いうめき声が上がった。

「痛っ！」

「はいはい、ソファは寝転ぶところじゃないわよ」

里見先生はきびきびと言って、夫であり、三宿学園に講師として勤めている里見務先生の足を床上に追い出した。十畳ちよつとのリビングの出来事である。

「いいじゃないか、疲れてるんだから……」

「疲れてるんだったらベッドに行きなさい」

メガネの奥から涙目をきらめかせる夫は、里見先生の厳しいお言葉を頂くと、大きな目を細くさせて言い訳した。

「いや、眠たい訳じゃなくて、ちよつと休みたいって程度なんだよ。

これからニュースも見なきゃいけないし……」

「ちよつと休むぐらいは上半身を起こしてもできるでしょ」

「冷たいこと言うなよ。全く、友達が電話に出ないからって僕に当たるのはよしてくれよな」

「だって、だって、大切な話があるのに出ないんだもん。しかもその理由がデートときたら、ねえ……」

里見先生は太ももに肘をつけて頬杖にし、憂鬱に溜息をついてみた。真央の様子が少しおかしかったことをアニエスに報告しようとした。ほんの些細なことでも伝え合うことを、友人として以前に、生徒を保護する義務を持つ者同士として結んだ。それなのに、アニエスときたら。デートじゃなくて、仕事が入ったとかならばいいのだか。いけない、私ったら、何がいいのだか。デートにしても仕事にしても、アニエスに電話が通じないことは変わらないのに。ああ、でも何か無性に気に食わなくてならないものが、デートでないです

れば少し収まる気もするのだが。とにかく何かが嫌だ。アニエスが素敵なレストランで、あるいは静かな海辺の公園で、あの千住薫という講師と見つめあったり抱き合ったりしている姿を想像するのは、もし、本当にアニエスがデートに出かけていたとして、真央に何かあった時、自分は彼女を責めずにいられるだろうか。そんな不安まです胸を過ぎってくる。でも、一つだけ確かなことは、それが確かな故に里見先生の心は一層こんがらがってくるのであったが、自分のくすぶった思いが今をときめく女性への単なる嫉妬でないことだ。

「ほんっと、訳わかんないや……」

第三十一話 時雨を待ちながら・前編（後書き）

あとがき

お久しぶりです。篠原です。

更新が遅れに遅れてごめんなさい……実はパソコンが壊れまして、せつかく書きためておいたネタやらプロットやら全部消えました。

ただ今新しいパソコンで再度プロットを書き直し中です。

しかも今年を受験ということもあり、更新が相当遅れることと思われます。私も、実はパソコンが壊れた時点でもう執筆をやめようかと思ったのですが、毎日足を運んでくださる方の方に励まされ、何が何でもこの小説を完結させようことを決めました。

残り十話もなくなってきており、非常にさみしい気持ちがいりますが、とにかく走り抜けるつもりでございますので、よろしくおねがいします！

篠原零

第三十一話 時雨を待ちながら・後編

「上手くできましたね」

「うん……」

土曜日曜を以って完成させた真央の絵を手には、クリスとノアは午後の廊下を歩んでいた。来夏に尋ねてみると、真央の居場所は恐らく音楽室だと教えてくれた。何でも、毎週この時間にはアニメと一緒に歌の稽古をしているそうだ。もちろん、クリスは来夏に絵を見せることを怠らなかつたが、来夏は一頻りクリスの絵の技術を褒めた後、恐らく胸に起こつたであろう何かしらの感情は一言も口に出さずにいた。しかし、彼としても恋人を描いたこの絵に多いに満足したことは間違いない。作者であるクリスとしてこの絵は近頃の絵の中で、なかなかの出来だと思つた。頬を斜めに向け、どこか遠くを見るような目をした真央は、空想画の乙女と紛えるほどに可憐であり、アクリル絵の具で彩つた肌の色、唇の色に、普段の無邪気な真央には見られない色つやがあるのである。

「君も皆の絵を描いてあげればいいのに。あんなに上手いんだからさ」

「僕の絵には色がつきませんもの。人に差し上げるからにはもっと華やかでない」と

「そんなことないよ。鉛筆画だろうが何だろうが……」
踊り場にさしかかつて、クリスははつと口を噤んだ。薫がちょうど階上からおりてくるところだったのだ。薫はすぐにクリスには気がつかずに、思慮深そうな目で両手に広げた学校の広報誌に向けていたが、クリスが小さく「先生」と呼びかけると、ふと顔を上げて微笑んだ。薫を見た時に大きく跳ね上がった心臓は、今は落ち着きこそしているが、まだ小さくときどきと微かな脈を打っている。挨拶を交わした後、二人の間には掴みきれないような妙な空気が漂つた。そつえば、薫の顔を見るのはあの日以来だ。一緒に隣町へ出かけ

て、そして……

「久しぶりだね。元気だったかい？」

仄かに赤らんだクリスの顔に気付いてか気付かずにか、薫が尋ねる。

「ええ……先生は？」

「僕も元気さ。ありがとう」

クリスは溜息を押し隠すので精一杯だった。もし隣にノアさえいなければ、もっと打ち解けて話すこともできるのに。場所が場所だけでももちろんこの間のようにはいかないだろうが、せめてこんなに他人行儀ではなく、せめて「薫さん」と呼ぶぐらいのことはできるのに。だが、驚いたことに、薫はクリスの唇を奪い、小さな頭を優しく強い力で壁に押し付けた。クリスが声をあげようとするのも、人差し指で制する。

「今日は珍しく一人なんだね」

クリスのはつとして隣を振り見た。いつの間にかノアは溶けるように消えていた。

「あれ、有瀬……」

「君に会いたかったんだよ、クリス。ずっと」

「あつ……」

「僕の顔をちゃんと見て、クリス」

薫がメガネを外す。直接瞳の中に差し込んでくる青い光に、心まで射抜かれて動けなくなる。あの夜みたいだ、とクリスは頭の片隅でぼんやりと考えた。二人の距離が再び狭まった。誰に見られるかも分からないこんな場所で、許されない恋が展開されている。そんな罪の意識さえも心を蕩かす。いつそ、このまま一緒になってしまえたら。

「薫さん……」

「秋元真央君の絵だね？」

「あつ、はい……えつと……」

どうして秋元君を知っているんですか、そんな愚問は飲み込んだ。薫が真央を知っているのは当然だ。真央は有名であるし、薫が彼の

授業を担当している可能性もある。それに何よりも、アニエスが愛情をこめて世話をしている従弟なのだ。クリスの表情がふと曇った。薫はアニエスのことをどう思っているのだろう。クリスは薫がアニエスと恋人同士であることを知りながら、結局何もかもうやむやなままに飲み込んでここまで来てしまった。薫への思いを遂げて、今、自分が思ふべきことは何なのだろう。

「あの、薫さん……」

「素晴らしい絵だね、クリス」

薫はスケッチブックをクリスの手に返しながら、決して上から物と言う姿勢でなく言った。クリスは言いかけた言葉をぐっと堪えて、ただ「はい」とだけ頷き、それから急いで礼を付け足した。

「今年も君の活躍に期待してるよ。さて、僕は行かないと。これから年度の教材について会議があるからね。遅くならないように帰るんだよ」

クリスはまた頷いた。そして、去っていく白衣の後姿を見送りながら、平たいばかりのスケッチブックを胸にぎゅっと抱き締めた。厚紙の表紙が、首からさげた水晶の指輪を皮膚に押し当てた。やがてクリスは視線を落としてみて、初めて気がついた。薫が見ていたペー지에描かれていたのは、籠の底に力なく羽を広げた一羽の小鳥であつたことに。

部活中に怪我をした生徒かと思って顔も上げずに対応し、はっとした。アニエスだった。長い髪を今日は白いリボンのバレッタでまとめ、洒落たブラウスの上に栗色のセーターを重ねて黒いタイトスカートを履いている。アニエスは驚くばかりの先生に小さく笑うと遠慮し勝ちに置いていた距離をつめた。里見先生は軽い眩暈のようなものを覚えたが、それは決して、アニエスの微かに漂わせている香水だとか、手を握り締めた指先の冷たさだとか、そういったもののせいではなかった。先生はアニエスの名を呟くだけで精一杯だった。

「サオリ、会いたかったわ」

里見先生の呼びかけに、嬉しそうにア二エスが応える。

「……とにかく座って」

里見先生はア二エスに、部屋の奥のカーテンで囲まれたベッドを勧めると、自身はコーヒーを淹れるために窓辺に立った。しかし、ア二エスの声がそれを制する。どうせ大してゆっくりしていられる時間もないのだから、と、誰の気も知らずに朗らかにア二エスは言った。

「今日は真央の練習のお付き合いだっただの。すぐに行かないといけないのよ。五時から打ち合わせだからね」

「そうなの」

里見先生は静かに言っただけで腰をおろした。そして、一層美しくなった友人の横顔を、俯いた拍子に垂れかかった前髪を透かして盗み見た。以前に見た時は、もうこれ以上輝かしくなりようはないと、そう思ったものなのに。ア二エスの美はまるで留まるところを知らない。当たり前だ。彼女は若いのだから。実際に里見先生とア二エスは十も変わらないし、西洋人の女性というものは東洋人より成熟して見えるものだから、二人並ぶとア二エスの方が年長のように見えなくもないのだが。家庭を持った女性と恋にときめく女性、二人の境遇の違いが、自分を何か薄汚れてしまったもののように、そして、ア二エスを眩いばかりのものに映し出すのだろうか。里見先生は思わず両手で顔を覆った。ああ、決して嫉妬などしていない。していないはずなのに、このもどかしく、遣り切れない気持ちは何なのだろう。不思議そうなお二エスの呼びかけに、里見先生は顔を上げたが、それでも瞳に捉えるア二エスの姿はぼんやりとしていた。

「サオリ、目の下が黒いわよ。寝てないの？大丈夫？」

「まあ、最近寝付きが悪くなってね。生徒たちに早寝早起きなんて勧められる状態じゃないわね……」

今日の自分の笑いは干からびている。唇に引いた古い薄桃色のルージュのように。

「駄目よ。体にも美容にも悪いわ。あのね、今少しお化粧で目立たないようにしてあげるわ。ちょっと待っててね」

アニエスが鞆を探っている間、里見先生はその言葉の意味も理解しないまま、漠然とした思考の海の中を漂っていた。

「そういえば、秋元君にどこが変わったところなかった？」

「いいえ、なかったわ。どうして？」

「いえ、別に。はっきりしたことはなんとも言えないんだけどね、ただこの間ね……」

先生は口を噤んだ。アニエスの指先が頬の輪郭に触れたからであった。アニエスの小鳥のように小さな頭が、自分の顔の上に影を作るのを、先生は息を詰めて見守っていた。

「この間、何？」

先生の肌の色の粉でまぶした人差し指を、アニエスはそつと持ち上げる。

「ええと、この間ね、なんていうか、少し……少し具合が悪そうに見えたから」

声が上がらず。口の中が乾く。暖房なんてかけるんじゃないかった。

「本当？さつき見た時は元気だったわよ」

「そう。じゃあ、いいのよ……」

里見先生は目を閉じた。皮膚の上をアニエスの指が伝っていく。それだけの感覚だ。くすぐったくもない。それでも胸の中に泉のように湧き上がるものがある。それでも、その水底にあるものだけは、どうしても見えなくて。呼吸が止まりそうだった。瞼の外の世界では、何か倒れる音がした。

「いいわよ」

里見先生が目を開けた時、アニエスとはとくに化粧品を鞆にしまい込み、立ち上がって出かける支度をしていた。見送らなければ。先生も続いて立ち上がり、彼女の後を、娘が母の後を追うように付いていく。アニエスは先生に対して「綺麗ね」と一言だけ言うと、相変わらずの笑顔で手を振り去っていった。先生はしばし、呆然とし

てその場に立ち尽くしていた。アニエスの香水の匂いが、まだ仄かに漂っていた。

先生は溜息と共に保健室を振り返り、積み上げたファイルが崩れてコーヒーカップを倒し、机一面に黒い液体が広がっているのを見た。今更慌ててもしょうがない。どうせ濡れてよくないものは置いていなかったのだし。そして再度廊下の方に顔を戻して、窓の外的光景に表情を震わせた。アニエスが薰と肩を並べて歩いている。冬の中庭を歩く恋人たち。この世で最も美しく、そしてなぜか最も憎らしい情景。自分を一体どうしてしまったのだろう。ゆかりを知らぬ執念から自我を振り切りたくて、里見先生は階段の方へ足を進めた。もしかしたら、まだ真央は音楽室にいるかもしれない。そうしたら、体の具合が本当に悪くないのかどうか尋ねることができる。まずは防音加工がされた扉を叩いてみて、さほど意味がないことに気付き、そつと隙間から名前を呼んでみる。返事はない。いないのだろうと諦めたその時、ピアノの音が微かに鳴った。無意識のうちに弾いたような、なんの関連のない音が二つ三つ重なって。その後に響いた鈍い音を、里見先生はもう少しで聞き逃すところであった。

「秋元君……?!」

里見先生ははつとして部屋の中に飛び込んだ。グランドピアノの前に、真央はうずくまっていた。背を丸め、片手を口元にあてて、激しく咳き込みながら。

「秋元君！」

先生が駆け寄っても、真央は咳き込むことに忙しすぎて、反応することさえ出来ない様子であった。先生は急いで真央を助け起こした。掌からシャツの袖の中へ一筋の赤い血が流れ込むのを、先生は見た。

「秋元君、大丈夫?!」

真央の潤んだ目が揺れる。里見先生は激しい衝撃の中で、何とか冷静さを手繰り寄せながらも、今にも泣きそうな自分の姿に気がついていた。

「秋元君、しっかりして!大丈夫よ……大丈夫だから……!」

知らせを聞きつけた来夏が、息を切らして保健室に飛び込んできたのは、真央が病院に運ばれてから一時間近く経った頃のことだった。病院に集まるのは迷惑だからといって、里見先生が保健室を真央の友人たちのために開放したのだった。クリス、ノア、落合は比較的連絡を早く聞きつけたので、心配そうな顔を寄せつつも、大分落ち着きを取り戻していたが、明音はまだずいぶん混乱している様子が見えたとし、菜月は無表情ながらも檻に入れられた獣のように部屋の中を歩き回っていた。大河内もつい先ほど連絡を聞いたばかりなのだが、その割には落ち着いていて、唇が白くなるまで噛み締めたまま、じつと腕を組んで佇んでいた。病院からの電話に対応しているのは、ノアだった。来夏は弓道部の衣服もそのままに、ノアの元になじり寄り、絶え絶えにこう尋ねた。

「あいつは……あいつは、どうしてる……？」

「今はまだ検査中です」

ノアが言った。

「でも、意識もありますし、命に関わるようなことはないそうです。今分かるのは、それだけです……」

「病院は、病院はどこだ……?!」

「三宿港病院ですけど。でも、里見先生が来ないように……」
「構うものか」

来夏は勇んで扉を飛び出ようとしたが、大河内がすつと一歩出て行方を塞いだ。来夏が言葉に出来ぬほどの凄まじい憎悪を込めて大河内を睨んだ。クリスたちは立ち上がった。今の来夏なら、いつ手を上げてもおかしくなかった。

「退け、大河内」

「おい！」

落合が駆けつけ、二人の間に入って来夏を押さえつけたが、大河内が悲しげな顔で首を振ると、来夏はがっくりと肩を落とし、ソファ

の上に崩れ落ちるようにして腰をおろした。何か声をかけたかったが、できなかつたものと見えて、落合が来夏の肩に手を回して二回ほどぼんぼんと叩いた。来夏は只頷くことで答えた。居心地の悪い沈黙が、皆の固く閉ざした唇から漏れ出して、部屋の空気を重々しく濁らせていた。こんな沈黙の中で一同向かい合う日がくるなんて、考えもしなかつた。真央の病気のことは知っていたが、まさかこんなにも早く病魔が暴れ出すなんて　　クリスはいつか必ず来るその日を、はるか遠い日のことのように思い込んでいた。はるか遠く。それはいつか。自分と真央の関わりがすっかり薄れてしまったような時か。つまり、自分は、来夏に声を失った後も真央の傍にいと説教しながら、自分だけは遠くで見ているつもりでいたのか。浅ましいことだとクリスは思った。

来夏が小さく咳をした。きつと悔しさからくる嗚咽を紛らわせようとしたのである。そんなもの隠したってどうにもならないのに。明音は来夏と大河内のにらみ合いの直後から、泣き始めていて、今頃になってしくしくと声を漏らし始めた。それは、沈黙よりも陰鬱で澀んでいた。

ノアが立ち上がった。どこに行くのかとクリスが視線で追ってみると、部屋の隅のやかに水を入れて、湯を沸かし始めた。紅茶でも淹れるつもりなのだろう。クリスもできることなら何かしたかったが、立ち上がる気力さえもわかかなかつた。仕方なくクリスは呟いた。

「大丈夫だよ」

殴られることも覚悟していた。それなのに、言葉は空虚だった。来夏はびくりとも反応しない。

「大丈夫だよ、きつと。そう信じなきゃ……」
そしてまた、誰もが死んだように。

来夏の立ち上がった音と、やかんの鳴く音と、どちらを先に聞き取ったのか分からない。一同の俯いた顔が、示し合わせたように同時に上がった。ふらふらと部屋の出口へ向かっていく来夏に、大河

内が「どこに行く？」と尋ねた。来夏は振り返りもせず中庭を散歩してくるとだけ答えた。それが事実であろうとなかるうと、誰も止める気が起きなくて、来夏はそのまま廊下へと消えていった。

ノアが注いだ紅茶が手も付けられずに冷め切った頃、電話が来た。最初に受話器に飛びついたのは菜月だった。菜月は無感動な文句で相槌を打ち終わると、一仕事終わった後のようにふうと溜息をついた。菜月は黙ったままでソファに腰掛けたが、報告を急ぐ言葉は誰も言わなかった。恐怖と興奮とが皆の胸の中に混在していた。それでも言わなければならぬものはならないので、菜月は立ち上がり、窓辺に立って、窓の外の暗闇にすっかり魅入られたように鼻先をガラスに触れさせながら、小さな聞き取りにくい声で言った。

「今のところはとりあえず大丈夫だって。まだ声も出るし、咳はあるけど血は出ないし」

安堵が有り余って、クリスはノアの肩に倒れこんだ。ノアも腕を伸ばしてクリスの体を受け止める。明音の泣き声がたたたましく変わり、落合は小さく飛び上がり、来夏に知らせようとしてすぐに廊下に駆け出て行った。だが、大河内は菜月が言わなかった事実を知っていたかのように、堅苦しい表情を貼り付けたままでいた。

「おい、ライ！ライ！」

下校の時刻を知らせる鐘が鳴っている。こんな時間に走っているのに、向かう先が校門ではないなんて、初めての経験かもしれない。来夏はきちんと約束を守っていて、中庭の噴水前のベンチに佇んでいたが、落合が来ると、目だけ上げてその姿を捉えようとした。落合はその横に座るのももどかしく、立ったまま来夏の手を握り締め、良い報告だけをした。来夏は弱々しげに笑った。

「でも」

大河内の続きを促す目を首筋辺りに感じてか、菜月は重い口を再び開いた。

「手術はしなきゃ駄目だつて。日本では難しいから、アメリカで…
…出来るだけ早くに」

「それじゃ……」

明音の声は震えていた。

「それじゃ、真央はアメリカに行くってことつすか？いつ？今すぐ
に？」

「分からない。まだ決まっていって。今週中に秋元の家族で決
めるって、それだけ」

「そんな……」

白いばかりの部屋で真央はベッドに横たわり、浅く呼吸を繰り返
していた。アニエスは先ほど家族に電話をするために出て行った。
付き添っているのは里見先生と、担任の橋爪先生だ。もし二人に勘
付かれなければ呟くことができるのに。誰よりも愛しい人の名を。
きっともう真央が倒れたことを知って、もどかしい思いに駆られて
いるであろう、先輩の名を。

もし、アメリカに行くことになったとして、先輩に会えるのは後
何回だろう。そんな悲しいことは考えたくはないけれども、横たわ
っているだけのこの場所では、声を失うことよりも目先のことばか
り不安になる。いや、違う。来夏との別れをこれほどに恐れるのは、
来夏の存在がそれだけ自分の中で大きいということだ。僕はいいの
に。最後の最後まで先輩と一緒にいられるのであれば、例え声を失
ったとしても。命を失ったとしても……

冬の冷気が温く湿っている。指で触れた常緑樹の分厚い葉の表面
も、水気を含んでいるようだ。クリスは空を見上げる。流れていく。
白い空に灰色の雲。

真央が倒れてから今日で三日間が経った。経過は里見先生から知
らされていたが、もう体調はすっかり治っているのを、大事をとっ

て安静にしているとのことだった。見舞いに行くことは許されなかった。落合と明音は不満を唱えて、こつそり学園を抜け出る策をいくつも打ち出したが、来夏はどの案にも首を振った。提案者の二人も、まさか来夏に「真央の顔が見たくないのか」などと詰るようなことはなかった。来夏は努めて冷静に振舞っていたが、その仮面の下に、狂おしいほどの真央への想いを抱えていることは、誰の目にも明らかであった。アメリカ行きの可能性についても、アニエスの口からぼつぼつ知らされたらしいが、悲しみに打ちひしがれるような素振りにはまるで見せなかった。すすり泣きながら、ほぼ完璧になった日本語を操って語るアニエスに、来夏は静かに言った。「ご家族でご相談して決めてください。俺はどんな決定であれ、真央のためならと思えば納得できますから」そして、とうとう泣き崩れたアニエスを、里見先生と共に慰めもした。クリスたちはそんな来夏の様子に胸を打たれ、自分たちも彼の毅然とした態度を真似ようとは試みるものの、無理に平静を繕えば繕うほど、いよいよ悲しみを募らせるばかりであった。

その日の放課後、来年の選択科目を野瀬先生と共に最終調整していた来夏は、ようやくのことで鞆を背負い、教室を出ようとしていた。ふと思いついたように廊下の窓から中庭を見下ろして、来夏ははっとした。真央とアニエスがいる。従姉弟同士、睦まじげに身を寄り添わせながら、何か言葉を交わしている様子だった。駆け寄って、抱き締めてやりたい。真央がいつ自分の元を離れるだとか、そんなことはどうでもよくて、ただこの一瞬だけでも傍にいてやりたい。来夏は込み上げてくる衝動を押さえ込むのに只管苦勞し続けた。要談を交わしているのに違いないのに、邪魔をするのは何たることか。そんな常識を振り回すのは、心に潜んでいる自分の臆病さだったかもしれない。それでも来夏は、まずはその声の方に耳を傾けた。真央とアニエスは噴水の前に立っている。真央がしゃがみこんで、噴水の水を掬んだ両手にくみ上げるのが見えた。その時、真央は顔を上げた。視線を校舎の壁に伝わらせて、来夏が見下ろす窓に

突き当たり、手の中の水を捨てて立ち上がった。真央は一瞬間ためらってから、さびしげな笑みを浮かべて来夏に向かって手を振った。来夏もためらってから手を振り返し、階段をすぐに駆け下りていった。

「真央……」

「……来夏先輩」

再会して、二人は互いを見つめあうのに無心になった。この世界に必要なものは他に何も無いようにすら思われた。芝生にスカートの裾が触れる衣擦れの音がして、二人は我に返った。アニエスが退散するために身じろぎしたのであった。

「アニエスさん」

「いいのよ、ライカ君。私の話は済んだから。マオと話してやってねっ。私は校長先生とお話に行かなければならないし」

「でも、姉さん……」

「いいのよ、マオ」

何か言いかけた真央に向かって、アニエスは優しく微笑みかけた。くるりと踵を返した彼女の服の色は黒かった。それが喪服のようにも見えて、来夏は不吉なものを感じなくもなかったが、急いで振り切って真央の方を見る。真央は病院で滋養分だけはつけられたと見えて、頬は前より一層明るく豊かになっていたが、首筋や額あたりの白さや、目元の落ち込みようは、さすがに病人らしいところが見受けられて、見る者の、殊に恋人の哀れみを誘った。真央は相変わらず寂しげな笑みを浮かべたままで、何も言わずに歩き出した。来夏もそれに続いた。すっかり葉を落としたリンゴの林の上で、空は曇っていた。なんだか時雨の来そうな午後だった。

「……体調はどうだ？」

「もう大丈夫です。心配かけてすみません」

ありきたりな言葉が口をつぐ。風も温く吹く。

「アニエスさんも大丈夫なのか？この間は随分取り乱してたけど……」

……」

「ええ、もう立ち直ったみたいです。この間顔を真っ赤にして、ライカ君に恥ずかしいところを見せちゃった』って言ってました」
「そうか」

「ねえ、先輩」

「ん？」

「僕、アメリカに行くことになりました」

「そうか」

真央は足を止める。前を歩く彼がどんな顔をしているのか、来夏には見えなくて、それでもよかったのかもしれない。真央が泣いていた時、来夏はどうすればいいのか分からない。そしてまた、来夏と向かい合った時、真央もどんな顔をすればいいのか分からないでいたのだから。

「僕がいなくなったら、さびしいですか？」

「そりゃあな。でも、事情が事情なんだから、しょうがねえだろ」

「ええ……そうですよね」

なぜ時雨はまだ来ないのだろう。

「どれくらい向こうにいるつもりなんだ？」

「分かりません。両親はこの際出来る限りのことを全てやってしまおうと言っていて。今月末には日本を経つつもりですけど、もしかしたら何年もかかるかも」

「そうなのか」

「はい。でも、両親も治療中はアメリカにいてくれるって言ってますし、僕は大丈夫です」

「よくそれだけのことが一週間で決まったな」

「思い切りと気前だけはいいんですよ、うちの両親。今度会ってもraithたいな」

「俺にか？」

「もちろん」

「はは、そのうちな」

真央の喉元から林檎林を覆う大気よりも湿っぽい息が漏れる。来夏

はこちらに背を向けて泣く恋人から、そつと目を逸らした。一体誰がこんな苦しみを自分に強いるのか。物分りのいいような顔をして愛しい恋人との別れを無表情に受け止め、惜別の場においても笑顔で手を振り、涙一つなく、辛抱強く、いつになるかも分からぬ恋人の帰りを待つことを。自分が子供であったならば。泣いて何とでも言えるのに。真央に付いて行くと言い張ることも、真央を引き止めようとすることも。必ず会いに行くという、無責任な約束を取り付けることも。

大人であるということは、結局こういうことなんだ

「真央」

「はい……」真央は振り返らない。来夏も振り向かせない。時雨の来そうな午後。

「俺は待ってる。お前のことを、いつまでも。それだけは約束できる」

「先輩……!!」

「でも……!!」

交差した視線が濡れたようにぼやける。

「見送りには行かない。それでいいな？」

「はい」

二つの影が木々の狭間でそつと寄り添いあつた。時雨を待ちながら。少年たちは悲しみを分かち合う。そこに言葉もなく。

第三十二話 ひとりの季節・前編

「駄目だよ、絶対駄目だから！」

「何度も言わせるんじゃないやありません。子供は素直に大人の言うことに従いなさい」

「英語で言われちゃ分からないってば！」

「分からなくって結構よ。私も行きますからね」

と、アリエスは、今度は日本語できっぱりと言い放つ。その貫禄たるや、来日当時のか細い面影はまるで見当たらず。

「ああ、もう、日本語が上手くなってから余計姉さんと喋りにくくなったよ！駄目だからね、とにかく、姉さんは付いて来ちゃ駄目！だ、大体、姉さんには恋人が……！」

「可愛い従弟より恋人の方を大事にできるものですか。何を言っても私を説得できなくてよ、残念ね」

恋人のことを言及された際、アリエスは仄かに頬を赤らめたが、すぐに元の調子の戻ると、それだけ言ってさっさと部屋を出て行ってしまった。真央が慌てて追いかけてようとすが、すぐにばたんと扉が閉められる。この攻防をかれこれ二時間、それも三日間連続一日三回のメニューで眺めていたクリスたちは、ようやくのことではつと溜息をついた。ノアがちょうどいいタイミングで茶を運んでくる。クリスもその給仕を手伝った。

「全く、女つてやつには敵わないよな……」

クリスとノアの寮の居間には、いつも通りのメンバーが集っている。真央の渡米を前に、このメンバーでの会合の頻度はかつてないほど高まっていた。もちろん、部活や委員会で忙しかったり、宿題で忙しかったり、ということがあるから、必ずしもパーフェクトな出席ではないし、来夏の都合がつくときは出来るだけ恋人同士で時間を過ごせるように計らうようなこともしていたので、回数としてはそんなに多くはなかったが、それでも真央の思い出作りに励もう

とする皆の気持ちは同じだった。ただ、残念なのは、アニエスが遊びに来る際には、例のバトルが勃発してしまうことだ。一戦終えて、真央は深々と溜息をついている。

「そろそろ折れたか？」

「まさか。何が何でも姉さんには日本に残ってもらわないと。僕だつて、いつまでも子供じゃないんだし。そろそろ従弟離れしてくれてるかと思ったのに」

「心配なんだろ。ライの奴が付いていけないから尚更さ」

落合の言葉に、真央は急に顔を曇らせた。本日来夏は委員会の仕事のために欠席で、真央はこうした折に遠慮がちに、最近来夏と上手く会話が続かないことなどを愚痴ったが、この二、三日でますます二人の関係は悪化しているらしく、とうとう顔を合わせるのも気まずいという段階まで到達していた。

「そんで、いつまでそんなんでいるつもりさ？」

明音がクツキーを頬張りながら聞く。

「……僕だつて好きでこんな状態でいる訳じゃないよ。でも、駄目なんだ。どうしても目が合わせられなくて、会話も一言喋って相槌打つてはい終わりつて感じになっちゃうし……」

「おいおい、それじゃあカッブルとして破滅寸前じゃねえかよ」

落合は呆れたように溜息をついた。

「あと五日しかないんだよ、秋元君」

「あつ、荷物まとめなきゃいけないんだ」

「おーい」

「パスポートもしまいこんだままだった。いつの間にかなくなつてたらどうしよう。お母さんに絶対怒られるなあ」

「秋元君、パスポートなくすのはお母さんに怒られるだけでいいかもしれないけど、関本と最後までそんな調子だったら絶対後悔するよ」

「……最後じゃありませんよ、別に」

真央が少し拗ねた調子で呟くと、思わず一同も黙り込む。別に真央

が話した訳でもなく、来夏が真央を待っていると言束したことは、いつの間にか皆の中に知れ渡っていた。知れ渡っていたというよりは、それで当然だと皆が思い込んでいただけかもしれない。真央は病気についてはまるで心配していなくて、「いつになるか分からない」と言いつつも、必ず近いうちに学園に帰ってこられるもの信じており、そのために一層来夏との関係がもたらす感情において素直になっていた。来夏とはまた合える、必ず。でも、その時、自分たちの関係がどうなっているか分からない。真央の不安はやはりそんなところにあるのであった。

「でも、そろそろ直球でいかないと駄目なんじゃない？」
暢気そうに言うのは菜月だ。

「直球って……でも、無理に僕に向き合ってもらうのは嫌なんです。先輩の覚悟が決まった時に……」

「無理無理。あいつこういうことに関しては強情だからさ。見送りのことだって散々俺たちが言ったけど、ちつとも聞きやしねえもん」
「あと五日かあ……何か方法はないかなあ」

「難しいですね。人の心っていうものは」
真央はふと海を見遣る。バルコニーの奥に堂々と広がる海の表面には、冬の日差しに照らされて、波目模様が美しく浮かび上がっている。この一瞬だけは、絶対に変わらないもの。

「でも、いいのかもしれない。もしかすると……こんな風でも……」

与えられた仕事を黙々とこなしながら、来夏の心は常に真央を水面に映した泉の中で揺れていた。不思議なことだ。その日を前にすれば変に分別ぶつた態度も振り切れて、束の間となった真央との残りの時間をゆっくり惜しむことができると思ったのに。別れの日が近づけば近づくほど、自分はずりずり重たい鎧ばかり背負い込んでいく。どうすれば脱ぎ捨てられるのだろう。どうすればあんな気まずい沈黙を作らないでもいられるのか。

傍にいと約束した。何があっても。それさえ守れない自分は、結局真央には相応しくなかったのだ。今でさえ微かに悔やむ声が胸の中にある。もし、真央に会わずにいられたならば　こんな苦しみを知らずに済んだ。こんなに弱くて、臆病な自分を知らなくても済んだ。真央と出会った日を思い出す。あの日とあの日の真央の笑顔を永遠に、自分の記憶から消し去ってしまいたい。今すぐにも「おい、学級委員長、手が止まってるぞ」

聞き慣れた、そして同時に聞きなれない声に、来夏ははっとして顔を上げた。一人きりだったはずの教室の前方の扉から、いつの間にか慎が入り込み、腕を組んで来夏の執務を見守っていたのだ。来夏は慌てて立ち上がるうとしたが、慎はまあ落ち着けと彼を制し、自分の方から歩み寄って「第二学年の近況報告」なるものを取り上げ、机に腰を預けて読み始めた。まさか返してくれとも言えない来夏は、慎のブレザーの胸ポケット辺りを眺めながら、静かに慎の評価が下るのを待っていた。

「……フン、なるほどな」

「あの……」

「他に付け足すことは？」

「いえ、後は上手く表にまとめて、意見を書いて終わりというところです」

「そうか」

来夏に近況報告を返し、机をおりた慎の姿は、相変わらずの高慢さとそれに伴う華麗な才能を纏っていた。この人だけにはいつも敵わないと思う。人を呆れさせるほどの圧倒的なカリスマ性を持ち、それを自由自在に操って、いつも舞台の中央で主役を演じている。この人も何かに怯えたりするのだろうか。神の寵児のような人が？教室の出口で、慎は一度立ち止まり、振り返って不敵な笑みと共に言い放った。「ありがとうございます」

いつ自分の名前なんて覚えたのだろうか」と訝りながら、来夏は頭を下げた。学級委員長であるから、顔を合わす機会が少ない訳ではない

けれども。今の来夏には、高く鳴り響く慎の靴音すら、特別に許された者だけが奏でる音のように思えた。学園を我が物顔で歩くあの人と、優しい愛の前にすら屈する自分の身を、来夏は比べてみて溜息をついた。このままでは、真央が帰ってきたときに、迎えられる自分があるかどうかも怪しくて。

「へえ、ずいぶん綺麗なところに住んでるのね」

「住んでるっていうよりは、住んでた、かな」

アニエスが部屋を空けるといっているので、片付けを手伝いに来た里見先生は、小さな洒落たアパートの、小奇麗に品よく調えられた部屋を見回した。数少ない家具から飾られた陶器の人形たちまで、何もかもに親友の洗練された感性が垣間見られた。全く、世の中には狭いアパートにもこんな暮らしをしている人があるというのに、うちときたら……もちろん、一人暮らしというのはいくらか有利に働いたのかもしれないが。手伝いに来たとはいえ、もちろん部屋の中もそんな様子だし、そんなに長いことは、精精三ヶ月とちょっとしか住んでいなかった部屋なので、すぐにすべきことがなくなってしまうって、二人は町に出て喫茶店に入り、共に過ごした数ヶ月のことを思い出し、語らった。アニエスは仕事の事情でどうしてもすぐには帰れず、それに長らく家族に顔を見せていないから、一度フランスに帰ってからアメリカへ、などという細々とした事情が重なって本来なら三日後に来るはずの惜別を一週間後に伸ばしていた。されど後一週間。それだけ経ったら　アニエスをはるか遠くに行ってしまう。そうしたら、きつとアニエスはもう自分の手なんか届かない人になってしまう。里見先生はコーヒーに映る自分の表情を見遣った。何を考えているのだろう、私は。アニエスは親友で、いつまで経ってもそうだと確認しあつたばかりなのに。メールでも手紙でも電話でも、何だってできる。悲しいことには変わりないけれども、この三十年近い人生で何度も繰り返し返してきた別れの、たった一つに

過ぎないのに。

「サオリ、泣いてるの？」

里見先生は慌てて頬に触れた。しかし、皮膚は湿っていない。俯いていたので、向かいに座るアニエスにはそう見えただけだろう。乾ききった先生の惚けた顔を見て、アニエスは安堵したように笑う。

「その笑顔が辛いよ」なんて、芝居がかりすぎてとても言えた台詞じゃなかった。先生も笑う。

「よかった。でも、サオリは強いものね。すぐに泣く私とはまるで正反対」

「そんなことないわよ。実はね、秋元君が倒れた時、泣きそうになったたの。どうすればいいのかわからなくて、途方に暮れちゃってね……」

「それは貴方が優しい証拠よ。私は弱いから泣くの。貴方は優しいから泣くのね、サオリ」

「優しくなんかないわよ、私なんてちつとも……それに強くなんかもない。落ち着いた生活に詰め込まれて、すっかり安心しきって暮らしてるわ」

「あら、結婚生活が不満なの？」

「いいえ、そういう訳じゃないんだけど……」

アニエスが意味ありげに微笑みながら、先生の手にも自分の手を重ねた。その手の冷たさを謳歌できないのは結婚指輪に締め付けられた左手の薬指だけ。でも、こんなものはすぐに投げ捨てられるのだ。

「アニエス、あのね」

「何？」

「……やっぱりいいや」

指輪だけじゃない。自分を躊躇されるのは。きっとそれ以前に戸惑う心があるから。不自然に疼くこの感情に。

その翌日に経つという火曜日を選んで、真央は一人、学園内を歩

いた。本来ならば皆と過ぎ行く一日を惜しむべきなのだけれども、今日だけはどうしても気分が向かない。橋爪先生が特別に数学の時間を潰して催してくれたお別れパーティで流した涙が、今も後を引いているのか。誰に何と咎められようと、今だけは一人で過ごしたかった。まずは見慣れた校舎を振り仰ぐ。きつとあちらへ行ったら一番に恋しくなるだろう。初めて来たのは学校見学の時だった。あの時は期待に胸を膨らませていて、何もかもが美しく見えたが、とりわけこの小柄な校舎は好ましく映ったものだ。それから中庭。どの季節にも優劣つけがたい趣を持っていた。これから暖かくなり行くにつれて素晴らしい変化が起こるのだろう。見られないのは非常に残念だ。一年中豊かな芝生、広大な林檎林、小鳥たちの巣。晴れた日は必ず噴水の前でお弁当を広げた。そんな日が、また来るだろうか。

真央は校舎を廻って校庭を臨んだ。部活動は一切しない、僕は三宿学園で声楽の勉強に励むといったのはいつの日か。ルームメイトの明音に半ば強引誘われるまま、いつの間にかサッカー部のマネージャーになっていた。忙しくも楽しい日々であったと真央は振り返る。皆、いい人ばかりだった。優しく、頼りになって。病気で静養に行く際にも、決して迷惑そうな顔をしないで、揃って心配してくれた。室井先輩はいつも鳥類と問題を起こしていたっけ。そんなことを思い出すと笑いが口にのぼる。部長の大河内の配慮も忘れられない。明音もレギュラー目指して頑張っていた。きつと近いうち、に夢が叶う日が来るだろう。そして、この部活のおかげで、僕は来夏先輩に会えた。そんな感慨に目を閉じても空しい気持ちしか沸きあがってこない。今日の校庭には珍しく人がいない。

そんな気持ちを引き摺ったままで校門をくぐる。特に思い入れのない初等部や中等部の校舎まで、真央は瞼の裏にしっかりと焼き付けた。夕日を背後に、チャイム代わりに本物の鐘の音を聞かせてくれた塔を見上げ、そして夕闇の中に高等部の寮の灯りを遠くに眺める。瞬きをする毎に、必ず帰ってくると思いが一層強くなった。

真央は初めて、自分がどんなにこの学園を、そしてこの学園の人々を愛しているかを知った。クリス、ノア、菜月、落合、明音、いつも一緒にいた友人たち。担任の橋爪先生は気弱だけれども芯のある、優しい先生であった。里見先生は常に毅然としていて、随分従姉とは違うところもあつたけれど、常に自分の保護者であつてくれたし、ア二エスのことも細かく気遣つてくれた。校長は面白くて変な人だつた。副校長先生はいつも忙しそうだったな。一人一人の顔を思い出す度に、真央は心からの感謝の念に打たれ、たまらなくなった。自分はこのなにも大勢の人に支えられていたのだ。でも、やっぱり、誰より…… 来夏先輩だ。真央は零れる涙を拭こうともせず、夜空に浮ぶ星たちの光が滲むままにしていた。先輩が僕に一番の力をくれた。先輩のおかげで自分はここまで来られた。やはり、そうだければ。迎えになんて来てくれなくていい。ただ、この気持ちだけ伝えなければ、この学園を離れることはできない。

紫色の追い風に煽られて、真央は走りに走つた。多くの先輩の露骨な視線を気にも留めず、夢中で階段を駆け上つて来夏の部屋の戸を叩いた。怪訝な顔で出たのは落合だつた。何も喋れないでいる真央を見るなり、落合はすぐに引つ込んで来夏を部屋の外に押し出した。私服姿の来夏は、何が何だかわからないと様子のまま、感情の読めない不思議な表情で真央を見た。

「秋元」

「先輩……」

涙でぐしゃぐしゃになった不恰好な笑顔を真央が浮かべた。廊下の電灯は少し明るすぎると真央は思った。

「最後にどうしても言わなきゃと思つて……僕、ちゃんとお礼を言えてなかったから。先輩が励ましてくれたから、僕はここまで来られたのに……見送りなんて来てくださらなくていいんです。僕、ちゃんと戻ってきます。先輩がこの学園にいる間に、絶対絶対戻ってきます。だから、待つててくださいね。本当に、本当にありがとう」

「ごさいました……！」

真央は一瞬来夏の袖をきつく握っただけだった。抱きついて泣き喚きたいのを堪え、真央はすぐに落ち着きを取り戻し、野を駆けるように軽やかな足取りでその場を後にした。来夏は何か言いたげに少し手を伸ばしたが、そんな真央を引き止められずに立ち尽くしていた。これ以上、気持ちの良い別れがあるはずない。そんな諦めがやっつて来て。突如襟首を掴まれ、部屋の中に引き戻された。落合と菜月が、こんなことは非常に珍しいのだが、同じ怖い顔をして来夏に詰め寄っていた。菜月に至っては落合を起こすためのみに用いてきた百科事典まで胸に抱えている。来夏は二人を落ち着かせることが先決だと判断した。

「おい、何だよ？」

「何で追いかけない？」

こんな時だけは、落合の方が背の高いのが強調される。それに、さすがに剣道部であるだけあって、凄むと迫力があるものだ。菜月は剣道部でも、また別の所で迫力を出していたが。

「別に必要ない」

「誰がそんなこと決めたのさ？」

「俺が判断したんだ。文句を言うな」

「最後までその調子で本当にいいのか？」

「おい、酒本、いい加減にそいつを下ろせ！」

「本当にそれでいいのかよ？」

「更に持ち上げるな！」

「悪いが、今日だけは俺と酒本は同盟だぜ。どうする？」

堪忍してくれと来夏は首を振った。真央にも自分にも文句はない。これで満足してもらおう他にないのだ。何とか落合と菜月の間を潜り抜け、安全地帯に避難した来夏は、肩をすくめ、飲みかけのコーヒを啜った。自分たちはこれでいいのだ。誰にも口を出されたくない。

「見送り行けよ」

「行くわけねえだろ、バカ」

朝早くに発つと言っているのだ。学校をさぼって行けるものかと、密かに来夏は胸で付け足す。

「行かなかつたら部屋から閉め出してやるからね」

「勝手にしろ」

「ふん、ほんとにそうしてやるもん」

立派な意気込みで菜月は言った。もしかしたら本気かもしれないと嫌な予感が胸を過ぎったが、来夏はまるで気にしていないふりをし、静かにコーヒーを一口啜った。その夜の寝つきが悪かったのは、そう遅くも無い時間に飲んだこの一口のせいだったのか。

朝焼けに小鳥が鳴いている。

朝のラッシュで混んでいてもいいはずなのに、埠頭の駅は忘れ去られたように閑散としている。三宿港の駅から乗れば、こんな寂しさは知らないでもよかったのだが。誰も見送りに来ないことやら、電車の中の時間を出来るだけ切り詰めるために、朝一番のバスで学園のある崖を下り、繁華街を抜け、三宿町の寂れた界隈の駅から乗車することに決めたのだ。電車が出発するまであと十分弱というところか。濃い赤紫とクリーム色の車体をした電車は、何の広告もない灰色の壁を左手に佇んでいる。客席の人も疎らである。こんな電車で発つのかと思うと無性に虚しくなつて、真央は車体に背を向けて反対側のホームから懐かしき町の景色を眺めた。小さく見えるあの崖の上に学園がある。たった三十分前までは自分はその場所にいるのに。今はまるで全く切り離されてしまったようだ。ああ、あの崖にいる友人たちが羨ましい。戻るものなら戻りたい。否、戻ろうと思えば今すぐにも戻れるのだ。少しの時間とお金さえ惜しま

なければ。両親の叱責とア二エスの絶望を惜しまなければ。周囲の人々の白い目さえ恐れなければ。休学届けを取り消ささえすれば、声を失うまでの日々をあの輝かしい自然の中で、愛しい人と共に…… たった一歩だけ、真央の足は動いた。だが、そんな我侭が自分以外の誰も救わないことを、真央は知っていた。理性にしつかりと言い聞かせて、真央は学園と町に背を向けた。もう後戻りはできないのだ。自分はこうして、遙か遠くに旅発つ。

「真央！」

最初の声は、空耳だと思った。それは極めて自然な判断であった。とつくに離別を遂げた人の声だったのだから。もう一度聞こえた時には、自分の未練がましさと浅ましさに苛立った。人に救われることばかり望んでいるから、こんな幻聴を聞くのだと。三度目で真央はようやく信じた。背後からのきつい抱擁が優しい声に伴った。

「真央！」

「先輩……どうして？」

荒い息遣いを耳元に聞いていた。回された腕に触れながら、喜びがまだそれとははつきり分らない形で湧き上がっていくのに、真央は気付いた。

「昨夜は寝つきが悪かったから……その上に目覚めが悪かったらたまらないと思つて……」

「……先輩」

「間に合つてよかった……」

来夏の腕がぐるりと自分の身を返す。見上げた来夏の顔は悲哀を押し殺した微笑みを湛えていた。その胸に押し付けられて、真央の睫の先に真珠のような涙が一粒二粒貼り付いて零れ落ちる。嬉しかった。こんなにも来夏が自分を想つていてくれた事実が。来夏に今こうして抱き締められている現実が。

自分は大丈夫だ、真央は確信した。病気は治るし、この学園にもすぐに戻つてこられる。そうはもう確定した未来なのだ。こんなにも優しい先輩が待つていてくれるのだから。ホームは静かで、二人

の存在を認めているのは、屋根の下で羽を休める鳩たちだけだった。真央は来夏の肩越しに見る空に、小鳥たちが楽しげに飛び交っているのを見た。彼らは戯れながら学園の方へと飛んでいく。いつしか林檎林で巣を作っていた小鳥たちかもしれない。

「真央」

「はい」

「そろそろ……席に座った方がいいんじゃないか？」

「はい」

そして最後の触れ合いが終わる。お互いが素直に数歩下がって終わる抱擁は、まるで大人のするように。重たいトランクが軋むような音をたてた。

「では、先輩、お世話になりました」

真央が丁寧に頭を下げる。

「絶対に戻ってきますからね、先輩」

「ああ。待つてる」

真央は電車に乗り込み、出入り口からもう一度来夏を振り返った。見つめあう二人は、笑っていた。トランクを転がし、狭い通路で自分の席を探しながら、真央は窓越しに来夏の影がついてくるのを横目に知っていた。ぼろぼろと頬を伝っている涙にもきつと気付かれているのだろう。うれし涙なら見られても構わなかったけれど、今更になって惜別の涙を見られるのは、少し悔しかった。

ようやく真央が席を見つけ出した。敢えて窓際に座ろうとせず、来夏が窓の外から視線を投げかけてもずっと正面を見つめたまま、涙を落としていた。それが、間もなく出発という時になって、ふいに身をこちら側にずらし、口の動きだけで何事か呟いた。来夏はすぐにその言葉を察した。そして、そっと身を乗り出した。

ガラス越しのくちづけは温かくも優しくもなく、痛いだけだった。出発を告げる音楽が、間もなく二人を引き裂いた。来夏は車体を離れ、がくりとその場に崩れ落ちた。真央の最後の表情は見えなかった。真央の顔さえも流れていく車体の色と一緒に。堪えていた涙が

ついに溢れ出した。必ず会えると誓い合っても、別れというものはこんなにも辛いのだ。涙を受けた唇は、まだガラスに熱を奪われたままだった。すがすがしいほど晴れ渡った空に、ひとりの季節がやって来た。

第三十二話 ひとりの季節・後編

「もう出発しましたかね……」

ノアの言うことが一瞬分からなかったクリスは、空を見上げる彼の表情に、真央のことを言っているのだと気がついた。そしてノアにならって目線を挙げた。真昼の日が二人の瞼を少しだけおろした。今日の昼休みはどうしてしまったのだろうか、いつもの時間、いつもの場所に、クリスとノアの二人だけしか集まらなかった。大切な一人がこの学園からいなくなったことを否定したかったのだろうか。クリスもまだ実感がわかないままだ。後暫くは真央の顔を見る機会がないなんて。自分でさえもそうなのだから、恋人である来夏の苦悩はどれほどであろうか。離別を認めなければ生きられない、その苦しみは。

「もう出発したんだろうね」

クリスは呟く。腕時計を見る必要はなかった。

「いつ帰ってきますかね？」

「さあね。難しい手術なら相当時間がかかると思っけど……」

「僕たちが学園にいる間に帰ってきますかね？」

「……」

「ねえ、クリス様？」

クリスはベンチから腰を上げ、噴水の周りを歩き始めた。半周回って、丁度真向かいにいたはずのノアを見つめようとした時、クリスは同じ世界にいながら異なる時間の中を生きることについて考えた。来夏と真央はつい今朝まで同じ時間の中に生きていた。それを突然別たれて、今度は同じ世界の違う時間を生きることになった。クリスとノアにも同様のことが起こりうるかもしれない。クリスが学園にいる時間とノアが学園にいる時間は違ってもいいのだ。

「クリス様！」

湧きあがる噴水の勢いが弱まって、ゆるやかに水面へと落ちていく

水の流れが透けて見る。日の光が水の表面を幾度も幾度も泳ぐ中、ベンチの上に立ち、対岸からこちらに向かって手を振るノアの姿がぼやけて見えた。友達と称したはずのその人が、なんだか今は遠く見知らぬ存在のように思えた。違う。知らない人ではないのだ。まるで、忘れ去って疎遠になってしまった人のように。クリスの記憶の片隅に足跡だけを残している人、失ってしまった感情の一部のように、曖昧に、複雑に、水のように。

「手を離して。僕は貴方のために行かなければ」

「君は……」

クリスはゆっくりと腕を持ち上げた。遠く水の奥にたたずむ少年に伸ばそうとして。クリスはこの風景を知っている。

「君は……誰……」

「クリス様！」

「おい、エーリアル！」

クリスは目を瞬いた。水を上げることがやめた泉の奥に、ノア、菜月、落合、明音のいつものメンバーが集まっていた。

学園には戻りたくなかった。密かに期待している自分がある限りは、学園は絶望の場所にしかない。今、はっきりと、この目で真央が行くところを見たにも関わらず、学園の門をくぐれば真央が待っているような気がした。虚しかった。自分が憐れで情けなかった。そんな気持ちのままに重い足をまだ眠い街中にひきずった。

街路樹がざわめいている。それ以外は何も音がしない。太陽は薄い雲を透かして灰色の路面を照らし、時折通り過ぎていく車が、来夏の間から葉や建物の形をした影をほんの一瞬遠ざけている。人も疎らだ。誰も来夏のことなど気に留めない。ふと孤独になった瞬間に、音や光や空気からも放たれた瞬間に、来夏は土を蹴り、顔を上

げた。見上げた先は、どこまでも穏やかな空であった。少しも具體的なところのない苛つきが、胸の柱を火のようにはぼって燃えた。叫びたかった。泣きたかった。しかし、何もできなかった。虚しかった。駆け出したくとも、帰る先には潰えた夢しか待ち受けていないというのに、一体どうすれば

それでも来夏は走っていた。脇目もふらず、ひたすらに足を持ち上げて、肺が擦れるほど走った後で、来夏はやわらかな草の感覚の上に身を投げ出した。痛みと苦しさで涙がこみあげてくる。酸素の代わりに流れ込んでくるのは、湿った土と冬の匂いだけだった。ぼやけた視界で再度空を見上げる。真央は行ってしまったのだ。激しい心の動乱の後で、来夏ははじめて分かった気がした。もう真央はいない。同じ空の下を、まったく違う方向に歩んでいる。それでも希望を見出さなければならぬのが、恋人の義務だろうか。だとしたら、否、だとしても……来夏は土に殴りかかり、苦しい呼吸を乱した。そんなことでは実質誰も救われはしないのだ。誰も。来夏にははつきりと目に見えるようだった。電車の窓に、涙に熱くなった頬をあて、声もなく泣き続ける真央の顔が。

何度も何度も苦しめば、いつかは抜け出せるものだと思っていた。真央を笑顔で見送れるものだと思っていた。真央は必ず戻ってくるという、明るい予感のようなものが、足取り軽く、心も晴れやかにしてくれる。そんな期待も全部、来夏をここまで引つ張るための妄想やまやかしに過ぎなかったのだ。麻酔のようなものだ。あのホームで抱きしめたまま、離さなければよかった。二人ともあの場で消えてしまえばよかった。朝露のように。燃え尽きてしまえばよかった。

来夏は身を転がしてあおむけになった。薄雲が弱めた朝の日も、直接見れば目に痛いものだった。ここはどこだろう。どこでもいい。誰もが自分を放っておいてくれさえすれば。その時、来夏は視界の下の方にさざめく光の波を見つけた。知らない間に海辺まで来ていたのかと思つて体を起こせば、そこは川原で、来夏は朝の清澄な川

の流れを目にしていたのだ。この川も、いつも見る海に流れ込むのだろうか。来夏は立ち上がってふらふらと水辺に歩み寄り、海よりも静かな水面に自分の顔を映して少し笑った。ひどい顔だと思つた。指先で触れた川の水は冷たく透き通っていた。この先に魚も泳いだりするのだろうか。しばらく水面の中で、空に伸びていく白い線を眺めていた来夏だが、激しく表情が揺れるのに気づいて、ふと目をそらした。それでも救われない。こんな別れでは。

「じゃあ次の問題を……大河内！はい、stand up！」

「……beating about the bush」

「正解！」

この数秒のために立ち上がる意味は一体何だろうか。ぼんやりと考えながら、大河内はまた静かに腰をおろした。鳥居先生が後ろの席の生徒を次なる犠牲者に選んだところで、大河内の意識は自然と教室から抜け出ていく。こうして見上げる空に彼は遂に行ってしまったのかと。

大河内にとつて、真央に置いて行かれるという経験はこれが初めてではなかった。一学期の中盤、ちょうど部活にも慣れてきたという時期に、真央は急に体調を崩し、フランスで少しの間静養することになった。少しの間といいつつも、三か月近い時間は大河内にとつて非常に長く、辛いものであった。真央は元々サッカー部志望ではなかったのに、最初に来た友達だという明音に引つ張られて部活見学にきた。その艶やかな頬と瞳、明るいはかりの笑顔、純真無垢な言葉や動作の一つ一つに、かつてないほどの愛おしさを覚えた。歌手としての秋元真央のファンでもあった。その可憐な歌声を、大河内は常に傍に置き、一日として欠かしたことはなかった。それは、両親の離婚、兄との死別、義母との不和など、悩むことのつきなかつた少年の唯一の癒しであった。大河内は歌声の中に、この上なく美しく清純なものを感じ取っていた。自分の周囲には決して存在し

ない天上の珠玉、激しい憧れの結晶、こうしたものの存在を証明してくれるのは、秋元真央の歌声だけだった。そして、自分の信じていた清らかなものが、実際に目の前で証明されたとき、大河内の喜びは愛しみの気持ちへと昇華していった。

しかし、真央が大河内の想いに気づくことはついになかった。真央は来夏という自分自身の憧れを見つけた。時には彼の名前が示唆するものに怯え、時には拒まれて傷つき、それでも真央は諦めずに彼の後を追いかけて行った。学年一の秀才には敵うはずもないと思っただ。来夏がこの世の光だとするならば、自分は影のような存在だ。清らかな魂は、明るい光のさざめく方へと惹かれていく。もちろん、何の感慨もなくそれを見つめていた訳ではなかったが、諦めは最初からついていていた。ただ、真央が幸せならそれでいいと、自分に必死に言い聞かせていた。

はたして、俺は本当にそれでよかったのだろうか　そんな疑問が湧きあがってきたのは、来夏と真央がダンスフロアから夜空の下に抜け出ていったあの晩のことであった。誰にも頼られず、愛されない自分が惨めだった。祭りの終わりの興奮と熱気の中で、自分を憐れむほどに、惨めさは、そして自嘲の念はますます強くなっていった。苦い実を噛みしめるように。一晩が明けて、気味の悪いほどに晴れ渡った、冷たい朝の空を見た時、いつそ消えてしまおうかと思っただ。白い朝に侵されていく宵闇と一緒に。光にのみ込まれていく夜と一緒に。

「はい、じゃあ次の問題ね……あら、そこ休みなの？あつ、嘘！もうこんな時間じゃない！しょうがないな、じゃあ先生が答え読み上げるから赤ペン持って……」

どうすれば最善の道を選ぶほど賢くなれるのか、大河内にはまだ分からない。結局この場に踏みとどまってしまった自分を、これから何がどのように苦しめるのかということも。だが、ぼんやりと予感はあるのだ。自分はこれから救われていくような、うっすらとした期待が。大河内は窓越しに空を見上げた。パステルブルーの空に、

ひこうきが線を引いていた。大河内は微笑みを浮かべ、しかし、すぐにそれを崩した。

ひこうき雲が空に伸びていくのを見上げ、里見先生は静かな保健室で一人溜息を吐いた。その溜息は、校長の仕掛けたトラップにより散々な目に遭った捜索隊メンバーの治療の後ということもあり、先生自身の耳には、いよいよ生々しく、重々しく聞こえた。生徒会に提出されたという真央の停学届を見て、わっと泣き出してしまったのは迂闊だった。驚いたような颯の顔が決まり悪くて、逃げるように生徒会室を出て行ったが、もう当分顔は合わせられないと思う。化粧も乱れてしまった。口紅なんて完全に落ちてしまっている。捜索隊メンバーが瀕死の状態だったのは、不幸中の幸いだったかもしれない。

誰もその場にいないことをいいことに、鏡を広げて目元の化粧を治していると、急に瞼をふさがれた。「きゃあっ!」と少女のような悲鳴があがった。一体自分のどこに「きゃあっ!」などという心があったのか。恥ずかしさやら驚きやらで真っ赤になりながら、振り返ると、優雅さを崩さないぎりぎりのところで大笑いしている親友がいた。

「アニエス……!」

「ごめんなさい、沙織、びっくりさせて……」

「もう!」

腰に手を当て、怒ったような仕草はしてみるものの、なぜだか自然に笑いが零れてくる。別段楽しかった訳でも面白かった訳でもない。それでもアニエスが笑っているのを見ると、どうしても一緒に笑いたくなる。残り少ない時間を同じ想いで過ごしたいだけなのかもしれない。それでもいい。ただ、笑えれば。

「どうしたのよ、急に?片づけは終わったの?」

やっと笑いが収まったところで尋ねる。二人はソファの上に腰かけ、

淹れたての熱いコーヒーを啜っていた。アニエスはうなずいた。

「ええ、終わったわ。最後に学園に挨拶に来たの。校長先生にもお世話になったし、マオの担任の先生にも……で、そのついでに沙織」
「ひどい。私はついでなのね」

アニエスはいたずらっぽく笑ってウィンクした。

「冗談よ。ほんとね、誰よりも沙織に会いたかったの。残念だわ。もうこの学園に来られないなんて。素敵なのよ。マオもここが大好きだった」

遊ぶように足を泳がせ、アニエスは窓辺に立ち、どこまでも続く林檎林やエメラルドグリーンの芝生や、一年中花壇を彩る花たちを、名残惜しげに眺めやった。黄褐色の長い髪にいつの間にかパーマをかけたのだろうか、午後の日が白い顔の化粧をくつきりと照らし出していることもあり、アニエスはいつもよりずっと綺麗に、垢ぬけて見えた。口紅を引いた口元が艶やかに濡れているのをのぞけば、アニエスの格好は里見先生が最初に見たアニエスに極めて近い。初めて学園に来た時、アニエスは唇を乾かしていた。

「アニエス……」

アニエスが窓を開くと、穏やかな空からは想像できないほどの冷風が部屋に吹き込んで、机の上の書類を部屋中に撒き散らした。しかし、二人の意識はもつと遠いところにあつた。あもつと遠くもつと深いところ。例えば人の命だとか、そんなものが遣り取りされる次元に。アニエスはひたすらまっすぐ前を見つめていた。その目は無情だった。現実を見ようとすると冷たい目。或いは彼女の視線が風を起こしたのかもしれないと思われるほどの。

「さよならを言ってきたのよ、カオルに」

里見先生の肩が震えたのは、突如もたらされた冷気だけが理由ではない。自分より若い娘だと思っていたアニエスが、急に西洋人特有の大人びた容姿と声音を以って語り始めたからだ。

「私、カオルのこと好きだったわ。愛してた。でも、カオルは一度だって私を愛したことはなかったわ。私は知ってたもの。カオルの

言葉も何もかも全部お芝居だつてこと、知つてた……でも、それでもよかつたのよ。私、変わりたかつたの。どきどきするようなことがあれば、何でも欲しかつただけ。後悔もしてないわ。楽しかつたけれど、このままいても私もカオルも幸せにはなれないでしょう。だから、これでさよなら。多分、もう永久に会わないの……」

アニエスは静かに言い終えて窓を閉じた。何の感傷もなく……責めるようにまともに瞳の中に来るその光に耐えきれずに、先生は困惑してうつむいた。なぜアニエスはこんなことをしゃべり始めたのだろう。何も言つてほしくなかつたのに。例え二人が愛し合つていなかったのだとしても、それを心の奥で望んでいたけれど、そんな現実には知らないまま、苦しんで、悩んでいたかつた。生々しい傷跡を目の前に突き付けられたような気分だつた。私には治療の術さえ分らないというのに。

ふいにアニエスは深く息を吐いて顔を上げると、悲しげに微笑んだ。長く重苦しい告白が終わつたことを、知らせたかつたのだろう。だが、里見先生は未だにその余韻をひいていた。アニエスが歩み寄つてきたことには、そして彼女の手が頬に触れたことには気づかなかつた。アニエスは空いた手でソファの鞆の上から帽子をとつた。里見先生が友人のために選んだ、緑のリボンの付いた夏用の白い帽子だ。頭上でぱさりという微かな音がして、帽子の鉤が里見先生の視界を覆つた。

曖昧で優しい時間があつた。全てから解き放たれた、のびやかな時間が。拭い去ろうとしてしまえばいとも簡単に消え失せてしまい、否定しようと思えば記憶から抹殺することもできる、そんな時間が限りなく幸福な時が

「失礼します」

「あら、校長先生」

足を引きずつてやってきた校長の姿を、そういえばずいぶん見て

いなかったと思う。理事長が変わって以来、突然の人事交代が気に食わないんだか何だか、ずっと塞ぎこんで閉じこもりがちになっていたからだ。先ほどは対して気にもとめなかったが、校長捜索隊が駆り出されたのも久しぶりのことだ。里見先生のそんな思惑をよそに、校長はかなり苦しそうにソファの上に腰を下ろした。

「お久しぶりですね、校長」

「お久しぶりです、里見先生。ところで、少し足を見ていただいてもいいですか？」

「はいはい、一体どうしたんです？」

「先ほど、少し無茶をしましてね。ひねったようなんですが。なにせ、長いこと体を動かしていなかったのです。まいりましたね、もう歳でしょうかね」

どうせ校長捜索隊との逃走中にやらかしたのだろう。子供みたいな人だ。こんな人が校長でいいのかしら。里見先生は呆れながら、棚の湿布を取り出し、はさみで適当な大きさに切り始めた。校長は久しぶりの保健室が懐かしいのだから、感慨に浸るように部屋を見回していたが、ふとソファの上の帽子に気がつくのと、驚いたように声をあげた。

「おや、あれはアニエス・ゾラさんの忘れものではないんですか？」

「いいえ」

里見先生ははさみで湿布を裁つ音が楽しい。

「預かったんです、私。また会う日まで私が保管しておくんです」
里見先生は広げたままの鏡に、ほんのりと紅く色づいた唇を映して陽気に言った。

昼休みが終わった後も、クリスの心は不安定なままだった。仲間と笑っている、突然あの夢のような世界に引き込まれる。ノアが水の奥に見えた意識の世界に。何か大切なことを忘れているような漠然とした不安に付きまとわれ、クリスはいよいよ黙りがちになってい

た。ノアが洗濯物を干しながらしゃべり続けているのも、まるで頭に入らない。クリスはついに立ち上がった。

「どうしましたか、クリス様？」

出かける支度をはじめたクリスに、ノアが尋ねる。

「あ、あのさ、学校に忘れ物しちやって……取りに行ってくるよ」
そんな言い訳をした覚えがする。はつきりとは覚えていない。とにかくクリスは家を出た。

まさかそこにいるとは思わなかったが、薫は美術室にいた。見つけたのは、夕闇がのみ込み始めた校舎内をあちこち走りまわった後だった。薫は一人、残照を以って絵画鑑賞していた。クリスが教室に入っても薫は身じろぎもしなかったが、歩み寄っていくと腕を伸ばしてその肩を抱いた。

「先生……」

「どうした？」

クリスは頭を斜め後ろに傾けて、薫の胸の中に凭れかかった。

「不安なんです。何が不安なのか分からないけど、なんだかずっと夢の中にいるみたいなきがする……友達を見ても、何だか皆別の世界にいる人みたいで……」

その時、薫がすつと指差したのは、先ほどから彼が眺め続けている一枚の絵であった。それはつい最近美術室に飾られ始めたらしい。クリスには見覚えのない絵であった。妖精の絵であった。羽はあったが、フェアリーというよりはエルフにずっと近い感じがした。清らかで、神聖で、美しくて　妖精は透き通った羽のある背を反らしてこちらに向け、目を閉じて何か恍惚とした夢を見ているようであった。背景には何も描き込まれていなかった。無の中で、妖精は何を夢見ているのか。

不思議なことに、妖精の絵とクリスに付きまとい続ける夢のような感覚は、どこかに共通するものを持つていた。その正体こそ定かでないものの、クリスは少し救われたような、心が安らぐような、そんな気がしたのであった。一体誰の描いた絵なのだろう。

「俺は？」

「えっ？」

唐突な問いに、クリスは尋ね返した。

「俺も別の世界にいる人みたいに見えるかい？」

クリスはしばし考え込んだ。クリスを抱きしめる薫の腕の力は、一秒ごとにますます強くなっていく。甘い酔いに絆されて、クリスはやがてゆっくりと首を振った。

「分からない……」

暗闇はほぼ教室を覆い尽くしていた。

第三十三話 光踊る

眠りの中にも、額の中の妖精は羽ばたいていた。七色の光を帯びた透き通った羽を広げ、恍惚が色を重ねるごとに益々身を反らし、長い髪をなびかせて。クリスは手を伸ばそうとした。クリスが果たして手の届く場所にいたのかどうかは分からない。額の外にいたのか、それとも妖精と同じ空間にいたのか。クリスの指先が触れた場所から世界が歪み、舞台が暗転した。

クリスが目を覚ました時、繰り広げられていたのは全くいつも通りの朝であった。夜のうちに雪が降ったらしく、見下ろす港町の屋根はほんのりと雪化粧していた。窓に頬をあてると、間近で吐いた息が白く膜を張った。降りていくのは憂鬱だった。

「クリス様！」

しばらくそのままぼんやりしていると、騒がしい足音を連れて、ノアが会談を駆けのぼってきた。

「クリス様、おはようございます！朝ごはん、出来ましたよ」

「あつ、おはよう。うん、今行くよ」

罪のないノアには笑顔を見せて、クリスは手早く制服に着替えた。こんな日には、居間から臨む海もさぞかし冷たく灰色に冷え切っているのだろう。珍しく今日は学校に足に運ぶ気力がない。なぜだろう。あの絵のことをもつと調べられるかもしれないのに……

「この作品は誰ののですか？」

夕闇の美術室でクリスは尋ねた。薫の腕がクリスの体を完全に包み終わった後。

「僕は知らないな……君こそ知ってるんじゃないのかい？君の方が僕よりずっと専門家じゃないか」

「いいえ、俺も知りません。でも、なんだか志水晶の絵に似ているような気がするんです。似ているっていうかな、なんだろう……志

水晶の絵を見て感じたものが、やっぱりこの絵の中にもあるんです。おかしいな……」

不思議なことに、前に町で見た絵を志水晶のものかと疑ったときのような興奮は、今回はまるで湧いてこなかった。クリスは開きすぎたワイシャツの胸元に素肌を露わにしたまま、ボタンを留める手を止めていた。もしかしたら、自分は本当に探し求めていたものを目の前にして見逃そうとしているのかもしれないというのに、なぜ憤りも焦りも感じないのだろう。まるで全て薫に吸い込まれてしまったかのような。あの絵が志水晶のものだとしたら、学生時代の志水晶は一体何を思っ筆を取ったのだろう。

クリスは眉を寄せて目を細めた。ちょうど明るい朝の日が、分厚い雲の隙間から顔を出したところであった。ノアがまた一階からクリスの名を呼んでいる。クリスは溜息を吐いた。憂鬱でもやらなければならぬことというのが、世の中には山積している。かつての叔父の口癖だった。あの絵をもう一度見れば、憂鬱な気分も晴れるかもしれない。あの美しい幽玄の世界に浸りさえすれば。そして、図書室で志水晶の画集をもう一度眺めなおそう。

「やっと来やがったな、てめえら」

「文句は理事長に言え。あいつが引きとめたんだから」

慎の青筋にもまるで恐れる様子なく、陽は飄々と言いつ返して荔枝を部屋の中に引き入れたが、二人の表情もどことなく浮かない今日の集まりであった。全員が席につくと、生徒会役員四人、それぞれの胸の秘めた憂鬱がたちまち部屋に充満して、喋ろうとして飲み込む空気が毒々しく澱んだ。それはまるでこの広大な学園で起きてくる出来事が、この小さな部屋に象徴的に表われたように。何か不安を覚えたように、颯は手を机の上で固く組んだが、荔枝の視線にあてられるとその手を解き、すぐに紙とペンを取った。それを合図に

したのか、慎は自嘲的ともとれる笑いで表情を歪めて切り出した。

「今まで散々待たされたが、ようやく覚悟を決めていいそうだ。遊びは終わった。後は泣くも笑うも己の実力次第だ」

「この仲よしの会も遂に終わりか。さびしいものだな」

荔枝の微笑は、窓から差し込む昼間の光線に照らされて妙に白く冷たく見えた。彼の薬指に光る、水晶の欠片と同じ色で。慎の冷笑がそれに重なる。

「残念だがそういうことだ。命令は個別に下る。従おうが無視しようがそれは個人の自由だが、歯向かった場合はもうこの部屋に自分の席はないと思え。もちろん、失敗した場合もだ。誰がどうなるうが、互いに影響はないからそれだけは安心しろ。以上だ」

慎は言葉を紡ぎ終えた後、暫くは威厳を保つように黙り込み、役員たちの顔を見回したが、同じく何も言わない彼らに満足したのか、それとも愛想を尽かしたのか、立ちあがって部屋を出ていった。残された三人は相変わらずの沈黙でそれぞれの飲み物に手を伸ばした。鳩の影が窓を横切って閃いた。

「遂に来たんだね」

颯は左手の薬指を翳しながら、無感動に、しかしどこことなく物憂げな表情で言った。荔枝は笑う。

「来るべきものが来ただけさ。今更何を言っても無駄だ。私たちがこの時のためにここに呼ばれ、生かされてきた……君は逃げるのか？」

「まさか。僕はね、自分自身を守るためなら何だってやる人間なんだよ」

「まったく、恐ろしい奴らが集まったもんだよな……」

冷血な告白の後の瞳をそのままに、颯は窓辺に身を寄せた。荔枝と陽はやれやれとでも言いたげに顔を見合わせ、悩める少年をそっとしておいてやるために挨拶もなしにその場を去った。二人が開けっ放しにしていった扉から、遠のいていく二人分の足音が生徒たちの騒ぐ声に混ざって聞こえた。

「水晶」 そう呼ばれている存在の真意を、本当は誰も分かっていない。颯が「水晶」について知っているのは、それがこの学園を支配していること、そしてその正体突き詰めていくと、最終的に慎の兄である千住薫に行きつくということだけだ。生徒会役員のみならず、この学園の教師も生徒も皆、「水晶」のために動かされ、荔枝の言葉を借りれば「生かされている」というのに、そのことを知っている者はごく少数だ。颯はその少数のうちに入っている。また、それを誇りに思っていた。自分は少なくとも、何らかの意思を以って「水晶」への貢献に参加することができる。自分たちは選ばれたのだ。何も知らずに酷使され、その身を削られていく奴隷ではなく、何かを守るために働ける特権階級の人間に。

菜月と、菜月との思い出を守るために、颯は「水晶」の命に従っていた。二人の成長が、二人から大切な日々を奪ってしまわないように。菜の花に囲まれて過ぎた限りなく輝かしい日々をいつまでも……「水晶」は忠誠と引き換えに、約束してくれた。この仕事を終えたとき、颯はようやく永遠に辿り着くことができるのだ。

太陽が雲間から顔をのぞかせて、中庭の芝生を照らし出した。颯は目を細める。この景色を見たことがある。ここではないどこかでは、一体どこで？ 答えにいきつけないままに振り返った颯の目に、空のガラスの花瓶が目に入った。役員たちそれぞれがカップやらグラスやら入れている棚の一番隅にぽつんと置かれている。颯はガラスを曇らせている埃をぬぐうと、水を注ぎ、花はささずに、かつては持ち主のいた机の上に音もたてずに置いた。颯の表情を、冷酷な笑みが貫いた。

「君が学園を追い出されたのはね、君が水晶に齒向かおうとしたからさ。かわいそうだけど、君の犠牲は無駄ではなかったよ。僕は絶対に君のようにはならない、僕は今そう思ってるんだから」
そして、残されたのは花瓶だけになった。

相方が楽器の練習だといって部屋に籠ってしまつたので、陽は珍しく一人で思案する時間を持つことができた。といつても、コーヒのカップ片手に考えることは、途方もなく、抱えきれないことばかりだ。「水晶」だなんて名乗る奴のことを、一体どう考えればいいと言ふのだ。主人が暇そう（少なくとも見かけ上は）なのを見つけると、シャネルがささず膝の上に飛び乗ってきて、甘えるように喉を鳴らした。テーブルの上には読みさしの本が何冊か、シヨパンのノクターンがかけっぱなしになっている部屋で、陽は白い雄猫を撫でながらその途方もない思案に暮れた。

荔枝と共に旧家のしがらみを断ち切つてこの学園に来ると決めたのは、従兄弟の友人であつた颯の紹介があつたからだつた。元々上流社会では名の知られている二人であるので、学園とて二人が起こした事件のことは知つていたはずだし、両家に突き出すこともできたはずだが、なぜか何も言わずに居場所を与えてくれた。利益にもならないはずのその無言を不審に思いつつも、二人はそれに縋るしかなかつた。二人の居場所は他になかつた。

その代償を思い知らされたのは、生徒会役員に選抜された日であつた。安全な住処と思つた場所は、実はいとも簡単に断頭台に変わることができた。「水晶」は命がけの忠誠を要求した。そして、それを拒むには、二人は余りにも学園に依存しすぎていた。

「無料ただより高いものはねえつてか……」
陽はシャネルの機嫌をとりながらつぶやいた。学園は小さな世界、閉ざされた世界である。学園外の世界が何か大きなもの手で動かされているように、この学園は「水晶」によつて支配されている。ただ一つ違ふのは、この学園はそこに住む人々を排除することができるということだ。もし「水晶」の命令を遂行できなければ、恐らく二人はこの安全な鳥かごからの撤退を強いられるだろう。そして、また、蛇を恐れる日々が始まる。学園に来るまでのほんの数週間だけそんな日々を過ごしていた。ほんの些細な人影にも神経を尖らせていた夜、暗闇を歩き続けるような不安と恐怖。欲望と憎悪に満ち

た手が二人を引き離すその時まで。「私は覚悟している」と荔枝は口癖のように言う。何か二人の間で重大な出来事があったとき、荔枝は必ずこの台詞と共に優雅に微笑むのだ。シヨパンのノクターン鳴り止まぬ部屋と、遠くに微かに聞こえるバイオリンの音色と。生徒会を「仲よしごっこ」と冷たく笑い飛ばし、友人の颯にも弱音を漏らすことを許さない恋人。彼の覚悟が一体どれほどの犠牲を彼自身に強いるのか、陽は恐ろしい気がした。

重苦しい顔などしたつもりはない。来るべき日が来ただけのことだと言うのは、本心から出た言葉で、荔枝の胸には今も動揺はない。恐れもない。今日の寒い日はバイオリンの音色が特に冴えわたる。優雅ながら切りつけるような音楽は、白い寝室の壁に吸い込まれて消えていく。

覚悟はとうにできていた。「私は覚悟している」といつも言ってきた。最初の覚悟は家を守るためだった。家とそして名誉とを。自分は眩い暗闇の中にいたのだ。そこを陽に救われ、初めて美しく輝かしい世界というものを知った。陽が荔枝の覚悟の中に、新たな息吹を注ぎこんだ。生徒会役員に選ばれたあの日、幕を剥がされたサーカスの舞台の上で、荔枝はその強さの上に温度を加えて心の剣を音もなく抜いたのであった。そして、荔枝がその切っ先を向けたのは、あるうことか「水晶」だった。

荔枝は自分たちの居場所を「水晶」に求めたことに、何の負い目も感じていなかった。例えこの学園を追われ、陽と二人死ぬまで逃げ続けることになったとしても、その中にさえ喜びを見つけられる自信があった。荔枝が「水晶」に仕えるのは、それが恋人の安全を保障し続けるからであった。荔枝が「水晶」に心臓を預け続けている限り。しかし、もし「水晶」が陽に危害を加えるようなことがあれば、荔枝はいつでも切り込む覚悟ができていた。ふと弓を動かす手を止める。紅い瞳が、窓の外の水天一碧を前に毒のように燃え上

がった。自己破滅願望と呼ぶべきか。陽と一緒にいたい気持ちと同じぐらい強く、自分を犠牲にして陽を生かしたいという欲望が、荔枝の中にはあった。そして、陽に自分の全てを忘れ去ってほしい。彼の誇りの高さに見合わない自己嫌悪が、そんな感情を煽りたてていた。荔枝は知りすぎるほど知っていた。事実を認識する度に伴う痛みが、胸に真っ赤な烙印を残していった。自分が陽に依存しすぎていること、陽なしでは到底生きられなくなってしまったこと、自分の存在がいつか陽の重荷になることは明白なのに、もしかすると、自分は「水晶」に消え失せてなくなる機会を求めているのかもしれない。「水晶」に剣を突き立てて自分もなくなってしまうれば……きっとその時こそ、荔枝は至福の瞬間を迎えるのである。バイオリンの音色が変わった。また口癖のようにつぶやく。「私は覚悟している」と。

そういえば、最近はずっとカー被害がめっきり減った。この二週間ほどは、涌水明音の最初の文字も見えていない。少し落ち着いてきてくれたのなら嬉しいのだが……それでもなさそうなのが気になる。ところだ。そういえば、彼の親友である秋元真央がこの間学園を去った。恐らくその悲しみを引きずっているのだろう。この平和はどうやら期限付きらしい。溜息を吐いてから数秒後、慎は平和な顔でものがとくに自分から奪われていたことに気づいた。後は綱を渡るだけだ。そして、落ちるか生き残るか、屋上から見降ろせぬものは例の白い鐘楼を除けば何も無い。地上に生きる人々は全て粒子のように細かく砕かれて、空气中を漂っている。その空気さえも「水晶」が支配しているのだ。この学園に生きる人々は皆、命じられた通りに動く。自分も例外ではない。学園の帝王だと無茶なあだ名をつけられたところで、慎が支配できる領域なんて限られているのだ。自分は人の心を兄のようにには動かせない。フェンスにかけた手が、慎が見遣る景色から白い塔を消し去った。いつから兄は兄で

なくなつたのか。

「慎、お前に世界を見せてやるよ」

あの日、兄はそう言った。兄弟という絆（はたしてそう呼べるほどのものが二人の間にあつたかは定かではないが）が捻じれてしまつたあの日に。もし兄の言うことが確かならば、世界とは慎にとつて絶望と屈辱に他ならない。結局「水晶」が支配するこの世界では、慎が受容するのはその二つばかりなのであるうか。否、そうならないために慎は「水晶」と契約を交わしたのだ。慎は学園内で最も従順で最も価値の高い少年を与えられた。彼は「水晶」の宝であつた。彼が慎に従い、慎のものであり続ける限り、慎の苦しみは全てかの少年に矛先を向け、彼を苛めた。それがノアだつた。ノアが慎の影として苦しみを受ければ、慎は栄光の輝きだけを享受していればよかつた。

しかし、クリスが慎の手からノアを取り上げてしまった。クリスは最もノアに近づくべきでない人物だつた。クリスをノアから遠ざけるべく、クリスを退学にしようとした慎の企みは校長に阻まれ、あるうことか、クリスとノアは一つ屋根の下に住まうこととなつたのだ。慎には苦しみだけが残された。そしてノアを取り返そうとすれば、今度は兄が邪魔をした。ノアを慎に与えた当人である兄が。兄はノアの代わりにこの世界を与えると約束した。もし慎が「水晶」の命令を遂行した時は、慎は本当の意味での玉座を手に入れることができるのだ。絶対的な権力、兄にも劣らぬ力を。忠誠と苦しみと汚辱と引き換えに。

ふと、明音の顔が慎の脳裏を過ぎつた。それが一体何の予兆だつたのかは慎にもよく分からなかつた。腹違いの弟は、二人の兄たちと与えられている恩恵にあずかることもなく、日陰でつましやかに育ち、「水晶」のことなど露ほども知らずに生きている。自分は彼が羨ましいのだろうか？自問には嘲笑混じりの自答で返した。そ

んな訳はない。例え半分は同じ血が流れているとしても、もう半分の血が自分と彼の間にはつきりと区切りの線を引いている。生まれ育ち、力、才能、地位、将来、その他の何もかも……明音は慎とは別の世界で生きる人間であり、慎も明音に対してそうである。慎の道は決まっているのだ。輝かしい栄誉の道が。ふと見上げた空にその果てが見えぬように。

「久しぶりの図書館籠りじえねえか。この間のテストでも悪かったのか？」

「あはは、まあね」

手を振って図書室の方へ駆けだそうとしたクリスに、落合が後ろから叫んで尋ねた。

「おい、有瀬は一緒じゃねえのかよ？」

クリスは振り返り、遠くの落合にも見えるようにこくと頷いた。久しぶりの図書館は相変わらず、司書の絶対的支配の下で水を打ったように静まり返っており、絨毯の上を一步進むのでさえ憚られるほどだった。クリスは美術関係の本棚の前に忍び寄ったが、司書の目を本棚と本が阻むので、後は何も気にせずに目的の本を探すことができた。クリスの胸は不思議にざわついていた。見慣れたいつもの背表紙の中に、何か新しいものを見つけられるような予感があった。やがて、クリスが手にとったのは、分厚い画集と画集の間に埋もれていた見慣れぬ一冊の薄い本であった。志水晶の鉛筆画集らしい。クリスは意外な気がした。志水晶の鉛筆画なんて珍しい。ぱらぱらと捲って見るだけでも、カラーのページを飾るのは見慣れぬ絵ばかりだ。本棚を改めて点検してみると、新しく購入したのだろうか、以前にはなかった画集が何冊か新しく加わっていた。クリスは持って運べる冊数を腕に座れる席を探したが、生憎クリスが夢中になっている間に満席になってしまったらしく、どこにも落ち着けそうにない。仕方なく貸し出し手続きを済ませ、いつもより相当

重くなった鞆を抱えて寮に帰ったクリスは、ノアの「お帰りなさい」にもいい加減に答えて寝室に向かった。今は絵を一人でゆつくりと眺めたかった。

鞆をベッドの上に放り投げ、制服は着替えないまま、クリスは真っ先に鉛筆画集の表紙を開いた。そこには知り尽くしていると思っていた画家の、まだ知らなかった世界があった。色はないが耽美的かつ鮮明な世界に一步進むごとに、クリスの心は躍った。だが、ある時から次第にクリスの歩みが遅くなった。それは脳内に分散する記憶の欠片に何かが当たって弾けた瞬間からであった。クリスは一つ一つの絵を食い入るように眺め始めた。はっと立ち上がったクリスは、扉の隣の箆笥に駆けより、抽斗を開けて自分のではない方のスケッチブックを取り出した。一瞬の躊躇のあと、それでも事実を確かめたい気持ちが強まって良心の呵責に一瞬だけ目を瞑り、ゆるく結ばれていた表紙の紐を解いた。ぱらぱらと移り行くノアが描いた傑作たちが、クリスの胸の痞えを流し去ったと同時に、クリスに激しい動揺を与えた。クリスはスケッチブックを元あった場所にしまいこむと、ふらふらとベッドに歩み寄って、やわらかなマットの上で体を投げ出した。

枕の向こうに、夕暮れの街が見える。すみれ色の空を映して海は凧ぎ、車の赤い光が道路を流れ、ビルの灯りが点滅している。クリスの虚ろな心に色を注ぎこむには、町の色は曖昧すぎ、気まぐれすぎで。どうして気づかなかつたのだろう。ノアの絵なら前にも見たことがあったのに、一体なぜ……あの時は激しく動転していたからか。しかし、だとしても……ノアの絵には、クリスがいつも志水晶の絵の中に認めていたものと同じものが存在していた。決して他人には真似できないものを。どんなに精巧な贋作にも模写にも現れようがないものを。同じ鉛筆画という舞台で見えてはつきりと分かったのだ。ノアはクリスでさえ到達できなかった地点にいる。

「クリス様、お茶が入りましたよ」
階下からノアが呼びかけても、クリスは返事ができなかった。ノア

の絵がただ志水晶のそれに酷似している、それだけなら耐えられたものを　クリスは見てもしまったのだ。スケッチブックの最後のページに描かれたその絵。たった一枚色のついたその絵は、クリスと薫が身を寄せ合って見つめた、あの美しい妖精の絵であった。

第三十四話 菜の花の満ちる頃・前編

菜の花がそよいでいる。神社の石段から見下ろす景色はいつも変わらない。颯がそこに戻る時、日付はいつも同じだった。あの日に帰りたい。失われつつある二人の思い出を取り戻して、そして今度こそ永遠に……

「颯、今日も生徒会なの？」

「うん、来週は委員長会があるからね。他の役員が仕事しない分、僕が仕事しないと」

「つまらない。せつかく、剣道部が休みなのに」

「ごめんね。また都合がいたら教えるから……」

人目を忍んで颯の頬にキスしてから、菜月は林檎林の向こうへ去っていく。颯は振り返りもしないその背中に手を振っていたが、やがてその行為に飽きると、力なく腕を降ろし、くるりと踵を返して校舎へと向かっていった。委員長会の準備だなんて大嘘だった。今日こそ颯に初めての「水晶」の命令が下る日なのだ。颯は菜月にキスされた辺りを除いて、頬から表情が強張っていくのを感じていた。後戻りができないのは今に始まったことではないが、背筋を走った冷たいものを、自分自身でも見逃す訳にいかなかった。林檎の葉が零した光が、颯の顔に様々な色を投げかけてはまた影に呑み込まれていった。

生徒会室には鍵こそかかっていたが、誰もいなかった。ここに本人が現れるのだろうか。千住薫が？それとも……その時、颯は自分の机の上に置かれた見知らぬ封筒の存在に気がついた。見た目はどこも変わったところはない無地の白い封筒であるが、校章の刻まれた青い封蝋が、その存在の特異性を示していた。颯は平常を装って（まるで誰かに監視されているように）封筒から中身を取りだすと、パソコンで打ち込んだ細く小さな文字を窓辺で透かして眺

めた。そこには宛先も差出人の名もなく、A4の紙が大きすぎるほど、簡潔に言葉が述べてあった。

「そういえば、ライ、つい聞き忘れてたけどこの間の弓道の大会の結果どうだったんだ？」

「まあ、一応優勝したことにはしたんだが……」

「さっすが、優等生は違うねえ。これで生物の小テストも満点なんだもんな」

「おまえは勉強しなただけなんだから、もう少し予習したらどうなんだ？」

「別に。俺、理系教科は捨ててるし。どうせこのまま大学行けるんだから、遊べる時に遊んだ方がいいじゃねえか」

「大学行ける云々の前に進級できねえって問題があるだろうが」

「大丈夫。文系教科はちゃんと……」

「落合、あんた三日前提出のエッセイ出してないでしょ！」

火曜日の朝の教室に顔をのぞかせたのは鳥居先生だった。落合が何か言い訳がましいことを言っ、それから問題はいつも通りに鳥居先生が未婚である理由に移り、火に油を注ぐ結果となるのであった。呆れかえって言葉もでない来夏は、言い争う教師と生徒に背を向け、真央に送る手紙の文面をぼんやりと考え始めた。賞状と一緒に映った自分の写真を添えるつもりの手紙だ。元気にやっているだろうか。もう病院は見つかったのだろうか。入院の日程は、手術の日程は……考えるほどにきりがなくなっていく。あの日からまだ一週間も経っていないというのに。真央に会いたくてたまらなかった。来夏はふと、教室の窓際の席に並んで物思いに耽っている友人たちの姿に気がついた。菜月の方はぼーっとしているのはそんなに珍しいことではないにしても、クリスが挨拶も忘れて考え込んでいるのは滅多にないことだ。よほど辛いことがあったのだろうか。ノアが生徒会長と一緒に暮らすと決まったときのような。

「おい、石崎、起きてるか？」

小突かれてクリスは我に返ったようだった。それから初めて来夏に気づいたらしい。青い目を瞬かせて言った。

「あつ、おはよう、関本」

「おはようじゃねえよ。大丈夫か？また有瀬と何かあったんじゃねえのか？」

「えっ、別に何にもないけど……」

笑いながら否定しようとして、その表情が一瞬躊躇うのを、来夏は見逃さなかった。しかし、自分の関わる問題ではないようだ。察しのよい来夏はそう悟り、ただ励ますようにぽんとクリスの肩を叩いた。クリスは少し気恥ずかしそうに見を縮めた。

「で、酒本はどうしたんだ？」

「……メールの返事が来ない」

「誰からの？」

「颯」

菜月は不満げな顔で、膨らませた頬を机に押し当てて突っ伏した。

「金曜の夜からずーっと来ない」

「颯先輩も忙しいんだよ。生徒会役員だし、勉強だってあるだろうし、それに3年生だから……」

菜月はぎろりとクリスを睨みつけた。

「颯のこと名前で呼ばないでよ」

「あつ、ごめん……」

「でも、いつもならさ、すぐに返信くれるのに。今朝だって一緒に学校行こうと思って待っててもちっとも来る気配ないし。しょうがないから迎えにいったらとっくに家出た後だったんだよ？いつもならさ、ちゃんと早く行く時は連絡くれるのに……」

「だから忙しいんだろ。いいじゃねえか。俺なんてな、中野悠太君にアタックしてた頃なんか、三日に一回返事がくればいい方だったんだぞ」

なんとか鳥居先生を追い払った落合が横から口を出した。

「それは単に嫌われてただけでしょ……バカ颯。絶対絶対許してあげないんだから」

怒って椅子の上で膝を抱える菜月にも、三人は顔を見合わせただけだった。ちょうどその時、卵焼きを焦がしたとやらで遅れていたノアが教室の入り口に姿を現し、クリスマスに向かって微笑んでみせたので、クリスマスの注意は自然にそちらに向かった。微笑み返す唇が、いつもより硬いのをクリスマスは感じていた。

「はい、酒本、椅子から足を降ろす！」

ノアに続けて入ってきた野瀬先生が、威厳たつぷりにそう命じた。

菜月は一日中不機嫌なままで、昼休みにはクリスマスの弁当を丸ごと奪い取るという暴挙にまで出た。ノアが分けてくれた分を胃に収めたクリスマスであったが、食べた量としてはやはりいつもの半分以下であるから、腹の空きは早かった。午後の三時間をようようのことで乗り切り、ケーキを焼いてくれるというノアの言葉をいつもよりずっと楽しみに階段を駆け下りる途中で、クリスマスは颯に捕まった。

「クリスマス！」

颯は振り向くクリスマスの後ろから軽やかに階段を下りてきて、にこやかに挨拶した。クリスマスの行方を塞ぐように立ち止まったのは、きつと何か話したいことがあったのことだろうが、今のクリスマスにはあまり嬉しい状況ではなかった。

「あつ、先輩……」

「どうしたの？いつもより顔が青い気がするけど」

「いえ、別に、ちょっと昼食を食べ損ねちゃって」

その一言にクリスマスは精いっぱいの意味を込めたつもりであったが、颯は気がつかないのか又は故意に無視したのか、朗らかな笑い声をたてた。

「なんだ、心配させるなよ。ねえ、ちょうど今日は暇なんだ。よかつたら、一緒に出かけない？お気に入りのお喫茶店があってね、今度クリスマスに紹介したいなって思ってたんだけど」

「……そんな暇があるなら、酒本にメールを返してやったらどうですか？今日は一日中ずっと不機嫌だったんですよ。先輩からメールが来ないって」

「クリスは心配しなくていいよ。ちゃんとどうにかするから」

「どうにかするからって……酒本は、えっと、榊原先輩のこと……」
颯は微笑みのうちに、瞳を一瞬鋭く閃かせた。

「どうして急に僕のことを苗字で呼び出したの？」

クリスは七時間目の体育でふらふらになった体を、力の抜けた両足でなんとか支えていた。早くこの場を逃れたい一心で、つい聞き取れなかったふりをしてみるが、それも結局逆効果に終わった。颯はこんな些細なことにもひどく執着を見せた。

「何か言われたんだね、菜月に？」

「別に、あの……」

こんな場面を菜月に見られたらと思うと気が気でならず、クリスはごくりと唾を飲んだ。

「えっと、あの、俺は……」

颯は疲れたように溜息を吐いた。子どもに散々手を焼かされる親のように。颯はクリスの両肩に手を置いた後、靴音を響かせながらクリスの脇を通り抜け、階段をのぼっていこうとした。颯の気持ちえ損ねたのではないか、そんな不安に駆られてクリスは空腹も忘れて颯を呼びとめた。颯はその場に立ち尽くしたまま、白いばかりの壁を背景に、逆光で影のかかった顔だけをこちらに向けてクリスの顔を見下ろし、クリスが何か言う前に静かに口を開いた。

「気にしなくていいよ、別に。菜月の言うことなんか」

「えっ……」

「君が僕をなんて呼ぼうが菜月には関係のないことじゃないか。そんなこと気にするなんて、君らしくもないね」

「でも……」

一体颯はどうしてしまったのだろう。なぜ菜月に対してこんなに冷たい言葉を放つことができるのだろう。メールを返してくれないと

膨れていた菜月の懸念は、実是的を射ていたのだろうか。颯は何を思ったのか、再び階段をおりてきてクリスより一段高い場所に立った。戸惑いを浮かべ続けるクリスに、彼は優しく微笑みかけた。

「そういえば、最近有瀬ノアとの調子はどう？」

「あの、先輩……」

「僕の質問に答えて。最近は何様かやってる？」

クリスは一瞬ためらった。それでも、嘘にはならないと信じた。

「は、はい」

「なら、よかった」

颯は心からそう思っている、というようにこくと頷いた。

「そういえば、彼、この間、都の絵画コンクールで最優秀賞をもらってたね。美術室に飾ってあったのを見たけど、なかなか上手くてびっくりしたよ。学園の天才画家が二人同じ寮にいるなんて、偶然だね。それとも君が教えたの？」

「いいえ、まさか。有瀬は……」

そこまで言ったところで口ごもった。挨拶の言葉も咄嗟に思いつかないままに、クリスはすぐ目の前にいる颯に一つ黙礼すると、くると向きを変え、エネルギー不足にも関わらず走り出した。颯の聲がクリスの背中を追ってきた。

「食事是一緒に行かないの？」

「今日は有瀬がケーキを焼いてくれますから！」

胸がざわめいている。一刻も早く寮に帰りたい一方で、真実を確かめるのが恐ろしい気がする。ノアと向き合って、自分はちゃんと尋ねられるだろうか。ノアの答えによっては気づいてしまうかもしれない。自分の胸の奥で、今静かに攪乱されているどす黒い嫉妬の正体に。

クリスが退いたことによって、颯には階段の最後の段から広がっていく中央玄関の様子がありありと見えた。スニーカーを履き、片手に上履きを持ち、雨でもないのに千鳥模様の傘を握っている幼馴染の姿も、はつきりと認められた。黒目がちなミントブルーの瞳が、

恨めしげに颯の顔を見上げていた。多分颯は何の感情もこもっていない目で彼を見返したのだろう。彼が上履きを放り捨てて中庭へと飛び出していつても、颯は後を追うようなことはしなかった。ただ上履きを拾い上げ、彼の上履き入れの中に揃えて収めただけだった。上履きの中に颯は茎を結んだ菜の花を見つけた。

降り出した雨粒が庭の池の蓮の葉にあたって、軽やかな音をたてている。菜月は傘を持っていて正解だったかな。いや、もうとつくに量に帰っているのか。和服に着替えた颯は寮の居間にきちんと正座して、折って畳んだA4の紙を広げ、そこに書かれた文字を眺めていた。

石崎・エーリアル・クリスを絶望させよ

さもなければ酒本菜月の命は保証できぬものとする

こんな忌まわしい手紙さえなかったら、自分はきつとあんな振る舞いはしなかっただろう。颯は机に肘をつき、両手で顔を覆った。「水晶」は菜月を人質にとつたのだ。失敗するつもりも、命令に背くつもりも毛頭ない。それでも、菜月を知らぬ間に自分たちの確執に巻き込んでしまったことが、颯には耐えられなかった。なんとか彼を「水晶」から遠ざけたくて、わざと冷たく振舞った。メールの返事もしなかったし、あの時声をかけることも、後を追うこともしなかった。菜月の命さえ無事であつてくれれば、そして「水晶」の魔の手から出来るだけ遠いところに逃げてくれさえすれば、後は恨まれても憎まれてもかまわなかった。颯が命令を遂行し、「水晶」が契約を果たしてくれさえすれば、二人の仲はどんなにもなる。あの限りなく甘い時間の中で……

しかし、良心に苛まれ続ける自分も否めない。菜月の睨む様なあの瞳が、今も颯の心に焼き付いて離れなかった。クリスを絶望に落

とすという内容についても、大変躊躇があった。分かっていたのに。クリスのことは、いつか陥れなければならぬ存在だと。その善良さを、無邪気さと無知とを、嗤った日もあったというのに、一体自分はどうしてしまったのだろう。簡単なことだ。もう種は仕組んであるのだ。クリスはノアに嫉妬を覚え始めている。後はそれをかき回すだけで済むことなのに。「僕はね、自分自身を守るためなら何だってやる人間なんだよ」そう言った自分はどこに行ったのか。颯の脳裏に一瞬、暗闇の中で白く不気味に輝く花が浮かんでふっと消えた。颯ははっとして顔をあげた。その途端に、携帯電話が振動を始めた。

酒本菜月 開いた画面に見慣れた名前が表示される。颯はその名前が画面から消え行くのを待って、電話を閉じ、机の向かい側の方へと押しやった。携帯は一瞬の沈黙の後に再び震え始め、自分の振動で畳の上に落ちていった。鈍い音が静かすぎる部屋に響いた。

「あと少しの辛抱だよ、菜月……」
立ち上がって颯は呟いた。主が部屋を出て行った後も、携帯電話は幾度も幾度も振動を続け、必死に持ち主の名を呼んでいた。きつとその姿が蝉の抜け殻となるまで、電話は鳴り続けるのである。雨が乾いた地面を濡らしていく。

「昨日はどうして電話に出なかった？」

翌日の生徒会室で、ノートの整理をしていた颯に慎が尋ねた。

「あれ、いつ電話したの？」

「昨日の夕方だ。寮の方の電話にも出なかっただろ」

「……ああ、ごめん。ちょっと忙しくって」

慎には、否、生徒会役員たちには、本当のことを言う訳にはいかないのだ。自分たちが、敵対よりも甘く、協力よりも厳しい立場にいることを、颯はよく知っていた。弱みを知られば、それが大きな落とし穴になるかもしれないのだ。自分たちは互いに監視しあっている。

「全く、電話の意味もねえじゃねえか……」

呆れる慎は知らなくていいのだ。二日続きの雨空を見上げた、今朝の颯の心など。松の木に向かって傘を開き、持ち上げた時、開けた視界の木の下に菜月が立っていたのを見つけたのだ。颯ははっとしたが、すぐに表情を閉ざした。驚いた顔を見られたかもしれない。そんな心配は無用だった。颯の顔を見た瞬間、菜月の瞳が激しく動揺を始め、溢れ出る涙が彼の見る物を歪ませていたからであった。颯は傘を目深に彼の横を通り過ぎようとした。「待つて！」と叫ぶ菜月の悲痛な声が、辛うじて颯の足を止めた。

「颯、お願い……」

菜月の足元しか見えない颯には、松の木の下に水がたまって、ひどくぬかるんでいることぐらいしか見えなかった。

「教えてよ、なんで僕を避けるの？」

「……」

「お願い、それだけ教えて……そうしたら、僕……」

「そうしたら、僕に二度と近づけないって約束できる？」

菜月がすすり泣きの中で息をのむ音がした。松の枝から雫が落ちて、水たまりに波紋をひろげた。雨音が二人にとって余計な音を掻き消している。

「颯……！」

「ごめん、もう行かなきゃ。遅刻しちゃうよ」

「待つて、颯！お願い……ねえ、颯……！」

「僕を置いて行かないで……」

「えっ、何？」

慎の言葉を聞き取れずに、颯は聞き返した。

「余計な真似はするな。今更、奴に冷たく振舞ったところで、『水晶』がそんな芝居にだまされるとでも思ってるのか」

颯は項垂れた。ああ、やはり、見透かされていたのだ。窓の外には、

今朝の土砂降りが嘘のような晴れ渡った空があっても、颯の心は憂鬱だった。分かっていた。「水晶」がそれほど単純でないということも、それでも、菜月を遠ざけるためならやむを得ないと思ったのだ。慎は続ける。

「そんな芝居をしてる暇があったら、さっさと命令を片づけたらどうだ？ その方が大事な恋人を傷つけずに済むぞ」

「……別に、菜月を守りたくてあんなことをしてる訳じゃないさ。

あれはね、僕の一種の覚悟の現れだと思ってほしい」

「ほう」

慎は興味を持ったように顔を上げた。その次の瞬間、水が飛び、ガラス片が飛び、生徒会室内にガラスの割れる激しい物音が響き渡った。慎は間一髪で椅子を引いて飛沫を避けたが、颯は避ける間もなく、まともに左袖を水に濡らしていた。違う。あえて避けようとしなかったのだ。颯の左の拳は硬く閉じられて宙で小刻みに震えており、床には見るも無残なガラスの花瓶と、ランの花の死骸が散らばっていた。颯が浅い呼吸と共に紡いだ言葉を、慎は聞き逃さなかった。

「僕は君のようにはならない……」

颯が何も言わずに部屋を出て行った後で、慎はレコードがちょうど葬送進行曲を流し始めていたことを思い出した。

第三十四話 菜の花の満ちる頃・後編

「ねえ、有瀬、一つ聞きたいことがあるんだ」

「何ですか、クリス様？」

放課後の美術室には切り込む様に夕日が差している。机と椅子の影が、白い床や壁の上に、或いは絵画や石膏の胸像の上に、引き伸ばされて揺れている。二人の影もまた、そんな無機質な模様の中に紛れて。

「あの絵はさ、君が描いたの？」

「……どうしてそう思うんです？」

「ごめん。この間、勝手に君のスケッチブックを見たんだ。そして、あの絵と同じ絵が……」

「ああ、別にかまいませんよ。でも、この絵を描いたのは僕ではありません。スケッチブックの絵はこの絵の模写です」

「じゃあ、この絵の作者は……？」

「志水晶じゃないんですか」

「そうなんだ……びっくりしたよ。君の絵があまりにも志水晶の絵に似てたから」

「クリス様には敵いませんよ」

暗転。

落合と来夏は朝食のテーブルを挟んで顔を見合わせていた。菜月が来ないのだ。昨日の朝は、随分と早く部屋を出て行ったと思ったのに学校に到着してみたら姿も形もない。電話をかけてもいないので、二人で昼休みの時間を縫って走って寮の様子を見に帰ると、頭から布団をかぶって丸まっており、二人がつついて、うんともすんとも言わなかった。具合が悪いのだろうと二人は判断した。恐らく、心の方が。野瀬先生には風邪らしいというようなことを伝

え、授業後は部活も放り出して急いで帰ってきた二人なのに、やはりはつきりとしたことは掴めなかった。唯一の収穫と言えたのは真つ二つに折られた携帯電話と、ゴミ捨て場に放り投げられていた傘だけであった。

二人は朝食を急いで掻き込むと、菜月のためにロールパン数個とオレンジジュースのグラスを持って部屋に戻った。菜月は昨日の昼休みから身動きもせず布団にこもっており、二人が感心したくなるほどであった。

「おい、酒本、朝食はここに置いとくからな」

落合はロールパンの皿をわざと音をたてながら枕元におろした。昨晚二人が取ってきてやってポテトもハンバーグも、まるで手をつけた形跡がない。

「お前な、何があつたのか知らねえし、聞かねえけど、あまり動かないと体が鈍るぞ。俺たちが学校行つた後でもいいから、少し動いとけよ」

菜月は相変わらず返事をしない。来夏は諦めて古くなった皿を片し、後は何も言わずに部屋を出て行つた。二人が去つて行つた後で、菜月は漸く体を起こした。久しぶりに見た日の光が、真つ赤に泣き腫らした目には眩しかった。菜月は弱弱しく細めた目をそのままに、ちらりとパンとジュースを見遣つたが、とても食欲は沸かなかつた。このまま何も食はず、布団の中に籠っていたらどうなるのだろうか。菜月はぼんやりと考えた。きっと死ぬんだろうな。それまでどれくらい時間がかかるだろう？でも、訪れる結果としては、このまま生きていくよりは遙かに良いものであるはずだ。菜月は部屋を見渡し、捨てたはずの傘がいつの間にか玄関の傘立てにきちんとしまわれていることに気がついた。菜月はベッドを飛び降りた。傘に歩み寄る道で踏みつけていった携帯と同様、もう二度と使用ができないようにしてやりたかつた。だが、傘の柄にかけた手を何かが止めた。菜月は視界を千鳥模様でいっぱいにした後、悔しげに唇をかみしめて傘を放りだし、再びベッドの中に飛び込もうとして行きつかずに

床に倒れ込んだ。この世の全てが忌々しくて、憎々しくて、そして悲しかった。なぜこんなにも冷たい仕打ちを受けなければならぬのだらう。金曜日まで、そう、金曜日の放課後までは何もなかったのに。二人が別れた後、一体何があったのだらう。僕に二度と近づかないって約束できる？ 本当にもう二度と一緒に笑いあうことはできないのか？自分たちは終わってしまったのか？何の予兆もなく、予感もなく、愛情だけはまだしっかりと形を残しているのに？その時、菜月がベッドと床との隙間に見つけたのは、正月にこの部屋で行われた百人一首大会のカードであった。一枚だけ片し損ねたものが、こんな所に入り込んでしまったのだらう。埃をはらってみると、札に書かれた文字が明白に見えてきた。

濡れにぞ濡れし 色はかはらず

「見せばやな雄島のおまの袖だにも、濡れにぞ濡れし色はかはらず

……」

たった今届いたばかりの茶封筒には、百人一首の札がたった一枚だけが入っていた。差出人はないが、元々下の句だけしか書いてなかったカードの端に上の句を書き足した小さな字から推察できた。颯は昼食の箸を置くと、古典の参考書を取り出して素早くページを選び、丁寧に破り取って封筒の中にした。そして、友人の話すのに頬笑みながら、和やかな昼餐を再開した。

瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ

いつか、使命を果たした日には

返事をしてやるべきではないと分かっている。まして、こんな優

しい返事など。ポストの奥ではさりと乾いた音がした後も、颯はその場に立ち尽くしながら、見えなくなつた手紙を見つめていた。それでも放っておけなかつたのは、自分の心のまだ生温い部分のせいだ。この世の中は好きにならないことばかりだ。自分の心も、他人の心も、時間の経過も……

もう既に嫌悪感が芽生え始めている。くるりと踵を返して、颯は一人生徒会室へと向かつていた。昼休みの廊下は賑やかで、颯一人だけが冷たく、沈鬱な空気を纏っていた。いつまで自分はこの状況に耐えられるだろうか。全く自信がない。今すぐにも逃げ出してしまいたい。永遠というものを手に入れる代償としてならば、こんな犠牲は小さなものなのかもしれないが、その犠牲が致命傷になりかねないのだ。自分の、そして菜月の望んだ永遠とは、こんなにも果てしないものであつたのか。それを与えられたとして、自分たちの手に負えるのだろうか。

眩しい昼の光が、颯の意識に反射して煌めいた。颯ははつと顔を上げた。無意識のうちに開けた扉の奥に、日差しを迎え入れた生徒会室の窓があつた。颯はその窓の奥に永遠を見た。揺れる菜の花と、茜色の空と、そしてあの日の二人と。それらは一瞬で窓の外を流れて、また元の青空に戻つた。颯は息を吐き、駆けて窓の棧に身を乗り出した。この景色をどこで見たのか、ようやく思い出したのであつた。

その時、ぐらりと世界が揺れた。慌てて身を引きもどせたのは、ダンスで鍛えた運動神経のおかげであつたが、安堵する間もなく、次の衝撃が忽ち颯を襲いに來た。振り返つた颯の目の前に見覚えのある茶封筒が差し込まれたのだ。

「榊原先輩、落し物ですよ」

そう言つてノアは微笑んだ。

「真田正則……なんか戦国武将みたいだな名前ねえ」

「へえ、またお見合いですか、鳥居先生」

「またって何よ、またって！」

そんな会話が扉を透かして聞こえてくる。女性というのはいずれの御代にも元気なものだ。事実、高等部の職員室が、霧でも立ち込めたように、なんとなく冷たく、先の見えないような不安に包まれている今でも、女性教師たちが持ち前の明るさを失ったということはない。羨ましいと感じる気持ちは、恐らく性別も年齢も関係がなはずだ。校長は机の端からメガネを取ると、少しうつむき加減になってそれを掛け直し、携帯電話のボタンに指をかけた。意図的かそうでないのかは分からないが、留守電に繋がる直前まで待たせた後で、相手はようやく電話に出た。

「はい、どなた？」

「……私の電話番号は貴方の携帯に登録してないんですか？」

「いや、そういう訳じゃないけど。楽しいから……」

携帯電話越しに聞く声は、最後に言葉を交わした時と変わらない。そして、その人を小馬鹿にしたような調子も相変わらずである。羨ましいと素直に思った。

「何か用？長崎ちゃんぽんでも奢ってくれるの？」

「食べたいんですか？」

「別に。インドカレーだっていいけどさ……で、何か用？」

「いえ、別に用というほどのことではないのですが、どうしていらつしやるかと思ひまして」

「君と一緒に。暇してるよ、ほんとに。タンポポに刺し身を載せる仕事でもやるうかしら？」

「刺し身にタンポポを載せる仕事です。まあ、とりあえず、お元気そうで何より」

「こんな退屈な毎日を送ってたらそのうち病気になるよ、きっと。全く、君が羨ましいですよ。理事長なんてやるもんじゃないね。偉くなくても引きずりおろそうとする奴って必ず沸いてくるもんなんだから。君も気をつけないと、すぐに叩きのめされるよ」

「今のところは大丈夫です。上手くやってますから」

あながち気持ちが悪くもっていなくもなさそうな忠告に、校長は見えない笑顔でそう答えた。嘘ではなかった。新しく赴任した理事長という名の操り人形とも、一応はなんとかやっている。操り主の意思が彼に伝わるまでの時間差ということも、もちろん考慮しなければならぬ。見下したように鼻を鳴らすのは、つまらないことがある時の理事長の癖であった。

「僕だって上手くやろうと思えばできたのにさ。まあいいや。愚痴を言ってもつまらないものね。ところで、そっちこそ様子はどんなの？」

「芳しいとは言い難いですね。生徒会役員たちもすっかり買収されてしまいました」

「しつかりしてよ。生徒を守るのが教師の仕事じゃないの？」

「彼らは自分の人生において選択権を持っています。僕は何度も悪い選択をしないように忠告したつもりでしたがね。心が通じなかったのは、恐らく私に情熱が足りなかったのでしょう」

「仕事さぼってたのが一番の要因なんじゃない？」

「……そうかもしれませんね」

コンコンコンと、校長室の扉を三度叩く音がした。校長は目だけを動かしてそちらに向けた。「橋爪です」という弱弱しい声が、生徒たちが騒ぐ声にまじって聞き取れた。

「お客さんかな？」

「ええ、申し訳ありませんが……」

「いいよ。それより今度奢ってね」

「何を？」

「ちゃんぽん」

一歩踏み出すごとに眩暈を覚えるのを、颯は冷たい汗の下に懸命に隠しながら、午後の日差しの中を歩いていた。夢遊病者のように

校舎をさまよった後、クリスが中庭にいますという情報を聞き付けて、ついさつき上履きをローファーに履き換えたところであった。眩暈がするの弱っているばかりではなく、確かな興奮を覚えているからであった。この峠さえ越えれば　自分は永遠を手に入れることができる。

「もうすぐだよ、ナツ……」

何度繰り返したか分からぬその言葉を、颯は最後の一度だと思って青すぎる空に呟いた。

クリスは林檎林の木陰にアトリエを構えて、夕暮れの美術室の様子を描いているところであった。キャンバスの中の部屋を見詰めるその瞳は、被写体を捉えるカメラのレンズのように真つすぐでありながら、どこかぼんやりと霞がかって見えた。その横顔は、苦悩している人間の顔だった。颯が初めて学園に来たクリスを迎えた時、クリスが持つていたのは別の暗さであった。どこかに置き去りにされた迷子のような暗さだった。しかし、今、彼が持っているのは、追いつこうと必死で足掻いている人間の暗さ、崖を這い上っている人間の暗さだった。どちらかと言えば、颯は前者の暗さの方が好きだった。孤独で神秘的、静かで苦しみがなく、人を寄せ付けない。クリスが失ったものは、クリスが今抱えているものよりもずっと美しく清らかなものであった　そんな結論が、颯を微かに苛立たせる。

「クリス」

二度呼びかけてはつとこちらを見たクリスの顔に、次第に怒りがにじみ出ていくのを、颯は見逃さなかった。

「やあ、クリス」

「先輩……」

クリスはぱつと立ちあがった。既に暗さをかなぐり捨てていた。じつとこちらを睨みつけるその顔は、颯が一番嫌いな表情であった。

「……クリス？」

「先輩、酒本に何したんですか？」

「何のことかな？」

笑顔で答えながらも、苛立ちが口元を引き曇らせる。

「酒本がもう二日間も学校に来てないんです。酒本がそんな風になるなんて、先輩と何かあったとしか考えられません」

「残念だけど僕は無関係だよ」

「じゃあ、どうして酒本を助けてあげないんです？」

「別に。菜月の悩みは菜月の悩みだ。僕は解決できないもの」

「小さい頃から一緒だったのに？」

「どんなに長く一緒にいたって、僕と菜月は結局他人同士でしかないんだ。自分の痛みは分かち合えないんだよ……おかしいな。こんなことを話してきたんじゃないのか。ねえ、クリス、僕は君に聞きたいことが色々あるんだ。少し黙って話を聞いてくれないかな？」

「先輩……！」

「いいから黙って」

口元に押し当てられた人差し指の優雅さとは裏腹に、クリスの左手首を締め付ける力は相当に強いものであった。メガネが日差しを吸い込んで、颯の表情が見えなくなる。クリスの手から絵筆が落ちた。……っ、颯先輩！」

クリスが颯の手を振り払った衝撃でパレットが宙に弾け飛び、絵具が美術室の胸像の顔をべったりと塗りつぶした。しかし、クリスの視線は常に真正面にあった。虚ろな憤懣を映し出した、颯の表情の上に。

「先輩、しつかりしてください！そんなこと聞いて何になるんですか？先輩はこんなとこにいちやいけないんです。早く酒本のところに行ってください。先輩は酒本のことを嫌いになった訳じゃないんですよ？だったら、これ以上酒本を傷つけておくななんて、そんなこと……！」

颯の中で世界が大きく揺れた。

「黙れ！お前に何が分かる！」

颯の悲痛ともとれる叫びが、乾いた銃声のように小鳥たちを空に追い返し、林に水を打ったような静寂をもたらした。目を見開いたクリスは、もしかしたら、先輩が珍しく取り乱している姿を収めようとしたのかもしれない。颯は叫んだ表紙にうつむいた顔をふと上げた。その前を自嘲の笑みが横切り、そして弾けていく瞬間を、木漏れ日が照らし出していた。

「君に何が分かるっていうんだ……僕が何のために必死になってきたか。菜月と菜月との思い出を守るためだ。そのために、僕は自分の気持ちも、菜月の気持ちさえも傷つけなければならなかった。菜月がいつか僕の元を去っていく日が、僕には怖かった。ずっと一緒にいようと約束しながら、成長していくごとに二人の気持ち離れていくのが苦しかった。いたずらに流れていく時が憎かった。それでも、『水晶』が僕らの永遠を約束してくれたから、僕は何でも犠牲にできるつもりでいたのに……僕は結局、他人である君でさえ傷つけられない。僕は何にも犠牲にできないのか……！」

絶望に打ちひしがれるのも束の間、颯ははっと背後を振り向いた。クリスには、颯が何を捉えたのかは分からない。ただ、遠くに向かって駆けていく小さな足音を聞いたような気はしたが。「先輩……？」そつと尋ねかけたクリスに、颯は一言、「全て終わった」とだけ呟いた。

その日は雲が速かった。昇降口に張り出されたその掲示に、登校してきた生徒たちが、最も関心のある者から前方の列に並んで、大きな人だかりを作っていた。クリスもまた、最前列に立ち尽くし、呆然としている生徒たちの1人であった。どうしてこんなことが起こりえるのか、クリスにも、周りの生徒たちにもさっぱりであった。

榊原颯を三宿学園高等部生徒会役員から罷免し、二週間の停学処分とする。

「おい、エーリアル！」

人ごみを掻き分けて肩を叩いた落合に、クリスマスは無言で首を振って自分が何も分からないことを知らせた。落合も来夏もすっかり困惑した様子だった。

「どういうことだよ……酒本があれで、今度はこつちもこうなつて……」

「あの先輩が停学処分になるようなことをするなんて、とても考えられねえけど」

「はいはい、そこに集まつてる生徒たち、あと五分で予鈴が鳴るわよ。はやく教室に行きなさい」

「そうだ。さつさと教室に戻れ！」

騒ぎの収集のために廊下の奥から駆けつけてきたのは、野瀬先生と森先生、体育教師のペアであった。大体の生徒は生活指導の森先生に恐れをなして速やかにその場を立ち去って行ったが、それでも、クリスマスたちのように納得できずに残っている生徒もいた。野瀬先生はクラスメートたちの姿を見て、片方の眉を吊り上げた。

「聞こえなかったの？ はやく教室に行きなさい。落合はあと一回遅刻したら三回目の欠席がつくわよ」

「どうして榊原先輩が罷免なんですか？ それに停学処分って……」
素直に尋ねたクリスマスに、先生二人が苦虫をかみつぶしたような顔しかしなかった。

「詳しいことは話せません。それに、ここだけの話、私たちにも何も伝わってきてないのよ。学校の方針が変わったことは知ってるでしょう？ あのほら……」

「理事長が変わったせいで」

来夏の言葉に、森先生は何度も無言で頷いてみせた。野瀬先生は別段声が高くもなかった来夏に、人差し指を唇にあてるジェスチャーをすると、さつと辺りを見回して、誰もいないことを確認した。

「とにかく、早く教室に戻りなさい。いい？ このことについてはあ

まり話さないこと。命が、じゃなかった。学園生活が惜しければ、ね」

そう囁く野瀬先生の顔に現れた確かな不安を見取って、クリス、落合、来夏の三人は黙ってその場を立ち去ることにした。階段を上る三人を、後ろから森先生の声が追いかけてきた。

「おい、落合、シャツが出てるぞ！」

雨空の生徒会室で荔枝が流し始めたのは、ベルリオーズ作曲「幻想交響曲」第三楽章であった。颯の机の上はすっきりと片づけられて、「水晶」による悪趣味な悪戯なのか、陶器の花瓶に菜の花が生けて置いてあった。しかし、この部屋の変化にも、役員たちは冷静に対処していた。こうなることは覚悟の上であったということ、全員が競って明示しようという風であった。

「無念だったな、颯も」

荔枝が何気ない調子で言うと、慎と陽はふっと口元を緩ませた。

「優秀な書記をなくしたのは、生徒会にとって大きな痛手だろう」

「全くだ。優秀な秘書だったのに」

慎は髪をかきあげてコーヒーを啜った。颯の座っていた椅子の背もたれには、昇降口に張ってあったもののコピーがセロハンテープでとめられている。紙がひらひらと不安定に揺れるのを、陽が先ほどから指で弾いて弄んでいた。

「オレたちも笑ってられねえぜ。明日は我が身だ」

「君が罷免になったとしても、机の上に飾っておく花がないな」

「けっ、死んだ奴が花なんか欲しがるものか」

「口を慎みたまえよ、ホールデン・コールフィールド君。誰がどこで聞いているか分からないぞ」

「あいつもそうやって足をすくわれたんだろうな」

恋人同士の遣り取りを聞いて、慎はそう言って立ちあがった。頭痛がするのは、仲の悪い二人と同じ空間にいるからというよりは、風邪を引き始めたせいのような。しっかりしなければならぬ。これ

から校長に書類を提出しに行くのだから。じつとりと熱い自分の額に手の甲で触れ、慎は薬指の輝きを一層身近に、しかし一層重々しく感じた。通りがかり様に触れた菜の花の花弁の瑞々しさが、部屋を出た後も粘りつくように指先に残っていた。

ティンパニーの遠雷を聞く。断頭台へと向かう、その直前に。

自宅謹慎を言い渡された身には、何もすることがない。実質命の終わりを知らされたようなものだ。噓せこむほど暖房のきいた部屋に浴衣一枚の姿で横たわる颯には、窓の外を低いところから眺めやるしかなかった。あれほどまでに失敗するものかと誓いながら、花瓶を叩き割り、脱落していった者を嘲笑いながら、自分もまた何もできなかつた。菜月との永遠　それをどれほどまでに焦がれていたか。後輩の一人を傷つけることぐらい、自分にはいとも容易くできたはずなのに。何が計画を狂わせたのか。何が思いを吐露させたのか。感情を露骨に出した者から失敗だということも知っていたのに。あの時、自分はもう限界だった。これ以上は何も傷つけたくなかつた。だが、その結果としてはどうだろう。自分は消える。少なくとも、この三宿学園という世界からは。そして菜月にも何らかの危害が及ぶ。結局、自分は菜月を傷つけることになってしまった。世界で一番大切な、愛おしい菜月を。

「ずっと一緒だよ」

目を瞑れば、手を繋いで遊んだあの頃の神社の境内を思い出す。時というのは非情なものだ。全てを廃れさせてしまうのだから。

「いつだって傍にいるから。暗闇の中でも、僕たちはずっと一緒に

……」

誰かが扉を叩く音で、颯は目を開けた。「水晶」の刺客か。それとも颯を嘲りにきた役員たちか。どちらにしても構わない。死刑宣告はもう下った。あとは歩いて行くしかないのだ。断頭台への13段を、しっかりとした足取りで。

急かすようにノックの音が再度響く。颯は直感的に何かを悟り、立ち止まった。そんなことがあるはずないと思いながら、颯は廊下を駆けていく。開けた扉の奥に、菜月がいた。

「ナツ……」

菜月は私服姿で、雨の中に千鳥模様の傘を持ち、颯をじつと見上げていた。走ってここまで来たのだろうか。真っ白いスニーカーは見る影もなく、ズボンの裾が跳ねた水と泥でびっしょりと濡れていた。それでも菜月は息を乱すことも、疲れ切った様子を見せることもなかった。颯に向かつてゆっくりと微笑みかけた。

「ナツ、どうして……」

「行くよ、颯」

風が激しく吹いて、二人の髪を乱した。その時、颯は、役職から、校則から、それまで自分を縛っていた全てから、解放されたその身を見出したのであった。

「颯、一緒に行こう」

差しだされた傘の中に颯は身を屈めて入り込んだ。浴衣一枚の肌を、2月の暴風雨が冷たく刺した。思わず震えた颯の肩に、菜月が背のびをして上着をかけた。ゆっくりと歩き出した。凍えるように寒い雨の日の学園に、歩いて行く二人は誰ひとり見出すことができなかつた。白い塔も、校舎も、植物たちも、皆同じように黙って濡れていた。菜月と颯が沈黙の中で、傘からはみ出した肩を濡らしていたように。

「あつ……」

校門の目の前まで来たところで、一際強い風が二人の手から千鳥模様の傘を攫っていった。二人が見上げている内に、傘は灰色の空の向こうに、緑色の小さな丸となって飛んで行った。まともに風雨に

晒されて、前ばかり見詰めていた二人は顔を見合わせた。引き返すことができるのは、これが最後だと二人とも分かっていた。ここで戻るか突き進むか、どちらかが、もしくは両方が、それを決めなければならなかった。学園という庇護を捨て、未来に生きていくことがどれだけ困難なことか二人は知っている。今はもう傘もない。雨が脳髄にまで染みわたっていく。

「颯……」

同じ傘に入っていた時よりも寄り添う菜月に、颯はそっと微笑みかけた。

「大丈夫だよ、ナツ」

菜月の濡れた前髪が額に張り付いているのをそっと払ってやり、颯は左手の薬指に手をかける。投げ出された水晶の光は、傘よりも高く鮮やかに空を舞っていった。二人は笑いあい、ついに学園から外の世界へ踏み出していった。成長を拒み続けていた二人が、思い出という殻を打ち破り、今を生きる人間として先の見えない道を進んでいく。何ものも恐れることなく、ただ身を寄せ合って。

「雨ですね……」

ノアが混じり合わない海と空の色を見て呟いた。紅茶のカップで手を温めながら、クリスも空を見上げて頷いた。

「雨だね……」

それはいつか、菜の花の満ちる頃

第三十四話 菜の花の満ちる頃・後編（後書き）

お久しぶりです。連載が遅れ気味で申し訳ありません。

受験のため、しばらく更新できないと思います。11月に受験が終われば、12月にはまた再開するかもしれませんが、終わらなければ来年までは無理だと思われませう。

私としてもなんとか続きを書きたいので、篠原の11月合格を祈っていただければ幸いです。

それでは、12月にお会いできることを願って！

追伸：CB短編集「桜のない花物語」始めました。

小説の目次ページから作者名をクリックすると飛べます。

ぜひお読みください。

第三十五話 潮騒の聞こえる場所・前編

目覚めと共に潮騒を聞くようになったのはいつの日からか

バルコニーから望む海に、船は通らない。真冬の潮風にあてられてバイオリンの弦は耳元が耳元で震える。潮騒に混じって微かに聞こえるその音を、水平線の遙か遠くにまで響かせようとしてふと腕を降ろす。込み上げてくる感情が、音楽をうやむやにしまった。荔枝は楽器を置いて手すりから青い世界へと身を乗り出した。目の前に見ていた海が、足元までに広がった。このまま足を落とせばその青が、燃え立つ瞳の奥にさえも染みわたっていくというのに……破滅という言葉を当てはめても良いだろうか？空白だらけのこの行為に。

荔枝は制服のポケットに手を入れ、取り出した手紙を幾片にも千切って海に投げ捨てた。一人で命令を受け取ってきたと聞いたなら、きつと陽は怒るだろう。これは証拠隠滅でもあり、様々なことが気にいらぬ気持の清算でもあった。「水晶」の命令が波の音に呑み込まれ遠い紺碧に消えていくのは何とも愉快だったが、同時にその光景は、荔枝の心にある主の陰鬱さをもたらした。暗渠に滴り落ちていく雫の一滴一滴が重く、どす黒く、冷たい。溜まった水をかき回して掬んだ手が、澱を握っている。幸福が不純物だと知ったのは、それを手に入れてからのことだった。自分の心とはあまりにもかけ離れた場所にあったもの。それを掴み取るまでは、何か眩しすぎる、澄み切ったものを想像していた。陽が最初の偏見を打ち壊し、幸福というものを初めて具体的な形で示してくれた。それから始まった二人の生活が、後者の思いこみを打ち砕いた。陽と過ごす日々は確かに幸福だった。だが、嬉しく楽しいばかりでは決して済まされなかった。幸せを知ると同時に、怯えることを知った。愛することを知り、同時に憎むことも知った。誰かに依存して生きることと、

あまりにも大きすぎるその代償も。破滅することに対する強い憧憬も。

「落ちんなよ」

寢室の窓から顔をのぞかせて陽が言う。荔枝は少しだけ笑ってみせた。

「落ちないさ」

掌に残っていた最後の一片を、陽に見えないようにそっと投げ捨てる。陽は何も知らなくていい。何も知らなくて、そして何も覚えていなくていいのだ。

「何考えてた？」

「別に何も」

「嘘つくなよ。お前がオレに何か隠せる訳ねえだろ」

「取り留めのないことだ。言ったらただの愚痴になる。君とはもう少しロマンチックな会話をしてみたいから言わないさ」

「そんな会話した覚えなんてないけどな」

「だからこそ、偶にはいいじゃないか」

「変な奴」

君に言われたくないとの言葉をぐっと呑み込んで、荔枝は再びさざ波を眺め遣る。そうやって佇むながら、知らず知らずのうちに陽の腕が背後からその身を包むのを待っていた。だが、陽は来なかった。頬の辺りに寄せられる視線に気づいて、未だ同じ場所でこちらを見つめ続ける陽の方を振り向くと、陽が呟くようにふと言った。

「お前、そうしてると本当に綺麗だよな」

「どうしたんだ、急に」

陽の口元からいつもの人を小馬鹿にしたような笑みが消えているのに気付いて、少し頬が緩む。そういえば、初めて出会った時に美少年と評されたことはあったが、それ以降は容姿について何か言及されたことはあまりなかった。光源氏ではないのだから、男が容姿のことばかり褒められるのもどうかと思っていたことであるし。しかし、こうして真面目に言われてみると満更悪い気もしないのが本心

で、荔枝は己の女々しさに呆れる他なかった。

「だったら、ずっとこうしていいようか？」

あの不敵な表情と共に帰ってくるはずの返事がない。どうも調子が狂う。今朝は随分目覚めが遅かったことも考えると、熱でもあるのかもしれない。隣にいてくれればすぐに触れて確かめることもできるのに、今日はこんなに距離を置いてしまっているから黙っている他はない。ふと冷たい冬の風が吹いて二人の髪を乱した。昨夜以来の藍色の目を、荔枝は静かに見つめ返していた。

「お前、何を隠してる？」

「何も」

陽を誤魔化したところで罪悪感など疼きはしないのだ。覚悟は出来ている。

「目が戻ってるぞ」

「戻ってるって？」

「最初の頃。氷室の家で会った時と同じ目だ」

荔枝は静かに目を閉じてわずかに首を傾けた。陽はどこまで見透かすつもりなのだろう。自分のことは何一つ語りたがらないくせに。

もし、陽が今の荔枝と入れ替わっても、きっと同じことをするに違いないのに。

「そうか……」

荔枝は瞳を見られないように、海に向かって顔を俯けた。長い髪がはらりと耳から零れおちて、彼の横顔を覆い隠した。

見上げれば、晴れては濁る空の色。菜月は一体どこにいたのだろうか。部屋にはノートの切れ端が置いてあっただけだという。落合と来夏が沈んだ声で話すのを聞きながら、クリスは実物を見せてくれと言う勇氣は沸いてこなかったし、悲しみというよりは、平手打ちでも食らったかのような衝撃に圧倒されていた。やがて、大きなものがゆっくりと体を通り過ぎていくと、クリスマスにはもう何もする気

が起きず、ノアの優しい声を頼って何とかその日一日を乗り切ったような次第であった。

「きつと大丈夫ですよ」

初めてクリスを慰めた声は、ノアだった。

「榊原先輩と一緒になんでしょう？きつと大丈夫です。酒本さんは先輩の傍にいたために、自分の意思でここを出ていったんです。生きてればまた会えますよ。そのうちお便りがあるかもしれませんし……」

お便りは来ないままにその週が終わり、また新しい週が始まった。

しかし、忙しく美しい日々うちに、クリスたちは何らかの希望を掴みかけはじめていた。酒本はきつと大丈夫だ。何事もなく、きつと幸せに先輩との日々を送っているはずだ。何の根拠もない希望ではあったが、信じる他にない希望であった。そして、見上げてみる空がまた濁る。

バスで町に下り、買い物を済ませてバス亭に立つ頃には、空は暗く、街灯のすぐ真下でさえも吐く息の白さが目立った。ぼんやりと霞むような光では到底太刀打ちできないような、冷たい漆黒が町を覆っていた。早く帰らないと、有瀬の夕食の支度が遅れてしまう。雑踏の中で気持ちばかりが急いでいた。それなのに、一体どこかで何かあったのか、おびたしい車のヘッドライトの中に、バスの巨大な輪郭は見えない。巻き付けたマフラーにじっとりと焦燥の汗が滲んだ。その一方で、裸のままの両手は冷え切っていく。帰る手段になりえない電車だけが、先ほどからせわしなくクリスの頭上を行きかっていた。

ふいに、後ろから、ぼんと肩を叩かれた。振り返ったクリスの目に、見覚えのある顔が映り込んだ。

「あつ、先輩！」

「やあ、天才少年画家君」

立っていたのは荔枝だった。その微笑みが穏やかでありながらも何だか見慣れぬように思われるのは、町の灯りのいたずらか。それと

も、彼が身に纏っている白いコートのせいなのか。しかし、いずれにしても、荔枝の出現はクリスマスにとって喜ばしい出来事だ。こんな一人の町で、知り合いに出会えたのだから。

「奇遇だな、こんなところで会うなんて。バスを待っているのかい？」

「ええ、でも、なかなか来なくて……もう二十分も待ってるんですけど……」

まさかその直後に解決策が打ち出されるとは知らずに、クリスマスは困り果てたような溜息をついた。荔枝の微笑の色が変わった。

「だったら私と一緒にいこう。車があるから」

「く、車?!」

「おや、忘れたのかい？私は十八歳だよ」

「そんなことは知ってますけど……でも、何で学校に？」

「話すと長くなる。夜もすぐに更けてしまっし。さあ、早く付いておいで」

バス亭の行列から逃げさせたことが、クリスマスの感じた最初の喜びであった。荔枝はクリスマスが付いてきているかもいちいち振り返らず、すたすたと人ごみの中を潜り抜けて行った。黒いばかりの群れの中に、荔枝のコートはとも目立った。クリスマスは買い物を腕に抱え、遅れをとらじと慌てて先輩の後を追いながら、その右手にバイオリンのケースが握りしめられているのを確認した。きつと、町には楽器のメンテナンスかなんかがあったのだろう。しかし、まさか車で……一体どこに置いているんだろうか。そもそも学園内で車を所有することは校則違反でないのか？いや、もしかしたら、あれも生徒会の特権なのかもしれない。呆れるほど生徒会優遇の学校だから。まあ、一般生徒である自分も訳あってその一部を享受しているのだが。

荔枝を追いかけて行くうちに、電車の音は遠のき、街灯は減り、人気と雑音とネオンも薄れて行った。クリスマスはふいに不安を感じ、遠くにきらめく観覧車を振りかえった。先ほどまで自分たちのいた

場所はあんなにも遠い。何も喋らない荔枝はまるで亡霊のようで、クリスは死者の世界へいざなわれているような、そんな気さえするのであった。前を見ていなかったクリスは、荔枝の足音が消えたことにも気付かず、荔枝に肩を掴まれてはっとして立ち止まった。

「後ろを向いていると危ないよ」

「あつ、すみません……」

「一人でさつさと歩きすぎた。すまない」

「いいえ、俺がぼーっとしてただけですから……」

「私もだ。考え事をしていた」

「何を考えてたんですか？」

言ってから、何てくだらない質問をしたのだらうとクリスは思った。これでは、バカ丸出しではないか。荔枝は暫く黙っていた。クリスの左側に立っていた荔枝は、クリスより黒い海の傍に立ちながら、後輩の左肩をぎゅっつと握りしめていた。しかし、やがてその手をクリスの右肩まで伸ばすと、荔枝は再び歩み始めて呟いた。

「君のことを。君が私の前からいなくなってしまった時のことを」
えっ、とクリスは確かに言おうとした。だが、開きかけた唇を、革の手袋で包んだ指が塞いだ。左耳を長い髪がくすぐっている。動揺を隠しきれもせずに、クリスは荔枝の顔から目を逸らした。不幸なことに、二人の気を紛らわせてくれるようなもの、例えば、車の往來だとか、人だとか、猫の鳴き声だとか　そういったものは一切なかった。

「どうして先輩が俺のことを……？」

「判らない。それでも私は時々君のことを考える。そうせずにはいられないんだ」

「な、何言って……」

荔枝の腕がクリスを暗い駐車場の中に引き入れた。荔枝の顔を見上げて、その時、クリスは、自分はさらわれてしまったのだと気づいた。暗闇に浮かび上がった表情は、夢を見るかのように、恍惚として、虚ろだった。

「先輩……?」

「私が君のことを考えてはいけないかい？」

恐ろしいほど優しい声が聞く。

「一体どうして？」

「だって、そりゃ……先輩、川崎先輩と何かあったんですか？」

「川崎……?」

一瞬理解できなかったかのように呟いて、荔枝は痛ましげに眉をひそめた。クリスの肩を離れた手が、今度はクリスの指先を求めたが、クリスは素直に応じた。それはふらつく人が、支えを求めようとするように。

「先輩、大丈夫ですか？」

クリスは何とか自分のペースを取り戻したことを悟って尋ねた。荔枝はただ、無言でうなずいた。

「川崎先輩と何かあったんですか？」

自分が立ち入る問題ではない。そう知りながらも、クリスは続けて聞いた。「いや、別に」と荔枝は言った。そして、ポケットから車のキーを取り出し、白いポルシェのエンジンをかけると、助手席にクリスを招き入れた。クリスに不安はなかった。ただ荔枝への心配だけがあった。発車後もしばらくその均衡を保っていたクリスの心だったが、ようやく町の雑踏を抜け出した後で、ミラーの荔枝が不思議な笑いを浮かべた時、相手が元の優位を取り戻したと気づいた。そう、この人は逃してくれないのだ。

「か、川崎先輩は……!」

「君は」

逃れようとしたクリスの言葉は、しっかりと遮られた。

「なぜ絵を描くんだ？」

クリスはとまどった。こんなことを聞かれるとはとても思っていなかったのだ。

「えっ……あ、あの……」

「好きだから。君は素直にそう答えられるかい？」

クリスは荔枝の横顔を見遣った後、まばらな街灯が次々と自分の背後に消えて行くのを感じながら、小さくしかしっぴかりと返事をした。

「はい」

それ以外に理由は考えられなかった。気づいたらいつも絵を描いていた。物心ついた時から……本当に？自分はいつから絵を描くことが好きになったんだ？

「君が羨ましい」

荔枝がラジオのスイッチを入れると途中から流れ始めるバッハのバイオリンコンチェルト。

「私はなぜ自分がバイオリンを弾いているのか判らなくなるときがある。ただ、それを周りが求めているからなのかもしれない。それとも、バイオリンを弾くという行為がもう私の一部になってしまったのか」

もう学園の門は見え始めていた。真っ白い彫刻のように、いや、もっと虚しく悲しいもののように月夜の中にぼつんと浮かび上がっている。それは例えば、墓の下に忘れ去られた骸であったか。

「先輩……」

「そこまで考えると何もかも判らなくなるんだ。私は……もしバイオリンを弾かなくなったら、私は私でなくなるのか。そんなくたらないことばかり考える。君は……」

流し目でクリスの目を捕え、荔枝は車の速度をあげた。愚かなまでに無垢な少年は、催眠術にかけられたかのように荔枝の横顔か、それともその後ろの暗闇か、どちらかにじっと見入っている。楽器の音が鼓膜に染みて脳に絡みつく。たった一つの麻酔だった。目を閉じることさえも叶わずに……せめて冷たい風に身を切りつけられながらの破滅であれば。何も願えないこの身を恨むしかない。一度「水晶」に奪われてしまった自由。束の間の不安定な平和のために投げ出したものの重さ。取り戻すことはできない。ならば、最期だけは剣を高く掲げて向かっていこう。全ては恋人のために　　ハンド

ルを握る自分の指先が震えていることに気づいたのは、その時だった。

「先輩！！」

何を考えるでもなく、ほぼ本能的に、荔枝はブレーキを踏み込んでいた。闇に、静寂に、遠い町のネオンにさえも響いたはずの衝突音の代わりに、タイヤが地面をこする甲高い悲鳴が冷気を切り裂いた。目の前を包んだ暗闇は一瞬で門の白さに変わり、ラジオは別の曲を流し始めていた。なぜ、今、自分は生きているのか。なぜ、隣の少年は真つ白い顔に青い瞳を輝かせているのか。知らない曲の歌詞だけが、やたらに切ない。

「どこか具合でも悪いんですか、クリスマス様？」

「えっ、別に……」

昨夜は眠れなかったなどと、素直に言う気はなかった。買い物帰り道にあった出来事を、ノアに話そうとは到底思えなかったから。眠る度に、まどろむ度に、夢の中に何度も蘇る。荔枝の打ち明けた苦しみが。彼の問いが。なぜ絵を描くのか。もし、絵を描くことをやめたら、自分は自分でなくなるのか。あまりにも難しすぎる問いであった。

「でも、昨日からずっと変ですよ。あつ、もしかして、ジャクソン先生の風邪がうつったんじゃないですか？昨日ずっと咳き込んでいらしたし」

「多分違うと思うけどなあ……ありがと、有瀬」

「おーい、エーリアル！有瀬！」

「クリスマスばーい！ノアせんぱーい！」

ああ、また騒がしくなったとクリスマスとノアは顔を見合わせて苦笑した。二人が振り返るよりも早く、背中に衝撃が走り、けたたましい笑い声が耳元に響いた。悪友とも言える存在を失って一時はすっかりしょげていた（鳥居先生曰く「萎れていた」）落合だったが、ど

うやら元の元気を取り戻したらしい。明音の突進がそれに続き、朝の静かな登校時間は突如かしましいものに変わったが、ひとまず二人はノアの方に預けておくとして、クリスは後からやってきた来夏に笑いかけた。

「おはよう、関本」

「よっ」

落合、ノア、明音の三人がおおいに盛り上がりながらぐんぐんと進んでいってくれたおかげで、クリスと来夏はゆっくりと平和な時間を過ごすことができた。本来ならば、クリスとノアが楽しんでいたはずの時間だったのだが。聡い来夏は、クリスのなんとなく振り切れない様子にも気が付いて、前方の三人の声が一層騒がしくなったところで、声をひそめて尋ねた。

「どうした、石崎？」

「えっ……？」

「さっきからあまり元気がなさそうに見えるぞ」

「……やっぱりそう見えるんだ」

ノアには打ち明けられないことも、来夏になら打ち明けられる気がした。何となく気恥ずかしい気もしたけれども。クリスはしばらく迷った末に（来夏はちゃんと待っていてくれた）やがて呟くように言った。

「何で俺って絵を描いてるのかなって思っ」

「何で……？」

クリスはこくと頷いた。

「どうしてそんなことを？」

「人に聞かれたんだ。誰とは言えないけど。何で君は絵を描くのかって。その時は好きだからって答えたんだけど、本当にそうなのかだんだん自信がなくなってきたんだ。もしかだ好きだけだったら、絵を発表する意味はなんだろうって。俺は確かに絵を描くことが好きだけど、描いた絵で人に認められたい。心のどこかには、人に認められなくて描いてる自分もきつ」といえると思うんだ」

「……」
「俺に何で絵を描いてるか聞いた人は、もしバ……その、まあ、その人がやってることをやめたら、自分が自分でなくなるのかもしれないって言うてた。それを聞いた時はよくわかんなかったけどさ、一晩考えて少しその人の気持ち判った気がしたんだ。それってつまりさ、自分が自分でなくなるんじゃないって、世間が自分を自分と見なしてくれなくなるかもしれないって意味なんだね。そしたら、何の覚悟もなく絵を描き始めたことが急に怖くなったんだ……もう引き返せないんだな」

二人は校門をくぐるまでしばらく黙ったままでいた。前方の会話はますます高らかになるばかりであった。クリスと来夏の横を歩いて行く生徒たちは、みんな何の不安もなく、幸福そうだ。それが表面上であることを知っていても、やはりクリスは何となく羨ましかった。

「俺は芸術家の苦しみは分からねえけどさ」

来夏は溜息を吐いた後、このように切り出した。

「いいんじゃないのか？世間の奴らどう思おうと。世間なんて目立ってぎらぎらしてるものが好きだけだ。そりゃ光らなくなったら捨てられるだろうけどさ。それだけのことだ。別に死ぬ訳じゃねえんだし。少なくともお前の一番近くにいる奴らは、お前が絵を描かなくなってもお前のこと認めてくれんだろ？有瀬とかさ」

クリスは来夏に促されるままノアの横顔を見遣った。ノアは笑っていた。クリスの隣をいく人と同じで、クリスの苦しみの片鱗すら知らず。それでも優しさにも切なさにも似た気持ちが湧きあがって来るのはなぜだろう。きっとそれが、何も言わない中でのノアへの信頼の証なのだろうとクリスは思った。

「……うん」

楽器の音がどうにも気に食わない。メンテナンスでどうにかなる問題ではなかったのだ。思わず愛器を叩きつけたくなる衝動はこれ

ばかりが起こすのではない。全て知られていた。「水晶」に。

破いてゴミ箱に放り込んだ手紙には単独行動を咎める旨が簡略に書かれていた。命令はあくまでも荔枝と陽の二人に下されたものである。二人で行動できないのなら、命令違反と見なす、と。それだけならまだどうかできたのに、ご丁寧にも陽にまでわざわざお手紙を送っていただいて。丁寧を超えたところでは、昨夜の写真まで添えていただいて。しらを切りとおす荔枝に、陽が憤激したのは言うまでもない。

「君を守るためなんだ」なんて、野暮なことを言うつもりは毛頭ない。弁解するぐらいなら死んだ方がましだ。荔枝は楽器をピアノの椅子に置き、CDプレイヤーの電源を適当に入れてみた。前回の音楽の授業で使ったのだらうか。流れたのは、やはりバッハのバイオリンコンチェルトであった。カメラにしっかりと切り取られた昨夜と同じ調べ。陽は写真を海に投げ捨てた。

音楽室の扉が軋む音で、荔枝は振り返った。一瞬陽かと期待してみたが、現れたのは恐らく今一番顔を合したくない人物だった。きつと何もかも知っているに違いない。荔枝は慎の顔を見るより先に目をそむけていた。

「何の用だ」

「けっ、やっぱり不機嫌でやがる」

「用がないなら出て行け」

「あー、つたく、こちらら用もねえのにお前の所に来るほど暇じゃねえ」

「ならさっさと要件を言え」

グランドピアノの上に両肘を置き、左手の薬指を弄ぶ。この指輪を慎の顔にぶつけてやったら少しは清々するかもしれないな、と荔枝は思った。やたら腹の立つことばかり喚くならそうしてやるう。荔枝は密かに決心した。

「『水晶』からの手紙は読んだか？」

「白々しい。自分の兄と云ったらどうだ？」

「生憎そこまで仲がいい訳じゃねえ。それで、要件は理解していただけなのか？」

「そんなことを聞くために来たのか。伝言役も大変だな」

「おい、早く俺に出て行ってもらいたいなら早く答えろ。要件は分かっただのか？」

「今答えるつもりはない。答えなら行動で示す」

荔枝はそれきり口を閉ざし、沈黙に帰れの意味を込めたつもりだった。しかし、慎が立ち去る気配はない。それどころか、忌々しいことにこちらに歩み寄って来る。教壇にもたれかかる慎を、荔枝は振り見てじつと睨みつけた。

「帰れ。邪魔だ」

「おい、これは忠告だ。あまり悠長なこと言ってられねえぜ。お前がこれ以上勝手なことをすると、あいつの方に危害が及ぶことになる」

「言われなくとも判ってる」

荔枝は再び慎に背を向け、左手が白くなるほど右手で強く握りしめた。「水晶」が一番痛いところをついてくるのは知っている。知っているはずなのに、なぜこうも息苦しいのだろうか。学園の空気は「だったら、もう少し慎重になれ。せめて忠実な振りぐらいはしろ。昨夜みたいな真似は二度とするな。俺を二度も密告者にさせんなよ」荔枝の中でバイオリンの音が消えた。音楽室に響くのは帰っていく慎の靴音だけとなった。

気がついた時、荔枝の右手は慎の手の中にあっただ。声も息も漏らせずただ憤りに震えていた荔枝は、慎の次の一言でようやく思考を取り戻した。

「おい、今忠告してやったばかりだろうが」

「貴様……っ！」

慎が右手を返すと、荔枝はふらふらと数歩後ずさってグラウンドピアノの傍らに立った。慎は冷たく、落ち着いたままでそんな荔枝を眺めていた。この男憎しと思ったことは数え切れなくとも、かくまで

の殺意を抱いたのは今回が初めてだった。

「やめとけ。痛い目に遭うのは判ってんだろ？」

「陽に手出しはさせない！」

「勝手にほざいてろ」

荔枝は左手の薬指に触れた。指輪を抜きとりかけた。だが、慎がまた後ろ姿になり、バイオリンコンチェルトをまた意識できるようになると、荔枝の全身の力は奪われたようになってしまった。それでも荔枝は去っていく慎に向かって言葉を投げつけた。

「貴様は軽蔑に値する……！」

慎は振り向きもせず扉の向こうへと消えて行った。

第三十五話 潮騒の聞こえる場所・後編

「よう、元気にやってるか？」

「まあまあね。そっちは？……聞くまでもないか」

「ああ、つたく、お前が羨ましいぜ」

時刻は九時を過ぎている。それなのに、荔枝はまだ帰ってこない。自分に合す顔がないのか、それともまた何か勝手に企んでいるのか。いつもの陽なら捜しだして聞いただすところだが、今度だけは何かが足を躊躇わせる。それは、身を切るような寒さでもなく、たちのぼる珈琲の湯気の香りでもなく。

「それで、今はどうしてるんだ？」

受話器の向こうでは、電話中の颯に何とか構ってもらおうとする彼の幼馴染の音がする。

「どこにも行く当てなんてないからね。迷わず家に帰ったよ。両親は驚いてたけど、まあ上手く誤魔化しておいた。今は神社の手伝いとか、そんなことで気を紛らわしてる。しかし、君たちがいないと平和だけど退屈だ」

「へいへい、そりゃ結構なことだ」

「まっ、誰かさんのいい加減な予算書を一つ一つ確認してる暇がないだけね」

白猫が開けっ放しの扉をすりと抜けて入ってきて、優雅な動きで陽の膝の上に飛び乗った。撫でると催促されるままに手を動かしても、意識の半分は電話に、もう半分は別の方に向かったまま。

「荔枝はどうしてるの？」

少し低くなった颯の音が、陽のもう片方の意識をも揺さぶった。

「……さあな。オレに隠れてこそこそ何やってやがんだか」

「君に隠れて、ね。荔枝らしいといえばらしいけど」

「別にあいつのやることだ。何したってオレは構わねえけどよ……」
「けっ、ふざけた真似ばかりしやがって。いつもより深刻そうな顔し

てるくせにいつもよりバカげたことばかりするんだぜ？あー、気持ちわりい」

「誰が気持ち悪いって？」そう言ってくれる声が耳元にある気がしたのに。背もたれに仰け反らした喉をくすぐる長い髪を求めても、やはり部屋は静かだった。苛つきというのだろうか。「水晶」がわざわざ送り届けてくれたあの写真を見た折に湧きあがってきた感情のもっと小さなものが、胸の奥で起こって染みていく。受話器の奥だけが騒がしい。颯が陽の心を見透かしたように笑う。

「陽、あまり荔枝に当たらないようにね。荔枝も色々考えてるんだから」

「考えてるって何を？」

「そんなの君が一番知ってるだろう？」

沈黙を、肯定の意味だと颯は捉えた。しかし、吐き出された言葉はあまりにも頼りなかった。

「……最近のあいつは何考えてるか分からねえよ」

颯の目に蒼白な友人の横顔が浮かぶようだった。恐らく陽もほとんど似たようなものを思い描いているであろう。張り詰め過ぎた瞳ときつく結ばれた唇。あの秋の夜の、どこか苦しげな。

颯は電話の相手には聞こえぬように溜息をついた。荔枝の気持ちには痛いほど判る。自分と同じだ。大切な人を守るために一人で全て片をつけようとしている。例え、それが下手な芝居であることを知っていても。しめつけるように、時には切りつけるように、生ぬるさをもった冷たく悲しい感情が、少年たちを孤独に走らせる。荔枝の場合は、その悲壮な覚悟のせいで一層追い込まれていくのだろう。あの行き場のなくなるような気持ちを、陽は恐らく知るべきなのだ。然し、颯はこんな感情をどう伝えるべきか分からなかった。

「おい、生きてるか？」

「あつ、ごめん……」

そういえばあの夜、自分も荔枝に同じように問いかけた。パーティの後の電話の最中、急に黙り込んだ荔枝に「生きてる？」と。荔枝

に投げかけた問いが陽を通して自分に帰って来た。颯はこんな些細なことに、不思議な運命を感じるのだった。

「ったく。そつちが忙しいならもう切ってもいいんだぜ」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……少し考え事してて。あかさ、陽、学園を出てからずっと調べてたんだけど……」

その時、陽は玄関の鍵を回す小さな音を聞いた。シャネルがにやあと鳴いて膝から飛び降りた。

「けっ、遅いご帰宅だ」

「考え事ですか？」

ぼんやりと冬の町に見入っていたクリスは、少し眠たげな、間延びしたノアの声にはっとした。「起きてたの？」咄嗟にそう返そうと思ったが、遠い町のネオンに照らされたノアの顔は、先ほどのクリスに劣らず薄ぼやけていた。まるで、海深く泳いでいた鯨がほんの気まぐれから海面に顔をのぞかせたように。クリスの問いは変わった。

「ごめん、起しちゃった？」

「いいえ、喉が渴いて起きたんです。そしたらクリス様がまだ起きてるから……」

「そつか。うん、もう俺も寝るよ」

クリスはうつ伏せの状態からベッドに肘をついて肩と顔を起こし、枕の上で両手を組んでそこに顎を乗せていた。ノアが階下に静かに下って（まるでクリス以外の誰かがこの家で眠っているように）また戻って来るまで、クリスはそのままの姿勢でいた。イギリスにいた頃を思い出した。教会でこんな風に両手を組んで祈った。何回そうしたかは覚えていないが、恐らく全て自分のためだろう。世の平和だとか、隣人の安穏だとか、そんなことを思って祈った時は一度もないはずだ。今、もし他人のために祈れるとしたら 考えて、一番に浮かんだのは薫の顔だった。薫とは切ない擦れ違いが続いていた。放課後の美術室で寄り添いあったあの日から、二人の間に恋

人らしい囁きも抱擁もない。数えれば、もう二週間も。ただ数少ない授業の中で交わす視線だけ。体が熱くなるほどに薫に恋焦がれている。せめて子供っぽいキスだけでも出来たならば。

ノアが布団を被ったところで、クリスの思考回路は強制的に遮断された。仕方なく、クリスも完全に体を横たえて目を閉じた。「クリス様」とノアが呼んだ。

「何、有瀬？」

「まだ朝と同じことで悩んでるんですか？」

「朝と同じことって……」

「関本さんから聞いたんです。もしクリス様が画家じゃなくなったら、どうなるかって話」

「ああ……」

頬の辺りがぼんやりと赤くなるのを感じた。薫への想いに夢中になって、昨夜の荔枝の嘆きをすっかり忘れていたのだ。先輩の嘆きに応えようと思つて、自分なりの回答を探していたというのに。しかし、何と答えるのだろうか。「俺には俺が画家じゃなくても一緒にいられる友達がいるので平気です」とでも？問題は少しも解決していなかった。

「クリス様」

「ん？」

布団の中で丸めていた手を取られ、クリスは目を開けた。ノアの手は温かかった。眠たい赤ん坊の体温も高いと聞く。見つめるノアの目もまるで幼子のように無垢だった。

「僕はクリス様が好きですよ」

「えっ？」

「クリス様がどんな人でも僕は好きです。画家なんかじゃなくたって……クリス様は僕の最初の友達なんです」

「有瀬……」

ノアの手を取り返ししながら、クリスはこのいたいけな親友に抱いた感情を思い出した。嫉妬　あの妖精の絵は本当にノアが描いたの

だろうか。

「だから、何にも心配しなくていいんです。クリス様に何かあった時は僕が助けます」

ノアがにこりと笑った。その時、クリスの頭の中で見知らぬ映像が弾けた。深い深い海の底へ沈んでいく少年。浮かび上がっていく自分と彼を繋ぐ二つの手はやがて切り離されていき、二人の間には人魚の吐息のような泡が立ち込める。

待ってて！必ず迎えに行くから！今度は僕が助けに行くから！

「今度は……僕が……」

無意識のうちに言葉が零れ出る。現実の世界に帰ると、ノアがきよとんとしてこちらを見返していた。クリスは自分でも訳が判らないまま、仕方なく笑った。

「ううん、何でもないんだ。ありがとう、有瀬」

手を離れたノアに背を向けた後で、ノアが悲しげに瞳を潤ませていたことを、クリスは知らない。

頭痛がぼんやりと目の前を霞ませる。せめてもの慰めに目を閉じてみるが、ついそのまま眠ってしまったらしいことになる。それなのに、荔枝の胸中はごたごたと片付かず、床に散らばったものを踏むばかりだ。いつまで経っても安らかなる夢の世界には辿りつけない。疲れた目をふと持ち上げて、頬にかかった髪を耳に挟んだ時、ふと二つ離れた席から投げかけられた視線に気がついた。荔枝はすぐに前髪を元に戻した。ティーカップを叩き割った彼の右手はきつと今も痛むはずだ。欠片を拾い集める途中で傷ついた荔枝の指も、まだずきずきと疼くのだから。何を言われても風を受け流す柳のように。陽のどんな挑発にも荔枝は静かな言葉で応え続けた。しかし、いつしか陽が言葉を荒げ始めると、次第に荔枝も冷静ではいられなくなっ

てきた。陽への怒りはなかった。ただ自分への苛つきと疲労とが荔枝の理性も論理も麻痺させていた。陽が手を振り上げた時、荔枝は身構えもしなかった。打たれたところでいい仕打ちだと思った。自分にとつても、陽にとつても。だが、陽の手の行き先は、テーブルの上だった。冷めた紅茶と陶器の破片が散らばり、絨毯を汚した。

「シャルが怪我をする」

そんなことを呟いた覚えはある。乾いた声で笑った覚えもある。気が付いた時、陽はその場におらず、荔枝は摘み上げたカップの破片が真っ赤に染まっていくのを一人うち眺めていた。

チャイムが鳴った。同時に鳥居先生の悲鳴があがった。今日のユニットを終わらせることができなかつたらしい。頭に入らない横文字のテキストを閉じながら、あちこちに移動し始める人ごみの中で教室を出て行く陽の姿を、荔枝は見つけた。

珍しい人に呼び出しをされたものだ、とクリスは思う。ついていきながらも、クリスは驚き、戸惑っている。自分の行動を思い返してみる。どこかで生徒会に迷惑をかけたことはあったか？考えてみてもついに辿り着いたのが転校初日の夜のことだったので、クリスは自分ではなく生徒会の方によつぽど何かあったのだらうと考えることにした。もしくは恋人たちに。

「あの、川崎先輩……？」

「ん？」

前を歩く陽の足取りは軽いようで重い。

「どこに行くんですか？」

「秘密」

「俺、何かしました？」

「別に。何も」

「はあ……」

陽が飴を噛み砕く音が、昼休みの騒がしさの中でもはっきりと聞こえる。飴を噛む人は短気な人だと以前イギリスの叔母が言っていた。

クリスの知る限り、陽は短気な人ではなかった。ただ、今はこうも快活に返事をしながらも、恐ろしく機嫌が悪いことだけはクリスにも感じられた。クリスは陽が最上階への階段をのぼりはじめた時も何も言わず、素直に生徒会室の入口までやってきた。

クリスは陽の表情をちらりと見遣ったが、目を隠したその顔から読み取れるものは何もなかった。ここには最早階下の声も届かない。ガリっという不吉な音だけが時折響く。クリスには一時間ほど思えた数秒で鍵が開けられ、陽は一人そそくさと生徒会室の中に入り、奥の窓枠に身を凭れかけさせた。部屋の前で困惑したまま突っ立っているクリスには、暫くの沈黙の後で言葉が与えられた。

「入れよ」

クリスが部屋に踏み込んだ途端、窓の景色を眺めていた陽は身を翻し、机のパソコンに向かって何やら打ちこみ始めた。入ったところでどこにいればよいのか判らず、仕方なしに陽の傍らに立つと、陽は画面を伏せ、クリスの肩を押して窓の景色を示した。

「この景色に見覚えはあるか？」

「えっ？」

自分の顔を見上げようとしたクリスを、陽は手で強制的にクリスの頭を挟んで視線を固定し、再度尋ねた。

「昔、全く同じ景色を見たことがねえか？」

「えっと、中庭の景色ならいつも見てますけど……」

「そうじゃねえ。この窓から見たこの景色を見たことはねえかつつてんだ」

「そんなのありませんよ。第一、生徒会室に来たのは初めてですし」
「だろうな」

陽は放り捨てるように呟いた。クリスには益々訳が分からなかった。こんなことを聞くために俺を呼んだのか？全く意味を成していないこんな質問をするために？しかし、陽の指が両頬を離れても、クリスの目は動けなかった。やがて、クリスの横顔が微妙な変化を遂げた。憐れむような、どこか苦しげな陰を灯して 風に靡く緑の草、

冬になつても尚鮮やかな花の彩り、校舎と塔の白、湧きあがる青い噴水。この窓の棧に手をかけて春風を頬に感じた。一体この記憶はどここの記憶なのか。ただ、ふりこのように大きく揺れて、往復しながら脳を掠めるばかり……

頬を押し当てたガラスの冷たさが、クリスを現在の生徒会室に引き戻した。窓はクリスの吐く息でうつすらと曇っている。袖で拭いた部分に、陽が黙り込んでパソコンの画面に見入っている様子が映し出された。その不鮮明な絵の中で、扉が開いた。

「ここにいたのか……」

その声と瞳がどこか優しく淋しげに湿っていたのは、ほんの一刹那のことであつた。クリスの存在を認めた途端、衝撃が荔枝の顔を染めた。荔枝の目は続いて陽の前の機械へと移り、衝撃は須臾を以つて怒りへと変わった。ふらつく足を扉の枠で支える左手が、震えていた。

「何をしている……?」

「さあ」

陽はパソコンの蓋を閉じて静かに言った。青い双眸は、今や真つ直ぐ荔枝を射ていた。

「お互い干渉なしだ。それがお前の決めたルールだろ?」

「何を戯けたことを。君のしていることは……!」

「これがオレのやり方なんだよ」

二人の意図することは、クリスにはさっぱり分からなかつた。それでも、荔枝の中で張り詰めて、たつた今大きく揺れて零れたものを、クリスも感じ取つた。

「納得いくやり方が、他になかつた……」

クリスは陽の左手にいつもの水晶の輝きがないことに気が付いた。嫌な予感がした。学園を去っていた颯の影が胸を過ぎる。生徒会が崩壊している? まさか有り得ない。否定しながらも、目の前の真実に慄き、そしてそれを疑う時、残酷な調べがクリスの前に現実を突き付ける。

「おい。何やってんだ、てめえら」
背後からの言葉に振り向きもせず、荔枝は静かな溜息を吐いた後、生徒会室の中に入ってきたと入って陽の傍らに並んだ。その際にしっかりとパソコンの電源コードを踏みつけて行くのを忘れずに、慎を振り見た彼の足元に、また一つ、美しすぎる鎖が転がった。

ここでは潮騒が聞こえない。膝を抱えても、耳を澄ませても、目を閉ざしても。海ははるか遠く望む場所にある。四つの壁は健全に白い。精神病院の白さだった。机も時計も何もかも統合がとれていてつまらない。この部屋は患者を締め上げて殺す。患者の内側から少しづつ。

「陽」

「何だ？」

「そこにいるのか？」

「ああ」

「扉のすぐ前に？」

「……ああ」

初めて陽と口を聞いた。この部屋に閉じ込められてから。否、もしかすると生徒会室で隣に並んだあの瞬間以来かもしれない。「水晶」の決定は早かった。向き合いながら黙り込む夕暮れの居間に、知らせは届いた。生徒会役員を罷免。二週間の停学の上、謹慎処分。手紙には簡単にこつも付け加えられていた。尚、生徒会役員の地位を失った以上、二人は今いる寮で生活を続ける訳にはいかない。翌日の朝にも移動先を指示すると。ああ、違う。その手紙を読んだ時に交わし合った目線があったではないか。荔枝は覚悟の意味を陽の目の中に探した。しかし、荔枝はついにさがしていたものを恋人の瞳の中に見つけることができなかった。

「水晶」は宣言通り、翌朝一番に人を寄越した。最低限の言葉を以って移動は進められた。学園の東にぼつんと忘れ去られたように

建っていたその寮を、知らなかったのは生徒会役員として不覚だったかもしれない。それは十年近く前まで使われていたが、増加する学園の生徒数に収容能力が追いつかなくなつて使われなくなった場所だった。十年もの間、この建物は打ち捨てられていた。それなのに、この建物はまっさらだった。埃の積もる様子も蜘蛛が巣を張る様子もない。家具もまだ新品同様に使用できた。二人に不自由な生活を強いる目的は「水晶」にはなかった。外に出られないということを除けば。ただ、「水晶」が求めていたのは、彼らが最も苦しむ環境に二人を置くことだった。二人は隣同士の違う部屋に閉じ込められた。そして、二つの部屋を、鍵のかけられた扉が繋いでいた。荔枝は戸惑うように扉に触れた。壁に埋もれるように白い扉もやはり冷たい毒を塗られていた。だが、荔枝は扉に頬を寄せて目を閉じた。向こうにいる人の存在を体で確かめたかった。

「ここからは波の音が聞こえないな」

沈黙に圧されて呟く。聞こえなかったのか聞こえたのか陽からの返事はない。開いた瞳で荔枝が見る海は、青く続く丘の先で光を映している。荔枝はゆっくりとその場に膝を落とし、扉に背中を預けて座りこんだ。多分同じような姿勢で恋人も座っているに違いない。そう見越して。荔枝はまた口を開いた。

「こうなることも君は覚悟の上だったのか？」

「……」

やはり返事はない。声を出すが辛いのだろうか。この部屋の息苦しきのせいでは？

「納得するやり方が他になかったと、君は言った。四年前、私たちが身の安全を手に入れるためには、『水晶』に服従する他に道はなかった。今、君は一体何のために『水晶』に歯向かう道を選んだ？」

「……後悔してんのか？」

「まさか。していない。でも、君の言葉を聞きたい」

「言葉？」

「君が何を一番に思っているのか、君が守りたいものは何なのか、

それだけを知りたい」

暫しの静寂が、荔枝に失望を与えた。陽はまた逃げるつもりなのか。いつもと同じように。本心を知ろうとすると逃げてしまふ、狡猾ながら憎めない手口で。こうして言葉以外何も交わせない今なら、答えてくれると思ったのに。唐突に陽は低い笑い声を洩らした。喉奥から笑う、いつもの笑い方だった。

「陽？」

「バツカだな、お前」

「何を急に……」

荔枝ははつとして口を噤んだ。無造作においた手に触れる指先があると気づいて。床と扉の隙間からこちらに差し出された手があると知って。荔枝は思わず手を引いた。膝の上で、触れられた左手を抱きしめる。

「オレの人生で一番高かった買い物はよ、それまでの人生のほとんどを支払ったんだぜ？安定した生活も、家庭も……ああ、大富豪になる千載一隅のチャンスもな」

陽の声がそんな荔枝の行動のためか鋭くなる。荔枝の左手の傷はまだ痛んでいる。

「まあつまらねえ人生だったことも考えると、安い買い物だったかもしれないけどよ。それを買ったおかげで、毎日面白かったし。ただ、まさか、それがオレの元から逃げ出そうとするとは思わなかったけどな」

陽の指が荔枝のシャツの裾を掴んだ。逃げようとしたのか、本能的に丸めていた体が仰け反って、後頭部が扉の湿った冷氣に押し当てられる。陽は一層研ぎ澄まされた声で、扉越しに荔枝の耳元に囁いた。

「……覚悟してたんじゃなかったのか？」

もし泣くことを知っていたら、涙も頬を伝って来ただろうに。荔枝は泣くことを知らない。嗚咽を漏らすことも、鼻を擽ることも。ただ胸だけを激しく震わせた。覚悟、覚悟と何度呟いただろう。陽

と共にいたこの日々で……陽の声は鋭くも哀調を帯びていた。これが彼の本当の声、本当の言葉だったのだ。そして、本当の言葉を欲した自分こそ、偽りばかりを吐いていたのだ。シャツを掴む手が離れると、荔枝は扉に向き直り、額を扉にあてた。そして、息ばかりの声で言った。

「陽、すまない……」

「……」

「私は君から逃げようとした。君に依存していく自分が怖かった。君なしでは生きられなくなっていく自分が嫌だった」

「……もういい」

「私は何も知らなかった。何も……君の傍にいたということは、そういうことなのだ。私は何も覚悟をしていなかった……」

「もういい。黙れ」

荔枝は左手の指を全て扉の奥に差しこんだ。例え指が潰れても構わなかった。陽に触れたかった。陽の傍にいたいという事実を確かめたかった。陽の指は荔枝の上にそっと重ねられた。そして傷も含めて陽自身の温度の中に包み込んだ。後の二人はそのままひたすら静かに呼吸をし、やがて日が暮れるとうとうと浅い眠りの中に誘われていった。

扉を叩く音がする。陽か？陽が起こしているのか。だがもう少し眠っていたい……ノックはしつこい。傾けていた首が痛む。睫毛の前に前髪が零れかかっている。向こう側にある荔枝の手を陽は相変わらず握り続けている。ノックは廊下と面した方の入り口から聞こえる。だが、この暗闇の中では歩いて行けない。それ以前に、陽と手を離すのが嫌だった。荔枝は小さな声で誰だと尋ねた。

「うわっ、いた！あつ、あの、湧水明音と申します！あつ、あの、今から扉開けますよ！いいですね?!」

「おい、何の騒ぎだ？」

扉越しに陽が聞く。眠たげな声だ。この建物には不釣り合いなほど

明るく元気な声に、目を覚ましたのだろう。荔枝が事態を把握できていないうちに、カチャツという音が聞こえ、この部屋より濃度の薄い闇が小柄な少年の輪郭を模った。不意に眩しい一筋の光が、荔枝の目に突き刺さった。荔枝は目を閉じた。どうやら少年は懐中電灯を持ち歩いているらしい。

「あつ、すみません！大丈夫ですか？！つて、じゃない、じゃない。とにかく急いでるんでいいですか？その扉も開けますよ」

明音は土足のままどたばたと部屋に踏み込んできて荔枝の隣に立った。荔枝は闇に慣れた目で、この少年を慎のストーカーだと突き止めた。しかし、なぜ一般生徒がここに？荔枝の戸惑いは、明音の声に遮られた。

「あの、手、危ないんでどけてくださいっす。あつ、川崎先輩、そこ危ないんでどいてもらえますか？」

陽が手を離れた。荔枝はじんじんと痺れる左手を胸に押し当てて立ちあがり、数歩下がって事の成り行きを見守った。とにかく分かったのは、明音がこの扉を開けようとしていること、荔枝と陽が再び会えるようにしているということだ。それ以上に喜ばしいことはないのだから、荔枝は何も言わないことにした。扉は明音の持っている鍵で呆気なく開いた。開いた扉の向こうに明音は相変わらず明るい声で呼びかけた。間もなく、荔枝と同じように何も分かっていない陽の顔が、こちらの部屋の闇に浮かんだ。荔枝が駆け寄りたい衝動を抑えるために、明音の声が必要だった。

「さあ、急いでください！時間がないんっす！見つかったら大変なんですから。急いで降りてください！学園の門のところで車が待っていますから、それに乗って逃げるんです！」

「逃げるって……」

明音は部屋の窓をちらりと振り見た。海に面していない方の窓で、遠くに高等部の校舎と塔を望める窓だ。その窓の外で、灯りがちらつくの荔枝と陽を見た。明音もそれを確かめると、二人を急かし、窓に向けて懐中電灯を大きく三回回転させた。明音の意味したこと

を理解する時間もなかった。荔枝は陽の手の引くままに階段を駆け下りながら、必死に現実を見つめ直そうとしていた。どうすれば、頭が現実を追いつくのか。しかし、更に驚くべき光景が二人を待ち構えていた。満点の星空の下に二人が降り立った時、二人が見たのは、二人のポルシェと、その前に立つ慎の姿だった。

「てめえ、何でこんなところに……」

「いいから早くしろ。さっさと乗り込んでできるだけ学園から離れた場所に行け。当分戻って来るんじゃないぞ。もたもたするな。早くしねえと見つかるぞ」

車のエンジンは既にかかっている。乗り込んだ順番から自然に、荔枝が運転席に、陽が助手席に座ることになった。ハンドルを取る手が感覚を取り戻すのを、荔枝は数秒待たなければならなかった。その時、慎が窓を叩いて開けると手で命じた。荔枝は言われた通りにした。

「忘れ物だ」

慎が荔枝に投げつけたのは見知らぬ鍵だった。怪訝そうな顔をする二人に慎は平常の傲慢さを保ったまま呆れて付け加えた。

「どうせお前らは榊原みたいに行く当てもねえだろうが。一応、住む場所を確保してやったぜ。ルートは車に入力してある。海岸沿いを南に向かって真つすぐ行っただけだ。俺のことが信用できねえなら使わなくても構わない。それだけだ。さっさと行け」

「慎……」

「感傷に浸ってる暇はねえんだ。当分その顔を見せるな」

「……感謝する」

慎が笑った気がした。窓の反射に遮られて、よく分からなかったけれども。荔枝と陽は流し目だけで視線を合わせて頷いた。鍵を陽に渡して、荔枝はアクセルを踏み込んだ。学園の門に突進したあの夜よりも強く。今夜は、あの夜とは違って、学園の門に今度は反対側からぶつかろうとしていた。

「お元気で……」

遠くで明音の声でした。

「どこへ行く？」

門もいよいよ間近になって、荔枝が訊いた。夜の闇が、風が、木々が猛スピードで車窓を通り過ぎて行く。陽はふざけたように傾げた首をミラーに映した。鍵を右手でもてあそびながら。

「別にどこでもいいじゃねえの？オレは構わねえぜ」

「そうか……」

開いた門を車が抜けて行く。その瞬間に、荔枝は言った。

「私も構わない……君と一緒になら」

第三十六話 主よ憐れみたまえ・前編

夜中に雨が降った。闇の中を忍ぶように降る雨だった。

暗い部屋の中に置かれた鏡が、雨を映して水晶のように煌めいた。千住薫が黒い布でそれを覆うと、忽ち部屋は元の暗闇に戻った。漆黒が肺まで染めるような暗さだった。灯りはなくともベッドの場所は分かる。薫はその上に横たわり、色を失った青い目を天井に彷徨させた。後少しだと誰かが囁く。後少しで、目的は達成される。

薫は目を細めた。しかし、それは一体誰の目的なのだ？他でもないお前自身のだろう。影が笑う。お前が受け入れた全ては既にお前自身のものだ。お前が欲してそして手に入れたものだ。あの女の髪に、声に、ただ焦がれていた頃のお前に、一体何が出来たのだ？あの女を見ず見ず死なせた、無力なお前に何が出来た？

苦悶が弾けた時、薫は横にいる人の腕を取っていた。同じ感触がした。あの女の亡骸の前で自らを抱きしめた時と。この中には同じ血が通っている。その腕は怯えたように大きく跳ねた。

「心配するな。いつも通りのことを……するだけさ」

「慎様？」と呼びかけられた拍子に左手の中で押し潰した、封筒の中の文字が、頭の中で点滅する。

「コーヒー、できましたよ？」

慎はおずおずと差しだされるカップを受け取って、その中の真っ黒い液体に目をやった。どうやら今日は上手くいったようだ。少なくとも目視できる限りでは、摂取しても健康に害はなさそうに見える。昨日のようにごぼごぼと真っ赤なものが泡立っていたら、その時は中身をぶちまけようと思っていたのだが。もちろん、明音に向かつて。小さく礼を言って恐る恐る口に含むと、不味くはないが、決してコーヒーのそれではない味が口いっぱいには拡がった。慎は顔を

しかめると、二度と持ち上げないつもりでカップをソーサーに置き、書類の上でペンを滑らした。

「おい、今日の予定はどうなってる？」

「各部活動の決算報告が四時から。それから、今日の代表委員会は森先生の都合で来週の木曜日に変更になりました」

「……そうか」

「あ、あと、生徒の学園外での活動に関する規則の修正案は、副校長先生でなく校長先生に提出するようにとのことです。副校長先生は急遽出張が入ったので……」

一体どうして一般生徒に過ぎないこの少年が生徒会室に出入りして、自分の秘書代わりをしているのか。理由は慎にも分からない。生徒会役員三人が罷免になり、全員が学園を去った。あとは自分一人で静かに悠々と仕事ができるはずだったのに。かつては大いに毛嫌いしていた騒がしい環境に、いつのまにか慣れ切ってしまったのだらうか。だとしたら恐ろしいことだ。人恋しさから明音を側に置くようになったというのは、不服ではあったが、ある程度納得がいった。もう一つ考え当たった理由よりはずっと。まさか、自分は、この少年が半分の血のつながった弟であるから、近くに置いておくのではない。

慎の否定を裏付けるように、明音が異母兄弟であるという真実は、慎の明音に対する愛情を深まらせるばかりか、優しい感情から慎を一層遠のかせていた。兄弟に対する親愛の情を、慎は知らない。世間で思われている兄弟の理想像と、自分と兄の関係は全く違う。兄は弟を翻弄させ、屈服させ、その喉元をきつく鎖で縛りあげる。飴を与えて甘やかしたかと思えば、次の瞬間には鞭をくれる。きつと最終的には殺すつもりなのだろうと、慎は確信している。そんな兄を、薫を、慎は憎む他なかった。憎んで、憎んで、憎み通すしか。頭を、完全に兄の足の下に敷いたまま。

分かるはずもない。明音を弟として認めた時、一体どのように扱えばいいのか。一体どのように愛すればいいのか。頭が痛いのは、

決して寝不足のせいだけではないはずだ。

「慎様」

「何だ？」

無駄口は慎めと言ったはずなのに、命令をまるで聞くつもりもない明音は、仕事中でも平気で自分の名を呼ぶ。しかし、書類に目を落としたままでは返事がないことに気がついて、慎は顔を上げた。明音は、明るい朝日から目をそらすように顔を伏せて、表情を揺らしていた。

「一つ、聞きたいことがあるんです……」

そう言った後でも、明音はしばらく躊躇うように口を開けたり閉じたりしていたが、やがて決心がついたように、でも相変わらず目は伏せたままで言った。

「生徒会の先輩たちがどうして学園を出ていったのか、俺には分かりません。理由を知ろうとも思いません。でも……慎様だけには学園を出て行ってほしくないんです。出て行きませんか？ 慎様は、その……学園を置いて、どこか遠くへ行ったりしませんよね？」

話が流れて行くうちから、慎は笑うしかないと思った。そして、明音の質問が終わった時、予定通りに笑った。だが、作るのに時間がかかったその微笑みが、予想以上に優しいことに気がついた時、慎はいつもの高慢と余裕を以ってこう言い放った。

「いちいち、くだらないことを聞くな。当たり前だろうが。俺が自分の職務を放り出しているのこの逃げられるかよ」

「そうですね」と明音も笑った。左手の中で隠すように丸めた封筒が、もしくはその中身が、慎の手の平に突き刺さっていた。

石崎・エーリアル・クリスをこの学園から追放せよ

さもなければ、貴殿の学園内での地位、名誉、友人などの全てを保証できぬものとする

「呪いだ。これは、絶対に呪いだ」

「何が？」

教室に入って開口一番不吉な言葉を放った落合にそう聞きながら、来夏の顔に心配する素振りには皆無だった。

「有り得ねえだろ？いくらなんでも。今日の部活の決算報告、酒本がないせいであれが出なきゃいけないんだぜ？しかも、代表委員会の方は木曜日に変更って……おい、俺木曜日は大河内とデートの予定なのに」

「あれ、いつの間にかそういう関係に？」

「石崎、気にするな。勝手にそう思ってるだけだから」

「ああ、やつぱり……」

「やつぱりってなんだ、エーリアル。畜生、おい、酒本、戻ってこい！今日だけでいいから戻ってこい！」

窓の外に叫んだところで、行ってしまった人は帰ってこない。絶望する落合を傍目に、クリスとノアはトランプを積み立ててピラミッドを建設し、来夏は洋書を捲っていた。ノアが震える指で加えた一枚が仇となり、ピラミッドはすぐさま崩れた。こんなときでも、ノアは律義に謝る。

「ごめんなさい、クリス様。僕のせいで……」

「そんなに謝らないでよ。仕方ないさ。それにどっちみち、そろそろ片づけなきゃいけない時間だし」

「あっ、ほんとだ。じゃあ、続きは放課後にしましょう」

二人して床やら机やらに散らばったトランプをまとめているとき、ふと二人の手が触れた。それ自体は何でもないよくあることなのだが、クリスはその時初めてノアの存在を認識した気がして一瞬固まった。そういうえば、最近自分はノアの目をちゃんと見て話していない。前はイギリスのこの習慣が抜けなくて、恥ずかしがられたほどののに。そして、クリスは、一見何でもなさそうに思える二人の関係のこじれが（それはクリスだけが感じていたのだが）、やはり最終的に例の絵の問題に帰結すると知って、急激にもどかしい思いに駆られた。あんな問題、聞いてしまえば済む話なのに。今でも聞け

ばいいのだ。美術室に飾られているあの妖精の絵は君が描いたのか、と。薫さんを見惚れさせ、かの志水晶の筆を完璧なまでに模倣した、あの絵は君が描いたのか、と。

クリスの舌が痺れた。友人をも嫉妬できる自分の浅ましさ、憎くてならなかった。

「えっ？元彼に会っちゃったんですか？」

「そうなのよっ！それで、飲みに誘われたから脈ありかなーって思ったのに……！」

「結婚してたんですって。三年前に」

「あら、まあ、お気の毒ねえ」

「鳥居先生、そんなに落ち込まないで。縁がなかったものはしょうがないわよ」

「でも、でも……！」

「大丈夫ですよ。ジャクソン先生がまた新しい人紹介してくれますって、ねっ？」

「もっちろん。任せといて！」

女性たちの声が、足音と共に高く賑ってまた遠ざかっていく。この学園の事情は何も変わらないように思える。変わったのは恐らく自分だけだ。「校長搜索隊」のぼりを掲げていた橋爪先生は、校長室に黙って腰かけている自分を見て、驚きながら困惑している様子だった。景気づけに逃走劇を一つ二つ繰り広げてもいいのだが……いや、やはりやめておこう。理事長がいなくなった今、こちらも何か一つ手落ちがあれば首を切られかねない。別に今の地位に特別執着している訳ではないけれども、ひたすら心配なのはこの学園のこと、この学園の生徒のことだ。誰か間に立って守るものがないくなくてはならない。「水晶」と生徒の間に。そして、そのために犠牲になるとしたら、自分が最も適任なのだ。あの日の自分の声が、ここに木霊するような気がする。

「僕は断固反対です！なぜそんなものが学園の運営に関わるのです？彼は自分の野望のためには、生徒たちをも犠牲にしかねません！」

「無理だよ、風間。これはね、彼が仕組んだ時限爆弾なんだから。奴はもう僕たちの世界から手が届かない次元で物事を取り仕切っているの。君や僕に何ができると思う？僕たちは所詮蚊帳の外の人間なんだよ」

三つのノックが校長の回想を遮った。「どうぞ」と呟いて現在の人をやり過ごす。思えばあの日はもう遠くなつた。もう十年も昔のことなのだから。自分はまだあの日の憤りを以って立ち向かえるだろうか。「水晶」というこの上もなく強大な権力に。学園をその輝く手の中におさめようとする独裁者に。

「失礼します」
入って来たのは千住慎だった。校長の目が鋭く光つたのは、慎が扉を閉めるために背を向けた一瞬で、慎が振り向いた時、校長の顔は穏やかで寛容な教師の顔に戻っていた。校長はにこりと微笑んで、慎が現れたことに対する嬉しい驚きのようなものを繕った。

「おや、千住君でしたか。一体どうしましたか？」
「はい。例の規則の修正案を提出しにきました」
「そういえば、副校長先生がそんなことを言ってた記憶が。まあ、そこに掛けてください。いいえ、遠慮しないで……しかし、感心しましたね。生徒会の運営は現在たった一人で行っていると聞きましたが、まるで滞りがない。随分と仕事熱心ですね」
「当たり前のことです」

慎は愛想笑いもせず淡々と言った。校長も「まあそうでしょうね」とさりと受けた。「君の仕事には相変わらず狂いがない。正確には、君の後ろについている者とも言いましようか……上司という呼び方はそぐわないし、かといって、『水晶』とその名で呼ぶのも

憚られますね。彼の正体はそんなに美しいものではありませんから」
有田焼の湯飲みに注がれていく緑茶を見つめたまま、慎は何も言わなかった。この手のことは覚悟していた。四人もの生徒が学園から弾きだされた後で、「まっとうな」教職員としてこの男が何もいわないはずがない。校長の演説は続く。

「自分に齒向かう者は切り捨てる。脅して命令を実行させる。独裁者たちの常套手段です。学園は生徒たちが学ぶところです。誰かが自分の都合のために好き勝手できる場所ではありません。彼の個人的な望みのために、もう既に四人もの生徒が学園を追い出され、もっと多くの人々が苦しみを味わってきた。そんな彼が自らを『水晶』と名乗る資格はありません」

「……修正案を受け取っていただけますか？」

「君はなんのために生徒会長になったのですか？」

原稿の束を突き返されて、慎は初めてまともに校長の顔を見た。そして、直前の問いの意味をようやく理解した。そこに込められた悲痛的な響きの理由も。今、風間校長と慎は同じ集団の頂上に立つ者同士として向かい合っている。片方は集団を守るためにその地位において、片方は集団を支配するためにその地位にいる。守る方が教師で、支配する方が生徒であるとは、何ともおかしな常識への皮肉だった。「君には守るべき人はいないのですか？ 傍を立ち去ってほしくない人が、悲しい思いをしてほしくない人がいないのですか？ 君と一緒に笑ってくる人が？」

校長が何度も表現を変えて求めた人物は、遂に慎の頭の中に見つからなかった。見つけようと試みただけでも評価をしてほしい。ただ一瞬、明音の顔が浮かんだような気がしたけれども、理性がそれを掻き消した。自分は他の生徒以上にあの少年に情を抱いてはいけな

い。
「受け取っていただけないのなら、これで失礼します」

慎は静かに述べると、修正案の原稿を引き取ってその場を切り上げた。部屋を出て行く時、校長の目がまだ自分を見つめていることを

背中に感じながら。

溜息が校長の口から零れ出た。恩人に齒向かう苦しさに胸を満たしながらも、ただひたすら自分の信じる正義のために憤慨した。あの日の苦労は一生報われないのか。「水晶」に苦しめられた人々その顔を思い浮かべる時、自分をその中に加えないようにいつも気を付けてきた。だが、今この虚脱感の中では……蚊帳の外の人間紛れもなくそうであるはずの自分が、そしてそうであつた他の人々が、なぜこんなにも苦しまなくてはならないのか。

校長は受話器を手を取った。十年前の日、ここで対立した人と、自分の生涯の恩人の声がふと聞きたくなくて。

昼休みの廊下の奥から慎が来るのを見つけた。慎の普段と何も変わらぬ堂々とした様子が、尋ねたかつたことをクリスの口の中に閉じ込めて、躊躇させた。そんなクリスの葛藤を知ってか知らずか、擦れ違う直前で立ち止まった。クリスの足も自然にそれに倣った。

「よう、石崎」

「……こんにちは」

生徒会の役員たちが学園を去っているというのに、この人はなぜ平気なのだろう。自分は絶対にそうならないという自信があるからなのか。この人が……生徒会長が、他の生徒会役員を追いやっているという可能性は？有り得ない話でもない。でも、信じたくはない話だ。

「それで、最近調子はどうだ？」

「調子って……」

「絵の方はどうしてる？」

「まあ、趣味で描いてますけど……」

「お前のお友達の方もどうやらそうらしいな」

クリスははっとした。そういえば、颯はクリスとノアとの関係を気にしているそぶりだった。颯が学園を出る前の数日間には特に。なぜ

こつも生徒会の役員たちはノアのことを気にするのだろう。ノアが理事長の息子だからか。だが、今となつては理事長もその席を追われている。ノアに他のことで執着すべきものはあったか？クリスの脳裏にぱつと浮かんだのは、転校初日に塔の上で見たノアの頬にキスする慎の姿だった。

「有瀬のことが気になりますか」

「それなりにな。元は俺の所有物だ」

「所有物だなんて、そんな言い方は……」

「おつと、つまらねえことで言い争つてる暇はねえ。俺はただちよつと挨拶しただけだ。まつ、せいぜい有瀬と上手くやっておけよ。

後がどれだけ苦しくなるかは知らねえが」

慎の態度に思わずかっとしたクリスは、先ほどの躊躇も忘れて去り行かんとする背中に叫ぶように投げかけた。

「何で生徒会の皆さんは学校を出て行くんです?!」

慎の足が止まった。

「偶然なんかじゃないですよ？教えてください。気になるんです

……先輩たちは皆、俺に何か聞いた後に出て行ってしまったから……

……なぜ貴方は平然としてられるんですか？生徒会の皆さんがほとんど出て行つてるのに。生徒会長、お願いします！理由を教えてください！」

何も不安のない生徒たちが、明るい声で騒ぎ立てながら真横を通り過ぎて行く。二人がもう少し歩けば、掲示板に辿り着く。生徒会役員三名の停学が告知されている掲示板に。今も幾人かの生徒が、部活や授業の連絡をさがしてその前に立っている。彼らは生徒会が壊滅しかけていることに気づけど、それを不思議に思えばかりで何も知らずとはしない。独裁国家の善良な国民たち　　慎の目には、彼らはそう見えた。

「こつちも質問がある」

慎はくるりと踵を返してクリスの方に歩み寄り、妙な馴れ馴れしさだけをこめてクリスの右肩をぎゅっと掴んだ。クリスは慎を睨むだ

けだった。

「捜し物は見つかったか？」

「俺の質問に答えるのが先じゃないんですか？」

「順序なんてどうでもいい。捜してたものは見つかったのか？」

クリスは息を吐き出して唇を固く結んだ。この人がクリスの捜し物を知っているらしいことは、何となく気づいていた。以前にも言われたことがある。図書館で、「塔の上に行けば、見つかると思ったのか？」と。どこから話が漏れたのかは分からないが、もしかすると颯の完璧な情報網で知ったのかもしれない。菜月によると、颯がその気になれば、その人物の生涯がまるまる分かるというほどらしいから。そんな中でも、クリスはノアを疑うようなことはしなかった。クリスはとうとう打ち明けた。

「いいえ」

「そりゃ残念だったな」

「そう簡単に見つかるとは思ってませんよ。何しろ、存在するかどうかも分からない幻の絵ですから。それでも俺は捜し続けます。まだ時間はありますから」

「美術室にある絵も違うのか？」

生徒会長の手を振りほどこうとしていたクリスは、その言葉を聞いた途端ぴたりと動きを止めた。

「あの妖精の絵はお前が捜してるものじゃねえのかよ？」

固まったクリスは今、慎の手に自らの手を重ねているような格好になっていた。それだけで十分に妖しげな構図だっただろう。クリスが正面を向いたまま凍っていた顔をゆっくりと上げたため、クリスと背中を屈めていた慎の顔は、あと少しで触れ合うほどの距離まで近づいていた。

「じゃあ、やつぱりあの絵は……」

クリスの声は掠れていた。もう生徒会のことはずっかり頭から消え去っていた。

「あの絵は、志水晶のものなんですか？」

「素人目にはそう見えるな。だが贋作かもしれないねえ。細かいことはプロに訊くんだな」

「じゃあ、あの絵は有瀬が……」

描いたものではなかったんだ。しぼんだ言葉にはそんな続きがあった。震えるクリスの瞳のすぐ前で、慎は不敵な笑みを浮かべた。クリスはそれすら認知することをやめていた。慎はぐつと身を起して、クリスの肩から手を退けた。

「大変だな、画家ってやつも」

視界に戻ってきた周囲から奇妙な目で見られないために、クリスはふらついても前に進む必要があった。あの絵はやはり志水晶のものだったんだ。なんだ、何も心配することはなかった。心配して一体何を……？いや、そんなことはどうでもいい。ああ、全ては杞憂だったんだ。これで自分は何もかもから解放された気がする。そして、後はただゴールに向かって突き進めばいいのだ。もうすぐ、きつと、クリスの苦しい旅は終わるはずだ。

クリスは自分の中で芽生え始めた、この学園生活への疲労に気づくほどの気力はなかった。

「あつ、クリス先輩！」

久しぶりに明音を招いて食事をするのは楽しかった。ノアはいつもより気合を入れて料理を用意したし、明音の食欲は菜月の魂が乗り移ったのかと思われるほどだった。テレビでは、ちょうどホウセイ・チズミ主演のドラマをやっていた。今日クリスを散々惑わした人の父は、今や天才刑事になって、様々な攻撃を掻い潜ってマフィアのアジトに侵入しているところであった。テレビから聞こえる銃声も、明音の楽しい笑い声も、お茶を注ごうとするノアの気配りも、クリスはどこか遠くにいるような心地で見つめ、訊いていた。自分はもうこの世界の人ではないような、モニターの向こうから二人を眺めているような、そんな心地だった。

「やっぱり、かつこいいなあ！さっすが慎様のお父様！」

明音は自分の父親とは決して言わなかった。

「明音君、こっちの GRATAN も召しあがってくださいね」

「あつ、もちろん頂きます！はあ、俺は幸せだなあ。慎様の秘書として使ってもらえて、こんなにおいしいご飯を食べながら素敵なドラムを眺められて。今が絶頂期かもしれないなあ」

「あれ、生徒会長の秘書なんてやってるの？」

GRATAN を更の上に山のように盛りながら、明音は頷いた。

「はい！ほら、榊原先輩がいなくなってから、代わりをする人が誰もいなくてそれで俺に……本当は今日の夜も慎様の寮で仕事をする予定だったんですけど、慎様、今夜は家族で食事をするらしくて」

「仲のいいご家族なんですね」

ノアがなんなく言つてのけた発言にも、明音はただ同意するだけだった。

「そうですよ。しかも、家族全員美形で秀才ですからね。すごいなあ。さすがに敵わないよなあ」

明音の純粹さがなぜかとても痛々しく見える。そこだけは現実世界と感覚を共有して、クリスはドラマの進行具合を窺った。この賑やかな食卓の目の前で凄惨な場面が繰り広げられている。主人公に、部下であつたはずの恋人の女性が銃を突き付けているところだ。明音がはつと息を呑んで、フォークに突き刺していたマカロニを落とす。 「なぜ君が？」と主人公が問うと、女性の後ろにマフィアのボスが現れる。恋人であつたはずのその人は、マフィアのボスの娘だったのである。

「ごめんなさい……」

恋人役は、ホウセイ・チズミと並んでいても少しもひけを取らぬ女優だった。その大きな綺麗な目から涙が溢れ、同時に銃声が響く。一度目を主人公に向かって撃つ。主人公は倒れる。そして二発目があつた。それは、自分の父であるスーツの男に向かって。最後に、三発目を、自分の頭に。撃たれた腹部を抑え、息も絶え絶えになり

ながら、主人公は女の名を叫んだ。

明音がわつと泣き出したのはこの瞬間だった。一方のクリスは、この悲しいシーンの背後で流れ続けている物悲しい音楽が気になつて、思わずノアに訊いてみた。

「ねえ、この曲なんだっけ？ バツハのマタイ受難曲だったことは覚えてるんだけどさ」

「マタイ受難曲39番目のアリア『主よ憐れみたまえ』です……」意外にも答えたのは明音だった。感心して明音の方を見ると、明音が泣きながら説明した。

「このドラマのタイトルなんつす……うっ……原作小説と同じタイトルで、この曲から付けられたんですよ……あぁっ、ホウセイ・チズミ様が……！」

クリスとノアは顔を見合わせて笑った。音楽は顔を合わせる二人の間にも流れてきていた。それが、予兆だったのかもしれない。

翌朝一番に、クリスは美術室に駆けて行った。鍵はすぐに手に入ることができた。花木先生が冬の朝のコーヒーを楽しみに、早々とやって来ていたので。待ち切れずに階段を駆け上がり、もどかしい思いで鍵を差し込んだ。だが、一度回転してかちゃんとなったはずの扉は開かなかつた。元々開いていたのだろうか。疑問に思いながらもう一度鍵を逆方向に回すと、やはり開いた。一体誰が開けたのだろうか。美術部の生徒が閉め忘れて行ったのだろうか。だが、そんなことはどうでもよかった。クリスは一刻も早くあの絵の前に立ちたかったのだ。

妖精は変わらずそこに佇んでいた。夢見るように目を閉じて、細い背中を伸ばし、裸の胸を背景の白に突き出して。透き通った羽を美しい世界の中に広げ、恍惚の全てをこの世界に放つように。そして、クリスと妖精は今、同じ世界を共有していた。クリスの心は震

えた。自分は遂に見つけたのだ

突然、拍手が起こった。たった一人の拍手が、クリスの背後から。現実に戻されて振り返ったクリスは、そこに慎の姿を見た。誰かを褒めているとは思えない、勝ち誇ったような、しかしどこか影のある表情をして、慎は美術室の机に腰掛けていた。

「よかったな。捜し物が見つかった」

「どうして、貴方は……！」

クリスが真っ先に覚えたのは、驚きよりも苛立ちだった。しかし、続いてモディリアーニの絵の影から現われた人物が、クリスの感情を何もかもすつとばしてしまった。その人は、朝日の輝きを謳歌するようにゆっくりと歩いて、慎の傍らに立ち、その肩に寄りかかる。「有瀬？」

「どうしてここに、って顔してますね。クリス様」

ノアの声はか細いはずなのに、不思議に凜と澄んでいて、教室によく響き渡った。クリスは、困惑の中で自分の顔を見つめるノアが誰かに似ていると思った。それが誰だか思い出せない。

「いいじゃないですか。クリス様がずっと捜してたものを見つけた瞬間なんです。親友の僕もお祝いしたかったです。クリス様が一番うれしい時間を共有したくって」

「でも……でも、どうして生徒会長と？」

「そんなことはどうでもいいんですよ、クリス様。貴方の喜びの前には些細なことです。ねっ、ほら、クリス様」

ノアは小鳥のように慎の体から離れると、靴の先で音をたててクリスの元に駆け寄り、両手でクリスの頬を覆った。いつもとは違う友人に、クリスが戸惑い、うろたればうろたえるほど、ノアには楽しいようだった。ノアの手が頬から首へ、そして肩へと滑り落ちて行く。クリスの両肩をしっかりとつかんだ時、ノアはクリスの体につと身を寄せた。

「あ、有瀬……？」

「羨ましい人……」 「貴方のせいで生徒会の先輩がたはこの学園

を出て行かなければならなかったんですよ。そんなことも知らないで、自分一人の幸せだけ手に入れて、僕は貴方が本当に羨ましい……」

「えっ……？」

「ほら、そんな驚いた顔しちゃって」

愕然としつつも、クリスは思い出した。ノアの顔が何に似ていたか。昨夜のあのドラマの女優の顔だ。主人公を撃ち、父を殺し、自分も死んだ、あの美しい人の顔だった。クリスの考えを読み取ったかのようにだった。ノアの次の行動は。ノアは突如、涙を頬に伝わせて、女優と同じように「ごめんなさい」と呟いたのだ。そして、刹那に笑った。

「なあんで、やってみたかっただけですよ。ねっ、クリス様、貴方はこの学園での目的を果たした。だったら、もうこの学園から去っていただけますよね？ぜひそうしてください。貴方のせいで三宿学園を追われた人々へのせめてもの罪償いですよ、クリス様。そうしたら、千住様は学園を去らないで済むんですから……そんな顔しないでください。ほら、絵を見つけてられたご褒美です。銃弾よりはずっといいでしょう？」

ノアのキスは塩辛く、冷たくクリスの唇に染みた。クリスにはもう何も見えていなかった。ただ、あの憐れなアリア、「主よ憐れみたまえ」だけが物悲しい調べを奏でていた。

第三十六話 主よ憐れみたまえ・後編

「また、見合いを断つたのか？」

「なぜ分かった？」

「母親の顔見てれば分かる。葬式みてえな顔で兄貴のこと見つめてたぜ。そろそろ両親を安心させてやったらどうだ？」

「生意気を言うな」

赤信号で車が止まった拍子に、指で額を弾かれる。こうしている時は普通の兄弟のようだと慎は思う。車の中に、二人以外の者は誰もいない。演技でもなくこういうことができる。慎は家族の団欒の後のこの限られた時間が何となく落ち着いた。例え、その中で関係が真実ではなくても。

「俺はまだ院生なんだぞ？それに妻を持つ気もない」

「別に女がいたところで、大して変わらねえだろ。特に兄貴の場合は。大体、あのフランス人ピアノリストとはいいいとこまでいったじやねえか」

「あれはお互い本気じゃなかったのさ。お互い本気のふりをしていただけ。彼女は結局死んだ婚約者のことが忘れられなかったし、自分の恋よりも尊重すべきものを知っていた。俺もそうだ。恋愛なんて本気で始めた奴から負けだ」

「石崎には言つてやるなよ。泣くぞ、あいつ」
「分かつてる」

信号が変わり、車が再び走り出す。夜の港町は静かだ。海辺の道は風が冷たくて誰も歩きたがらないからかもしれない。慎は薫の横顔越しに黒々とした海を眺めた。何かがやってきそうな遠い海の彼方浜辺に目を向ければ、潮水に濡れた体を砂にすり付ける不気味な怪物もいるかもしれない。日が落ちたにも関わらず、相変わらず波は寄せては返す。その不変が、慎には少し気味悪く思えた。

「父さんは最近調子がよくなさそうだな」

「ああ。本人は何でもないようにしてるけど、間違いなくどっかやられてるぜ」

「今まで苦しめてきた女の呪いかもしれないな」

「そういや、親父も兄貴と同じ主義だったもんな。本気の恋愛はない」

「そうさ。でも一度だけしたかもしれないよ。涌水明音の母親には、案外本気だったかもしれない」

一瞬光った慎の目を、薫は見逃さなかった。慎はしかめた顔を窓に映して尋ねる。

「……どうしてそう思うんだ？」

「色々だね。しかし、お前はどうもあの少年に対してこだわりがあるようだな」

「別に。ただ使えるから利用してるだけだ。あいつの母親のことは関係ねえ」

薫は素早く左手慎の足元を指差した。慎はシートベルトの制約を受けつつも身を屈めて見てみると、小さなものがつま先のすぐ傍に転がっていた。拾い上げてしばらく眺めているうちに、慎の表情は変わった。そして、慎の右手が更に何らかの動作を重ねた後、その表情は更に深く、確かなものとなった。

「それは父さんの書斎で見つけた。メイドに掃除の時に探らせてね。これは机の抽斗の一番奥に大切にしまわれてたそうだよ。手紙と一緒にね」

再び車を止める機会を見つけると、薫はジャケットの裏ポケットからまとめた紙の束を取り出して慎に渡した。慎は紙の束をまとめたいたクリップを取り、全てをひろげて目を通したが、彼の受けた衝撃は、彼の顔も、彼の言葉も表現することができなかっただろう。

「慎」

薫の声音が変わった。

「あの少年は俺たちの立場を滅ぼしかねなかった。それは、今も変わらない。むやみに可愛がって、兄弟の名乗りなんてさせてみる。」

父親は十六年間も黙りこんできたが、何をしでかすか分からないぞ……兄として忠告してやる」
慎は返事をしなかった。ただ、兄から示された二つの証拠を、呆然と見つめるだけだった。

「ただいまー！」

明音がクリスたちのところで夕食を済ませ、寮に戻ったのは、千住家の晚餐がちょうど終わった頃だった。ただいまといつても、ついこの間までは返事をする人はいなかった。ルームメイトである真央は、この部屋を去ってしまったから。ところが、最近になって、慎の写真を眺めるしか孤独をいやす方法のなかった明音に、素晴らしい友人ができた。彼は明音の帰ってきたのを見ると、体をぐつと伸ばした後、心もち首を右に傾げ、大きな瞳を威厳たっぷりにきらめかせて「にやう」と一言呟いた。

「遅くなってごめん、シャネル。今ご飯にするから！」
ふいとそっぽを向いて拗ねているのは自分に懐いてきた証拠だと、明音は嬉しくなる。最初は大変だった。慎に猫の世話を命じられ、わくわくしながらお近づきの印の鰹節を与えてみると、猫は軽蔑するように明音を見遣ってこちらに尻尾を向け、住み慣れた寮の屋根の上へのぼってしまった。明音が説得し続けること約三時間、ようやく猫は諦めて降りてきて、明音の後についてくること承知したのだ。

「はい、どうぞ」

キャットフードの缶を開けて、真央が使っていた皿の上に出してやると、シャネルはぴよんと椅子の上から飛び降りて、猫にはこれ以上を望めない優雅な仕草で食事を始めた。明音はその背を撫ぜながら呟く。

「早くお前のご主人さまが帰ってきてくれるといいね」本当に二人が帰ってくる日がくるのだろうか。明音には確信が持てない。そもそも目の前の幸福すら信じられないでいるのだから。

慎がなぜ自分を側においてくれているのか分からない。明音は餌を食べるシャネルの横に寝転がり、冷たいフローリングの床の冷たさを背中に敷いた。ひたすら追い続けてきた執念の結果かもしれない。こそこそストーキングさせておくよりは、堂々と自分の側においた方がいいと考えたのだろう。それが一番納得のいく答えだ。でも……気のせいではない。明音は確かに見たのだ。明音を見る慎の表情が時々揺れるのを。あの青い目が戸惑うのを。まるで静かな池に小石を一つ落としたように、水面がさざめきたって、波紋が広がって。

慎様は知っているのかもしれない。知っているからこそ、俺の扱いは方に戸惑うのかもしれない。俺はそんなつもりじゃないのに俺はただ、慎様の近くにいたくて、心から尊敬する兄に近づきたくて、この学園に来たのに。弟として扱ってもらうことなんて、俺は望んでいない。大勢の中の一人がいい。他人でいい。慎様の家庭が幸せが壊れない程度に愛してほしいかった。母さん、俺が望んでること、謙虚なようで欲張りなのでしょうか。俺には慎様の近くにいることすら勿体ないことで、そのためには何かを壊しかねないのかな。

ゆつくりと起き上がって、明音は通学用鞆から生徒手帳を取り出し、表紙の裏に貼った母の写真を見た。笑っている。こんな時でさえ、母は　憂鬱が沈んでいく。夜。

最早何も責める気になれなかった。だって……一体何を悔やめばいいのか。何も知らうとしなかった自分を？生徒会を壊滅させてしまった自分を？そんなことに責任を感じるのは、あまりにも大袈裟だ。自分は未だ何も知らないのだから。自分の不甲斐なさよりも身に染みるのは、ノアの裏切りだ。ああ、ノア、一体君はどうして？君が何を考えているか、俺には分からないよ。もうきつと、一生分かることなんてない。君は生徒会長を守りたかったの？そのために

俺を突き刺すような真似をしたの？　でも、もういいんだ。俺は行くし、君は学園に残る。この学園に未練はない。もう自分のやるべきことはやり遂げたんだから。

クリスは一度手を止めて、トランクの中を覗き込んだ。あまりにも無造作に詰め込みすぎた。荷物はまるで増えていない。ここへ来た時の方がもっと多かった気がする。後詰めるべきものは……ああ、そうだ。スケッチブック。クリスは机の上のスケッチブックを手にとつて捲つてみたが、途中でついに本を閉じた。学園の思い出が詰まりすぎていて辛かった。クリスはそれを高く放りあげた。スケッチブックは窓にぶつかつて、クリスとノアのベッドの上に開いて落ちた。そのページを、クリスは見ようともしなかつた。

トランクをあちこちにぶつけながら階下に降りる途中、呼び鈴が鳴つたような気がした。続いて扉を叩く慌ただしい音も。クリスが返事をするより早く、玄関の扉が開き、随分大勢の人間が流れ込んできた。先頭は落合で、続いて来夏、明音、野瀬先生、橋爪先生、ジャクソン先生、副校長と。あれ、今は授業が行われているはずなのだが。それに、この面子には一部見覚えがある。橋爪先生と桜木先生の仲を取り持とうとして、ふざけた作戦がばれた時に白のアトリエに集まつた面子だ。それを思い出すと、何だかおかしくなって、勝手に笑いがこみあげてきた。声をたてて笑い始めたクリスに、落合がぎよつとしたように言った。

「大丈夫か、エーリアル？」

クリスは頷いた。相変わらず笑いは口から零れ出ていた。心が真っ白に、虚しくなつていくにも関わらず。訪問客たちには、クリスのいやに白い顔と、昨夜一睡もしなかつたことが窺われる真っ赤に充血した目が、痛々しく思えた。同時に恐ろしく思えた。クリスはついに狂つてしまったのではないかと。落合が恐る恐る一步を踏み出したその時、トランクが雷鳴のような音をたてて転がり落ち、クリスの体が宙に浮いた。

「石崎！」

来夏と落合が、床に崩れる前に何とかクリスの体を受け止めた。呼びかけてもぐったりとして返事はない。二人が来夏の肩にかかったクリスの顔を天井に向けてみると、クリスは気を失って、死人のように硬く目を閉ざしていた。副校長先生が叫んだ。

「おい、すぐに里見先生を呼んで来い！」

「は、はい！」

橋爪先生が走り出した。その速さたるや。こうした状況でなければ、もつと脚光を浴びたはずなのだが。

「落合、関本、石崎を寝かせて。そうね、リビングの方がいいわ。ソファはある？じゃあ、その上に。湧水、トランクをこっちに持ってきて」

野瀬先生の指示通りに物事がなされた。クリスが寝かされたソファの周りには、橋爪先生を除いた六人がずらりと並んでいたが、何だか病人の死でも看取るようで不吉に思われたのか、ジャクソン先生はつと群れを離れて玄関の方を見に行った。来夏と落合は床に膝をついてクリスを間近で見つめ、明音はおどおどしながらも、クリスの冷たい手をぎゅっと握りしめていた。間もなく里見先生がやってきて、部屋に溢れる人の多さには驚きながらも、病人に関しては冷静に適切に処置をした。

「疲れてたんですね、石崎君。あまり寝てない様子だし、それだけじゃなくて何か悩むこともあったんじゃないでしょうか。少し休めば元気になると思います。目が覚めたら温かいものを飲ませてあげてください。それから、毛布か何かをかけてあげた方がいいですね」「俺、取ってくる！」

落合は光速で消えていって光速で戻り、ブランケットを一枚クリスの肩にかけた。来夏がやかんを火にかける音もした。里見先生の目からみて、ようやく病人は然るべき状態に置かれた。

「目が覚めるまでにはそんなに時間はかからないはずです。一応私が側にいますけど。それにしても、一体どうしてこんなに大勢の先生が……」

「そう、そこですよ、里見先生。僕もちょうどそれを聞きたいと思つてました。何しろ、今は木曜日の午前十時。間違いなく授業中ですからねえ」

背後に突然人の気配を感じて、振り返つた副校長が悲鳴をあげた。校長がちょうど部屋に入ってきたところだった。一同が事前に打ち合わせたかと思つぐらいの美しいタイミングで、「校長先生！」と叫んだ。

「おかしいと思いましたよ。ほんのついでに学校をまわってみたら、体育、英語、数学、三教科も自習になっている授業があるじゃないですか。それも今日突然自習になったというんですから。職務放棄ですよ、皆さん」

「でも、校長せんせつ、クリスちゃんが退学届出したのに放つておく訳には……！」

「言い訳は結構です。さつ、早く自分の持ち場に帰りなさい。副校長先生、貴方もですよ。ああ、野瀬先生と里見先生はここにいらしてください。生徒諸君もすぐに授業に出るように」

そんなのないぜと落合は渋つたが、来夏に連れられておとなしく引きさがつた。明音は名残惜しげにクリスの手をぎゅつと握りしめてから部屋を出ていった。やかんの沸騰する音を聞いて里見先生が止めにいき、校長と野瀬先生だけがクリスの傍に残された。二人はひとまず椅子に腰かけた。

「ところで、野瀬先生。なぜ石崎君は急に退学を決めたのでしょうか？何か理由があるように僕は思うのですが」

「それが……お恥ずかしいことに、私も分からないんです。昨日一日無断で欠席していたのが気になって、今日も来ないから心配していたんです。そこに、石崎の退学届が出たって聞いたので急いで駆け付けてきて」

「そうですね。有瀬君は出席していますか？」

「ええ。普通に登校してました。石崎のことを聞いても分からないとだけ言われて……喧嘩でもしたんでしょうか。でも、それにして

も、退学までは……」

「いずれにせよ、有瀬君に一度話を聞く必要がありますね。野瀬先生、お願いできますか？」

「ええ。もちろん。担任の役目ですから」

里見先生が、ティーセットを一式揃えて持ってきた。注がれるハーブティーを、野瀬先生は断ると、唇をきつく噛みしめて自分のいるべき場所へと帰っていった。校長は部屋中に鋭い視線を走らせた。

明音はその日、ノアを捜しまわった。だが、ノアの姿はどこにも見つからなかった。来夏や落合に聞いても、朝は　つまり、クリスの退学の知らせを聞いて飛び出すまでは教室にいたが、二人が帰った時は既にその姿はなかったとのことだった。放課後になっても明音はまだ必死な努力を続けていた。一体どこへ行ってしまったんだ。先輩は。寮にもまだ帰ってないっていうし。クリス先輩があんな状態だっというのに。そういえば、慎様のことも昨日から見えないが、とりあえずノア先輩の方が先だ。クリス先輩が気を失ったってこと、まだ知らないはずだから。早く、早く捜さなきゃ。中庭を走っていた明音は、噴水の周りを一周回ったところで、花木先生と衝突しかけた。二人は大声をあげて飛び退き、お互いが誰かを認め合った後で同時に謝った。

「す、すみません、花木先生……！」

「いや、俺も前方不注意だった。ところで、涌水、2年A組石崎を見なかったか？昨日からずっと捜してるんだ。美術室の鍵をあいつに預けたまま、返してもらってなくてな……」

「花木先生、こちらです」

明音は一分間に二回も飛び上がりたいたい事態に出くわした。そう言つて、鍵を差しだしながらこちらに歩んできた人こそ、有瀬ノアではないか。ノアは微笑んでいた。ああ、やっぱり先輩はクリス先輩のことを知らないんだ。

「僕が石崎君からお預かりしていました。昨日返しそびれちゃってすみません」

「ああ、それならいいんだが……」

腑に落ちない顔で鍵を受け取り、花木先生は去っていった。次の瞬間、くるりと振り返ってその場を去ろうとしたノアを、明音は慌てて縋りつくように止めた。

「何か用ですか、涌水君？」

ノアはこちらを見ようとせせずに言う。

「先輩！大変なんです……クリスマス先輩が、クリスマス先輩が倒れて……！」

ノアの表情を確かめることは、明音には出来なかった。少なくとも後ろ姿では、彼は何の反応も示さなかった。ノアの様子がおかしいことに、明音はその時初めて気がついた。夕焼けの空にカラスが二度鳴いた。思わず、腕にしがみついた両手が離れる。

「ノア先輩……？」

「……僕にはもう関係のないことです」

「せ、先輩……?!」

真っ直ぐに、澱みのない足取りで林檎林の方へと進んでいくノアを止める術を、明音は知らなかった。ただ何もかも信じられない気持で、その場に立ち尽くしていた。一体どうして、全てがたつた今日の前で繰り広げられたようになったのか、明音には分からなかった。何で？だって一昨日の夕食の席では、二人はあんなに楽しそうに微笑みあっていたではないか。そうだ。一昨日は何もかもが正常で、明るくて、温かくて……突如、明音ははっとした。西から吹く風がざわめいた。慎が林の入り口に立っている。ノアを待っているのだ。ノアがその隣に追いつくと、慎は明音に、風に紛れてしまいそうな一瞥を遣って歩きだした。「待つて」と叫んで追いかけようとした。妨げたのは、肩に置かれた大きな手だった。右目の隅に白衣の袖を認めた時、明音は凍りついた。今一番恐ろしい人物が、明音の真後ろに立っている。

「やあ、涌水君。少し用事があるんだ……付いてきてくれ」

K y r i e e l e i s o n

C h r i s t e e l e i s o n

K y r i e e l e i s o n

主よ、憐れみたまえ

キリストよ、憐れみたまえ。

主よ、憐れみたまえ。

染みるほど冷たい刃が、右手に光る。

「千住先生……用事って何ですか？」

薫が振り返った時、その顔にいつもの優しい微笑はなくとも、明音は驚かなかった。薫が浮かべていたのは冷笑だ。極度の恐怖と敵愾心を緊張の中に包んだ明音の表情と、向かい合うような。明音は物事の核心に触れようとする薫の本意を知っていた。いつかこんな日が来るのではと予想していた。薫が全てを知っていることを示唆したあの日に。西日が、フェンシング場の壁を染め上げている。恐らく、よくない色に。

「ここに慎がないのが残念だったな」

薫の靴音が巨大な空洞の建物に響く。

「もし慎がいれば、千住法正の子供が三人ここに揃ったのに。三人の兄弟が水入らずで話せる楽しい時間になっただろうにね、明音君……貴方は最初から知ってたんですね」

「ああ。俺だけじゃないさ。慎も君と会う前から君のことを知っていた。父の過ちはね、一部の世界では公然の秘密なんだよ。まあ、君の存在まで知る人は少ないだろうけどね　そう、知っている以

上、俺たちは君に話すべきだった。黙っていたのは俺も慎も臆病だったからだ。そのせいで、君を散々苦しませてしまったね」

明音は深く息を吸ってから、肩を落として溜息をついた。でも、もう遅い。否定し続ければ逃げられたかもしれないのに、俺は今あっさりと認めてしまった。母さんはどんな顔をしていることやら。

「……いいえ。俺は何も言わないでほしかった。苦しくなんかなかった……今まで通りでよかったです」

「そういう訳にもいかないさ、涌水君。いや、明音とでも呼ぶべきかな？俺たちは君のことをずっと大事な弟だと思ってきたんだから。どうして血が繋がっている兄弟が顔をそむけあわなければならぬ？俺たちにも君にも、何の罪もないんだ」

「でもやはり黙っているべきでした。俺たちが兄弟だって認めれば……貴方たちの……俺たちの父さんが恥を晒すことになる」

「勿論俺だって父親の顔に泥を塗りたい訳じゃないさ。でも、父は君のことに關して責任を負うべきだ。そうは思わないのかい？」

「責任はもう十分とっていただきました。何もいらなかったんです。何も……母も俺も幸せだったんです！貴方には何も分からないかもしれないけど。母一人子一人、そんな生活でも苦しいなんてことは全くなかった！母には大好きな人に愛された確かな記憶があったから。俺には、母が一番愛した人の子供だって自覚があったから。本当に俺は何もいらぬんです！お願いします……俺のことは放っておいてください……！」

明音はもうこれ以上その場に立っていらぬような気がした。この人と、自分の兄であるこの人と、顔を合わせていたくない。この人は慎様とは違う。大事な弟だなんて言うておいて、内心では母や自分のことを見下しているのだ。だから、あんなにも冷ややかな目で自分を見つめている。込み上げてくる悔し涙を隠したくて、明音は薫に背を向けた。そのまま真っ直ぐ出口へと向かっていくつもりだった。だが、薫の一言が明音の足を止めさせた。

「いいものだな。本気で愛された子供というのは」

明音の態度を強がりだと思って皮肉を言っているのか。強がりではない。何もいらぬというのは紛れもない本心だけれども、これ以上侮辱されるのは許せない。睨みつけようとして明音の目に入ったのは、空中にきらめく金属の光だった。明音の掌にそれは落ちた。

指輪だった。大きさからいって恐らく女性のものだろう。明音は指輪の内側に刻まれた文字に気づき、緋色が強すぎる光のなかで何とかそれを読み取った。HOUSEI to SHIZUKA。

明音の手が激しく震えた。

「これは……」

「そう、それは婚約指輪だ。もう一つはここにある。そっちは君のお母さんのもので、こっちが父のものだ。父はこの指輪を箱に入れてずっとしまっていた。君のお母さんが父に送った何枚もの手紙と一緒にね。読みたいかい？それじゃあ、手早く一枚だけをあげよう。俺が言おうとしていることは、全て語ってくれるはずだ」

最初の文字が目に入ると、屈辱の涙はすうと引いて、懐かしさに胸がいつぱいになった。間違いなく母の字だ。一行、また一行と読み進めていくうちに、握りしめる指輪に熱がこもった。その他の手紙を要求する必要はなかった。この一葉に、母と父の全てが記されている。明音は頬に零れる涙も隠さず、顔を上げて薫を見遣った。ぼやけた視界の中で、薫の顔に父の顔が重なった気がした。

「先生……」

「分かったかい？父は君の母親と結婚するつもりだったんだ。見合いで知り合った俺たちの母親より、自分で選んだ女性を愛した。当たり前前のことさ。本来ならば、君は父親の元で育っていた。君は千住の苗字を堂々と名乗って生活していったんだ。捨てられた女の子として、日陰に生きなければならなかったのは俺と慎の方だ。それを免れたのは君の母親の優しさのおかげだ。俺たちの立場はほんの偶然によって作られたもので、とても脆い……ねえ、明音、君は慎を救いたいと思わないかい？」

明音は優しく儂い世界から急に現実に取り戻されたような気がした。

薫の目が、先ほどまでの悲哀を捨てて、突然を冷徹な色彩を帯びた。明音は手の中の指輪が冷えきっていくのを感じた。慎を救うとはどういうことか。不安そうな明音から手紙を受け取って、薫は切り出した。

「慎は今ある命令を受けている。命令を出しているのは『水晶』と呼ばれる者だ。彼はこの学園を密かに操っている。慎は石崎君を学園から追い出すようにと命じられた。そのために、慎は既に行動に出た。彼の親友である有瀬君を使って、慎は石崎君が退学を決意するほど彼を傷つけることに成功した。だが、邪魔が入った。石崎君が退学届を出したことを知った教師たちが、余りにも急な退学を疑って受理するのを拒んだんだ。君も一部始終を知っているだろう？」明音ははっと息を吸ったまま何も言えずにいた。薫が続ける。

「この命令に失敗すれば、慎はこの学園を出て行かなくてはならない。他の生徒会役員たちと同じようにね。だが、腐ってもあいつは俺の弟だ。俺は慎を学園から追い出さたくはない……明音、君がもし慎の代わりに石崎君を学園から追放すれば、『水晶』は恐らく慎を許すだろう。君も俺と同じ気持ちのはずだ。君は慎に行ってほしくはないだろう？明音、君ならば慎を救うことができるんだ。たった一人の慎の弟として、ね」

薫が明音の右手を取ると、明音は母の婚約指輪を再びきつく握って胸元にあてた。薫の視線が、明音の慄く瞳を捉えた。慎と似ていると薫は思った。慎が自分を見る時と同じ色の、同じ感情をともした瞳だった。明音が顔を俯けると、薫の口元で遂に蔑みが見現化した。薫にとって弟ほど操りやすいものはないというのに。

明音は指輪の丸い形を、今や心臓の上にはつきりと感じながら、手紙の文面を思い返していた。母の笑顔が、熱く湿った瞼の裏に浮かんだ。続いて、今まで遠くから眺めていた父親の姿が、それに続いて慎の顔が。母さん、ごめんなさい。なぜ謝るの、と聞かれた気がした。分からないんだ。俺のこれからすることが、本当に弟として正しいことなのか。いいのよ、と母は言った。貴方のする

ことは、全部母さんがやったことと同じだわ。だから、誇りを持って。

「私は誰かを犠牲にしてまで、幸せになろうと思わないのです。明音は小さく、しかしはつきりと呟いた。それが答えのつもりだった。母の手紙の中にあつたその一文が。明音は初めて、恐れもなく薫を真つ直ぐと見る事ができた。零れ損なつた涙が、残光を反射してきらきらと揺れていた。

「それが俺の答えです。もう、俺は行きます……さよなら」

法正様

お願いです。離婚するなんて仰らないで。そんなことをすれば奥さまも、息子さんたちも悲しみます。私は誰かを犠牲にしてまで幸せになろうとは思わないのです。いいえ、違います。私が今幸せでないという意味ではありません。法正様、私は今十分に幸せですわ。例え、貴方の奥さんになれなくとも、私は貴方の子供を宿したんですもの。私と貴方はこの子の父と母という関係できつくきつく結ばれたのです。誰にも断ち切れない絆です。だから、お願い。私をこのまま去らせてください。私はずっとずっと、どんな時も、貴方のことを思い続けます。どんなに離れていても、私は貴方の傍にいますから。だから、私を惜しまないで。さようならは言いません。指輪は受け取れませんからお返しします。

涌水静香

走る明音の頭に、覚えた訳でもない母の言葉が過ぎっていた。風が明音の鼻をつんと突き、涙で学園の景色を霞ませた。でも、行かなければいけない。慎様のところへ。

K y r i e e l e i s o n

主よ、憐れみたまえ。

慎は冷え切った部屋の真ん中で、こちらに背を向けて腰かけていた。彼は何を見つめているのか。窓から忍びこんでこの部屋をも支配する夕闇か。それとも虚空か。遠くでカラスが二度鳴くのが、彼は聞こえているのだろうか。

腕を肩の上から絡ませても、慎はその姿勢のままだった。薄くひんやりとした金属の感触を、首筋に押しつけても尚。その手に力を込めてそのまま手前に引けば全てが終わる。そんなことは慎も知っているはずなのに、慎は抗いもせず、ただ口を動かしたただけだった。「俺がそんなに憎いか？」

「……ええ、とても」

この寮には最早他に誰もいないにも関わらず、復讐者は声を潜めて返事をした。周囲を憚ったというより、感情に声を濁されてしまったのかもしれない。慎が音だけで笑う。

「殺したきゃ殺せ。だが、俺を殺したところで、事実は何も変わらねえぞ」

「分かっています。貴方には何も責任はない。僕が殺さなければならぬ人は貴方ではないことを、僕は知っています」

「なら、なぜ殺す？」

尋ねると、慎の皮膚の上で刃物が震えた。慎は虚無を見つめる目を細めた。

「間違つてると分かっているなら、なぜ俺を殺す？おい、答えろ、有瀬」

灰色の小さな玉は歪んで色をなくした。それが顎を落ちて慎の制服の襟を濡らした時、ノアの喉元から嗚咽が漏れた。ノアは甘えるように、しかしまだ剃刀は慎の頸動脈の上に置いたままで、慎の背中に顔を寄せた。涙が慎のブレザーに滲んだ。

「……許せないんです。復讐しなきゃ、とても耐えられないんです……あの少年を傷つけたことが辛いんじゃない。僕があの人を裏切

らなければならなかったことが……僕の未来がこんな裏切りの連続であることが……それが僕にとつてどれだけ辛いことなのか……僕は、僕をこうまで追い込んだ全てが憎い。例えば命令に従ったただけだとしても、僕に裏切りを命じた貴方が心の底から憎いんです……だから、貴方を殺します。僕もここで死にます。僕はこんなものを望んでいたんじゃない……っ！」

力を入れようとした右手が、慎の手にはたかれて剃刀を取り落とし、た。ノアははっと手を伸ばした。しかし、動くのは慎の方が早かった。慎はノアの手首をとると、右足で素早く刃物を蹴った。剃刀はノアの手の届かない場所へと滑っていった。呆然とするノアは、もうその後を追いかけようともせず、その場に膝を崩した。

「俺を殺したければ俺だけを憎め」

慎はノアの手首を離すと同時に吐き捨てた。ノアは両手で顔を覆った。全く、見るに堪えない嫌な光景だ。慎は部屋の電気をつけて、剃刀を拾い上げるとさっさとその場を離れた。ノアはどうにかなるだろう。知ったことか。もう自分はこの学園とは無関係なのだ。そうだ。「水晶」とも、生徒会の使命とも、今まで自分を縛りつけていた何もかもと。自分は作戦に失敗した。兄が余計なことを考え出す前にさっさとここを離れるに限る。慎はポケットにズボンのポケットを上からさすって、車の鍵が入っていることを確認した。やり残したことはない。どうせなら、今出発しよう。そして、このまま自分の好きな場所へと行かせてもらおう。

愛車に乗り込み、エンジンをかけたその時、ヘッドライトが庭の灌木の前に人影を浮かび上がらせた。兄かと一瞬思った。だが、それは、裏庭から忍びこんできたばかりで、葉っぱやら花卉やらをいっばいに制服につけた明音の姿だった。明音は慎に気がつくど、どたばたと駆け寄ってきて窓を叩いた。いかにも深刻そうな顔しておかしくて仕方がないのを、慎は辛うじて堪えた。窓を開けてやると、明音は首を車内に突っ込んできた。

「慎様！ごめんなさい！せっかく、慎様が学園に残るチャンスだっ

たのに……俺、どうしても耐えられなくて。クリス先輩を傷つけるのが、どうしても嫌で、それで……！」

慎は親指で助手席を指差した。明音がきよんとんとして、間抜けな顔をする。この表情こそ、この少年には、この異母弟には相応しいと慎は思った。

「えっ？あの……慎様？」

「俺はこの学園を出る。お前も付いてきたければ付いてこい。決めるのに十秒だけ待ってやる。十、九……！」

「えっ、そんなっ、ちよつと、ひどっ………慎様！」

明音は母の指輪を見た。これは母が犠牲にしたものなんかではない。唐突にそう思った。その証拠に、指輪は息子である明音に手に渡った。本当に大切なものは消えないし、自分の元を離れることはない。それを悟った母にとっては、この世の全てが喜びだった。そして、恐らく自分にとっても。結論に達するまでの時間わずか三秒で、明音は助手席に飛び込んだ。明音がシートベルトを締めると、慎は車を発進させた。そのスピードと運転の荒さには、慎を敬い奉る明音さえ冷や汗をかいた。

「ちよつ、酔っ！酔っから！慎様、ちよつと、スピード落とし………うわっ！」

「ごちゃごちゃ言っな。邪魔される訳にはいかねえからな。門出るまで我慢しろ」

果たして本当にこれでよかったのか。明音は一瞬疑わしい気持ちになった。だが、人はその場に留まっていることはできない。信じてもいいはずだ。この手で選んだ未来を。

車の音がする。遠くから段々と近づいてくる。一体どこへ行こうというのだろう。なぜこの完璧な世界を捨てて行くのだろう。夢うつつに思いながら、クリスはゆっくりと目を開けた。クリスはソファの上にいた。部屋は暗く、枕元の紅茶は既に冷めていた。一体俺はどうしたんだっけ？ そうだ。気を失って倒れたんだ。それで、

目覚めた時は里見先生が傍にいた。先生は今日一日休むようにと言
つて、温かい紅茶をくれて、また俺は寝入ったんだっけ。ああ、ま
だ眠い。でも車の音がうるさい。一体、どこに、何のために……？
クリスははつと飛び起きた。寝巻に裸足のまま外に飛び出ると、
ちょうど一台の車が猛スピードで寮の前を横切っていくところだっ
た。運転席に座る人の横顔は分かった。憤だ。しかし、その奥にい
た人は？助手席にいたのは一体誰なんだ？まさか……近くにはふら
つく体を預けるものもなかった。まさか、生徒会長は本当に連れて
行ってしまったのだろうか？有瀬を。俺の手の届かない場所に？

その時、近くで茂みがざわめいた。クリスは驚いて、それから押
し寄せてくる安堵に思わず微笑んだ。「有瀬」と、クリスはその名
を呼んだ。クリスはノアの元に駆け寄りたかった。抱きしめたかっ
た。クリスの頭のから、一昨日の朝の記憶は全て吹き飛んでいた。
クリスには、なぜノアが憐れむような、困惑するような目でこちら
を見るのが解せなかった。

「有瀬……！」

もう一度その名を呼ぶ。一步を踏み出した時、ノアの影は消えた。
忽然と。まるでそこには元から誰もいなかったかのように。遠のく
足音だけが、クリス以外の者がこの世に存在していることを示す、
たった一つの証だった。

「ある……せ……？」

第三十七話 光と影・前編

「そう、じゃあもう何ともないのね」

「はい」

里見先生がクリスの喉を見た後で微笑む。慎と明音が学園を去った日の翌日のことだった。そのあまりの計画性のなさに呆れたのと、周りの熱心な説得を受けて、クリスは今朝一番で退学届を撤回し、そのまま指示された通り保健室へと足を運んだ。里見先生が安堵するほど、クリスは上手く元気な自分を装っていた。窓辺にノアの影がちらつくまでは。クリスははつと立ち上がった。だが、ノアがいたと思つた場所には、落ち損ねた枯れ葉が風に吹かれてちらちらと日を遮つたり通したりしているだけだった。

「石崎君、どうかした？」

「……いいえ。何でもありません」

クリスはそれ以上何も聞かれなくなくて、視線をゆつくりと机の上に置かれた婦人物の帽子の上に向けた。里見先生は口を開きかけたが、結局は目をそらして何も言わなかった。

二人の沈黙を破つて、保健室の扉が開いた。いつもよりスーツをびしつと決めた校長だった。校長は二人にさわやかに挨拶すると、クリスの元に歩み寄り、調子を尋ねた。

「ええ、大丈夫です。ご心配かけてすみません」

「いいえ、心配するのが僕らの役目ですからね。君が元気なら僕はいいのです。野瀬先生には会いましたか？」

「はい。先ほど、職員室で……」

「ならよかった。しかし、君は多くの人に愛されてますねえ。君が退学すると聞いた途端、大勢の先生や生徒が君のところを駆けつけています。君の人徳でしょうかね」

クリスは曖昧に笑ったときり何も言わなかった。自分に人徳があるなんてこれまで一度も思つたことはないし、今も思わない。自分を褒

めなければならぬのだとしたら、愚直という言葉を使いたい。お節介でお人好しで、色々なことに首をつっこんではひっかきまわっていた自分。過去の自分だけは、どうしたところで殴れないのが残念だ。ノアの予言通りだった。クリスが学園を去らなかつた代わりに、慎が学園を去つた。そして、全てが終わつた後で、ノアはやはり自分の元には戻つてこない。学園に残つたはいい。だが、これからの日々を一体どうやって過ごせばいいのか。

「校長先生」

「何ですか？」

里見先生が小用で部屋を出た際に、クリスは言った。

「理事長に有瀬と会うように言つてもらえませんか？」

「……なぜです？」

「もう理事長しか思い浮かばないんです。有瀬を救えそうな人が」

「つまり、君は、有瀬君が救いを必要としていると考えているんですね？」

「はい」

革靴の音が、クリスの見ていないところで三回響いた。

「なるほど。ええ、もちろん伝えるには伝えますが、事態は変わらないと思いますよ……全ては、君と有瀬君との間で起こつたことなのですからね」

「でも、俺には、もう何も……」

クリスの視界を突然真っ白に染めたのは、クリスの言葉を遮るよう校長が差し出したエアメールだった。クリスが受け取らずにぼんやりしていると、校長は簡略に説明した。

「これを君に渡すために来たのです。イギリスの叔母様から」

「えっ？」

クリスが手紙を開いている間に、校長はすつといなくなつた。手紙には、エマ叔母の懐かしい筆記体で、最初にクリスの近況を知りたいたい心情と最近の叔父夫婦の様子が書かれ（叔父さんは先月ぎっくり腰になつたらしい）、次に親戚や友人たちのどうでもいい話が続い

て（一度しか会ったことのないクリスの従姉の家でシャム猫の子供が五匹生まれたとかなんとか）、最後にやっと本題に入った。両親の墓参りに行ってほしいというのだ。

……今まで申し訳ないと思いつつ、忙しさに紛れてまともに訪ねたことがありませんでした。叔父さんは何度か行ったみたいですが、遠い日本まで行くのも一苦労なのに、お墓も交通の不便なところにあるので、最近はなかなかお参りできていないそうです。まあ、そんな風に元から怠りがちだったものですから、貴方のことは連れて行ってあげたこともなかったのだけど、せつかく日本にいるのですから是非行ってあげてください。お葬式以来ですから、貴方のお母様とお父様もきつと喜ぶことでしょう。貴方の学校からはそんなに遠くはないはずですが、ただ、近くを通る電車が近年何本か廃線になって、叔父さんが最後に訪ねた時より更に行きにくいところになっているみたいですが、私は日本の電車はさっぱりなので詳しいことが書けないのが残念です。お墓参りに行ったら、ぜひお手紙をください。いいえ、行かなくてもお返事がほしいわ。貴方の様子が知りたいです。どうかお元気で。

愛をこめて 貴方の叔母より

クリスはふと壁のカレンダーを見た。明日は土曜日だ。今日中に生き方を調べて行ってみるとしよう。この学園を出ることが、ノアを忘れる一番の方法かもしれない……

うとうとしていると、ノアの夢を見る。別に何かする訳でもない。クリスの思い出やら、そうでないものの中にノアの幻影が現れては消える。それだけだった。だが、目が覚めた時、クリスが覚えた疲労感は、どっしりと肩や背中にもまで押し掛かって重くした。

学園からバスで町まで下ると、三宿港駅から電車に乗って篠木山展望台前で乗り換え、更に四つ目の駅で下りて今度はバスに乗り、今、ちょうど目的の駅に辿り着いた。ここまで所要時間は四十分。これからもう一つ電車に乗らないといけないことを考えると、相当長く厳しい旅である。泊裏駅の辺りは閑散としていて、これから行く先はますます人気がなくなりそうなので、クリスは駅前で卵とハムのサンドイッチを買って、電車が来るまでの間、ホームのベンチで食べた。目の前には海が望めた。ホームは海の上に乗出すように建っていた。そして線路を目で辿ってみても、海はその傍に並んでいる。この数カ月で見あきたほどの海が、クリスの過去まで付いてきていた。いいさ、別に構わないけどね。クリスはくずかごにゴミを投げいれながら胸の中で呟いた。

見つめる奥から、電車はやってきた。海に溶け込みそうな青色が基調となった、角の丸い車体である。相当古いことは間違いないが、近くで見ても傷や汚れは案外目立たず、速度を落としながら軋むその音だけが潮騒に紛れきれずにいるのだけが、この電車の歴史を感じさせた。時間から忘れ去られたもの、という印象をクリスは受けた。三つある車両が異なるリズム何度か左右に傾いた後、ゆっくりとドアが開くと、電気のない薄暗い車内に正午の日差しが差し込んで、板張りの床と褪せた緑色の座席を明らかにした。下りる人はいない。クリスと共に電車を待っていたのもたったの六人で、そのうち二人は、それぞれ先頭と最後尾の車両に乗り、クリスと四人の乗客は真ん中へ乗り込んだ。電車はすぐに動き出した。クリスは何となく慣れ切った、けれども不安な気持ちで乗客を見回した。誰も喋らない。若い母親に抱きかかえられた赤ん坊ですらも。人々は皆沈鬱な面持ちで床や海や自分の手を見つめている。クリスは真正面に腰かけた紳士を無遠慮なほどにじっと眺めたが（あまりにも彼の格好が古臭かったので）、彼は気がつく様子もなく、煙草の煙を吐いて溜息を吐くだけだった。

クリスは持ってきた花を自分の膝の上に置くと、ポケットから小

さなメモを取り出して、降りる駅を再度確認した。昨夜、落合が届けてくれたものだ。落合は父親が鉄道マニアらしいのだが、その父親にみっちりと教育されたため、クリスの両親の墓のような僻地の交通も心得ていた。百合煎ゆりせんじ駅は六つ目だ。落合の話だと、駅と駅との間が恐ろしく長いので、たかが六駅といえども相当な時間がかかるのだという。着くまで画集でも捲ってしようか。それともこの幻想的な電車の旅を堪能しようか。電車は今、海を右手に走っている。クリスの背後には鬱蒼とした針葉樹の森が広がり、目の前の海原では波に浮かぶ泡の一つにまで注ぎこまれていく日光を頑なに拒んでいた。そんな退屈な風景は延々と続くようであった。

長い時間をかけて電車は一つ目の駅に着いた。森の手前にぼんと置かれたような場所で、石のホームは苔に浸食されていた。もし自分が電車でここにやって来たのではなければ、クリスは廃駅だと思っただろう。和服の老婆が一人おりていった後でドアはしまった。止まる時、動き出す時、電車はやはり傾いて軋んだ。

景色は変わり、森は消えて崖に、崖が消えて人気のない小さな町に、町が消えて、ついに両側に海が広がった。その頃になると、クリスと共に乗っていたのは赤ん坊を連れた若い母親だけで、その母親も、次の五つ目の駅で降りて行った。赤ん坊はしまいまで泣きも笑いもしなかった。眠っていたのだろうか。母親は藍色の着物姿で、日にさらしたうなじを白く光らせながら、電車を降りるまでずっと赤ん坊に悲しげな瞳を注いでいた。

ついにクリスは一人になった。右を見ても左を見てもひたすら青い電車の中で、クリスは百合煎の駅は一体どんなだろうと考えた。しかし一体、クリスの両親の墓はなぜこんな不便なところにあるのだろうか。クリスの父方の親戚が二人を嫌っていたとは聞いていたけど、そのせいだろうか？やがて、海の彼方に見えてきたのは、白い、ひたすら白い大きなものだった。その正体は陸地が近づいてくるにつれて分かった。百合の花だ。百合の花が所狭しと咲き乱れている。クリスはホームで電車を見送ってから、すさまじい数の百合を仰ぎ

見た。この丘をのぼったところに、両親の墓はある。

物狂おしい気分になるほどの百合に囲まれて、百合煎墓苑はあった。一番奥が両親の墓だと、叔母が教えてくれた。クリスの他にはいなかった。ただ、そこだけ茶色い土の上に、百合にも劣らぬほど白い墓石が規則正しく並んでいる。クリスは墓石に刻まれた名前を眺めながら進み、叔母の言った通りの場所に両親の墓を見つけた。その時、持ってきたブーケが手から零れ落ちた。

クリスは途方にくれてしまった。ここに名前を刻まれた人たちは、確かにクリスの親なのだ。この土の下に眠っている人たちは、かつてクリスを生み、愛し、抱きしめた人々なのだ。そして、クリスが六歳の時に死んだ。泣きだしたいような気がした一方で瞼は濡れてこなかった。クリスはブーケを拾い上げて墓石の前に置き、震える手で墓石にそつと触れてみた。

「父さん、母さん……」

この十年間、一度もそう呼びかけることができなかった。今、ようやく……クリスはその場に膝を突いた。どうして？なぜ自分は両親のことを思い出せないのだろうか。いや、思い出すことはできる。でも、その記憶がいやに遠くて。そこに音はない、匂いもない、温度も感情も。まるで紙芝居の絵だけを見せつけられているかのような。波が百合の花に碎ける音がする。クリスは墓石を抱きしめたかった。でも、どうせ得られるものは冷たさだけだと知っていたのでやめた。クリスは型通りの文句を静かに胸の中で呟くと、くるりと踵をかえした。もうこの場所に用はなかった。

電車が来るまでの時間は、あまりにも長かった。クリスは鞆を開くと、百合の上に腰かけて、白い墓と白い花と青い海とを何か厳粛な気持ちで写生しはじめた。そうしながら、十年前の記憶を手繰ってみた。あの時、ここには百合は一輪も生えていなかった。なのに、どうして今は百合煎と呼ばれるまでにこんなに花が生えているのだろうか。クリスはふと、一番手前にある墓石に気づいてしばらくその表面に目を凝らしていたが、やがてまた鉛筆を動かし始めた。大体

映し終わつたところに電車が来た。

先ほどの五番目の駅に、若い母親と赤ん坊はまだ立っていた。母親は海原駅と書かれた看板に寄りかかつて、子供に乳を含ませているところだった。ドアが開いても、母親は見向きもせず、相変わらず白い胸を晒していた。見てはいけないような気がしてクリスは目を逸らしたが、電車が出発する時、母親がクリスを見つめているのを感じた。行きは子供に注がれていたあの悲しげな目が、今度はクリスを向いていた。一体、彼女は何を思ったのだろう。しかし、海原駅とはまさにあの駅にふさわしい。ホームは海原にぼんやりと浮かんでいるだけで、どこにも通じる場所はない。クリスははつとして、画集を捲る手を止めた。急いで窓を振り見た時、子連れの母はホームごと海原に紛れる小さな黒い点になっていた。

「お帰り！御苦労だったな」

クリスの旅の苦労を一番に分かっている落合は、寮の前でクリスを待っていてくれた。

「あつ、落合、待っていてくれたの？」

「おう。どうせお前一人なんだろう？どうせ今日は疲れてるんだろうし、もしよかつたら俺たちの部屋で一緒に夕食でも食わねえか？ついでに今日は泊っちゃまえ。酒本のベッドが空いてるしな」

「えつ、いいの？じゃあ、そうさせてもらおうかな」

答えた後でクリスはちらりと部屋の窓を見たが、ノアが帰ってきた様子はない。どうせ夕食を作る元気はないのだしこの際世話になる方が楽だと、クリスは思った。クリスは落合の質問にも快活に答えて、バスの乗り場を二階ほど間違えたことなども面白おかしく語ったが、彼がセンチメンタルにならないでいられたのは、学園の門で待っていてくれた人のおかげかもしれない。薫が門の前でクリスの帰りを待っていた。

「おかえり、クリスマス」

「薫さん……」

嬉しい驚きと辛いような苦しいような思いで、クリスマスはすっかり動けずにいた。それを見かねてか、薫の方からクリスマスの方に歩み寄ってきた。

「どうして、ここに……？」

「君の顔が見たくなった。君を誘ってどこか行こうと思ったけど、友達に聞いたら君はご両親のお墓参りに行ったって言うていたから仕方なく諦めたんだ。でも、何だか不安になった。君がここに帰ってこないような、そんな気がしたんだ」

「そんな……俺は戻ってくるのに、絶対……薫さんのいるところには」

「でも君はこの間勝手に退学しようとしたじゃないか」

「それは……」

薫の胸元に顔をうずめながら、クリスマスは言い訳を考えていた。そうだ。こんなに愛おしい人がいるのにどうして学園を出ようと思ったのだろう。薫さんだけいければ十分じゃないか。例え　クリスマスは薫のコートの背中をぎゅっと掴んだ。例え、有瀬が傍にいなかったって。薫の手がクリスマスの顎を持ち上げた。クリスマスを責める人とは思えないほど、薫の顔は優しくかった。そしてその後ろには、穏やかな冬の日の空が赤く燃えていた。

「さあ、謝罪の言葉を聞こうか？」

「……ごめんなさい」

「いいんだよ。でも、僕に何も言わずに僕の元を離れたりしちゃいけないよ。分かったかい？」

「うん、分かった……」

クリスマスは償いの気持ちを込めて背伸びをすると、薫も身を屈めて受け入れてくれた。幸福な時間だった。学校の前で生徒と教職員が（いくら講師とはいえ）平然とキスをしているのだから、誰かに見られるようなことがあれば一大事なのだが、そんな野暮な心配も不要

だった。クリスには世界には二人しかいないように思われた。門の奥から投げかけられた灰色の視線の存在も、クリスは知らずにいたのであった。

しかし、これから自分はこの学園で一体何をすればいいんだろう。友人たちとの談笑の間、クリスは考えていた。絵は見つけてしまった。一番の友人もなくして、継げるものが恋人しかいない。いや、学校に通うことなんか理由なんていらぬはずだ。ただ勉強してこんな風に関本や落合たちとくだらないことを話しながら日々を送る。それで十分じゃないか。それに、自分にはまだやるべきことがある。あの絵をもう一度調べなければならぬし、そのためにはまだこの学園に居続ける必要があるはずだ。けれども、本当に？

その問いが一体何に対して投げかけられたのか自分でも分からず、クリスは一瞬箸を止めた。本当に、お前はそれでいいと思っているのか？生徒会役員を追い出しておきながら、お前は平然と暮らしているのか？クリスには分からなかった。更に、「本当に？」はもう一つの事をクリスに尋ねた。本当に、あの絵は志水晶のものだろうか……

「ねえ、落合つてさ、美術部だったよね？」

「おう、部長だぜ部長」

誇らしげに言う落合に、来夏はティーカップに指をかけながら呆れたような視線を向けた。美術部が実質、落合の趣味の美少年コレクションと化していたからかもしれない。「じゃあさ、あの絵知ってる？美術室に飾ってある妖精の絵なんだけど」

「ん？いや、知らねえけど」

「えっ……」

落合が見せた怪訝な表情が、クリスを戸惑わせた。美術室にしようちゅう出入りしている落合が、知らないはずがないのに。もしかして、俺をからかっているんだろうか。

「ほ、本当に？見たことない？あの美術室の入り口近くに飾ってあ

る……」

「いや、マジで見たことねえぜ」

疑いもたちまち晴れた。そう返す落合は真剣そのものだった。

「そっか」

クリスは理不尽な諦めを押し付けられ、しばし呆然とした。一体どうして？ ノアも薫も慎も皆あの絵のことは知っているのに。それだけじゃない。いつか、そうだ、文化祭の日だったけ？ 花木先生がこの絵を眺めているのを見た。あれは確かな記憶だ。どうして落合は一番あの絵を見ているはずの落合が、あの絵を知らないなんてことがあるんだろっ。

真面目な話になったついでなのか、来夏が咳を一つしてクリスの注意を引いた。

「石崎、そういや有瀬はどこに寝泊まりしてるんだ？」

「さあ。俺も知らないんだ。最近、姿も見ないし……」

「そういや、あいつ昨日学校来てなかったよな。てつきり前みたい」
に理事長が…… あっ、今理事長じゃねえんだっけ。まあいいや。理事長が生徒会長のところに預けたんだと思ってたけど、違うみたいだし」

「……理事長は関係ないよ。それに生徒会長も」

クリスが静かに言って紅茶をすすった。そして自分にも関係ないともっといいのだけれど。落合が砂糖を入れすぎたせいか、紅茶はやたらと甘かった。一緒に出されたアイスクリームはさすがに食べる気になれず、クリスは暖房で溶かされていくバナナアイスの観察をせいぜい頑張ることにした。

「有瀬が自分で決めたことなんだ。だから、俺も何も言えないよ」

「……まっ、そのうちな」

落合が慰めるようにクリスの肩を叩いた。クリスが「そのうち」に少しも期待していないことも知らず。

消灯時間が過ぎ、今は持ち主を失った菜月のベッドに横たわると、

クリスにはこの学園に来た日のことがまざまざと思い出された。あの日の自分はひどく陰鬱だった。次から次へ起こる出来事に戸惑い、時には苛つきに近いものすら感じながら、次第に絆されてしまっていた。職員室に忘れた財布をノアが突然目の前に示したので、どんなに驚いたことか。ここでの歓迎会は楽しかった。あの時麻痺していた感覚が、今になって蘇って来るようで、クリスは毛布の中で微笑んだ。あの夜もここで寝た。菜月がクリスの布団を陣取ってしまったせいだった。いや、違うな。あれは寝たとは言わないんだろう。横たわって全員が寝静まるのをどきどきしながら待っていて、数時間後に再びここに横たわった時は絶望のあまりすっかり打ちひしがれていた。クリスがこの学園で体験してきたことは全てあの夜の失態が原因だった。長い旅のせいで疲れていたのだろうか。なぜあんなことをしてしまったのか、今となっては分からない。まあ、そのおかげでノアと暮らすことになったのだが、現状を考えてみれば、おかげとは言い難い。そのせいといってもクリスの気持ちには少しも反しなかった。ああ、またノアの幻影が入り込んでくる。薫に抱きしめられた時に、締め出したと思ったのに。

有瀬、君はどこにいるんだ？どこでどんな風にこの夜を過ごしているの？君が言ったことは本当なの？あの絵は本当に志水晶のものなの？………ねえ、お願い。明日起きたら教えてよ。いつもみたいに揺り起こして、おいしい朝食を作ってさ。もちろん、あの海辺の寮で。目をつぶれば、ここもあの寮のベッドも変わらないよ。ねえ、有瀬、俺は今、もう一度あの夜をやりなおせるとしても、やっぱり白い塔に行くと思う。君にどんなに傷つけられても、君と過ごした日々がやはり懐かしいんだ。

クリスは他人の枕を勝手に濡らしていることに気づき、慌てて袖で目をこすった。そして目を開けて、自分のいる場所がいつもとは違う場所なのだと悟った。あの夜と同じ場所だと。今日もあの日と同じで、長い旅のせいでひどく疲れている。俺は塔に行くだろうか？いや、今日は行かないな。クリスはすぐに結論を出した。こすっ

て熱い臉がすでに重くなりかけていた。とにかく、今日は眠りたい。夢を見る余裕もないほど、深く。

クリスの希望は半分かなって半分外れた。有瀬ノアの夢は見ないで済んだ。昼間に全て上映してしまつたに違いない。その代わり、海原駅で見た親子の夢を見た。母親は着物の柄まで変わらないが子供の方は少し成長して、二歳ぐらいの男の子になつていた。二人は百合煎の百合に塗れて遊んでいた。二人に色はなかつたが、二人の楽しげな声ははっきりと聞こえてきた。子供がこけた拍子に母親の胸元に倒れこむと、母親は心の底から愛おしそうに息子を抱きしめ、その名を呼んだ。しかし、二人の笑い声に紛れて、息子の名前をクリスは聞きとることができなかつた。母親がそのままにしていると、子供はやがてすやすやと眠り始めた。

一陣の風が花たちをざつとざわめかせて、電車の到着を知らせた。母親は子供を起こさぬようにそつと立ち上がつて電車から降りる人の姿を見た。それは、若い男だつた。母親は最初はつとして身を強張らせたが、男がクリスと同じ道を辿つてきて、彼女の前で微笑むと、わつと泣き崩れた。彼女は男を責める様子だつた。目覚めぬ息子を腕の中に抱いて、百合の花びらに涙を注いでいた。男は屈みこみ彼女の頭を撫でながら、彼の妻が気づかぬほどの優しい手つきを以つてそつと息子を奪い取り、抱き上げてまた来た道を引き返した。妻がようやく顔を上げた時、男は息子を連れて、帰りの電車に乗り込もうとしていた。

「どこへ行くのです……！」

ここで初めて台詞が聞きとれた。

「どこへ行くのです、貴方……その子をどこに連れていくつもりですか？返してください。貴方、お願い……！その子を、乃亜を返して……！」

丘を駆け下りる母親を置いて、非情にも男と列車は去つた。クリスが嫌な汗をかいて目を覚ましたのは、母親の叫び声のせいというよりは、その中だけ色の戻つた電車のせいであつた。男が抱いていた

子の髪は、葡萄酒で染めたような鮮やかな赤紫色だった。そして、非道なるその父親の顔をクリスは知っていた。あれは、志水晶だった。

第三十七話 光と影・後編

もつとゆつくりしていけばいいのにといい来夏と落合の勧めも断つて、クリスは二人と共に二月の朝を歩いた。日差しは薄雲を抜けて、学園の草木に優しく降り注いでいた。風はあの冷たさをどこへやら、かよわい小鳥たちを高く高く遊ばせている。全ての建物の白さが一層照り映えて見える朝であった。

「じゃあ、俺たちはこつちだから」

「うん、ありがとう二人とも」

「こつちも楽しかったぜ。また来いよ。酒本が帰ってくるまではいつでも平気だ」

「ははは、じゃあ」

部活へ赴く二人と反対の道に踏み出して、クリスは置き去りにされた海辺の寮のことを思った。ノアは戻っているだろうか。クリスはふと空を見上げる。もう二月も終わる。三月で日本の一年は終わって、四月になればクリスはこの学園の三年生となる。このまま無為に時間を過ごしていいものか。このまま流されていっていいのだろうか。心は落ち着かない。薫のことを思ってみたり、画家としての使命を思ってみたり。自ら決めた道を辿りきれない自分が憎らしく、また同時に不憫でもあった。

草むらに寝転んで考えてみるのもいいかもしれない。偶には、ゆつくりと。だが、クリスの足は急ぐばかりだった。クリスは頬と唇を引き締めて、目を少し細めた。自分は真つ直ぐ寮に帰るべきだと浮ついた心が告げていた。

ポストにはいくつかの郵便物が詰め込まれていた。昨日の分と今日の方で、随分窮屈そうだ。クリスはそれらを全部引き出して、鍵も持たずに寮の扉に手をかけた。やはり扉は開かなかった。クリスは胸の中で期待が凋んでいくのを感じ、指先から力が抜けていくのを覚えた。ノアはまだ帰ってきていない。もしかすると、この先ず

つと……？

「ただいま」の声はむなしく響いた。部屋中の空気は冷え切っていた。クリスは足先が冷えぬうちにスリッパを急いで引っかけ、さびしい居間を見渡すと、ガラスのテーブルに郵便物の束を預けた。その中の一つが足元に落ちて、屈んだクリスのはつとした。差出人の名に涌水明音と書いてある。明音は確か慎と共に学園を去ったはずだ。わざわざ手紙を寄越してくるなんて。クリスは急いで封を切って、中身を引っ張りだした。中身は美術館のパンフレットと小さなメモ用紙が一枚だった。どうして美術館のパンフレットなんかと疑問に思いつつも、まずはメモの方に目を通す。

お元気ですか？俺も慎様も元気です。同封のパンフレットは榊原先輩から頼まれて送りました。先輩の絵が飾ってある美術館だそうです。鍵の方は慎様からです。では、お元気で。

明音

文字のかわいらしさの割に随分素っ気ないメモだとクリスは何だか拍子抜けがする。パンフレットの表紙には、確かにクリスの絵と共に白鈴美術館との文字がある。その絵は、クリスがフランスに旅行に行った時の作品で、三歳になる従妹のキャシーが大人を真似てわざと優雅なポーズをとっている愛くるしい姿を描いたものであった。クリスは怪訝な顔でパンフレットを開いてみて、そして「あっ」と小さく声を漏らした。

荔枝と陽は、クリスに生徒会の窓の景色を示してこの学園を去った。この景色に見覚えはあるか？それが、陽の問いかけであった。見たことがない。見たことがあるはずがないとクリスは答えた。それは事実だったし、恐らく今も事実であるのだろう。なのに、どうして どうしてあの景色と全く同じものを自分は描いているのだろう。

違う場所の似た景色ではない。絶対に。噴水の形も花の色の配置

も、太陽の光線の具合も、あの窓枠まで確かに一緒なのだ。こんなことであるだろうか。ああ、そういえば……この絵を描いた時の記憶まではつきり残っている。あれは画家としてデビューする前だった。イタリア人の師の元でこの絵を描きあげた。周りの人は随分褒めてくれたが、自分としては同じころに描いた別の絵の方に集中していて、大してこの絵のことは気にとめずにいたのだ。そうか、この絵を見たからなのか。陽があんなに不思議なことを尋ねたのはいや、だが待てよ。自分がこの景色を見たことないと主張したとき、陽は「だろうな」と呟いた。陽はクリスがこの景色を見たことがないのを承知だった。なのに、なぜかこの景色に見覚えはあるかと聞いた。一体どうしてなのか。

クリスはガラスに右頬を乗せて目をつぶった。ガラスが考え過ぎて熱くなつた頬を冷ましていくのが嬉しい。なぜクリスはある景色を知っていたのか。一つはどこかで見たということだった。絵なり、写真なり、そういう例はいくらでも挙がってくる。でも、次第にクリスはある窓辺から身を乗り出した時の空気さえ覚えている気がしてきた。まだ幼い自分の肩をしっかりと押さえていた男の手も。

クリスの胸に突如、一抹の感情が入り込んできた。それは痛く、苦しく、悲しかった。すぐに元の心持に戻っても、クリスはもう平常ではいられない気がした。クリスは立ちあがって湯を沸かした。頬が熱い代わりに腕の辺りが肌寒かった。クリスは頭を抱えて壁に寄りかかり、しばらく身動きもせずに一心に考え込んでいた。そして、とうとう確認せずにはいられないという結論に達した。クリスはやかんの火を止めると、一度脱ぎ捨てたコートを拾って、袖を通して、パンフレットと封筒を引っ掴んで寮を出ていった。

「颯、颯つたらー」

まだ時期の早い菜の花畑をぼんやり見下ろす颯の袖を、菜月がとらえる。大方構ってもらいたいのだろう。剣道の練習でもしていれ

ばいいものを、ここ三日間近くどうもそわそわして身が入らない様子だ。一応彼のために叱ってはみるのだが、実際落ち着かない気持ちを感じさせているのは自分であるから、あまり怒る訳にもいかず、今日はもうひたすら自分一人の感情に浸っている。

「ねえ！颯！ねえねえ、おばさんが……」

菜月の頭をぐっと引き寄せると、菜月はびっくりしたように目をしばたかせてぴたっと黙った。その髪を撫でて、颯は石段に腰を下ろす。菜月も隣に膝をついてきちんと正座して座り、颯の顔をじつとのぞきこむ。僕らの判断ははたして正しかったのだろうか。そんな思いが菜月の手をとらせる。抜け殻を捨ててきた。ただ脱却したいという思いから。でも、僕らは二度と戻れないのだ。踏み出した一歩を取り消すことはもうできない。その足跡は永遠に残る。後戻りをして、立っている場所はもうすでに過去の道となる。そしてその道で、二人は拾い上げられないいくつもの残骸を見るのだ。

「颯……怖いのか？」

「怖い？」

菜月の問いかけにふと顔をあげる。

「そんな風に見える。何が怖いのかは分からないけど」

颯は苦笑した。そうさ。自分は怖いのだ。変化を恐れていた。振り返る日々のどんな時でも　だから学園を飛び出すしかなかった。もうこれ以上同じ場所に踏みとどまっていられないように。そうすれば何もかもすつきりすると思ったのにな。現実って、なかなかうまくいかないものだ。

もうすぐ、今夜だ　颯は輝きを失った薬指をじつと見つめた。

今夜、全てが変わるのだ。そして自分は、どちらの変化に賭ければいい？菜月が胸に頭を寄せてきた。颯の手がその肩を抱く。

「菜の花畑、早く咲くといいのにな」

菜月が呟く。頷きたい気持ちをこらえるのは、容易いことではなかった。

「……颯？」

「……菜月、ごめんね、今夜はちょっと出かけるよ」
「出かけるってどこに？」

今度は二人同時に立ちあがる。見えない菜の花を虚空の中に求めて
「僕たちが学園に戻るためにやらなきゃいけないことがあるんだ」

一般生徒は土日の校舎には立ち入りできない。まして、クリスは
帰宅部であるから、部活動という言い訳も通用しないのであるが、
来夏と落合に用があるといえれば何とか入れるだろう。そこからの行
動は……まあ、最悪退学処分だけさ。計画通りに守衛を説得す
ることに成功すると、クリスはまず弓道場に向かうふりをして途中
で階段をあがり、音楽室から漏れてくる吹奏楽部の演奏を聞きなが
ら三階までやってきた。廊下にも教室にも誰もいなかった。クリス
は二回廊下を往復してそれを確かめると、ついに禁断の領域に踏み
入れた。即ち、四階へのぼる階段の一段目に。

ここまで来てしまった以上こそそするよりはさっさと駆け上っ
てしまう方がいい。クリスは心のアドバイス通りに足音が響くのも
気にせずに走りだし、目的の場所の前に一瞬で辿り着いた。クリス
は躊躇った。うかつに手を触れると警備が働くのではなかったか、
この学校の設備は。大丈夫だ。こっちはこれがあるんだから。ク
リスは封筒を左手の上で逆さまにして二度振った。転がり落ちてき
た鍵は、クリスの予想通りに生徒会室の鍵穴にぴたりと重なった。
扉が開いた。

美しく、そして戸惑うほどに懐かしい窓辺。クリスの予想してい
た通りの景色がそこにあった。クリスは息をついて窓を開ける。風
がクリスの耳の横を抜けていく。パンフレットをわざわざ出すまで
もなかった。クリスは景色をしつかりと瞼の裏に滲ませた。

「見てごらん……これがお父さんの学校だよ」

「ほら、ここの景色はすごく綺麗だろう？お父さんはいつもここか

ら景色を見るのが好きだったんだ」

「……大きくなったら、この学校に入るんだよ。そして、お父さんと同じようにここで同じ景色を……」

胸にまた鋭い痛みが走り、クリスは思わず窓枠を掴んだ。クリスは今、確実に一人ではない。遠くにいる誰かと繋がっていた。その記憶も想いも。

「ノア……」

少し気持ちが落ち着いたらところで向かった先は、美術室だった。ふと廊下の窓から校庭を覗いてみると、サッカー部が他校と練習試合をしているところであった。今、シュートを決めた少年は大河内だ。クリス自身はあまり話したことがないのでよくは知らないが、落合と最近仲がいいと聞いている。思った傍から本人が登場した。美術室前の廊下で、落合は数人の後輩たちと共に騒がしくサッカー観戦をしていた。

「おっ、いけ！そこだ！よし……あーあ。あつ、ふざけるな！汚えぞ！」

夢中になっている落合に声をかけたものかと思案して、クリスはこつそりとその背後をくぐり、半開きになった美術室の入り口からそつと不法侵入した。美術部も今は昼休みなのだろう。隅でお弁当を食べていた一年生たちはクリスの方をちらつと見たが、すぐにまた談笑に戻っていった。花木先生はいなかった。美しい絵画はやはりそこにあった。

なんだ、やっぱりあるじゃないか。何で落合は見たことないなんて言ったんだ。クリスは廊下から聞こえてくる暢気な声に、やや憤懣を覚えた。クリスは絵の前の机に体を預けて、志水晶の傑作を見つめた。とても絵の美しさに見とれるような雰囲気ではないことは百も承知だったが、湧きあがってくる感動がないのには自分でも驚いた。クリスはいつともよりもずつと理性的な目でこの絵を眺めてい

た。この絵が本当に志水晶の幻の絵だろうか？絵というものを変えたというあの……確かにこの作品は見ている者を幽玄の世界へと引き込ませる。恍惚とさせる。だが、幽玄は革命に到っていない。この絵はクリスの捜していた絵ではないのか。

「それでも僕は……」

そんな声が聞こえた瞬間だった。クリスはもう一つの絵を見た。

それは、同時に切りこまれた痛みよりも鮮烈にクリスの胸に焼き付いた。落合が目の中の絵を知らないと言った理由をクリスは今ようやく知った。

「おい、エーリアル！」

ちょうどサッカーが終わったらしい。興奮して飛び上がる後輩を背景に落合がやってきてクリスの肩を叩く。

「どうしたんだよ。寮に帰ったとばかり思ってたぜ！」

「うん。ちよつとね……」

「それより、おい、見たか？三宿が勝ったぜ！四対一で。大河内のハットトリックが決まった品。さすがキャプテン！」

「へえ、そうなんだ。すごいね……」

大河内にもサッカーにも興味のないクリスはそんな返答しかできない。しかし、落合は一向に構わぬ様子である。そもそもクリスがここにいる理由すら気にならぬという有様なのだ。構わぬついでに落合はクリスを昼食に誘った。春の展示会に出す作品がもう大分仕上がっているとかで随分余裕があるらしい。町まで降りようという誘いを、よっぽど気力を使えば断れたのだけれども、何事も流されるばかりの心地になっている折であるから、結局ならだらと付き合うことになってしまった。振り返った目に、もう一度だけあの絵が見えた。

新しい住まいには物が少ない。当然のようにそれまでよりは幾分不便な生活を強いられることになり、それは二人もある程度は承知していたのだが、流れる音楽のないのには一向に慣れなかった。学園では、二人の趣味のCDの他、荔枝のバイオリンやら陽のドラムやギターが鳴っていたし、何より潮騒の音があった。このコテージにも潮騒はあるが、三宿湾の穏やかな様子とくらべると少し品が落ちる。周囲は全くの別荘地で、この季節にもちろん人はいないから、不気味なくらい静まりかえっている。高い波の音とそして静けさと余りにも極端な旋律とそして不便の中で、二人は存外楽しく暮らしていた。最早二人の生活に割り込んでくる者もない。それが、この生活の一番の魅力であった。

しかし、どうしても人と会わねばならぬ時というのも世の中にはあるのである。

「まあた、お前が運転か。偶には代わってくれたっていいだろ？」

「君が無免許運転でつかまるのは見たくないからな」

「ったく、堅いこと言いやがって」

「愛すればこそ、だ」

そんな台詞がでてきたのは、古い洋画を連日見続けているからかもしれない。何せ、このコテージでの娯楽はせいぜいそれしかないのだから。陽が怪訝そうな顔でのぞきこむのに、荔枝はおかしさとちよつとの恥ずかしさとでつい笑ってしまった。

「大丈夫か、お前？」

「ああ、もちろん何ともないさ」

「少し来てんじゃねえの？」

「そうかもな」

「……やっぱ運転代われ」

「それはできない」

「オレもまだ死にたくないんだけど」

ふと思いついたと同時に決行した。少し酔ったようにもたれかかって、陽の首筋の辺りに顔を寄せる。

「……中毒症状、かもな」
言った唇をふさがれた。シートベルトはまだしていない。

「部長、色塗り終わりました」

「おつ、お疲れ。今日はもう上がっていいぜ」

「はい」

展示会に出すという共同作品の色塗りをなぜかクリスも手伝うことになってしまい、美術室には西日が差しこみ始めていた。クリスの作業は気にくわなかった緑色を再度調整しなおして終了した。落合が気前よく終わった順に部員を帰してしまったせいで、部屋にはもうクリスと落合しかいなかった。

「落合、こつちも終わったよ」

「悪いな、エーリアル。手伝ってもらっちゃって」

「無理やり手伝わせといてよく言うよ」

「時間大丈夫なのか？」

「うん、もう待ってる人もいないしね」

笑顔で放ったその言葉を落合がどんな風に受け取るか考え付くまで、少し時間がかかった。クリスは気まずい空気を振りきるように速すぎる動作でパレットと絵筆を拾って、水道に運んでいった。落合もその後ろで黙々と片づけを済ませていた。

「なあ、エーリアル」

「何？」

落合が隣に並んで話しかけた時、クリスが落合の顔をわざわざ見上げることはなかった。

「本当にそのままでもいいのか？有瀬のこと」

冬の水道水が両手の感覚を奪っていく。

「本当はそのうちどうにかなるなんて思ってたねえんだろ？どうにかしなくちゃいけないことぐらいわかってるくせに」

「……」

「前の時もそうだったじゃねえか。有瀬が生徒会長に預けられそうになったときも。結局お前が自分で解決したんだろ？今回だってそうだ」

「でも……」

「お前と有瀬の問題じゃねえか。お前が動かないで誰が動くんだ？……今のお前、少しもお前らしくねえよ」

全ては、君と有瀬君との間で起こったことなのですからね　校長の言葉をクリスは思い出す。でも、俺に何ができるっていうんだ？有瀬の居場所も知らないのに。大体有瀬から俺の元を離れていったっていうのに。

「あいつ、待ってると思うぜ。お前のこと」

有瀬が俺を待ってる？一体どこで？だって、二人の友情はもう……クリスの胸が疼いた。パレットの絵具は綺麗さっぱり洗い流されていた。

パレットと絵筆を西側の窓に並べて干していると、落合が急に千円札を差し出してきた。他の世界の方に気が飛んでいて、一瞬何が何だか理解できずにいたクリスに、落合は素っ気ない声で説明した。

「ほら、昼間の」

「あつ、うん……」

そういえば、財布を美術室に忘れてきた落合に千円貸したんだっけ。昼間のことなのにすっかり忘れていた。クリスは手をハンカチで拭いてから貸した分を受け取り、ポケットの財布を開いた。その時、紙幣と紙幣の間に、小さく折りたたまれた一枚のメモがあるのをクリスは発見した。一体何だろう。いつかの買い物メモだろうか。クリスが広げてみると、そこには見慣れた几帳面な字で短くこう綴られていた。

塔の上で待ってます

篠木山展望台　学園を望める唯一の場所は、閉館時間を過ぎていた。それにも関わらず千住慎は平然と展望室に居座っている。止める者もない。全ては慎の成す技である。

今夜だ。慎は学園の白い建物だけが、残光にも夜の闇にも惑わされずにいるのを見つめながら、密かに呟いた。今夜全てが変わる。水晶の光を捨てた者たちは、たった一人の少年が起こす奇跡に賭けるしかない。消えることのない輝きを持った少年が織りなす、革命に。

「そろそろかな？」

そう言つて慎の傍らに立つたのは颯だった。また二つの足音がして、荔枝と陽も開いたエレベーターから姿を現わす。慎は立ちあがった。四人は示し合わせた訳でもなく、自然と一つの景色に吸い寄せられ、そこで起こる奇跡をじつと待ち望んでいた。

「Lasciate ogni speranza, voi che intrate」

慎の唇が勝手に紡いでいた。

「この門をくぐる者は一切の望みを捨てよ」

上履きのまま外に飛び出たクリスの手にはあのメモだけが握られていた。目指す先はただ一つだった。白い塔。あの水晶の塔で、ノアが待っている。走るクリスの肺に冷気が流れ込んできた。上履きは土の道を走るにはあまりにも柔らかすぎる。既に足が痛み始めている。口の中で鉄の味がする。でも急がなければ。ノアのために。自分のために。何よりも大切な二人の友情のために。

胸元で水晶の指輪が跳ねている。この学園には後もう三人だけ、同じ指輪を持った者がいた。

第三十八話 水晶の夢・前編

「貴方が生きるために。そして僕が生きるために。貴方は弱さを捨てて強く生きられる。僕はそれを心から望んでいます」

「君は……君は誰なの？」

「僕は……」

Lasciate ogni speranza, voi ch
'intrate」

「有瀬……!!」

水晶のシャンデリアがアーチ型の窓から差し込む月光にきらめいている。オーロラのように光が移ろいゆく空間で、クリスは息を切らしながら、ノアの姿を捜していた。長い螺旋階段をのぼってきたあとで、わき腹がきりきりと痛んだ。それでもクリスは痛む場所をぎゅっと抑えながら進む術を覚えていた。

「有瀬、俺だよ。どこに……どこにいるの？」

柱の後ろから現われた人影にクリスははっとして目を凝らした。水晶の緩やかな点滅が彼の正体を隠している。有瀬？でも、有瀬より背が高いような……やがて、正面から向かって来たその人はクリスの肩に手を置いた。水晶は途端におとなしくなった。

「おや、クリスカ」

「薫さん……!どうしてここに……?」

「君こそどうしてここにいるのかな?ここは生徒会役員以外立ち入り禁止のはずだけど」

「それは……」

「こんなところにいるのを人に見られたらどうする?早く寮に帰りなさい。もう夜になってしまったよ」

肩を押しだす手は強くも優しい。薫に逆らいたくはない。恋人とし

ての薫にはもちろんだが、教職員として自分に向かっている薫には、まして。それでもクリスは薫の手を掴むとその目をしっかりと見据えて言った。

「でも有瀬が……有瀬が俺をここで待ってるって。薫さん、俺、退学処分にもされてももうなんでもいいんです。有瀬にあともう一度だけ会えれば……お願いします、もう少しだけここにいさせてください……！」

どこまでが本心だか、クリスには分からなかった。退学処分を恐れていない心は真実だろう。少なくとも、今の段階では。追い出される瞬間になつて、おおいに悔やむかもしれない。もしも、この会心が不首尾に終わったら。有瀬、お願いだ。出てきてくれ。君の本心を、俺はどうしても知りたいんだ。俺を哄笑した君が、心の中でどんな表情をしていたのか。あの後、涙を流したのか。それを、俺はどうしても知りたいんだ。

「……そう、君はノアのために来たのか」

「えっ……？」

不思議な薫の声の調子に気づいてクリスは瞳に当惑を宿したが、薫の微笑みがそれを打ち払う。

「君は友達想いの優しい子だ。友達のためにここまで来たことは褒めてあげるよ……本当にいい子だ」

二人の唇が触れ合う。その瞬間にクリスの世界は揺らいで、甘すぎる幸福が胸の奥から湧き上がってくる。そのまま変えれば自分は幸せになれるのだろう。クリスは確信していた。でも……自分はそんなことのためにここに来たわけではない。クリスは薫を突き放した。「クリス？」

「薫さん、違うんです。俺は有瀬のために来たんです。有瀬？有瀬、どこに……？」

クリスの目が窓辺に佇む者を捉えた。雲に隠れた満月が一瞬隠れた隙に彼の足元で何か白いものが閃いた。そして、またしんと冷え渡った光が彼の姿を照らし出した時、ノアは肩足を窓枠に寄せ、表情

のない目でじつとこちらを見つめていた。その目がクリスでなく薫を見つめていることに、クリスはその時気が付かなかった。窓の外で吹き荒れる風がノアの髪を乱して、前髪がノアの顔を覆う。クリスの脳裏に、あの夜のノアが大写しになって消えた。

「有瀬っ!!」

駆け寄ろうとしたクリスの腕を、薫が後ろから掴んだ。振りかえった時、クリスは睨みつける相手への愛情を思い出すことができなかつた。

「離してください!」

「俺が飛び降りると言ったらノアは飛び降りる」

「何言つて……!!」

「だが、そんな必要はない。ノア、おいで」

「……はい」

ノアは革靴の足を降ろすと、クリスの方に　もとい薫の方に歩み寄ってきた。足を降ろした拍子に裾があがって足首の白さが垣間見えた。先ほど閃いた白いものはそれだったのだろう。

「有瀬……?」

「バカですね、貴方も」

呆然とするクリスの頬に、ノアはそつと触れた。灰色の右目はまだ前髪に覆われていた。

「貴方は何度僕に裏切られれば気が済むんですか?」

ノアはクリスの頬を撫で、顎のところ指先を反すと再度手の甲でクリスの輪郭をなぞった。その手で金色の髪をかきあげ、クリスの耳元を明らかにすると、ノアはそこに顔を寄せて薫には聞こえないよう小さな声で言った。

「……貴方は僕に、何度裏切りをさせれば気が済むんですか?」

ノアはためらわなかった。クリスの耳を離れると、くるりと身を翻し、こちらにやってきた時と同じ歩調で中央の柱の方へと進んでいった。ノアが柱に背中から体を預けると、水晶のシャンデリアが再び光の演出を始めた。ノアはもうこちらを見ようとしなかった。

「お父様、僕はいつでも構いません」

「ああ」

と後ろで答えたのは、クリスに馴染みのない、けれど懐かしい声であった。その時、薫の手がクリスを離れた。振り返ったクリスは、クリスの手を掴み、今離れた人が最早最愛の人ではなかったことを知った。クリスは青いサファイアの目を大きく見開いた。その人の髪はノアと同じ葡萄酒色であった。真つ直ぐな痩せた体が質量を持つているのを、クリスは初めて見た。薫の姿はもうそこにはなく、ただその人の瞳の色だけに名残を留めていた。

「久しぶりだね、クリス」

男の左手に水晶の指輪が輝いていた。

「志水……晶……？」

「覚えているかい？初めて会った夜、君は百合煎の丘の墓地でうずくまっていた。君はこの世に絶望していた。ご両親の死に、親戚の冷たい仕打ち。あんなに幼くかわい君に対しても、世界は冷酷だった。君は海に身を投げようと試みた。優しい両親の元へ行きたい、ただその一心で。僕はそんな君を見つけて、この塔へと誘った」

「あつ……」

クリスの頭に色あせた記憶がぼんやりと蘇ってきた。冷たい土の感触、夜の海の禍々しさ、凍りついた悲しみ。そういったものが次第にはつきりとしてくる。クリスの身投げを止めた幻影のような男の姿も、クリスは思い出す。ずっと追ってきた幻の画家は、クリスの記憶の中に存在し続けていたのだ。

「君はそこでこの水晶を見ただろう。僕の最高傑作を。この絵で僕は絵というものを変えた。僕の筆で描いた水晶は、水晶として現実がこの世に存在している……そして、この場所を離れた君は、またこの絵を追ってこの塔の上までやって来たんだ。それを既に見ていたことを忘れ、見つけていたことも知らずにね」

志水晶はクリスの両肩に手を置いて、あの時と同じように天井の水晶を示した。見上げるクリスは呆然とする他なかった。これが絵？

人が絵筆で描いたもの？こんなにもはつきりと実体を持ったものか？輝きを放つものが？この世の何よりも眩しく、美しいものが？

クリスは目を閉じた。今はこの世にいない人の掌にさえ温かさを感じた。それが、自分を救ってくれた人の温度であることをクリスは信じて疑わなかったから。こんなにも美しいものに救われたクリスの頬を涙が伝って落ちた。

「そっか……貴方が俺を助けてくれたんだ」
「助けた？」

奇跡的な運命のめぐりあわせに胸がいっぱいになって、クリスは頷くのも、言葉を出すのも苦しかった。

「俺はあの夜、死のうと思っただんだ。本気だった……でも……でも、翌朝目覚めた時、なぜか知らないけれど、両親の死を受け入れられる気がしたんだ。泣いてばかりじゃ駄目だって……立ちあがって真っ直ぐ生きていかなきゃいけないって……貴方の絵を見たからだっただんだ。貴方のおかげで立ち上がったから、俺は貴方の絵に惹かれて、貴方のことを追いかけて……」

クリスが左肩に置かれた手を取ろうとした時、志水晶はすっと両腕を伏せた。クリスに触れられることを避けたように。クリスが訝しがる間も与えず、志水晶はクリスの頭上から静かに言葉を投げ捨てた。

「……君のお人好しにはつくづく呆れるね」
「えっ……？」

ぞつとしたのは、投げかけられた言葉のせいでも、後ろからクリスの両目を覆った冷たい手のせいでもなかった。真実を撫でる、その手つきの。

「逆だよ。僕は君を助けようとしたんじゃない。君を利用しようとしたんだ。言っただじゃないか、あの夜も。僕の願いは死んだ息子を蘇らせることだと。僕はね、生きる気力を失った君に息子の魂を注ぎこむことを思いついたんだ。他の場所ではできない。でも、ここなら可能だよ。ここは絵が実体を持つ場所、死が生に届く場所だ

から。僕が作った奇跡の空間だ。しかし、僕の目論見は半分成功して半分失敗した。息子の魂を注ぎこめたのは、君の心の影の部分だけだった。君は自らを光と影に切り離すことで、自分の魂を守ったのさ。君はよかった。君は生き残れたんだから。でも、可哀想なのはノアの方だ。ノアは君の影として、そして同時に志水乃亜として生きなければならなくなった。ノアを見てごらん……」

志水晶の指差す場所に、ノアはいた。クリスにはノアの横顔がまず見えた。ノアの体は柱の中央に鎖で縛りつけられており、白い爪先を露わにした彼の両足が宙をさまよっていた。水晶の柱に反射する光はまるでノアの背中から生える翼のようであった。ノアは瞼を閉じていたが、その表情は苦悶に喘いでいた。

「有瀬!!!」

叫んでクリスが戦慄したのは、昼間に見た絵の正体が今日の前の光景にぴたりと一致したからだ。クリスが憧れ、見惚れていたあの妖精の絵。妖精の体を浮かせているように見えたあの羽は、羽ではなかった。一人の人間の背に突き刺さる無数の水晶の剣であった。あまりにも神秘的すぎる剣たちは、その人の裸の背を、罪を苛み、恍惚と見えた彼の表情は苦悶の表情なのだった。クラスターを逆さまにしたような水晶のシャンデリアのうち、中央にある最も大きく真っ直ぐ床へ向かっていているものが、白い円柱と繋がっている。ノアの体はその透明と白の境目にあっただが、水晶の表面を走る無数の光の筋がノアの背に突き刺さって見えるのだ。いや、実際に突き刺さっているに違いない。ノアは確かに痛みを感じ、苦しんでいるのだから。

「ノアはああしてずっと苦しんできた。君の影にもなりきれず、僕の息子にもなりきれず、君の犯した罪を、君の心の闇を背負って」

「有瀬……!!」

「そろそろ解放してあげてもいいんじゃないのか？」

「っ!!!」

突如クリスの体を襲ったのは、昼間、ほんの一瞬だけ現われては胸

に切りつけていったあの痛みであった。しかし今回、激痛はすぐに消えてくれなかった。クリスの心から流れるおびただしい血が毒のように全身を巡って痛みを加速させる。それは恐らく、罪悪感とか憎しみだとか嫌悪だとか、そんな風に呼ばれるものたちだっただろう。クリスは自分の胸元をかきむしるようにきつく抑えて膝を崩した。歯を食いしばって悲鳴を堪えた。そんなことをしなくとも、口の中は乾き切っていて零れ出るのは息だけだ。すさまじい負の感情と苦痛に耐えるクリスを見ても、志水晶は驚きもせず、却って満足げな冷たい笑みを浮かべるほどであった。

「おや、よかった。ノアの痛みがまだ君に通じたということとは、君たちはまだ一つの存在である何よりの証拠だからね。おかしな話だけど、君が学園に来た時、僕が一番恐れたのは君とノアがまた一人の人間に戻ってしまうことだった。だからありとあらゆる手を使って君とノアを引き離そうとしたんだ。生徒会に命じて君を学園から追放させようとしたり、ノアに君を傷つけさせたりしてね。ところが、計画はいつもうまくいかなかった。僕の計画に気づいて、邪魔をする者がいた。もちろん、君のノアへの気持ちも僕の計画が失敗した立派な一つの要因ではあったけど。そこで、僕の考えは変わった」

「僕の今の目的は君とノアを一つの人間にまた戻すことだ。再び完全な姿に戻った君に、僕はもう一度息子の魂を注ぎこむ。今度は成功するさ。僕の力はこの十年で強大になったんだから。この男のおかげでね」

倒れ込んだクリスの涙でばやけた視界のそう遠くないところに、同じく床に伏せるものがあつた。薫だった。先ほどと全く変わらぬ姿ではあつたが、意識はないらしい。「薫さん！」呼ぼうとしても声はでなかった。

「この男も君と僕と同じさ。大事な人を失つた。この男はね、初めて本気で愛した人を自殺に追い込んでしまったんだ。それを深く悔やんで、全てのものに心を閉ざしていた。自分のもつと力があれば

彼女を死なせずに済んだのではないか。彼はそんな風に考えていたんだね。そんな彼を見つけて、僕は取引を持ちかけた。承諾させるのはとても容易いことだったよ。さつきも言った通りさ。僕も彼も、そして君も一緒だったから。僕は彼に絶対的な力を与えた。代わりに彼の体を使って自由に動き回れるようになった……契約期間ももう終わりだけだね」

志水晶は薫の傍らにひざまずいて力なく床に置かれた左腕を撫で、左手に触れようとした。クリスは、なぜかそれを必死で止めようとしている自分に気が付いた。志水晶はそんなクリスを見て嘲るように笑い、手を引いて部屋の中央へと歩いていった。クリスにノアの姿は見えず、志水晶は靴音だけで彼の存在を示していた。

意識が遠のきそうになるぐらいの痛みを超えて、クリスは荒く呼吸をしながら上体を起こし、ゆっくりと薫の方に這っていった。額から噴き出た汗が睫毛を濡らし、瞬いて視界を明らかにしようとするクリスの邪魔をした。最初に薫の手に触れた。次が顔だった。薫の表情に、クリスは穏やかな苦しみの痕を認めた。知らなかった。愛した人の過去も苦難も。完璧すぎる鎧の中に隠した傷跡を。どうして何も打ち明けてくれなかったのか。自分は受け入れたかったのに。千住薫という人の何もかもを。

ああ、違うんだ。クリスはふと思った。違うんだ。俺が愛して、そして俺を愛してくれた、いや、愛してくれたように見せかけていた人は、この人ではないんだ。全て志水晶の演技だったんだから。志水晶が俺に接近するために芝居をうった。そうに決まっている。俺は千住薫という人を知らない。愛したことさえもない。

痛みが再び襲ってくる。再び崩れ落ちたクリスの真っ白な意識の中に、薫と過ごした時間が日付とは無関係に流れていく。母親に似て地味だという自分と父親似の弟とくらべて笑った顔が真っ先に思い出された。それから、旧図書館の司書室で見た横顔、初めて会った時の顔。座っていた机から降りてばつの悪そうに笑う顔が、続けて。あんな顔を志水晶はできるのだろうか？例え演技でも。自ら

の野望にとり憑かれ、大事な人を亡くすという悲しみを共有する人々に同情するどころか付け込んで利用し、生徒会役員たちやクリスやノア、他にも数多くの無関係の生徒を苦しめるこの男が。

薫に変わってクリスの前に現れたのは、海原駅で見たあの女性だった。クリスはその女の名を知っていた。志水律　志水晶の妻であり、聡明で美しかったという女性。志水晶とは幼なじみで、彼の芸術の一番の理解者だったという。美人薄命という言葉を実証するかのように僅か二十四歳で逝去した。子供をさらわれ、一人百合の丘に泣く母親。彼女もまた、志水晶に苦しめられた一人であった。そんな彼女が首を振っていた。そのまま瞑っていたい瞼を開いた時、クリスは彼女の意思を理解していた。

「薫……さん……」

クリスは頭を自分の右腕の上に置いたまま、薫の左手を両手で包み込むと、震える指先で薫の薬指から水晶の指輪を抜きとった。こころなしか、薫の表情が和らいだように見えた。クリスは強張った微笑みを薫に向けて、少しの間だけは、痛みとは別に零れてくる涙の好きなままにさせておいた。それから、クリスは左手を首の後ろにまわして、襟の中をしばらくまさぐった。熱くなつたクリスの手に、金属は冷たすぎた。顔をわずかにあげるのにも激痛が伴う状態で、クリスは左手の中に全てをおさめると、その手をがんと強く床に叩きつけた。全身が軋んでいた。限界だと叫んでいた。疲れ切った神経が今にも引き切れてしまいそうだった。真っ直ぐにクリスの体を突き刺す、無数の水晶の剣たち。この苦しみを負う人はただひたすらクリスのために耐え続けた。有瀬……上履きの底が、ようやく床を踏んだ。左ひざに寄りかかる体をクリスは血が出るほど唇を噛みしめて起こした。額に張り付いた前髪をそつと退かして、苦しい体を引きずってクリスは一步踏み出した。友の方へ。置き忘れてしまつた片割れの方へ。L a s c i a t e o g n e s p e r a n z a , v o i c h i n t r a t e .　この門をくぐるものは一切の望みを捨てよ。だが、クリスはまだ望みを捨てる訳には

いかない。この夜の奇跡はここから始まった。

第三十八話 水晶の夢・後編

「うちの神社の近くに林があつてさ。小さい頃はよく近所の子供とか、菜月とかと一緒に遊びに行つたんだ」

語る颯の傍らで、篠木山展望台のマススコットキャラクターのキーホルダーが揺れている。

「この間、たまたまその時一緒に遊んだグループに再会したんだけど、男の子がね、一人だけいないんだよ。あの子はどうしたのつて聞くけど、誰も知らない。その子の存在を覚えてはいるんだけど、名前は愚か、どんな子だったのかさえ思い出せない。あの頃の写真を見てもどこにも写つてないんだ。それからずっと考えてる。彼は実在の人物なのか、靈魂の類なのか。それとも僕たちが勝手に作りだした架空の人間か」

三宿の町にはネオンが眩しい。崖の上の学園は随分と寂しいものだ。紙コップにそれぞれの飲み物を入れて、それぞれ夜景を 慎は学園を、荔枝は海を、陽は町を 見つめていた他の生徒会役員たちは、何も答えられないでいる。沈黙を破つたのは、ふとキーホルダーを手にして颯が呟いた一言だった。

「これ、いくらだろ……」

「待つてて！必ず迎えに行くから！今度は僕が助けに行くから！」

「それでも僕は行かなくちゃ……！！」

「乃亜」

恐らく息子の方に呼びかけているのだろう。はい、と返事をする

ことにノアは時々戸惑う。自分は志水乃亜であり、また同時に有瀬ノアである。どちらかを否定すれば同時にもう片方ではなくなってしまう。心もまたさまよい続けている。乃亜とノアの間を。自分は一体何者なのか。激しい痛みと苦しみの中、ノアは考え続けていた。悶えるより、吐息を荒げるより、ずっと楽で熱中できる仕事であったから。答えのない問いを投げかけ続ける。それはまるで底のない海に沈んでいくように。

志水晶が柱に触れると、ノアを縛りつけていた鎖は潰え、ノアの体はゆっくりと柱に沿って滑り落ちた。背中を苛む痛みが消え去っても尚ノアの顔から苦悶は消えなかった。それどころか、ノアは一層辛そうに表情を歪めて、息を乱した。父親はそんな息子の前にしやがみこむと、驚くほど冷静に、静かに口を開いた。

「苦しいか？」

「はい……」

「もう少しだ」

「はい……」

立ちあがった晶の目と座りこんだままのノアの目が、同じものを捉えた。まだ襲いくる強烈な痛みに耐えながら、必死にこちらに歩いてくるクリスの姿だった。クリスの顔はノアに見えなかった。ちょうど先ほどノアが前髪で自分の表情を覆ったように、クリスも汗でへばりついた前髪に青い瞳を隠していた。見えるのは堪える口元だけだった。倒れかかっては支え、倒れかかってはまた支え、その連続で少しずつクリスは体を引きずってくる。そこから受ける印象は父と子でまるで違うものであった。

クリスがようやく二人の場所に辿り着くと、志水晶はそつと後ろに退いてクリスのために場所を空けた。その判断は正解であった。渾身の力を振り絞って歩いてきたクリスは、ノアの前に倒れ込み、それからほとんど気力だけで起き上がって床に打ちつけた頬をノアに向けた。

「クリス様……！」

「ある……せ……」

クリスが右手で前髪を払った時、クリスの目には涙が光っていたが、それは決して痛みだけが作った結晶ではなかった。そんなものは、汗だけで十分だったから。その瞳で、クリスはノアをじっと見つめた。サファイアと煙水晶、海と灰、その間でどんな言葉が交わされたか、傍からは知る由もない。だが、確実にノアは宝石を揺らした。クリスは握りしめた左手をそっと持ち上げて　クリスにとって
はこんなにも些細な行為でさえ、震えずにはできなかったのだが

ノアの掌の上にあてて開いた。何かが押し付けられる感覚に、ノアははっとして身を強張らせ、晶に気づかれぬよう、視線だけで手の上を探った。指輪が二つ。片方はチェーンに繋がれてネックレスになっている。水晶との婚約指輪だった。

「有瀬……」

見つめ返すノアの目がまた揺れる。あれはまだ季節の香る頃。三宿学園にまだ秋の彩りがあつた頃。何もないクリスの左手にノアは泣いた。お互いに肩を濡らしあつた。そして、あの時と同じ決断をクリスはもう一度

「友達を置いて、勝手に一人でどこかに行くなよ！」

そんな叫びが聞こえた気がした。

今度は反対の手で、ノアがクリスの手を取って、自らの首の後ろに持っていった。クリスは指先でワイシャツの上からわずかな膨らみを感じ取った。クリスにはこりと笑った。

「クリスさ……」

優しい口づけがノアの言葉を遮る。限りなく温かく、そして悲しいものに包まれながら、ノアはクリスが指輪を通した紐を解いて手の中に収めるのを確かめていた。瞑った目の先に懐かしい匂いがした。二人の距離が元に戻ると、ノアはただ一度、大きく頷いてみせた。その時、水晶の部屋の上で鐘が鳴り始めた。

「時間だ」

志水晶は何の感慨もないように呟いた。振り返るクリスの目にもやはり感情はなかった。敵意も憎しみもない代わりに、尊敬も愛情もおそれもなかった。鐘の音に塔はこれほどまでに動揺しているにも関わらず。志水晶は今、ガラスのない窓の枠に腰かけて右手に筆をもてあましていた。すぐ外を吹き荒れる風も彼には無意味なようだ。彼は襟元すらも乱れていない。

「君が乃亜の苦しみを理解してくれたことを嬉しく思うよ、クリス君。じゃあ、ほんの暫くの間……その後は永遠にさようならだ」
晶の姿が消え去ると、頭上の水晶がふいに暴走を始めた。水晶のあらゆる面から光が放たれ、水晶のあらゆる面に反射して、部屋に、そして夜に乱舞する。何もかもが真っ白になっていく。クリスとノアは顔を伏せたが、その中でクリスは固くノアの手を握っていた。しかし、やがて、流れ込んできた水が二人の手を引き裂いた。

クリスは水の中でそっと目を開けた。最初に見えたのは、口から零れ出るいくつかの泡、そして上から注ぎこんで水泡に煌めく銀色の光だった。見上げる水面は遠のいていく。今度はクリスが沈んでいくのか。でも、関係ない。ノアさえいれば。二人で一緒に水面にあがればいいだけだ。

ノアの姿を水底に求めて、クリスは群青の帯の奥から浮かんでくる彼の姿を認めた。その途端、クリスの胸に湧き上がってきた思いは、やっと会えた。やっと見つけた。涙が水に溶け込んでいく。やっと取り戻すことができるのだ。ここに置き去りにしてしまったもの。紛れもない、もう一人の自分に。

口元を緩めてクリスは腕を伸ばした。指先から手繰り寄せて、その体ごと抱きしめるつもりだった。しかし、ノアは、クリスの微笑みにも、差しのべられた手に応えようとしなかった。二人の体は青の世界で擦れ違う。笑いを崩したクリスがノアの思惑に気づいて

急いで握った手を、ノアは振り払って拒んだ。そうして初めて、ノアは不思議なほど穏やかな微笑を浮かべることができた。

「有瀬……!!」

「クリス様……」

「どうして……?!」

ノアは自分の手を抱きしめた。そこにあった温度を、その温度に込められた想いをいとおしむように。それは、クリスの焦りにはあまりにも似つかわしくない、祈りのように安らかな行為であった。

「さようなら、クリス様…… 貴方に会えて、よかった」

ほんの少しの余韻だけ残して、ノアは強く水を蹴って水面の波に消えた。呆然とするクリスも、変わりゆく水の色にはつとしてノアの後を追った。自分を引き寄せる力にあらがって、何度も何度も水を掻いた。

頭が海面を突き出ると、そこは季節のない星の夜で、緩やかな波がクリスの背中を花咲き狂う丘に打ちつけた。クリスは這いあがって膝をついた。慄くほど沢山の星が空を埋め尽くす夜、クリスはようやく呼吸と五感を思い出して呼吸をし、重く冷たい体を百合煎の丘の上に横たえて、制服に染みこんだ海水を白い花卉の上に跳ね飛ばしているのであった。

本当は今すぐにも立ちあがってノアを追いかけたいのだけれども、生身の体はそれを許してくれそうにもない。息を整え、寒さに震えながら、クリスは墓石の白さが闇の中につつすらと浮かび上がるのを見つめていた。一番手前の墓が、志水律と乃亜の墓であった。行かないきや。まだ肺が正しく機能していないにも関わらず、クリスは唐突に思った。行かなければいけない時に体が動かないなんてことがあるはずがない。そんな無謀な声が出た。クリスは近くの百合を一つ手折って立ちあがった。クリスの腕をとってくれる人がいた。見えなくとも、ここに眠る人たちが近くにいるのを感じた。ありがとう、とクリスは小さく言った。両親も、まだ若き母親もきつと頷いてくれただろう。彼らの力をもらって、クリスは走り出した。

夕方と同じだった。ただ、ノアのために。塔に向かって。

濡れたズボンが足に纏わりついた。重すぎるブレザーは脱ぎ捨てた。それでもワイシャツが背中や腕にひんやりと冷たかった。クリスが走れば星空も巡り、百合の花も数を変えた。走るのにどうせ役にも立たない上履きは水の中で失ってしまったらしい。靴下の足の裏に、クリスは踏みつぶしていく花と土の柔らかさを覚えた。体のどこが痛もうと、一度ノアの苦痛を知ったクリスには、新しく一歩を踏み出すのを恐れる言い訳にはならなかった。誰もいない電車が海の上を、クリスの横を滑っていく。その音が消えた瞬間に、水晶の塔は忽然と目の前に現れた。

薔薇の彫刻が施された門に両手をあてると、鐘の音を待つことなく扉は開いた。螺旋階段を駆け上がる足の指先が、送り込まれる血と熱と、踏みしめる階段の冷たさに困惑してよろめく。足が宙を踏み、クリスは二度三度と転倒し、顔と体に傷を作った。部屋の入りがいよいよ間近になってきた後で、疲れ切った足首が段差に絡み、クリスは手もつけずに顔を打った。口の中に拡がってきた血の味をのみこんで、クリスはふらふらと立ちあがる。さすがにもう駆け上ることはできないけれども、一步一步を進んでいく。自分の鼓動と呼吸がうるさかった。到るところにできた傷に、潮水が滲んだ。何もかもを振りきるように、クリスは大事な人の名前を呼んだ。

「有瀬っ!!」

叫んで水晶の部屋に転がり込む人があった時、ノアは振り向くことを恐れた。ノアは柱の足元にいた。自分の使命を果たそうとしていた。全てはクリスのためなのだ。でも、クリスに知られる訳にはいかない。きつと止められてしまうから。ノアは右ポケットに手を突っ込んだまま、かつてない恐怖に襲われていた。きつとこれ以上はない葛藤だった。早く済ませなければ。でも……

後ろから両腕を掴んだ手がノアを凍りつかせた。ああ、終わりだ。見つかってしまった。ぐずぐずしているからこういうことになるの

だ。計略は失敗に終わった。何もかもを、ここで終わらせるつもりだったのに。絶望するノアの肩に、濡れた顔がもたれかかってきた。違つとノアは気づいた。これは父親ではない。彼の体重に圧されるまま一緒に床に崩れ落ちて、ノアは膝の上に親友のポロポロになった姿を見た。

「あ……ある……せ……よかった……間にあつて……」

切れた唇が作る微笑みを見た時、そして息を吸った時、しつとりとしっかりとノアの内側は湿ってきた。ノアはもう耐えられなかった。縋りつくように、ノアはクリスの肩をぎゅっと抱いた。

「クリス様！」

「有瀬……」

「どうして?!……どうして僕のために、こんなに……」

クリスはそのとノアの頬を包んで見えるようにかざし、自分は床の上に横になって言った。

「いつか迎えにいくって約束したよね？」

「はい……」

いつか二人で交わした大切な思い出。二人の記憶が、心が交差する地点。

「遅くなって……ごめん」

「……はい……っ！」

仰向けになったクリスの胸の上にノアは顔を寄せて泣きに泣いた。そんなノアの頭を、クリスは優しくぽんぽんと叩き続けていた。水晶から放たれた二人。彼らがお互いをどんなに愛し、どんなに求めているかについて語るために、何も憚ることはなかった。何も。後から後から落ちてくる涙に区切りをつけようと、ノアが顔を上げた時も、クリスはノアの顔をそつと指で拭ってやった。

「僕は死んでもよかったです。僕は最初から死んでいたんだから。そうしたら、志水乃亜の魂も貴方の影も元に戻ったのに。どうして貴方は邪魔をするんです……?」

真顔になったクリスは、ノアのズボンのポケットをまさぐった。冷

えて真っ赤になった指が案外すぐにとりだしたのは剃刀だった。ノアは「あっ」と声を漏らしたきり、罪を恥じる人のように顔を伏せた。クリスは何も言わなかった。

クリスはノアの肩に手をかけてゆるやかな動作で立ち上がると、床に腰をおろしたノアの手を自分の手で抱きしめた。一緒に過ごした日々にも何度もそうしたように。もうノアが逃げ出さないことを確認して、クリスは一つ息を吐き、右手に持つ剃刀を高く高く宙に放り投げた。剃刀は天井の突き出す水晶の先端に引っ掛かり、その傷はシャンデリアの全体に、やがては柱にまで及んだ。ひびが床に達した瞬間に、虚構の世界は崩れ始めた。それを成り立たせていた絵が切り裂かれた、その瞬間に。水晶は殺された。

水晶の欠片が二人に向かって降り注いでくる。狂乱の光が二人を包む。共犯者である二人に、せめて断末魔の悲鳴を、自らの返り血を浴びせかけるように。まだ涙目のノアに向かって、クリスは静かに笑って言った。

「君の手、温かいね」

「はい……」

「俺の手はとても冷たいだろ？」

「……ええ」

「ねっ、ほら」

クリスは最後に見られた気がした。ノアが微笑んだ顔を。

第三十九話 されど世界は美しい

三月一日。木曜日。晴れ。

風はない。天気予報士が三月の下旬並みといった気候は、鳥も花も人をも喜ばせている。薄雲はパステルブルーの空をのんびりと流れ、海も穏やかである。休校日のために人影はまばらであるが、私立三宿学園の校舎は相変わらず白く真っ直ぐにそびえている。何も変わりはない。何も不思議はない。そんな朝のことであった。

落合と来夏は学園の門に手を振って、寮への道を引き返すところであった。重々しい溜息をつかなくとも、二人の沈んだ気持ちは互いに察することができた。落合は不平を洩らす代わりに両手をぐつと高く空にむかって伸ばした。

「大丈夫か？」

「そつちこそ」

返された言葉に来夏は苦笑する。

「俺は何となく分かった。いつかこんな日が来るんじゃないかって、時々思ってた。昔からああいう奴だったから……」

「こんなことになるなら、もっと色々しておけばよかったよな。旅行とか、パーティとか。百人一首大会なんてやってねえで」

「別にこれで最後って訳じゃない。またそういう機会はあるさ」

「……そうだといいけどな」

「それで、今日の予定は？」

「まず頼まれたことだけ済ませて、酒本のお帰りなさいパーティの道具を買いに……あつ、二時から大河内の試合を見にいかねえと」

「相変わらず忙しいな、お前は」

来夏は通りかかった際にポストにエアメールを差し込んだ。異国の恋人へ。はたしてこの想いは届くのであろうか。

「しっかし、大丈夫かな、あいつ……」

「お帰りなさい」

理事長室に入った瞬間、そんな言葉が投げかけられた。両手を後ろで組んで立ち、懐かしの部屋をしみじみと眺める時間さえも与えてくれない。大学以来の朋友でもあり、盟友でもあり、上司であり、そして好敵手でもある自分を、無感動な微笑みと慇懃無礼な態度で迎え出る。それが風間信吾郎という男だった。有瀬裕理事長は自分の落胆を示すために、かなり大袈裟に肩を落としてみせた。

「何かご不満ですか？」

「いや、まさかお前が待っていてくれると思わなかったから。わざわざ休日出勤ご苦労様」

「理事長に復帰なさったお祝いを一言申し上げようと思いましたが、復帰か。呟いてはみたが、気持ちは一向に盛り上がらない。朝日が照らし出す豪華な椅子と机とを見遣ってもやはりそうだった。そこに久しぶりに腰かけると、なんだかこの席に拒まれているような気にすらなってくる。前理事長の痕跡はすっかり追い払われていたにも関わらず。」

「おめでとугоざいます」

校長が腰を折って言う。

「何がおめでとうだ。僕はもうすっかり参ってるよ。せつかく久しぶりにゆっくり過ごせたのに、もう仕事に追われなきゃいけないんだから」

「仕事というのはそういうものです。貴方はまだ働けるんですから、しっかりしていただかないと」

「お前みたいなのは話してもちっとも楽しくない。同情もされないんだから」

「おや、それは申し訳ありません」

「のれんに腕押し。豆腐にかすがい。お前は何を言っても応えない」

「柳に風と言つてほしかったですね」

いらだたしげに鼻を鳴らして、理事長は回転式の椅子をぐるっと回した。理事長室の景色の何もかもが一色に変わる。一言話す度にこちらの神経を逆なでせずにはいられない、校長の姿さえも。しかし、何度かやつたところで唐突に気分が悪くなり、理事長は頭を押さえ、てふらふらと立ちあがると、窓辺に寄つた。

「……大丈夫ですか？」

校長が尋ねる。気持ちのこもらぬ同情より、回る目には美しい中庭と春の風が一番効果的であった。はあ、と溜息が零れ出る。この男に言つてやりたいことは沢山あるのだけど。

「まあいいや。文句を言つても始まらない。とにかくやらなきゃいけないことが山積みになってるんだから。残念なことに、お前にも手伝つてもらわなきゃならないからね」

「この学園の改革、ですか？」

「そういう大々的な話は後。まずは退学届の受理をね」

「ああ、そうでしたねえ……」

校長は理事長がまだ働けないのを見てとり、断りもせずに机の抽斗に手をかけた。確か一番上の段だったはずだ。勝手な行動をプライバシーの侵害だと言わんばかりに睨んでくる理事長の視線は無視して、校長は二枚の書類を取り出した。石崎・エーリアル・クリス。有瀬ノア。二人の退学届であった。必要事項はすっかり記入しつくされ、後は理事長の判子を待つだけになっている。理事長は首を振りながら溜息をついた。

「……さびしいねえ。学園からまた二人もいなくなるんだからねえ」
完璧になった書類を理事長は一刹那だけ、目を細めて見つめた後、すぐに顔を背けるようにして校長に手渡した。

「貴方の手で変えられますよ。誰もここから去らなくてもいい学園に。それに、生徒会役員たちは戻つて来てくれたではありませんか」
「嫌な奴ばかり戻つてくるなあ。僕、あいつら嫌いなんだよね。みんな取り澄ましてて生意気だから。全然子供らしくないんだもん」

「理事長がなんということ……」
座り心地の悪い椅子は、先ほどより少しましになったような気がする。ようやく元の持ち主を思い出したのかもしれない。思い出してくれなければ困るのだ。これから後何年間かはこの椅子に座っていないければならないのだから。

生徒会書記、榊原颯は寮の縁側に腰かけていた。紺の木綿の着物をゆるやかに着こなして、立てた片膝の辺りに湯飲みを持ち、眼鏡を外した目の中によろやく取り戻した平穏に静かな喜びを映している。その傍らでは菜月がきちんと正座をしながら和三盆をつまんでいた。

「あーあ、せっかく楽しかったのに……」

菜月の呟きに、颯は視線だけを向けて続きを促す。

「颯と二人きりで。今日からまた自分の寮に戻らなきゃいけないし。颯だってもうすぐ卒業でしょ？そしたら今度は……ずっと一人だ」
どうやら落ち込んでいるのは真面目らしい。颯は湯飲みを床に置いて、うつむく菜月の頭にぽんと手を乗せた。少しだけ顔をあげた幼なじみに颯は優しく微笑みかける。「そういう日はいつか来るんだよ。でも、何も変わらないさ。今までとね」
庭の白梅は今が見ごろである。

生徒会議長、小杉荔枝は寮のバルコニーに立ち、愛猫を膝にのんびりと紅茶を嗜んでいた。喉元をくすぐってやると、シャネルは満足げな声をあげてますます丸くなった。ここに帰ってきたら久しぶりにやりたいことはいっぱいあったのだけれども。この懐かしい海を見た途端に、全てが飛んでいってしまった。何から手をつけていか分からなくなってしまった。バイオリンも弾きたい。もう長いこと手を触れていないから、よほど腕が落ちているだろう。また元

に戻るには相当な練習が必要なはずだ。だが　荔枝は透き通った空を仰ぐ。その途端に視界を塞がれた。子供っぽい悪戯に荔枝は頬を緩ませる。焦る気には到底なれないのだ。この少年と一緒にだと。

生徒会会計、川崎陽は寮のバルコニーで寛ぐいとこの姿を見つけ、その目に右手で覆いをかけた。いとこの指が絡んだままのティーカップから紅茶を盗んだ後で、陽は荔枝の口元に唇を持っていくようにする。荔枝がそれを制した。

「何で？」

「君が今盗んだのが最後の一口だ」

「弁償はしてやる。コーヒーでよければ」

「……まっ、偶にはな」

コーヒーの香りは既に漂ってきている。シャネルは早くも呆れ顔をしてぴよんと膝の上から飛び降り、開けっぱなしの窓から居間へと戻っていった。

生徒会会長、千住慎はフェンシング場にいた。「フェンシングを教えてほしい」と明音が突如頼みだしたのには驚いた。理由を尋ねても、明音はこんな時にかぎってにやにやと照れるばかりで何も言わなかったが、自分がフェンシングをしているのを昔から知っていて、実は密かに憧れていたのだろうと推測できた。

「慎様ー！」

相変わらずのかしましきで明音が駆けてくる。大きく手を振る明音に眉を少しひそめつつも、慎も小さく手をあげて返事をした。明音の満面の笑顔が零れ落ちそうになっている。

あの時　フェンシングを教えてほしいと頼まれた時、ちよつと考えた後であっさりと快諾したのは、一緒に過ごした一週間かそこらの間に、多分ほんの少し分かったからかもしれない。慎は自嘲す

るように、しかしそれも清々しい自嘲の仕方、一つ息を吐いた。すぐ後ろで、兄だけがそんな溜息を聞き咎めたかもしれない。でも、薫は笑うだけだった。

荷物は少なかった。父が饒別にとくれた鞆で全て事足りた。初等部の生徒たちがぎゃあきゃあと明るいう声をたてながら、前を横切っていく。何も知らない無邪気な姿だった。知人に挨拶まわりをする必要はないだろう。自分はこれから忘れ去られ、自分もまた彼らを忘れていくのだから。

ノアはチエツク柄のキャスケットを目深に被り、学園の門へ続く道を歩いていた。あの人は今頃どうしているだろう。彼は光を失った。それはノアを助けるためでもあったし、彼自身を助けるためでもあった。彼は救われたのだろう、恐らくは。でも、だからといってこの胸を刺す罪悪感が消える訳ではない。だから一人ここを去る。あの人がくれた全てをしつかりと抱きしめながら。

守衛の操作で門が開く。いよいよお別れだ。最後に学園を振りかえろうとして、ノアは門の手前の木陰に一人佇む人物に気づき、はつとしてその場に立ち尽くした。風が一つ吹いて、木々をざわめかせた。紛れもない春の風だった。

「有瀬……よかった。来てくれたんだね」

「あつ……」

ノアの瞳は大きく揺れた。その人の瞳は　分からない。だが、クリスは微笑んでいた。

「ここまでどうやって……」

「関本と落合が手伝ってくれた。二人にちゃんと挨拶はしといたよ。二人分まとめてね」

ノアは顔を伏せた。貴方の優しさが僕には時折痛かった。それをどうして理解できないのですか。そんな想いを込めたつもりだった。

「有瀬」

クリスがそつと呼んで、不器用に踏み出した一步に気づき、ノアは思わず駆け寄りそうになった。案の定クリスはふらついたが、すぐにその手が桜の幹を見つけて何とか持ち直す。

「クリス様……！」

「有瀬……君は君を責める必要なんてない。俺は今までの光を失ったけど、同時に君という光を得たんだ。だから、何も失ってなんかいないんだよ。二人で行けばいい。二人で行けば、必ず道は開かれるんだ。お願いだ、ノア、どうか……！」

真つ直ぐにこちらに向かつて差しのべられた手。それは多分、ノアの手を引くために差し込まれたものではない。ノアが引いていくために。ノアが道を作っていくために。

そこに大きな困難が待ち受けていることもノアは知っていた。これまで自分たちを守ってくれていたものが全てなくなることも。ノアはクリスの方へとゆっくりと歩み寄っていったが、その時、まだ決心はついていなかった。目の前に自分が立っていることすら分からぬこの人に、一体どんな結論を出せば……ノアは目を閉じた。これがクリスのいる世界だった。世界は暗かったが、クリスの立っている場所に、ノアは光り輝くものの存在を感じることができた。差し込む朝の陽ざしだったのかもしれない。だが、目を開けたノアは、一瞬ためらった後で、しっかりとクリスの手を取った。

「ノア……！」

「……行こう、クリス」

同じ頃、クリスとノアの寮の寮の整理をしていた落合と来夏は、二人の寝室に置き去りにされたスケッチブックを見つけた。止める来夏を無視して、落合はぱらぱらとページを捲った。最初は鉛筆で描かれたモノクロのスケッチだった。「石崎のタッチと違うよな」そんな二人の会話を止めたのは、そこだけ色のある絵であった。笑顔のノアの姿。そして、その隣のページには、鉛筆で描かれたクリスが

ノアに笑いかける姿が。二人の手はそれぞれのページを超えてしっ
かりと結ばれていた。

落合が傑作だと評して口笛を吹いたその絵。そこに描かれた二人
は、新しい道を歩み出した現実の二人を、まるで予想していたかの
ようだった。

「されど、世界は美しい」

完

第三十九話 されど世界は美しい（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

本編はこれにて終了となりますが、Crystal Brush短編集「桜のない花物語」(<http://ncode.syosetu.com/n5430n/>)はもう少しだけ更新するつもりです。

また皆様とお会いできる機会がありますように。

篠原零

A c t 1 ・クリスマスベル（前書き）

番外編です。

クリスとノアが学園を去ってから最初のクリスマス話です。

Act 1・クリスマスベル

「ねえ、これ鳴らないよ」

菜月がそう言ったとき、颯の目に映っていたのは十八歳の青年ではなく、前髪を切りそろえて大きな黒目を潤ませたあどけない幼子の顔だった。笑おうか笑うまいかと迷ったが結局傷つきやすいこの時期の心を思いやって、優しく微笑むだけにとどめた。そして、たった今日の前に突き出されたばかりの鈴を手にとってひっくりかえした。本来小さな鈴の声帯が存在するはずの場所には、空虚な暗闇が鈴の金色と色を交えてむなしく横たわっている。

「あたり前だろ。ただの飾りなんだから」

「どうして飾り物だからって音が鳴らないようにするんだろ。音がしなきゃ鈴は鈴じゃないのに」

「その方が安上がりだからだろうね」
「つまらない」

颯の現実的な答えに子供らしく唇を尖らしても、幼稚園児が泥団子を投げつけるような俊敏さと無邪気さでわかりきったことを聞いても、菜月は変わった。この一年で身長は3センチ近く伸びていたし、鼻筋が通って頬が白く痩せ、丸かった目がやや切れ長になって表情がぐっと大人びた。体つきももうほとんど立派な大人と違ってよかった。今までは小柄さと可憐とさえ言える幼げな風貌でうまく隠していたが、剣道で鍛えた体は健やかで、四肢はすらりと伸びていた。たまに試合を見に行くと、菜月は馬が躍動するような動きをしてみせることがあった。

『奔馬』 かの文豪の小説の題名がふと頭に浮かんだ。颯にはなじみの深い作品だった。中学の頃、美しい文章にあこがれて何度読み返したことだろう。そして今もパソコンに向かう颯の左手には、同じ本が握られている。三月の卒業式を終え、三宿学園大学文学部国文学科に進学した颯の今年最後のレポートのテーマである。自分

の使命にとりつかれたように純粹で短すぎる人生を送った飯沼勲の横顔が、時折菜月と重なるのはどうしたことだろう。菜月には確かに純粹さがある。だが、それは世界に立ち向かって碎けていく純粹さではない。空気のように周囲に溶け込んでいく透明さ。その中にいる浮遊感と温かさ……決して刃は光らない世界である。それでも

「颯、どうかした？」

菜月に尋ねられ、颯は我に返った。真っ赤なセーターに身を包んだ菜月の背後では、窓が四角く冬の夜空を切り取って、オリオン座をその中央に据えている。大学の学生寮は、高校の頃の豪華な純和風の邸宅からみれば、ひどく小さい。だが、颯は他の生徒と平等に同じ建物に押し込められることが、なんとなく心地よかった。正直に言えば、高校の頃は悪目立ちがすぎたと颯はいまさら思っている。

「別に。寒いから、カーテン閉めようか」

颯は歩いていく。オリオン座をダークグリーンの布で覆い隠すために。よく澄んだ冬の空に、星の光がゆらめきながらの永遠を語っているのを見ると、颯はあの少年を思い出さずにはいらぬ。石崎・エーリアル・クリス。彼もまた、飯沼勲の目をしていた。

立ち上がり、窓辺に頬を寄せる颯を見つめる菜月の顔には、繕った訳でもなく聡明そうな表情が宿った。颯が大学に入り、毎日のように顔を合わせることでできなくなつてから、颯との距離はずっと遠くなり、それ故に近くなった。しかし、菜月はもう依然のような我儘や嫉妬を素直に表せなくなっていた。それは、颯の世界に菜月が存在しない場所があるように、菜月の世界にも颯のいない場所が存在しはじめたからだ。しかも、そこは決して虚無の世界ではなかった。

生徒会書記としての日々は忙しい。颯はよく悠々と落ち着いて歩いていられたものだ。菜月は休み時間ごとに廊下を疾走しては森先

生に発見され、よけいに移動に時間がかかるという事態に陥ったが、本当に緊急の場合は落合を見習って逃走するという方法があった。ただし、次の体育の時間が必ず恐ろしいことになったが。

一体なぜ自分などを校長は生徒会役員に指名したのか。菜月はさっぱりわからなかった。自分は特別優秀な生徒である訳でもない。ただ剣道に一つ道を捧げてきた。一度校長に直接聞いてみると、校長は笑って答えた。

「君は特別な経験をしていますからね。おそらくこの学園では、君のような経験をする人は今後二度と現れないでしょう。僕がそのように取り計らいますから。僕は君のような人間を二度と生み出したくないと思っていますが、でも、君には価値があるのですよ」

そう言って、校長捜索隊の足音を聞くなり身をひるがえした校長に、それ以上何も聞けなかった。菜月は聞こうとしなかった。ただそれから菜月の態度に少しずつ変化してきたことに本人は気づく由もなかったが、颯と友人たちは気づいていた。菜月の目はより広いものを捉えるようになり、無表情な表面をざわめかせていた激しい感情の波は、以前よりずっとおとなしくなった。時々けだるさが菜月を襲うこともあった。春の日の午後、一人取り残されたようなけだるさだった。不快ではなかったが、違和感があった。颯の変化に瞳を注ぐとき、そのけだるさは余計顕著になった。

颯は変わったと、自分の変化には一向に気づかないまま、菜月は敏感に感じ取っていた。ラベンダー色の瞳から追い詰められた獣のような野性の光が消えた。高校時代の颯は、一言言葉を発するのにも警戒していた。極めて慎重に丁寧に会話を運びながらも、彼は相手がいつ刃を抜いてもいいように構えていたのだ。例えば会話の相手が菜月であっても。擦れて丸みを帯びた彼の声や言葉を聞くと、菜月は高校時代の颯が異常だったことを改めて思い出し、驚いた。

会うたびに菜月は颯に「老けた」と悪口を言った。颯は呆れたような顔をしてみせたが、彼は老いていくというよりも、ゆるやかに円熟していくようだった。それは颯が菜月に認めた青葉の成長では

ない。細石が集うような、しかしもつと美しい現象であった。

もし以前の、単純に去年までの自分であつたら、自分はそんな颯の変化を嫌がっただろう。なんとかして颯をそのままの状態に留めようと努めたはずだ。たとえどんな我儘で乱暴なことをする羽目になつても。今の菜月はそうした颯の変化を認めていた。これは諦観なのだろうか？

菜月は手の平の鈴をもてあそびながら、先ほどまで颯が腰を下ろしていた椅子にこしかけた。パソコンのスクリーンには菜月の知らない難しい単語が並んでいる。菜月はそれを読もうともしない。颯はカーテンを閉めようとして指を布に絡ませたまま、オリオン座に見入っている。何か一つ音でこちらに引き戻したいけれど。耳元で何度鈴を振っても音は出ない。鈴を放りかけた菜月は、掃除のいきとどいた白い壁の上にあるものを見つけた。

「ねえ、颯」

こぼれ出た音は鈴の音より尊く、震えて、かすかに。

振り返ろうとして、颯は突然動きを止められた。菜月が急に背後から腕をのばしてきて、颯の体を抱きしめたからだだった。颯は突然のことに困惑し、自らそういう柄でないことを感じながら、窓に押し寄せられた唇から洩れる吐息が窓を曇らせ、頬をしっとり熱くさせていくのを感じた。また、颯は、菜月の鼓動を感じる位置がいぶん高くなったことを知った。菜月の伸び方は三センチでは済まないようだった。

「どうしたんだよ、急に？」

優しい嘘で誤魔化す術は颯にはもう残っていない。

「真似してみたただけだよ。ほら、あの絵」

「あの絵？」

颯に巻きついた腕が一本解けて、壁にかけられた額縁を指す。見上げてはじめてその存在に気付いたように、颯は絵を眺め、苦笑した。

ああ、そうだ。僕は彼の貴重なスケッチを持ってきていたのだった。」

菜月の腕がまた元に戻って、絵の中の二人と同じ姿勢に戻る。戻ろうとはしたのだろう、だけど…… 颯は窓の外の暗闇が一層鮮やかに描き出す自分の顔が、最早昔のように微笑めないことを承知していた。菜月の抱擁を背中に受けた颯の表情は、幸せそうだがどこか切なさそうでもあった。充足感に浸りながら、どこかに何かを置き忘れたような。

「ねえ、クリスマス、僕は満ち足りてしまったよ」

颯はひそかに胸の中でつぶやく。

「僕は変わらず高みを目指しているけれど、それは僕の世界でも十分手にするのできるものなんだ。そしてそこに行きつくまでに、非現実的なほど強大な力に襲われる不安もない。ねえ、クリスマス、僕は……」

絵の中に少しの変化を加えることを颯はためらわなかった。自分の胸にしがみつく菜月の手にぎゅっと握られた鈴を、颯は手を重ねるようにしてそっと奪い取り、オリオン座に向けてかざした。

「僕は鳴らなくなってしまうんだね」

けれども、その鈴の飾りは美しかった。鳴らない鈴の輝きを、菜月の目もまた颯の肩越しに追っていた。

Act 2・柇

柇の實の赤はキリストの流した血の色だという。そんなことをぼつりと陽に話すと、彼は「えっ、ただの魔除けだろ？」と返した。何も言えない荔枝は、少し呆氣にとられてそれから笑った。

全人類のために十字架を背負ったキリストの痛みにも感じない陽は、荔枝が陽のために傷つくことを何よりも嫌がった。宿題を拒む子供のような嫌がり方であった。あの学園で過ごした四年間、荔枝も陽も互いに求めあいながら、互いの肌に触れながら、相手の指がなめらかな皮膚の上につくばんだ傷痕に触れることないように気を配った。時々二人のとぼけたような視線が、空中でぶつかって弾けることもあった。しかし、二人は切ない猜疑でさえも愛の内に押し込めた。弾けたものの欠片を、真昼に輝く月のように簡単に引きはがせそうな薄い膜の破片を、指ですくってしまいで。

きつと今は違う目をしているのだろう、自分たちは。荔枝の膝の上でぐつすりと眠りこんだ黒い頭を撫でて、荔枝は目を細めた。この気持ちをとんとんといえよいか分からない。愛しながら互いの背に容赦なく鞭を宛がっていた時代は過ぎ去った。今はひたすら甘やかしたいような愛おしさだけがこみあげてくる。朝の日差しが箱庭に注ぎ込んで、やがて満ちあふれるように。

「陽」

名前を呼ぶと陽はほんの少し身じろぎして、小さく呻いた。猫が返事の代わりに尾を振るようなものだった。

「時間だぞ」

腰にすりついてきたものに、荔枝は目を落とす。愛猫のシャネルが飼い主たちの暇をめぐらして飛び込んできたところであった。荔枝は陽の髪をなでていた手で、今度はその顎に触れる。すると、陽の手がたちまちそれを奪い返して、シャネルは不満げに一つ鳴く。

「陽、十分だけじゃなかったのか？」

「ん……………」

「やらなきゃいけない課題があるんだろう？」

「別に、明日でも……………」

「明日は大学のクリスマスパーティーだろう？」

「んなもんサボって……………」

「君はあまりに引きこもりすぎる。偶には社交的になったらどうだ？ほら、とりあえず、私の膝の貸し出し期限は終わりだ。次の予約者が待ってるんだから」

荔枝が空いた方の手で頬を優しくつねると、眠い頭とまだ開かない喉で示せる限り不服そうに、陽はのろのろと頭を起こした。彼の顔がやや傾いで荔枝の胸元あたりまで上がった時、いつもは顔の上半分近くを覆っている長い前髪が幕をよけたかのように開いて、蒼い瞳を透かして見せた。荔枝の腿にあてていた方の頬は赤く染まって、荔枝のズボンの縫い目の痕をくつきりと残していた。荔枝はそこをなだらかにするように撫でてやった。

「おはよう」

「おはようじゃねえよ……………」

陽は寝起きの低い声でぼやいた。

「確かに午後十一時は早いとは言えないな」

荔枝は悠然と言い放つと、場所が空くなり飛び込んできたシャネルの温かく柔らかい体をぎゅっと抱きしめた。鼻先をくすぐる白い毛から日向の匂いがした。

「そんなに睨むな、陽。君が頼んだ通りに起こしてやったんだ」

「……………気が変わるってこともあるんだよ」

「いちいち君の気まぐれに付き合っていたらどうなることやら。なあ、シャネル？」

「あー、ちくしょう。黙らねえと口を塞ぐぞ」

「おや、光栄だ」

最後の言葉を言い終わるか言い終わらないか、その狭間に既に荔枝の頭はソファに肘掛に押し付けられ、唇に鋭い感化を受けていた。

かわいそうなシャネルは二人の飼い主の間でぺしゃんこにされないように急いで逃げていった。暖炉の火を受けてより一層爛々と燃えるシャネルの大きな緑色の目は、一つに溶け合った二つの影が飽きることなく互いの口を塞ぎ合っているのをしばらく見つめていたが、やがて諦めたように部屋を出て行った。シャネルの後ろ姿を目で追って、二人はようやく離れた。

「ほら、シャネルに怒られた」

「好都合だろ？」

荔枝の黒髪に顔を埋める陽の声の低さは、最早寝起きのためではなかった。荔枝は微笑みながら、聡明にも彼の体を引き離れた。

「陽、英語の課題はどうしたんだ？それに私も明日一つミニコンサートを控えているんだ。敬虔なクリスチャンに音のはずれた讚美歌は聞かせられないさ」

目を閉じればすぐに流れてくる自らの奏でる音楽。この音がきつと明日、冷え冷えとした貧しい教会に響き渡る。そしてそこに集う人たちの祈りはより清らかにより強く燃え上がるのだらう。この胸の中にある愛とどちらと……

三宿学園高等部を無事に卒業した二人には、慣れ親しんだ三宿港を離れるのは非常に惜しく思われた。二人の生活には常に海があった。だからせめて、二人の暮らす場所は海の間近に見えるところではなくてはならない。

荔枝のバイオリンのファンだという素封家の老人が、息子夫婦が海外転勤のために引き払った後誰も住み着いていなかった海辺の館を貸家に出したのはちょうどその頃だった。陽は卒業後間もなくあてもなく散歩をするくせがついていて、ホテルから延々二時間近くも歩き続けた末に、バルコニーを砂浜の真上にさらけ出した瀟洒な白い建物を見つけて足を止めた。それから三日連続でその家の持ち主を訪れ、一人でさっさと話をつけてしまうと、ルームサービスで

ゆつたりと朝食を済ませていた荔枝とスイーツケースを引っ張って、ヤドカリのように素早く住処を変えてしまった。荔枝は喜びがこみあげてくるまでの間は、とことん呆れ返ってみせた。

四月になると、陽は三宿学園大学の商学部に進み、荔枝はバイオリニストとしての道を選んだ。二人はこわいほど順調であった。夜になつて、二人で白いスーツの上で寄り添いあいながら窓の外の海原を見つめるとき、二人は実生活で感じない分の不安を、波打つ暗黒に見出した。それでも、何も起こらなかった。四月の海は冷え込む夜でさえも穏やかで、夏の日の下ではまぶしいほどさざめきたった。だが、冬が足音をたてて駆け込んでくる季節、雲の彫の深い、海の荒れる日に事件は起こった。

あっ、と荔枝が玄関から一步出て止まったのは、羽織ってきたジャケットがあまりにも薄いことに気が付いたからだった。今夜は大分冷え込むそうだ。もう少し着込んできた方がいいだろう。

翻した肩に白銀の刃が襲いかかろうとしていた。荔枝がすべてに気付いたのは、荔枝の体にしがみつくようにして抱きすくめた強い力と、耳に触れた吐息の熱さのためだった。

「あき……?」

からんと一つむなしい音がして、荔枝の足元に何か転がった。それはナイフだった。はっと顔をあげた時、陽の黒いシャツの肩が荔枝の視界を覆った。背中を探る手の指先がふと濡れた。

無意識のうちに信じていた。もし、二人の内のどちらかに生命の危機が訪れて、どちらかがそれを庇って死なねばならぬとしたら、それは自分だと。自分が陽を守って死ぬのだと。それは尊い愛であると同時に子供じみた理想でもあった。現実という名の刃が切りかかってきて、荔枝は初めて守られ、愛される受け身の自分を知った。この手が赤く染まって初めて。

「陽……っ!!」

幸い陽の怪我は浅かった。もちろんその基準は命に別状があるか

否かのところで作られているものなので、荔枝は陽が弱弱しく笑うまでひどく打ちのめされていたが。今までにないほど素直に恋人たちが抱きしめあう病室がある一方で、氷室彼方は取調室の冷たい灰色の壁に囲まれて死んだように沈黙していた。どんなに厳しい刑事として、彼に荒々しい言葉を投げかける気にはなれなかっただろう。憐憫は荔枝の胸にすら起こった。哀れな青年である。彼は人生にみはなされた。氷室弘毅の贈収賄疑惑と、数々の不正のせいで。

「お前のために死ぬんだつたら構わない」

陽がいつになく真面目な口調でつぶやいたのを、涙で濡れたまどろみの中に聞いたのを荔枝は覚えている。

「でも、お前が生きてほしいっていうんだつたら、生きててやつてもいいぜ」

「おい」

教会を出ると、空は一面の黒だった。神が黒いストールをこの世の果てにむかつて投げかけたかのような。そして、その真ん中にはしんと冷え切った満月が煌々と輝いていた。見上げている横顔を、呼ぶ声があった。

「帰るんだろ？」

「……ああ」

肩を並べて歩きながら、荔枝は今宵の舞台を振り返る。クリスマス飾るイルミネーションも、ステンドグラスから洩れる灯りもない。街灯のともった夜の街の暗闇にさえ埋もれそうな、小さな、薄青色の、みすばらしい建物。しかし、そこは温かかった。そしてどんなに歴史ある教会もかなわぬほどの神聖さを醸し出していた。どんなに踏みつけられても絶対に犯されず、永久に失われぬものがある。それが信仰であり、祈りであるのだと、荔枝は貧しい子供たち

の瞳の輝きから知った。

「まっ、悪くはなかつたんじゃねえの？」

陽がまつすぐ前を見たままですばやいた。

「驚いたな。君が聞きに来ていたなんて気づかなかった」

「愛が足りないからだぜ、きつと」

「なにを戯けたことを。愛ならここにあるだろ？」

陽にそつといたずらを仕込んで、荔枝は逃げ出すように二、三步駆け出した。陽が自身の前髪に見つけたのは、柎だった。クリスマスケーキに飾りとしてささっている類のおもちやである。陽は、荔枝がこのおもちやを受け取っている光景を思い出した。荔枝にクリスマスケーキの贈り物を受けた孤児院の少女が、この柎を礼に代わりによこしたのである。

「おい、荔枝」

「何か？」

振り返った生意気な口を、二晩続きで塞いでやる。街灯がどんなに優しいオレンジ色の光で二人を照らし出しても、道路の上には二人の他に誰もいない。そして酔うほどの量を陽は荔枝に注ぎ込む。

「……魔除けのはずなのに」

陽の抱擁の海に溺れながら、荔枝は寒さと熱さの容赦ない責め苦に耐えかねて涙目になりながら言った。陽は不適に笑う。柎を恋人の髪にそつと挿して。

「生憎オレには効かねえみたいだな」

その実の色は恋人のために流した血の色である。

A c t 3 ・ 杖

明音にとってクリスマスが特別な日であった記憶はない。母親の愛はどんな日でも変わらさず明音に注ぎ込まれ、彼女の死の後ですら明音の心を満たして枯れることなかった。母親はクリスマスだからといって豪華な料理をこしらえたり、クリスマスツリーを飾りつけたりするようなことはせず、小さな息子との住処を温かく、居心地のよい場所にしつらえることだけに全力を傾けた。それでも時々、幼い可愛い彼女の息子がクリスマスイルミネーションに目を輝かせたり、ツリーに飾られたジンジャークッキーをほしがったりするときは、臨機応変に優しい態度を示すことはあった。

母親と過ごした最後のクリスマスは、杖型のキャンデーが象徴していた。その年のクリスマスはたまたま休日で、明音は一日中病室に入り浸っていた。母親の病は、その頃には大分悪化しており、長いこと青ざめた顔で夢見るように宙を眺めているかと思えば急に苦しみだし、注射や投薬といったなんらかの処置を受けるとまた夢想状態に戻る、ということを繰り返していた。しかし、調子のよいときは昔と同じように笑ったし、意識を漂わせている時ですら、明音が手を握り返すことは忘れなかった。その日は、神のご加護のためか母親はすこぶる元気だった。明音が買ってきたクリスマスケーキを一緒に食べ、声をたてて笑い、明音の髪をいとおしそうに何度も撫でた。最後の行為だけが明音の胸を苦しくさせた。母さんはまるで、まるで……もう会えない人を見るような目で、俺を見る。

「明音」

足の速い冬の夜が駆けてくる音を聞くと、母親は明音に帰宅を促しながら、紙のような皮膚をした手を枕の下に滑らせた。

「クリスマスプレゼントね、本当は用意したかったんだけど……何も思い浮かばなくて。おじいちゃんとおばあちゃんに頼んで買ってきてもらおうとおもったんだけど。子供っぽいと思うけどこれでい

いかしら？」

病院の陰気な蛍光灯がビニールの袋に反射して、明音は一瞬それがなんなのか理解することができなかった。手にとって、それを窓の外に掲げて、初めてその形を認識する。口を赤いリボンで絞った袋に入った杖型のキャンディーであった。

明音は見慣れたものをはじめて手にしたときの物珍しさで赤白の縞模様を眺めた。その怪訝そうな顔をなんと理解してか、母親は少し擦れた声で笑って言った。

「退院したらもっといいものを買ってあげるから、その引換券つてことでもいいわよ」

明音は慌てて母親の誤解を正そうとして　そしてやめた。不吉な予感が明音の背中を通り過ぎていって、戦慄させた。もしも今明音がこの小さなカラフルな菓子に満足してしまったら、母親はこの明音の幸せを形見に逝ってしまうのではないか。もし、退院したら……卑小で我儘な約束が母親の命を永らえさせるといふのなら。

明音の願いもむなしく、母はそれから二か月後にこの世を去った。明音は最後のクリスマスプレゼントのことをすっかり忘れていたが、ある日コートのポケットに大事にしまってあったのを発見して、何も考えないうちから袋を開けてむさぼりはじめた。機嫌の悪い時に飴をかみ砕くのが明音の癖であったが、そのキャンディーははじめから、綺麗な曲線を描いているところから食い干切られた。ぼろぼろと涙がこぼれてきたのは、もしかするとその時が初めだったかもしれない。

今年もクリスマスがやってきて、三宿学園の庭に初めてもみの木が置かれ、それが生徒会役員たちの手によって綺麗に飾られるのを手伝いながら、明音は舌先で転がした飴の破片の感触や、あのペパーミントの味をひそかに思い出していた。たださえも母への思いの絶えない日であった。今朝一番のバスで待ちへ下り、母の

墓前でレギュラー昇格の報告をした。明音は遂に次の試合に出られるのだ。

「湧水」

昔あんなに欲しかったジンジャークッキーを枝に結び付けていると、大河内孝則の静かな声があった。かしましいサツカー部を優しく取りまとめていたその声は、今や白熱しがちな生徒会の会議すらも淡々と仕切っていた。彼は生徒会議長に選ばれたのである。

「お前にお客さんだ」

「お客さん？」

明音は振り返り、この一年で表情がぐつと柔らかくなったと評判のキャプテンの顔を見上げ、首を傾げた。大河内は平静を装いながらも、その口元が悪戯っぽくゆるむのをあまり隠しきれていなかった。「まあ、とりあえず生徒会室に行ってみる」

明音は純粹に客を喜び歓迎する気持ちから生徒会室へと駆けていった。特に素敵な予感がした訳ではなかった。母の死が明音の背後から影を重ねていったときのような、明確な予感ではなかった。しかし、階段を登り切り、生徒会室の扉を恐る恐る開けた時、戸を開ける音に気付いた様子もなく窓の棧に寄りかかり、中庭を見下ろす人の後ろ姿を明音が見間違えるはずがない。明音は驚きと喜びとが胸の中で同時に爆発した音を聞いた。

「慎様!!!!!!」

慎は銃弾のように飛んできた明音をかわした。窓ガラスにへばりつき、そして落ちていく明音の無残な姿も含めて、こういう事態になるだろうことはとうに予想していた。伊達に明音のストーキングを忍んできた訳ではない。慎は窓ガラスの安否だけを確かめると、足元に崩れ落ちた明音を盛大に踏みつけて元は自分のものであった椅子に腰をおろした。明音は踏まれた際、締め付けられた蛙のような声をだした。

「し、慎様……」

「別に歓迎してくれと頼んだ覚えはねえ」

「お、お久しぶりです……！」

明音のすさまじい生命力は、たちまち明音を立ち上がらせるまでに回復したが、そんなものよりもはるかに明音の回復に貢献したのは、なによりも慎に会えたうれしさだっただろう。明音はきらきらと光る大きな目いっぱい慎の姿を映しだした。慎は彼の髪と同じ紺色のコートをはおり、片方の手はポケットに入れ、もう一つの手で頬杖をついて神経質そうに指先で顎を叩いていた。顔立ちに関しては、明音が一瞬息を呑むほど父親に似てきていて、尖った美しさを増していた。父親の特徴をほとんど受け継がなかった明音にはその美が羨ましかった。明音は、十分に代わりとなる母親の可憐な容貌を持つていたが。

「し、慎様、でも、一体どうして？」

「勘違いするんじゃないかねえ。用事があつて寄つただけで、お前のはそのついでだ」

「で、でも、俺に会いに来てくれたんですよね?!」

自然ににやつく口元で尋ねると、慎は溜息をついて「バカかお前は」とつぶやいた。しかし、そのそぶりに、かつては確かにあつた突き放すような刺々しさと憐憫はない。再びこらえきれずに抱き着こうとした明音を、慎は蠅を退治する要領で叩き落とした。

「今度俺に触れようとしてみる。次こそ命はねえぞ」

「は、はい……」

床にしがみついたまま見上げると、慎の表情を縁どる疲労がはつきりと見えた。しかし、それは心地よい疲労であつた。正しく青春を送り、真面目に勉学に励む人の疲れだ。明音はこうしてはいられないことを思い出し、急いで食器棚の方に走っていくと、コーヒーを淹れる準備をはじめた。慎はそれを見て顔をしかめる。

「俺に構うな。お前のコーヒーは十分だ」

「そんなこと言わないでくださいよ!この一年でようやく人が飲めるようなものを淹れられるようになったんすから!」

「……自慢げに言うことか?」

「俺にとっては自慢です！」

さつきからがしゃがしゃと忙しない音をたてている明音の手つきに不安を覚えたものの、慎は結局したいようにさせることにした。その背中を黙って眺めているうちに（明音はコーヒーを淹れるのに精いっぱいでも口を開けるどころではなかった）、慎はこの異母弟の天逝の母親について想いを馳せ始めた。一度も会ったことのない女性。父親の心を奪い去ってしまった、唯一の女性。そして、父。

千住法正の容態が思わしくないことは、一部の人々に知れ渡っている事実であった。父親は必死にそれを隠していたが、森羅万象はクリーム色に包まれていると思ひ込んでいる彼の妻は騙せても、二人の息子の目は誤魔化せなかった。慎と薫は時々、葬列に紛れ込んだ人のように声を低めて、父の様子を報告しあつた。新しく家庭を持った薫よりは、慎の方が父親と一緒にいる機会は多かつたが、そうはいつでも忙しいハリウッド俳優の身の上である。父との会見は点のように慎の生活に穿たれるばかりで、その度毎に父親は悪くなつていく一方だつた。一度だけ、慎は父親にそれとなくほめかしてみたことはあつたが、父親は腫物に触れられるのを嫌がるように、烈火のごとく怒りだしたので、慎はそれ以上何も言えなかつた。

「あとどれくらい持つと思う？」

ある日、薫が慎に言った。二人は既に悲しい諦めを覚えていた。

父は死ぬだろう。彼に定められた寿命よりもつと早く。

「知らねえよ。マスコミに隠しきれてるうちは、あと二、三年は持つだろう。だが、精々もつて五年つてところだぜ」

「俺も同じ意見だ。父さんさえ嫌がらなければ、無理にでも病院にいれるんだが」

「やめとけ、やめとけ。絶対に聞きやあしねえよ。それに、もしかすると、親父の方でも早く死にたがってるのかもしれない」

弟の不吉な発言に、薫の目が戒めるように光った。

「慎！」

「兄貴だつてわかつてるだろうが？今の親父に生き甲斐なんてねえ。とりつかれたみてえに働いてるのだって、そうでもなきやどうやって生きればいいのか分からねえからだ……まつ、精々、早く孫の顔でも見せるこつたな。あんまり時間はねえぜ……」

父親の命の砂がひそかに零れ落ちていく中、慎は父親の人生を何度も何度も振り返った。そして、彼の人生の分岐点がああ無名の女優との悲恋にあったことを、認めない訳にはいかなかった。最も、慎は明音への寛大な心で彼女の存在を許してはいたが。しかし、あの女はこんなにも濃く強い色彩を父に与えていたのか。たった数カ月の恋、限られた逢瀬、それだけの奇跡。

もし、父親に明音の姿を見せたどうであろう？ふと浮かんだ気まぐれのような考えが、満更ばかにできなくなってきたのはつい最近のことであつた。もしこの世界の中に父親の生き甲斐になるものがあるとするば、それは涌水明音に他ならない。彼こそは、父と彼の永遠の恋人の、愛の結晶なのだから。

「できましたよ、慎様！」

慎は正確にコーヒーのにおいを探り出して、我に返った。これは驚くべきことだつた。なにせ一年前の明音といえば、コーヒーと言つて、沼の底をすくつてきたかのようなどろどろの緑色の液体を差し出したのだから。

「あ、ああ……」

そう言つて一口含む。確かにコーヒーの味だつた。一般的なコーヒーに期待する以上でも以下でもない、何の特徴もないコーヒーの。「美味しいですか？慎様？」

「まあまあだな」

「えー。それでもまあまあですか？」

先ほど自分でようやく人が飲める程度のものを淹れられるようにな

ったといつて、その口調は何か。慎は一言言つてやりたかったが、父の命が蛍の光のように明滅する様を思い出すと、ふいに明音に対して悲しいまでの愛情が込み上げてくるのを感じた。なぜこんな気持ちになるのだろうか。疲れが気持ちをはやらせるのか。慎はこの夏、せっかく入学した三宿学園大学法学部を退学し、国立名門大学の試験の準備を進めていた。

「慎様？」

明音が不思議そうに首を傾げる。この時、慎の中には紛れもなく父がいた。慎の中の父が、明音を見つめていた。慎は脳を麻痺させる感情が、愛情であることを悟った。慎の口元に何か熱いものが駆け昇ってきて、震える白い唇を割った。

「明音……！」

初めて兄に名前を呼ばれて、明音は驚愕のあまり言葉がでなかった。だが、あんなにも夢見た瞬間を、素直に喜ぶことはできなかった。不意に立ち上がった慎と、その顔を見上げる明音と、二人の間には不明瞭なものが多すぎた。慎は切羽詰まっており、追い詰められていた。明音の名前を呼んだあとで、慎は体から毒が抜けたように座り込み、数秒だけ白痴めいた表情がちらついた。明音はそれに耐えられなかった。

「慎様？慎様？大丈夫ですか？！」

ほとんど叫ぶように明音は聞いていた。慎はその声をうるさいとも言わず、コーヒーを急いで口に運んで頷いた。もう元の慎に戻っていた。

「悪い。どうも疲れてるみてえだ。今日はもう帰る」

「で、でも、慎様、あの……！」

引き留めたい。正直に体調不良を訴える慎を引き留めるのは、道理に反していると知つていても。聞きたいことがある。なぜ、慎は、兄は、唐突に自分の名前を呼んだのか。明音の名前を呼んだ時、慎

の瞳にいた人は一体誰であったのか。しかし、明音はその正体を知るのが、同時に恐ろしかった。

コーヒをいっきに飲み干して生徒会室の出口まで進んでいった慎は、ふと、思い出したように立ち止まった。明音の胸に一瞬期待が膨れ上がった。しかし、慎はただポケットに入っていたものを投げつけるためにそうしただけだった。

「あっ、あの、慎様、これ……！」

「レギュラー昇格祝いだ。ありがたく思え……そんなもので悪かったな」

「……！」

どうして人は皆、同じものを明音に寄越すのか。ペパーミント味の赤白のストライプ。儂い命の支えにさえもならない杖型キャンデー。また明音の歯に噛み砕かれて、溶けていく。それだけの……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9658f/>

Crystal Brush

2011年12月25日00時48分発行